

常磐自動車道遺跡調査報告 8

馬場 B 遺跡
大久保 A 遺跡
大久保 F 遺跡

1996年12月

福島県教育委員会
法人 福島県文化センター
日本道路公団

常磐自動車道遺跡調査報告 8

ば ば
馬場 B 遺跡

おお く ぼ
大久保 A 遺跡

おお く ぼ
大久保 F 遺跡

序 文

福島県では、「新世紀ふくしま」の新しい交通体系の確立をめざし、高速交通網の整備を進めておりますが、それに伴う開発による発掘調査も増加してまいりました。福島空港関係や、磐越自動車道関係でも多くの遺跡の開発調査が実施され、貴重な埋蔵文化財が記録として保存されております。

常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間まで開通し、現在は、いわき中央～いわき四倉間の建設工事が行われております。

この常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間にも、先人が残した数多くの文化遺産が埋蔵されており、いわき市教育委員会が平成元年度に分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め29遺跡を確認しました。

平成5年度、福島県教育委員会はこれらの埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果を基に、日本道路公団東北支社いわき工事事務所と遺跡の保存協議を重ねましたが、現状保存が困難な馬場B遺跡、大久保A遺跡、大久保F遺跡の3遺跡については、平成7年度に発掘調査を委託いたしました。

本報告書は、これらの埋蔵文化財の発掘調査についての報告書であります。今後この報告書が地域の歴史を解明するための基礎資料として利用されると共に、生涯学習の研究資料として広く県民の皆様に活用していただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで、ご協力いただいた日本道路公団、(財)福島県文化センターをはじめとする関係機関並びに関係者各位に対し感謝の意を表すものであります。

平成8年12月

福島県教育委員会

教育長 渡 邊 貞 雄

あ い さ つ

財団法人福島県文化センターでは、福島県教育委員会からの委託により、埋蔵文化財の調査業務を行っております。そのひとつである常磐自動車道いわき中央～いわき四倉間については、平成5年度から本格的に行い、平成7年度までに、16の遺跡の試掘調査と10の遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成7年度に発掘調査した、いわき市四倉町に所在する馬場B遺跡、大久保A遺跡及び大久保F遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査遺跡中、特に大久保F遺跡では、平安時代の須恵器窯跡・土師器窯跡などの生産遺構や、これらの生産にたずさわった人々の工房を含む集落跡が発見され、大変貴重な考古学的成果をあげております。これらは、地域の歴史研究や郷土理解のために必要不可欠な資料と考えられます。今後、この報告書が有効に活用されるよう心から願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご指導、ご協力をいただいた関係諸機関ならびに関係各位に、厚く御礼を申し上げます。

平成8年12月

財団法人 福島県文化センター

館長 新妻 威男

緒 言

1. 本書は平成7年度常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉間）関連遺跡調査の発掘調査報告であり、下記の3遺跡を収録している。

馬場B遺跡	いわき市四倉町駒込字馬場
大久保A遺跡	いわき市四倉町駒込字大久保・大明神・日ノ目
大久保F遺跡	いわき市四倉町駒込字大久保

2. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の協力を得て行ったものである。
3. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。
4. 財団法人福島県文化センターでは、事業第二部遺跡調査課の下記の職員を配して、調査にあたった。



文化財主査	大越道正	文化財主事	佐々木慎一
文化財主査	岡田光生	文化財主事	笹山恵子
文化財主査	石本 弘	文化財主事	菅原祥夫
文化財主査	橋本幸夫	文化財主事	福田秀生
文化財副主査	水谷勝雄		

5. 本書の執筆は、岡田・石本・橋本・水谷・佐々木・笹山・菅原・福田が行い、文末に文責を明記した。
6. 大久保A・大久保F遺跡出土須恵器・土師器・粘土については、奈良教育大学三辻利一氏に分析を依頼し、その結果と考察を付編1に掲載した。
7. 大久保A・大久保F遺跡出土の木炭については、パリノ・サーヴェイ株式会社に樹種同定を依頼し、その結果と考察を付編2に掲載した。
8. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図・5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）平8東複第20号
9. 本文中の氏名については、敬称を略させていただいた。
10. 引用・参考文献は、各編末に著者の敬称を略して掲載した。
11. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
12. 発掘調査および報告書作成にあたって、下記の方々・機関から指導・助言・協力を得た（順不同・敬称略）。

馬目順一・柳沼寛治・中山雅弘・倉田義広・半澤幹雄・青沼道文・富田和夫・高橋照彦
いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団・千葉市教育委員会・財団法人千葉県文化財センター・財団法人千葉市文化財調査協会

用 例

1. 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位 遺構図・地形図の方位は真北を指す。
- (2) ケバ 原則として遺構内の傾斜面はケバで表現した。
- (3) 焼土 焼土の範囲は網点で表示したが、特に註記されていない場合、は強い焼け面を、は弱い焼け面を表している。
- (4) 柱痕 建物跡などの柱穴の網点は柱痕跡を表している。
- (5) 土層 遺跡内に堆積していた土層の番号は大文字のLとローマ数字を組み合わせ、遺構内堆積土の番号は小文字のlと算用数字を組み合わせで表記した。

(例) 遺跡内堆積土—L I・II… 遺構内堆積土—l 1・2…

なお、土色の註記は「新版標準土色帖」を使用し、本文中の記号は本書にもとづく。

- (6) 標高 海拔標高を示す。
- (7) 縮尺 遺構図は原則として、竪穴住居跡が1/50、建物跡が1/60、窯跡が1/40、土坑1/40とした。その他の遺構は大きさに則して縮小した。

2. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである

- (1) 土器断面 土師器・陶磁器・縄文土器・弥生土器は断面を白ヌキで表記し、須恵器は断面を隙間なく黒く表示した。粘土紐の積み上げ痕跡は器面では実線で、断面では一点鎖線で表記した。
- (2) 黒色処理 土師器における黒色処理は、その処理面を網点で表記した。
- (3) 施釉 陶磁器は施釉範囲を破線で表示した。また、2種類の釉薬の境は一点鎖線で表した。
- (4) 縮尺 原則として、土師器・須恵器・陶器・磁器の図は1/3・2/5、縄文土器・弥生土器の図は2/5、石製品・土製品は2/3・3/5・1/3、金属製品は2/3・1/3としたが、遺物の大きさに応じて変えた場合もある。

3. 本書における写真図版の用例は、挿図番号と対象できるように、遺物写真図版中に「図」を略して示した。

(例) 図1—1—1—1

4. 本書で使用した略号は、次のとおりである。

いわき市… IWK 馬場B… BB・B 大久保A… OKB・A 大久保F… OKB・F
遺構外堆積土… L 遺構内堆積土… l 竪穴住居跡… SI ピット… P
掘立柱建物跡… SB 窯跡… SR 土坑… SK 溝跡… SD 炭窯跡… SC

目 次

序 章

第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の環境	3

第1編 馬場B遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	11
第1節 位置と地形	11
第2節 調査経過	12
第3節 調査方法	14
第2章 遺構と遺物	16
第1節 基本土層	16
第2節 木炭窯跡	16
1号木 炭窯跡(16)	
第3節 土 坑	18
1号土坑(18)	
第4節 溝 跡	20
1号溝跡(20)	
第5節 遺構外出土遺物	20
第3章 ま と め	21

第2編 大久保A遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	25
第1節 位置と地形	25
第2節 調査経過	26
第3節 調査方法	27
第2章 遺構と遺物	28
第1節 基本土層	28
第2節 竪穴住居跡	30

	1号住居跡 (30)	2号住居跡 (33)	3号住居跡 (34)	
	4号住居跡 (35)	5号住居跡 (37)		
第3節	掘立柱建物跡			39
	1号建物跡 (39)			
第4節	土 坑			40
	1号土坑 (40)	2号土坑 (41)	3号土坑 (41)	
	4号土坑 (41)	5号土坑 (41)	6号土坑 (43)	
	7号土坑 (43)	8号土坑 (43)	9号土坑 (45)	
	10号土坑 (45)	11号土坑 (45)	12号土坑 (45)	
	14号土坑 (47)	16号土坑 (47)	17号土坑 (47)	
	18号土坑 (47)	19号土坑 (47)	20号土坑 (49)	
	21号土坑 (49)	22号土坑 (49)	23号土坑 (51)	
	24号土坑 (51)	25号土坑 (51)	26号土坑 (52)	
	27号土坑 (52)	28号土坑 (54)	29号土坑 (54)	
	30号土坑 (54)	31号土坑 (54)	32号土坑 (54)	
	33号土坑 (57)			
第5節	溝 跡			58
	1号溝跡 (58)	2号溝跡 (58)	3号溝跡 (58)	
	4号溝跡 (58)	5号溝跡 (58)	6号溝跡 (61)	
	7号溝跡 (61)	8号溝跡 (61)		
第6節	ピット群			62
	ピット群A (62)	ピット群B (64)	ピット群C (67)	
第7節	遺構外出土遺物			67
第8節	水 田 跡			72
第3章	ま と め			73

第3編 大久保F遺跡

第1章	遺跡の環境と調査経過			77
第1節	位置と地形			77
第2節	調査経過			77
第3節	調査方法			80
第2章	遺構と遺物			81
第1節	基本土層			81

第2節	竪穴住居跡	85
	1号住居跡 (85) 2号住居跡 (88) 3号A住居跡 (90)	
	3号B住居跡 (93) 4号A住居跡 (96) 4号B住居跡 (98)	
	5号A住居跡 (99) 5号B住居跡 (101) 6号住居跡 (102)	
	7号住居跡 (106) 8号住居跡 (110) 9号住居跡 (115)	
	10号住居跡 (119)	
第3節	掘立柱建物跡	119
	1号建物跡 (119)	
第4節	土師器窯跡	121
第5節	須恵器窯跡	138
	4号須恵器窯跡 (138)	
第6節	木炭窯跡	143
	8号木炭窯跡 (143) 9号木炭窯跡 (145) 10号木炭窯跡 (145)	
	11号木炭窯跡 (145)	
第7節	土 坑	147
第8節	溝 跡	152
	1号溝跡 (152) 2号溝跡 (154)	
第9節	遺構外出土遺物	154
	遺物集中区 (154) その他 (156)	
第3章	考 察	170
第1節	遺 物	170
	須恵器 (170) 土師器 (172)	
第2節	遺 構	185
第3節	遺跡の構造と変遷	189
第4節	古代陸奥における窯焼成の土師器生産	192
付編1	大久保A・F遺跡出土土器の蛍光X線分析	
	奈良教育大学 三辻 利一	255
付編2	大久保F遺跡における自然科学分析調査報告	
	パリノ・サーヴェイ株式会社	261

挿図・表目次

序 章

[挿 図]

図1 常磐自動車道(いわき中央～いわき四倉)位置図	1
図2 周辺の遺跡	4

[表]

表1 平成7年度いわき市四倉町発掘遺跡一覧	2
表2 周辺の遺跡一覧	5

第1編 馬場B遺跡

[挿 図]

図1 遺跡周辺の地形	11	図4 1号溝跡	19
図2 遺構配置図	15	図5 遺構外出土銭貨	20
図3 1号木炭窯跡・1号土坑	17		

第2編 大久保A遺跡

[挿 図]

図1 遺跡周辺の地形	25	図16 25～27号土坑	53
図2 基本土層柱状図	29	図17 28～33号土坑	55
図3 1号住居跡・出土遺物(1)	31	図18 土坑出土遺物(1)	56
図4 1号住居跡出土遺物(2)	32	図19 土坑出土遺物(2)	57
図5 2号住居跡	33	図20 1～4号溝跡	59
図6 3号住居跡・出土遺物	34	図21 5・6号溝跡	60
図7 4号住居跡	36	図22 7・8号溝跡	61
図8 4号住居跡出土遺物	37	図23 ピット群A	62
図9 5号住居跡・出土遺物	38	図24 ピット群B	63
図10 1号建物跡	40	図25 ピット群C	64
図11 1～5号土坑	42	図26 ピット出土遺物	67
図12 6～8号土坑	44	図27 遺構外出土遺物(1)	68
図13 9～12・14号土坑	46	図28 遺構外出土遺物(2)	69
図14 16～19・21～23号土坑	48	図29 遺構外出土遺物(3)	71
図15 21・24号土坑	50		

[表]

表1 ピット(1)	65	表2 ピット(2)	66
-----------	----	-----------	----

第3編 大久保F遺跡

[挿 図]

図1 遺跡周辺の地形	78	図5 1号住居跡	86
図2 遺構配置図(1)	82	図6 1号住居跡出土遺物	87
図3 遺構配置図(2)	83	図7 2号住居跡木炭・炭化材出土状況	88
図4 基本土層図	84	図8 2号住居跡・出土遺物	89

図9	3号A住居跡	91	図42	27～29号土師器窯跡	132
図10	3号A住居跡出土遺物	92	図43	30・32号土師器窯跡	133
図11	3号B住居跡	94	図44	30号土師器窯跡出土遺物(1)	134
図12	3号B住居跡出土遺物(1)	95	図45	30号土師器窯跡出土遺物(2)	135
図13	3号B住居跡出土遺物(2)	96	図46	33～37号土師器窯跡	136
図14	4号A住居跡	97	図47	24・32・33・37号土師器窯跡出土遺物	137
図15	4号B住居跡・出土遺物	99	図48	4号須恵器窯跡	139
図16	5号A住居跡	100	図49	4号須恵器窯跡遺物出土状況, 6号土坑	140
図17	5号A住居跡出土遺物	101	図50	4号須恵器窯跡・6号土坑出土遺物	41
図18	5号B住居跡・出土遺物	102	図51	5・31号須恵器窯跡	142
図19	6号住居跡・出土遺物(1)	104	図52	8～10号木炭窯跡	144
図20	6号住居跡出土遺物(2)	105	図53	11号木炭窯跡	146
図21	6号住居跡カマド・ピット	106	図54	1～5・7号土坑	149
図22	7号住居跡(1)	107	図55	8～12号土坑	150
図23	7号住居跡(2)	108	図56	13・14号土坑	151
図24	7号住居跡出土遺物	110	図57	3・5・8号土坑出土遺物	152
図25	8号住居跡	111	図58	1・2号溝跡	153
図26	8号住居跡出土遺物(1)	113	図59	遺物集中区	155
図27	8号住居跡出土遺物(2)	114	図60	遺物集中区出土遺物	156
図28	9・10号住居跡	116	図61	遺構外出土遺物(1)	157
図29	9号住居跡ピット・出土遺物(1)	117	図62	遺構外出土遺物(2)	158
図30	9号住居跡出土遺物(2)	118	図63	遺構外出土遺物(3)	159
図31	1号建物跡	120	図64	遺構外出土遺物(4)	160
図32	1号建物跡出土遺物	121	図65	遺構外出土遺物(5)	161
図33	1・2号土師器窯跡	123	図66	遺構外出土遺物(6)	162
図34	3号土師器窯跡, 1～3号土師器窯跡 出土遺物	124	図67	都城と大久保F遺跡における不良品の実態	175
図35	6・7・12・13号土師器窯跡	125	図68	器種の分類	176
図36	14～16・18・19号土師器窯跡	126	図69	I・II期における無台杯の法量比較(1)	181
図37	17号土師器窯跡(1)	127	図70	I・II期における無台杯の法量比較(2)	182
図38	17号土師器窯跡(2)	128	図71	I期における無台杯の法量比較	183
図39	20～23号土師器窯跡	129	図72	II期における無台杯の法量比較	184
図40	6・12～17・20・21・23号土師器窯跡 出土遺物	130	図73	無台杯変遷模式図	185
図41	24～26号土師器窯跡	131	図74	I・II期における工房・倉庫・窯の関係	190
[表]			図75	工房・倉庫・窯の移動	191
表1	土師器窯跡観察一覧	122	図76	古代陸奥の土師器生産遺跡	193
表2	土坑観察一覧	148	表6	土器・土製品観察一覧(4)	166
表3	土器・土製品観察一覧(1)	163	表7	土器・土製品観察一覧(5)	167
表4	土器・土製品観察一覧(2)	164	表8	土器・土製品観察一覧(6)	168
表5	土器・土製品観察一覧(3)	165	表9	鉄器・石器観察一覧	168
			表10	遺構と遺物の共伴関係	178

付図 大久保A遺跡遺構配置図

写真図版目次

第1編 馬場B遺跡

1 遺跡全景	199	3 1号木炭窯跡	200
2 遺跡全景	199	4 1号溝跡	200

第2編 大久保A遺跡

1 遺跡遠景(1)	203	15 11・12・14・17号土坑全景	210
2 遺跡遠景(2)	203	16 18~20・22号土坑全景	210
3 上段目全景	204	17 23~25号土坑全景	211
4 中段目全景	204	18 26・27・31・33号土坑全景	211
5 中段目全景	205	19 溝跡	212
6 水田部全景	205	20 1号住居跡出土遺物	213
7 1号住居跡掘	206	21 1・3・4号住居跡出土遺物	214
8 2号住居跡掘	206	22 5号住居跡出土遺物	215
9 3号住居跡	207	23 7・22・25号土坑出土遺物	215
10 4号住居跡	207	24 25号土坑出土遺物	216
11 5号住居跡	208	25 ピット・遺構外出土遺物(1)	217
12 1号建物跡	208	26 遺構外出土遺物(2)	218
13 1~4号土坑全景	209	27 遺構外出土遺物(3)	219
14 5・6・8・9号土坑全景	209	28 遺構外出土遺物(4)	220

第3編 大久保F遺跡

1 調査区全景	223	16 6号住居跡細部	230
2 調査区全景	223	17 7号住居跡	231
3 1号住居跡	224	18 7号住居跡細部	231
4 1号住居跡細部	224	19 8号住居跡	232
5 2号住居跡	225	20 8号住居跡細部	232
6 2号住居跡細部	225	21 9・10号住居跡	233
7 3号A住居跡	226	22 9号住居跡細部	233
8 4号A住居跡	226	23 1号建物跡	234
9 3号B住居跡	227	24 1号建物跡柱穴	234
10 3号B住居跡	227	25 1~3号窯跡	235
11 4号B住居跡	228	26 5~7・12号窯跡	235
12 4号B住居跡細部	228	27 4号窯跡	236
13 5号A住居跡	229	28 4号窯跡細部	236
14 5号B住居跡	229	29 13~16号窯跡	237
15 6号住居跡	230	30 18~21号窯跡	237

31	17号窯跡	238	48	14号土坑	246
32	17号窯跡細部	238	49	1号溝跡	247
33	22~25号窯跡	239	50	2号溝跡・遺物集中区集石	247
34	26~28号窯跡	239	51	1号, 3号A・B住居跡出土土師器	248
35	30号窯跡	240	52	3号B住居跡出土土師器	248
36	29・31~33号窯跡	240	53	3号A・4号B・6号住居跡出土 土師器・須恵器	249
37	34~37号窯跡	241	54	8・9号住居跡・遺構集中区出土土師器	249
38	土師器窯跡集中部	241	55	17・23・30号窯跡出土土師器	250
39	8号木炭窯跡	242	56	30号窯跡出土土師器・4号窯跡炉壁	250
40	9・10号木炭窯跡	242	57	遺物集中区・遺構外出土土師器	251
41	11号木炭窯跡	243	58	遺構外施釉陶器・須恵器土師器	251
42	11号木炭窯跡細部	243	59	出土遺物細部	252
43	1・2号土坑	244	60	出土遺物細部	252
44	3・4号土坑	244	61	土製品	253
45	5~7号土坑	245	62	鉄製品	253
46	8~10・12号土坑	245			
47	11・13号土坑	246			

序 章

第1節 調査に至るまでの経過

昭和44年埼玉県三郷～茨城県千代田石岡間の基本計画に始まった常磐自動車道は、その路線を徐々に延ばし、昭和63年3月には基本計画茨城県千代田石岡～福島県いわき四倉間のうち、いわき中央インターチェンジ（以下、ICと言う）までが開通している。未開通であったいわき中央IC～いわき四倉ICまでの区間については、遅れて平成元年に整備基本計画路線となり、現在平成9年の供用開始にむけて建設計画が進められている。なお、いわき四倉以北延伸分については、宮城県亘理までの基本計画がすでに決定しており、平成5年には福島県いわき四倉～福島県富岡間の施工命令が出されている。

財団法人福島県文化センターが、常磐自動車道に関わる埋蔵文化財の調査に携わったのは、平成5年2月に持たれた福島県企画調整部総合交通課・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・いわき市教育委員会文化課・いわき市都市整備課・財団法人いわき市教育文化事業団・財団法人福島県文化センターの七者協議からである。協議ではいわき中央IC～いわき四倉間の自動車道路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて話し合われ、その結果好間町および平赤井・平窪に所在する13遺跡についてはいわき市教育委員会文化課ならびに財団法人いわき市教育文化事業団が、四倉町に所在する16遺跡については福島県教育委員会ならびに財団法人福島県文化センターが調査を担当することを確認した。

上記経緯の中で福島県教育委員会では平成5年度から新規事業として常磐自動車道関連埋蔵文化財調査に着手し、福島県文化センターにその調査を委託した。

平成5年度の常磐自動車道関連埋蔵文化財調査は、手始めとして試掘調査計画が策定され、福島県文化センターでは地権者からの承諾書が揃うのを待って10月20日から担当分である16遺跡の総面積162,600㎡を対象に調査を開始している。その結果、

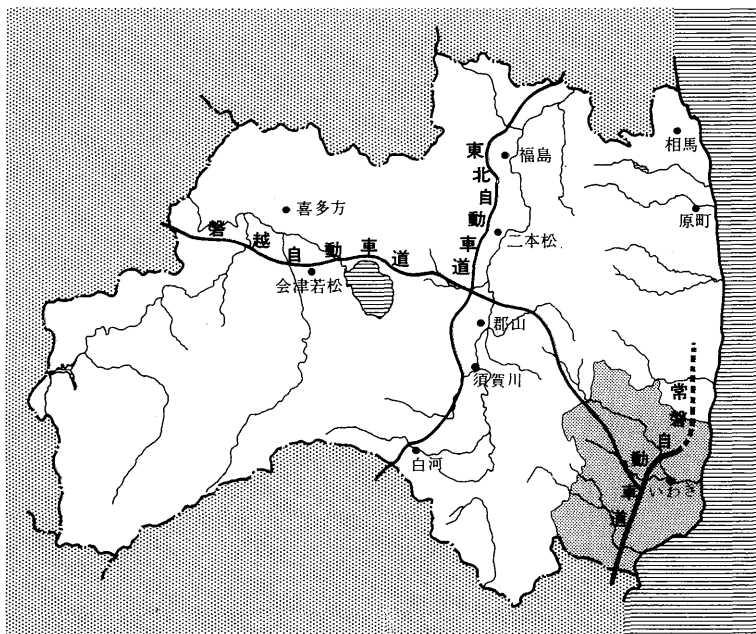


図1 常磐自動車道（いわき中央～いわき四倉）位置図

12月23日までに9遺跡69,500㎡の路線内要保存面積を確定したが、調査条件が整わず試掘が実施できなかった箇所や、調査対象範囲外まで遺跡範囲の拡張が認識できた遺跡については、後日の再調査によって保存面積を確定することとした。

平成6年度は、5遺跡（対象面積53,700㎡）の追加試掘を行い、前年度の成果と合わせて路線内遺跡要保存面積を確定したほか、久原A遺跡を初めとする5遺跡の発掘調査を実施している。6年度も承諾書取得などの条件整備作業との調整を余儀なくされ、その都度調査員・作業員の移動および配置換えで対応したが、開始時期の遅れは取り戻せず、5遺跡34,100㎡の全てを調査終了したのは歳の瀬も間近に迫った12月の下旬であった。

平成7年度は、発掘調査を中心に発掘規模が拡大したことから、調査員30名というこれまでに例のない調査体制がしかれ、4月中旬の調査開始を目指して年度始め早々から準備作業に着手している。4月11日には日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの三者協議を行い、未買収地の存在・伐採木の処理・排土置き場の確保など、調査開始までの問題点を確認した。また、4月12日にはいわき市教育委員会文化課・財団法人いわき市教育文化事業団・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの4者で調査地区が隣接する白岩堀ノ内遺跡について、福島県文化センター側から調査計画を説明するという形で協議を行い、調整を計っている。7年度調査は上記協議の翌日である4月13日より表土除去作業を開始し、全スタッフを揃えた本格的な作業始動は翌週の4月18日からであった。 (石本)

表1 平成7年度いわき市四倉町発掘遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	面積㎡	調査期間	備考
1	馬場 B	駒込字馬場	3,100	4月18日～7月7日	
2	大久保 A	駒込字大久保・大明神・日ノ目	4,000	4月18日～11月22日	
3	大久保 F	駒込字大久保	12,100	4月18日～11月30日	
4	タタラ山	玉山字勝倉・山田小湊字角田ほか	12,100	4月18日～11月30日	
5	大猿田	中島字大猿田	12,100	4月18日～11月30日	
6	白岩堀ノ内	中島字白岩堀ノ内	12,100	4月18日～11月30日	

第2節 遺跡の環境

地理的環境

いわき市が属する浜通り地方は、東西は阿武隈高地東縁部から太平洋岸まで、南北は茨城県境から、宮城県境までの細長い地域である。いわき市はこの地域の南端部に位置している。浜通り地方の地勢を概観すると、南北に連なる標高400～600mの阿武隈高地と、それに続く枝葉状に開析されながら海岸に延びる丘陵地帯（標高50～100m）、丘陵に挟まれた段丘と谷底平野、そして海岸平野から構成されている。このような地形の地質は、花崗岩を主体とする深成岩および変成岩を基盤とし、それを覆って主に新生代古第三紀・新第三紀の堆積岩層が丘陵を形成している。段丘および平野は第四紀になって谷に堆積した礫・砂・泥からなる。また、この周辺には二ツ箭断層・赤井断層・湯ノ岳断層と呼ばれる三つの大きな断層と、そのあいだに多くの小断層が走っている。これらの断層は丘陵地帯に複雑な表面地質をつくる要因となっている。

今回発掘調査を実施した馬場B遺跡など3遺跡が所在する大野地区は、いわき市のほぼ中央を占める平地区の北西に隣接している。行政上はいわき市四倉町の一部で、四倉町西部の山間地域を指し、阿武隈高地を水源とする仁井田川の中流域にあたる。この地域の地形を見ると、北に標高295mの高倉山、南に標高225mの石森山を望み、そのあいだを仁井田川とその支流が流れている。これらの川は、阿武隈高地東縁から海岸に向かって広がる丘陵地帯を開析しながら東に流れ、流域には幅の狭い谷底平野と丘陵の周縁に小規模な河岸段丘を形成している。谷底平野は仁井田川中流域の駒込・上柳生地内でよく発達し、山田小湊地内でその幅を広げながら、下流域に広がる海岸平野へ続いている。河岸段丘は駒込地内の仁井田川右岸や薬王寺地内の高倉川両岸などで見ることができる。

大野地区の表面地質は、北西から南東方向に二ツ箭断層が走り、その北と南で違いを見せている。断層の北側に位置する玉山・中島・白岩地内の地質は基盤層（花崗岩質岩石、八茎変成岩類など）の上に、固結堆積物からなる高倉層群、双葉層群、白水層群と、半固結堆積物からなる仙台層群が、西から東へ整然と堆積している。これらの地層は、古生代二畳紀から新生代新第三紀にかけて形成されたものである。一方、断層の南側に位置する仁井田川周辺の地質は、固結堆積物からなる白水層群、湯長谷層群、白土層群と、半固結堆積物からなる仙台層群が複雑に入り組みながら堆積している。これらの地層は、断層の北側より新しい新生代古第三紀から新第三紀にかけて形成された地層である。なお、特異な地層として、玉山から八茎地内にかけての丘陵地帯に、固結度の著しく低い袖玉山層（新生代第四紀）が発達している。仁井田川とその支流域では、これらの層をさらに覆って未固結堆積物からなる洪積層と沖積層（いずれも新生代第四紀）が堆積している。

いわき市の気候は、暖流が流れる太平洋の影響を受け、小名浜の年平均気温12.9度、1月の平均気温3.1度、8月の平均気温23.9度、年格差20.8度で、冬暖かく年格差の小さい海洋性の温暖な気候

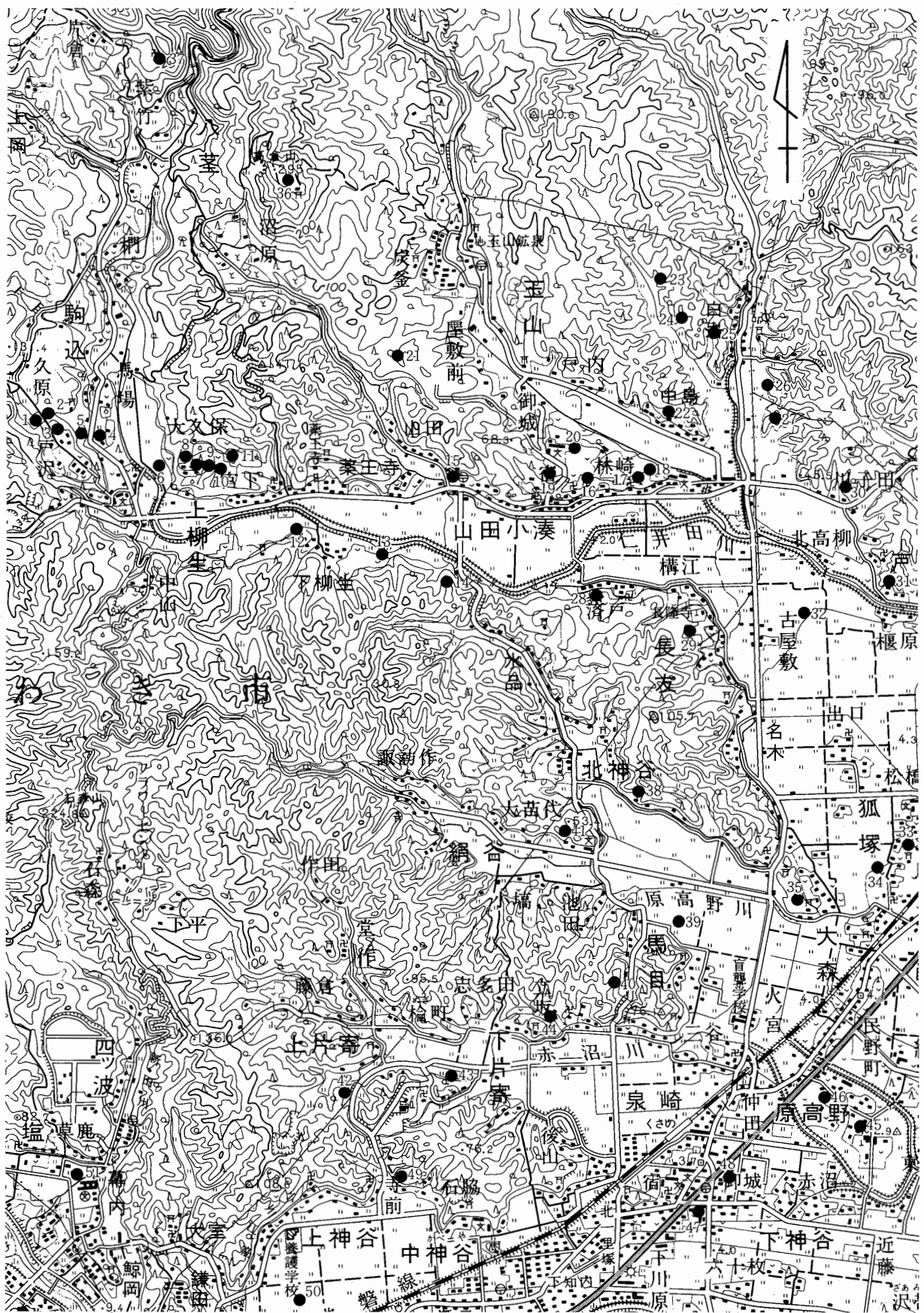


図2 周辺の遺跡

(国土地理院 1/50,000 地形図の承認番号; 平8東横 第20号)

0 1,000m (1/40,000)

表2 周辺の遺跡一覧

No	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 の 概 要
1	久原A遺跡	四倉町駒込字久原	近世の散布地 平成6年度発掘調査
2	久原B遺跡	四倉町駒込字久原	近世の散布地 平成6年度発掘調査
3	駒込遺跡	四倉町駒込字久原	縄文～平安時代の散布地 平成6年度発掘調査
4	馬場A遺跡	四倉町駒込字馬場	古墳～平安時代の散布地 平成6年度発掘調査
5	馬場B遺跡	四倉町駒込字馬場	平安～近世の散布地 平成7年度発掘調査
6	大久保A遺跡	四倉町駒込字大久保・大明神・日ノ目	古墳～近世の集落跡 平成7年度発掘調査
7	大久保C遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～平安・近世の散布地 平成5年度試掘調査
8	大久保E遺跡	四倉町駒込字大久保	古墳～平安時代の散布地 平成5年度試掘調査
9	大久保F遺跡	四倉町駒込字大久保	奈良・平安時代の集落跡 平成7年度発掘調査
10	大久保G遺跡	四倉町駒込字大久保	縄文～平安・近世の散布地 平成5年度試掘調査
11	粟刈沢遺跡	四倉町薬王寺字粟刈沢	古墳～平安時代の散布地 平成5年度試掘調査
12	日陰遺跡	四倉町下柳生字六反田	古墳時代の祭祀跡
13	和具遺跡	四倉町下柳生字和具	縄文時代の散布地
14	比丘尼館跡	四倉町山田小湊字馬上	中世の城館跡
15	山田小湊遺跡	四倉町山田小湊字小湊	古墳～平安時代の散布地
16	玉山遺跡	四倉町玉山字牧ノ下・林崎・塚後	弥生～古墳時代の散布地
17	玉山古墳群	四倉町玉山字林崎	古墳 玉山1号墳(全長118mの前方後円墳)を含む
18	林崎遺跡	四倉町玉山字林崎	弥生～古墳時代の散布地
19	玉山館跡	四倉町玉山字御城	中世の城館跡
20	御城古墳群	四倉町玉山字御城	古墳
21	タタラ山遺跡	四倉町玉山字北タタラ山・小高倉・勝倉他	縄文～近世の集落跡・須恵窯跡 平成6・7年度発掘調査
22	中島館跡	四倉町中島字中島	中世の城館跡
23	大猿田遺跡	四倉町中島字大猿田	縄文～平安時代の集落跡 平成7年度発掘調査
24	白岩堀ノ内遺跡	四倉町中島字三反田・大久保	縄文～近代の集落跡 平成7年度発掘調査
25	白岩堀ノ内館跡	四倉町白岩字堀ノ内・北ノ作他	中世の城館跡
26	永田横穴墓群	四倉町白岩字永田	古墳～平安時代の横穴墓・散布地
27	白岩遺跡	四倉町白岩字上川子田・永田	古墳～平安時代の集落跡
28	済戸貝塚	四倉町長友字済戸・熊ノ作	縄文時代の貝塚
29	長友館跡	四倉町長友字大町・大宮作	中世の城館跡
30	川子田横穴墓群	四倉町戸田字川子田	古墳時代の横穴墓
31	戸田館跡	四倉町戸田字仲作	中世の城館跡
32	戸田糸里遺跡	四倉町戸田地内	弥生～近世の水田遺構他 昭和63年・平成元年度発掘調査
33	狐塚館跡	四倉町狐塚字古川	中世の城館跡
34	西原遺跡	四倉町狐塚字西原	奈良・平安時代の遺物含有地 昭和58年度調査
35	大森館跡	四倉町大森字館	中世の城館跡
36	汐見館跡	四倉町八茎字高倉	中世の城館跡
37	八茎寺供養碑	四倉町八茎字片倉	中世の石造物 正応4年(1291)銘
38	袖作遺跡	平北神谷字袖作	弥生・平安時代の散布地
39	町田古墳	平馬目字町田	古墳
40	作ノ内横穴群	平馬目字作ノ内	古墳時代の横穴墓
41	大苗代遺跡	平絹谷字大苗代	弥生～中世の散布地 絹谷館跡を含む
42	山田作横穴墓群	平上片寄字山田作	古墳時代の横穴墓 昭和51年度発掘調査
43	森戸貝塚	平上片寄字森戸	縄文時代の貝塚
44	片寄貝塚	平下片寄字立坂・志多田・北作	縄文時代の貝塚
45	中里遺跡	平原高野字中里	古墳～平安時代の散布地
46	伊勢前貝塚	平原高野字伊勢前	古墳時代の貝塚
47	内宿遺跡	平下神谷字内宿	古墳時代の集落跡 昭和55年度発掘調査
48	出口遺跡	平下神谷字出口	奈良・平安時代の散布地
49	館遺跡	平上神谷字館	中世の城館跡
50	上神谷糸里制遺構	平上神谷, 平塩地内	奈良・平安時代の糸里制遺構
51	中塩祭祀遺跡	平中塩字一水口	古墳時代の散布地・祭祀跡 昭和37年度発掘調査

を示す。夏は南風が卓越して降雨をもたらすが、冬は北西風の影響で乾燥した晴天の日が続く。年平均降水量は1,356.8mmで、降水量は比較的少ない。

歴史的環境

前項ではいわき市北部地域の地質や地理的環境について概述したが、ここでは考古資料を中心とした遺跡を紹介し、調査地域を取り巻く歴史的な環境を概観する。

当地域では旧石器時代の遺跡の調査例はほとんどないが、タタラ山遺跡（図2-21）の昨年度行われた発掘調査でナイフ型石器が出土しているため、今後の発見例が待たれるところである。

縄文時代の資料としては、タタラ山遺跡で早期の田戸下層式期や茅山下層式期の土器や石器などが出土し、後者は遺構も発見されている。中期になると、済戸・森戸・片寄（図2-28・43・44）などの貝塚が形成されるようになる。済戸貝塚では大木9～綱取Ⅱ式期の土器や土器片錘が発見されている。片寄貝塚では大木8a～綱取Ⅱ式土器が出土している。これらの貝塚が現在の沖積地を望む丘陵斜面部に立地していることは、前期に最大となった海進が中期までには各貝塚を結ぶ線まで海岸線を後退させていたことを示している。縄文時代の遺跡としては、これらのほかに日陰遺跡（図2-12）や和具遺跡（図2-13）で遺物が採集されている。

弥生時代には当地域でも稲作に関する遺跡が発見されている。戸田条里遺跡（図2-32）では中期前半の龍門寺式期に比定される水田跡が検出され、水田耕作土壌から炭化米も出土した。片寄貝塚では弥生土器・石包丁・管玉が、袖作遺跡（図2-38）では靱痕のある土器片や石包丁・柱状石斧が発見されている。丘陵部の遺跡では玉山遺跡（図2-16）で中期後半の天神原式の土器棺が発見され、同じく丘陵地に立地しているタタラ山や白岩堀ノ内遺跡（図2-24）でも同期の土器や石器あるいは遺構が発見されている。このほかに、林崎・大苗代遺跡（図2-18・41）にも弥生時代の遺物が散布している。

古墳時代でもっとも注目される遺跡は、玉山古墳群（図2-17）の主墳である玉山1号墳である。玉山1号墳は、主軸長約118mで県内第2位の規模を誇る葺石を持つ前方後円墳である。形態や採集遺物などから5世紀（古墳時代中期）代の築造と推定されている。また、玉山古墳群では埴輪も採集されている。後期の古墳では、御城古墳群（図2-20）が箱式石棺を伴う円墳で構成される群集墳である。また、丘陵斜面には永田・白岩・川子田（図2-26・27・30）、作ノ内・山田作（図2-40・42）などの各横穴墓群が多く造営されている。このうち山田作横穴墓群ではガラス製・水晶製の玉類や刀子・鏃などの鉄器類が発見されている。これら古墳築造者の経済的基盤は、弥生時代から営まれた稲作にあり、戸田条里遺跡が立地する海岸平野で盛んに営まれたと想定され、それを支えた人々の集落遺跡も数多く発見されている。前期では中里・内宿遺跡（図2-45・47）竪穴住居跡が検出され、後期では戸田条里やタタラ山・白岩堀ノ内遺跡で住居跡が発見されている。また、当地域では伊勢前貝塚（図2-46）など古墳時代の貝塚が発見されている。中里遺跡でも同時期の貝塚が確認されており、当該時期の自然環境を考えるうえで好資料となっている。さらに、中塩遺跡（図2-51）や日陰遺跡では石製模造品や手捏土器が多量に出土している。これらは祭祀遺

物と考えられているもので、中塩遺跡は祭祀遺跡と考えられている。これらのほかに、山田小湊遺跡（図2—15）、玉山・林崎遺跡にも古墳時代の遺物が散布する。

奈良時代や平安時代などの律令時代の遺跡は、当該期の土坑や溝跡が発見された西原遺跡（図2—34）、堅穴住居跡や掘立柱建物跡、須恵器窯跡などが検出されたタタラ山遺跡が挙げられ、ほかには昨年度から今年度にかけて調査された大久保A・大久保F・大猿田（図2—6・9・23）の各遺跡や白岩堀ノ内遺跡・白岩遺跡（図2—27）で奈良時代や平安時代の遺構・遺物が検出されている。特に白岩遺跡の鍛冶遺構、白岩堀ノ内遺跡の製鉄遺構、大猿田遺跡やタタラ山遺跡の須恵器窯跡や木炭窯跡、大久保F遺跡の土器工房跡や土師器・須恵器の窯跡など当時の生活必需品の生産遺跡が散在している。これらの生産遺跡は、戸田や上神谷（図2—51）の条里遺跡や山田小湊・長友・馬目から絹谷、片寄で認められる条里地割と相俟って、農業生産に限らず、工業製品においても当地域の古代における生産性の高さを示す証左と言える。

中世においては、当地域は文治2年（1186）、岩城郡内に設置された好嶋荘に含まれる。本家が岩清水八幡宮、領家が鎌倉幕府の関東御領で、承元2年（1208）には東二郷（東荘）と西一郷（西荘）に分割された。当地域は衣谷郷、大野郷からなる好嶋東郷に属し、千葉氏の一族である大須賀氏が絹谷に政所をおいて預所職を務めた。元久元年（1204）「八幡宮領好嶋荘田地目録注進状写」によれば、片寄・大森・戸田など村々の地頭が8～10丁の給田を所持していたことが知られる。また、これらの村々は鎌倉～室町期にかけて飯野八幡宮の造営や祭礼の負担を課せられていたが、貞和2年（1346）には、「預所中難渋族在之」として、絹谷・大森・岩城・田富・比佐・富田などの地頭が同八幡宮に対する祭礼の負担を拒否している様子が窺える。

建武元年（1334）の「八幡宮造営注文」には、「絹谷村 佐竹上総入道、同彦四郎入道兩人役所也」とあり、当地域における大須賀氏の没落と佐竹氏の進出が窺える。また、上記村落領主層のほか南北朝期に白岩氏、室町～戦国期の玉山氏、四倉氏などが知られる。文安3年（1446）、岩城隆忠は薬王寺を再興し、門前の地と八茎村を当寺に寄進し、永禄10年（1567）、岩城親隆は「白岩之内堂井之在家一字」を当寺阿弥陀堂に寄進している。

岩城氏の信仰厚い薬王寺には、国指定重要文化財の木造文殊菩薩騎獅像（鎌倉時代）・絹本著色弥勒菩薩像（鎌倉時代）厨子入金銅宝篋印舍利塔（南北朝時代）など多数の仏教美術を所蔵するほか、鎌倉～室町時代の板碑が27基確認できる。当地域最古の板碑として建長4年（1252）銘のある八茎の紫竹供養塔があり、付近には正応4年（1291）銘を持つ八茎寺供養碑（図2—37）がある。城館跡としては比丘尼館・玉山館・中島館・白岩堀ノ内館・長友館・戸田館・狐塚館・大森館・汐見館・絹谷館・座主館（図2—14・19・22・25・29・31・33・35・36・41）などが丘陵上や浜堤上にある。

近世においては当初岩城領、慶長7年（1602）鳥居氏、元和8年（1622）内藤氏の岩城平藩領、延享4年（1747）幕府領となり、中神谷代官所の支配、寛延2年（1749）井上氏の常陸笠間藩領、安永6年（1777）幕府領、翌7年安藤氏の岩城平藩領とめまぐるしく変わり、寛政2年（1790）以

降は牧野氏の笠間藩領となり，中神谷陣屋が支配したと考えられている。

明治時代になって廃藩置県後の明治4年（1871）には平県に所属，同9年（1876）福島県に吸収合併され，同22年（1889）の町村制施行により磐城郡四ツ倉町，大浦村，大野村に分かれ，同29年（1896）石城郡に属した。昭和30年（1955）前記の1町2村が合併して四倉町が成立し，昭和41年（1966）には5市と，四倉町を含む石城郡の6町村，双葉郡の2町村の合併が行われ，現在のいわき市四倉町が誕生した。

（石本）

第1編 馬場^ば B 遺跡

遺跡記号 IWK-BB・B
所在地 いわき市四倉町駒込字馬場
時代・種類 近世・木炭窯跡
調査期間 平成7年4月18日～7月7日
調査員 岡田光生・石本 弘

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

馬場B遺跡は、いわき市の北部四倉町駒込字馬場に所在する遺跡で、JR磐越東線小川郷駅から東南東へ約3.4km、JR常磐線四倉駅から西南西へ約7.3kmに位置している。四倉町の海岸線からは西へ約8.8km内陸に入っている。遺跡付近の地形は、新生代第三紀に形成された凝灰岩や礫岩を基盤層とした丘陵地形となっている。そのあいだを流れる三森山付近を水源として大平洋に注ぐ仁井田川とその支流は、流域に小規模な河岸段丘や谷底平野を造成している。源流から南流してきた仁井田川は、四倉町上柳生で檜川と合流して東に蛇行している。遺跡は合流点から北に約1km上流の段丘崖裾部に立地している。遺跡西側の丘陵は、南側を檜川に、北側を仁井田川本流に浸食され、南北が段丘崖になっており、上部が平坦な台地状になっている。基盤層の表面には粘土や砂礫、礫を多量に含む粘土などの段丘堆積物が確認できる。遺跡の北側には丘陵上から派生した埋没谷が観察でき、その影響で調査中には遺跡内の数か所から湧水した。このような自然環境のため、遺跡内

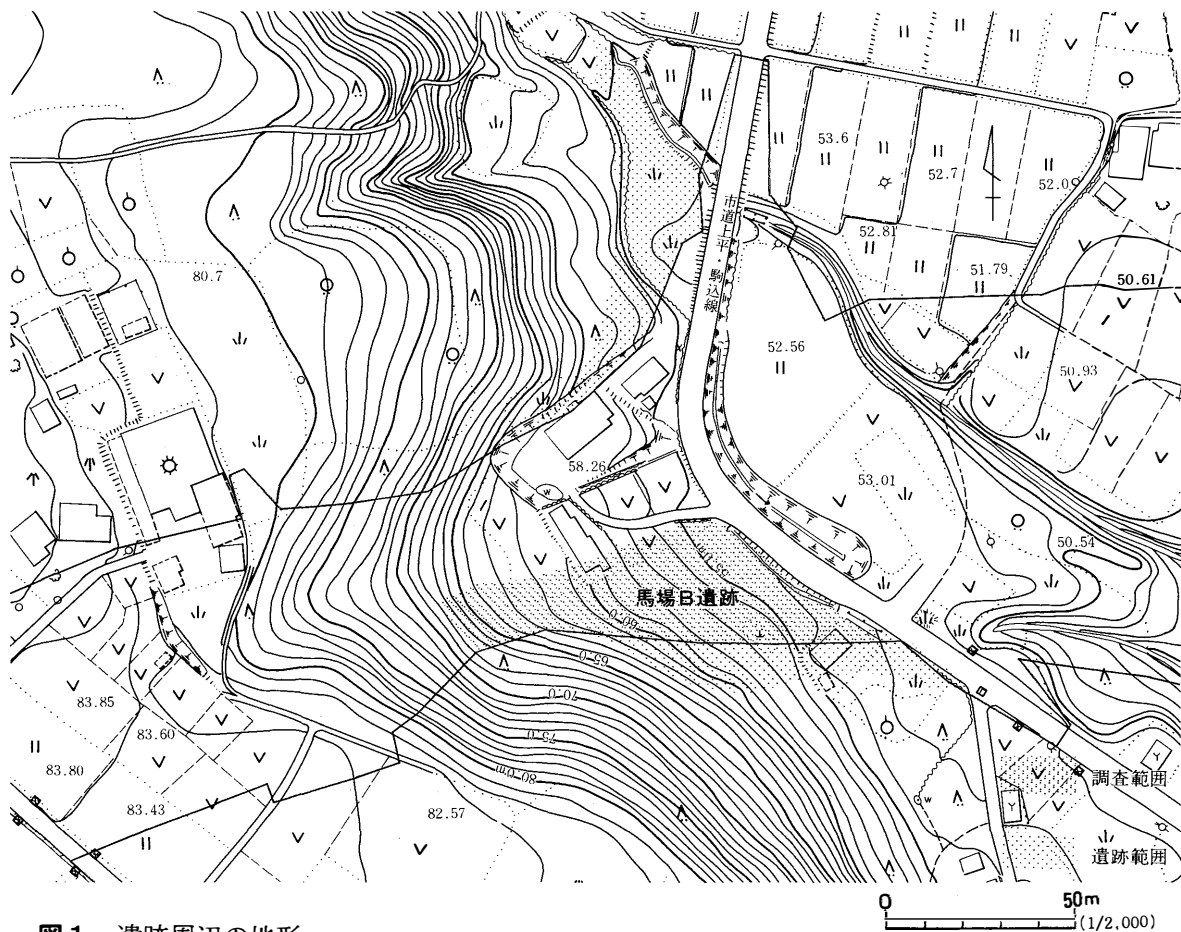


図1 遺跡周辺の地形

に耕地・宅地は少なく、ほとんど山林になっていた。

本遺跡の付近には、丘陵上部に平成6年度に常磐自動車道建設に伴って発掘調査された久原A・久原B遺跡と駒込遺跡がある。市道上平・駒込線を挟んだ東側には馬場A遺跡が隣接している。これらの遺跡はいずれも江戸時代や明治時代の農家の宅地に関わる遺構・遺物が検出されている。仁井田川の対岸には、当遺跡と共に今年度調査が行われた大久保A・大久保F遺跡がある。大久保A遺跡は丘陵の裾部にあり、平安時代や安土桃山時代の遺構・遺物を検出した。大久保F遺跡は丘陵の上であり、平安時代の土器製作遺構を土師器や須恵器と共に多数検出した。また、約2.5km東の丘陵上には縄文時代から平安時代に至る多彩な遺構・遺物が発見されたタタラ山遺跡があり、さらに海岸に近い位置には、今年度発掘調査が行われた大猿田遺跡・白岩堀ノ内遺跡がある。これら常磐自動車道に関わった遺跡以外には、大猿田や白岩堀ノ内遺跡の付近に多くの遺跡が確認されている。仁井田川の南岸には縄文時代中期の済戸貝塚がある。また、和具遺跡でも縄文時代の遺物が採集されている。弥生時代の遺跡では戸田条里遺跡で中期の水田跡が発見されている。戸田条里遺跡では平安時代の水田跡も検出されており、この地域の肥沃な沖積地が古くから主要な経済基盤として継続的に利用されていたことが分かる。このような農業生産基盤に支えられて、主軸長約118mの玉山1号墳のような巨大な前方後円墳を営む首長も当地に君臨できたと思われる。古墳時代の集落跡は前記のタタラ山遺跡のほかに、山田小湊遺跡や玉山遺跡があり、日陰遺跡では古墳時代の祭祀遺物が採取されている。奈良時代や平安時代には白岩・白岩堀ノ内・大猿田・タタラ山・大久保Fの各遺跡で、鉄器や土器などの生活物資の生産遺構が検出されており、該期においても今後注目しなければならない地域と言える。中世の初期には当該地域は好嶋荘の領域に含まれると言う文献記載や、また薬王寺や八茎の供養塔群などの宗教遺跡や遺物はあるものの、考古学的に調査された遺構・遺物がほとんど見られない。しかし、比丘尼・玉山・白岩堀ノ内などの城館跡や大久保A遺跡のような集落遺跡も存在しており、近世も含めて今後の調査の進展が期待される。(石本)

第2節 調査経過

平成7年度は、いわき中央IC～いわき四倉IC間平成9年供用開始を目標に、発掘調査遺跡の面積が大幅に増加することになった。これに伴って、調査員30名という過去に例のない調査体制がしかれ、年度当初から4月中旬調査着手を目標に種々の準備作業が進められた。4月11日には日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの三者協議を行い、未買収地の存在・伐採木の処理・排土置き場の確保など、調査開始までの問題点を確認した。また、4月12日にはいわき市教育委員会文化課・財団法人いわき市教育文化事業団・福島県教育委員会文化課・財団法人福島県文化センターの4者でいわき市当当地域と隣接する白岩堀ノ内遺跡の調査区の問題などについて協議した。これらの協議を経て現地調査を開始したのは翌4月13日のタタラ山遺跡の調査からであった。

本遺跡は、平成5年度と翌6年度に試掘調査が行われ、路線内要保存範囲を市道上平・駒込線の西側3,100㎡と確定した。本年度の調査は、この要保存範囲の中から検出されるであろう遺構・遺物の記録保存調査であった。

本遺跡の発掘調査は、最初に調査範囲の確認と縄張りおよび調査機材の搬入などの調査準備を4月17日に行った。翌18日からバックホーなどの重機による伐採木の抜根作業と表土除去作業に着手した。20日頃には表土も半分以上取り除かれたので、作業員による残土処理と遺構検出の作業を開始した。遺構検出層が段丘堆積物の礫混り粘土のため、降雨が続くと調査区内の数か所に湧水点ができ水があふれ出し、検出作業に支障をきたすようになった。そのため、各湧水点から排水溝を引き、市道側溝に流れるようにした。4月24日には重機による表土除去作業が、遺構検出作業は東側約40%の区域が完了した。翌25日には調査区中央部付近で木炭窯跡を検出した。遺構が検出されるようになったので、26日から基準杭の打設を開始し、27日には終了した。このころには調査事務所の設備も整い、調査は序盤を過ぎて順調に進捗するようになった。

5月に入り遺構検出作業が一段落ついたので、遺構精査に人員をさけるようになった。すでに検出していた1号木炭窯跡の精査を開始するため、付近の清掃を行ったところ溝跡と土坑を検出した。それぞれ1号溝跡、1号土坑として1号木炭窯跡と共に検出写真の撮影を行った。遺構の重複関係を確認めたくて5月10日から掘り込み精査の作業を開始した。このころは雨が多く、強く降ると土砂が市道に流出した。そのため、調査区内の排水溝や市道の側溝は常に整備しておかなければならず、遺構精査に影響が出た。遺構精査を再開できたのは5月中旬も終わりのほうで、5月18・19日の両日で1号木炭窯跡の堆積土観察や写真撮影および作図などの記録作業を行った。1号木炭窯跡の堆積状態の記録を作成後、引き続き1号溝跡や1号土坑の堆積状況を調べた。5月24日には1号木炭窯跡や1号土坑は完掘したが、天候不順のためなかなか完掘した遺構の全景写真が撮れなかった。写真撮影が完了して平面図などを作成し、断ち割り作業に漕ぎ着けたときには6月上旬になっていた。

遺跡東部の調査区外に5基の近世の墓石があったため、この付近から墓坑が検出される可能性が指摘されていた。1号木炭窯跡の精査が完了した頃から墓石の付近を入念に削ったが、抜根の跡や試掘坑が見つただけで墓坑は検出できなかった。遺跡中央部の斜面中位から下位にかけては、土質が粘土であるうえ、大きいもので直径70cmほど、小さいもので人頭大の礫がたくさん地山に含まれていた。このあたりの遺構検出作業は梅雨に悩まされながらも、6月下旬に終わらせることができた。

7月に入って遺跡の全景写真を撮るために調査区の壁などを整備していたところ西端で木炭や焼土を検出した。窯跡の可能性があったので付近を精査したが、のちにこれは昭和時代に前の地権者が造った木炭窯の痕跡であることが分かった。7月7日までに遺跡全体の写真撮影や、地形図の測量を行い、本遺跡の調査の全てを終了した。日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所に遺跡の引き渡しを行ったのは、大久保F遺跡の調査が終了したあとの12月13日だった。

第3節 調査方法

馬場B遺跡の発掘調査は、調査面積3,100㎡を対象に実施した。表土除去作業は0.7バックホーで行い、排土の運搬は10tクローラーキャリアで行った。排土置き場は昨年度調査を終了した西側台地上部の駒込遺跡とした。表土を取り除いたあとは、草削りや唐鍬などの道具を用いて、人力で遺構検出作業を行った。このとき出た排土は、小型のクローラーキャリアで表土と同じ場所に運んだ。

平面図作成の基準とするための測量杭は、昨年度調査した馬場A遺跡の測量杭をもとに、国土座標 $X = +124,150$, $Y = +95,150$ の原点を求めて打設した。この測量原点を0地点として、真北に50m、真南に20m、真東に60m、真西に40mずつ図上で基準線を延長し、調査区を覆う南北90m、東西100mの長方形を設定した。この長方形を10m方眼に分割してその交点に必要なだけの測量杭を打設した。1つの方眼（グリッド）の名称は、東西方向をアルファベットで、南北方向を算用数字で表示した。したがって、西端からA～J、北端から1～9とし、これを組み合わせてA1・A2・・・A9グリッドなどと呼ぶことにした。また、 $X = +124,150$, $Y = +95,150$ の原点をNS00・EW00と定め、方位を示す略号と、m単位の距離を示す算用数字の組み合わせで、調査区内の位置を表記した。例えば、S10・E10とは、原点から南へ10m、東へ10mの地点ということの意味している。なお、測量杭の打設には光波測距儀を使用した。標高の基準点（ベンチマーク）は、やはり馬場A遺跡のベンチマークを基準に、光波測距儀によって標高57.8mの杭を設置し標高の原点とした。

遺跡内の土層は、土質や土色、含有物の有無を基準に分層した。このときに、遺跡の中の堆積土で、遺構内堆積土以外の土層は、LⅠ・LⅡ・・・LⅤとし、遺構内の堆積土は $\ell 1 \cdot \ell 2 \cdot \dots \cdot \ell 5$ といった略号を使用した。さらに、同一の成因によると思われる土層でも土色や含有物などで微妙に分けられる土層については、アルファベットの小文字を前述の記号に加えて区別した。

遺構の掘り込み精査を行うに当たっては、木炭窯跡や竪穴住居跡のような比較的大型の遺構については4分割し、分割線の部分を幅数10cm残して土層観察用の畦（ベルト）とした。土坑のような小型の遺構については2分割し、半分を土層観察用に残して調査した。溝跡などは適宜ベルトを設けて掘り込んだ。なお、今回検出の木炭窯跡のように、一部が調査区外に出てしまう遺構については、遺構の堆積土と遺跡の基本堆積土層の記録を同時に行った。

このようにして観察・精査した結果は、測量図や写真によって記録した。遺構の平面図や断面図あるいは遺物の出土状態の図などは、1/10や1/20の縮尺を原則とした。遺構検出面における遺跡の地形図は1/200の縮尺で作成した。写真は遺構調査の進捗に応じ、検出状況、土の堆積状況、遺物出土状況、完掘状況、調査作業状況、遺跡全景などを、1眼レフ35mmカメラと1眼レフ6×4.5中型カメラで撮影し、フィルムはそれぞれモノクロームとカラーリバーサルを使用した。（石本）

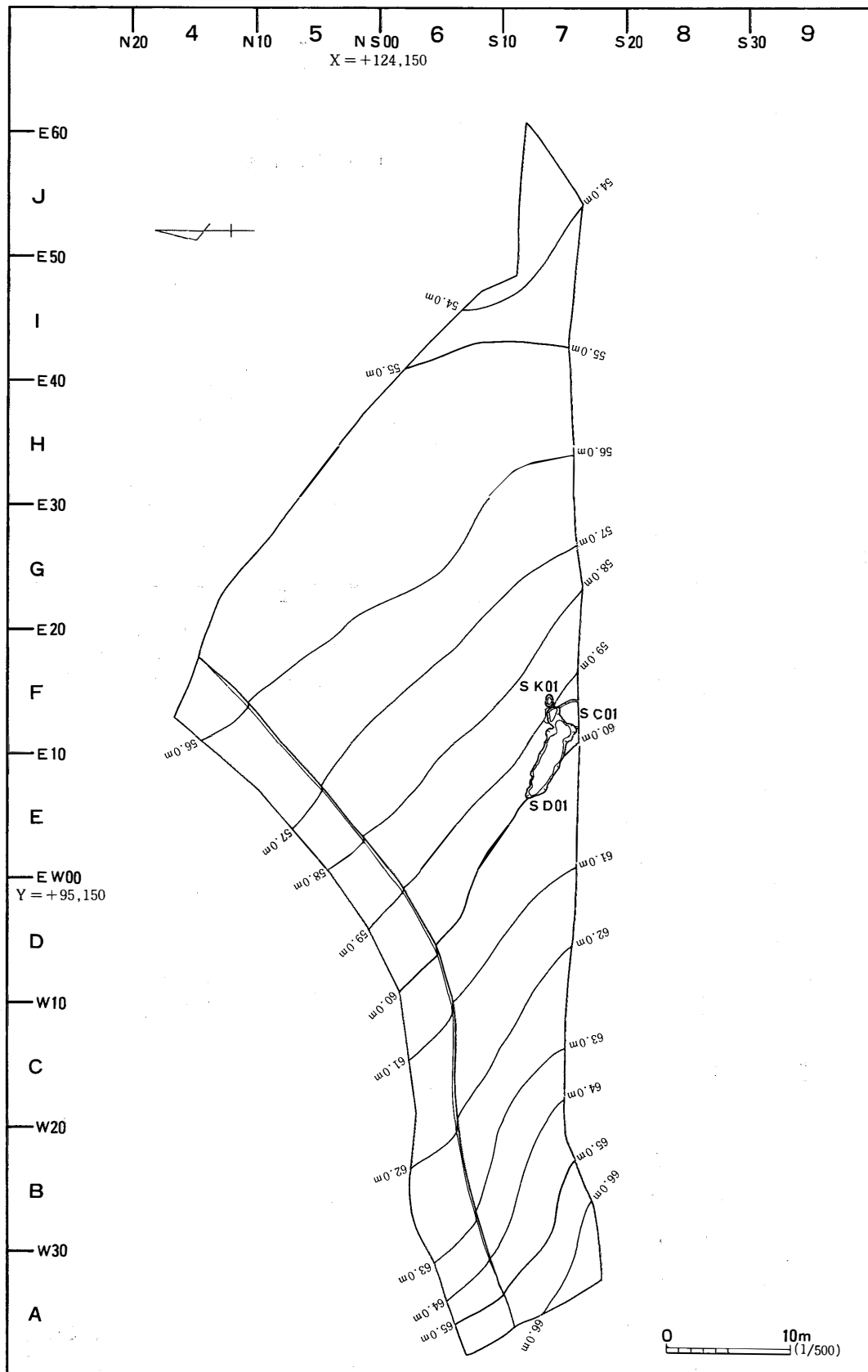


図2 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

馬場B遺跡で検出した遺構は、木炭窯跡1基、土坑1基、溝跡1条である。遺物の出土は少なく、銭貨が1点だけである。

第1節 基本土層

段丘崖に立地する本遺跡の遺構検出面は黄褐色粘土である。この土層は表土から数えると3番目の土層になるのでLⅢと呼称した。LⅢには直径70cmほどの大きな礫から人頭大・拳大の礫まで多量に含まれており、こうした石の隙間を浸透水が伏流するため数か所から湧水した。湧水点付近のLⅢはグライ化して青灰色になっていた。LⅠの表土は平均10cmで暗褐色の腐植土である。これは現況が山林だったためで、LⅡ以下にも大きく土を動かした痕跡はないので、過去にも畑などに開墾されてはいなかったと判断される。LⅠは1号木炭窯跡の付近では2細分できる。LⅠaは前述の腐植土層である。LⅠbは窯周辺にだけ馬蹄形に盛り上がりが見える褐色粘土層である。LⅡは調査区の南側中央部に認められる暗褐色粘土で、1号木炭窯跡はこの層から掘り込まれている。

第2節 木炭窯跡

1号木炭窯跡 SC01

遺 構 (図3, 写真3)

1号木炭窯跡は、調査区中央F7グリッドのLⅡで検出した木炭窯跡で、北向きの斜面に立地している。焼成部の一部から奥壁にかけて調査区境界から外にあるので、遺構全体の精査はできなかった。他遺構との重複関係は、1号溝跡と切り合っている。遺構の新旧関係は本窯跡のほうが1号溝跡よりも古い。

遺構内堆積土は腐植土を含めると3層に分けられた。①は焼成部中央に分布していた。②は壁際に認められた初期堆積土である。平面形は1号溝跡に破壊されているが、遺存部分から判断すると扇形を呈すると思われる。しかし、側縁は直線ではなく内湾している。調査区内で分かる窯跡の長さは2.67mで、幅は焼成部がもっとも広い部分で2.4mである。床面は炭化し堅くなっており、炭化層が4～10cmで、その下層は被熱によって6～9cmの厚さで赤化している。周壁で最も保存のよい部分は西側の壁で、ちょうど調査区境界壁にかかっている部分である。高さ約45cmが遺存している。床面と同じように壁面は炭化し、裏側は赤化している。焚口部周辺から焼成部東側にかけて

基本土層

- L I a 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘り気あり、表土
- L I b 褐色粘土 (10YR4/6) 窯掘削時の排土、礫少量含む
- L II 暗褐色粘土 (10YR3/4) 人頭大、こぶし大の礫少量含む
- L III 黄褐色粘土 (10YR5/6) 人頭大、こぶし大の礫含む

1号土坑内堆積土

- 1 黒色土 (10YR2/1) やや粘り気あり、礫を多量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘り気あり、炭化物、焼土粗粒多量含む

1号木炭窯跡内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) やや粘り気あり、粘土塊を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) やや粘り気あり、木炭粒・焼土粗粒多量含む

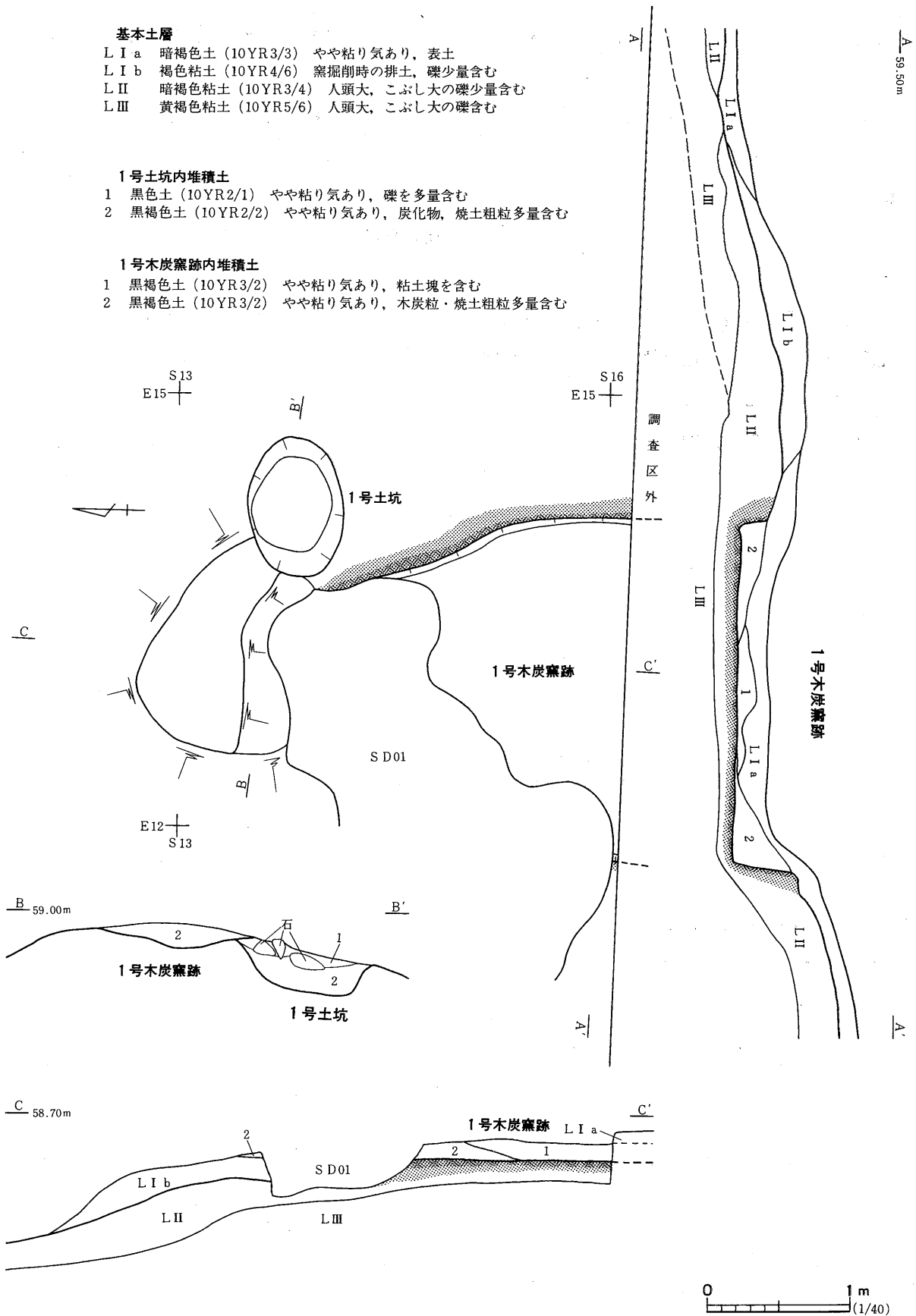


図3 1号木炭窯跡・1号土坑

L I bを検出した。この土層は平面的には窯の東側から北側にかけて馬蹄形の盛土である。この盛土はL IIの上に乗っており、窯の焚口部はL I bの上に造られている。窯よりも古い土層である。また、これはL IIやL IIIに類似しており、これらが入り混ったように見えることから人為堆積土と判断した。築窯の際の排土を盛ったものと推定される。

遺物

本窯跡に伴う遺物は、床面から出土した木炭塊や木炭片だけである。

まとめ

本窯跡の構造は、現況が山林であると言う点で、後世の削平は考えられず、調査区外の部分の遺存状態から見ても、掘り込み部分はあまり深くなく、半地下式と考えて差支えないと思われる。また、床面が平坦なことから平窯の形態に属する。

所属時期については窯内から年代を判断できる遺物が出土していないので、本窯跡だけでは判断できない。

(石本)

第3節 土 坑

1号土坑 SK01

遺構 (図3)

本土坑は、1号木炭窯跡と共にF7グリッドで検出した土坑である。1号木炭窯跡の焚口部に隣接しており、土層断面では窯跡の堆積土が一部土坑の堆積土を覆っている。この点では窯跡のほうが土坑より新しいが、本土坑は窯の整地層と考えたL I bを掘り込んでいる。このことから、本土坑は窯の構築後に掘り込まれ、窯と共に機能して、窯が機能しなくなり窯の $\varnothing 1$ が堆積し始めたときにはすでに埋没していたと理解される。

土坑内堆積土は2層に分けることができた。 $\varnothing 1$ には大人や子供の拳大の礫が混入し、 $\varnothing 2$ には木炭や焼土を含有していることが特徴的である。

平面形は長径が98cm、短径は67cmの楕円形である。深さは27cmで底面が平らな鍋底状をなす。

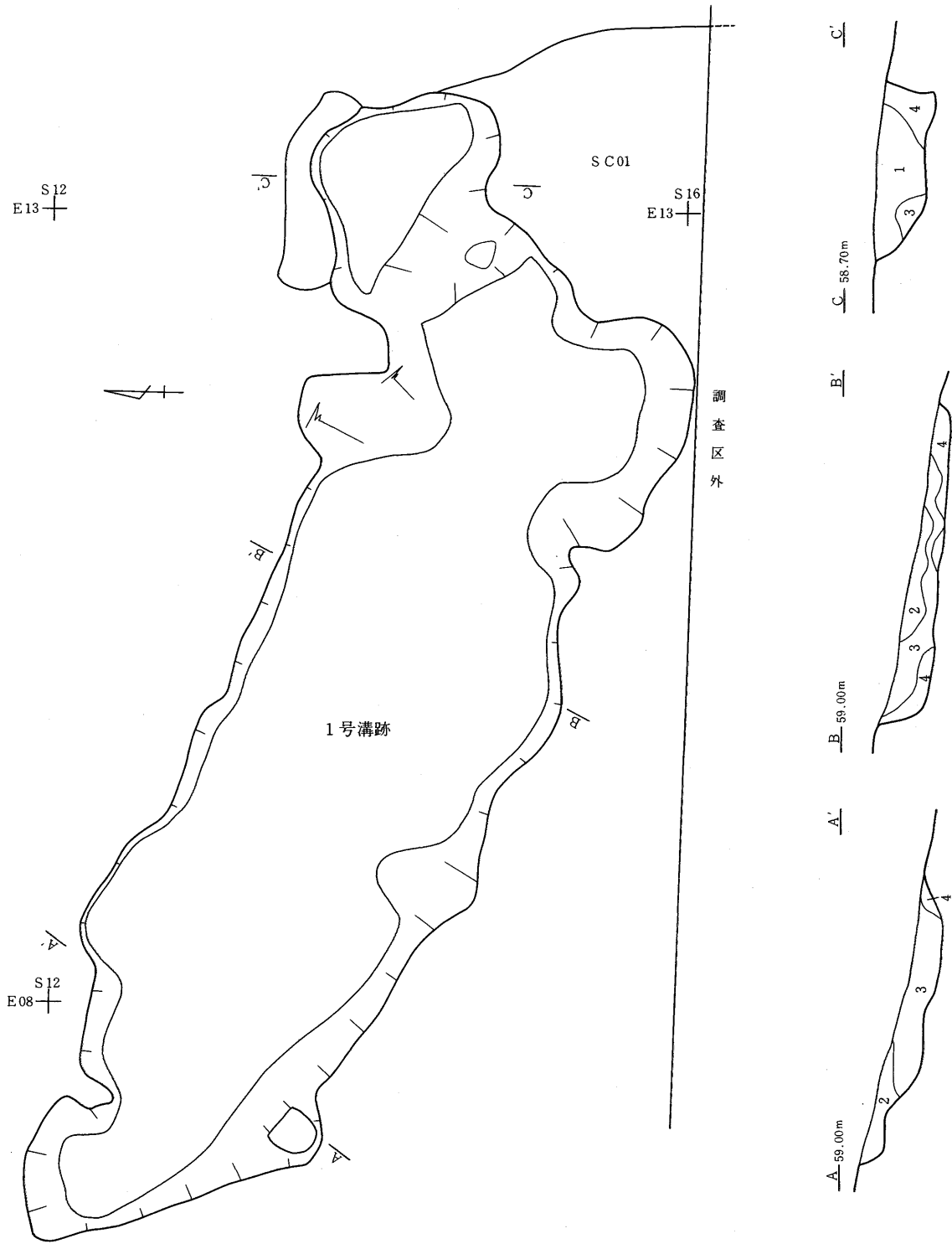
遺物

本土坑からの出土遺物はなかった。

まとめ

本土坑は、1号木炭窯跡の焚口部に隣り合っているという位置関係から、窯に付属した施設と考えられる。堆積土の下層に木炭や焼土を含んでいる。これらは木炭窯が供給源と見られるから、下層堆積時には木炭窯は操業していた可能性が高い。何らかの製炭に関わる遺構であろう。また、上層に礫が堆積していることは、本土坑の機能停止に伴って、何らかの廃棄行為が行われたと推察される。

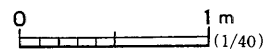
(石本)



1号溝跡内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘り気あり、焼けた壁、天井材の塊を多量含む
- 2 灰黄褐色粘土 (10YR5/2) 炭化物細粒を少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 炭化物多量含む
- 4 灰褐色粘土 (10YR6/1) 灰黄褐色土塊 (10YR5/2)、酸化鉄を多量含む

図4 1号溝跡



第4節 溝 跡

1号溝跡 SD01

遺 構 (図4, 写真4)

本溝跡は1号木炭窯跡の西側に隣接して検出され、グリッドではE7グリッドとF7グリッドにまたがっている。北西から南東に向かって等高線と平行してのびており、やや北西側が高く、南東側に向かって傾斜している。1号木炭窯跡と重複関係にあり、本遺構が木炭窯の焚口部から焼成部の一部を壊しているため、新旧関係は本溝跡のほうが新しい。

遺構内堆積土は4層である。ℓ1は1号木炭窯跡との重複部分にだけ堆積が見られる。ℓ2は遺構東側のくびれ部より西側中央に凸レンズ状に堆積している。粘土質の土壌のため比較的堅くしまっており、炭化物細粒をわずかに含む。ℓ3はℓ2同様くびれ部より西側に分布している黒褐色土で、炭化物の含有は最も多い。ℓ4は壁際に三角堆積していた灰褐色粘土で、酸化鉄を多く含み、底面が粘土質の土壌のためかグライ化している。全体に自然堆積の様相を呈するが、1号木炭窯跡との重複部分は人為堆積かもしれない。

全長は約7.64mで、幅の最も広い部分は中央やや東よりの部分で約2mである。前述のように、1号木炭窯跡と重複している部分でくびれ、さらに北東に折れまがったようになっている。底面や壁面は凹凸があるが、底面は全体的に水平を保とうとしたようである。

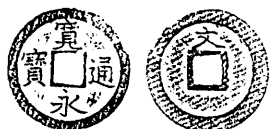
遺 物

本溝跡からの遺物の出土はなかった。

ま と め

1号木炭窯跡との重複部分が、平面的にもくびれたり、折れまがったりして変化が認められるし、堆積土も木炭窯の壁材が混じるℓ1がこの部分のみに認められ、人為的な堆積である。くびれから北西側は自然堆積なので、くびれを境に違った性格を持っていた可能性がある。出土遺物がないため正確な所属時期を特定することができないが、木炭窯とあまり時間差はないだろう。(石本)

第5節 遺構外出土遺物



1 A7 LII
直径：2.5cm
重さ：3.3g

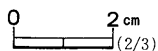


図5 遺構外出土銭貨

遺跡内から出土した遺物は、図5-1のLIIから出土した「寛永通寶」が1点だけである。これは裏面に「文」の文字があるいわゆる「文銭」で、1668年鑄造の「新寛永」である。(石本)

第3章 まとめ

前章で述べたように、本遺跡で発見された遺構・遺物は、木炭窯跡1基、土坑1基、溝跡1条と、銭貨がわずかに1点だけである。本章では1号木炭窯跡について考察し、周辺の遺跡と比較して本遺跡の性格を考えてみたい。

1号木炭窯跡について： 本県でこの種の半地下式平窯タイプの木炭窯跡を調査した例は、郡山市東作田C遺跡（大越^他1984）、石川町小田口C遺跡（佐藤^他1985）などの遺跡がある。とくに東作田C遺跡では、6基の木炭窯跡が検出されており、報告者の佐藤洋一が詳細に考察している。本窯跡の場合、平面形を明確にできなかったが、焚口部ですぼまる格好は東作田C遺跡の遺構と同一である。しかし、東作田C例が石を用いて構築した「大竹式木炭窯」であるのに対し、1号窯跡は石を使って構築していないようである。佐藤は白炭窯と黒炭窯の違いを焼成部（炭化室）の奥行の寸法にあると述べ、前者の標準が6尺、後者が10尺としている。1号窯跡は調査区の中だけで6尺を越えており、この基準をあてはめる本窯跡は黒炭窯ということになる。東作田C遺跡では大竹式木炭窯よりも古い5・6号窯跡があるが、大竹式木炭窯よりも焚口部の幅が広いように見える。本窯跡は残念ながら焚口部が破壊されているので、詳細が分からなくなっている。しかし、東作田C5・6号木炭窯跡の焼成部奥行は、5尺を越えない小型の形態なので、10尺近い奥行があると思われる本窯とは異なっている。大竹式木炭窯がいわき地域にどの程度普及していたか不明だが、少なくとも1号窯跡は石で築いていない点で大竹式木炭窯とは適合しない。1号窯跡の機能時期については、大竹式木炭窯の開発が昭和6年になされていることで、もし大竹式木炭窯が本地域に普及したのであれば、本窯跡は昭和6年以前の所産となろう。また、大竹式木炭窯以外の木炭窯が本地域で行われていたとすれば、昭和6年以降機能していた可能性もある。近くの住民の聞き取りでは、昭和20年以降、この付近で炭焼きをやっていた記憶はあるが、それは調査区の西端で検出された木炭窯らしく1号木炭窯に関しては分からないという話が多い。これらを総合すると、1号木炭窯跡の機能していた時期は、昭和時代の初期とするのがもっとも妥当と考える。

本遺跡の東側の河岸段丘上に位置する昨年調査した馬場A遺跡では、江戸時代の宅地跡が発見されている。さらに馬場A遺跡や駒込遺跡では、長楕円形の木炭焼成遺構が検出されている。そのうち1基の堆積土中から明治時代初期の磁器が出土したことから近代の所産と考察されている。遺跡周辺の斜面は、現在でも山林であり、段丘や丘陵の平坦地は耕地や宅地に利用されている。斜面には木炭窯が構築されており、豊富な原材料を利用して営まれていたと考える。また、馬場A遺跡や駒込遺跡で検出された木炭焼成遺構（伏焼窯）と1号窯跡のような平窯タイプの2系統の木炭窯がどのような関係にあるか、製炭史解明には興味深い課題と思われる。 (石本)

参考文献

- 大越道正^他 1984 「東作田C遺跡」『母畑地区遺跡調査報告15』 福島県教育委員会 (財) 福島県文化センター
- 佐藤洋一^他 1985 「小田口C遺跡」『母畑地区遺跡調査報告17』 福島県教育委員会 (財) 福島県文化センター

第2編 おおくほ 大久保A遺跡

遺跡記号 IWK-OKB・A
所在地 いわき市四倉町駒込字日ノ目・大明神・
大久保
時代・種類 平安・安土桃山・江戸時代
調査期間 平成7年4月18日～9月27日・
10月30日～11月22日
調査員 石本 弘・佐々木慎一・笹山恵子・
福田秀生

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

大久保A遺跡は、いわき市四倉町駒込字大久保・大明神・日ノ目地内に所在する。JR四倉駅から西へ6km、また、JR小川郷駅から北へ4kmに位置し、海岸線からは約9km内陸に入っている。四倉町は太平洋に面した漁港として栄えた町だが、幾分内陸に入り込む当地区は農業が盛んであり、畑地・水田が広がる穀倉地帯となっている。遺跡付近の地形は新生代第三紀に形成された凝灰岩や礫岩の地層で、湯長谷層群に属する水野谷層・五谷層、新生代古第三紀の白水層群に属する白坂層～浅見層がそれぞれ堆積し、これらの層が遺跡の北側に位置する三森山付近を水源として太平洋に注ぐ仁井田川により開析された河岸段丘地形を形成している。この段丘面は遺跡の立地する丘陵端部から当地区を南流する仁井田川の河岸まで、宅地および水田として利用されている。

本遺跡の周辺の遺跡としては、対岸の丘陵部に馬場A・B、久原A・B、駒込の5遺跡が所在し、本遺跡の東側丘陵には大久保F遺跡が所在している。

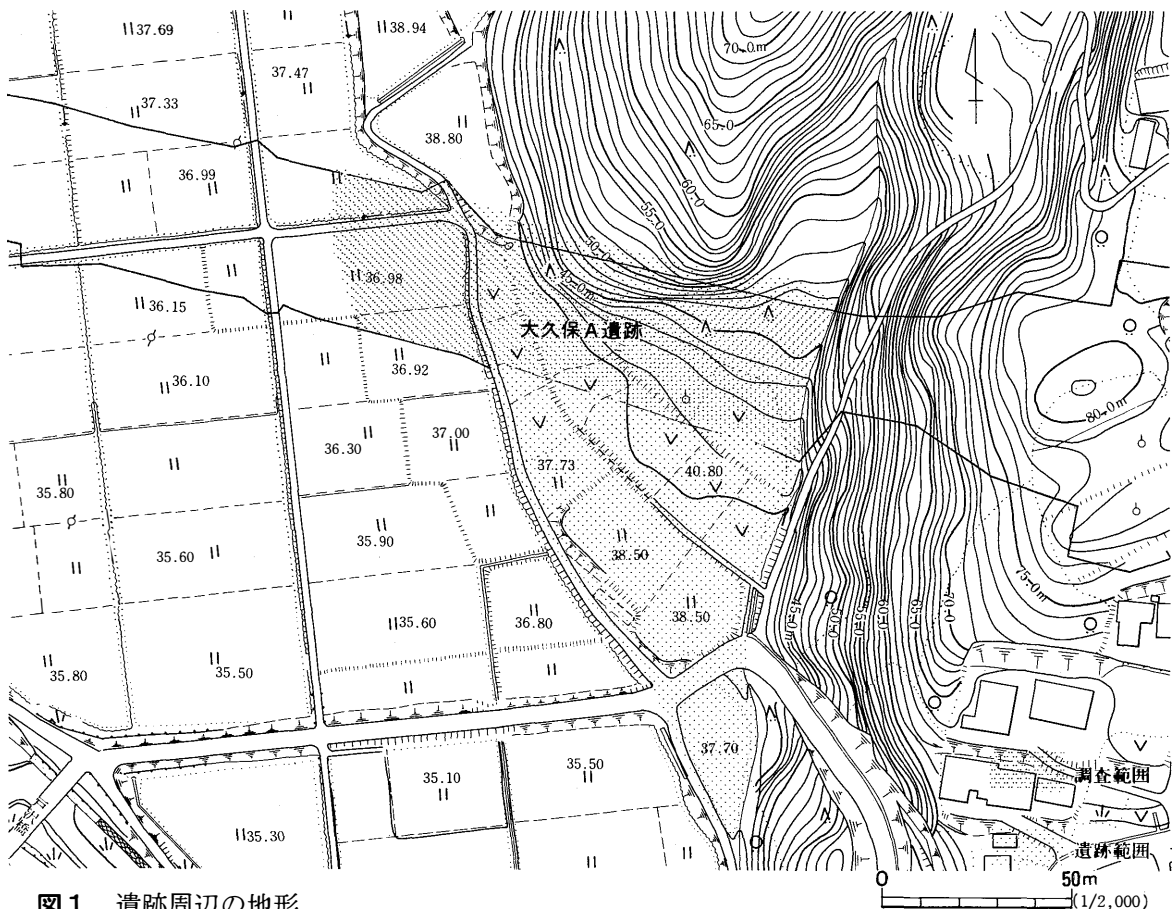


図1 遺跡周辺の地形

第2節 調査経過

大久保A遺跡は、平成元年11月に財団法人いわき市教育文化事業団が実施した表面調査によって発見され、古墳～平安時代の遺物散布地として登録された遺跡である。その後の常磐自動車道の開通年度が設定されたことを受け、路線内にかかる本遺跡の工事範囲部分を財団法人福島県文化センターが、平成5年12月に予備調査を実施した。調査の結果、多数の小穴と土坑・溝跡等の遺構と土師器・須恵器・陶磁器類の遺物を発見し、掘立柱建物跡を中心とした奈良～平安時代と中世～近世の複合遺跡であることが判明した。

発掘調査は、4月17日より開始し機材整備および調査事務所設置場所等の調査環境整備と人力による表土剥ぎを並行して行った。なお、調査範囲内では伐採業者による立木伐採およびその運搬が行われており、階段状を呈している調査区の下段部より表土剥ぎを行わざるを得ない状況であった。排土については小型クローラキャリアを使用し排土置場まで運搬した。

5月上旬には立木の伐採およびその後片づけが終了し、本格的な表土剥ぎとそれに並行した遺構検出作業に着手した。遺構精査は検出次第随時行った。ただし、調査区上段部は伐採後の清掃と抜根作業が伴い大幅に作業の遅れが目立った。また、排土置場までの農道は生活道路も兼ねたものであったために、その修繕を行うことに日々調査時間の3分の1程度の労力を費やすこととなった。

6月には調査区の中・下段の遺構検出作業が終了し、随時検出遺構の精査作業を行った。また、排土搬出路は雨天日が続くことから碎石を敷詰め路面の破壊を最小限に食い止める処置を講じた。

7月中旬頃には、調査開始以来懸案であった農道の修繕問題を緩和するために鉄板を搬入し道路整備を行った。このことによって、排土搬出が迅速に行われ、上段部を含める調査区全体の表土剥ぎと遺構精査が障害なく行われるようになる。

8月上旬には、中・近世の遺構検出面の処理を終了したことから、小型重機により該当する層の除去作業を行い、それと並行して遺構検出作業を行った。なお、8月下旬に調査当初から懸案であった水田部の調査に関しては、用地の未買収問題があり、その問題が解決し、新たな指示が下されるまで未着手とすることと決定した。

9月下旬には、調査区内の丘陵裾部の遺構精査が終了し、地形測量を含めた残務をすべて終了した。なお、水田部の調査に関しては、調査開始が了承されなかったことから、水稻の刈入れ後に検討することで、大久保A遺跡の発掘調査を一時終了した。発掘機材一式については、開始日が流動的で管理が不可能なことから、総て大久保F遺跡へ保管した。

10月30日から用地買収の関係から調査を中断していた水田部の調査を開始した。調査では予備調査時のトレンチの位置確認と調査区冠水防止のための側溝の付設を先行した。層位の確認と検討の後、旧水田面と考えられる部分まで、現水田土壌の除去を行い遺構検出を開始した。11月22日には、調査区の危険場所を明示し、機材を撤収して今年度の発掘調査を終了した。

第3節 調査方法

本遺跡は、4,000㎡を調査対象地域として調査を行った。調査開始にあたっては、路線内の休耕田に排土置場と調査事務所を確保した上で、人力での表土剥ぎを開始した。排土の運搬には小型クローラダンプを使用した。なお、調査途中からは排土が多量に排出されると判断したために、小型バックホーを活用した。

グリッド設定に関しては、日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所で設定した、道路工事施工範囲内の中心杭と国土座標一覧表を併せて利用し、前年度に発掘調査を行った馬場A遺跡の測量中心杭(X=+124,200・Y=+95,300)から東方に位置する当遺跡の調査区中心に確認を繰り返す方法で正確を帰する方法を採った。これをもとにK9グリッドを起点として、東西南北に10m間隔の測量基準杭を設定した。また、その原点より南に15m、東に55mに位置する杭を「NS00・EW00」(X=+124,650・Y=+95,200)として遺構実測用方眼線の原点とした。10m間隔の基準杭から5m間隔の方眼を設定し、その方眼の一つ一つをグリッドと呼び、北端から南へ1・2・3……14、西端から東へA・B……Y、とグリッドに個別番号を付した。なお、グリッドの呼称は「N10グリッド、S13グリッド」というように、アルファベットを優先させて呼ぶこととした。

実測用方眼線はグリッド軸に沿って1m間隔で規定した。これはV11グリッドの北西側コーナー部を原点とし、この点を通る東西方向のラインをNS00とし、北へ1mごとにN01・N02…、南へ1mごとにS01・S02…と呼び、また、南北方向のラインをEW00とし、東へE01・E02…、西へW01・W02…とした。

基本土層の観察は、階段状の調査区を網羅するために、調査区境界の東壁面と調査区内に2本の土層観察帯を用い、また、水田部の調査においては、調査区境界の東西南北4方向の壁面を用いた。なお、土層は土質・色調・混入物の違いにより分層した。

遺構の精査にあたっては、竪穴住居跡および土坑・溝跡は、土層観察帯を残して層ごとに堆積土を掘り下げ、数多く検出された小型柱穴については、明瞭な掘方と柱痕が認められるものを中心として半截による土層観察と記録を行った。

出土遺物は原則として床面出土のものを記録したが、埋没段階で入り込んだ遺物については、層位を記して、写真で記録したものもある。カマドについては記録後に断ち割りを行い、構築順序を観察した。また、竪穴住居跡の床面が貼床と判断されたものに関しては、床下施設の在り方を確認するために断ち割りを行った。なお、掘立柱建物跡については、発掘現場で認識できたものが1棟であるが、ほかは、すべて小穴と記録し、後に建物跡としての検討を行った。

記録に関しては、竪穴住居跡を1/20、土坑を大きさに合わせて1/10・1/20の縮尺を採用し、地形図は1/100の縮尺で記録した。写真は35mmフィルムのモノクロームとカラーリバーサルとで撮影し、併せて6×4.5cm判のモノクロームとカラーリバーサルも使用した。(佐々木)

第2章 遺構と遺物

大久保A遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、土坑31基、溝跡8条、小穴224個である。また、出土した遺物は、弥生土器5点、土師器3,959点、須恵器227点、陶磁器191点、鉄製品9点、石器1点、石製品1点、銭貨7枚である。報告にあたり、遺構はすべて図示し、遺構写真もできうる限り掲載したが、土器類の中には小破片のために割愛したものもある。

第1節 基本土層 (図2, 写真3~6)

大久保A遺跡の調査範囲は、丘陵裾部から現水田部に展開し、標高差約10mを測る緩やかな斜面上に位置している。地形は後世の宅地造成と果樹園造成の際に削平と盛り土が繰返され階段状の地形を呈している。現状は調査区上位部が山林、中段以降が果樹園と畑地・水田に利用されている。なお、調査区については、前述の理由から上・中・下段と水田部と呼称することとした。

土層観察畦の設定については、発掘調査が開始されても条件整備が整わず上段部からの調査が不可能であったため、それぞれ各段位ごとに設定した。報告に際しては、丘陵部と水田部は、層位的に共通する部分が認められないことから別途に記載する。

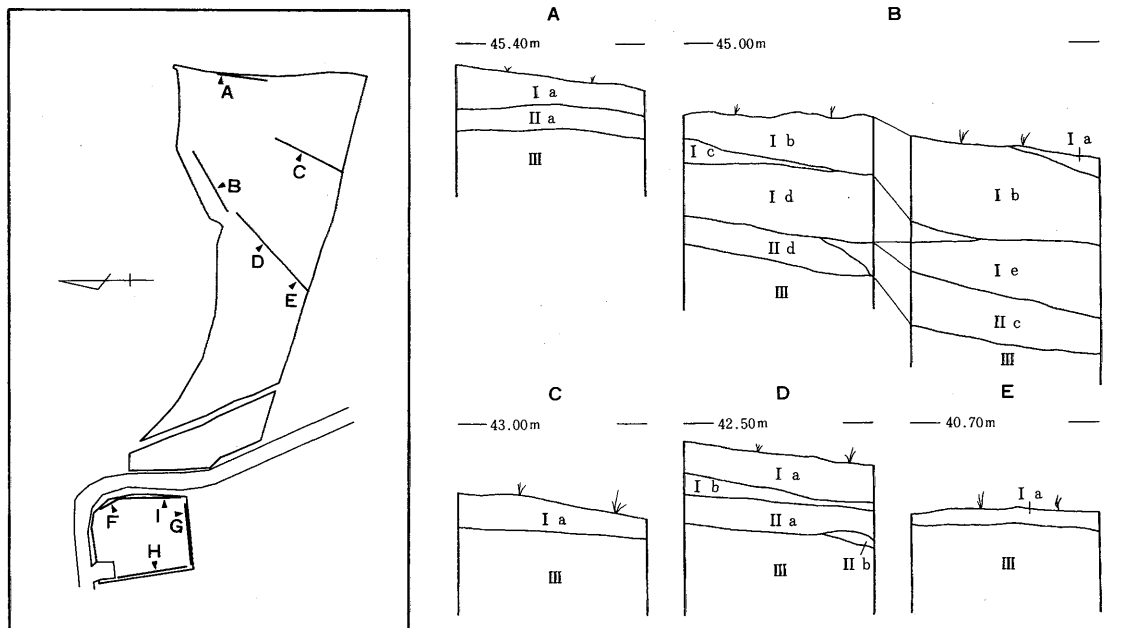
調査区上段部の層位は、基本的に3層に大別されるが、西側丘陵部の裾部から発見された旧沢跡の堆積土を含めるとL I a～I e・L II a・II c・II d・L IIIの9層に細分される。L I aは調査区全体を覆う土層であり、凝灰岩粒を多量に混入する腐食土とにぶい黄褐色土の混土から成る現表土である。L I b～I eは基本的には盛り土であり沢跡を埋めるために使用した整地土と判断した。L II c・II dは沢本来の堆積土であり、崩落した凝灰岩粒と凝灰岩塊からなる暗褐色系の土層である。本調査区上段部の遺構検出面はすべてL IIIである。

中段部は上段部と下段部との境に削平による1～1.5m程の段差を有している。層位は4層に細分され、概ねP9・10グリッド付近を境にして東・西の堆積土の状況が異なっている。東側の層位は現表土であるL I a直下にL IIIが露出するが、西側に移行するにつれてL III上面に整地土と判断したL II a・L II bが認められる。この整地土のL II aは本遺跡での中世期から近世期までの遺構検出面と捉えている。なお、一部露呈している丘陵基部の凝灰岩岩盤をL IVとした。

下段部は本調査区内では最大規模であるが、畑地に改変する段階でかなりの削平を受けており、上段部との境に前述の段差が認められる。層位は現表土であるL I a直下15～20cmにL IIIが認められる。なお、下段部はこのL IIIが遺構検出面となる。

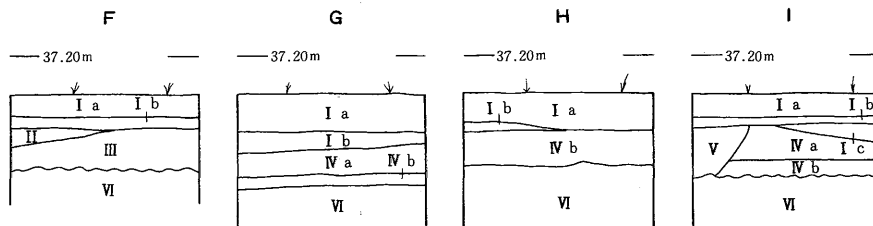
水田部の基本層位は、調査区の制限から上述の各層位との関連を検討することができず、丘陵部と水田部の堆積状況の推移が把握できなかった。したがって層位番号が丘陵部と重複するが、別意

のものである。層位は6層に細分される。L I a ~ L I c は酸化鉄粒を多量に混入する現水田部の耕作土と床土であり、L II は調査区北側に認められ現水田造成時の客土と考えている。L III は粘性の黒色土であり、本来この土質の部分は湿地であったことが窺える。L IV a ・ L IV b は凝灰岩細粒を混入する褐色系土色を呈しており、水の影響を長く受けたと思われる層位の乱れから旧水田の耕作土であると判断した。特にL IV b とL VIの境には波状の乱れが顕著に認められ、人為的な痕跡と考えている。L V は東壁側の一部に認められる層位であり、堆積状況から水田造成時の客土の一部と判断した。L VI はグライ化した層であり、仁井田川の氾濫による堆積層と考えている。(佐々木)



上・中・下段部基本土層

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-----------------------|
| L I a | にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | L II a | 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩粒 |
| L I b | 褐色土 (10YR4/6) | L II b | 暗褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩粒 |
| L I c | にぶい黄褐色土 (10YR5/4) | L II c | 黒褐色 (10YR2/2) 凝灰岩粒・木炭 |
| L I d | 褐色土 (10YR4/6) | L II d | 黒褐色 (10YR3/1) 凝灰岩粒・木炭 |
| L I e | 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩・木炭粒 | L III | 褐色土 (10YR4/6) 凝灰岩 |



水田部基本土層

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|--------|---------------------------------------|
| L I a | 灰黄褐色土 (10YR4/2) 酸化鉄 | L IV a | 暗褐色土 (10YR4/6) 凝灰岩微細粒, 水田検出面 |
| L I b | 褐灰色土 (10YR4/1) 酸化鉄・凝灰岩細粒・木炭細粒 | L IV b | 黒褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩微細粒, 水田検出面 |
| L I c | 灰黄褐色土 (10YR4/2) 凝灰岩細粒・木炭細粒, 東壁の一部のみ検出 | L V | 黒褐色土 (10YR3/2) 酸化鉄・凝灰岩細粒・木炭, 東壁でのみ検出 |
| L II | 黒褐色土 (10YR3/1) 凝灰岩微細粒・酸化鉄, 北壁でのみ検出 | L VI | 暗灰黄褐色土 (2.5Y5/2) 酸化鉄, 南壁・東壁でグライ化, 地山層 |
| L III | 黒色土 (10YR2/1) 凝灰岩細粒・木炭, 水性堆積 | | |

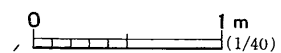


図2 基本土層柱状図

第2節 竪穴住居跡

本調査区で検出された竪穴住居跡は5軒である。調査区中段部から2軒、下段部から3軒検出され、丘陵裾部付近に偏る傾向が認められる。各住居跡の遺存状況は後世の宅地および畑地の造成により削平が著しく良好ではない。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図3, 写真7)

本遺構は、調査区中段部のP11, Q11グリッドに位置する竪穴住居跡であり、削平を受け段差が生じた斜面部でその存在が確認された。遺構検出面は、中世期から近世期の遺構検出面であるL II aを除去した後のL III上面である。他遺構との重複関係はないが、後世の開削により遺構の約半分は破壊されている。

住居跡内堆積土は7層に分層することができる。全体的に凝灰岩粒を多量に含み、概ね北側の斜面高位部からの流れ込みを窺わせていることから、自然堆積によるものと判断した。なお、⑥は壁の崩落による堆積土であり、⑦は踏み締りが顕著に認められる貼床土であり、住居内全体に4～8cmの厚さで敷詰められている。

遺構の平面形は、遺存する部位から推察すると概ね正方形を呈していたものと考えられる。遺存する規模は、北壁が4m、東壁2.3m、西壁1.1mを測る。本住居跡の軸線方位は南北方向の壁を基準として東へ12°傾いている。

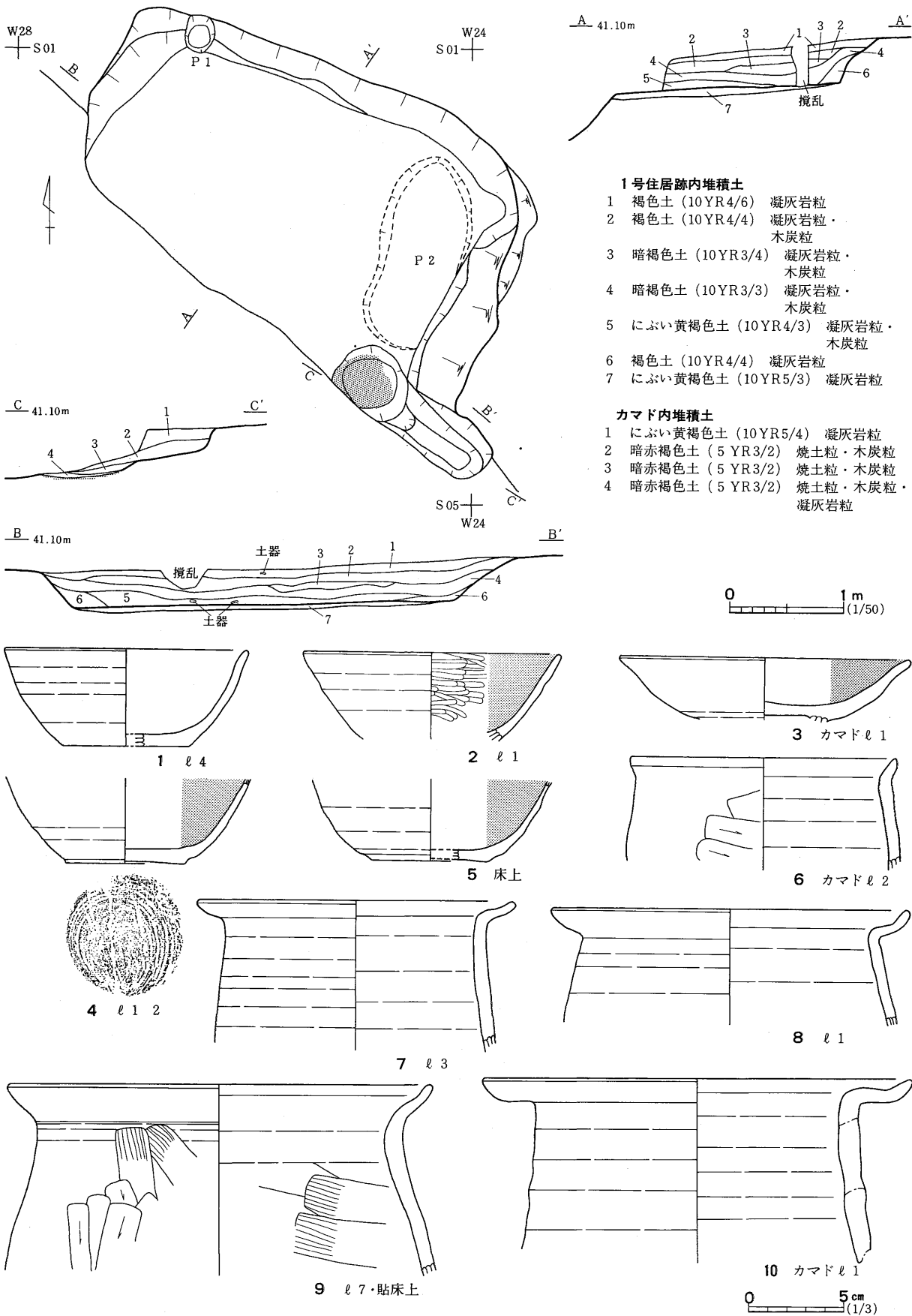
周壁は、遺構が廃絶された後はかなり崩落したものとわれ50°前後の角度で緩やかに立ち上がる。遺存する周壁の残存高は、北壁が40cm、東壁が31cm、西壁が37cmを測る。床面は貼床が施され概ね平坦に造成されている。全体的に床面は堅く踏み締っており、中でもカマド周辺から北東コーナー付近にかけての踏み締りが著しい。

ピットは北壁の西側コーナー付近に1基と貼床下の1基の計2基が検出された。ピット1は径33cm、深さ41.5cmを測る。壁際に位置し規模的にも柱穴となりうる可能性はあるが、ほかの部分に同様な遺構が認められないことから、柱穴とは明確に判断し難い。ピット2は不整楕円形を呈し、長軸1.58m、短軸0.8mを測る。検出面からの深さは6～12cmを測る。

カマドは東壁に位置している。削平による全壊は免れているが、南側のほぼ半分は辛うじて形状が判明する程度である。なお、カマド本体の構築材は認められなかった。遺存部の規模は長軸方向で1.55m、燃焼部幅55cmを測り、煙道の長さは約86cmを測る。内部は焼土化するほど被熱していないが幾分硬化している。カマド内堆積土はその性状から自然堆積と判断した。

遺 物 (図3・4, 写真20・21)

本住居跡から出土した遺物は、土師器片500点、須恵器片62点、砥石1点である。その内、図3・



1号住居跡内堆積土

- 1 褐色土 (10YR4/6) 凝灰岩粒
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒・木炭粒
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩粒・木炭粒
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩粒・木炭粒
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒・木炭粒
- 6 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 凝灰岩粒

カマド内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 凝灰岩粒
- 2 暗赤褐色土 (5 YR3/2) 焼土粒・木炭粒
- 3 暗赤褐色土 (5 YR3/2) 焼土粒・木炭粒
- 4 暗赤褐色土 (5 YR3/2) 焼土粒・木炭粒・凝灰岩粒

図3 1号住居跡・出土遺物(1)

4に図示可能な遺物を掲載した。図3-1は、 ℓ 4出土のロクロ成形の土師器杯であり、復元作図の結果推定口径13cm、底径6.4cm、器高5.1cmを測る。器面の調整は磨滅が著しく判然としない。2は口縁部から体部にかけての土師器杯であり、復元作図の結果、推定口径12.8cm、残存器高4.6cmを測る。外面は磨滅が著しく荒れている。内面の調整はミガキの後、黒色処理が施されている。3はカマド内出土の土師器高台付杯である。高台部は剥離しており痕跡のみである。器面は内外面ともに二次的な被熱により著しく荒れているが、内面には一部黒色処理が認められる。4・5は底部から体部にかけて遺存する土師器杯である。4は底径6.4cm、残存器高4.5cmを測り、5は底径6.1cm、残存器高4.3cmを測る。6はカマド内出土の小型甕である。復元作図の結果、推定口径14cm、残存高5.9cmを測る。7~10は住居跡内堆積土出土のロクロ成形の土師器甕である。いずれも口縁部から体部上半部までの破片であり、復元作図の結果、推定口径17.0cm、残存高7.9cmを測る。8は復元作図の結果、推定口径19cm、残存高6.1cmを測る。9は外面にケズリとナデが認められ、復元作図の結果、推定口径22.6cm、残存高10.0cmを測る。10はカマド内出土の甕であり復元作図の結果、推定口径22.8cm、残存高9.7cmを測る。図4-11~14は小破片であり、取て法量は求めなかったが、いずれも非ロクロ成形の筒形土器の口縁部破片である。器面には指頭痕と粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。15~21は外面にタタキ、内面に当て具による凹凸が残る須恵器甕の破片である。22は4面ともに使用痕が認められる砥石である。

ま と め

本住居跡は、削平の影響により全体形が把握できなく不明な点が多いが、本調査区内では大型の部類となる。また、出土遺物の中には製塩土器と考えている筒形土器が多く含まれているのも特徴的である。所属時期は出土した遺物から9世紀後半と考えている。(佐々木)

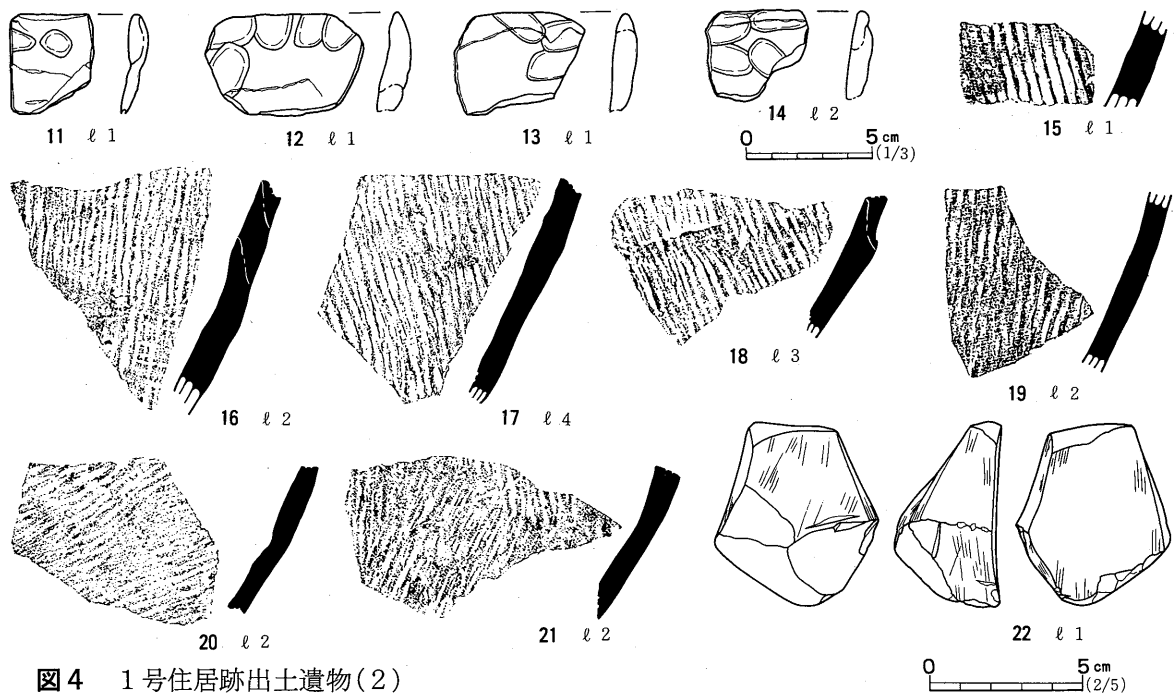


図4 1号住居跡出土遺物(2)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図5, 写真8)

本遺構は、調査区中段部P 9・10, Q 9・10グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面はLⅢ上面である。重複関係は24号土坑よりも古い。住居跡内堆積土は全体的に凝灰岩細粒を混入する1層からなる。なお、遺存状態が悪く自然堆積か否かは判断することができない。

平面形は不整の長方形を呈している。規模は、北壁が約2.6m, 南壁2.6m, 東壁1.2m, 西壁1.6mを測る。本住居跡の軸線方位は、南北方向の壁を基準として東へ12°傾いている。周壁は削平が著しく10.0cm前後と極めて遺存状況が悪い。床面はLⅢを直接使用しており、概ね平坦に構築されている。ピットはカマド右袖付近と南東コーナーで各1基ずつ検出された。ピット1は長径約90.0cm, 短径65.0cm, 床面からの深さは10.0cmを測る。ピット2は径17.0cm, 深さ23.0cmを測る。

カマドは北壁に位置し、規模は長軸方向で約1.5mを測り、煙道の長さは約60.0cmを測る。袖は右袖部の基底面が、長さ25.0cm, 幅17.0cmで確認された。なお、カマド燃焼部付近は袖と想定される部分より大きく広がる焼土化した範囲が確認される。

遺 物

本住居跡からは、土師器片6点が出土している。いずれも細片であることから図示はしていない。

ま と め

本住居跡は、調査区内でも小型の住居跡であり、遺存状態も極めて悪いものであったが、南東コーナーからやや大型の楕円形のピットが検出された。これは、その遺構の規模とその在り方から貯蔵穴状ピットととらえている。遺構の年代は、出土遺物と周辺の遺構の在り方から9世紀前半まで下るものではないと考えている。

(佐々木)

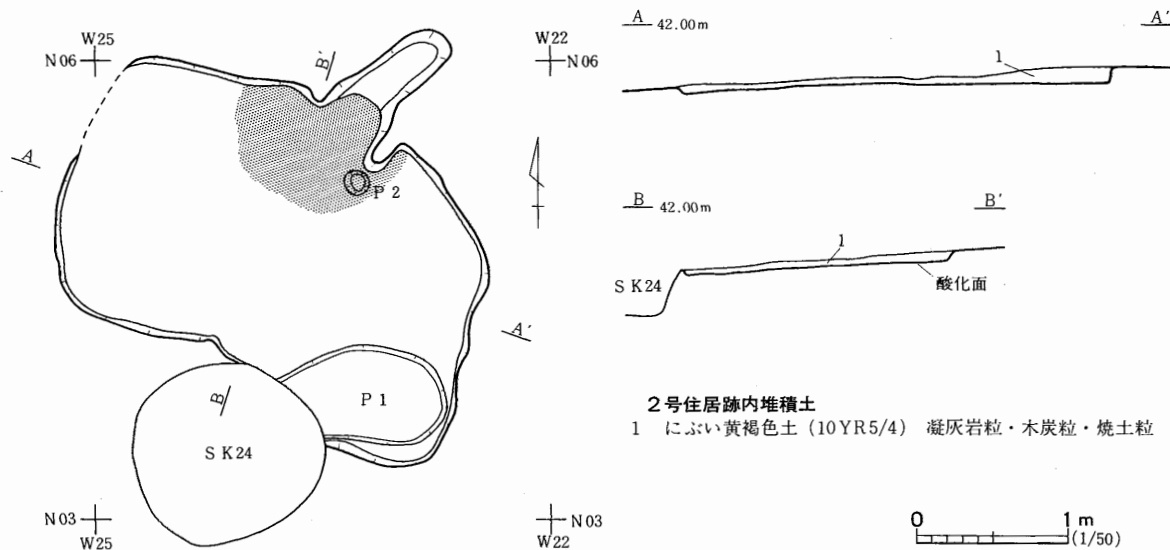


図5 2号住居跡

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図6, 写真9)

本遺構は調査区中段のP9グリッドから検出された竪穴住居跡である。後世に削平されていることと検出段階での不手際から幾分上部を削平してしまい検出面は中段部西端部に認められた僅かにくぼむ沢地形の黒色土を除去した後のLⅢからとなる。4号住居跡, 25・26号土坑と重複関係があり, 25・26号土坑に東壁およびカマドが破壊されていることから本住居跡が古く, また4号住居跡の覆土内に構築されていることから本遺構のほうが新しいと判断した。

本遺構の上半部は後世の削平により大きく破壊されているため, 西壁は確認できなかった。住居跡内堆積土は2層に分層したが自然堆積か人為堆積かは不明である。遺存する部分での本住居跡の平面形は, N-18°-Eに傾き南北にやや長い長方形を呈する。重複する4号住居跡とほぼ方向を同じくする。規模は, 推定値で南北2.97m, 東西2.18m, 検出面からの深さは12cmを測る。床面は26

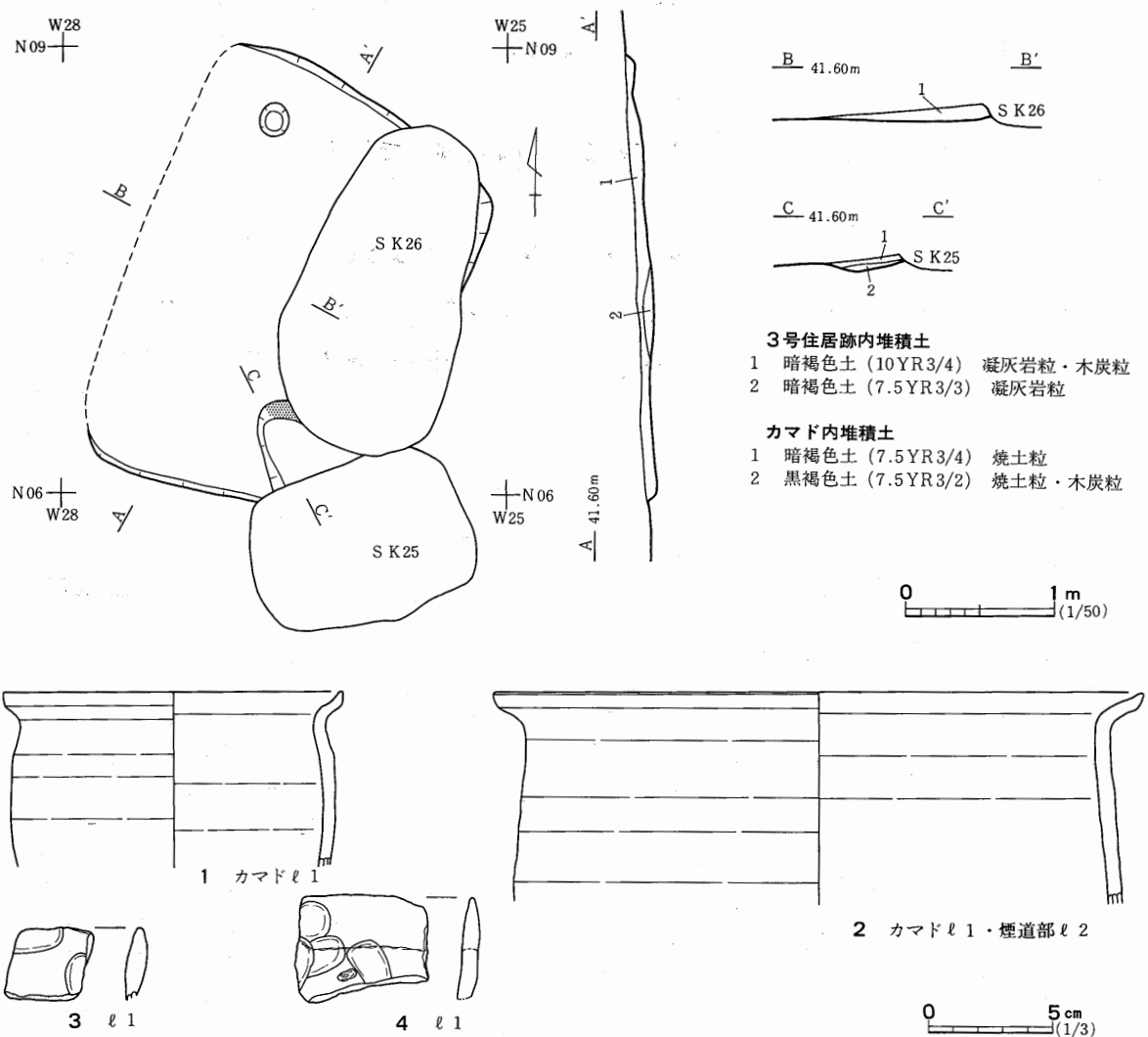


図6 3号住居跡・出土遺物

号土坑に切られており全体を確認できなかったが、北側で若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。貼床・壁溝・内部施設は確認できなかった。カマドは住居跡の南東コーナーで検出された。25・26号土坑に破壊され遺存状況は極めて悪くカマドの燃焼面がわずかに確認される程度であり、煙道部や左右の袖等カマドに関連する施設は認めることができなかった。

遺物 (図6, 写真21)

本住居跡から須恵器片1点, 土師器片112点, 炉壁2点が出土している。いずれも細片であることから中でも本住居跡に伴うと考えられ図示でき得る4点を示した。図6-1・2はカマド \varnothing 1から出土したロクロ成形の土師器甕であり, 法量は1が推定口径13.8cm, 残存高7.1cmであり, 2が推定口径26.4cm, 残存高8.6cmである。3・4は \varnothing 1出土の筒形土器の破片であり, 口縁部に指頭痕, 粘土紐積み上げ痕が明瞭に認められる。

まとめ

本住居跡は, 遺存状況が悪く, わずかにカマドの痕跡が分かる程度で内部施設は確認できなかった。所属年代は重複関係と出土遺物から9世紀後半と考えている。 (福田)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図7, 写真10)

本遺構は調査区中段のP 8・9, Q 8・9グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面はL IIIである。本住居跡は3号住居跡, 25・26号土坑と重複関係にあり, いずれのものよりも古い。

遺構の平面形は, 後世の削平により, 西壁と南壁は確認できなかったが, 遺存状況から方形を呈していたものと考えられる。規模は, 推定で南北4.90m, 東西3.84mを測る。床面は幾分凹凸が認められるもののほぼ平坦に造成されている。なお, 3号住居跡と一部床面を共有していた部分は若干窪みが認められる。周壁は北壁と東壁がかろうじて残っており, 床面との比高差は北壁で80cm, 東壁で30cmである。住居跡内堆積土は, 床面上にはほとんど残っておらず約10~14cmほど認められただけである。しかし, 北壁側から床面際付近までは6層が認められ, 壁が崩落した様相を呈している堆積状況と判断した。ピットは北西コーナーで1基検出された。このピットは, 本住居跡の西側に一部露呈している凝灰岩岩盤の一部を利用して構築されており, 長径90cm, 短径70cm, 深さ28cmの規模を持つ楕円形を呈している。なお, このピットからは遺物の出土はなく性格は明確でないものの貯蔵穴状ピットと考えている。そのほか支柱穴となるピットは検出されなかった。カマドは南東コーナーに位置し, 燃焼面は3号住居跡, 25・26号土坑に壊され, 左袖の一部が残るだけで遺存状況は極めて悪い。煙道部の遺存状況は比較的良好, 長さは115cm, 最大幅43cm, 深さ18cmを測る。堆積状況から自然堆積と判断した。

遺物 (図8, 写真21)

本住居跡から須恵器片6点, 土師器片197点が出土している。破片のものが多く, 図示し得たのは図8-1~4であり, 5は筒形土器の破片である。1は \varnothing 1・2から出土した土師器の杯であり,

80%が遺存している。口径14.1cm, 底径5.1cm, 器高5.1cmである。外面調整は底部回転糸切りの後に手持ちケズリであり, 内面調整は底部を放射状のミガキ, 体部から口縁部は横方向のミガキが施された後, 黒色処理されている。2はØ1から出土したロクロ成形の土師器杯であり, 口縁部の1/4が遺存している。推定口径は12.8cm, 残存高3.6cmである。内面はミガキの後, 黒色処理がなされている。3はカマドから出土したロクロ成形の土師器甕である。復元口径28.5cm, 残存高14.3cmである。4は住居跡北東隅のØ2から出土した筒形土器である。口縁部の3/4が遺存している。推定口径8.4cm, 残存高6.3cmである。器面には指頭痕や粘土紐積み上げ痕が明瞭に観察できる。

まとめ

本住居跡は重複関係から3号住居跡よりも古く, 南東コーナーにカマドを有する竪穴住居跡である。後世の削平, 切り合い等から遺存状態が悪く, 周壁およびカマドの全容は明らかではない。所属年代は出土遺物から9世紀後半に機能したものと考えており, 重複関係にある3号住居跡とさほど時期差がないことが窺われる。また, 1・3・5号住居跡と同様に筒形土器が出土しており, これは製塩土器の可能性がある。(福田)

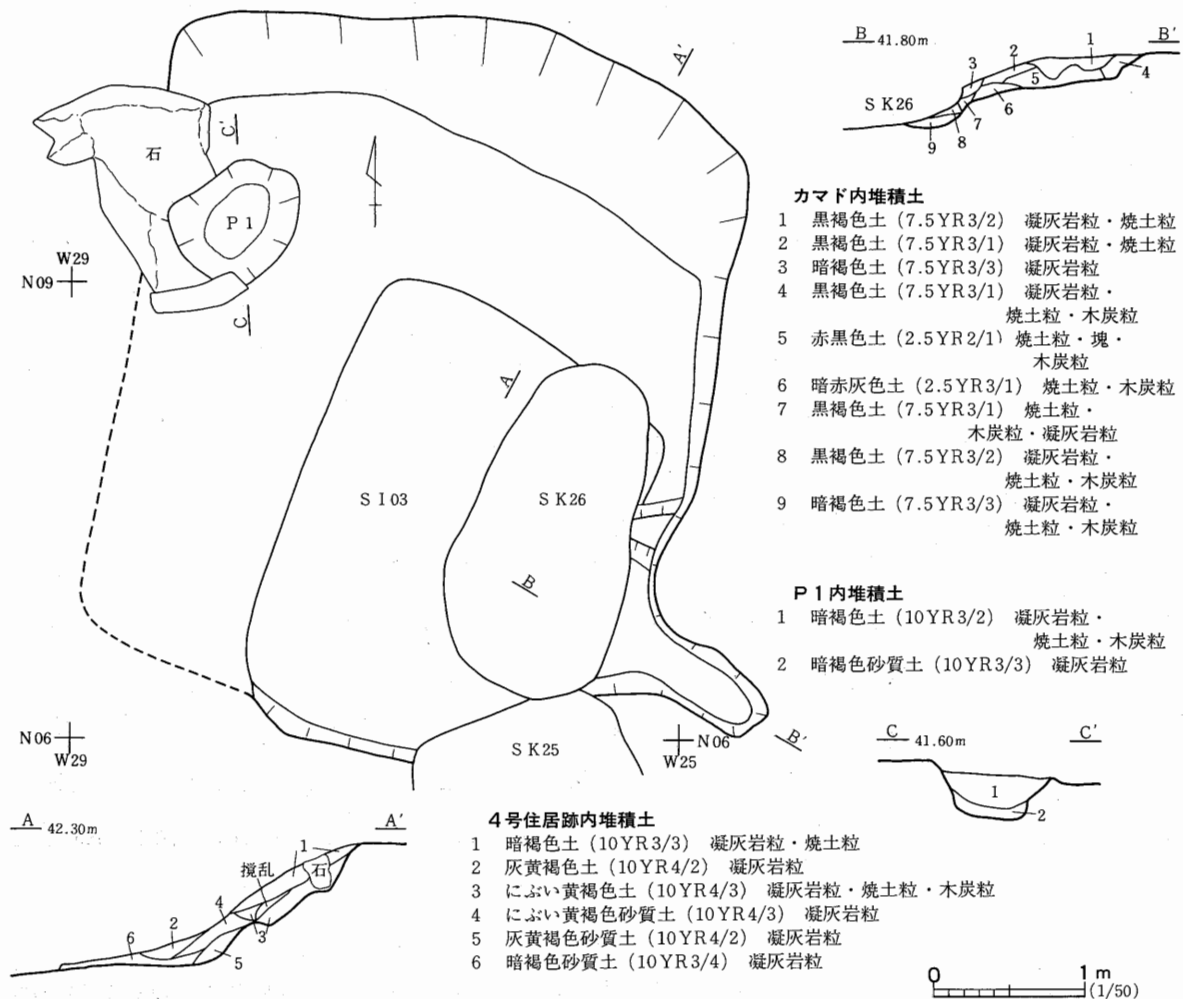


図7 4号住居跡

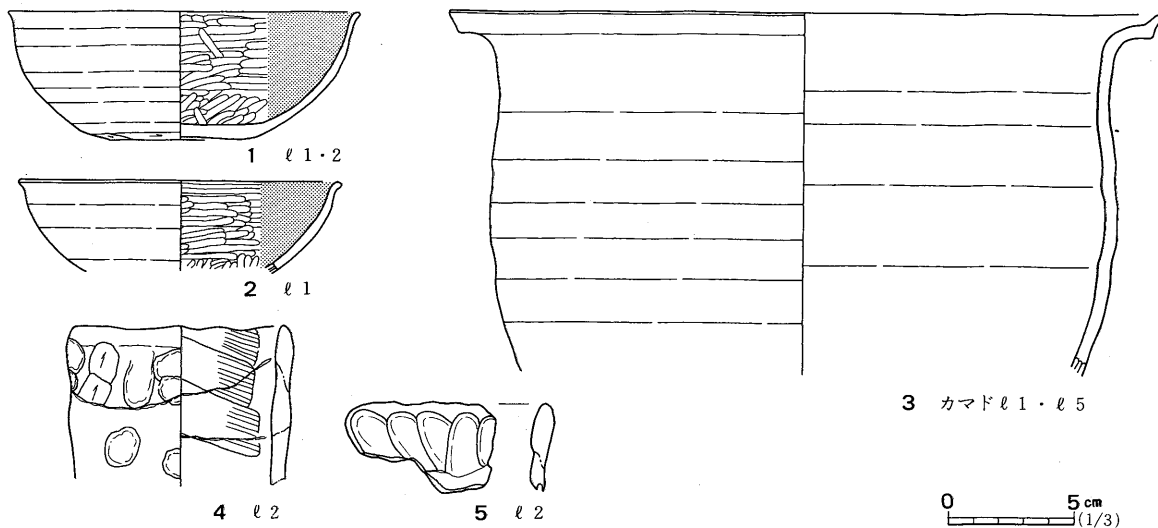


図8 4号住居跡出土遺物

5号住居跡 S I 05

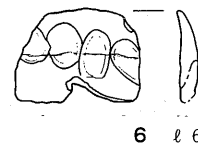
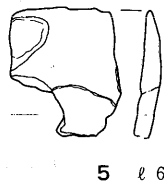
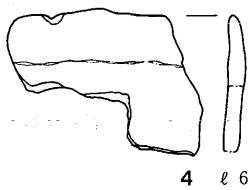
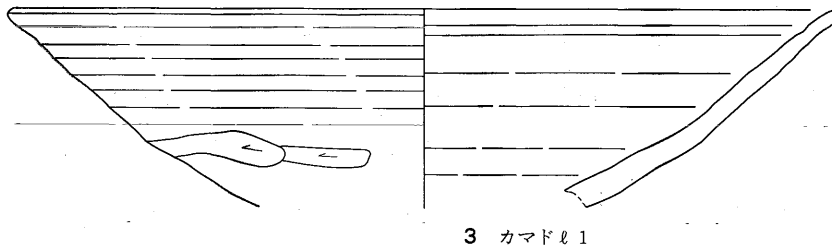
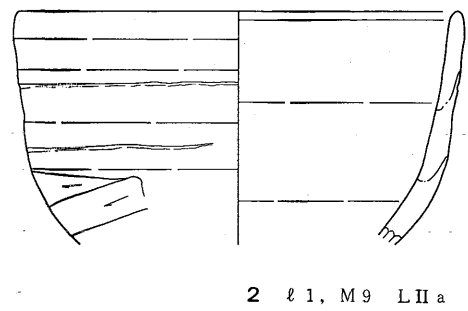
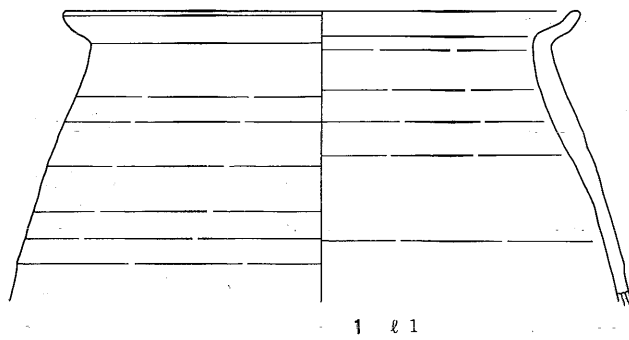
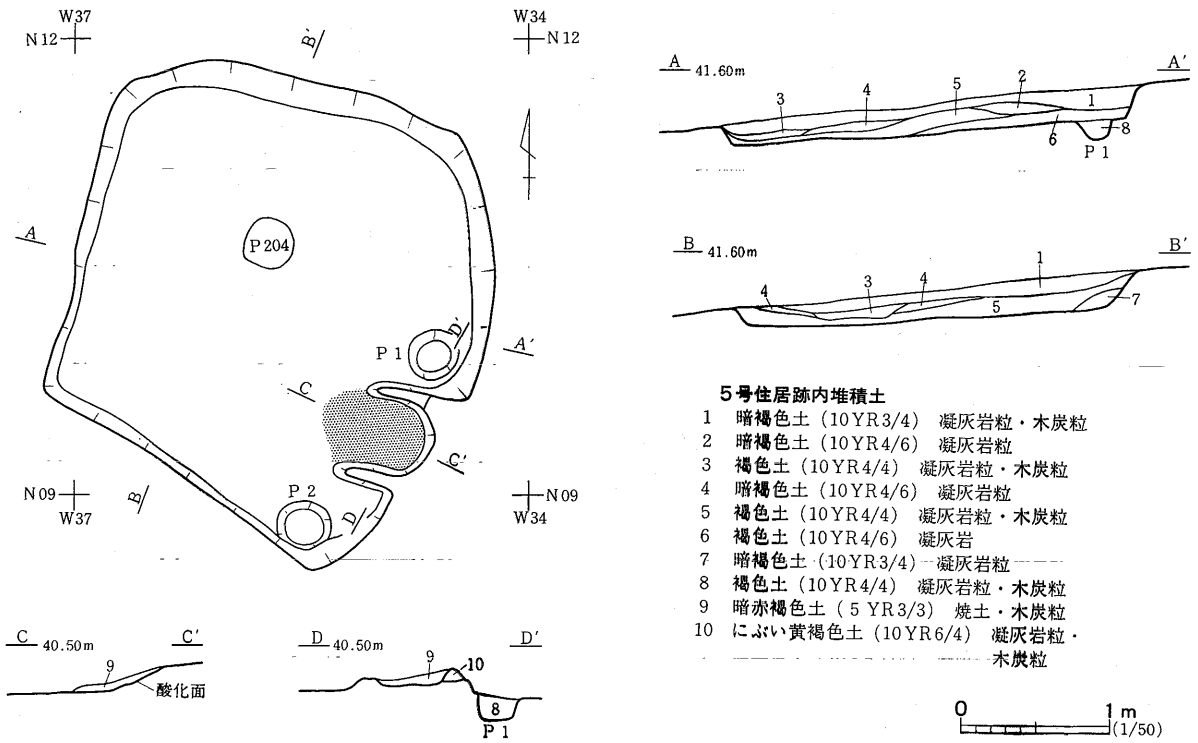
遺 構 (図9, 写真11)

本遺構は、調査区下段部のN8・9, O8グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面は、LⅢ上面である。ピット204と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。本住居跡の上位部には3・4号住居跡と25・26号土坑が位置している。

住居跡内堆積土は7層に分層することができる。全体的に凝灰岩粒を多量に混入し、概ね北側の斜面高位部からの流れ込みを窺わせることから、自然堆積によるものと判断しているが、中層部にあたるl 2～4は部分的に認められる層位については、その堆積状況と多量の木炭粒を混入していることから投棄された堆積土の可能性が高いと考えている。なお、l 7は壁の崩落に伴う初期堆積に普遍的に見られる三角形の堆積土であり、l 8としたものはカマド脇から検出されたピット1の堆積土である。

平面形は、北壁の両コーナー部がやや丸みを帯びるやや不整の正方形を呈している。規模は東壁が3m、西壁2.15m、南壁2.15m、北壁2.55mを測る。本住居跡の軸線方位は、南北方向の壁の midpointを基準として計測すると東へ12°傾いている。周壁の残存高は、東壁が23cm、西壁13cm、南壁12cm、北壁が25cmを測り、幾分保存状態は良好である。床面は住居自体が斜面部に構築されていることから西側に傾斜している。カマドは東壁中央から、やや南側寄りに設けられている。両袖は地山の削り出しにより構築されたものである。燃焼部は、被熱のため幾分硬化しているが、酸化による焼土面は薄く形成されているに止まっていることから、長期間にわたり使用された状況ではないと判断した。規模は焚口幅50cm、燃焼部奥行70cmを測る。残存する袖は、左袖が長さ48cm、幅13cm、右袖が51cm、幅15cmを測る。なお、煙道は削平されたためか確認されなかった。

ピットは東壁のカマドの両側に検出された。ピット1は径37cm、深さ19.4cmを測る。ピット2は



0 5 cm (1/3)

図9 5号住居跡・出土遺物

径37cm、深さ12cmを測る。これらのピットは規模的には柱穴となりうる可能性はあるが、位置的在り方から柱穴とは明確に判断し難い。

遺物 (図9, 写真22)

本住居跡から出土した遺物は、土師器片76点、須恵器片1点である。その内図9に図示可能な遺物を掲載した。1はⅡ1出土のロクロ成形の土師器甕であり、復元作図の結果、口径20.6cm、遺存高11.5cmを測る。形状は体部が膨らみ、口縁部が強く外方へ開き、短部が短く立ち上がる。2はロクロ成形の椀である。復元作図の結果口径17.5cm、遺存高9.2cmを測る。調整は体部上半部に部分的にヨコナデ、体部下半にケズリが認められる。内面調整は磨滅が著しく判然としない。3はカマド内から出土した土師器鉢の破片である。部分的な図示はしていないが、口縁部を欠いて片口鉢として使用されたものと考えている。復元作図の結果、口径33cm、遺存高7.8cmを測り、強く傾く形状を呈するものと考えられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈している。調整は体部下半にケズリが認められる。4～6はⅡ6出土の筒形土器の破片である。細片である故に敢て法量は求めなかったが、器面調整は指頭痕が認められる。

まとめ

本住居跡は、検出当初住居跡とは認識していなかったが、調査途中でのカマドの発見により住居跡として判断したものである。特徴としては、やや斜度のきつい部分に構築されているためか、床面が傾斜し、住居内施設はカマドのみが設けられている。なお、そのほかの施設は認められなかった。また、柱穴はカマド脇に2個検出され、住居の構造上この2本の柱が主柱穴的な役割を担っていたものと考えているが、カマドの使用状況などの検討から長期間使用された住居とは考えにくく、上屋構造自体は簡易的なものが使用されていたと推察される。遺構の年代は、出土遺物から10世紀初頭頃と考えている。

(佐々木)

第3節 掘立柱建物跡

1号建物跡 SB01 (図10, 写真12)

本遺構は調査区下段のI9・10、J9・10グリッドに位置する。本建物跡は桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡であり、南西側に29・30・32号土坑が近接している。ほかの遺構との重複はない。本遺構はLⅢで検出されたピットのうち、建物を構成するものを調査終了後に認定した。

本建物跡の中心線はN-40°-Wの傾きを指す。規模は、桁行は北側柱列で3.72m、南側柱列で3.35mであり、梁行は東側柱列で3.63m、西側柱列で3.40mを測り、ややゆがんだ形状を示す。また、柱間寸法は144～219cmと不均一である。柱穴の平面形は15～34cmの円形を呈し、深さは15～50cmを測る。柱の太さはP2・5を除く柱痕跡から9～12cmと推察できる。本建物跡からは出土遺物がなく、近接する土坑の年代も明確でないため本建物跡の年代・性格は不明である。

(福田)

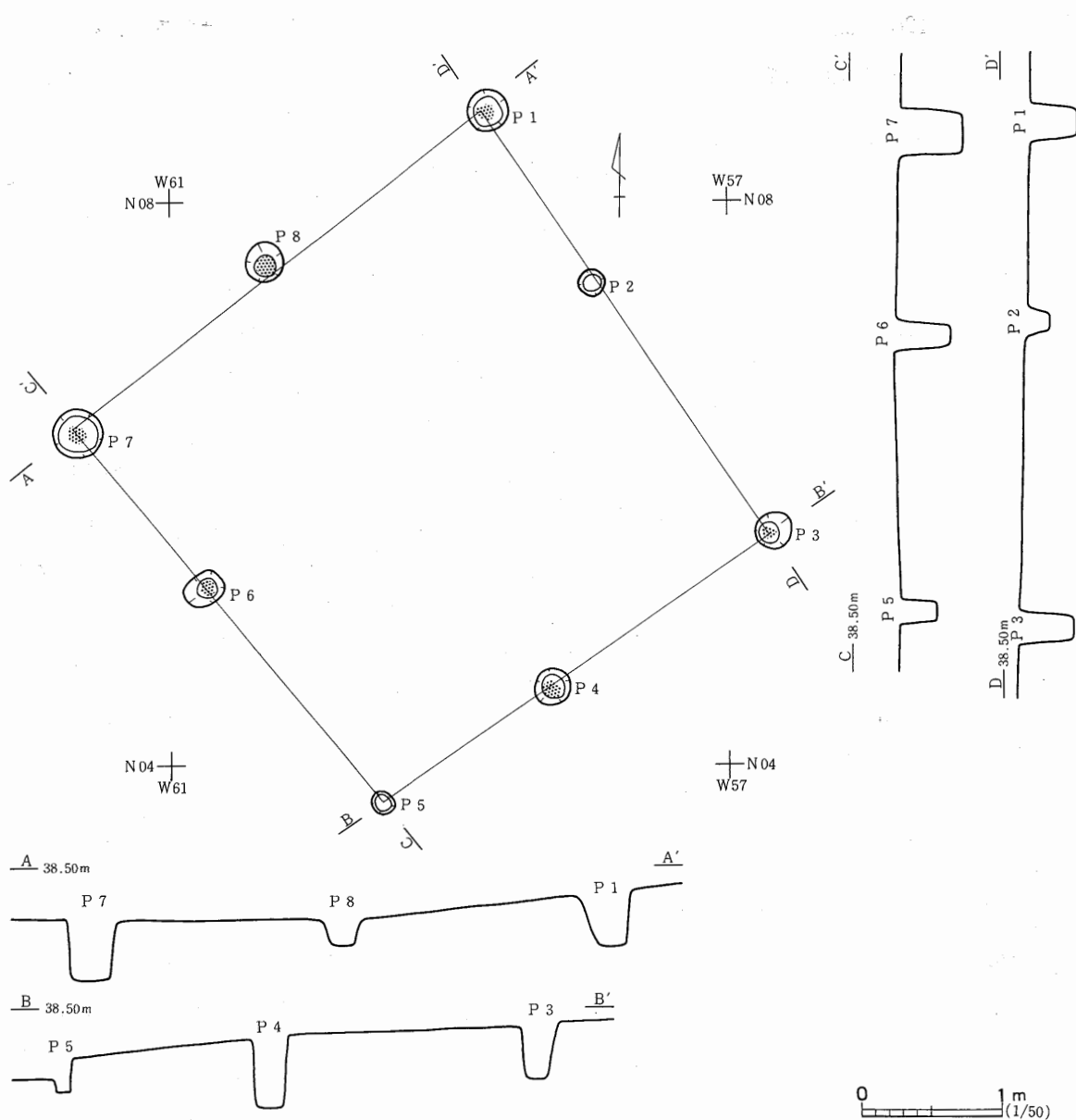


図10 1号建物跡

第4節 土 坑

1号土坑 SK01 (図11, 写真13)

本土坑は調査区中段東側V13グリッドに位置している。遺構検出面はLⅢであり、土坑の平面形は長径1.41m、短径1.05m、深さ55cmを測る楕円形である。ピット228・229と重複しており、本土坑のほうが新しい。土坑内堆積土は2層に分層され、堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。底面西側は緩やかに傾斜し、断面形は逆台形を呈する。遺物は01から須恵器片1点が出土しているが、小破片のため図示できなかった。本土坑は検出面から平安時代と考えているが、遺物が

貧弱なため所属年代、性格などは推察できない。

(福田)

2号土坑 SK02 (図11, 写真13)

本土坑は調査区中段の東端W12・13グリッドに位置し、南東1.5mに3号土坑が近接する。本土坑はLⅢで検出し、規模は長径1.35m、短径0.99m、深さ35cmを測る楕円形である。土坑内堆積土は6層に分層できた。④・⑤・⑥は堆積状況から人為堆積であり、①・②・③は自然堆積と判断した。底面は平坦であり、壁は南側で垂直になるほかは緩やかに立ち上がる断面形を呈している。本土坑から遺物は出土していないので所属年代および性格は不明である。

(福田)

3号土坑 SK03 (図11, 写真13)

本土坑は調査区中段の東端にあたるW13グリッドに位置している。北西に2号土坑、南に5号溝跡が近接している。遺構検出面はLⅢである。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は締まりの強い凝灰岩細粒と炭化物粒を混入する暗褐色土の単層である。

平面形は幾分不整楕円形を呈し、規模は長径1.2m、短径1.03m、深さ23cmを測る。底面は凝灰岩岩盤が露出しており、底面から壁にかけての断面形は皿状を呈する。本土坑からは遺物が出土していないことから所属年代・機能を判断することができない。

(福田)

4号土坑 SK04 (図11, 写真13)

本土坑は調査区中段のU11・12グリッドに位置している。南西側約1mに8号土坑が近接している。遺構検出面はLⅢである。ピット206と重複しており、本土坑のほうが新しい。土坑内堆積土は5層からなり、堆積土内に10～40cmの凝灰岩塊が多量に含まれるため人為堆積と判断できる。

平面形は不整長楕円形を呈し、長径2.55m、短径1.05m、深さ46cmの規模を測る。底面は北側に段があり、緩やかに傾斜して底面に至る。本土坑の②から近世の天目茶碗とみられる陶器片1点、土師器片5点出土したが、小破片であり図示できなかった。本土坑の年代は近世初頭と考えられる。また、本土坑の機能は不明であるが、ピット群に囲まれた空白地に構築されているためピット群に関連した土坑の可能性がある。

(福田)

5号土坑 SK05 (図11, 写真14)

本土坑は調査区中段のV11グリッドに位置し、LⅡaで検出した。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は2層に分層でき、特に①は礫が混入する人為堆積と判断され、②は遺構検出面と極めて近い土色を呈していることから自然流入と判断した。

平面形は小規模の長楕円形であり長径0.82m、短径0.35m、深さ17cmを測る。底面は丸底で、断面形は皿状を呈している。本土坑から遺物は出土していないため所属年代・機能について推察することができない。

(福田)

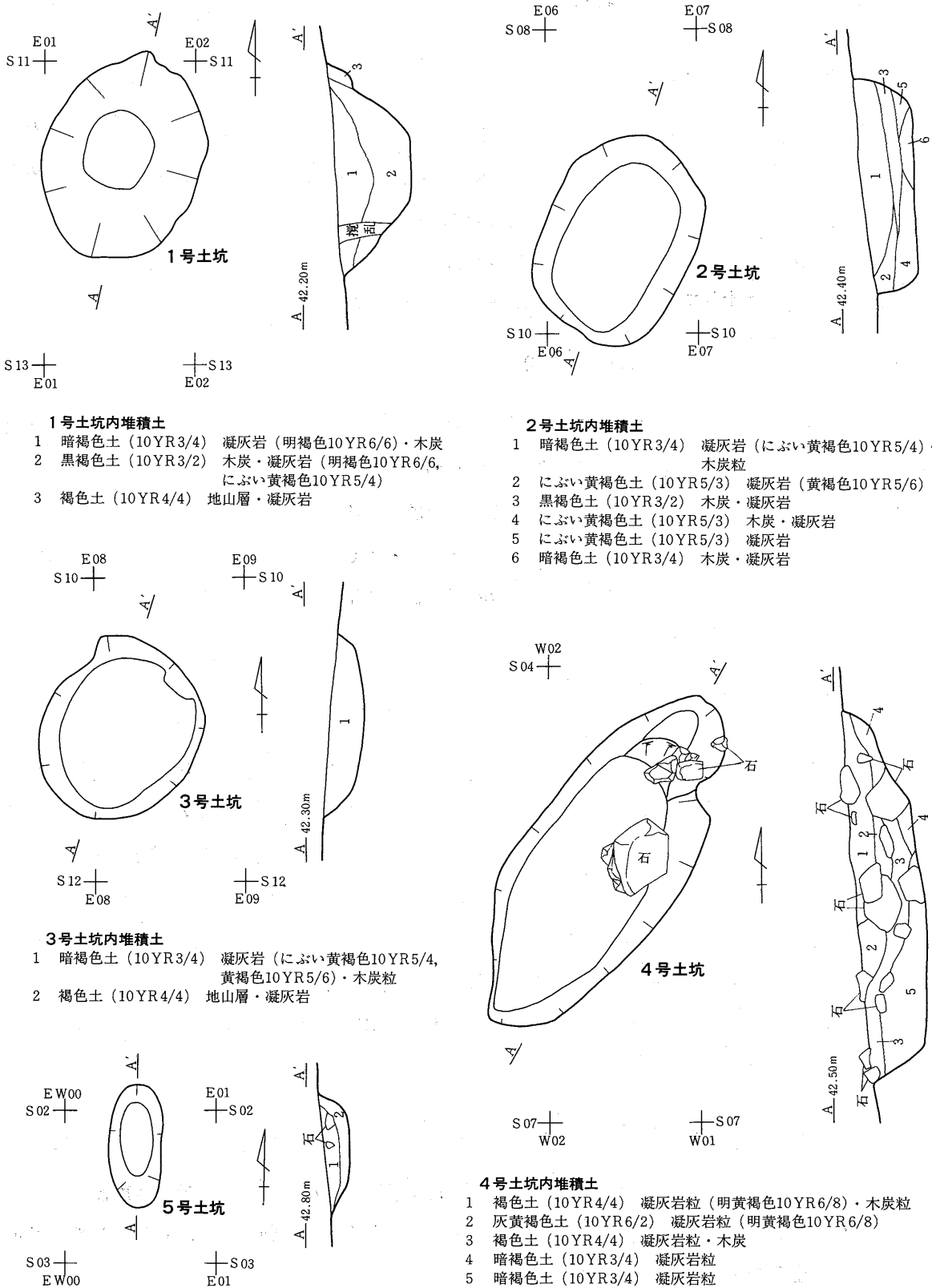


図11 1～5号土坑



6号土坑 SK06 (図12, 写真14)

本遺構は調査区中段の東端のW13・14, X13・14グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLⅢであり、ほかの遺構との重複はない。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は、長辺3.8m, 短辺2.3m, 検出面からの深さ42cmを測り、南北中心線はN-3°-Sを指す。土坑内堆積土は4層に分層され、堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。底面は平坦に構築されており、壁は急峻に立ち上がる。本土坑は遺物が出土していないため明確な所属年代は不明であるが、形状から中世期の方形竪穴状遺構と考えている。(福田)

7号土坑 SK07 (図12・18, 写真23)

本遺構は調査区中段のU13グリッドに位置する土坑である。遺構検出面はLⅢ上面である。ピット224・225・226・227と重複関係を有しており、本遺構の方が古い。遺構の平面形は長方形を呈し、規模は長辺2.0m, 短辺1.2m, 検出面からの深さ20cmを測る。南北中心線はN-60°-Wを指す。土坑内堆積土は7層からなり、そのうち①3～7は状況とその性状から自然堆積と判断したが、①1・2は堆積状況とその性状から人為的な堆積土であると考えている。底面は平坦であり、壁は急峻に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。

本土坑から出土遺物は須恵器片1点、かわらけ片15点、陶器片2点あるが、破片が多く図示できたのは図18-1～3である。1は①4出土のロクロ成形のかわらけの底部であり、推定口径8.8cm, 底面径5.2cm, 器高2.1cmである。底部切り離しは回転糸切りである。2は①3出土の耳皿である。耳の部分を欠いている。推定口径7.4cm, 底面径は4.0cm, 器高は1.8cmであり、整形はロクロナデで、底部切り離しは摩滅が著しく不明である。3は①3から出土した香炉である。口縁部の半分の遺存であり、推定口径9.2cm, 残存高2.3cmを測る。

本土坑の遺物は堆積土中から出土しており、所属年代は明確ではないが、近世と考えており、その性格は周辺に位置するピット群に関連する土坑と推定している。(福田)

8号土坑 SK08 (図12, 写真14)

本土坑は調査区中段のU12グリッドに位置し、北東1mに4号土坑が近接している。LⅢで検出され、長径0.79m, 短径0.60m, 深さ65cmの規模を持つ楕円形の土坑である。東側の一部が攪乱により破壊されている。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は3層に分層された。堆積状況とその性状から自然堆積土と判断している。底面は平坦であり、壁の東半分は傾斜が緩くなっている。断面形は逆台形を呈する。本土坑の①1からロクロ土師器片が1点出土しているが、小破片のため図示できなかった。本土坑の年代は出土遺物から9世紀代と考えているがその機能は不明である。しかしながら4号土坑同様にピット群Bに囲まれた空間に存在することから、ピット群に関連する遺構の可能性も窺われる。(福田)

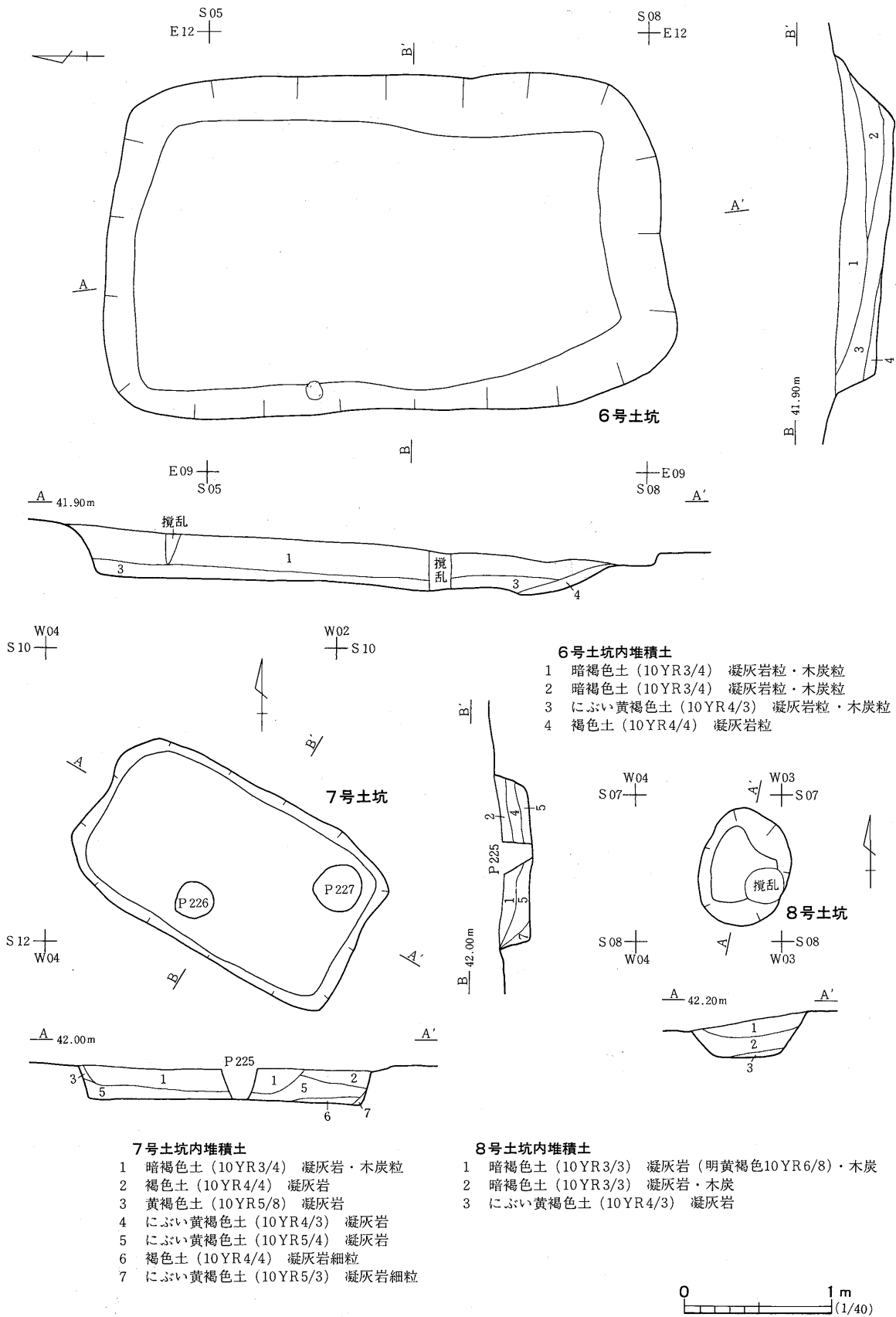


図12 6～8号土坑

9号土坑 SK09 (図13, 写真14)

本遺構は、調査区中段の東端W11グリッドに位置する。20号土坑とピット217と重複している。いずれよりも本土坑のほうが古い。平面形はLⅢで検出し、規模は長径0.87m, 短径0.67m, 深さ25cmを測る楕円形を呈する。土坑内堆積土は5層に分けられ、堆積状況から自然堆積と判断できる。底面は東側でくぼみ、壁は東側で角度が緩くなっている。本土坑は出土遺物がないため所属年代・性格についても推察することができない。(福田)

10号土坑 SK10 (図13)

本遺構は調査区中段の中央S12・T12グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢである。1号溝跡とピット221と重複しており、いずれよりも本土坑のほうが古い。土坑内堆積土は3層にわかれる。堆積状況から自然堆積と判断できる。平面形は残存する部分から判断して楕円形を呈する。規模は遺存する部分で幅0.88m, 深さ22cmを測る。底面は北側で緩やかな段があり、南側に向かって深くなる。本土坑から遺物は出土していないため所属時期および性格は不明である。(福田)

11号土坑 SK11 (図13, 写真15)

本遺構は調査区中段のR12・S12グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢである。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.84m, 短径0.67m, 深さ15cmを測る。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は3層にわかれ、堆積状況から自然堆積と考えられる。底面は平坦であり、壁は急峻に立ち上がる。本土坑から遺物は出土していないため所属年代・性格を推察できない。(福田)

12号土坑 SK12 (図13, 写真15)

本土坑は、調査区北東部の上段中央V8・9グリッドで検出した大型の土坑である。検出層位はLⅢである。いくつかのピットが付近にあるが、直接の重複はなく、これらのピットも組み合せて建物にはならなかったため、本土坑と重複している遺構はない。土坑内堆積土は5層に分けることができた。④5以外の各層には凝灰岩細粒が多量に含まれており、とくに④4には大きな塊も含まれている。上層の④3までが黄褐色系の土色だが、下層の④2層はややグライ化している。平面形は長径が2.77m, 短径2.50mの楕円形である。周壁の外傾度は51°で、底面が平坦なため断面形は逆台形をなしている。検出面からの深さは43cmである。

遺物は、堆積土から土師器片2点、施釉陶器片3点である。土師器片は小さいため図化することができなかったが、内面が黒色処理されているので器種は杯か碗だろう。施釉陶器も小破片で実測できなかった。瀬戸・美濃系陶器の灰釉丸皿の破片1点、志野の碗か鉢の破片1点、肥前系陶器の底部破片である。

遺物は堆積土から出土しているため、本土坑の使用期間を特定することは困難である。しかし、

第2編 大久保A遺跡

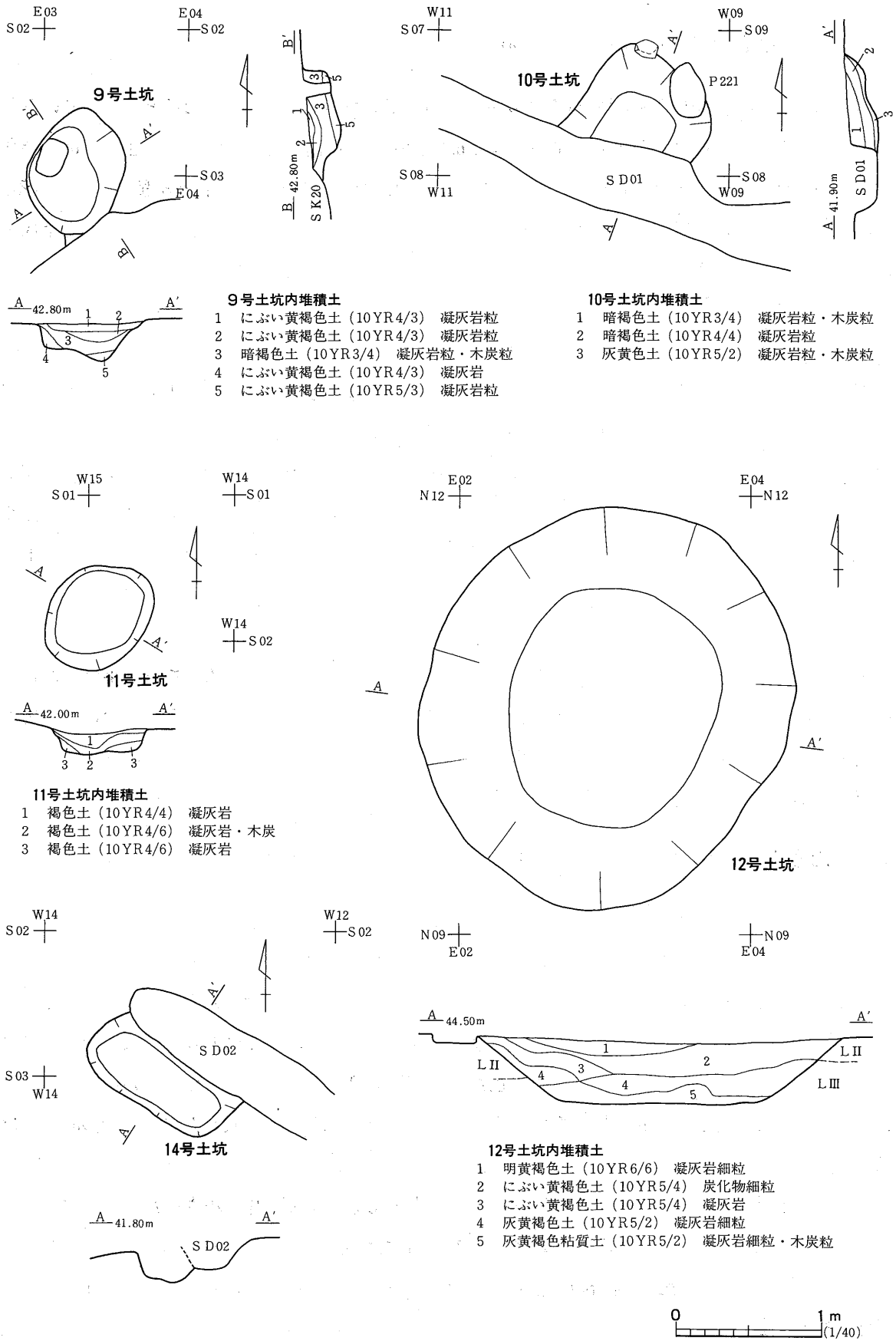


図13 9～12・14号土坑

施釉陶器類が16世紀後葉に限定できるので、土坑が機能した時期もこの時期を遡りえないだろう。機能については、堆積土の下層部分が湧水のためかグライ化していたことから、水に関わる土坑かもしれない。また、底面周縁部に自然堆積に多くみられる断面三角形の初期堆積土がみられないこと、凝灰岩の含有が多いことなどから、埋められて廃棄された可能性がある。(石本)

14号土坑 SK14 (図13, 写真15)

本遺構は調査区中段のR12グリッドに位置し、LⅢで検出した。2号溝跡と重複し、本土坑のほうが古い。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径1.06m、深さ20cmを測る。遺構の堆積状況は調査時に雨天のため流失し、断面図を作成することができなかった。底面は平坦であり、北壁は不明であるが、南壁は急峻に立ち上がる。本土坑から遺物が出土していないため年代は不明である。また、平面形および堆積状況が不明であるので機能等は不明である。(福田)

16号土坑 SK16 (図14)

本遺構は、調査区上段のW8・9グリッドに位置する。平面形はLⅢで検出し、長径1.10m、短径0.84m、深さ11cmの規模を持つ楕円形を呈する。ほかの遺構との重複はなく、土坑内堆積土は凝灰岩粒を含む褐色土の単層である。底面は中央でやや高くなり、東壁際に攪乱があるが、浅い皿状を呈する。本土坑は遺物を出土していないため所属年代・性格等の推察もできない。(福田)

17号土坑 SK17 (図14, 写真15)

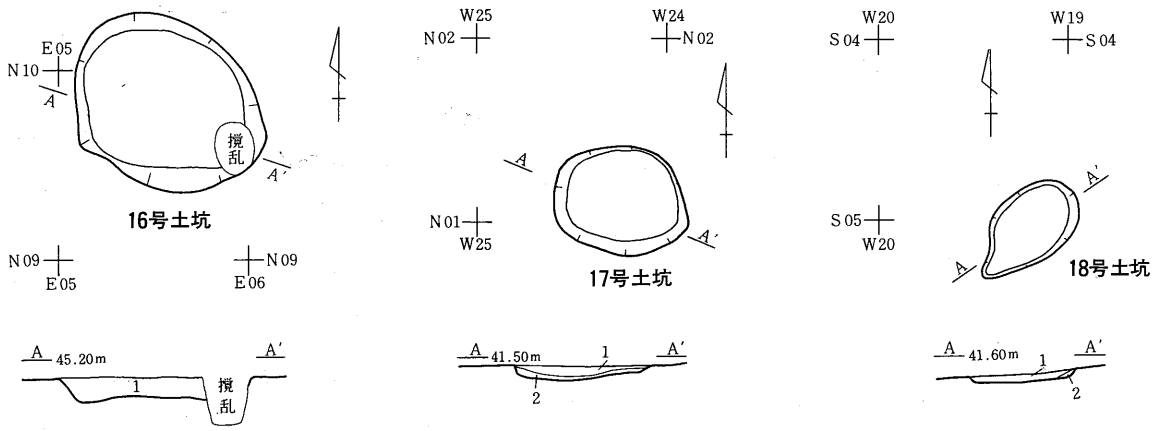
本遺構は調査区中段西側のQ10グリッドに位置する。平面形はLⅢで検出し、長径0.77m、短径0.59m、深さ9cmの規模を測る楕円形の土坑である。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は2層に分層された。堆積状況から自然堆積と判断した。底面はほぼ平坦であり、断面形は皿状を呈する。本土坑の①からロクロ成形の土師器破片が3点出土しているが、小破片のため図示できなかった。本土坑の年代は平安時代の可能性が考えられるが、機能等は不明である。(福田)

18号土坑 SK18 (図14, 写真16)

本遺構は調査区中段のR11・12グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢである。ピット218と重複しており、本土坑のほうが新しい。平面形は不整楕円形を呈し、長径0.65m、短径0.37m、深さ5cmを測る。土坑内堆積土は2層に分かれ、堆積状況から自然堆積と判断した。底面から壁にかけての断面形は皿状を呈する。本土坑から土師器片が4点出土しているが、小破片のため図示できなかった。また、本土坑は検出面から平安時代と考えているが、年代・機能等は不明である。(福田)

19号土坑 SK19 (図14, 写真16)

本遺構は調査区中段のR12グリッドに位置し、1.5m北に、18号土坑が近接する。平面形はLⅢ



16号土坑内堆積土

- 1 褐色土 (7.5 YR3/4) 凝灰岩粒

17号土坑内堆積土

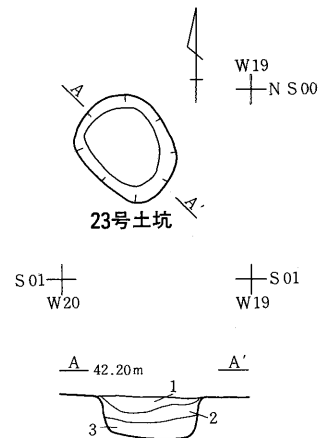
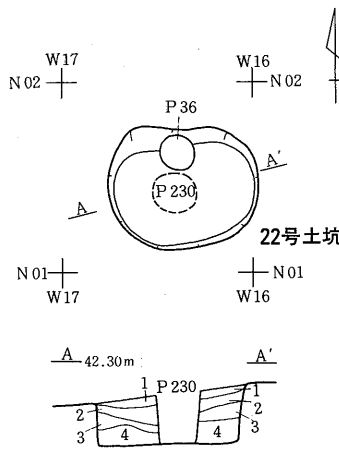
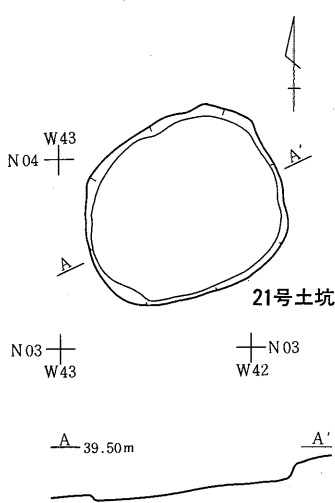
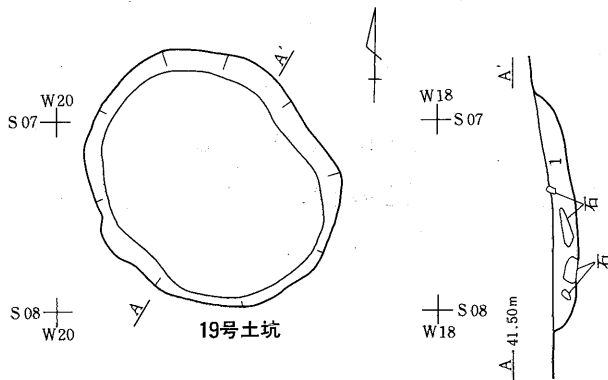
- 1 黒褐色土 (10 YR2/3) 凝灰岩粒・木炭粒
- 2 暗褐色土 (10 YR3/4) 凝灰岩粒・木炭粒

18号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (10 YR2/3) 凝灰岩粒・木炭粒・焼土
- 2 にぶい黄褐色土 (10 YR4/3) 凝灰岩粒

19号土坑内堆積土

- 1 暗褐色土 (10 YR3/4) 凝灰岩粒・木炭粒・石



22号土坑内堆積土

- 1 褐色土 (10 YR4/4) 凝灰岩
- 2 暗褐色土 (10 YR3/4) 凝灰岩・木炭粒
- 3 褐色土 (10 YR4/4) 凝灰岩
- 4 にぶい黄褐色土 (10 YR4/3) 凝灰岩

23号土坑内堆積土

- 1 暗赤褐色土 (5 YR3/3) 凝灰岩・焼土
- 2 にぶい黄褐色土 (10 YR4/3) 凝灰岩粒
- 3 にぶい黄褐色土 (10 YR4/3) 凝灰岩粒



図14 14~19・21~23号土坑

で検出され、規模は長径1.43m、短径1.22m、深さ13cmを測る楕円形を呈する土坑である。ピット219と重複しており、本土坑の方が新しい。土坑内堆積土はしまりの弱い暗褐色土の単層であり、20cm程度の石を多く含むことから人為堆積と判断した。本土坑から陶器片1点、磁器片1点、炉壁2点を出土しているが、小破片のため図示できなかった。出土遺物から本土坑の年代は近世末の可能性はあるが、機能については推察できない。(福田)

20号土坑 SK20 (図15, 写真16)

本遺構は調査区東端のW11・12グリッドに位置する大型の土坑である。当初は堅穴住居跡と判断して精査を開始したが、途中で遺構内施設が検出されないことから検討を加え遺構名称を変更した経緯がある。遺構検出面はLⅢである。9号土坑と重複しており、本土坑のほうが新しい。平面形は不整円形を呈し、長径3.60m、短径3.12m、深さは65cmを測る大型の土坑である。底面は直径2mの平坦な不整円形を呈する。また、北壁と東壁に張出を確認した。北壁の張出は検出面から垂直ぎみに落ち、土坑の中心に向かって緩やかに傾斜する段を作り底面にいたる。東壁の張出は北壁同様検出面から急峻に落ち、平坦な面になり底面にいたる。土坑内堆積土は6層からなり、堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺物は須恵器片が1点出土しているが、細片のため図示できなかった。本土坑の出土遺物からは明確な年代は判断できなかったが、湧水が著しく多い部分に構築されていることから12号土坑同様水に関わる施設の可能性が考えられる。(福田)

21号土坑 SK21 (図14)

本遺構は調査区下段のM10グリッドに位置している。遺構検出面はLⅢである。平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.08m、短径0.92m、深さ8cmを測る。ほかの遺構との重複はない。土坑内堆積土は雨天のため流失し断面図を作成することができなかった。底面が平坦であり、断面形は皿状を呈する。本土坑から遺物は出土していないため、所属時期は不明である。また、遺構の遺存状況が悪く性格についても推察できない。(福田)

22号土坑 SK22 (図14・18, 写真16・23)

本遺構は調査区中段のR10グリッドに位置する。ピット36・230との間にあり、本土坑の方が古い。平面形はLⅢで検出し、長径0.78m、短径0.63m、深さ30cmの規模を持つ楕円形を呈する土坑である。土坑内堆積土は4層に分層でき、自然堆積と判断した。本土坑から土師器片80点、須恵器片16点が出土しており、図18—4～6に示した。4は須恵器甕であり、口縁部から体部上半のみの遺存である。推定口径15.3cm、残存高11.3cmであり、調整は内外面ともロクロナデである。5は土師器甕で、体部を欠き接合しないが同一個体と判断した。復元口径21.8cmである。6は土師器甕であり、体部下半から底部までの遺存である。推定底径12.0cm、残存高14.7cmである。本土坑は出土遺物から平安時代中頃に機能したものと考えているが、性格については不明である。(福田)

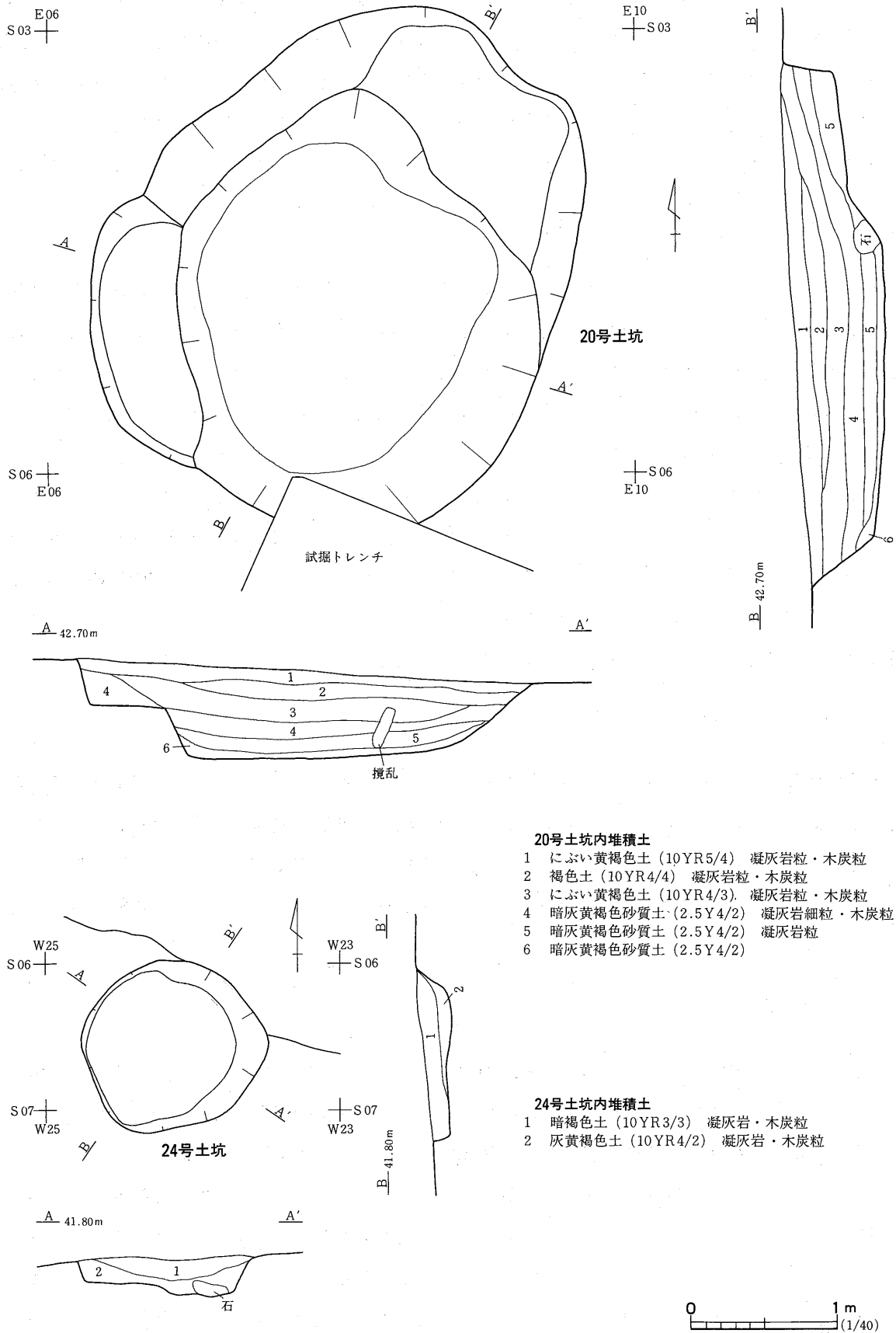


図15 20・24号土坑

23号土坑 SK23 (図14, 写真17)

本遺構は調査区中段のR11グリッドに位置する。南東50cmには4号溝跡が位置している。平面形はLⅢで検出し、規模は長径0.56m、短径0.46m、深さ23cmを測る楕円形を呈する土坑である。土坑内堆積土は3層に分けられる。堆積状況から①は人為堆積で、②・③は自然堆積と判断した。本土坑から遺物は出土していないので所属時期は不明である。また①にのみ焼土が含まれることから、自然に埋没した後に①で埋め戻したと判断した。しかし性格等は推察できない。(福田)

24号土坑 SK24 (図15, 写真17)

本遺構は調査区中段のQ10グリッドから検出された土坑である。重複関係は2号住居跡との間にあり、本土坑の方が新しい。検出面はLⅢである。平面形は円形を呈し、規模は径1.2m、検出面からの深さは26cmを測る。土坑内堆積土は2層に分けられ、堆積状況およびその性状から自然堆積と判断した。底面は東側で低くなり、壁は急峻に立ち上がり、箱形を呈する。本土坑から土師器片31点、須恵器片1点が出土しているが、摩滅の著しい小破片のため図示できなかった。本土坑に伴う遺物はなく年代、性格は明確でないが、9世紀後半に機能したものと推察できる。(福田)

25号土坑 SK25 (図16・18・19, 写真17・23・24)

本遺構は調査区中段のP9グリッドで検出された土坑である。3・4号住居跡と、26号土坑と重複しており、いずれのものよりも本土坑のほうが新しい。遺構検出面はLⅢである。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長径1.45m、短径1.15m、深さ38cmを測る。土坑内堆積土は7層に分けられ、堆積状況から人為堆積と判断した。周壁は急な立ち上がりを呈しており、底面は東側に向かって緩やかな傾斜を有している。また、土坑底面の中央には長径82cm、短径65cm、深さ8cmを測る浅い円形のくぼみが認められる。

本土坑から出土した遺物は土師器片783点、須恵器片1点、炉壁片1点である。遺物は④に集中しており、出土状況は土坑中央部の浅いくぼみの付近からまとまって出土している。そのうち図示できたのは、図18・19である。図18—7～16はロクロ成形の土師器杯である。7は口径14.6cm、底径5cm、器高5.3cmである。内面はミガキを施した後黒色処理され、外面は底部回転糸切りで、手持ちケズリ調整である。8は口径15.2cm、底径5cm、器高6cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面は底部回転糸切りで、ケズリ調整を施している。9は口径13.7cm、底径5.4cm、器高4.9cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面は底部回転糸切りで、ケズリ調整を施している。10は体部が直線的に外傾する器形を呈する。口径13.3cm、底径4cm、器高4.8cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面は底部回転糸切りで、ケズリ調整を施している。11は口径15.4cm、底径6.1cm、器高5.7cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面は底部回転糸切りで、ケズリ調整を施している。12は口径13.7cm、底径4.6cm、器高4.6cmであり、内面はミガキの後黒色処理

され、外面は底部切り離し痕は不明であるが、体部下半に手持ちケズリ再調整を施している。13は口径13.2cm、底径4.8cm、器高4.1cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面の調整は器面が荒れていて明瞭でない。14は口径13.7cm、底径4.1cm、器高4.8cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面の調整は器面が荒れていて明瞭でない。15は口径12.4cm、底径5.7cm、器高4.3cmであり、内面は再酸化を受け黒色処理はみられない。16は口径13.0cm、底径4.0cm、器高4.1cmであり、内面はミガキの後黒色処理され、外面の調整は器面が荒れていて明瞭でない。17は土師器の高台付杯の高台部であり、内面は黒色処理されている。底部径は5.7cm、残存高2.8cmである。18は土師器甕であり、口径13.6cm、残存高7.0cmを測る。器面の荒れがひどく調整は明瞭ではない。19は土師器甕であり、口縁部が片口状になる。口径20.0cm、残存高10.0cmを測る。図19—20~36は手握ねの筒形土器であり、粘土積み上げ痕と指頭痕が明瞭に観察される。20は口縁部のみ復元できた。口径は7.8cm、残存高4.6cmである。21は口縁部のみ復元であり、口径は7.0cm、残存高4.8cmを測る。22~24は口縁部の破片であり、22は口径が9.8cm、残存高3.2cm、23は口径10.0cm、残存高3.2cm、24は口径10.4cm、残存高3.9cmを測る。38は須恵器甕の胴部破片であり、外面にタタキ目、内面に当て具痕が見られる。本土坑は、底面にくぼみを持つ土坑であるが、これは本土坑が廃絶された後に、生活道具である土師器などを廃棄するために、掘り直しを行ったものと判断した。調査中に遺構の重複があるのではないかと検討を加えたが、堆積土中に含まれている遺物の在り方や断面などの観察からも重複は認められないことから、一連のものとして判断した。なお、遺構の性格は重複関係にある遺構と周辺に位置する各遺構との在り方から、本区域で単独で機能していたものではないと判断した。これらは本遺構の南東側に位置する1号住居跡からの出土遺物との対比から、機能時期は1号住居跡とそう隔たりはないと考えている。(福田)

26号土坑 SK26 (図16, 写真18)

本遺構は調査区中段のP9グリッドで検出された土坑である。3・4号住居跡と25号土坑と重複しており、住居跡より新しく、25号土坑よりも古い。検出面はLⅢである。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径2.22m、短径1.10m、深さ12cmを測る。土坑内堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積と判断した。本土坑の堆積土中からロクロ成形の土師器片115点が出土しているが、摩滅の著しい小破片のため図示できなかった。本土坑に直接伴う遺物がないため年代・性格は不明であるが、9世紀後半に機能していたものと推察される。(福田)

27号土坑 SK27 (図16, 写真18)

本遺構は調査区下段のK10グリッドで検出された土坑である。遺構検出面はLⅢであり、ほかの遺構との重複はない。検出面はLⅢである。平面形は楕円形を呈し、長径73cm、短径38cm、検出面からの深さは10cmを測る小規模の土坑である。土坑内堆積土は黒褐色土の単層である。本土坑から出土遺物がないため、所属時期、性格は推察できない。(福田)

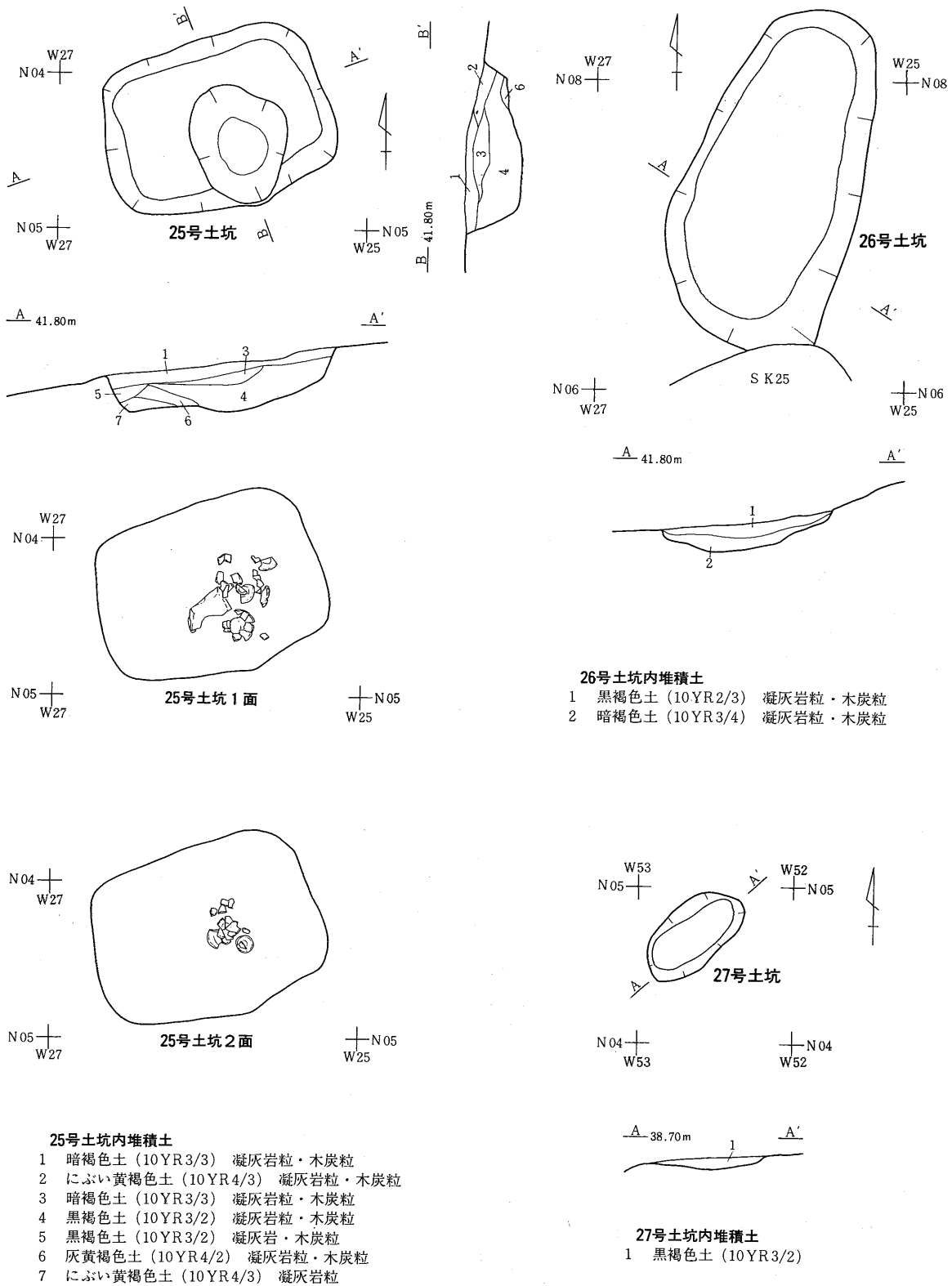


図16 25~27土坑

28号土坑 SK28 (図17・19)

本遺構は調査区中段の西端O・P8グリッドに位置する。東1.5mに4号住居跡、南2mに33号土坑が近接している。遺構の平面形はLⅢで検出し、長径1.57m、短径0.78m、検出面からの深さ35cmを測る楕円形の土坑である。土坑内堆積土は3層に分層でき、堆積状況、およびその性状から自然堆積と判断した。底面は平坦であるが、長さ100cm、幅15cm、深さ5cmの浅い溝状のくぼみが認められる。北側の壁は確認できたが、本遺構の南側は削平されており、壁は確認できなかった。

本遺構から土師器片6点、須恵器片6点出土しているが、すべて小破片であり、器形の分かるものはない。そのうち須恵器2点を図19—37・39に拓影で示した。本遺構の所属時期は、遺物が堆積土中から出土したものであるため明確ではない。性格は、底面の一部が弱く焼けた痕跡があり、 ℓ 3に木炭粒が含まれていることから木炭焼成土坑の可能性が推察される。(福田)

29号土坑 SK29 (図17)

本土坑は調査区下段のI・J10グリッドで検出され、東側には30・32号土坑が近接している。遺構検出面はLⅢで、ほかの遺構との重複はない。平面形は遺構の南側が調査区外のため把握できないが、径65cm、深さ14cmを測る。底面は平坦であり、断面形は皿状を呈している。土坑内堆積土は焼土と炭化物を含む黒褐色の単層である。所属時期および性格については出土遺物がないことから不明である。(福田)

30号土坑 SK30 (図17)

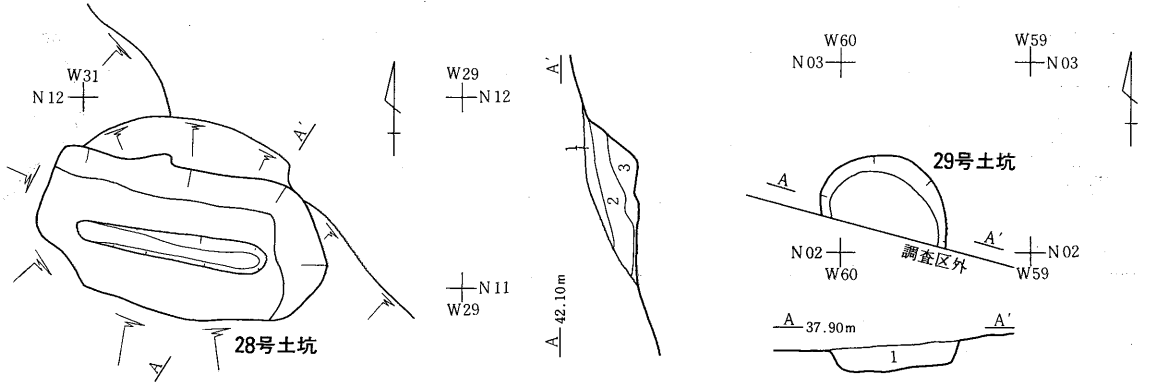
本遺構は調査区下段のI10グリッドに位置し、西側に29・32号土坑が近接している。遺構検出面はLⅢであり、ほかの遺構との重複はない。平面形は方形を呈し、規模は長辺85cm、短辺70cm、深さ10cmを測る。底面は平坦であり、断面形は皿状を呈する。土坑内堆積土は炭化物粒を含む黒褐色土の単層である。本土坑からは遺物が出土していないため所属時期、性格は不明である。(福田)

31号土坑 SK31 (図17, 写真18)

本遺構は調査区下段のJ7グリッドに位置している。平面形はLⅢで検出し、長径1.8m、短径1.5m、深さ20cmの楕円形を呈する土坑である。検出面はLⅢであり、土坑内堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積と判断した。本土坑から土師器片9点、須恵器片7点出土しているが、いずれも摩滅の著しい小破片であるため図示できなかった。本遺構に伴う遺物がなく所属時期、性格を推察することはできない。(福田)

32号土坑 SK32 (図17)

本遺構は調査区下段のI10グリッドで検出された土坑であり、東1mに29号土坑、西0.5mに30

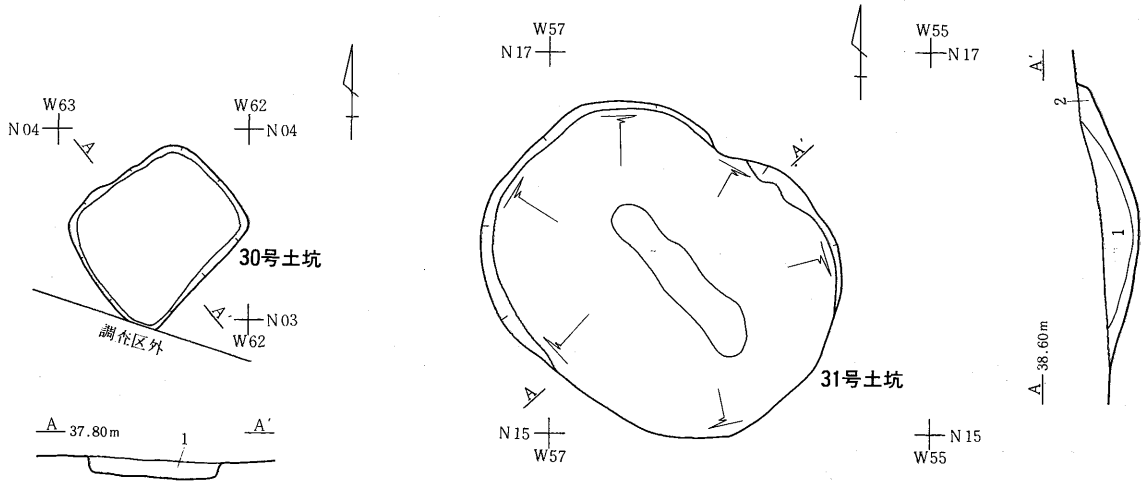


28号土坑内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 凝灰岩粒
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 凝灰岩粒・木炭粒

29号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 凝灰岩粒・焼土粒・木炭粒

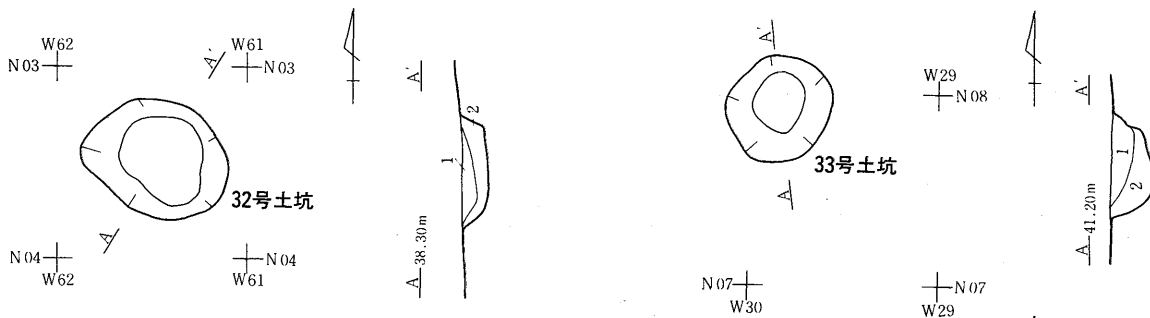


30号土坑内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩粒・木炭粒

31号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 凝灰岩粒 (黄褐色)
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩粒 (黄褐色)



32号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 凝灰岩粒・木炭粒
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 凝灰岩粒・焼土粒・木炭粒

33号土坑内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩

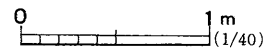


図17 28~33号土坑

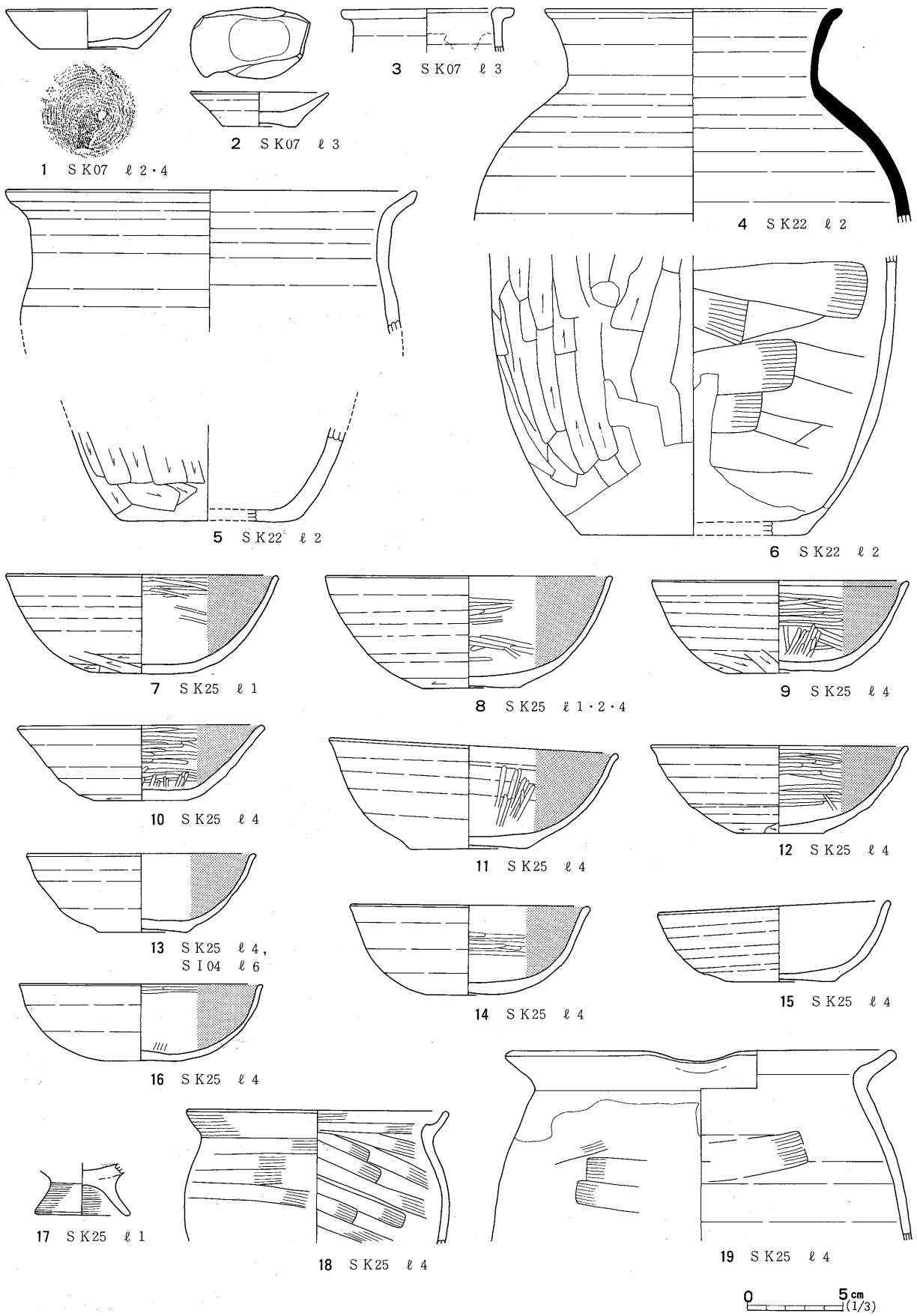


図18 土坑出土遺物(1)

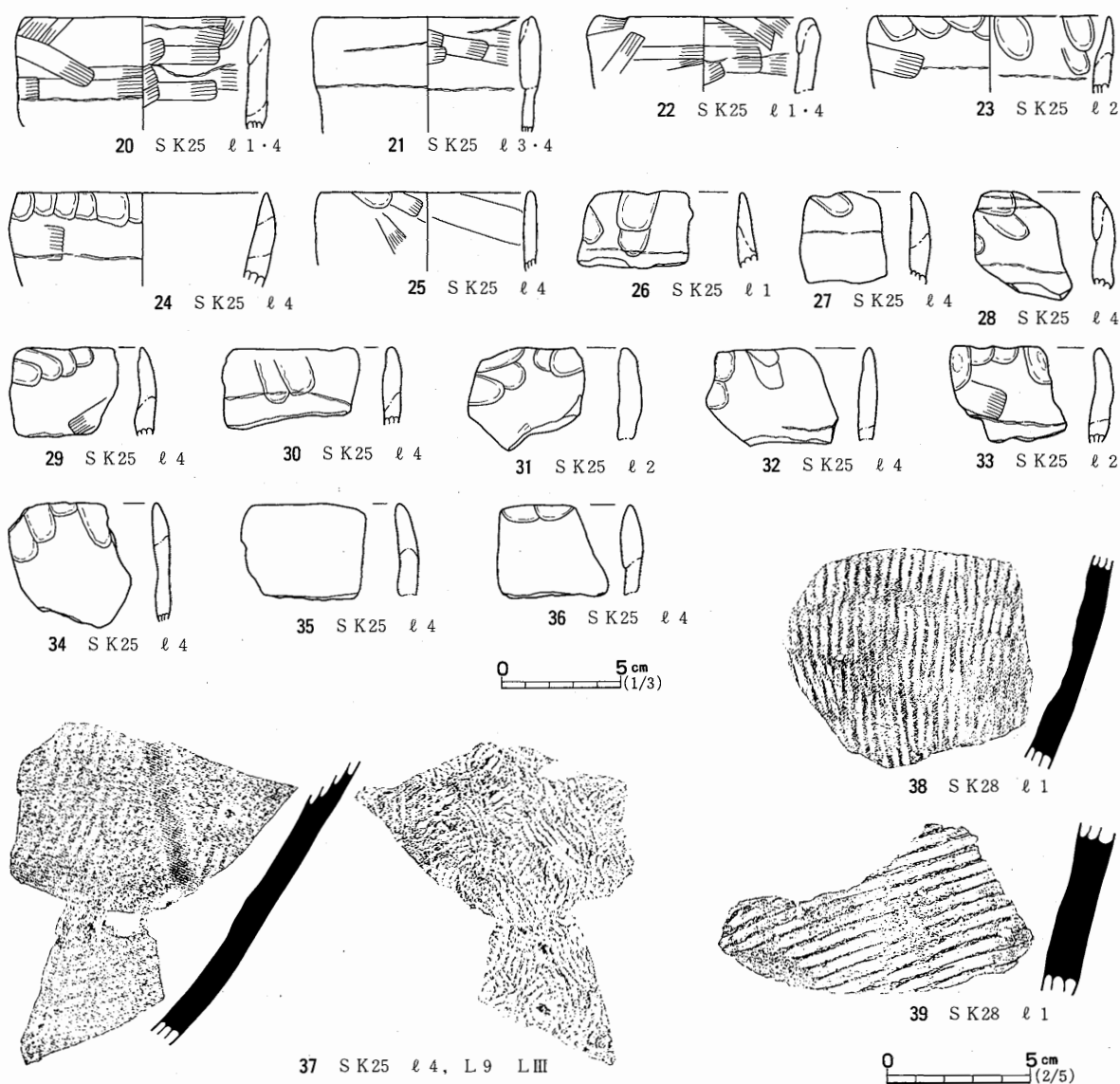


図19 土坑出土遺物(2)

号土坑が近接している。遺構検出面はL IIIであり、ほかの遺構との重複関係はない。平面形は不整形円形を呈し、規模は、長径69cm、短径62cm、深さ15cmを測る。底面は平坦であり、断面形は皿状を呈する。土坑内堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積と判断した。本遺構からは遺物の出土がないため、所属時期および性格は不明である。(福田)

33号土坑 SK33 (図17, 写真18)

本遺構は調査区中段のO・P9グリッドに位置し、西1mに4号住居跡が近接している。遺構検出面はL IIIである。ほかの遺構との重複関係はない。平面形は円形を呈し、規模は径58cm、深さ22cmを測る。土坑内堆積土は2層からなり、その堆積状況から自然堆積と判断した。底面は南側に幾分傾斜し、壁は急峻に立ち上がる。本土坑からは遺物の出土がないため、所属年代および性格は不明である。(福田)

第5節 溝 跡

1号溝跡 SD01 (図20, 写真19)

本遺構は調査区中段のS・T・U12グリッドに位置し、北西—南東方向に直線的に延びる溝跡である。3号溝跡と10号土坑と重複し、いずれも本溝跡のほうが新しい。検出面はLⅢである。堆積土は2層であり、自然堆積と判断した。規模は全長8.8m、最大幅0.5m、深さ28cmを測る。底面は凹凸があるが平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。遺物が出土していないため年代、性格は不明ではあるが、2号溝跡と平行し、同じ規模で構築されていることから企画性が窺われる。(福田)

2号溝跡 SD02 (図20, 写真19)

本遺構はS・T12, T13グリッドに位置し、1号溝跡と平行して北西—南東方向へ延びる溝跡である。3号溝跡, 14号土坑と重複し、いずれも本溝跡の方が新しい。検出面はLⅢである。堆積土は1号溝跡と類似している。規模は全長8.0m、最大幅0.45m、深さ32cmを測る。本溝跡は、遺物がないため年代、性格は不明であるが、1号溝跡と関連する区画溝と考えられる。(福田)

3号溝跡 SD03 (図20, 写真19)

本遺構は調査区中段の中央T11・12, U10・11グリッドで検出された。本溝跡は北東—南西方向に直線的に延びる溝跡である。1号溝跡, 2号溝跡, ピット223と重複しており、いずれも本溝跡のほうが古い。検出面はLⅢである。堆積土は2層であり、1号溝跡, 2号溝跡と同様な土質である。規模は全長11.2m、最大幅0.55m、深さ14cmを測り、1・2号溝跡とほぼ直行する。遺物がないため年代は不明であるが、本溝跡はピット群Bの西端を区画する溝と推定できる。(福田)

4号溝跡 SD04 (図20)

本遺構は調査区中段のR11グリッドに位置している。ピット209と重複しており、本溝跡が古い。本溝跡の方向は北西—南東であり、規模は、全長3.9m、最大幅0.25m、深さ25cmを測る。検出面はLⅢである。堆積土は褐色土の単層であり、自然堆積と判断した。4号溝跡から出土遺物がないため年代、機能についての推察はできない。(福田)

5号溝跡 SD05 (図21)

本遺構は調査区中段のW13・14グリッドに、N—19°—Eの傾きで延び、北側で溝幅が狭くなり、北に屈曲する溝跡である。ほかの遺構との重複はない。検出面はLⅢである。本溝跡の規模は全長5.1m、溝幅は北西側で22cm、南西側で60cm、深さ5cmである。土器片1点が出土したが、摩滅が

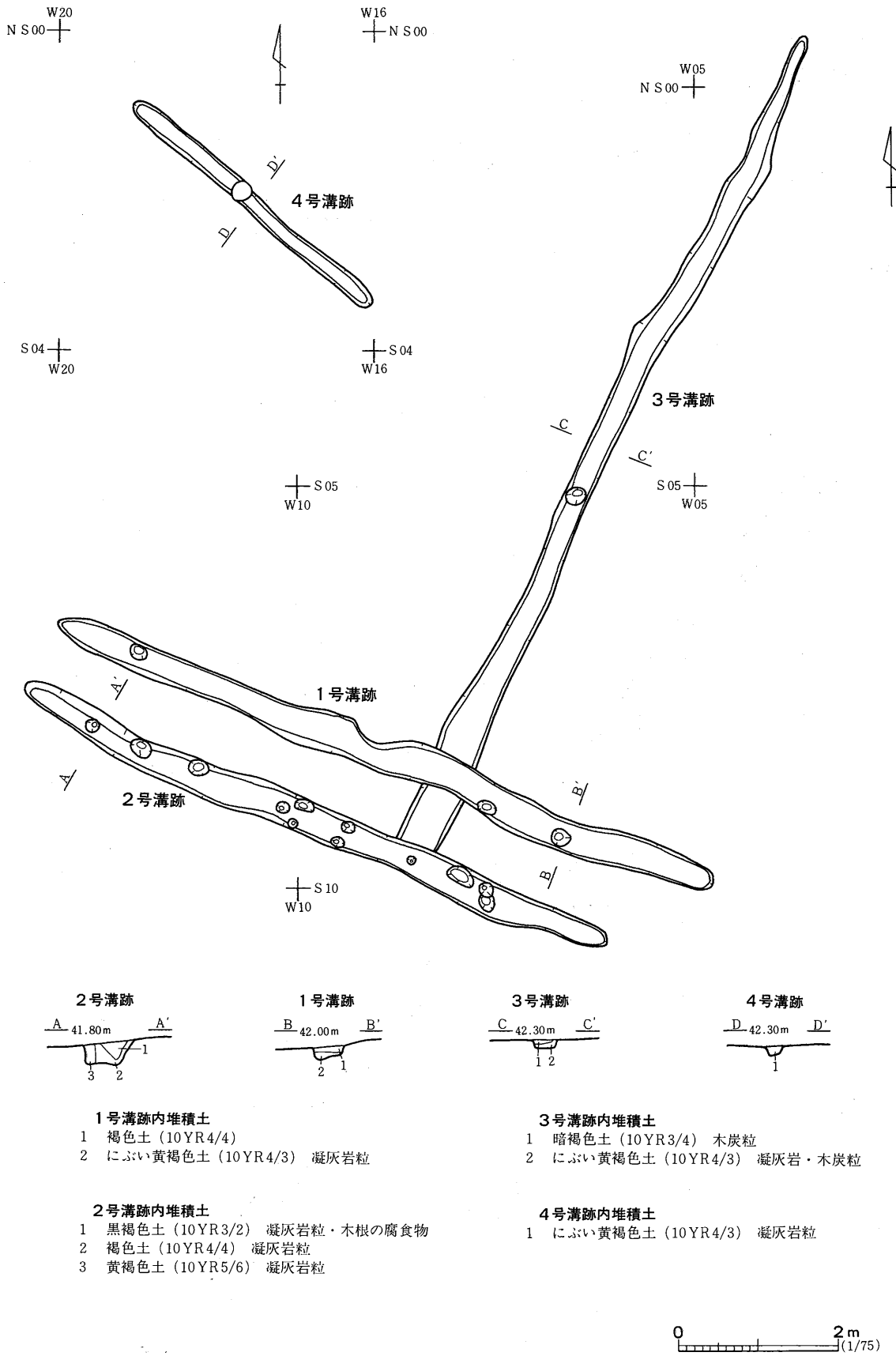


図20 1～4号溝跡

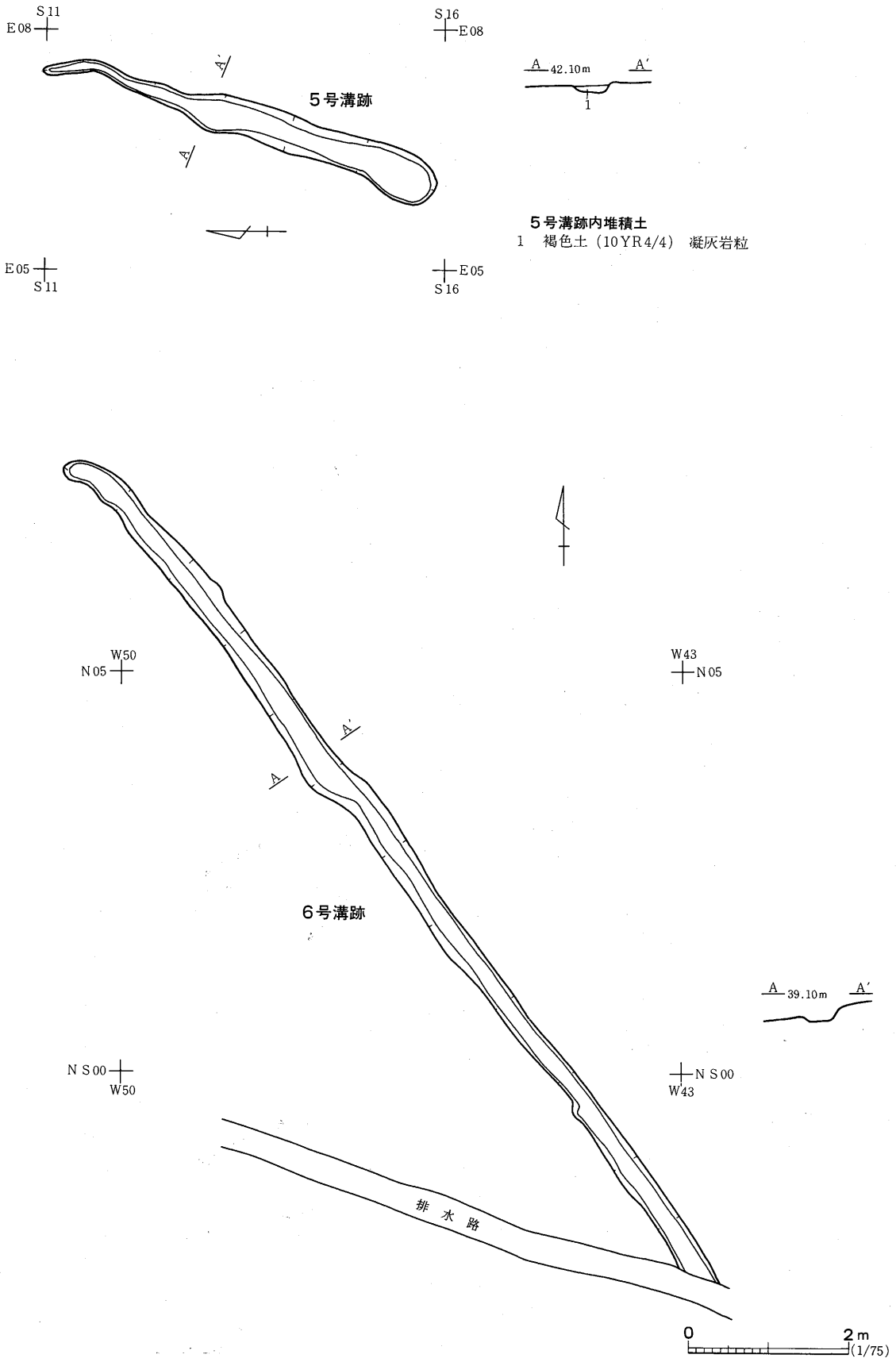


図21 5・6号溝跡

著しく図示していない。本溝跡は年代、機能は不明であるが、ピット群Bの東端を区画する溝跡の可能性はある。 (福田)

6号溝跡 SD06 (図21, 写真19)

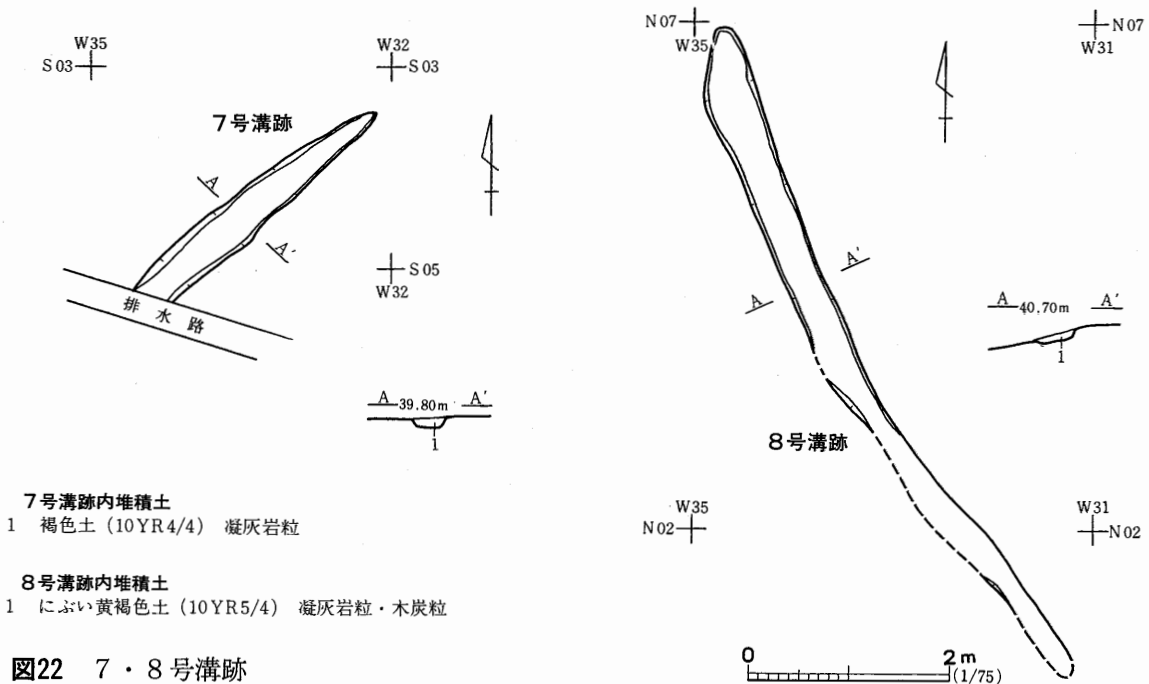
本遺構は調査区下段のK 9, L 9・10, M10・11グリッドにまたがって位置する。北西から南東方向に直線的に伸び、M11グリッドで調査区外に出る溝跡である。南北中心線はN-54°-Eを指す。調査区内の規模は全長12.7m, 最大幅0.5m, 深さ16cmである。ほかの遺構との重複はない。本溝跡から出土遺物はなく、年代、機能を推察することはできない。しかし本溝跡の南側にピット群が存在していることからその区画溝の可能性が考えられる。 (福田)

7号溝跡 SD07 (図22)

本遺構は調査区下段東側のO11・12グリッドに位置する。北東から南西方向に向かって直線的に伸び、O12グリッドで調査区外に出る溝跡である。南北中心線はN-51°-Eを指す。調査区内の長さは2.9m, 最大幅は0.45m, 深さ15cmの規模を測る。ほかの遺構との重複はない。堆積土は、自然堆積の褐色土の単層である。本溝跡から出土した遺物はなく、年代や機能などを推察することはできない。 (福田)

8号溝跡 SD08 (図22)

本遺構は調査区中段と下段の斜面西側O 9・10グリッドに位置する。北西から南東方向へ直線的に伸びる溝跡である。南北中心線はN-22°-Wを指す。ほかの遺構との重複はない。溝跡内堆積



土は凝灰岩細粒と炭化物を含む単層である。本溝跡の規模は全長7.3m，最大幅は0.55m，深さ10cmである。遺構が斜面に立地しているため西側の壁は削平され，部分的にしか確認できなかった。本溝跡から出土遺物はなく，年代・機能等の推察はできない。(福田)

第6節 ピット群

本遺跡からは，掘立柱建物跡として配列をとらえることのできないピットを224基検出した。これらのピットは，検出面がすべてL II aである。遺跡内の通し番号で表した。ピットの集中する地点は3か所あり，調査区上段のものをピット群A，3・5号溝跡に囲まれて位置するものをピット群B，6号溝跡周辺のをピット群Cとする。

ピット群A (図23)

調査区上段に位置するピット群で19基検出された。12・16号土坑が近接している。平面形は円形

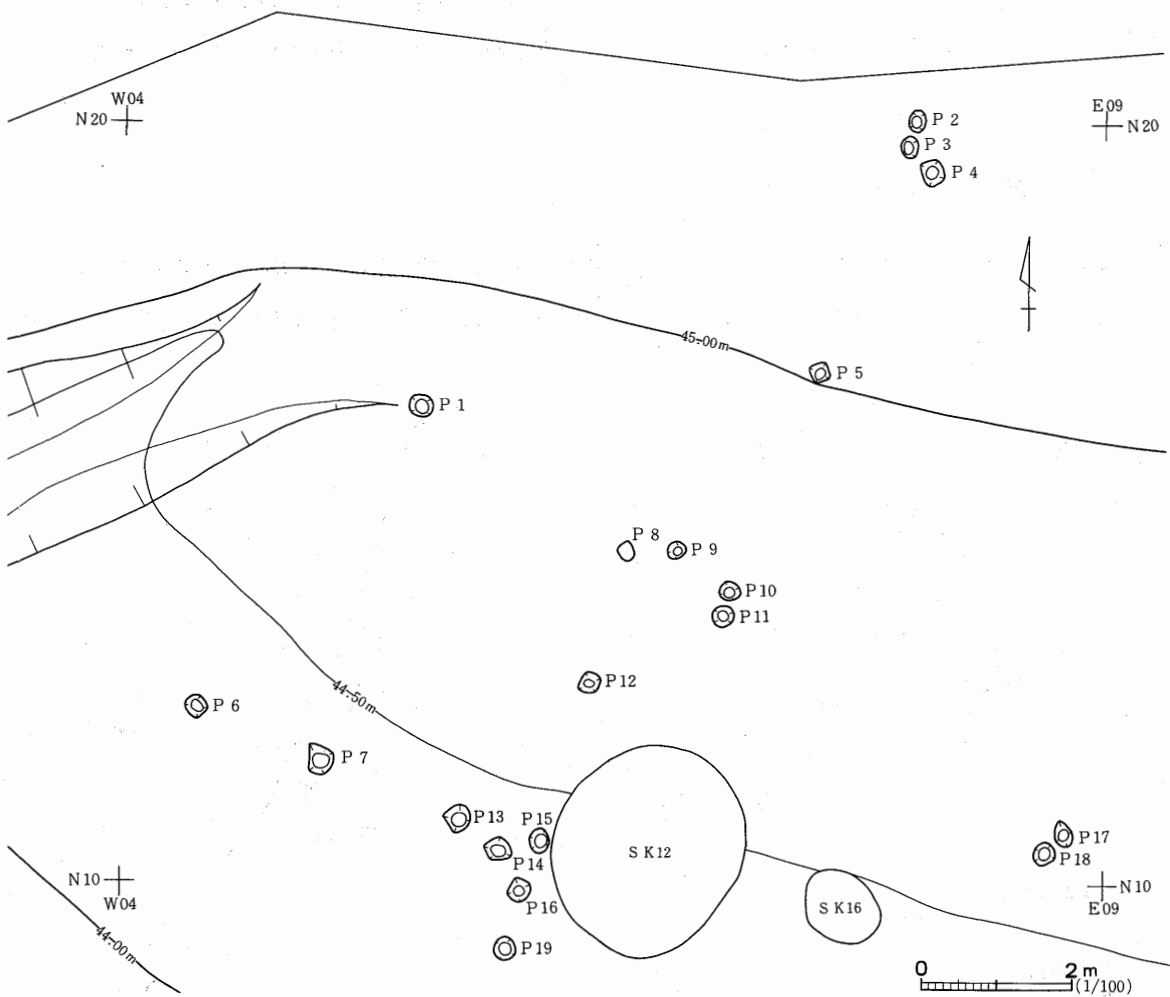


図23 ピット群A

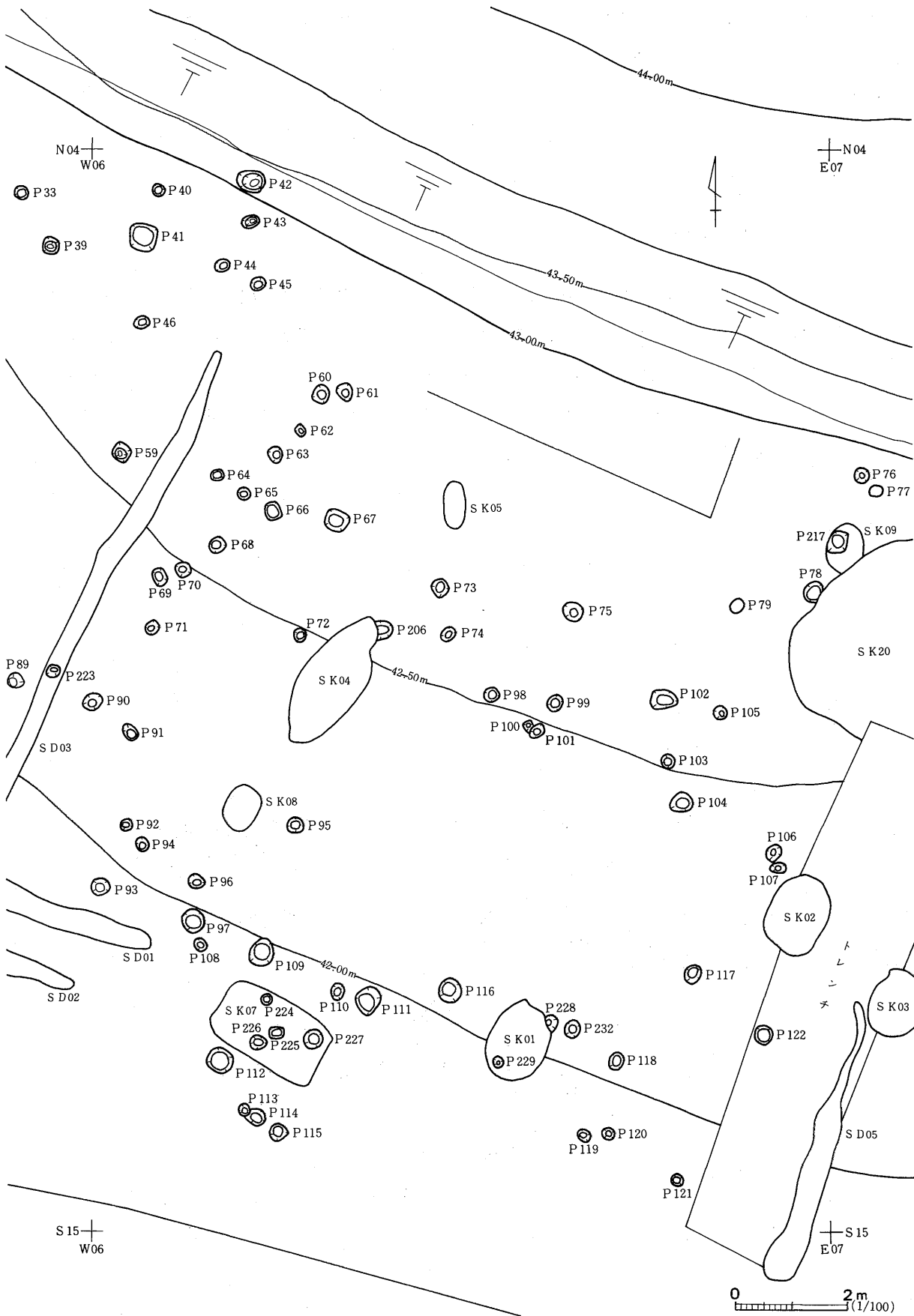


図24 ピット群B

または方形を呈し、規模は23~40cm、深さ11~41cmで、径25cm前後で深さ25cm前後のピットが大部分を占める。柱痕が観察されたものはない。遺物は出土していない。ピット群Aではピット3・5・10が2m間隔で一直線に並び、ピット8・12・15・19が不均等であるが並び、ピット15に直行するようにピット6・7・13が並ぶ。また12・16号土坑との関係はピットが散漫に位置するため推察できない。

ピット群B (図24・26, 写真25)

調査区中段3・5号溝跡にはさまれた地点に位置するピット群で75基検出された。平面形は円形または楕円形を呈し、規模は径20~48cm、深さ12~67cmである。径40cm以上の柱穴は7号土坑の周辺にあり、ピット97・109・111が一行に並び、112が109に直行する。またピット群Bを概観すると、柱列の向きや柱間は一定でないものの、3号溝跡の東側にほぼ一行に並ぶピット群を西端とし、ピット107・117・118を東端の柱列、ピット63から107にかけてのピットを北端の柱列として、およそ11×4.5mの空間が想定できる。ピット群の遺物図26-1はP117の掘方埋土から平安時

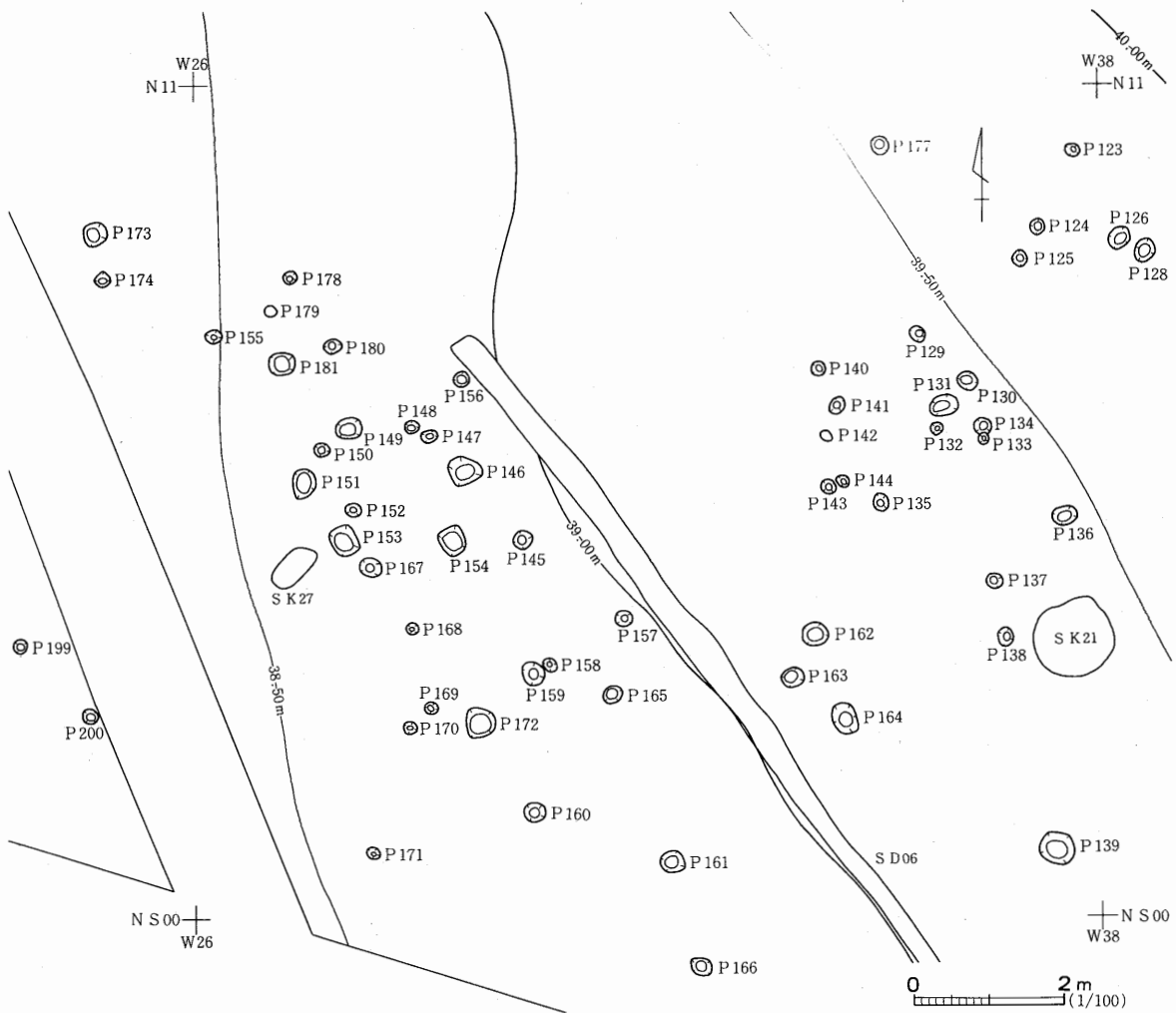


図25 ピット群C

表1 ピット計測表(1)

(単位; cm)

No.	長径	短径	深さ	グリッド	備 考	No.	長径	短径	深さ	グリッド	備 考
1	34	31	20	U7		61	30	28	32	U11	柱痕8
2	27	23	23	W7		62	22	20	30	U11	
3	30	28	25	W7		63	30	27	36	U11	
4	34	30	25	W7		64	23	20	36	U11	
5	27	27	20	W7		65	27	23	41	U11	
6	28	30	26	U8		66	30	28	40	U11	
7	40	38	23	U8		67	38	35	43	U11	
8	20	18	11	V8		68	30	23	39	U11	
9	24	21	20	V8		69	27	25	35	U11	
10	26	26	28	V8		70	28	25	33	U11	
11	25	22	23	V8		71	22	20	20	U11	
12	27	25	18	V8		72	27	22	14	U11	
13	34	30	30	V8		73	29	27	23	V11	柱痕10
14	31	28	15	V8		74	29	23	18	V11	
15	33	28	22	V8		75	33	31	18	V11	
16	30	28	22	V8		76	23	21	14	W11	
17	27	22	41	W8		77	20	18	12	W11	
18	23	23	27	W8		78	35	27	22	W11	柱痕14
19	27	25	20	V9		79	24	21	23	W11	
20	22	20	23	R9		80	24	16	27	R11	
21	18	15	25	R9		81	28	26	30	R12	
22	26	23	38	R9		82	22	20	25	R12	柱痕10
23	26	23	24	R9		83	33	30	37	R12	
24	26	23	36	R9		84	25	22	23	R12	
25	25	24	30	R9		85	36	30	36	R12	
26	24	22	38	R9		86	23	23	27	S12	
27	28	23	47	R9	須恵器	87	27	24	25	S12	
28	28	25	48	S9	土師器	88	30	28	30	S12	
29	25	22	42	S9		89	29	25	26	T12	
30	30	23	41	S9		90	34	28	35	T12	
31	35	29	30	R10	土師器	91	28	23	20	T12	
32	27	23	27	S10		92	20	18	22	T12	
33	35	35	35	T10	柱痕8	93	28	28	31	T12	
34	30	27	34	R10		94	26	24	21	U12	
35	25	23	38	R10		95	29	26	17	U12	
36	34	27	48	R10		96	28	20	36	U12	
37	30	27	30	P10		97	40	36	36	U12	
38	38	34	36	P10		98	26	22	14	V12	
39	27	33	23	T10	柱痕8	99	28	23	18	V12	
40	23	21	34	U10		100	18	18	17	V12	
41	48	45	50	U10		101	32	23	24	V12	
42	43	40	34	U10		102	48	30	40	V12	鉄滓
43	28	25	33	U10	柱痕10	103	21	19	16	V12	
44	28	24	31	U10	柱痕10	104	36	32	24	V12	柱痕12
45	22	20	34	U10	柱痕8	105	26	22	23	W12	
46	24	21	44	U10		106	28	26	20	W12	
47	37	26	40	Q11	土師器	107	25	19	14	W12	
48	23	20	36	Q11		108	27	23	22	U13	
49	17	16	30	Q11		109	52	43	50	U13	
50	33	23	32	Q11		110	24	24	40	U13	天目茶碗
51	20	18	34	Q11		111	45	42	35	U13	柱痕17
52	41	34	36	R11	柱痕12	112	46	42	37	U13	
53	34	28	30	R11		113	20	18	43	U13	
54	22	20	28	R11		114	35	32	40	U13	柱痕13
55	26	24	26	R11		115	30	28	50	U13	
56	28	26	37	R11	柱痕12	116	43	40	16	V13	
57	34	28	17	S11		117	33	26	23	V13	羽口
58	21	19	20	S11		118	30	27	56	V13	
59	30	30	36	T11	柱痕14	119	26	23	49	V13	
60	30	28	32	U11	柱痕8	120	25	20	40	V13	

表2 ピット計測表(2)

(単位; cm)

No.	長径	短径	深さ	グリッド	備 考	No.	長径	短径	深さ	グリッド	備 考
121	20	18	40	V13		181	32	32	45	K 9	柱痕15
122	35	28	67	W13		182	27	24	33	I 9	
123	16	12	34	M 8	土師器	183	30	28	31	I 9	柱痕 6
124	17	15	29	M 9		184	28	27	20	I 9	柱痕12 SB01-P1
125	18	14	28	M 9		185	34	34	43	I 9	柱痕12 SB01-P2
126	33	24	32	M 9		186	29	29	35	J 9	柱痕12 SB01-P3
127	30	28	20	K 7		187	20	18	27	J 9	
128	31	28	32	M 9		188	17	17	25	J 9	
129	20	20	21	M 9		189	20	18	15	J 9	SB01-P4
130	25	25	23	M 9		190	28	23	39	J 9	柱痕10 SB01-P5
131	37	25	31	M 9	柱痕10	191	17	17	16	I 10	
132	14	11	17	M 9	土師器	192	28	25	33	I 10	柱痕12
133	14	14	15	M 9		193	32	32	18	I 10	
134	24	24	30	M 9	柱痕 8	194	26	24	18	I 10	
135	18	18	27	M 9		195	32	28	38	I 10	
136	32	22	23	M 9		196	20	20	38	J 10	
137	20	18	20	M10		197	26	24	30	J 10	柱痕 7
138	23	18	20	M10		198	28	25	50	J 10	柱痕12 SB01-P6
139	40	40	26	M10	土師器	199	19	17	24	J 10	
140	17	16	15	L 9		200	20	20	21	J 10	柱痕10
141	20	17	17	L 9		201	18	16	23	N 8	柱痕10
142	12	12	14	L 9		202	42	36	34	N 8	
143	17	17	12	L 9		203	27	25	23	N 8	
144	18	18	35	L 9		204	36	36	24	N 8	
145	23	21	12	L 9		205	12	11	15	N 8	
146	43	35	53	K 9	柱痕14	206	36	32	20	U11	S K04旧
147	20	18	35	K 9	須恵器	207	22	20	21	N 9	
148	20	18	28	K 9		208	35	30	39	O 9	柱痕13 土師器
149	32	30	65	K 9	柱痕12	209	28	23	—	R11	S D04新
150	20	16	40	K 9		210	40	38	44	O 9	柱痕16 土師器
151	37	29	50	K 9	柱痕 9	211	28	26	26	N 9	柱痕10
152	17	14	40	K 9		212	34	29	33	N 9	柱痕12
153	41	37	62	K 9	柱痕16	213	27	23	14	N 9	
154	41	31	15	K 9		214	29	23	37	I 9	柱痕 9 SB01-P7
155	21	21	45	K 9	柱痕 7	215	15	13	24	J 10	SB01-P8
156	20	18	17	K 9		216	32	32	42	J 8	
157	20	20	26	L10		217	38	35	20	W11	柱痕15
158	20	18	13	L10		218	26	24	25	R12	
159	30	30	56	L10		219	18	18	20	R12	
160	26	24	27	L10		220	28	22	35	S12	
161	33	30	40	L10		221	37	25	42	T12	
162	32	30	18	L10		222	32	30	37	T12	
163	28	23	18	L10	土師器	223	24	24	21	T12	
164	36	33	20	L10	土師器	224	24	23	39	U13	柱痕 9
165	24	22	41	L10		225	27	22	15	U13	
166	29	26	33	L11		226	26	22	44	U13	柱痕 6
167	27	26	21	K10		227	34	32	44	U13	
168	18	16	28	K10		228	25	25	18	V13	
169	17	17	34	K10		229	20	20	44	V13	
170	15	13	33	K10	須恵器	230	22	22	28	R10	S K22旧
171	18	16	42	K10		231	15	14	9	N 9	
172	40	38	53	K10	柱痕17						
173	30	28	53	J 9	柱痕13						
174	16	16	24	J 9							
175	20	18	11	J 8							
176	16	13	11	J 8							
177	26	23	33	L 8							
178	15	14	26	K 9							
179	13	13	25	K 9							
180	20	20	33	K 9							

代の須恵器長頸瓶であり、頸部内部に鉄滓がつまっております、羽口として転用されたものと判断した。ピット群Bは建物の柱配置をとらえることができず、内部空間を区画する柵状施設の可能性が推察できる。

ピット群C (図25)

調査区下段の6号溝跡周辺に位置するピット群で61基検出された。ピットの平面形は円形ないし方形を呈し、規模は12~41cm、深さ12~65cmである。20cm前後と35cm以上の2群に大別される。径35cm以上のピットは9~17cmの柱痕跡をもち比較的深く掘り込まれている。ピット173・155・151・153・172・160とほぼ一列に並び、出土遺物

はピット139・163・164からロクロ成形の土師器破片があるが、いずれも小破片のため図示できなかった。本遺構は建物としての配置は確認できなかったが、出土遺物から径35cm以上の柱穴は平安時代の可能性が推察される。(福田)

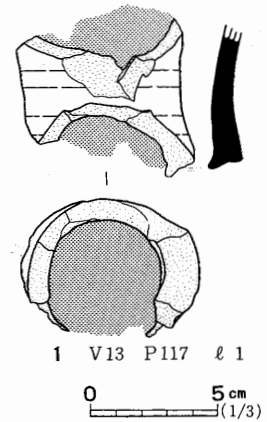


図26 ピット出土遺物

第7節 遺構外出土遺物 (図27~29, 写真25~28)

遺構外から出土した遺物は、弥生土器5点、土師器1,984点、須恵器116点、陶器150点、磁器30点、瓦6点、銭貨7点、金属製品8点、炉壁20点、鉄滓64点、羽口2点、石鏃1点である。このうち図示し得たのは図27~29の遺物である。出土した土師器のほとんどはロクロ成形のものであり、非ロクロであるものの出土点数は極めて少ない。また、直接製鉄に関わる遺構の発見はなかったが、製鉄遺構に関連する炉壁片や鉄滓などが出土している。

土師器・須恵器

図27-1はS10グリッド出土のロクロ成形の土師器杯であり、口径14cm、底径4.5cm、器高6cmを測る。外面はロクロナデが確認できるが、器面の磨滅が著しく調整等は判然としない。底部切離しは回転糸切りで、内面はミガキの後、黒色処理が施されている。2はV7グリッド出土のロクロ成形の土師器杯である。法量は口径11.8cm、底径4.4cm、器高5cmを測る。器面は被熱により磨滅が著しく調整等は判然としない。底部切離しは回転糸切りで、内面はミガキの後、黒色処理が施された形跡が窺われる。3はM9グリッド出土のロクロ成形土師器杯である。遺存率は約40%であり、復元作図の結果、推定口径13.2cm、残存高4.3cm、推定底径5.5cmを測る。器面は磨滅が著しく判然としないが、内面にはミガキの後、黒色処理が施されている。4はV7グリッド出土のロクロ成形の土師器杯である。法量は口径6.3cm、底径4.8cm、器高3.1cmである。器面は内外面ともに被熱による荒れが著しく調整等は判然としない。5はU8・V8グリッドからそれぞれ出土し接合したロクロ成形の土師器杯である。法量は口径11cm、底径4.4cm、器高3.9cmを測る。体部にはロクロナデが明瞭に認められ、体部下端には回転ケズリ再調整が施されている。内面はミガキが施されて

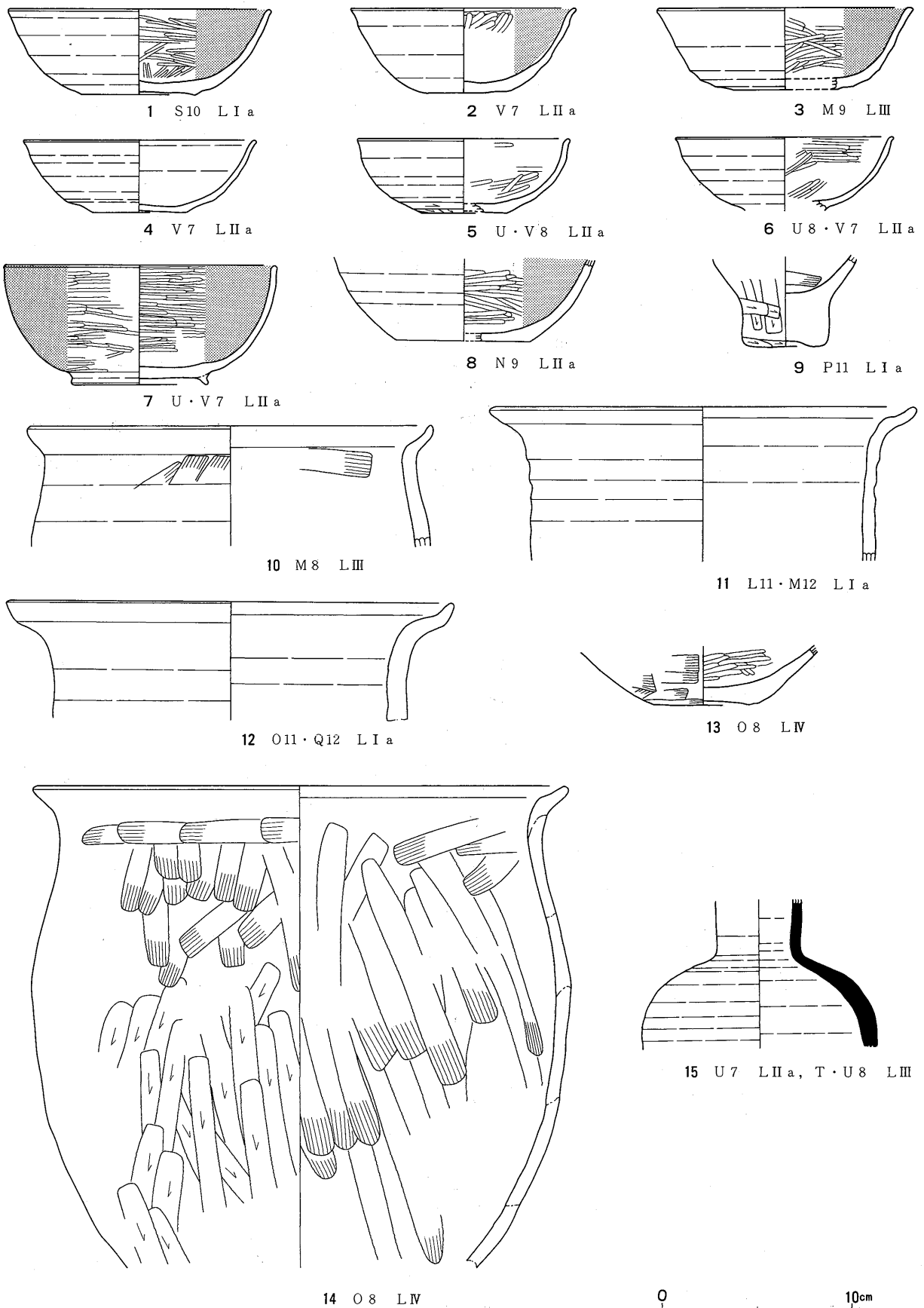
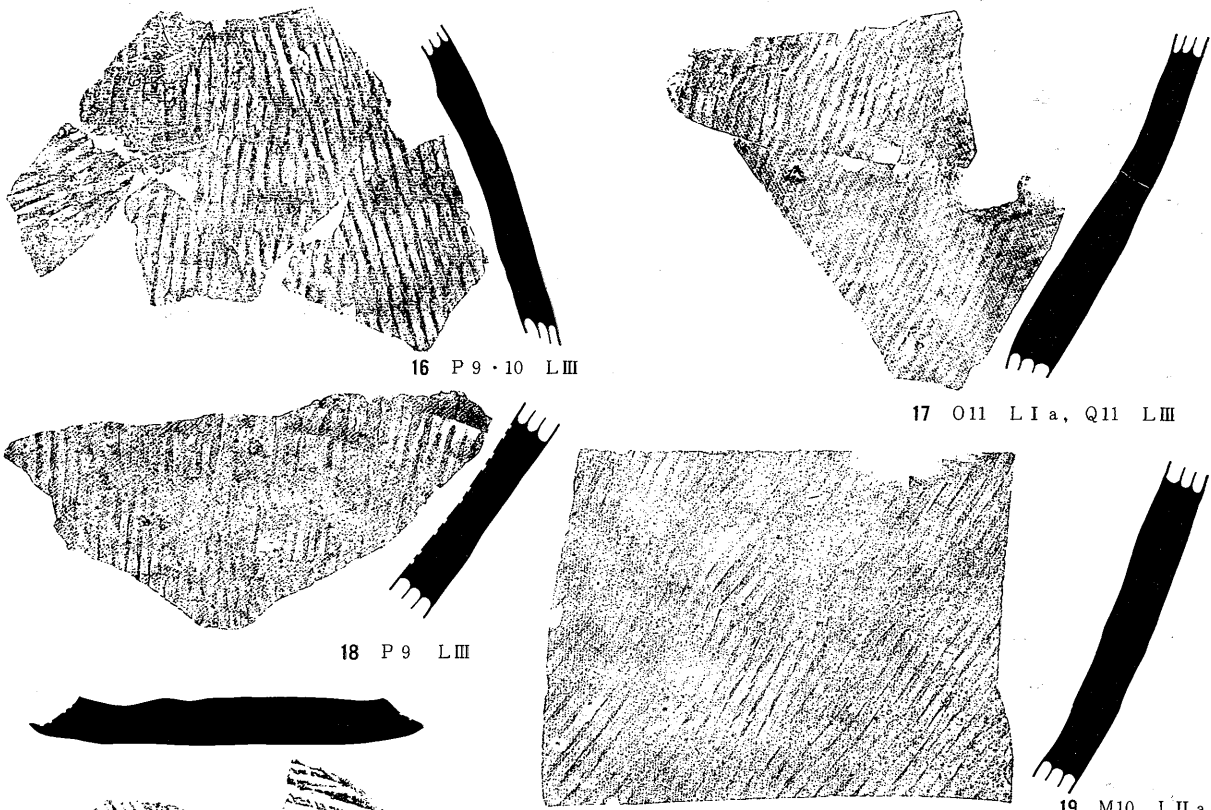


図27 遺構外出土遺物(1)



16 P9-10 LIII

17 O11 LIIa, Q11 LIII

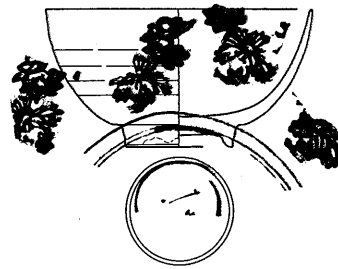
18 P9 LIII

19 M10 LIIa

0 5cm (2/5)



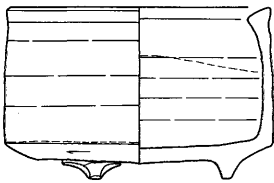
20 N9 LIIa, P9 LIII



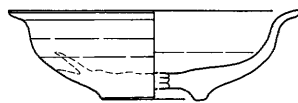
21 U9 LIIa



22 N8 LIIa



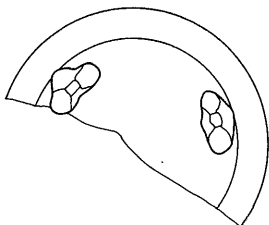
23 W9 LIIa



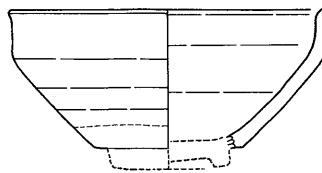
24 Q11 LIIa



25 Q12 LIIa



26 N9 LIIa



27 S9-P2 LIIa

0 5cm (1/3)

图28 遺構外出土遺物(2)

いる。黒色処理は明瞭に観察されないが、口縁部の一端がくすんでいることから本来は施されていたものと考えられる。6はU8・V7グリッドからそれぞれ出土し接合したロクロ成形の土師器杯である。法量は口径11.4cm、器高3.9cmを測る。体部にはロクロナデが明瞭に認められ、体部下端には回転ケズリ再調整が施され、内面はミガキが施されている。黒色処理は明瞭に観察されないが、口縁部の一端がくすんでいることから本来は施されていたものであろう。7はU7・V7グリッド出土の両面に黒色処理が施された高台付杯である。内外面ともにミガキが施されている。口径14.3cm、底径7.2cm、器高6.3cmを測る。8はN9グリッド出土の土師器杯であり、底部から口縁部直下まで遺存する。復元作図の結果、底径7cm、残存高4.3cmを測り、外面にはロクロナデとケズリが認められる。内面はミガキの後、黒色処理が施されている。9は非ロクロの高台付杯である。底径4.5cm、残存高4.8cmを測る。外面はケズリ、内面にはナデが認められる。10～12はロクロ成形の土師器甕である。いずれも口縁部から体部上半までの破片である。法量は10が口径21cm、残存高6.3cm、11は口径22.8cm、残存高8.1cm、12は口径23.6cm、残存高6.2cmを測る。13は土師器甕の底部破片と思われる。底径5.0cm、残存高3.1cmを測る。14は非ロクロの土師器甕である。口径28.2cm、残存高25.2cmを測る。調整は外面がナデとケズリ、内面にはナデが認められる。15は須恵器長頸瓶であり、口縁部直下から体部上半の破片である。残存高は7.7cm、頸部直径4.5cmを測る。図28—16～20は須恵器甕の破片である。外面に平行タタキ、内面にナデ調整を施している。

陶器・磁器・瓦

図28—21はU9グリッド出土の肥前系染付磁器碗であり、18世紀後半に比定される。三角形の低い高台から丸みを持って立ち上がり、内湾気味に口縁部に至る器形を呈している。口径10.6cm、底径4.2cm、器高5.4cmを測る。22は相馬系の鮫肌土瓶蓋であり明治時代に比定される。23は瀬戸系の灰釉筒形香炉である。内面は口縁部を除き無釉である。24は唐津系の皿であり、大橋編年I期、16世紀末から17世紀初頭に比定される。25は瀬戸系の菊皿であり、全面に灰釉が施釉されている。大窯V期、16世紀末から17世紀初頭に比定される。26は瀬戸系の天目茶碗であり、薄手の鉄釉が施釉されている。大窯V期から登窯期、16世紀末から17世紀前半の前葉に比定される。27は灰釉が施釉されている相馬系の小碗である。図29—28はかわらけであり、近世期の所産と考えられる。29・30は瀬戸系の丸皿である。29には印花文が施された形跡が僅かに認められるが、30には印花文が明瞭に認められる。全体に灰釉が施釉され、大窯III・IV期、16世紀後半頃に比定される。31・32は瀬戸系白天目の高台部破片である。大窯V期、16世紀後半～17世紀前半頃に比定される。33は鉄釉が施釉された把手付壺である。34は陶器播鉢である。体部の内外面に鉄釉が施釉され6本一組のおろし目が施されている。35は瀬戸系の瓦質播鉢である。内面には6本一組のおろし目が施されている。大窯V期の2類、16世紀後半に比定される。36はV7グリッド出土の丸瓦である。玉縁部は回転ケズリにより面取りされており、本体部はケズリ、裏面は布目が認められる。

金属製品

図29—37はU9グリッド出土の火皿部が欠損した煙管の雁首である。38・39は楔状の鉄製品であ

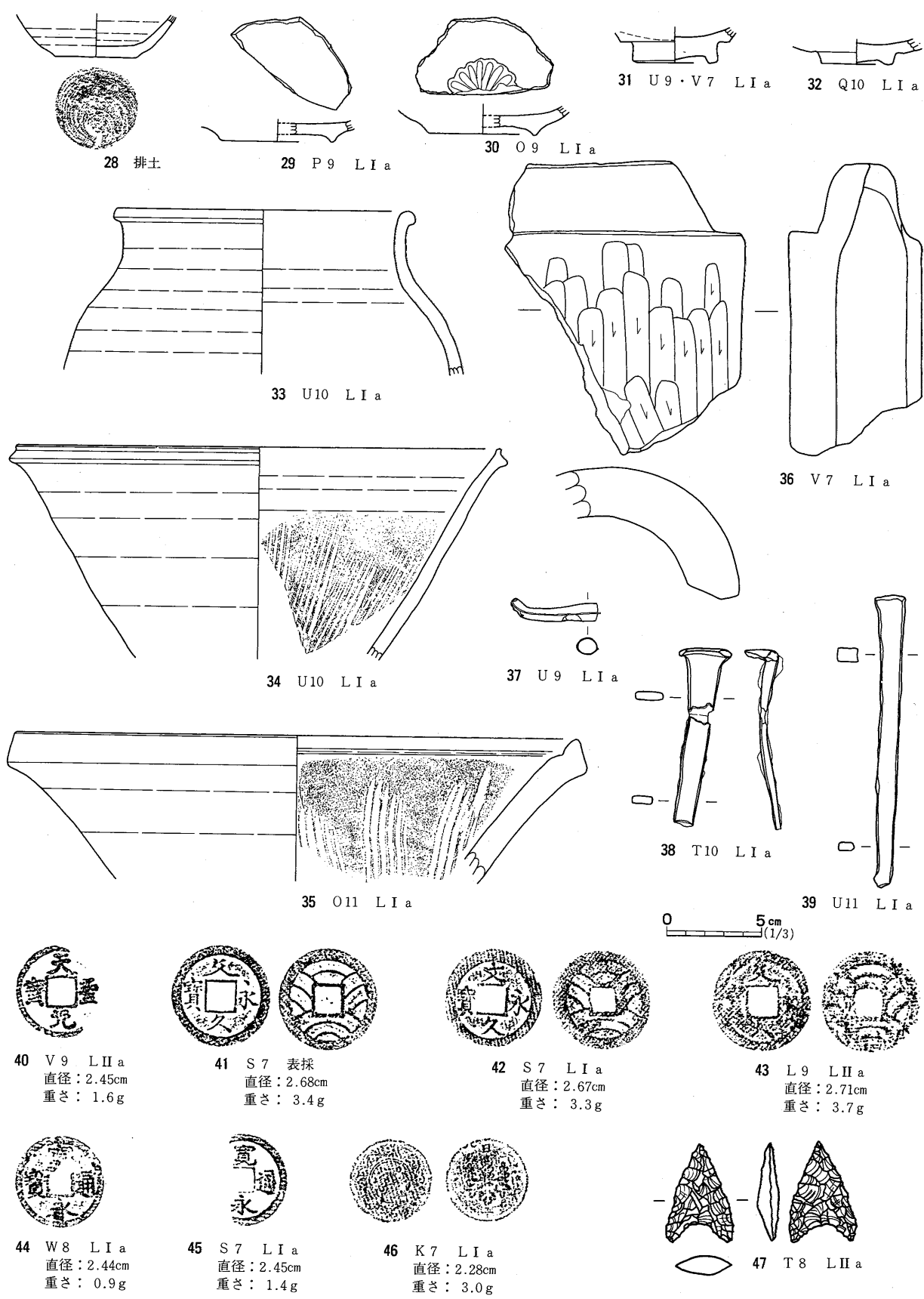


図29 遺構外出土遺物(3)

る。38の残存長は9.4cm, 幅1.5cmを測る。39の残存長は15.1cm, 幅1cmを測る。

銭貨

図29—40は「天聖元寶」であり, 北宋 天聖元年(1023)のものである。41~43は「文久永寶」であり, それぞれ書体の特徴から41・43がいわゆる草文(板倉周防守勝静書), 42が真文(小笠原耆岐守長行書)のものである。44・45は「寛永通寶」であり, 字体の全容が判断できる44はいわゆる「宝足ス宝」のもので, 初鑄年は1636年の古寛永に属するものである。46はいわゆる桐1銭銅貨であり, 大正11年の年号が判読される。

その他

図29—47は凹基の石鏃で, 表裏面伴に丁寧な調整が加えられている。また, 図示できなかったが, 桜井式に比定される弥生式土器片が5点出土している。(佐々木)

第8節 水田跡

本遺跡では, 丘陵部の調査区より西側に広がる沖積地において, 予備調査の段階で水田跡と判断された層位が確認されている。今回の発掘調査においては, 調査区周縁部に水抜きを兼ねた幅50cmのトレンチを設定して, 予備調査時の層位の確認および全体の土層観察を行なった。

調査では, 調査区南側と西側の一部に水田土壌と考えられる層位を確認した。これらは2時期に分けられ, 南側に認められた水田土壌については西側に認められた水田土壌よりも新しいことが判明した。なお, 調査区東側には, 水田土壌と判断される層位は認められなく, 水性堆積によると考えられる黒褐色土と青灰色土の混土からなる層位が確認された。水田土壌と判断された層位は, 土圧のためか5~7cm程の厚さでほぼ均一に認められ, 層中の中位部には耕作時に土壌が巻き上げられた痕跡が多く認められる。これらは, 南側および西側の水田土壌に共通して確認され, 現水田面より約35~50cmの深さに認められた。

次に水田遺構についてであるが, 上述の水田土壌と判断された部分をもとに, 遺構検出を行ったが畦畔および溝跡などの水田に伴なうと考えられる遺構は発見されなかった。ただし, 断面観察によって確認された水田土壌は, 南側で調査区端部から調査区内にかけて約2mほどの範囲で確認されるにとどまっていることから部分的にはあるが水田の耕作土の一部である可能性も示唆される。また, 西側の水田土壌については西側端部より調査区内の約1/3の範囲で確認されたが, これらは現水田の耕作土の直下からほぼ同一の土質として確認されていることから, 耕地整理時の開削による床土の造成部である可能性も示唆される。

今回の調査では, 調査区内で水田跡であるとされた部分に関しては, 明確な水田遺構を捉えることができなかったが, 遺跡の立地する地形や調査において確認された水田土壌の在り方から, 大正年間に行なわれた耕地整理前までは, 少なくとも古代からの景観を損なわず脈々とつづく水田が広がっていたものと推察される。(佐々木)

第3章 ま と め

(1) 各時代の遺構と遺物

発掘調査の結果、本遺跡は古代末と中世末から近世・近代にそれぞれ機能した遺跡であることが判明した。発見された遺構のなかには、時期不明とされたものはあるものの、遺構の構築の様相は、概ね当地区の地形を効率よく使用していることが窺われる。

古代末に属する遺構は、竪穴住居跡をはじめ土坑等が検出され、遺物はロクロ土師器杯をはじめ甕・手捏ねの筒型土器が出土しており、9世紀後半から10世紀前半に至る時期に位置づけられる。遺物の総量と遺物の伴なう検出遺構から、本遺跡の主体をなす時期である。検出遺構のうち竪穴住居跡はすべて当該期に属するものであるが、土坑その他の遺構については、所属時期にそれぞれに違いがある。住居跡のうち1号～4号住居跡は、遺構の在り方と出土した遺物から9世紀後半代に機能したと考えているが、5号住居跡はこれらの遺構と幾分離れた位置にあることとその出土遺物から10世紀前半頃に機能していたものと判断した。検出された住居跡のうち1号住居跡と4号住居跡は、規模的には比較的大型のものであり、ほかの住居跡との規模と位置関係を含め考慮すると、当該期においては9世紀後半の中でも概ね2時期の区分が可能ではないかと考えている。

住居全体の構造的特徴としては、カマド以外の施設がほとんど検出されない。なかでも柱穴の可能性のある小穴は散見されるが、支柱穴と考えられる遺構は見当たらず、上屋を想定すると貧弱なものであると考えられ、全体的な構造からすると極めて簡素な印象を受ける。また、もう一つの特徴としては、住居跡内から比較的多量に出土した手捏ねの筒形土器の存在である。2号住居跡を除くすべての住居跡から出土しており、これらの土器が、いわゆる製塩土器とするならば、塩の流通を考えるうえでの良好な資料の提供といえよう。なお、本遺跡の東側の丘陵上にある大久保F遺跡の性格を考慮すれば、「火」を使用する職業集団の一部が当遺跡を中心として活動していたものと推察される。このことは上述した竪穴住居跡等の構造的特徴からも推察できうるものと考えている。

土坑については、古代末と中世末から近世・近代と幅広く存在し、12・25号土坑のように機能時期が明確に把握できるものの存在は少なく、時期不明と判断されたものが多い。全体的には土坑の占る割合は比較的多いが、調査区内での様相は判然としない。しかしながら、遺構の形態等から方形竪穴状遺構と認識した6号土坑は、遺物の出土はないものの中世に位置づけられるものである。

ピット群は、調査区内に検出された224基のピットを集中する地点別に捉え、A～Cの3か所に便宜的に区割りした。検出されたピットのほとんどは個々に見ると時期不明のものが多いが、なかには、土師器片・須恵器片を含むものも若干認められることから、所属時期を判断する少ない材料として検討を加えた。各ピット群は巨視的に見ると建物が存在したような配置となっているが、細

部を検討すると柱穴間の寸法や建物となり得ると考えた柱の位置に規則性がみられず、数多いピットの存在から明確な建物の存在を認識することはできなかった。なお、これら規則性のない柱穴の集合から建物以外の柵などの施設的なものの可能性も考えられる。これらピット群の機能した時期は、検出時の出土遺物と検出面の状況から住居跡が機能していた時期とそう隔たりはないものと考えている。

(2) 遺構の分布と地形

本遺跡での遺構の分布は地形的な制約からかなり偏ったものにとらえることができる。特に調査区内で判明した地形の改変は、16世紀後半以降に大規模な整地作業によって作り出されたものであり、集落として機能させるために生活空間の確保を行っている。この整地作業は、元々扇状地地形であった緩やかな斜面に削平・盛土を行い、僅かに発達していた沢を埋め立て、平場面積を広げることを目的としていたことが窺われる。この平場の構築を行うために両側に位置する丘陵の山腹を削り取り、盛土の確保を行っている。なお、後世の宅地造成および畑地の造成に至るまで、基本的にはこの地形を保っており、調査において上・中・下段部と呼称した階段状の地形はこの時点で作り出されたものと推察される。

遺構の分布については、その地形改変に伴うように変化しているにとらえられる。まず、地形改変以前に構築された住居跡は、丘陵部の裾部に並ぶように位置しており、沢部の上端部を生活区間としている。特に調査区上段部には、住居跡が機能した9世紀後半～10世紀初頭の遺構は稀薄であり、このことは、扇状地の扇頂部にあたることから生活空間としては両側に丘陵の斜面部が迫り、面積的にも狭いものであったと考えられる。平場構築後は、中段部の住居跡と沢部を埋め立て、調査において、ピット群もしくは1号建物跡とした遺構を構築している。 (佐々木)

第3編 おおくほ 大久保F遺跡

遺跡記号 IWK-OKB・F
所在地 いわき市四倉町駒込大久保
時代・種類 縄文時代土坑群・平安時代土器生産集落跡
調査機関 平成7年4月18日～11月30日
調査員 岡田光生・石本 弘・橋本幸夫
水谷勝雄・吉田 功・佐々木慎一
笹山恵子・吉野滋夫・菅原祥夫
福田秀生

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

大久保F遺跡は、いわき市四倉町駒込字大久保に所在している。四倉町は市の北東部に位置し、漁港の町として知られているが、農業も盛んな半農半漁の町である。このなかでも駒込地区は、町の西側山間部に位置し、とくに農業を生業とした集落が多い。遺跡はJR常磐線四倉駅から北西へ約7kmの距離に位置し、町内を東西に走る県道小野・四倉線からみて北側にある丘陵上に立地している。遺跡の南西側には檜川と仁井田川の合流点がある。

遺跡付近の地形は、地質的には新生代第四紀に形成された沖積層および洪積層が堆積している。その周辺には、新生代新第三紀の湯長谷層群に属する水野谷層・五安層、新生代古第三紀の白水層群に属する白坂層・浅見層がそれぞれ堆積している。そして、これらの地層が遺跡の北に位置する三森山付近を水源として大平洋に注ぐ仁井田川とその支流によって複雑に開析され、各所に小規模な河岸段丘地形をつくり出している。

本遺跡の立地する場所は、標高60～70mの舌状台地に挟まれ、小規模な扇状地状の地形を形成している。全体としては南側に傾斜しており、本遺跡を挟む両側の丘陵との比高差は、最大で約18mを測る。微地形をみると、遺跡中央には東西の尾根が走り、それより北側は時計回りに侵入する埋没谷の谷頭になっている。反対の南側は緩やかな傾斜面を形成している。本遺跡は調査前まで大部分が梨畑に利用されていたことから、旧地形の損壊が著しく、それは後述する遺構の検出状態に影響を与えている。

周辺の遺跡としては、仁井田川の対岸に馬場A・B遺跡があり、その背後の丘陵上には久原A・B遺跡や駒込遺跡が所在している。また、本遺跡の立地する丘陵の西側下部には大久保A遺跡がある。さらに、本遺跡の東側にはタタラ山遺跡が所在している。 (菅原)

第2節 調査経過

大久保F遺跡は、平成元年に財団法人いわき市教育文化事業団が実施した表面調査により、新たに発見された遺跡で、平成5年12月に福島県教育委員会の委託を受けて、財団法人福島県文化センターにより試掘調査が行われた。その結果、遺跡の主体は平安時代の集落跡と推定され、工事区内要保存面積は試掘対象範囲を東西に広げた8,100㎡とした。

平成7年度の大久保F遺跡の調査は、工事区内面積8,100㎡すべてを対象とし、平成7年4月12日から開始した。当初は調査員1名だったが、順次増員し最多で8名の体制で調査にあたった。4月下旬から重機を搬入し表土除去を進めるのと併行して、雑木の後片づけや土止め柵の設置な

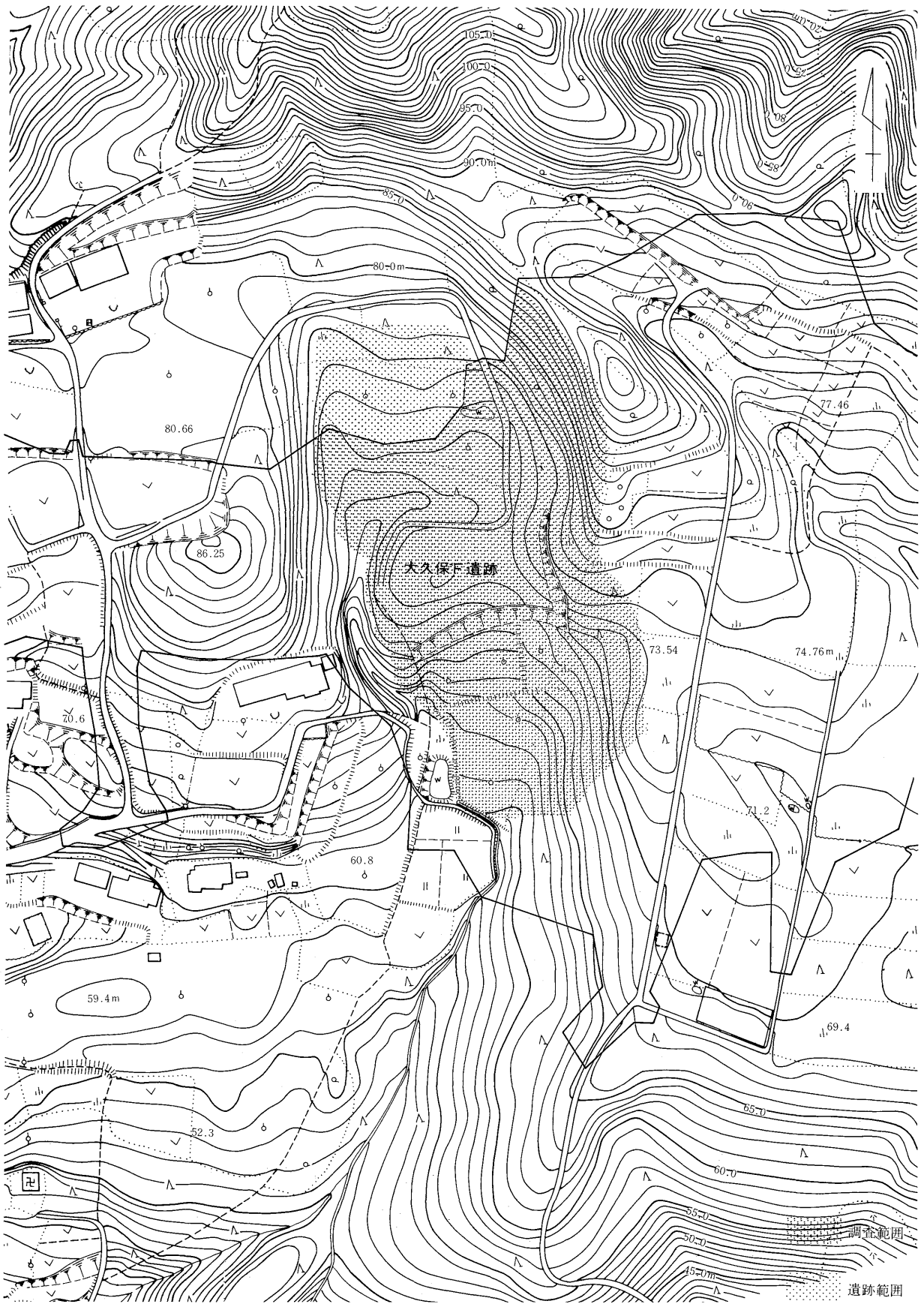


図1 遺跡周辺の地形

ど環境整備を進めた。また座標杭やグリッド杭の打設も行った。5月に入ってから遺構検出作業も進み、竪穴住居跡が検出された。同月下旬には調査区東部より遺構が検出され、遺構が東部の山林にものびる可能性がでてきた。そこで福島県教育委員会・日本道路公団仙台建設局いわき工事事務所と協議の上、東部地域の予備調査を実施した。

6月中旬には調査員・作業員を増員し、遺跡北部の遺構検出作業に努めたが、梅雨時でもありしばしば作業を中断せざるをえなかった。斜面に階段や滑り止めの措置を行い労災事故防止に努めた。同月下旬には、予備調査の結果にもとづき、調査区を東側に4,000㎡拡張した。これによって本遺跡の調査面積は12,100㎡となった。この頃から調査区中央部で土師器窯跡が、東部で須恵器窯跡が検出され、一般的な平安期の集落跡とは性格を異にすることがわかってきた。

7月中旬には拡張部分の遺構検出にあたるため、白岩堀ノ内遺跡より作業員を移動させ作業を進める一方、調査区中央部分の竪穴住居跡、土師器窯跡の掘り込み精査や記録作業を鋭意行った。この頃から竪穴住居跡の床面でロクロピットが検出されるようになり、須恵器窯跡や多くの土師器窯跡の存在とあいまって、土器生産集落としての位置づけが妥当と考えられるようになった。また、梅雨末期の集中豪雨によって、調査区から流出した濁水が下流の柳生地区の耕地に被害を与えたため、調査区の流水出口に沈砂池を掘ってこれに対応した。しかし、7月下旬には降雨量が減り、一転して調査区に散水しながら調査を進めなければならない状態になった。

8月には調査区北部から北東部にかけて、白岩堀ノ内遺跡から調査員と作業員を増員して遺構検出に努め、その結果、木炭窯跡や土坑が新たに発見され、これらの掘り込み精査も開始した。9月下旬には大久保A遺跡の発掘調査が一段落し、調査員や作業員が合流した。この体制でこれまで手をつけられないでいた遺跡南部も遺構検出を行えるようになった。北部の遺構検出作業では、北東部や北西部の斜面裾部で若干遺構が分布する以外は比較的希薄である。したがって、遺跡の中心は、調査区中央部の窪地にあることが明らかになってきた。この時点における発見遺構の内訳と数量は、以下のとおりである。竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、土師器窯跡が13基、須恵器窯跡3基、木炭窯跡が3基、土坑が6基、溝跡が2条である。作業員の増加によって遺跡内移動時の事故が予想された。そこで、いわき労働基準監督署の指導もあり、斜面階段の手すりをすべて金属パイプに取り替えて万全を期した。この頃、調査区南部のLⅦの下層から縄文土器が出土したので、この区域に人員を集中して遺構・遺物の発見に当たった。

10月に入って調査は終盤を向かえたが、調査区北西部の調査のために造成した通路付近で土師器窯跡を検出した。ほかの遺構の分布も考えられたため、通路の付け替えを行って検出作業を行い、土師器窯跡2基を検出・精査・記録した。さらに、北部谷頭付近で縄文時代の落とし穴を検出し、これも精査・記録した。

11月には遺構の記録や断ち割りなどの遺構調査の最終段階の作業を行い、調査区全体をバルーンによって空中写真撮影した。その後、遺構の配置図などの作成のため、調査区の地形を測量した。11月30日にすべての野外調査の作業を終了し、撤収した。

(水谷)

第3節 調査方法

大久保F遺跡は、12,100m²を調査対象区域として発掘調査を行った。調査開始にあたっては、調査区内に残された雑木を片づけたうえで、表土を除去した。表土除去作業にはバックホーを用い、その排土の運搬はクローラーキャリアで行った。排土置き場は当初遺跡南東部の斜面をあてていたが、調査の進展に従って次第に土量が増え土砂流出の可能性が指摘されたので、遺跡東側の平坦地に排土を移動した。表土除去終了後、人力による遺構検出作業に移った。この時の排土運搬作業にも小型のクローラーキャリアを用いた。また、作業の安全面を考慮して作業員の通路に滑り止めに砂利を敷き、斜面に階段をつくり、金属パイプで手すりを設置した。さらに、朝夕の安全指導を徹底して行い、労務災害からの回避を図った。

この遺構検出作業と併行して、調査区全域にグリッド杭の打設を行った。日本道路公団が設置した路線のセンター杭を用いて、国土座標に沿った基準点を計算し、これを測量原点とした。原点の座標は、X=+124,900、Y=+95,200である。この測量原点を基準にして、調査区を取り囲む範囲に5m方眼のグリッドを設定した。遺物の取り上げに利用するグリッドは5m単位で、西から東に向かってアルファベット、北から南に向かってアラビア数字で区分し、A1・H5・J9などと組み合わせて呼称した。また、測量原点はNS00、EW00と定め、グリッド杭の打設はトータルステーションを使用した。

土層は土質・色調・混入物の違いにより分層した。遺構外の基本土層についてはLⅠ・LⅡ……、遺構内堆積土については $\ell 1$ ・ $\ell 2$ ……という方法で表記した。また、遺物の取り上げはこれにしたがい、出土状況に応じて同一層内の上下関係を表記した。

遺構の調査にあたっては、土層観察ベルトを設定し、観察・図化を行った。竪穴住居跡の掘り込み精査は、住居跡を十字のベルトによって4分割し、それぞれ時計回りに地区を設定して出土遺物の取り上げを行った。また、遺物の取り上げはできるだけ出土層位や出土位置を考慮して行った。須恵器窯跡や木炭窯跡の掘り込み精査も基本的にはベルトを設定して行ったが、掘りにくい部分はベルトを撤去してから行った場合もある。そのほか、検出数のもっとも多い土師器窯跡など比較的大型の遺構は四分法で、小さな遺構は半截して堆積土観察を行った。とくに、多数の土器焼成窯跡に関しては、完掘後、底面と壁面の焼土化の進み具合をみるために最終的に断ち割りを行った。遺構実測図は、1/20を原則とし、遺物の出土状況や小型の遺構については1/10、溝跡については1/40で作成した。また、遺跡全体の地形図は1/200縮尺で作成した。

記録写真は遺構の状態に応じ、検出状況・土層堆積状況・遺物出土状況・完掘状況・調査状況・遺跡全景等について撮影した。使用したカメラの仕様は、35mmと6×4.5cmである。基本的には後者を主体とし、それを補うものとして35mmカメラを使用した。フィルムはモノクロとカラーリバーサルの2種類を使用した。

(菅原)

第2章 遺構と遺物

本遺跡からは、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟、土師器窯跡30基、須恵器窯跡3基、木炭窯跡4基、溝跡2条、土坑14基が検出された。出土遺物には、土師器31,816点、須恵器393点、施釉陶器1点、土製品8点、石器・石製品22点、鉄製品13点があり、ほかに木炭・窯壁が出土した。

第1節 基本層序

本遺跡の基本土層は、大半が谷地形の標高の低い場所に分布が限定される。とりわけ、遺構の密集する調査区南部の丘陵南裾部と、調査区北西部の埋没谷周辺には安定した層序の堆積が確認された。そのうち文化層と認定できるのは、L Vである。平安時代の遺構は、この層を壁としていたり、その直下で検出されたものが大半であった。成因は、須恵器・土師器窯跡の灰原土の累積と判断している。また、L VIIは縄文時代の所産と推定され、落とし穴の覆土となっている。

- L I ……10Y R4/3 にぶい黄褐色土。梨畑の耕作土と畑造成時の盛り土からなっている。
- L II ……10Y R4/2 灰黄褐色土。木炭粒・焼土粒を含む。
- L III ……7.5Y R4/3 褐色土。暗褐色粘質土粒を含む。
- L IV ……10Y R3/3 暗褐色土。
- L V ……10Y R4/3 にぶい黄褐色土。丘陵南裾部の遺構集中区では、平安時代の遺物を多量 に含む。
- L VI ……10Y R6/4 にぶい黄橙色土。無遺物層だが、木炭・焼土を微量 含み硬く締まりがある。
- L VII ……7.5Y R2/1 黒色土。調査区北部の沢部では粘性を帯びる。縄文時代の落とし穴の覆土になる。
- L VII a ……N3/ 暗灰色粘質土。
- L VII b ……5Y5/1 灰色粘質土。硬く締まりがある。
- L VII c ……10Y5/1 灰色粘質土。縄文土器片・木炭粒を含む。マンガン斑が付着している。
- L VII d ……5Y5/1 灰色粘質土。
- L VII e ……5Y6/1 灰色粘質土。砂粒を少量 含む。
- L VII f ……N5/ 灰色粘質土。マンガン斑が付着しており硬い。
- L VII g ……N5/ 灰色粘質土。
- L VII h ……10Y6/1 灰色粘質土。
- L VII i ……5Y6/1 灰色粘質土。
- L VIII ……地山を一括した。層相は様々であり、凝灰岩を多量 含む箇所もある。 (菅原)

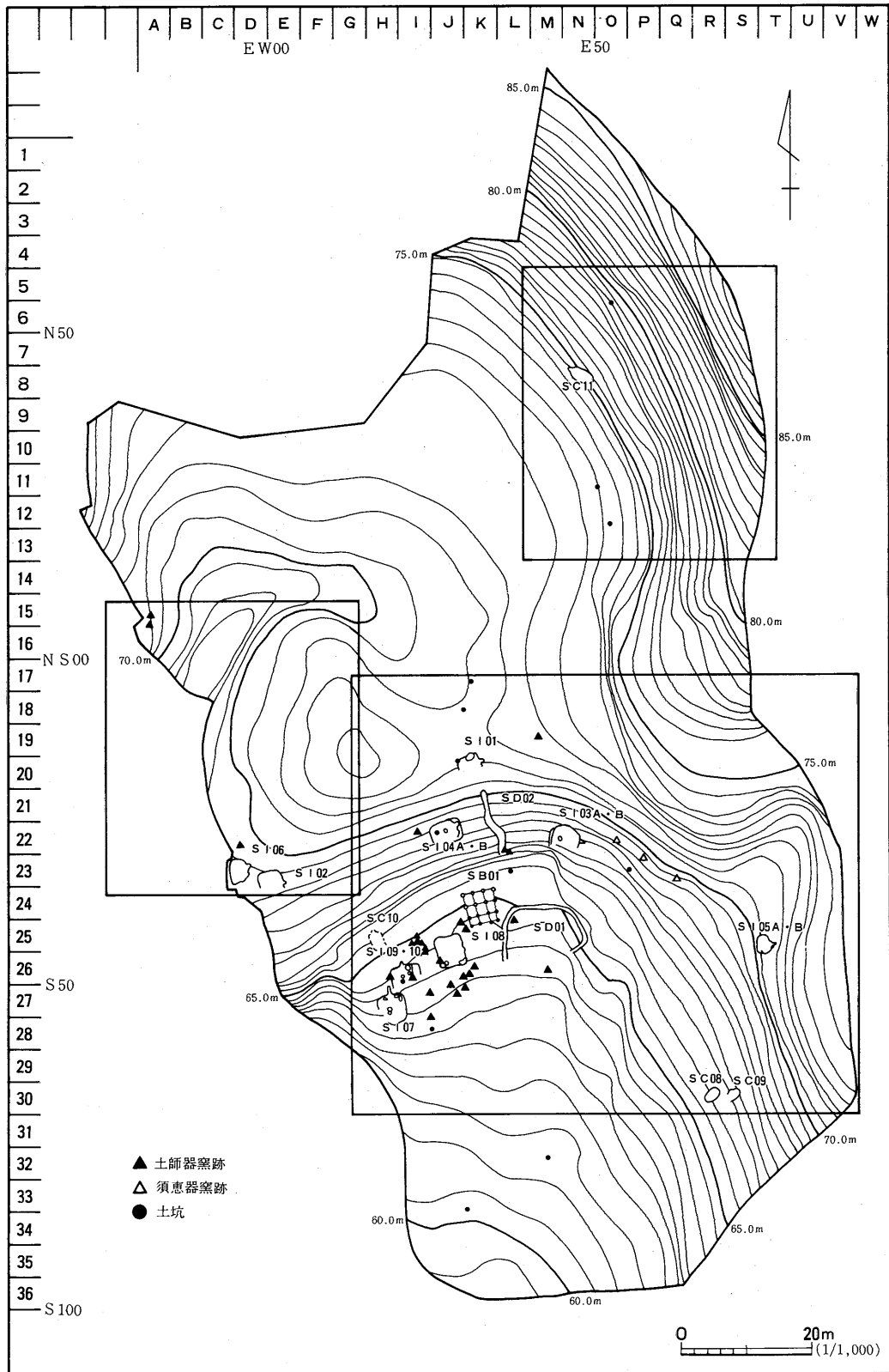


図2 遺構配置図(1)

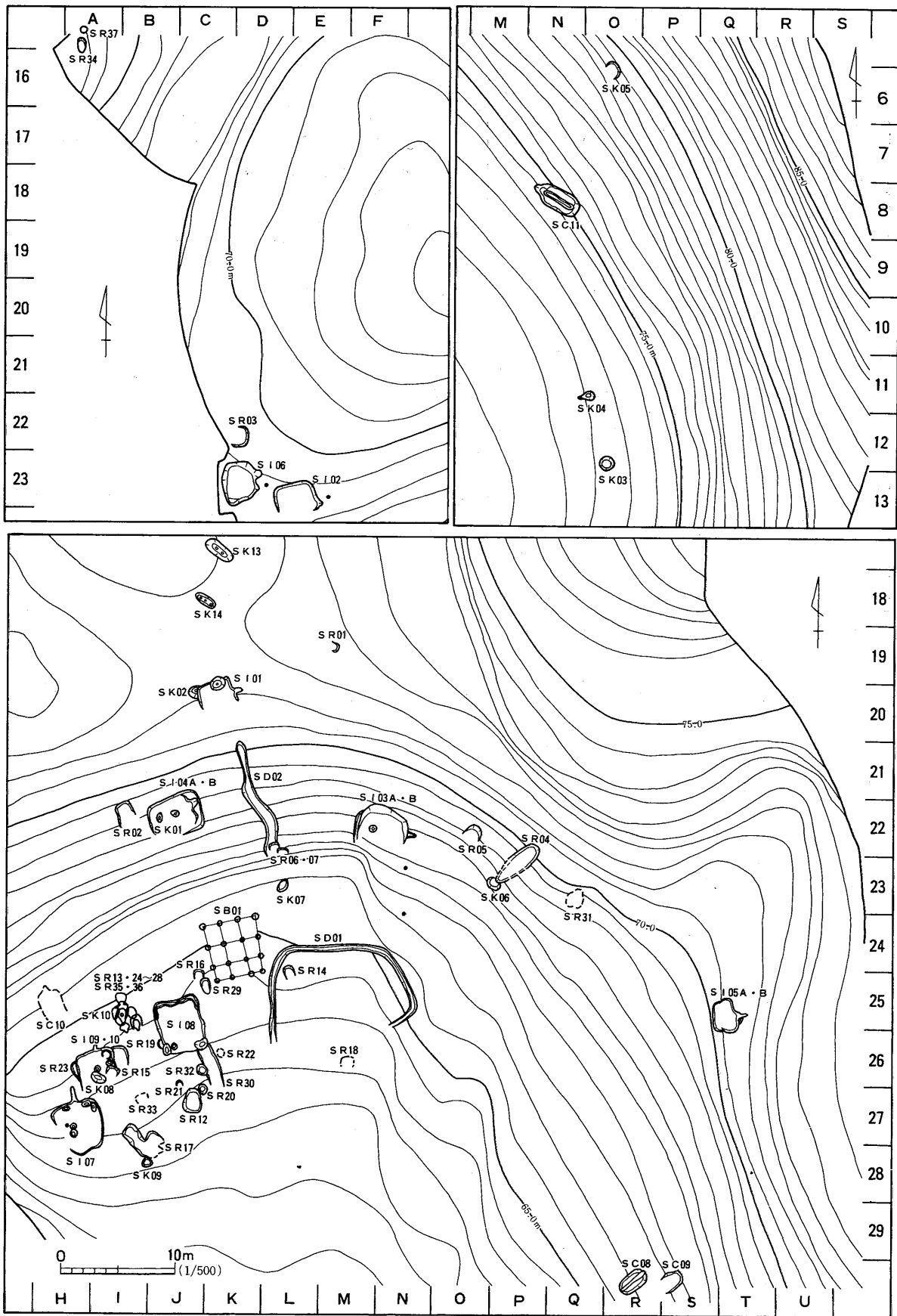
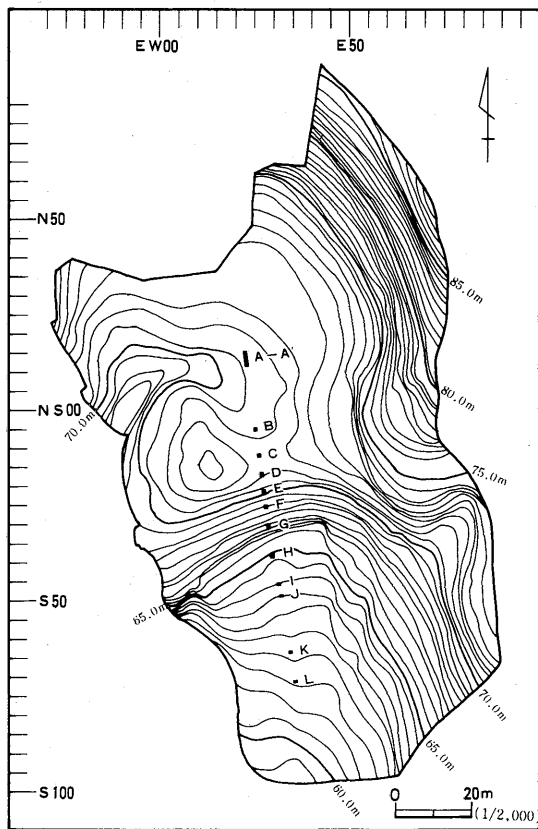


図3 遺構配置図(2)



基本土層

- L I にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 木炭粒少量, 橙色焼土粒微量
- L II 灰黄褐色土 (10YR4/2) 木炭粒多量, にぶい黄褐色砂質土塊, 橙色焼土粒微量
- L III 褐色土 (7.5YR4/3) 暗褐色粘質土粒
- L IV 黒色粘質土 (7.5YR2/1)
- L V 灰黄褐色土 (10YR4/2) 凝灰岩粒・木炭粒多量
- L VI にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒少量
- L VII 黒色粘質土 (7.5YR2/1) 黒褐色粘質土塊
- L VII a 暗灰色粘質土 (N3/)
- L VII b 灰色粘質土 (5 Y5/1) マンガン斑付着, 硬い
- L VII c 灰色粘質土 (10Y5/1) 縄文土器片・木炭粒, マンガン斑付着
- L VII d 灰色粘質土 (5 Y5/1)
- L VII e 灰色粘質土 (5 Y6/1) 砂粒少量
- L VII f 灰色粘質土 (N5/) マンガン斑付着, 硬い
- L VII g 灰色粘質土 (N5/)
- L VII h 灰色粘質土 (10Y6/1)
- L VII i 灰色粘質土 (5 Y6/1)
- L VIII 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2) 褐色粘質土粒多量

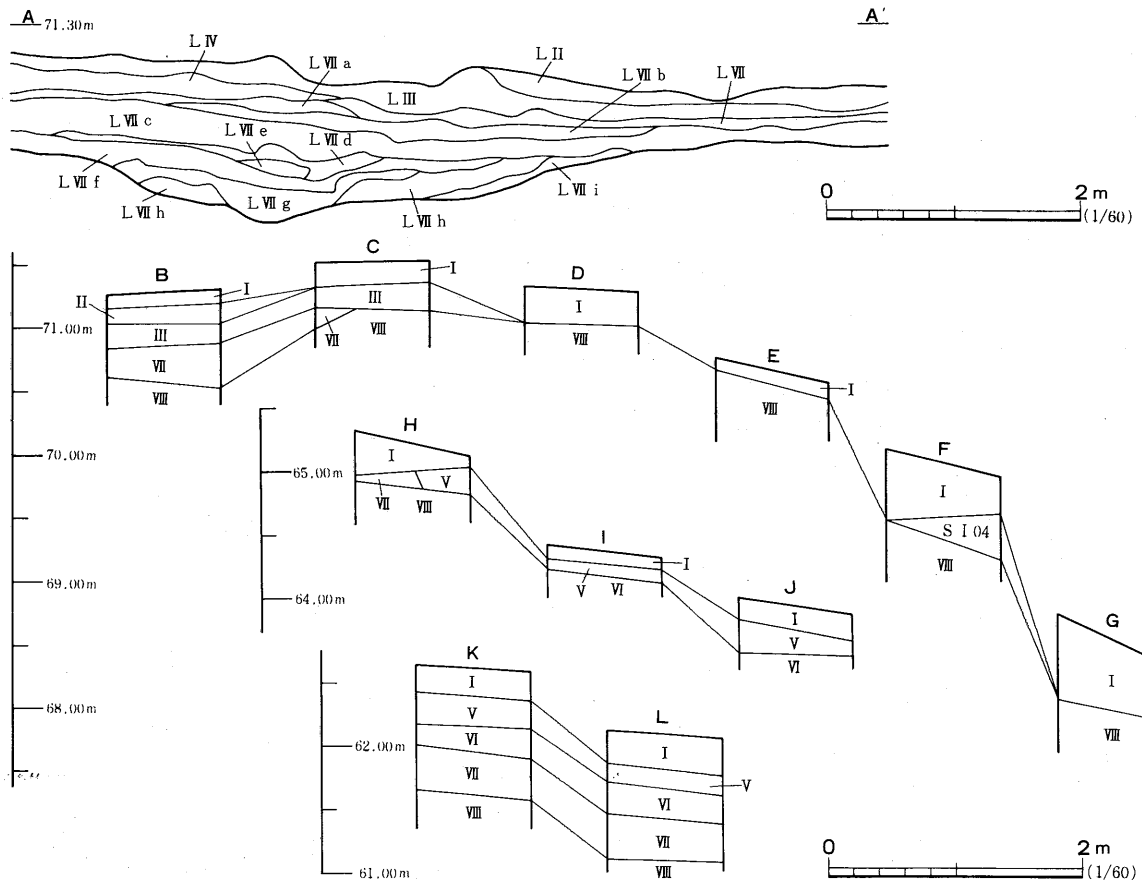


図4 基本土層図

第2節 竪穴住居跡

本調査区で検出された10軒の竪穴住居跡のうち、3～5号住居跡は床面を嵩上げて改築が行われている。そこで、この3軒については調査手順にしたがって、上層の新しい段階のものをA、下層の古いものをBとした。また、1・3・4・7・8号住居跡の5軒では、床面上からロクロピットが検出された。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図5, 写真3・4)

本遺構は、調査区中央部の南斜面上段のJ20, K19・20グリッドから検出された小型の竪穴住居跡である。検出面はLⅧ上面である。本遺構は耕作のためかなりの部分が削平され、南側の1/3はほとんど残っておらず遺存状況は良くない。住居跡の北西部で2号土坑と重複しており、本遺構が新しい。

住居跡の平面形は、南側の削平のためはっきりはしないが、カマドの位置などから概ね正方形であると推定される。各辺の長さは、北辺が2.90m、東辺が遺存値で2.20m、西辺が遺存値で1.70mである。軸線方位は、真北に対して約20°西に傾いている。周壁は削平のため浅く、もっとも良く遺存しているところである北壁でも10cmである。東西の壁の一部と南壁は消失している。

住居跡内堆積土は、遺存状況が悪く1層のみで、自然埋没か、人為堆積かは不明である。床面は、礫が露出して若干の凹凸がみられ、北から南側に向かって緩く傾斜している。貼床が施設された形跡は、認められなかった。また周溝も検出されなかった。遺存する床面積は、残存値で6.10m²である。床面では、ピットを1個検出した。北辺の中央部よりやや東よりに位置し、長径15cm、短径10cmの楕円形を呈していた。このピットの断ち割りの結果、長さ166cm、幅136cm、深さ104cmの楕円形の掘形を検出し、堆積土は9層で、①は、中央部から細長く下方に二股にのび、②はその一つからさらに下方にのびている。これに対して、③～⑨は、床面では輪郭もはっきりせず堆積の状況も複雑で多くの礫を含む層がみられ人為堆積と考えられる。①・②はロクロの軸受けの可能性が高く、このピットはロクロピットと考えられる。

カマドは、東壁中央部と推定されるところで検出された。内部の堆積土は薄く遺存状況はよくない。カマドの全体形は、周壁からやや内側を向く袖がのび、それに挟まれた部分と、壁の線より外側に突出した半円形の燃焼部があり、その奥壁から煙道がのびている。煙出しピットは確認できなかった。残存する両袖部の幅は75cm、焚口部より煙道部までの最大長は150cmである。袖部は、にぶい黄褐色土を掘形埋土として、にぶい黄橙色を構築土としてつくられている。右の袖部からは、袖石の一部が露出している。カマドの天井は崩落したが、底面は中央が緩く窪み、その部分と右の袖部の一部が焼けている。燃焼部底面の幅は約50cm、奥行き約75cmの楕円形である。底面は緩く上が

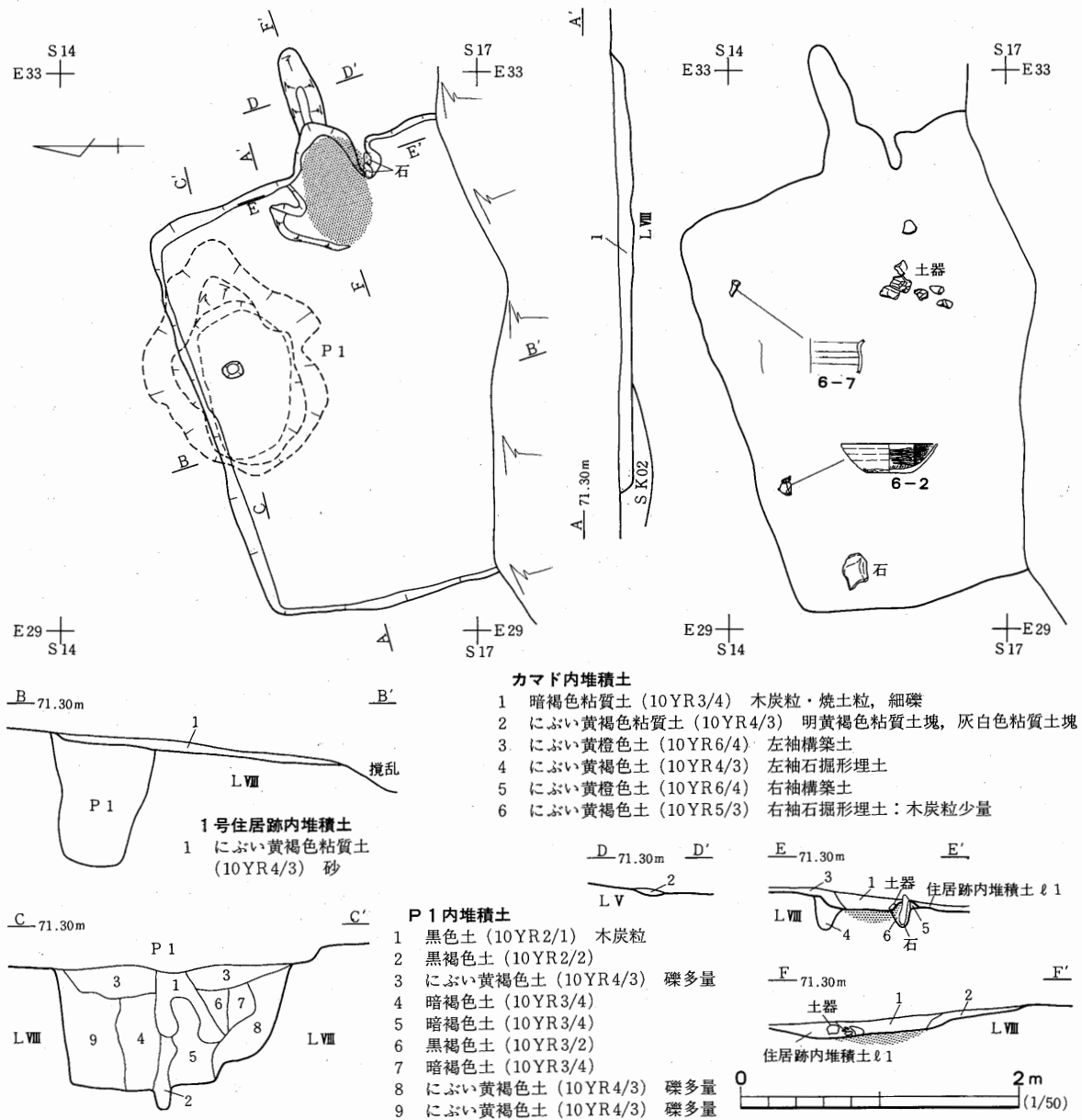


図5 1号住居跡

りながら、煙道部底面へと移行しており、煙道部底面はさらに緩い傾斜で末端にいたっている。煙道部の長さは遺存長で55cm、幅20~25cmである。

遺物 (図6, 写真51)

遺物は土師器片415点、須恵器片32点、石製品1点が出土した。図6-1~3は、床面およびカマド底部から出土した土師器の杯で、底部に手持ちヘラケズリが、また内面はコテミガキ・黒色処理がなされている。図6-4・6・8は、カマド底部から出土した甕で底部にヘラケズリ調整がみられる。図6-11は01より出土した砥石である。

まとめ

本住居跡は、カマドとロクロピットの可能性のあるピットを有した小型の堅穴住居跡であり、土器製作工房跡の可能性が高い。

(水谷)

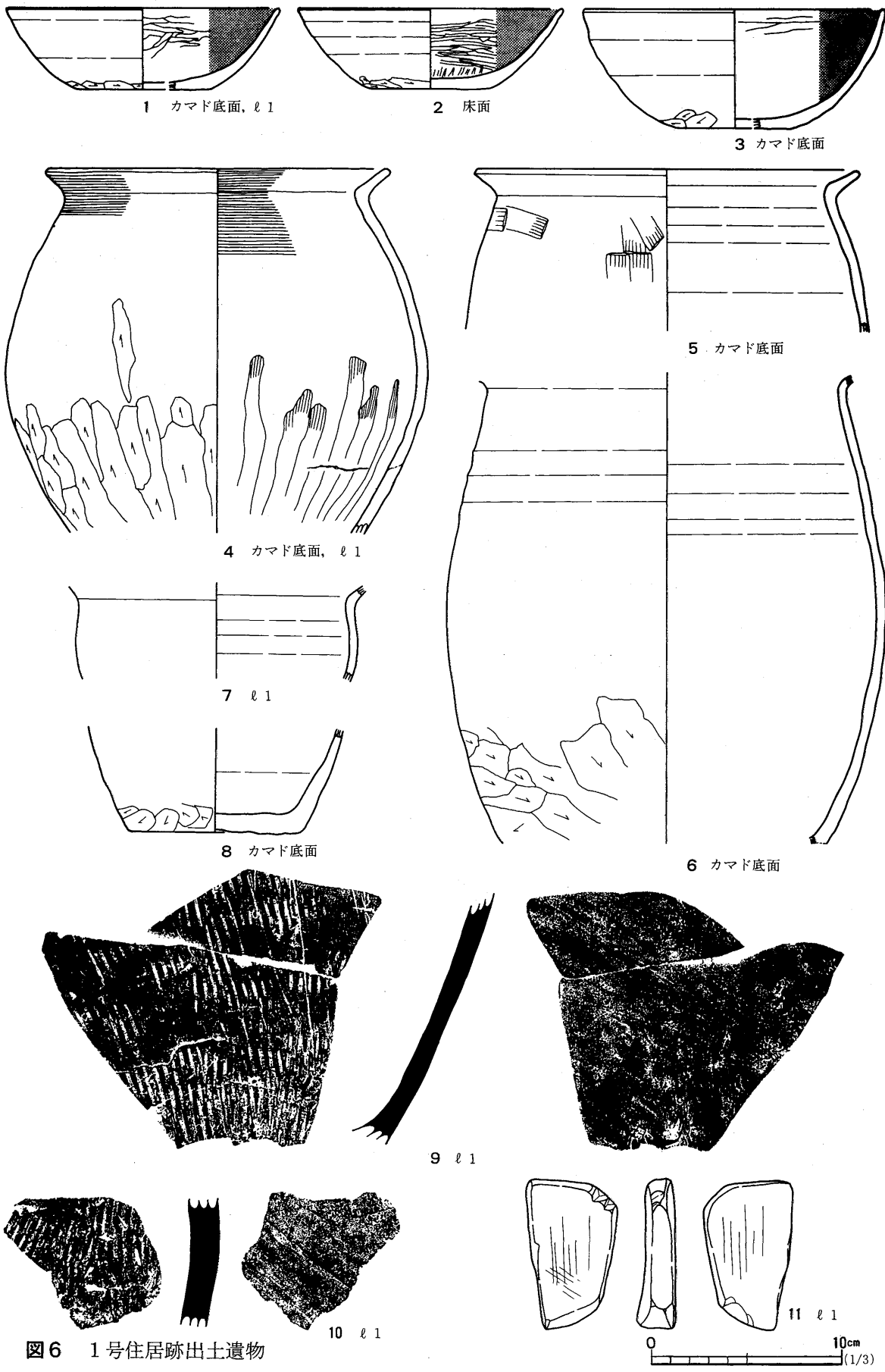


図6 1号住居跡出土遺物

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図7・8, 写真5・6)

本遺構は、D23・24, E23・24グリッドに位置し、凝灰岩の風化礫が露出するLⅧ上面から検出された竪穴住居跡である。他遺構との重複関係はない。南辺は後世の攪乱を受け遺存していない。

住居跡内堆積土は4層にわけられ、自然堆積の様相を呈している。また、床面上から多量の木炭片・焼土粒が検出されていることから、本住居跡は焼失家屋と判断している。平面形は、東西にやや長い方形状を呈しており、東西軸は3.30mを測る。床面積は残存値6.6㎡である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は遺存状態がよい北壁で最大値23cmを測る。床面は北から南側へ緩やかに傾斜しており、床面中央から北西コーナーにかけて貼床が厚さ約2～3cm施されている。ピットは6個検出されたが、支柱穴と特定できるものは確認できなかった。P1～5は長径19～39cm、深さ14～33cmの規模を持つピットである。P3はロクロピットの可能性がある。P6は床下ピットである。

カマドは南東コーナーから検出された。確認できたのは燃焼部および左袖の基底部のみであり、右袖や煙道部は遺存していない。奥壁および左袖は、小礫・木炭粒を含む灰黄褐色粘質土によって構築されている。焼土面の形状は楕円形を呈し、範囲は41×35cm、厚さ4cmを測る。

遺 物 (図8, 写真62)

図示遺物は刀子片である。ほかに、回転ヘラ切り痕を残す杯を含んだ108点の土師器片が出土した。

ま と め

本住居跡は、床面上の調査所見から判断して、火災による焼失家屋と考える。 (橋本)

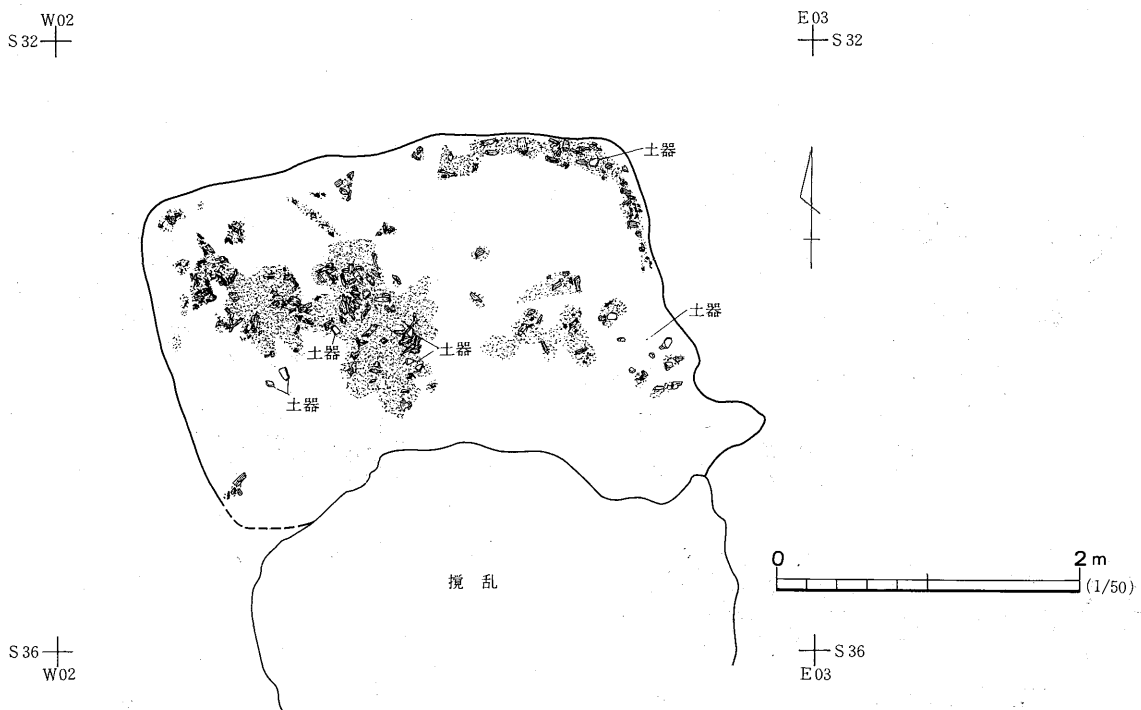


図7 2号住居跡木炭・炭化材出土状況

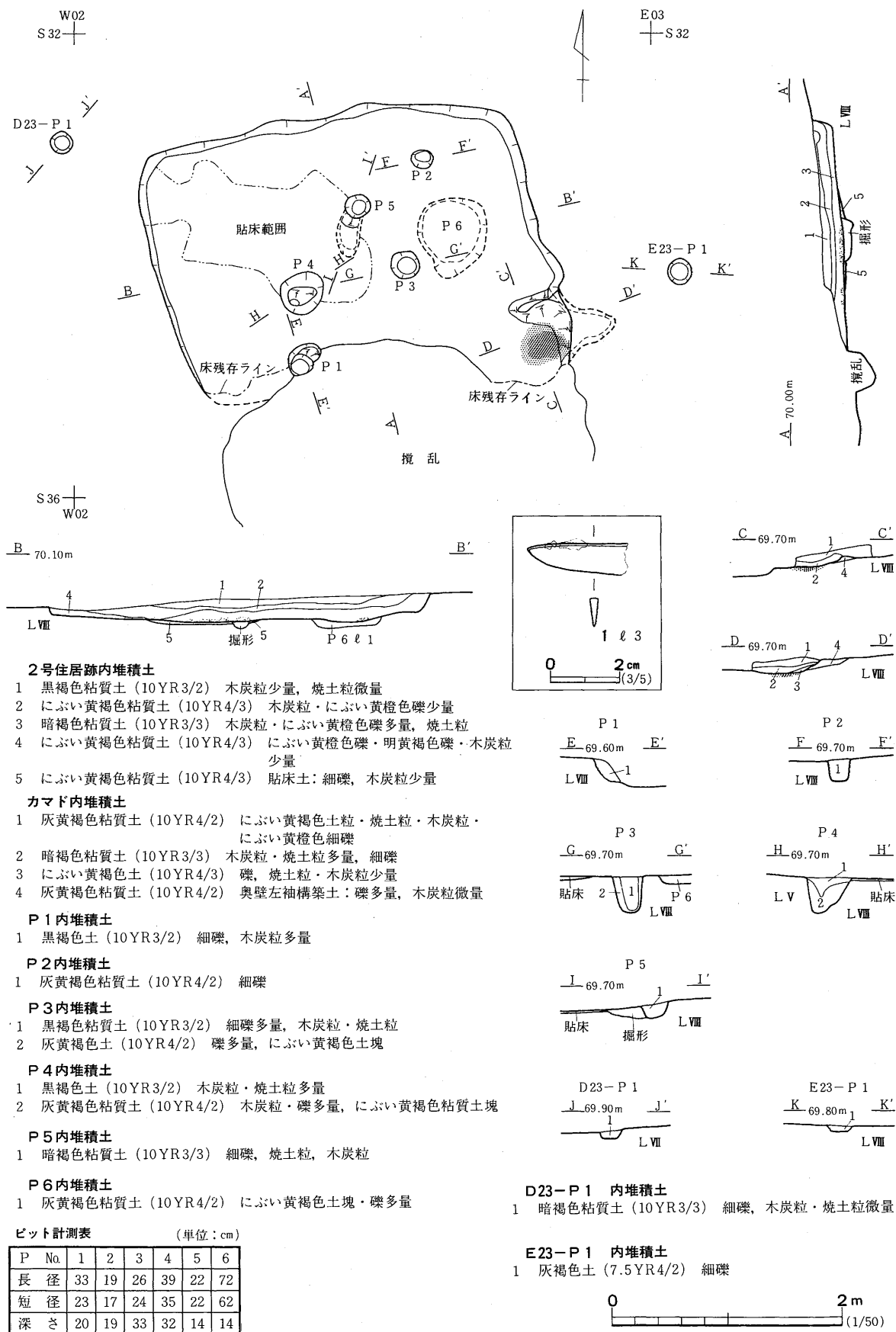


図8 2号住居跡・出土遺物

3号A住居跡 S I 03A

遺 構 (図9, 写真7)

本遺構は、南向きの丘陵斜面上で検出された竪穴住居跡である。M・N22グリッドに位置しており、LⅧ上面から検出された。下層から3号B住居跡が検出されている。南壁は、削平のためまったくのこっていない。

住居跡内堆積土は2層に分けられた。床面全体を覆う②は、住居廃絶に伴い人為的に埋め戻された土層であり、凝灰岩を多量に含んでいる。①は自然流入土である。平面形態は立地条件を勘案して東西に長い長方形であったと推測している。東西軸長は4.82mを計測し、一部削平された南北軸長は3.31mまで確認した。周壁は直立して立ち上がっており、しっかりしている。ただし、斜面上方側の北壁では、上部が外側に開く特徴が認められる。壁の高さは、もっとも遺存状態の良い北壁中央で45cmである。

床面は、3号B住居跡の埋土上面を平坦に整えて構築されている。強い踏み締まりはなく、構築方法とあわせて軟弱な印象を受ける。全体としては南側に向かって緩く傾斜している。床面積は11.0㎡を測る。

カマドは斜面上方側の北壁東よりの位置で検出された。煙道部は削平されて残っておらず、燃焼部も側壁の遺存が認められなかった。この箇所周壁の残りの良さを勘案すると、本住居跡のカマドは住居廃絶に伴って燃焼部が取り壊されたと考えられる。燃焼面は弱く酸化しており、中央に棒状の自然石を利用した支脚が据え付けられていた。

カマド以外の細部施設は、床面を丁寧に精査したが検出することはできなかった。したがって、本住居跡は、後述する改築前と違ってクロピットは持たない簡易な構造であったと判断している。

遺 物 (図10, 写真51・53・62)

遺物は、土師器片463点、須恵器片142点、鉄製品1点が出土した。遺構検出作業の段階で南側法面からの遺物の出土が目立ったが、梨畑造成時に多くが失われたと思われる。図示した12点の遺物はすべて床面から出土したもので、遺構に直接伴う。特徴的なものは、土師器杯・碗の底部切り離し技法が回転糸切りで斉一化していることである。ほかに、須恵器長頸瓶の存在が目される。鉄製品は刀子とみられるが、遺存状態が悪い。

ま と め

本住居跡は、後述する3号B住居跡の堆積土上面に原位置を保ったまま周壁を東側に押し広げる方法で構築されている。このことから、両者は同一住居の新旧関係と判断している。廃絶に際しては、カマドを取り壊して竪穴下部を埋め戻している。

出土遺物に着目すると、杯の底部切り離し技法が改築前と大きく様変わりしている点が注目される。床面の上下でこうした違いが捉えられたことは、本遺跡における土器生産内容の連続的な変遷を知る良好な資料になると考えている。

(菅原)

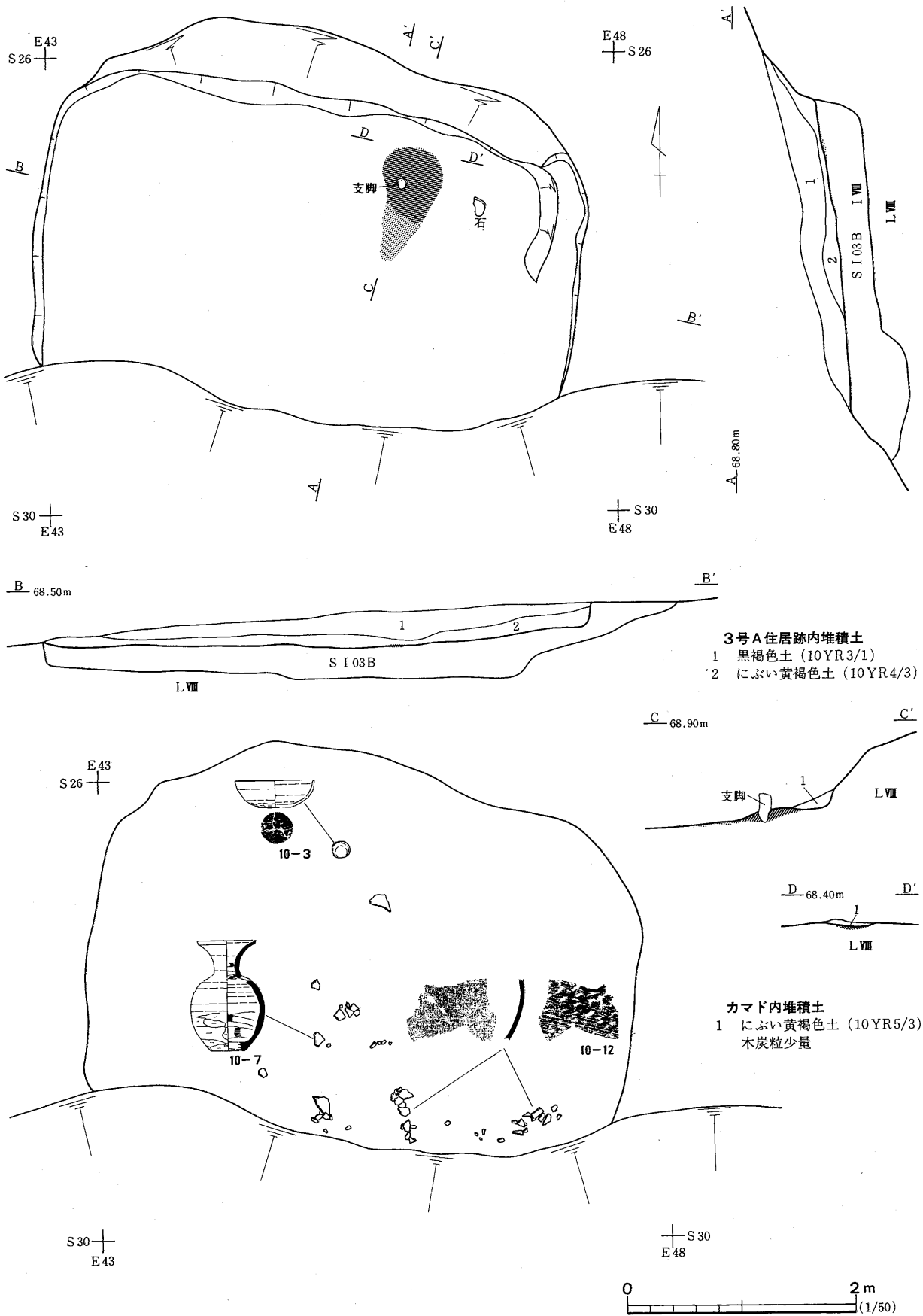


図9 3号A住居跡

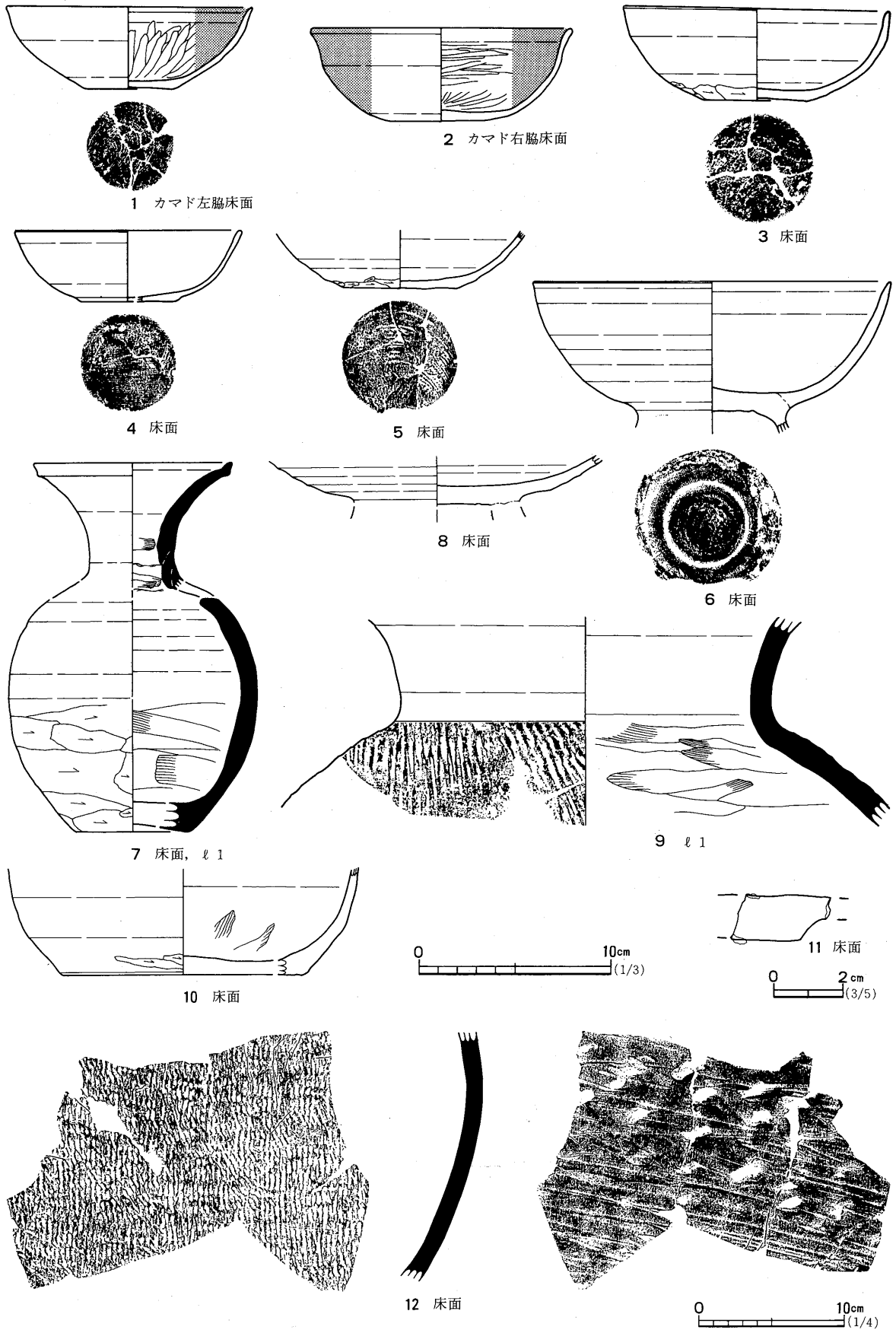


図10 3号A住居跡出土遺物

3号B住居跡 S I 03B

遺 構 (図11, 写真9・10)

本遺構は、南向きの丘陵斜面上で検出された竪穴住居跡である。M・N22グリッドに位置している。先述した3号A住居跡の調査終了後、床面構築土を掘り下げた結果検出された。改築後の住居跡と同様に、南壁は梨畑造成に伴う削平のため失われている。

住居跡内堆積土は、2層に分けられた。どちらも住居廃絶時に伴う人為堆積土であり、同時に3号A住居跡の床面構築土となっている。木炭を少量含んだ粒状の土で層が形成されているのが特徴である。平面形は方形をなし、東西軸長は4.24mを測る。南北軸長は3.04mまで確認することができた。周壁は直立しており、最大壁高は北壁で40cmを測る。

床面はLⅧ上面に構築されている。凹凸が著しく、表面には、層中に含まれる凝灰岩が露呈している。床面積は10.8㎡を測る。

カマドは東壁中央から検出された。煙道部は、燃焼部奥壁からなだらかに外傾してのびており、底面の状態では両者の間に明瞭な区別が認められない。燃焼部は、側壁がほとんど遺存せず、廃絶時に取り壊されたと考えている。また、右側壁によった位置には棒状の自然石を利用した支脚が据えられていた。なお、本住居跡ではカマドとは別に、カマド南脇の床面から焼土面が1か所検出された。断ち割りを行ったところ、最大13cmの厚さで酸化しており、長期間使用されたことが窺えた。このことから、古い段階のカマドとも考えたが、煙道部の痕跡がなく否定的に捉えている。

細部施設としては、ロクロピット(P1)が検出された。床面中央から少し西側にずれた位置にある。浅く皿状に掘り込まれた窪みの中央に、軸木を差し込んだとみられる深い孔が穿たれており、堆積土の状態から住居廃絶時に本体が取り外され、周辺の床面と共に埋め戻されたと判断している。このことに関連して注目されるのは、完形の土師器有台皿(図12—8)が壁に立て掛けられた状態で出土したことである。土器製作停止に伴い儀礼行為が執り行われた可能性を示している。また、焼土面の南壁付近からは、焼土を埋め込んだ床下ピットが1基(P2)検出された。

遺 物 (図12・13, 写真51・52・60)

遺物は土師器片921点、須恵器片95点が出土した。出土状況には、図11から読み取れるように3か所のまとまりが認められる。図示遺物だけでも18点が床面上に残されていた。須恵器の大部分は図13—1～3と同一個体の大甕片である。土師器杯に着目すると、底部切り離し技法は回転ヘラ切りで斉一性があり、底径が大きい。また、注目される器種に、土師器香炉蓋(図12—6・7)・小型長頸瓶(図12—10)といった非日常的な土器類がある。

ま と め

本住居跡はロクロピットを有した土器製作工房跡である。廃絶に際して、ロクロ本体を取り外し儀礼行為を行ったとみられる所見が得られた。遺物では、上層の3号A住居跡より確実に古い特徴が認められ、良好な平安時代の土器変遷が捉えられている。

(菅原)

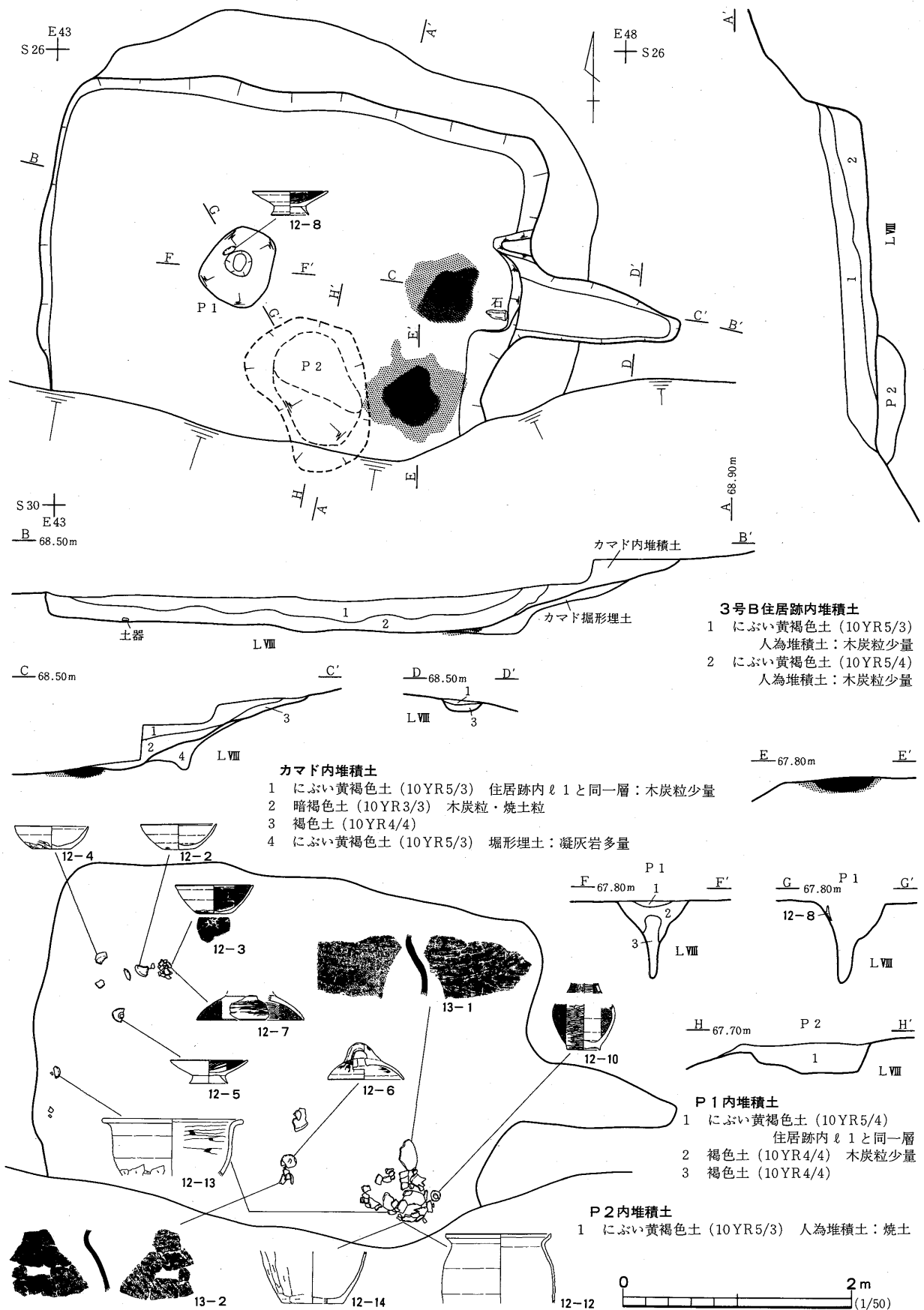


図11 3号B住居跡

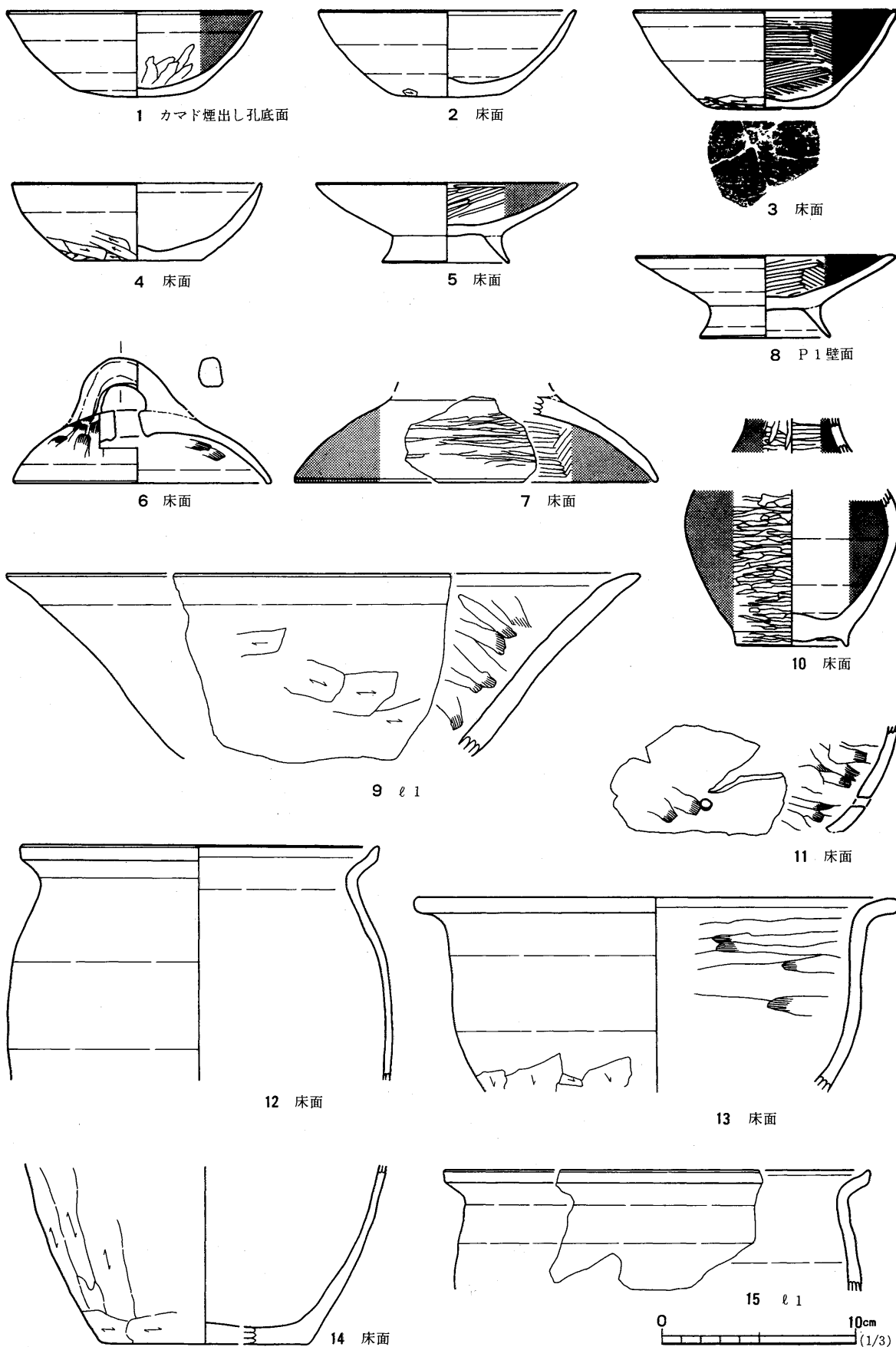


図12 3号B住居跡出土遺物(1)

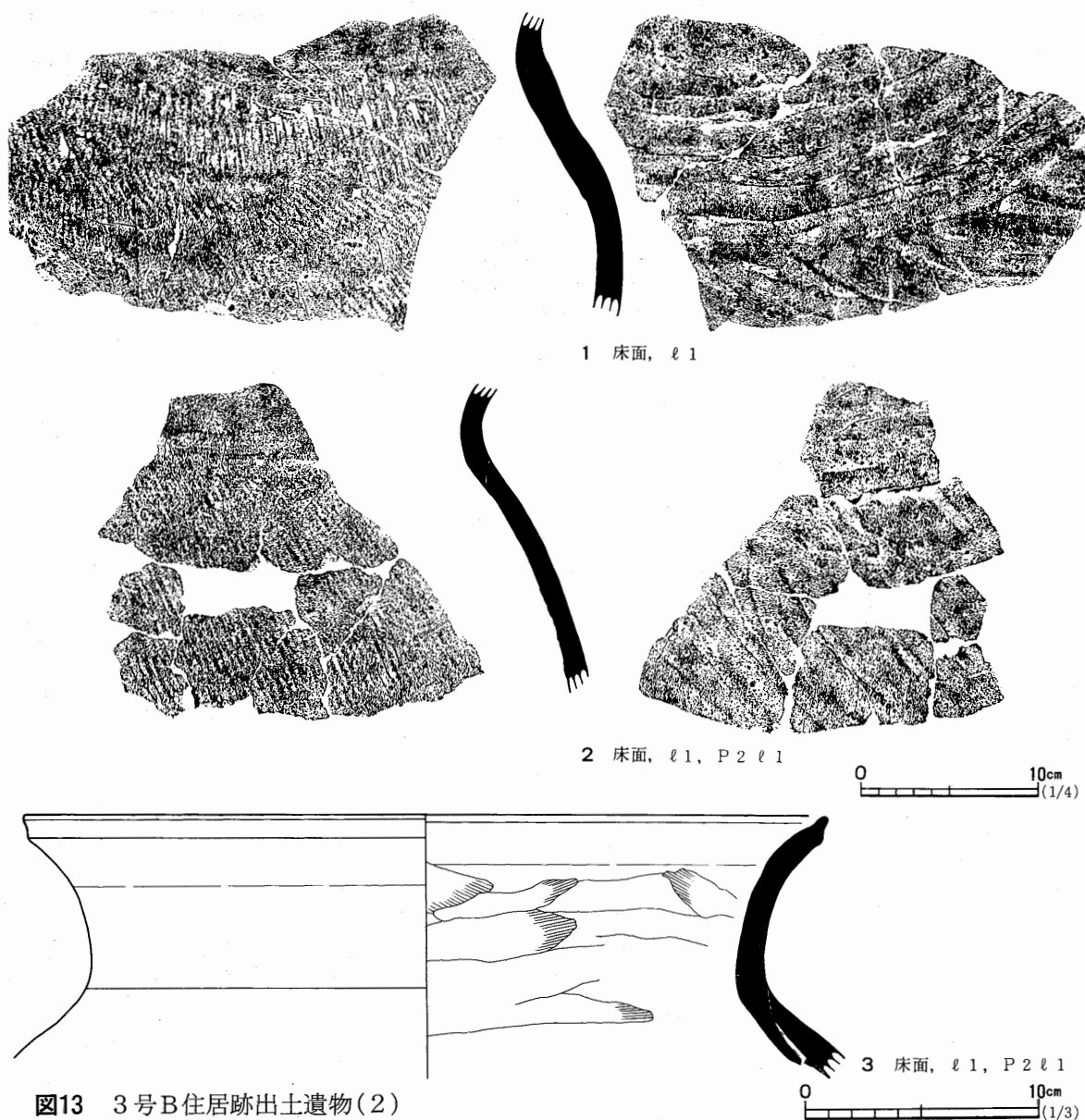


図13 3号B住居跡出土遺物(2)

4号A住居跡 S I 04A

遺 構 (図14, 写真8)

本遺構は、I 22, J 21・22グリッドに位置する竪穴住居跡である。検出面は凝灰岩の礫が多く露出するL VIII上面であり、基本層位確認に伴うトレンチ掘りの段階で検出された。周辺の地形は後世の耕地造成によって改変されており、本遺構はこれに伴って形づくられた南向きの丘陵斜面上に位置する。耕地造成のため本住居跡の南壁の一部は削平されてのこっていないが、それ以外の部分の遺存状態は良い。本遺構はS K01に切られ、下層からは改築前の4号B住居跡が検出されている。

住居跡内堆積土は2層に分けられ、自然堆積の状態を示している。平面形は東西に長い方形を呈しており、遺構の規模は東西軸4.82m、南北軸3.30mを測る。北壁と遺存する周壁から推定される南辺の midpoint を結んだ住居跡の軸線方位は、真北に対して約16°西に傾いている。壁面はほぼ垂直に

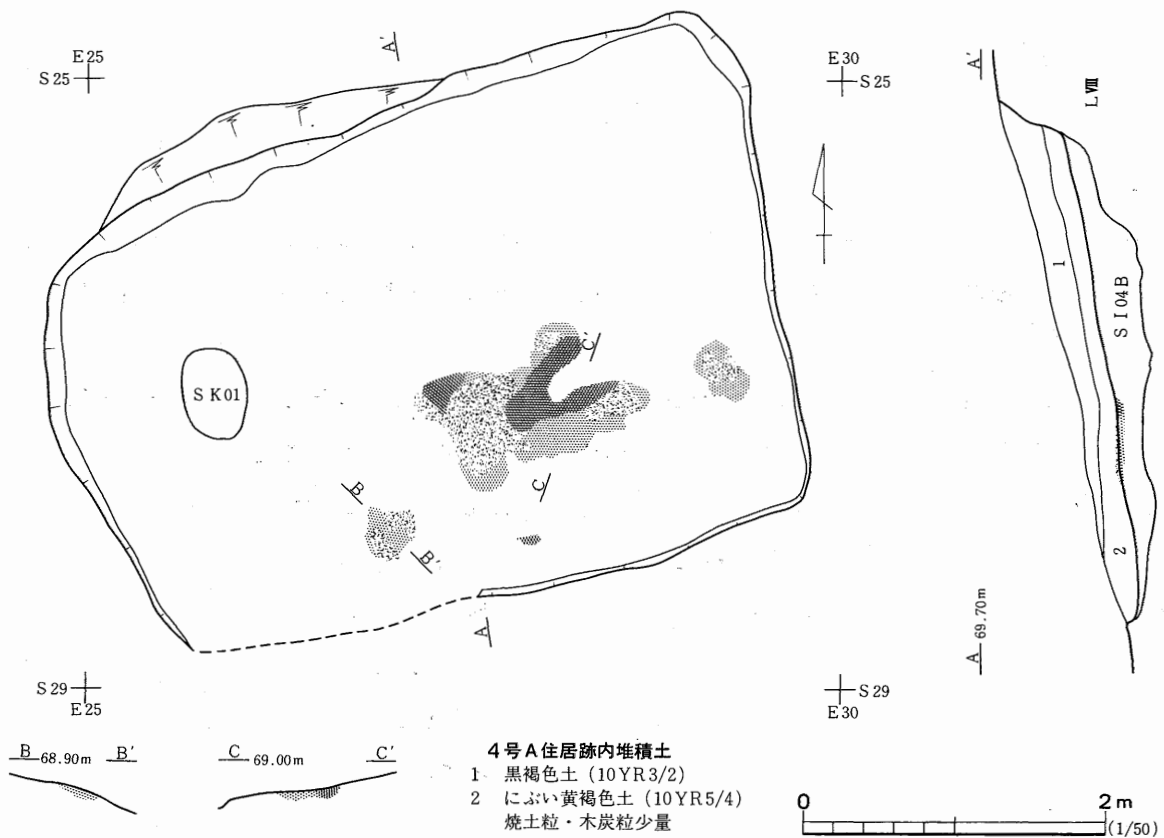


図14 4号A住居跡

立ち上がっており、壁高は遺存状態の良い北壁で最大41cmを測る。丘陵斜面下位に位置する南壁ではわずかに6cm程度残っているにすぎない。床面は、下層の4号B住居跡を埋め戻した土層の上面に構築されている。床面は全体として北から南側へ向けて傾斜しており、比高差にして最大68cmにも及んでいる。床面積は約14.1㎡を測る。焼土面は、床南半部で3面確認された。焼土面の形状は、楕円形および不整形を呈しており、酸化範囲は135×88cm、44×27cm、39×35cmを測る。焼土の厚さは4～7cmであり、焼土面はいずれも木炭粒の薄層に覆われていた。

支柱穴・貯蔵穴と推定されるピットおよびカマドは、床面上を丁寧に精査したが検出されなかった。したがって、本住居跡は細部施設を有しない簡易な構造を持った住居跡と考えられる。

遺物

遺物は土師器片37点が出土しているが、遺存状態が悪くいずれも細片のため図示できなかった。しかし、回転糸切り痕をのこす杯の破片が1点あり、それによっておおよその時期の推定を行うことは可能である。

まとめ

本住居跡は、ロクロピットを有する下層の4号B住居跡を埋め戻し、その上面に構築されている。3号A住居跡と同様に、原位置を保ったまま周壁を東側へ拡張することによって構築していることから、同一住居の改築であると判断した。カマドおよびピットなどの細部施設は認められないが、不整形な焼土面を床面上に持つ土器製作に伴う工房的性格を持った施設と考えられる。 (橋本)

4号B住居跡 S I 04B

遺 構 (図15, 写真11・12)

本遺構は、調査区中央の南向きの丘陵斜面上で検出された竪穴住居跡である。I 22, J 21・22グリッドに位置している。先述した4号A住居跡の精査終了後、床面構築土を掘り下げた結果、検出された。改築後の4号A住居跡と同様に、南壁および東壁の一部は後世の削平によって消失しており、SK01に切られている。

住居跡内堆積土は2層に分かれ、人為堆積の様相を呈している。平面形は、北西コーナー一部を除き遺存している周壁から判断すると、東西にやや長い方形を呈していたと推定される。規模は東西軸4.00m、南北軸3.20mを測る。住居跡の軸線方位は、真北に対して11°西に傾いている。

周壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北壁で最大値76cmを測る。カマド周辺から北壁および西壁の一部にかけては凝灰岩の礫および岩盤が露出している。床面はこの凝灰岩の礫層を方形に掘り込んだ掘形を埋め戻した土層によって構築されている。カマド周辺に平坦な範囲が認められるが、それ以外では北から南側へ緩やかに傾斜している。床面積は周壁直下で遺存値約10.6㎡である。

カマドは東壁の北東コーナー寄りで検出された。煙道部および燃焼部が確認されただけで袖部は遺存していないことから、改築に伴って取り壊されたものと考えられる。燃焼部はレンズ状に窪んでおり、中央部から奥壁へかけて緩やかに立ち上がっている。煙道部からは袖石の一部として使われたと考えられる被熱した凝灰岩の丸石が出土している。カマド内堆積土は2層に分かれ、赤褐色焼土塊を多量に含む。2からはこの袖石とともに2個体の土師器杯片が出土している。燃焼部底面から煙道部にかけて内壁は加熱により強く酸化していた。焼土は燃焼部底面で厚さ12cmを測る。

細部施設としては、床下の方形状を呈する掘形を掘り込む段階でロクロピット(P1)が1個検出された。レンズ状に窪まれたピットの中央に軸木を差し込んだと考えられる径15cmの小穴が検出された。このP1中央の小穴は岩盤を穿って掘り込まれており、内壁には縦方向に刻まれた数条の工具痕が確認された。同様の工具痕は、掘形内の壁面からも数多く確認されている。掘形の規模は東西2.95m×南北2.50mを測る。

カマドおよびロクロピット以外の細部施設は、床面を丁寧に精査したが検出されなかった。

遺 物 (図15, 写真53)

本住居跡からは土師器片85点、須恵器片5点が出土している。遺構に伴う遺物としては、ロクロ調整の土師器杯がカマド燃焼部から2個体出土している。図示した須恵器杯は掘形底部より出土したものであり、上述の杯と比較すると底径がやや大きな数値を示している。

ま と め

本住居跡は、床面中央にロクロピットを有した土器製作工房跡である。住居構築に際して床下にやや規模の大きな方形の掘形を掘り、その掘形内に焼土・木炭粒が多量に混入する土層を埋め戻すことによって床面を構築していることが特徴である。 (橋本)

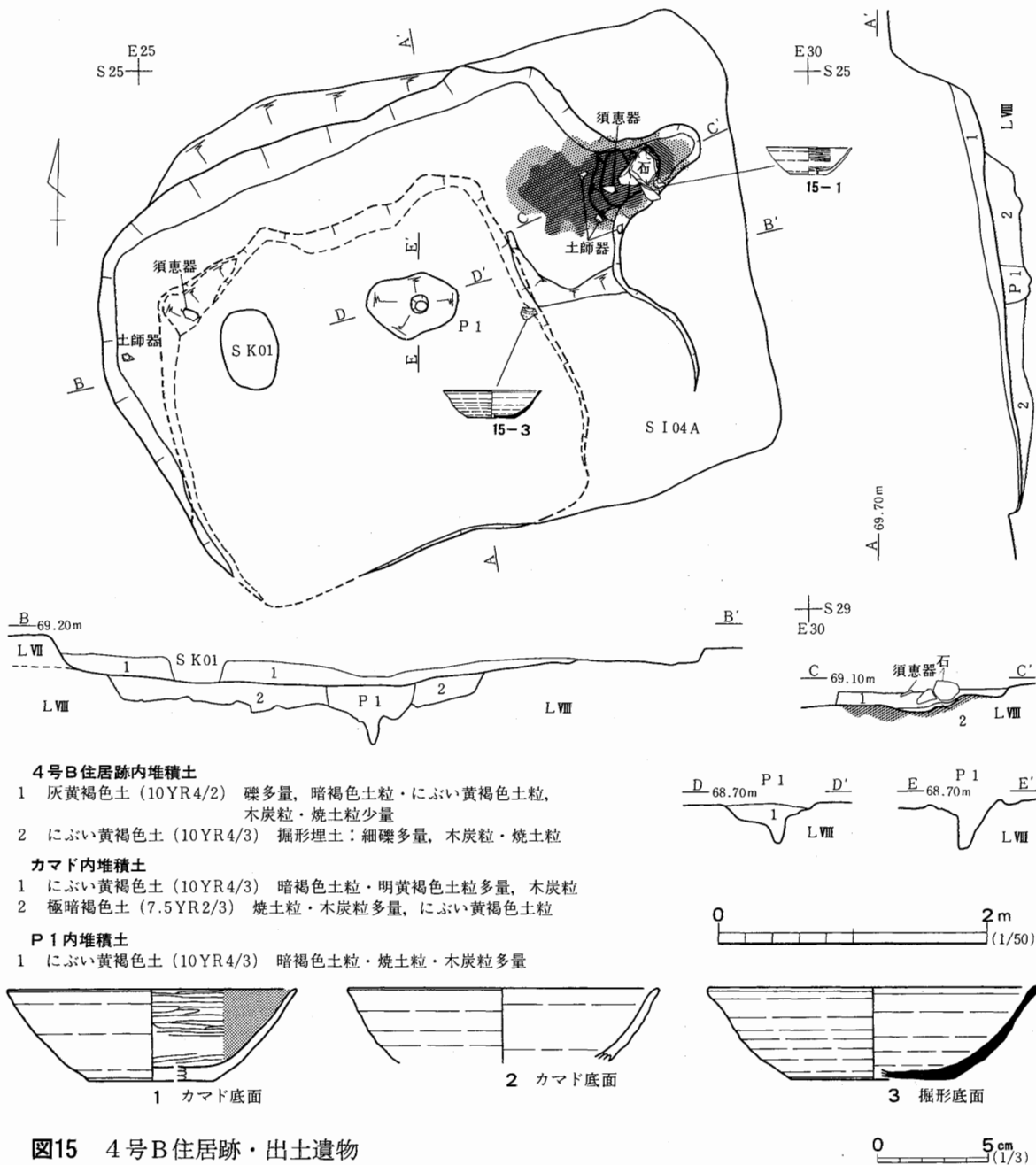


図15 4号B住居跡・出土遺物

5号A住居跡 S I 05A

遺 構 (図16, 写真13)

本住居跡は、調査区南東部のS 25・26, T 25・26グリッドから検出された小型の竪穴住居跡である。検出面は、西側に傾斜した緩斜面上のL VIII上面である。西側は、削平されている。L VIIIと住居跡内堆積土は、良く似た土層なので、容易には輪郭の確認ができなかった。カマドおよび煙道部の炭化物を含む黒い土を手掛かりに輪郭を確認することができた。

住居跡内堆積土は、2層に分けることができた。①は暗褐色粘質土で、壁崩落土および表土の流入による初期堆積の自然堆積土である。②は、褐色土で①にくらべ粘性は弱い、レンズ状堆

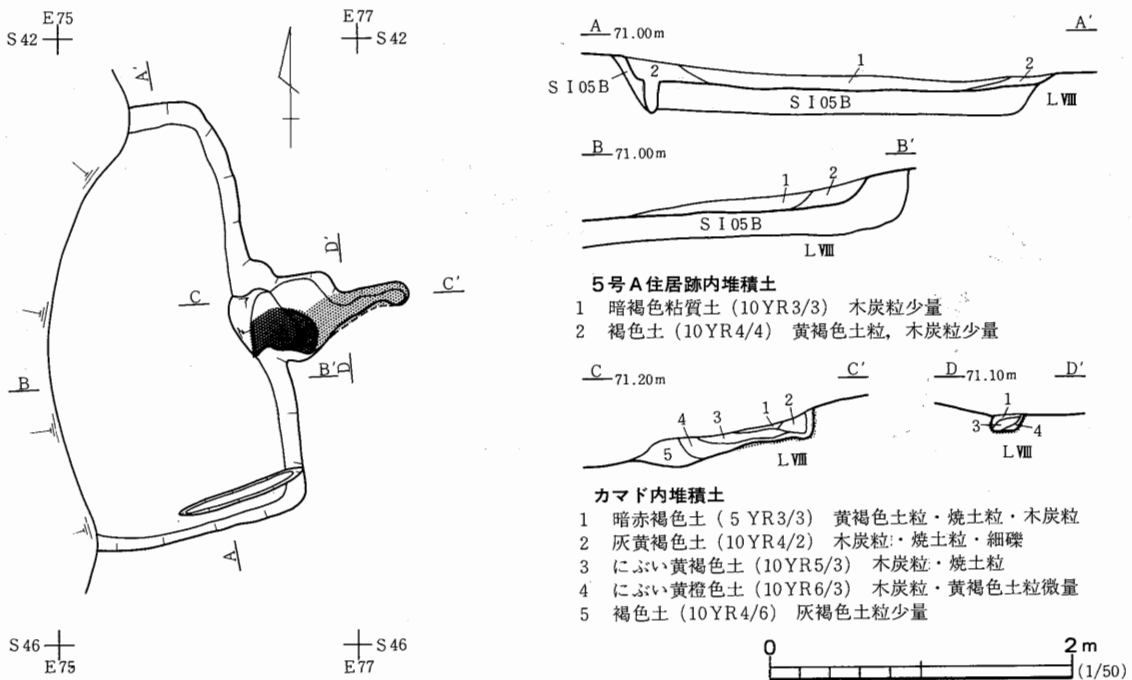


図16 5号A住居跡

積であることから自然堆積である。

平面形は、西辺が欠落し、北辺および南辺も一部の確認であることから明確ではないが、南北にやや長い方形を呈していたと推測される。各辺の長さは、東辺2.72m、南辺1.42m、北辺0.42mを測る。

周壁は、やや外傾しながらも上方に立ち上がっている。周壁の中で、最も良く遺存している東壁から南東コーナーで20cmの高さがある。

床面は、5号B住居跡を埋めた土層の上面に構築されている。強い踏み締まりはなく、平坦だが北西方向に少し傾斜している。

本住居跡のカマドは、東辺中央部から検出された。カマドから煙道部がまっ直ぐに明瞭にのびているのが確認された。本住居跡のカマドは、ほかの住居跡のカマド燃焼部が住居床面に構築されているのに対し、カマド燃焼部が壁面の外側に構築されている点がほかと異なる。カマドの規模は、燃焼部で長さ74cm、幅70cm、煙道部で長さ46cm、幅18cmを測る。カマド燃焼部の焼けは弱く、締まりも弱い。燃焼部奥壁には、土師器甕口縁部が据え付けられていた。柱穴は、床面を丁寧に精査したが検出されなかった。

細部施設としては、5号B住居跡の床面の掘り下げ時に南壁中央部より東壁にかけて直線的に細いクサビ状の溝が確認された。位置および形状から壁溝と思われる。そのほかには細部施設を検出することができなかったことから、本住居跡は、改築前と同様にロクロピットを持たない簡易な構造であると判断している。

遺物 (図17)

遺物は、土師器片175点が出土した。遺物のほとんどは、床面およびカマド内から出土しており、

図示した2点も同様の出土状況を示している。したがって、遺構に直接伴う。

遺物は、いずれも遺存状態が悪い。有台碗は、施釉陶器の模倣である。底部の切り離し方法は判然としない。長胴形の甕は、ロクロ調整によるものである。

まとめ

本住居跡は、カマド以外の細部施設を持たない5号B住居跡の上面に構築されている。また、原位置を保ったまま周壁がわずかに北へ移動しているだけであることから、同一住居の改築と判断した。出土した土師器の特徴から、帰属時期は、平安時代前期終りから中期初めに位置づけられると考えている。

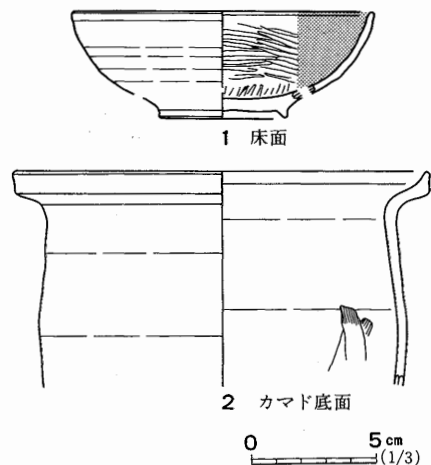


図17 5号A住居跡出土遺物

(岡田)

5号B住居跡 S I 05B

遺 構 (図18, 写真14)

本住居跡は、調査区南東部のS25・26、T25・26グリッドから検出された小型の竪穴住居跡である。先述した5号A住居跡のカマドの断ち割り時に、本住居跡のカマドの焼土面を確認し、床面構築土を掘り下げた結果検出された。

住居跡内堆積土は、2層に分けることができた。どちらも住居廃絶に伴って埋め戻された人為堆積土であり、同時に改築後の住居では、床面構築土となっている。

平面形は、南北にやや長い長方形を呈している。各辺の長さは、東辺2.78m、南辺1.82m、西辺2.64m、北辺1.72mを測る。

周壁は、やや外傾しながらも上方に立ち上がっている。周壁の中で、もっとも良く遺存している東壁から南東コーナーで36cmの高さがある。

床面は、強い踏み締まりがなく概ね平坦に整地されているが、北西方向にわずかに傾斜している。

本住居跡のカマドは、東辺中央南よりから検出された。本住居跡のカマドは、5号A住居跡のカマド同様、燃焼部が壁面の外側に突き出している。カマドの規模は、燃焼部で長さ78cm、幅88cmを測る。燃焼部奥壁は残りが悪く、煙道部も検出されなかった。しかし、削平された痕跡がないことから、煙道は、奥壁から直上していたと推定される。住居廃絶時にカマドは破壊されている。南壁の東側および西壁中央部からは、カマドの袖石を砕いたと思われる石が出土している。

柱穴は、床面を丁寧に精査したが検出できなかった。

カマド以外の細部施設は、床面を丁寧に精査したが検出することができなかった。したがって、本住居跡は、細部施設を持たない簡易な構造であると判断している。

遺 物 (図18)

遺物は、土師器片159点が出土した。遺物のほとんどは床面およびカマドから出土しており、図

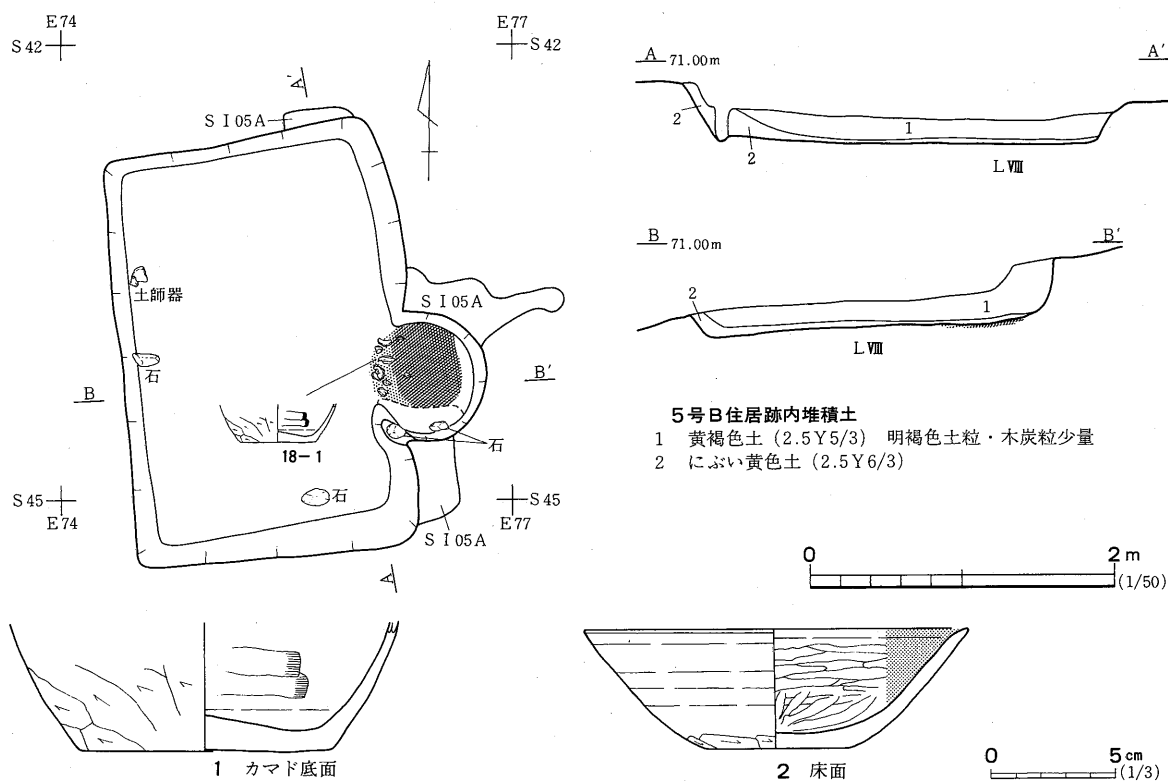


図18 5号B住居跡・出土遺物

示した2点の遺物も同様である。したがって遺構に直接伴う。

まとめ

本住居跡は、カマド以外に柱穴や貯蔵穴等の細部施設を持たない簡易な構造である。残存状況が比較的良いにもかかわらず細部施設が検出されなかったことは、特徴的である。

本住居跡の営まれたのは出土した土師器の特徴から、平安時代前期終りから中期初めに位置づけられる。(岡田)

6号住居跡 S I 06

遺 構 (図19・21, 写真15・16)

本遺構は、調査区中央部の上位丘陵西端部、C・D23グリッドから検出された中型の竪穴住居跡である。検出面は凝灰岩の風化礫をほとんど含まないLⅧ上面であり、周辺の地形は東から西側へかけて緩やかに傾斜している。遺存状態は良好である。本住居跡の南東約1.40mにS I 02, 北約1.30mにS R 03が位置しているが、他遺構との重複関係はない。

住居跡内堆積土は7層に分かれ、外部からの流れ込みによる自然堆積の状態を示している。このうち東壁直下に三角堆積する⑦は、住居廃絶時に投棄されたカマド構築土と考えられる。平面形は、南西コーナー部がやや膨れた隅丸方形を呈しており、規模は南北軸3.61m×東西軸2.92mを測る。周壁直下の計測値による床面積は約6㎡である。北壁と南壁の中点を結んだ住居跡の軸線方位は、真北に対して約6°西に傾いている。

周壁は、検出面であるLⅧを掘り込み、南半部は凝灰岩の岩盤にまで達している。壁面は、東壁を除きいずれも急角度に立ち上がっており、壁高はそれぞれ東壁79cm、西壁64cm、南壁43cm、北壁84cmを測る。また、南壁の下半部では凝灰岩の岩盤が露出している。

床面は、南から北へかけて緩やかに傾斜しており、比高差にして最大25cmを測る。南半部は凝灰岩の岩盤を床面として使用しており、東壁中央の出入り口部からカマド周辺へかけて強い踏み締まりが確認された。床面上からピットは総数5個検出されたが、主柱穴およびロクロピットと推定されるピットは確認されなかった。南壁側に位置するP1・2は凝灰岩の岩盤を掘り窪めて造っており、いずれも貯蔵穴的な性格を持ったピットと考えられる。規模はそれぞれ39×26cm、70×48cmを有し、深さ8cm、16cmを測る。そのほか、床面上からは壁溝などの細部施設は確認されなかった。

カマドは、南東コーナー寄りの東壁から検出された。燃焼部および煙道部のみが確認されただけであり、それ以外の部分は失われてのこっていない。酸化面は燃焼部底面から煙道部にかけて認められ、焼土の厚さは燃焼部底面で7cmを測る。燃焼部中央には花崗岩の支脚が地山に差し込まれた状態で正立しており、被熱によって強く酸化していた。カマド断面の観察から、煙道部は本来地山をトンネル状に掘り込んで構築されていたと推定される。また、燃焼部を取り囲むように位置するP3～5は、袖石を埋め込んだピットと判断している。

カマド左脇の東壁中央部には、礫を含まないLⅧを掘り込んで構築された階段状の施設が位置しており、土師器片を含む多量の焼土粒・木炭粒が検出面から床面にかけて帯状に壁面全体を覆っていた。袖石の一部と推定される被熱した円筒状の花崗岩等が含まれることから、この東壁を覆うⅦ7は住居廃絶に伴って取り壊されたカマドの構築土と考えられる。ほぼ等間隔に掘り込まれた3段の平場を有し、遺構外へ方形状に張り出す形状や規模などから、出入り口と判断している。

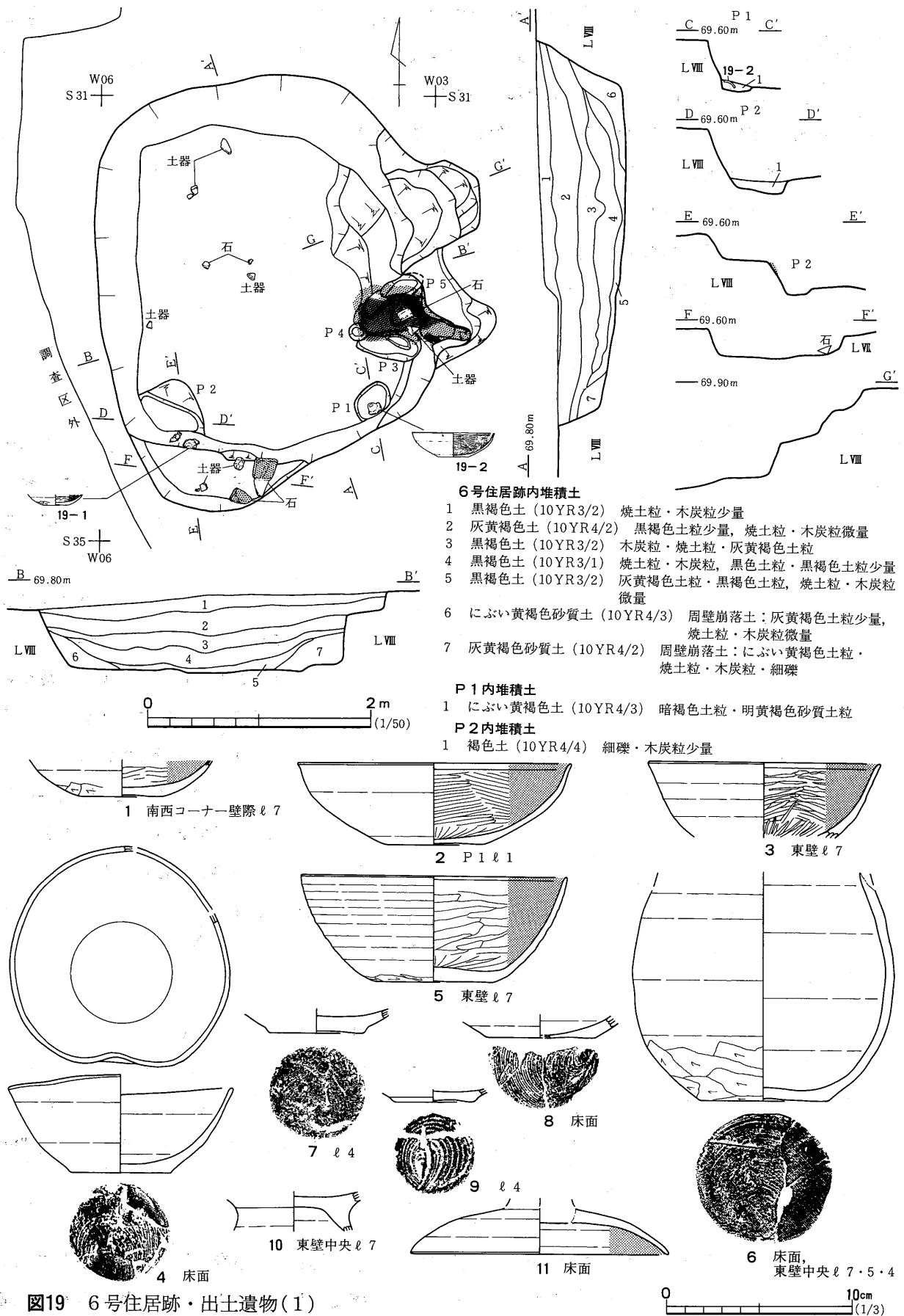
その他、南壁中央から西側へかけて三角形にLⅧを掘り広げた平場が検出された。床面からの高さは中央部分で17cmを測り、平場の規模は、長さ1.44m×奥行き0.40mである。この平場から土師器の杯片と2個の亜角礫が出土している。いずれも片側のみが強く被熱しており、カマドの袖石に利用されたものと考えられる。この階段状の平場は、住居機能時には南西コーナーに位置するP2と連動した棚状の施設として使用されていたと考えられる。

遺物 (図19・20, 写真53・59～61)

遺物は、土師器片1,328点、土製品1点、石器1点が出土している。図示した19点の遺物は、いずれも土師器の杯片と甕片である。このなかで床面および住居廃絶時に形成されたと考えられるⅦ7出土の土師器杯に着目すると、底部の切り離し技法は回転糸切りのものが主体を占めているが、再調整が底部にまで及んでいることによって切り離し不明のものや回転ヘラ切りによるものが一部混在している。また、床面出土の石器の性格は明らかにしえなかった。

まとめ

本住居跡は、カマド脇に位置する出入り口や棚状施設が確認された遺存状態の良好な堅穴住居跡である。廃絶に伴ってカマドを壊しており、このカマド構築土が東壁中央に設けられた出入り口部



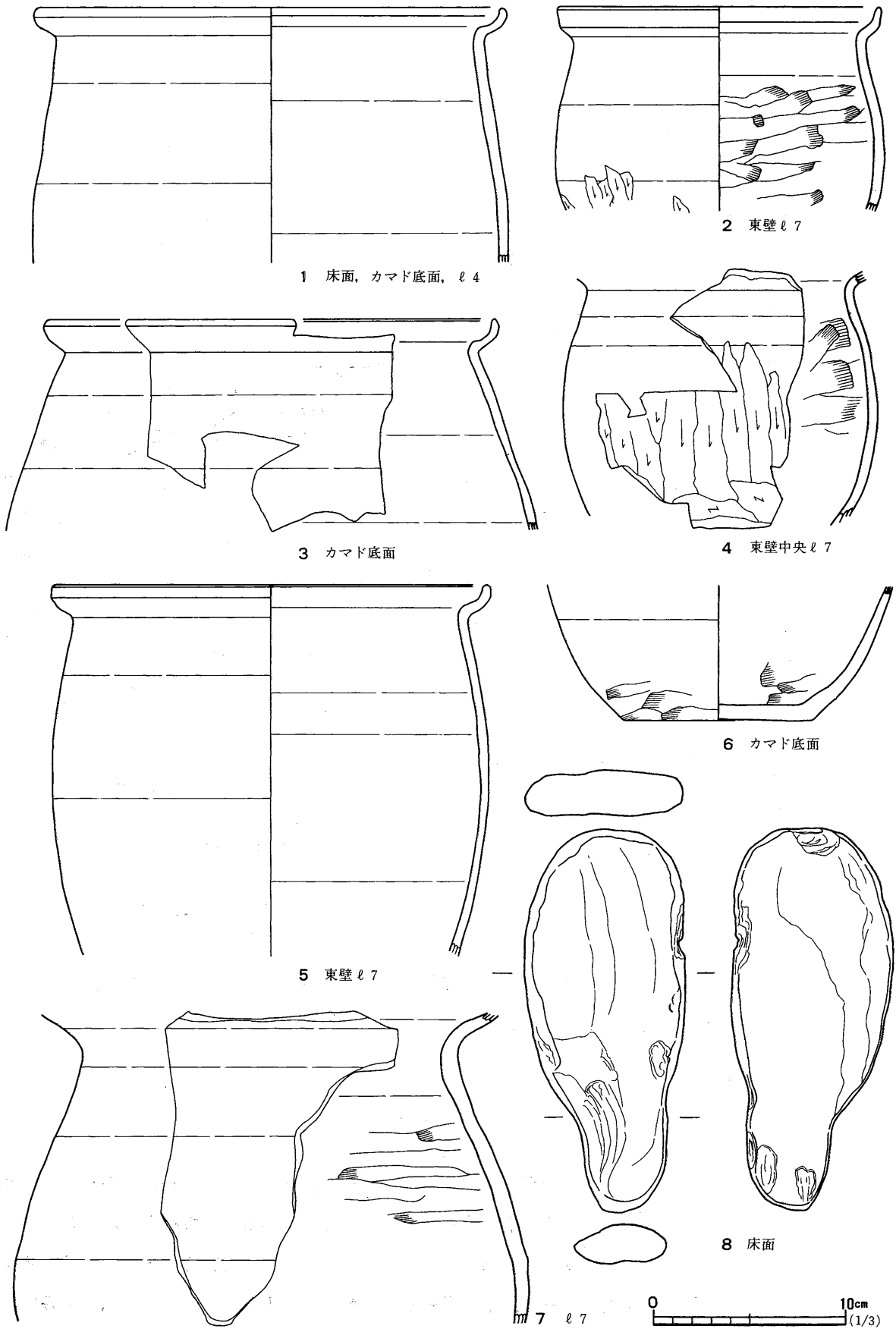


図20 6号住居跡出土遺物(2)



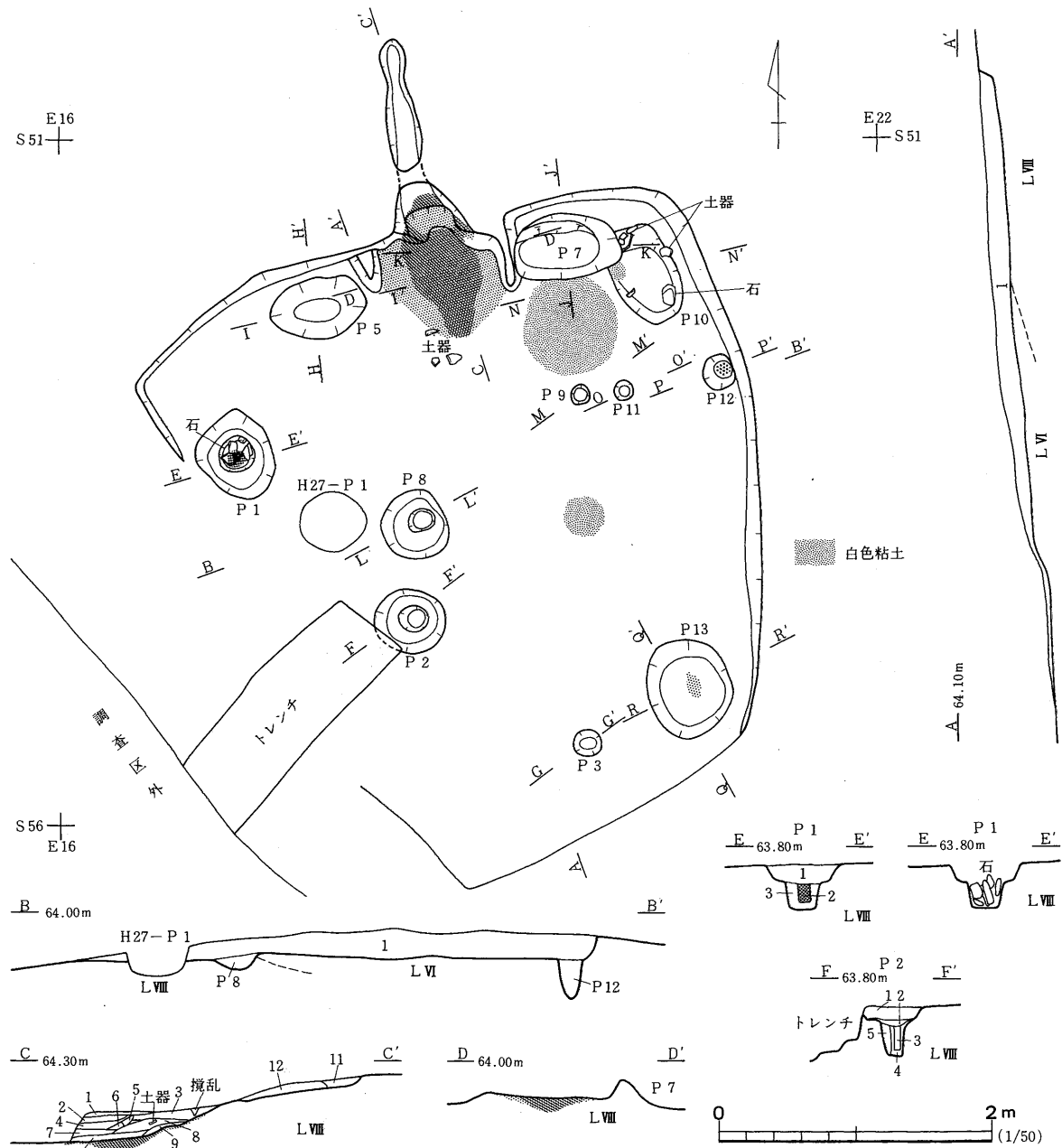
図21 6号住居跡カマド・ピット

を覆っていた。遺物の大部分は、カマドおよび出入り口部周辺から出土したものである。いずれも表杉ノ入式に比定されることから、本住居跡の年代は平安時代中頃と推定される。(橋本)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図22・23, 写真17・18)

本遺構は、調査区内の丘陵部から削平され大きく段差が認められる南側に向かって緩やかに傾斜する斜面上のH27・28, I 27・28グリッドに位置する竪穴住居跡である。遺構検出面は、L VI・VIII上面であり、本住居跡の北半分のカマドの周辺は砂質土のL VIIIが露出している。本遺構の重複関係は、H27グリッドのP 1と重複しており、本住居跡のほうが古い。また、本住居の北側に9号住居跡、23号土師器窯跡、東側には17号土師器窯跡が近接している。



7号住居跡内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR3/3) 焼土粒・木炭粒多量

カマド内堆積土

- 1 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩細粒・木炭粒・焼土粒
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩・木炭粒・焼土粒少量
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 木炭粒・焼土粒多量
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩細粒・木炭粒・焼土粒
- 5 褐色土 (7.5YR4/3)
- 6 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒・木炭粒・焼土粒
- 7 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩細粒・焼土粒
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 木炭粒・焼土粒
- 9 暗赤褐色土 (5YR3/4) 木炭粒
- 10 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒・木炭粒・焼土粒多量
- 11 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩細粒・木炭粒多量
- 12 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩細粒微量

P1内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭・粘土塊, 凝灰岩粒・木炭粒少量
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩粒・木炭粒・焼土粒多量
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩細粒・木炭粒少量

P2内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩粒・木炭粒・土器片少量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒多量
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 凝灰岩細粒・木炭粒・土器片
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 凝灰岩粒・木炭細粒少量
- 5 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒少量

ピット計測表

(単位: cm)

P No.	1	2	3	5	7	8	9	10	11	12	13
長径	66	52	20	71	80	51	14	74	14	26	71
短径	55	48	19	45	49	50	12	46	13	24	62
深さ	33	36	16	15	17	30	16	22	15	66	14
柱痕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	-

図22 7号住居跡(1)

第3編 大久保F遺跡

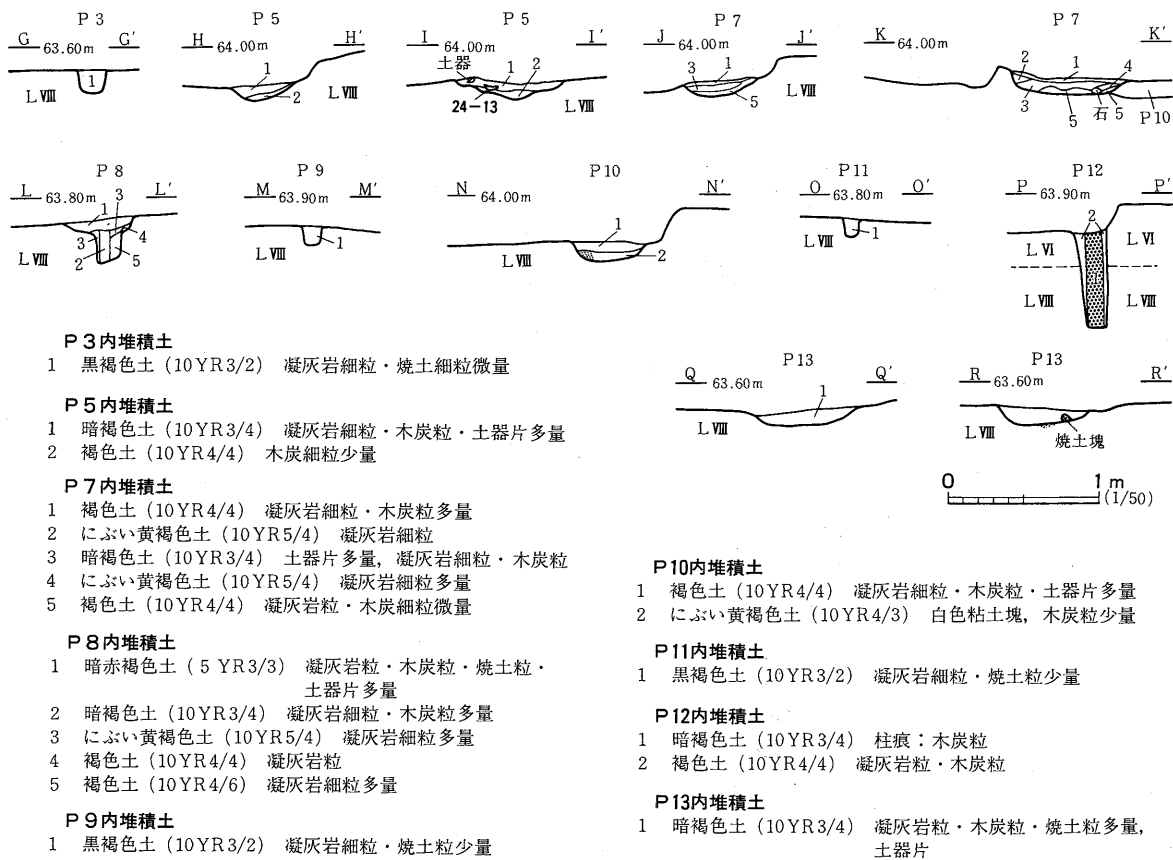


図23 7号住居跡(2)

本住居跡は、後世の削平により遺構の上半部のほとんどが失われており、住居の西壁・南壁の立ち上がりは確認されなかったため、遺存状況は良好ではない。遺構の平面形は概ね南壁が狭まる台形を呈し、規模は、北壁で4.15m、東壁が4.00m、西壁は推定値で4.30m、南壁も推定値で2.30mであり、検出面からの深さは北壁で15cm、東壁で11cmを測る。本住居跡の軸線方位は、真北に対して14°西に傾いている。住居跡内堆積土は、焼土粒と木炭粒を多量に含む黒褐色土の単層であるが、遺構が削平されて浅く、堆積状況が明確でないため、人為堆積か自然堆積かは不明である。

床面は、南に向かって緩やかに傾斜しており、南壁から1m内側の地点で段差が認められた。床面の状況は、住居北半はLⅧが露呈し、南側では凝灰岩岩盤が露出したLⅥに達しており、床面積は14.7㎡である。P7の南側と住居中央部に白色粘土が床に貼付いた部分が検出された。また、貼床・壁溝は確認できなかった。

カマドは北壁中央の位置から検出された。右袖が部分的にのこる程度であり、遺存状況は良好でない。右袖は地山削り出しでつくられており、左袖は粘土貼付けで構築されている。左右のカマド袖の構築方法に違いが認められる。それはカマドの奥壁に地山土が突出した部分が認められ、地山削り出しの左袖を作りかえて粘土貼付けの袖を構築し、カマドを拡張している可能性が考えられる。カマドの規模は、右袖の長さは遺存値で55cm、幅20cmであり、左袖は基底面のみがのこる程度であり、遺存値で28cmである。両袖の幅は、内幅85cm、外幅117cmを測る。カマド燃焼面の断ち割りの結

果、深さ12cmにわたって酸化しており、長期間の使用が窺える。また、煙道部は燃焼部奥壁で一部とぎれるものの、北壁にほぼ直行してのびる。規模は、長さ1.05m、幅15～24cm、深さ6cmを測る。煙道部先端は15cmと幅が狭まるが、煙出しピットは確認できなかった。

細部施設は床面から11基検出された。ロクロピットはP2・8の2基検出された。P2は床面の中央からやや西にずれた位置にある。浅い皿状に掘り込まれた円形のピットの中央に、凝灰岩岩盤に軸受けの穴を穿っている。堆積状況から、住居廃絶時にロクロ本体を取り外し、人為的に埋め戻されていると考えられる。P8は、P2の北側20cmに位置しており、構造はP2と同様に、浅い円形のピットを掘り込み、ロクロの軸受けをつくるために凝灰岩岩盤に穴を穿っている。堆積状況もロクロ本体を取り外した後に、埋め戻していると判断している。P5はカマドの左側に位置する貯蔵穴と判断した。P7・10はカマドの右隣に位置し、重複関係を有しており、P7の方が新しい。P7はカマド右袖の一部を壊して構築されていることから、カマドが使用されなくなった時期につくられ、そこに廃棄されたと考えている。P1は住居の北西コーナーに位置する根石を配した柱穴である。検出面は砂質のLⅧであり、柱を固定するために根石を配したと推定している。本住居の周辺からはP1に類するピットは検出されず、建物を構成するピットと考えられないため、一応本住居に伴う柱穴と考えている。P3・9・11・12は小形のピットであり、住居の柱穴と推定している。P13は住居の南東コーナーの床下から検出された円形のピットであり、底面がわずかであるが部分的に焼けている。堆積土中にも焼土粒を多量に含んでいる。なお、P4・6は白色粘土の分布範囲ととらえ欠番とした。

遺物 (図24, 写真61)

本住居跡から遺物は、土師器片1,626点、土製品1点、白色粘土塊が出土している。そのうち16点を図示する。2はP7の①3から出土した土師器の杯であり、黒色処理を施されている。7は①1出土の内面黒色処理された土師器杯である。口縁部の破片のみであり、片口状になる。13はP5から出土したの有台皿の高台部である。16は住居の①1出土の手捏ねの土製品である。小破片で用途不明であるが、窯道具の可能性が考えられる。本住居の出土遺物の特徴は、須恵器がまったく出土していないことがあげられる。本遺構に伴う土師器はロクロ調整であり、杯については内面がミガキの後、黒色処理されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、手持ちケズリ調整が施されている。また小破片のため図示はしていないが、P7・10から筒形土器が出土しており、これらは製塩土器と考えられている。白色粘土はP10から出土しており、本住居跡で製作していたと考えられる土器の材料と推定している。

まとめ

本住居跡はロクロピットを2基有し、床面とP10の白色粘土から、土器製作にかかわる工房跡と判断した。カマドは左右の袖の構築方法の違いから、拡張した可能性があり、住居廃絶時期にほかの住居と同様に、人為的に破壊している。本住居跡の所属時期は、床面出土の土師器から表杉ノ入式に比定され、平安時代中頃と考えている。

(福田)

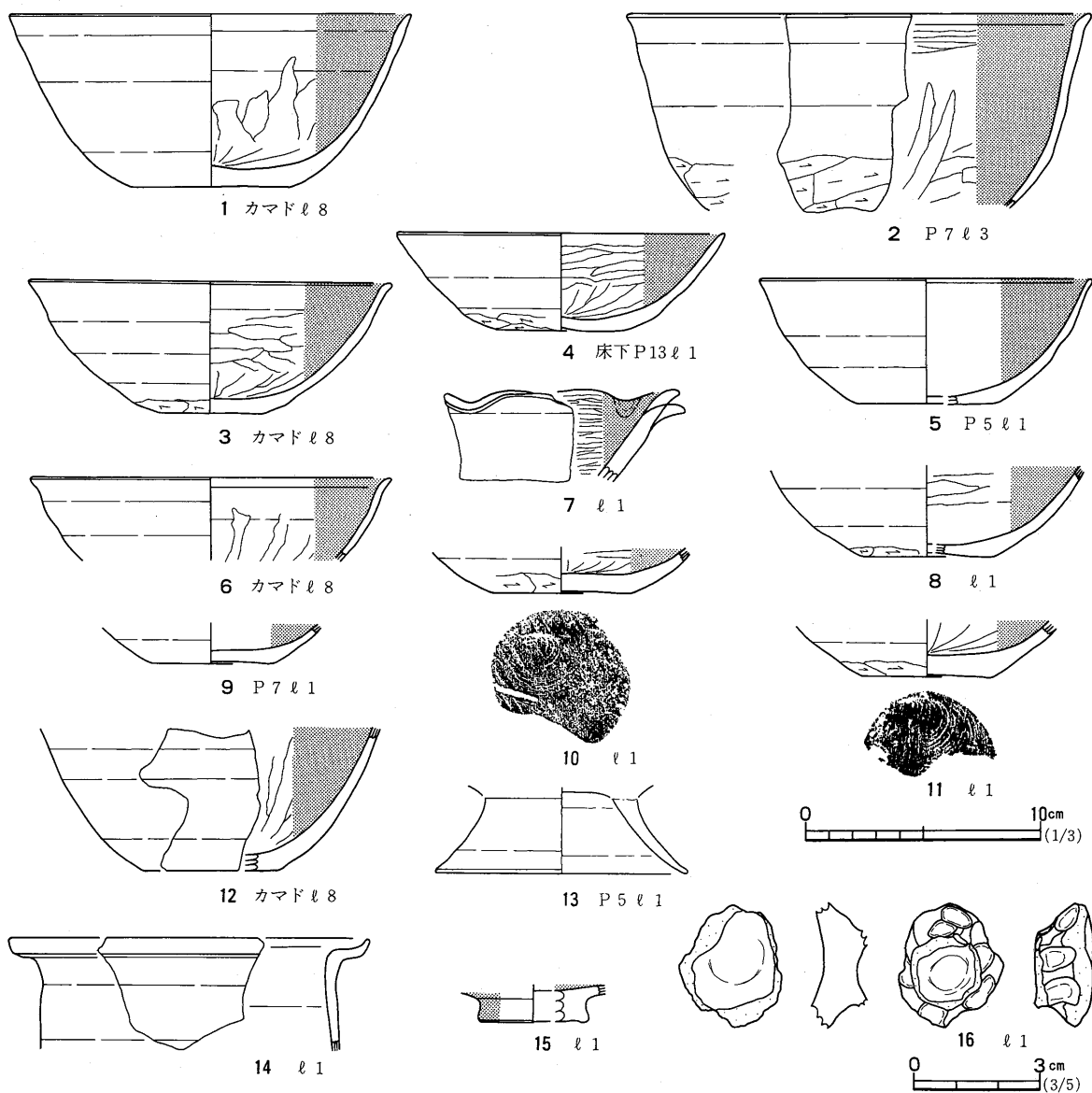
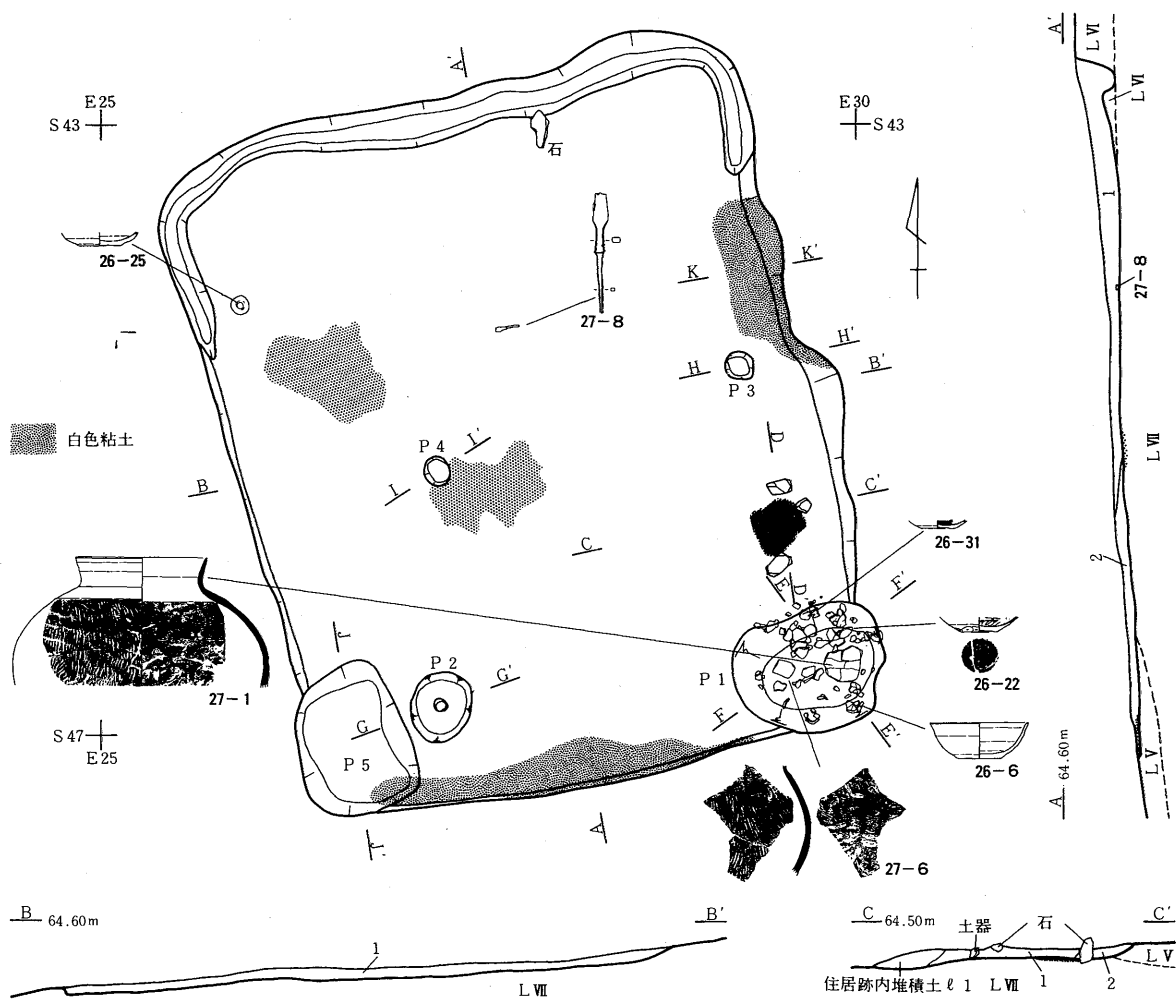


図24 7号住居跡出土遺物

8号住居跡 S I 08

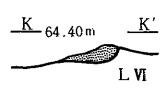
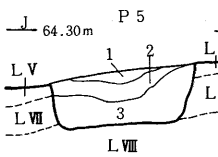
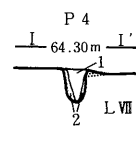
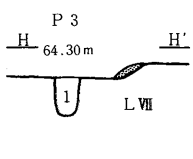
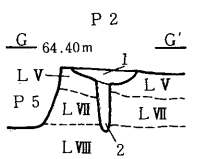
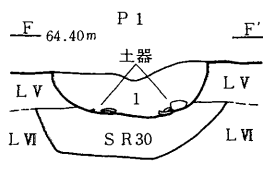
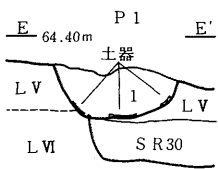
遺 構 (図25, 写真19・20)

本住居跡は、7号住居跡の北東約12.5mの距離に位置し、J 25・26, K26グリッドにまたがっている。検出位置は埋没谷の谷頭にあたっており、南に緩やかに傾斜している。検出土層はL V・VI・VIIの3層にまたがっている。そのため、住居跡の北半分ほどはL VIやL VII上面で検出でき、比較的容易に輪郭を認めることができた。しかし、住居跡の南部の一部では、L Vが住居跡の堆積土と同質だったので検出がむずかしかった。耕作のため上部は削平されているが、幸い住居跡の平面形を損なうまでには至っていない。ほかの遺構との重複は、西-南辺コーナー付近で19号窯跡と、南-東辺コーナー部分で30号窯跡と切り合っている。新旧関係はいずれも本住居跡が新しい。住居跡に堆積した土層は、住居跡の上部がだいぶ削られていたため、堆積土の遺存も良くない。2層に分層



8号住居跡内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭粒・土器片, 灰黄色土粒少量
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 木炭粒・土器片, 灰黄色土粒少量



カマド内堆積土

- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 木炭粒・土器片多量
- 2 黒褐色粘質土 (10YR2/3) 木炭粒・土器片

P1内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭粒・焼土粒・土器片

P2内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 灰白色粘土粒・木炭粒多量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 灰白色粘土粒少量

P3内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3)

P4内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3)
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)

P5内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 人為堆積土
- 2 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 人為堆積土：木炭粒
- 3 褐色土 (10YR4/4) 人為堆積土

ピット計測表 (単位: cm)

P No.	1	2	3	4	5
長径	101	47	18	19	97
短径	83	40	17	16	76
深さ	37	42	26	22	65

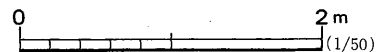


図25 8号住居跡

できたが、いずれも暗褐色土で、上層のほうが下層よりわずかに黒っぽいといった程度の微妙な色調の違いで分けられた。含有物も木炭細粒や土器破片で同じである。住居跡の平面形は、南北4.63m、東西3.81mの長方形である。北辺と南辺の中点を結んだ線を主軸としたときの方位はN-17°-Wで、これは等高線と大体直交している。床面には貼床の痕跡はなく、L VIIと一部L VIを直接床にしている。表面は凹凸がなく平滑だが、南西に向かってわずかに傾斜している。床面積は16.5㎡である。また、住居中央西よりの床面で弱い焼土面2か所を検出した。周壁は、もっとも良く遺存していた北-西辺コーナー付近で24cm、北-東辺コーナー付近でも14cmで北壁は比較的のこりがよいが住居跡の南側、斜面の下方に向かって遺存状況が悪くなり、東壁や西壁の中ほどでは4~7cm、南壁では壁ののこっていないところもある。北辺から東辺と西辺の一部にかけて、壁際の床面に壁溝を検出した。幅は12~20cmで、床面からの深さは約10cmである。床面で検出したピットは5基である。P 1は南-東辺コーナーで検出したもので、土器破片や焼土・木炭が大量に含まれているのが特徴である。P 2は南-西辺コーナー付近で検出したピットで、断面形が漏斗状になることからロクロピットと考えた。P 3・4は東辺と西辺の中点を結ぶ線に近接して検出されたが、柱穴としては大きさ・深さともに貧弱である。南-西辺コーナーではP 5を検出した。規模や位置がP 1に似る。土器破片はあまり含まれていないが、人為堆積である。カマドは北辺中央と南-東辺コーナーのあいだにある。火床面であろう焼土面と補強材と思われる礫をのこすだけである。

このほかに特筆すべき事項として北辺や東辺の壁沿いで白色粘土を検出したことがあげられる。

遺物 (図26・27, 写真54・62)

遺物は、床面・ピット・堆積土から、多量の土師器を主体に須恵器・鉄製品・土製品が出土した。このうち、土器は総破片点数3,609点のうち2,168点(約60%)が床面やカマド、あるいはP 1から出土している。とくにP 1では土器は破碎された状態で出土している。これは住居伴出の土器のなかで約32%を占めている。また、これら住居伴出の土器破片のなかで須恵器の破片はわずか4点である。堆積土出土資料を含めても土器破片のなかの須恵器の割合はごくわずかの0.2%にすぎない。これら多量の土師器破片はできるだけ復元を試みたが、土壌のせいか保存状態が悪く、くわえて小片になっているため思うように作業が進まず、作図できたものはわりあい少ない。本住居跡に伴う土師器の器種は、主に杯・椀・皿などの食膳具で、甕などの煮炊具は少ない。杯は全体の形のわかるものが少ないので確かではないが、口径や器高からいくつかに分類できそうである。また有台の器形も認められる。内面に単位幅の広いミガキと黒色処理が施されるものと、施されないものがある。また前者の内底面のミガキは放射状に行われている。体部下端はケズリ調整されている。焼成はすべて良好で、内黒のものは外面に黒斑の認められるものが多い。須恵器は図27-1などの甕の比較的大型の破片が出土した。焼成が不完全である。図27-4は片方が棒状のものを横にあてて広げられ、もう一方は何かと接合していた痕跡のある棒状の土製品である。何かの部品と思われるが、今のところ粗雑な獣脚ではないかと思っている。図27-5は本遺跡で唯一出土した土鈴の残欠である。図27-7・8は鏃である。また9は刀子の切っ先と思われる。

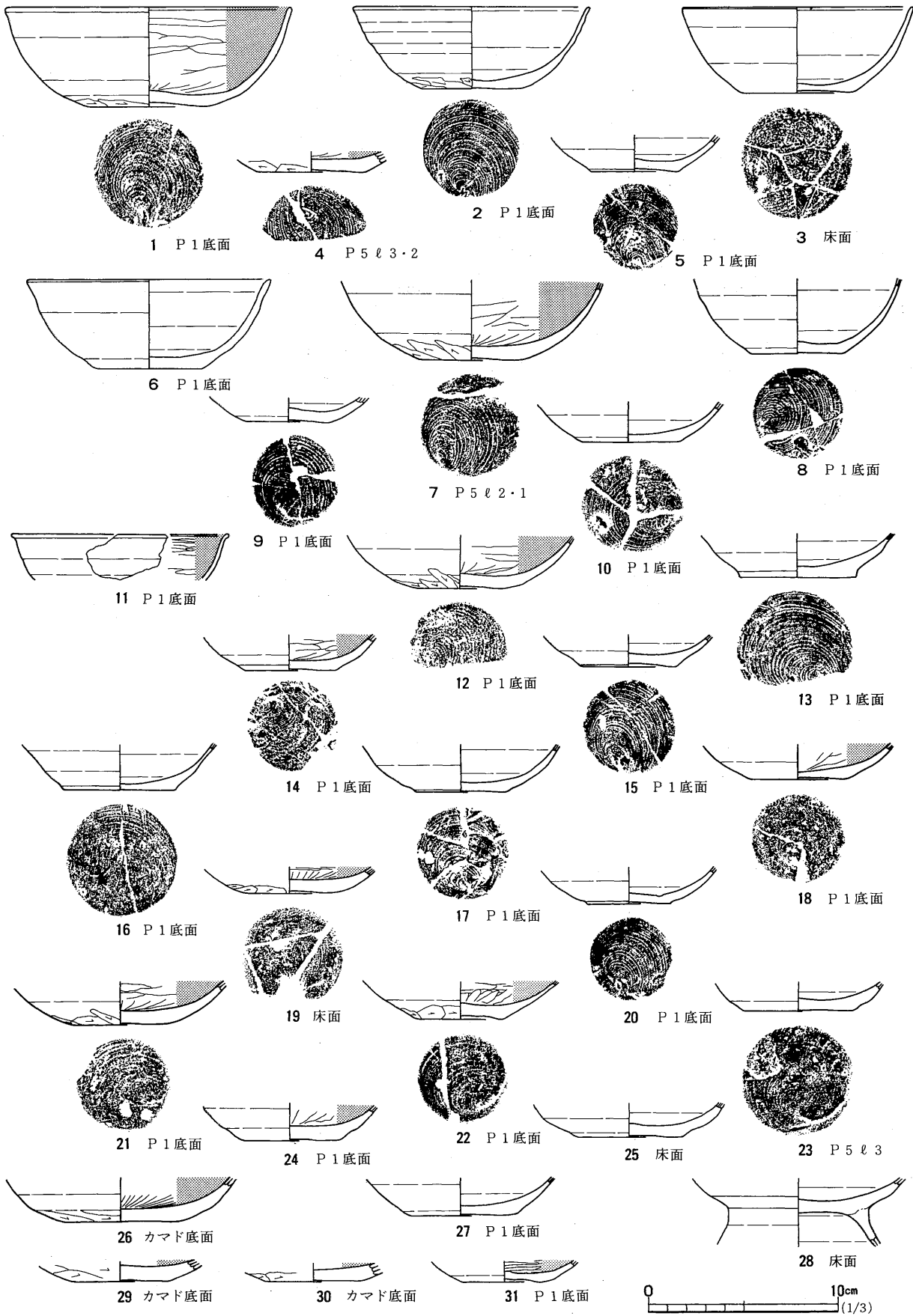


図26 8号住居跡出土遺物(1)

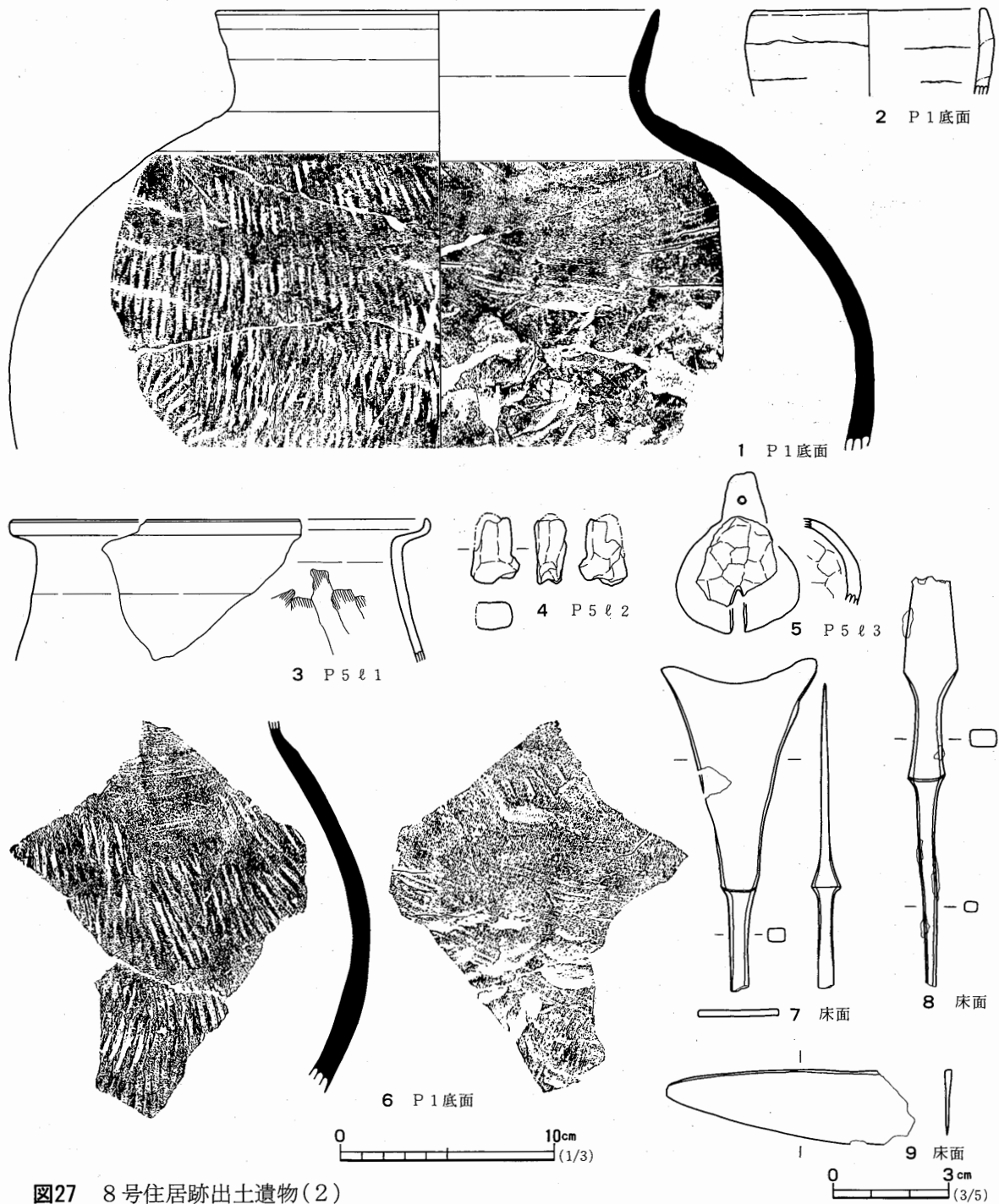


図27 8号住居跡出土遺物(2)

まとめ

本住居跡は、ロクロピットの検出、素材粘土の出土から土器製作のための工房の可能性がきわめて高い。しかし、カマドも備えているので、居住空間としても利用されたであろう。いわば工房兼用住居である。P1は位置的には貯蔵穴だが、堆積土中には破碎されたと思われる多量の土器や焼土塊・木炭が含まれている。これらの焼土などはカマドの構築材の可能性が考えられる。つまり、住居廃絶時にカマドを壊し、土器とともに遺棄したことが推察される。住居の所属時期は伴出土器から9世紀末から10世紀初めの幅で、このなかで比較的新しい時期と考える。(石本)

9号住居跡 S I 09

遺 構 (図28・29, 写真21・22)

本住居跡は、7号住居跡と8号住居跡のあいだH26・27, I26・27グリッドに位置している。検出位置は南に緩やかに傾斜しているため、検出土層はLⅦ・Ⅷにまたがっている。そのため、LⅧで検出した北辺は、カマドもあったことから輪郭がわかりやすかった。ところが、東辺から西辺にかけて検出土層と住居跡内堆積土が似通った土色・土質だったことや、ほかの遺構が切り合っていたことから、検出が容易ではなかった。また、南辺は後世の耕作のためか失われていた。ほかの遺構との重複は、東辺で10号住居跡と、同じく東辺のやや南よりで15号窯跡と、その西側の住居中央やや南よりの位置で8号土坑と、西辺北よりでは23号窯跡と重複していた。10号住居跡は当初、本住居跡の一部と考えていたが、本住居跡の西辺から東に約3.3mで小さな段差と堆積土の違いを発見し、カマドやロクロピットなどの施設の数も考慮して2軒の住居跡に分離させ、新旧関係は本住居跡を新しいと判断した。15号窯跡と8号土坑との新旧関係は、本住居跡のほうが古い。23号窯跡とは、この窯跡が本住居跡の堆積土上につくられており、本住居跡が古い。住居跡内堆積土はほぼ北半分だけに遺存しており、3層に分けることができた。ℓ1は住居跡の中央から北西よりでもっとも厚い層厚を測る。23cmの最大層厚で、断面は凸レンズ状をなす。ℓ2は床面を直接覆うにぶい黄褐色土である。ℓ1との違いは層中に焼土や木炭の粗・細粒を含むことである。北壁・東壁よりで22cmの最大層厚となる。ℓ3は北壁際でだけ観察された土層で土器破片を多く含む。この土層は初期の三角堆積土と考えられるので、遺存は悪いが自然堆積の可能性を考えたい。住居中央やや北よりのℓ1とℓ2の層理面で焼土面を検出したが、範囲が狭いうえ南側は削平されているので、全容がわからずどのような遺構か判断できなかった。住居跡の規模は、南辺と東辺や西辺とのコーナーが失われているので、西壁の遺存部とP4を本住居跡に伴うピットとみなしてコーナーを想定した。東西は3.31m、南北3.74m以上を測り、平面形は長方形と思われる。主軸の方位は、北辺と推定南辺の中点を結んだ線を一応の基準とせざるをえないが、N-11°-Wと推定される。この主軸線は等高線に概ね直交している。床面は北壁から約1.2mまでがLⅧを、それ以南はLⅦを直接床としているほか、カマドの手前南北約1.7m、東西約2.2mの範囲に貼床を行っている。貼床土は褐色の粗・細粒や木炭粒をわずかに含んだ土層で、貼床土を取り除いたときの掘形の最深部は約15cmである。表面はLⅧを床としている部分で少し凹凸が見られるが、それ以外は概ね平滑で、南西に向かってわずかに傾斜している。床面積は推定で11㎡である。周壁は、前述のように北壁は45~46.5cm遺存しているが、南-西辺コーナー付近から南辺と東辺の南半分の壁は失われていた。北壁は約16°の外傾度で立ち上がっている。床面で検出したピットは6基である。このうちP1とP3は10号住居跡に伴うものとして後述する。P2は住居跡中央で検出した。断面形が漏斗状にすぼまっているのでロクロピットである。なかから図30-1の杯が出土した。P4はP2から南東に約2.1mの地点で検出した。西辺を折り返すと概ねこのピットまで壁がくるとみなされるので、P4をもつ

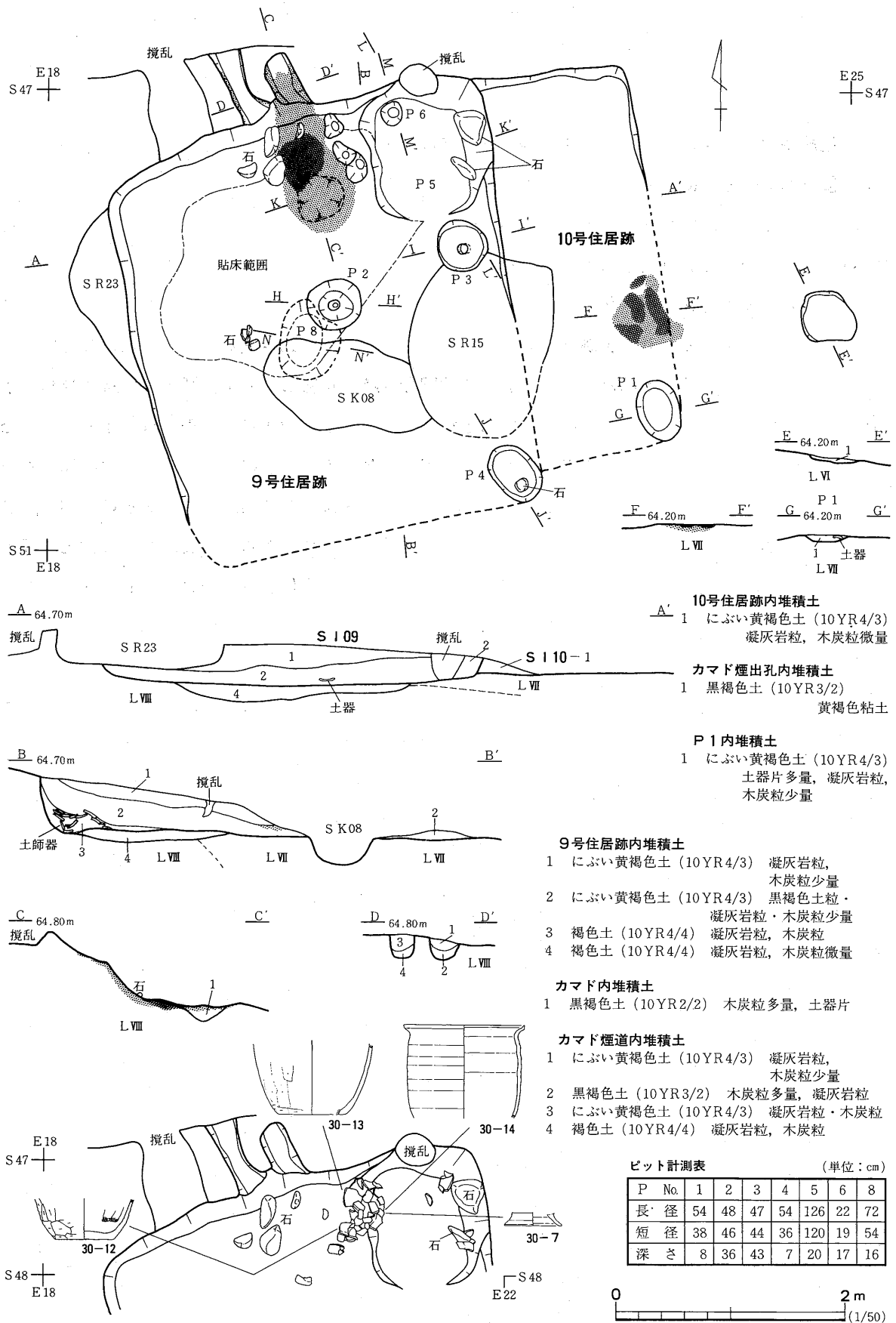
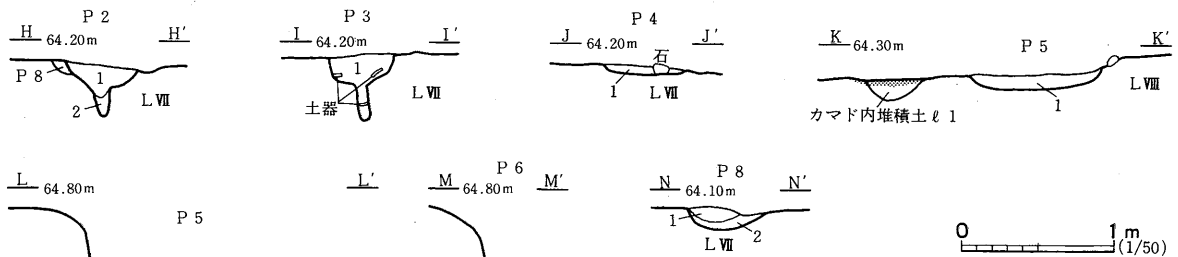


図28 9・10号住居跡

て南—東辺コーナーとした。P5は北—東辺コーナーで検出した貯蔵穴と考えるピットである。堆積土には焼土や木炭の粗・細粒，土器破片を比較的多く含むほか，被熱した石が東壁際から出土した。8号住居跡でもカマド右手のピットで土器破片が焼土や木炭を伴って出土している。P6はP5底面精査中に北壁寄りで見出された小穴である。これらのピットのほかに貼床の下でP8を検出した。位置はP2と同じ住居中央でP2に切られている。カマドは北辺センターにつくりつけられたトンネル状の煙道を持つタイプのものである。カマド本体の上部構造は基礎とした礫を残しただけでなくなっていた。煙道が2本検出されたこと，火床面と思われる焼土面の範囲が1mと長いことから，つくり変えられた可能性を考えたい。新しいカマドの煙道は約50cmと短いものだが，古い煙道はその2倍はあったと思われる。右袖の位置には補強石材を抜き取ったと思われる穴を確認した。また，火床面下で不整楕円形の浅い焼土などの詰まった穴を検出したが，これは須恵器窯などの船底状ピットのように除湿効果を期待したと思われる。

遺物 (図29・30, 写真54)

遺物は土器だけで，床面・カマド・ピット・堆積土から土師器を主体に出土した。破片の総点数は1,997点で，このうち床面やカマドなどから出土した住居跡に伴うものは，550点(27.5%)である。とくに多いのがカマドとその周辺から出土した357点で伴出遺物の約65%を占めている。土師器と須恵器の割合は，総点数のうち須恵器破片はわずかに7点である。ほかの遺構と同じように破片点数は多いが，図上も含めて復元できたものはきわめて少ない。器種は杯・碗・甕・鉢・壺で



P2内堆積土

- 1 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒多量，木炭粒
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒少量

P3内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒多量，木炭粒少量

P4内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒多量，木炭粒微量

P5内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 黒色土粒・木炭粒多量，凝灰岩粒

P6内堆積土

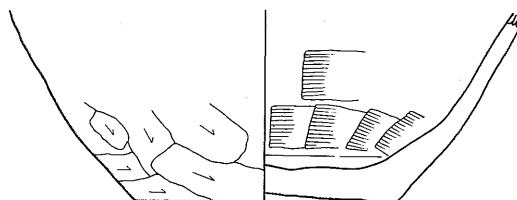
- 1 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒

P8内堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 焼土粒・凝灰岩粒多量
- 2 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒多量，木炭粒少量



1 P3 1



2 P3 1



3 カマド東脇床面

0 10cm (1/3)

図29 9号住居跡ピット・出土遺物(1)

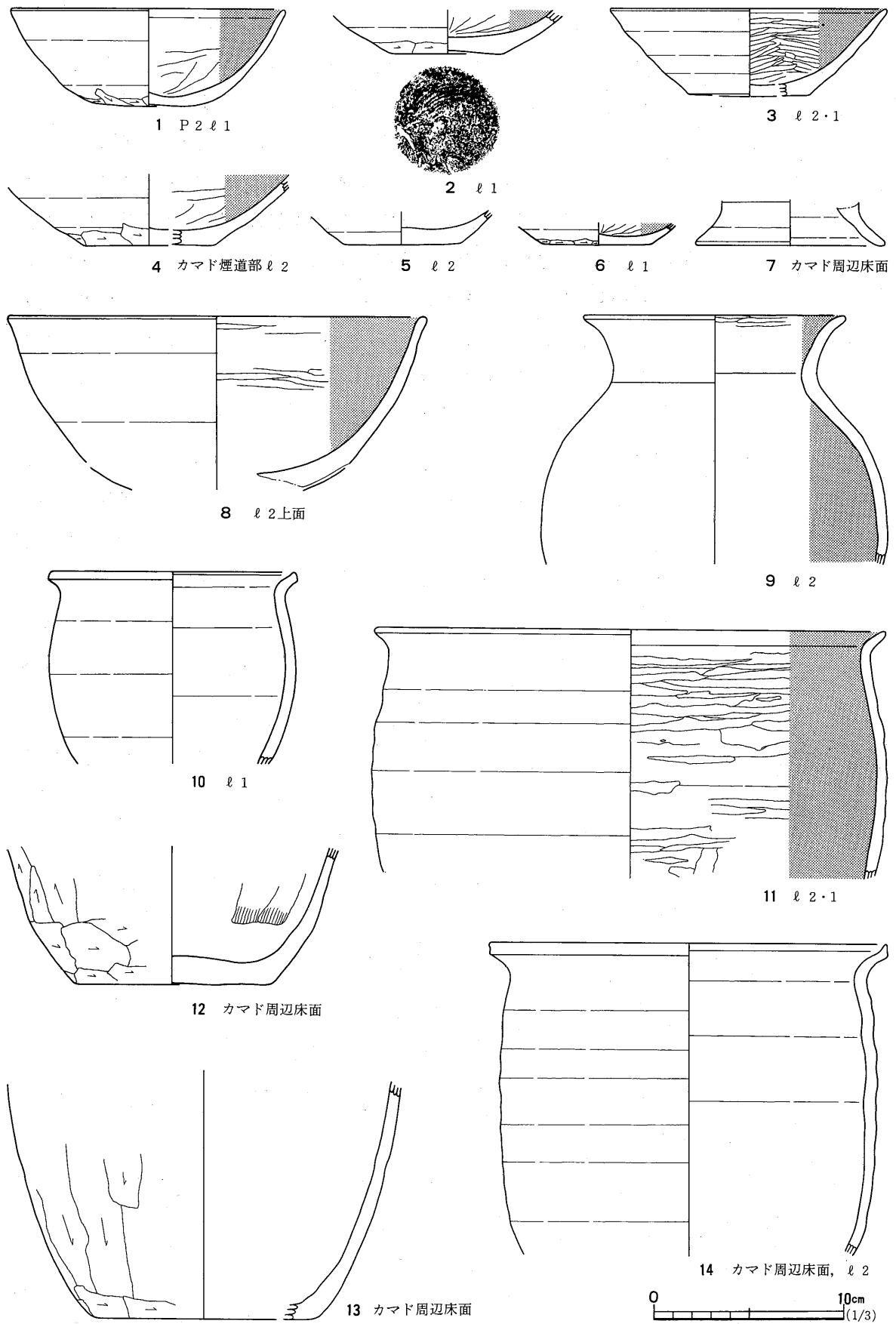


図30 9号住居跡出土遺物(2)

ある。8号住居跡にくらべると甕の復元できた割合が多い。杯は二次的に被熱して内黒でなくなっているものもあるがミガキは遺存しており、すべてミガキ内黒処理されている。ロクロ切り離し技法は堆積土出土のものに回転糸切り技法のものがあるが、伴出する杯はすべてヘラ切り技法である。体部下端にケズリ調整の行われているものが多い。図30—8の杯はほかの出土例から7のような高台がつく可能性もある。カマドとP5のあいだから出土した13や14は接合はしないものの、色調や質感から同個体と考える。図29—1の把手は甕の部品と思われる。

まとめ

南側が失われていたが、本住居跡の機能を不明にするまでには至っていない。8号住居跡のように粘土の出土はなかったが、住居跡中央にロクロピットを持つことから工房兼用の住居と考えた。カマドの上部構造が失われていたり、P5に焼土や木炭の粗・細粒、土器破片、被熱した礫が入っていたことは、住居廃絶時にカマドを破壊し、その廃棄物をP5に埋めたと解釈した。また、カマドとP5のあいだから破砕した土師器甕が出土した。この土器を取り除いたあとに補強石の掘形が検出されており、カマドを壊したあとに甕が置かれたと判断される。カマド遺棄に伴う祭事に用いられたものかもしれない。カマド火床面のピットは須恵器窯に通じるところや、破カマドやロクロピットの周囲を貼床して除湿に気を使っているなど興味深い点が多いことが特徴である。住居跡に伴う土器から、所属時期は9世紀末から10世紀初め頃と考えている。(石本)

10号住居跡 S I 10

遺構 (図28, 写真21)

本住居跡は前述したように9号住居跡に切られていた保存状態のきわめて悪い住居跡である。P1を8号住居跡のようなコーナーの貯蔵穴と考えると、1辺3m強の方形の平面形が想定される。主軸方位は9号住居跡と同じである。周壁の遺存も20cmに満たない。P1の北にある焼土面がカマド火床面の残存で、これより東へ約1.5mの小穴が煙出しのなごりだろう。この位置は東辺にあたる。このほかの付属施設としてP3のロクロピットがある。遺物はP1で土師器片が少し出土した。

まとめ

ロクロピットのあることから9号住居跡と同じ機能の住居である。時期は土器が少ないので9号住居跡より古いとしかいえない。(石本)

第3節 掘立柱建物跡

1号建物跡 S B 01

遺構 (図31, 写真23・24)

本遺構は、J24・25、K24・25グリッドで検出された掘立柱建物跡である。検出面はLVI～VIII上

第3編 大久保F遺跡

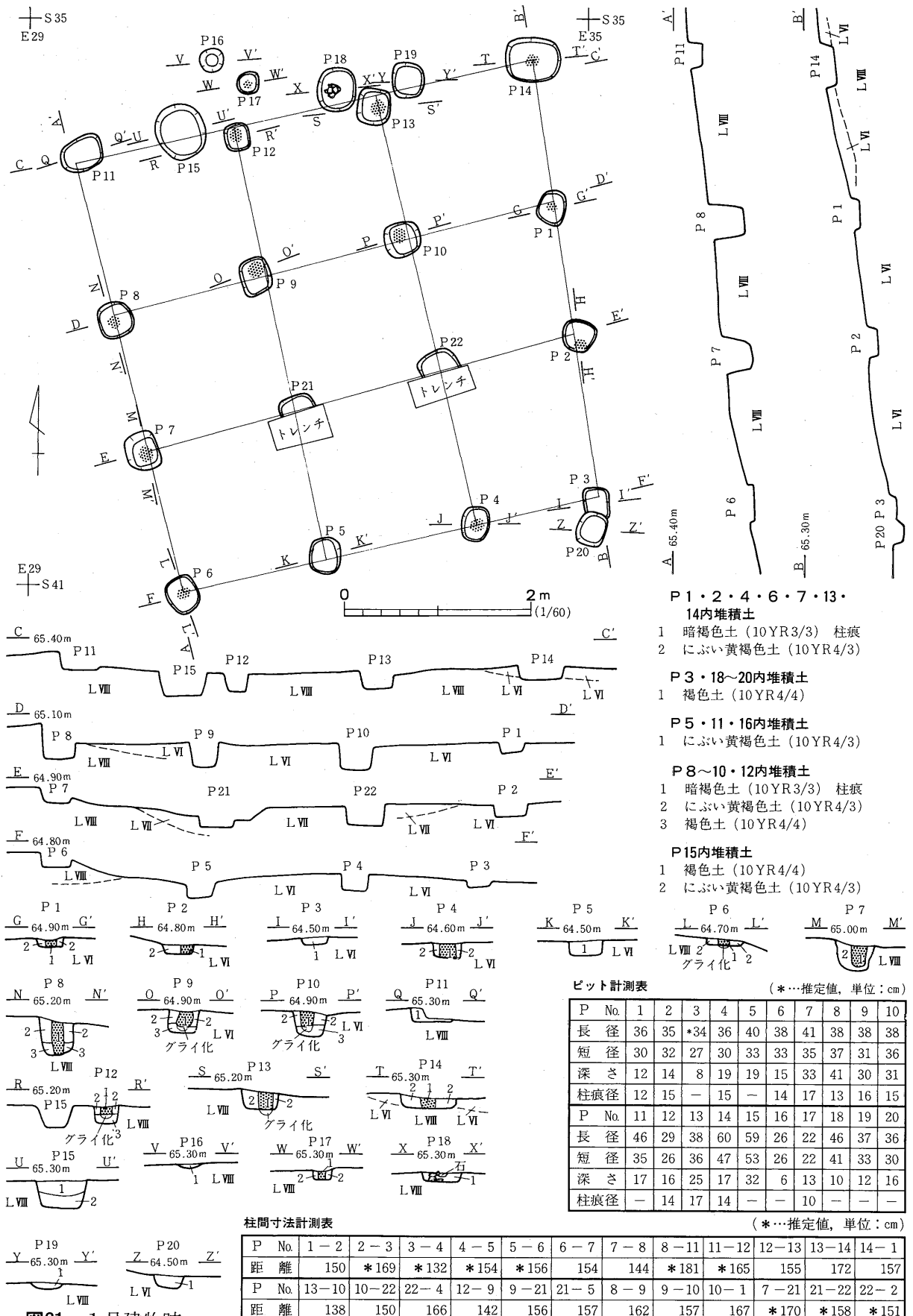


図31 1号建物跡

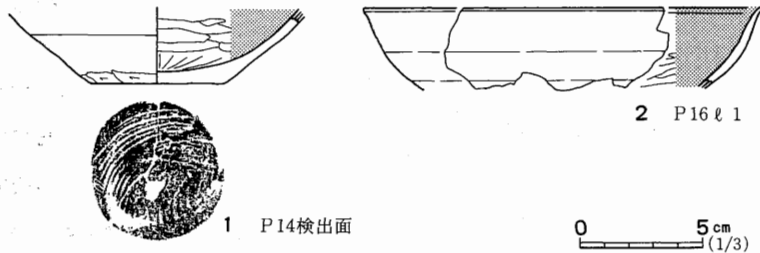
面にまたがっている。柱穴の確認作業は岩盤を掘り込んだ北側柱列では比較的容易であったが、建物跡南半部になると検出層位の色調が黒灰色を呈するため、むずかしくなった。とりわけ、P21・22の二つは平面だけでは輪郭が正確に捉え切れず、最終的にサブトレンチを入れて位置と形状を確定している。そのため半分を壊している。

建物跡は、2間×2間の総柱構造である。平面形はほぼ正方形をなす。北側柱列付近には、関連するピットが認められた。規模は、北側柱列4.93m、東側柱列4.76m、南側柱列4.42m、西側柱列4.79mを測る。柱穴は径35～40cm前後の方形基調であり、柱痕跡の径は15cm前後に集中する。断面観察すると、北西部の柱穴では柱痕跡層を覆って薄い木炭の披膜が認められ、本建物跡が火災で焼失したことを示している。

なお、柱穴個別の特徴と、柱間寸法は一覧表に示した。

遺物 (図32)

遺物は土師器片が106点出土した。出土傾向には偏りがあり、P18が40点ともっとも多く、次いでP14が29点、P16が26点、P19が11点の順となる。図示し



た2点の土師器碗は、どちらも 図32 1号建物跡出土遺物
図19-2と類似する形態をなすとみられる。ただし、同一個体ではない。

まとめ

本建物跡は、総柱構造をもち、倉庫として機能したと考えられる。柱穴断面の観察から、火災で焼失したことが判明した。出土遺物は、本遺跡のなかで新しい段階の特徴を示しており、構築年代の上限が押さえられる。このことから、本建物跡は集落開始当初から存在したのではなく、集落の再編成時に設置されたと考えている。 (菅原)

第4節 土師器窯跡 (図33～47, 写真25・26・29～38・55・56・59・61)

土師器窯跡は30基検出された。検出遺構の中でもっとも数が多く、本遺跡を特徴づける遺構である。当該遺構と認定するにあたっては、A：土坑状の掘り込みを持つこと、B：床面と壁面が被熱して酸化していること、C：床面直上に土師器片を含んだ灰層が形成されること、の三つを必要条件とした。Cの土師器片に関しては、考察で触れるように、割れ口の状態や黒斑の付き方などに通常一般集落で出土するものとは異なった特徴がある。また、平面分布をみると、工房機能を備えた竪穴住居跡に隣接する傾向が指摘でき、両者がセット関係をなすことが窺える。このことも、以下に示す30基の遺構を土師器窯跡とみる根拠となっている。調査所見からそれらの共通項目を拾いあげると、次のように整理することができる。

表1 土師器窯跡観察一覧

(* …推定値, 単位: cm)

No.	グリッド	検出層位(上面)	規 模			重 複 関 係	備 考
			長径	短径	深さ		
1	M-19	L VIII	* 113	* 85	18	重複関係なし	第I類
2	I-22	L VIII	* 220	156	57	重複関係なし	第I類
3	C・D-22	L VIII	* 214	167	28	重複関係なし	第II類
6	L-22	L VIII, SD02	102	* 75	* 43	SR07>SR06>SD02	第I類
7	L-22	L VIII, SR06	* 89	* 43	* 19	SR07>SR06>SD02	第I類
12	J-27	L VI	185	136	25	重複関係なし	第I類
13	I-25	SR24・25・28・35	180	* 130	34	SR13>SR24>SR25 ・35>SR28	第II類
14	L-24・25	L VII	* 144	101	25	重複関係なし	第I類
15	I-26	SI09・10, SK08	* 158	122	27	SR15>SK08>SI09 >SI10	第I類
16	J-25	L V, SR29	* 172	* 85	25	SR16>SR29	第I類
17	I・J-27・28	L VI	360	142	67	重複関係なし	第I類, P1~24付属
18	M-26	L VI	* 117	* 60	7	重複関係なし	第I類, 酸化面のみ
19	J-26	L VI	* 83	* 48	8	SI08>SR19	
20	J・K-27	L VI	105	89	22	重複関係なし	第II類, 張出部
21	J-26・27	L VI	* 73	* 58	* 19	重複関係なし	第II類
22	K-26	L V	86	82	12	重複関係なし	第II類
23	H-26	L VIII, SI09	* 210	* 145	60	SR23>SI09	第I類
24	I-25・26	L VIII, SR25・28・ 35・36	* 200	* 118	33	SR13>SR24>SR35 ・25>SR28・36	第III類
25	I-25	L VIII, SR26	* 97	76	23	SR13>SR24>SR25 >SR26	第III類
26	I-25・26	L VIII, SR27	* 95	* 84	14	SR25>SR26>SR27	第III類
27	I-25・26	L VIII	96	70	24	SR26>SR27	第II類, 張出部
28	I-25	L VIII	88	76	21	SR13>SR24>SR35 >SR28	第II類, 張出部
29	J・K-25	L VII	126	77	17	SR16>SR29	第I類
30	J-26, K-26・27	L VI	454	172	76	SI08・SR32>SR30	第I類
32	J・K-26	L VI, SR30	120	112	33	SR32>SR30	第II類
33	I-27	L VIII	113	56	10	重複関係なし	
34	A-15・16	L III	122	68	19	重複関係なし	第I類
35	I-25	L VIII, SR28・36	* 146	95	* 19	SR13>SR24>SR35 >SR28・36	第III類
36	I-25・26	L VIII	* 81	80	26	SR24>SR35>SR36	第II類, 張出部
37	A-15	L III	45	38	5	重複関係なし	酸化面のみ

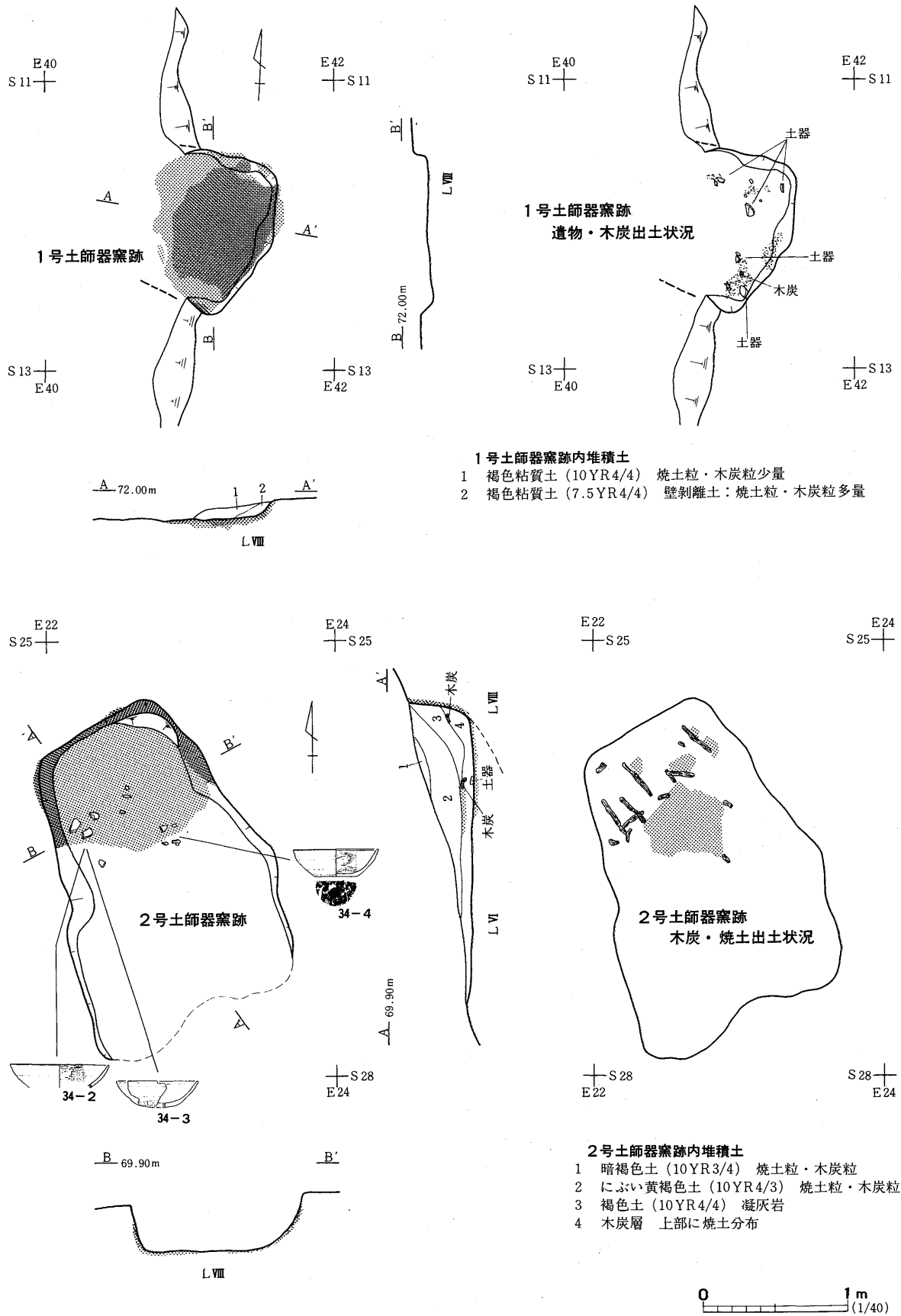


図33 1・2号土師器窯跡

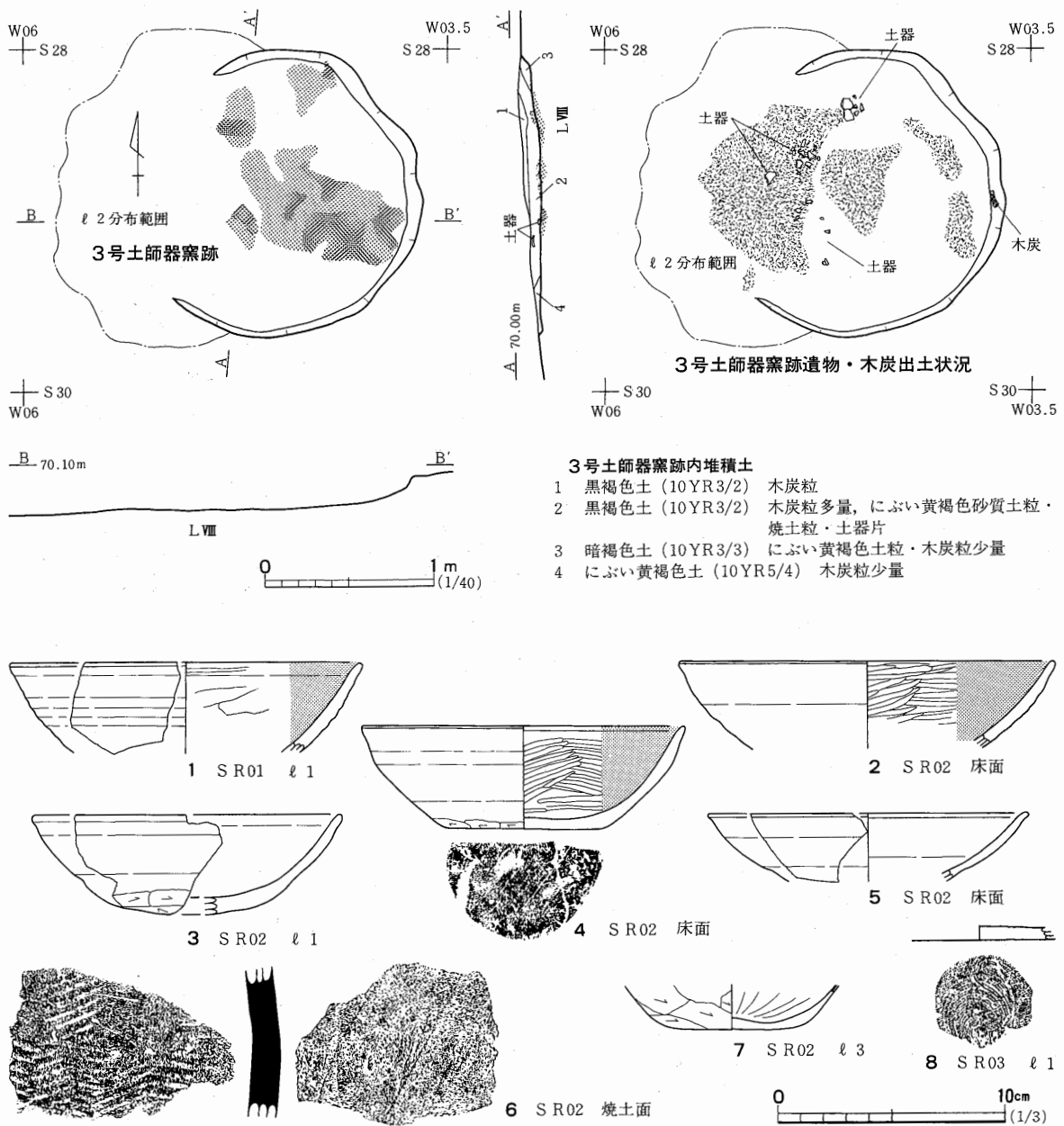
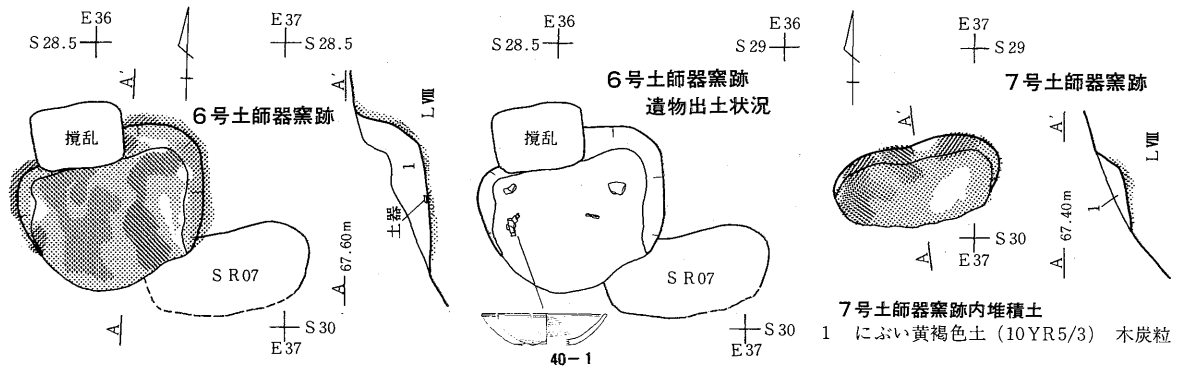
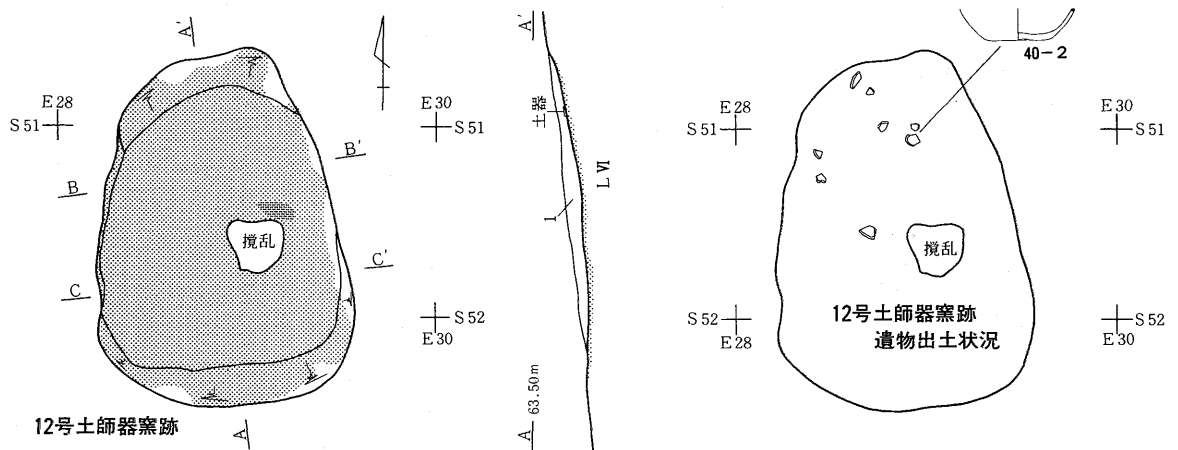


図34 3号土師器窯跡・1～3号土師器窯跡出土遺物

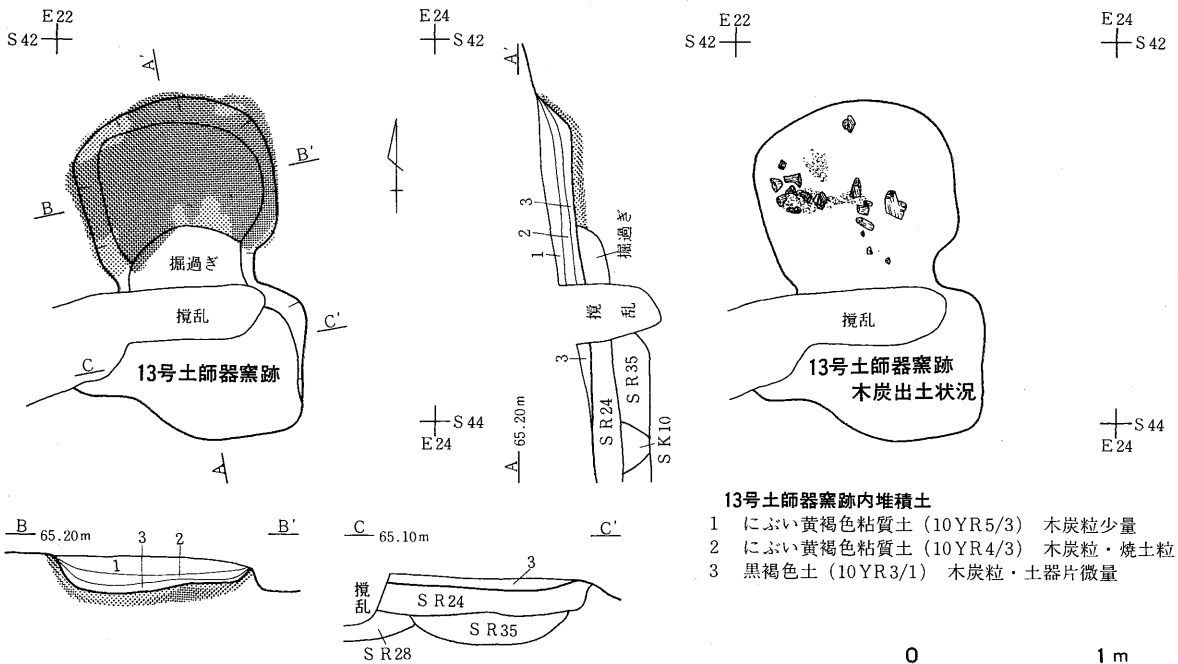
- ①構築方法は、地面を直掘りしただけで床面・壁面に粘土を貼らない。
- ②明確な上部構造を持たない。
- ③面として認識できる床面は、ほとんどが1枚である。このことは、操業回数が1回であることを示すわけではなく、燃料がほぼ完全に燃えきり、焼成ごとに灰が焼成部外へ掻き出されたためと考えている。
- ④生産器種は供膳・煮炊・貯蔵形態の三者があり、基本的な器種のすべてが焼成されている。
- ⑤供膳形態は、内面をミガキ・黒色処理するタイプと、それをしないタイプの2種類が存在する。両者は確実に同一遺構内で併焼されている。これは小型貯蔵形態の一部にもあてはまる。
- ⑥窯体は、廃絶時に埋め戻されたとみられる。



6号土師器窯跡内堆積土
1 にふい黄褐色土 (10YR5/3) 人為堆積土: 木炭粒少量



12号土師器窯跡内堆積土
1 褐色土 (10YR4/4) 木炭粒・焼土粒・土器片



13号土師器窯跡内堆積土
1 にふい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 木炭粒少量
2 にふい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 木炭粒・焼土粒
3 黒褐色土 (10YR3/1) 木炭粒・土器片微量

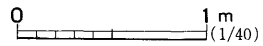


図35 6・7・12・13号土師器窯跡

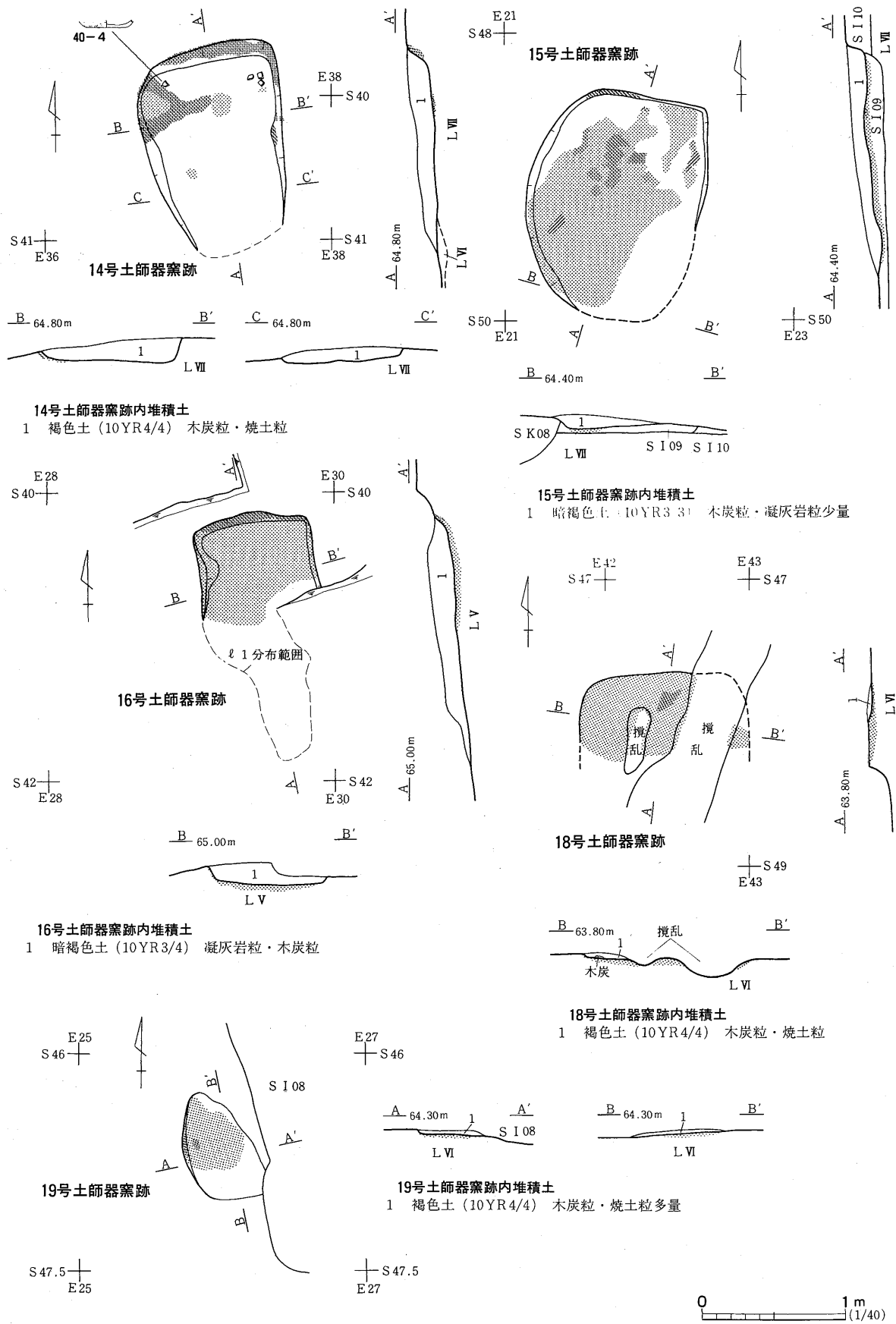


图36 14~16・18・19号土師器窯跡

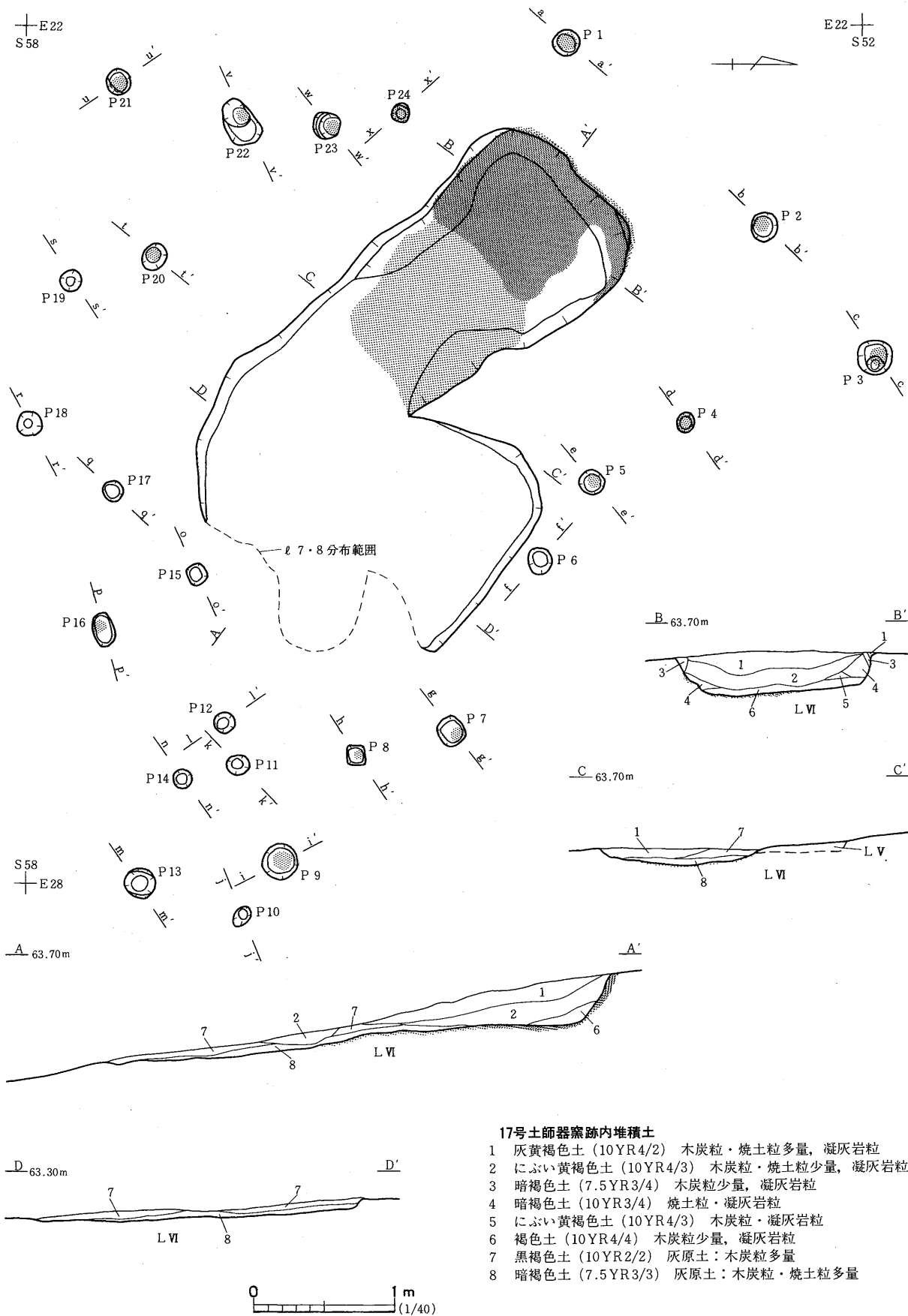
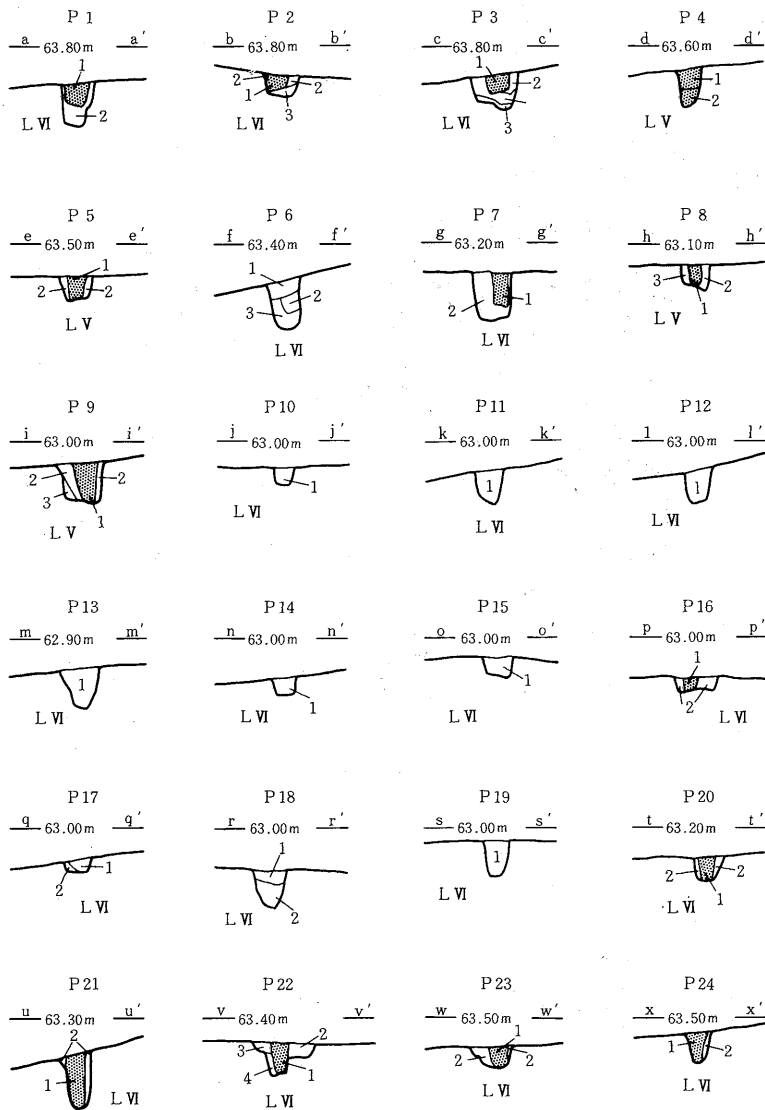


図37 17号土師器窯跡(1)

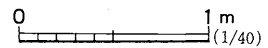
第3編 大久保F遺跡



ピット計測表

(単位: cm)

No.	掘形			柱痕	
	長径	短径	深さ	直径	深さ
1	18	18	24	14	14
2	20	17	14	11	10
3	25	24	20	12	11
4	—	—	—	14	22
5	18	18	13	9	13
6	19	16	28	—	—
7	22	20	26	10	18
8	18	16	14	8	12
9	26	26	22	14	22
10	15	10	9	—	—
11	16	14	18	—	—
12	15	14	20	—	—
13	22	20	22	—	—
14	14	13	10	—	—
15	16	15	11	—	—
16	24	16	9	10	8
17	15	14	8	—	—
18	18	18	20	—	—
19	16	15	20	—	—
20	20	18	14	9	14
21	18	17	32	12	30
22	34	22	18	8	16
23	20	20	12	11	12
24	13	13	18	13	17



P1・5・7・16・20・21・23・24内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 木炭粒・凝灰岩粒微量

P2内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 木炭粒・凝灰岩粒微量
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 木炭粒少量

P3内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 凝灰岩粒少量
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭粒・凝灰岩粒微量

P4内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 柱痕: 凝灰岩粒少量

P6内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭粒・凝灰岩粒微量
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 木炭粒少量

P8・9内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)

P10~15・19内堆積土

- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 木炭粒・凝灰岩粒少量

P17・18内堆積土

- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 凝灰岩粒少量

P22内堆積土

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 柱痕: 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 木炭粒・凝灰岩粒少量
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)

図38 17号土師器窯跡(2)

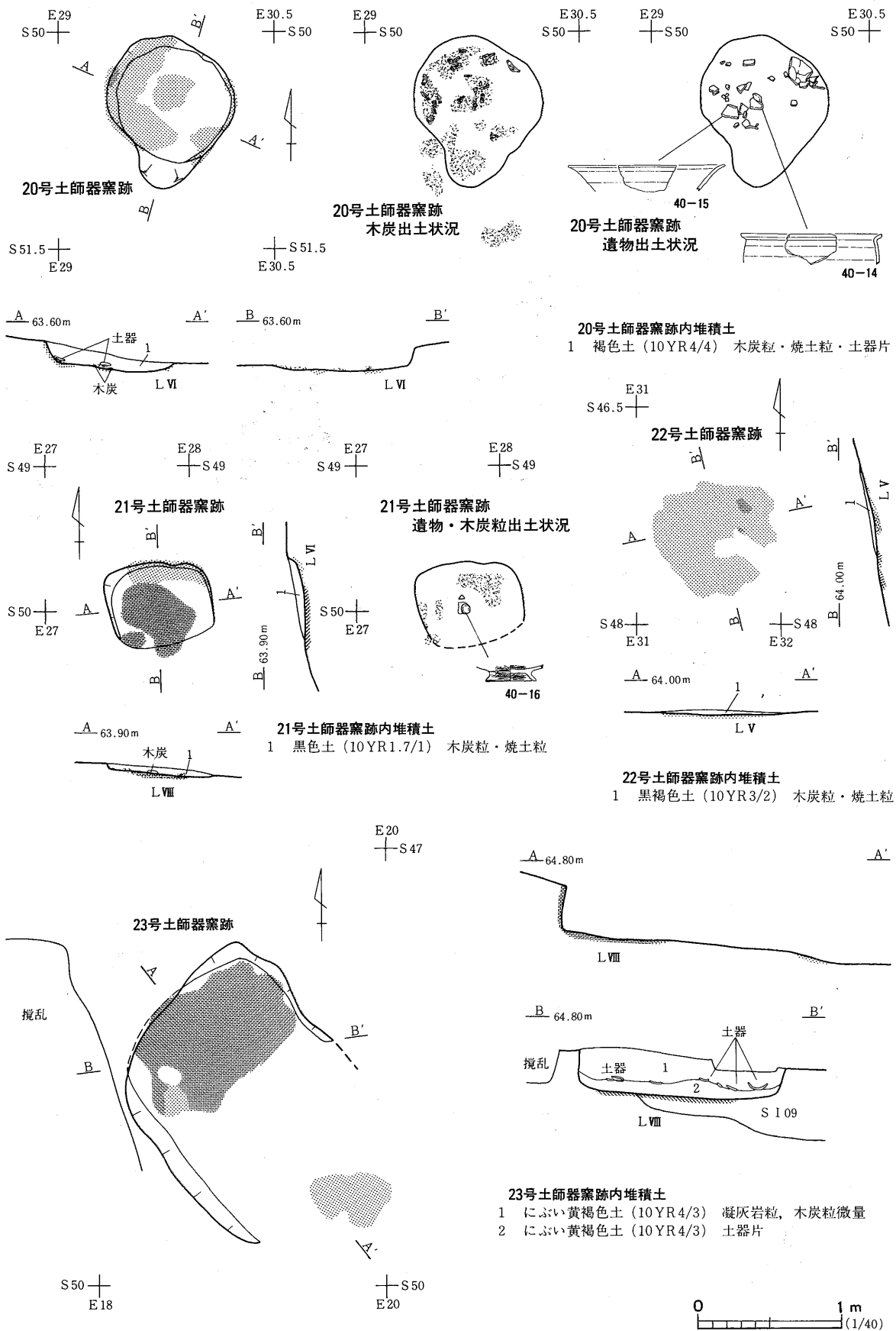


図39 20~23号土師器窯跡

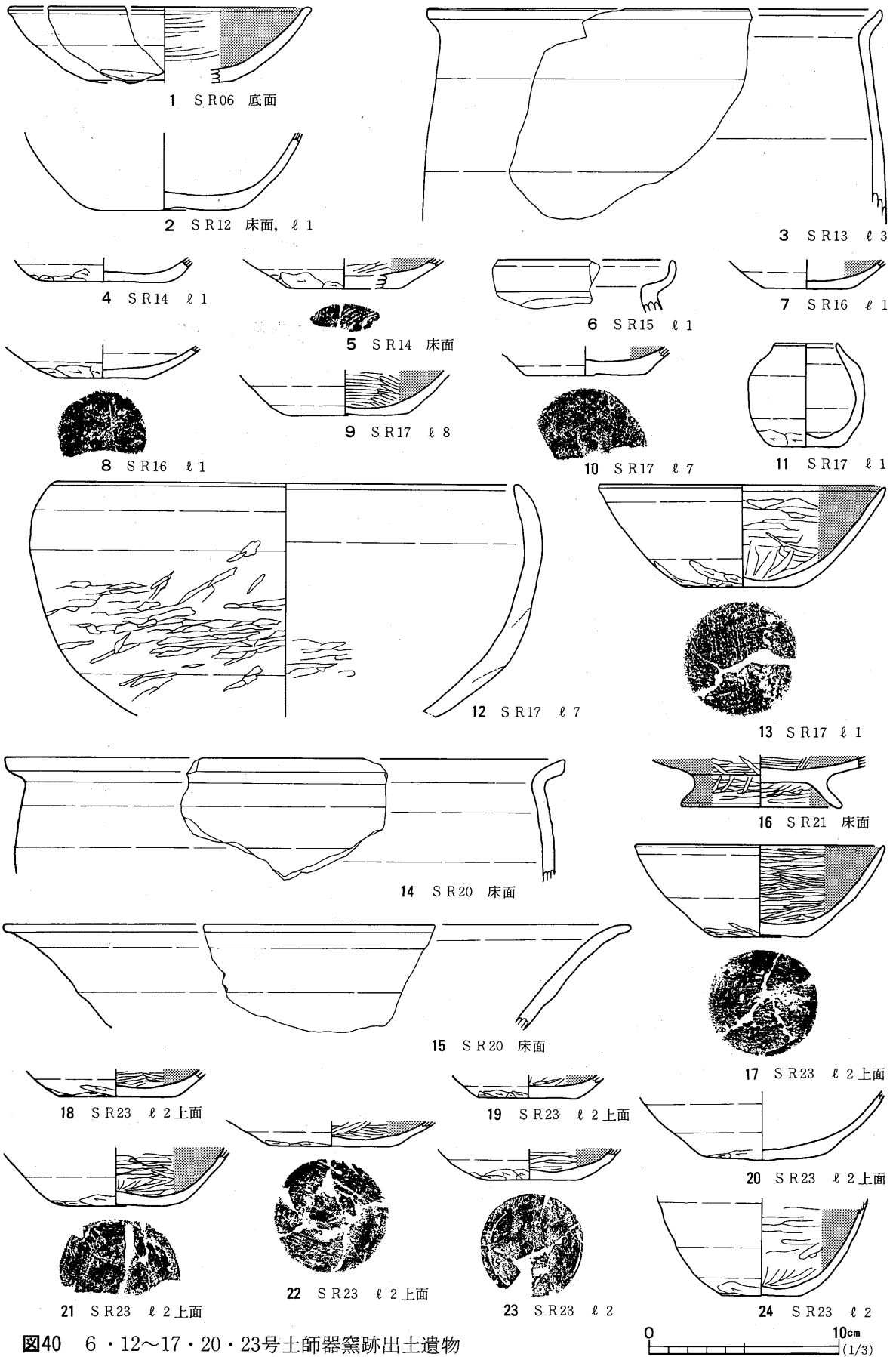


図40 6・12~17・20・23号土師器窯跡出土遺物

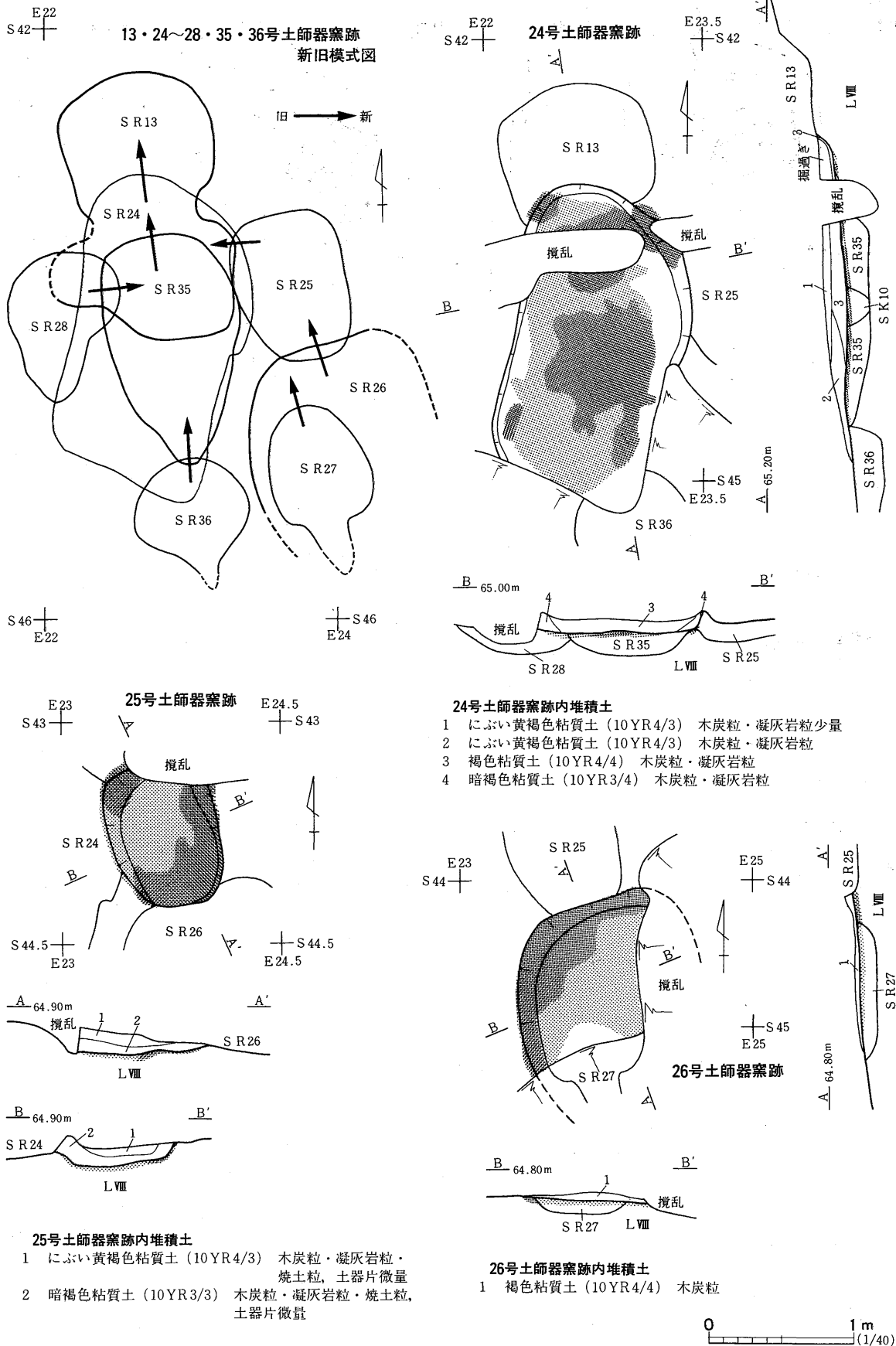


図41 24~26号土師器窯跡

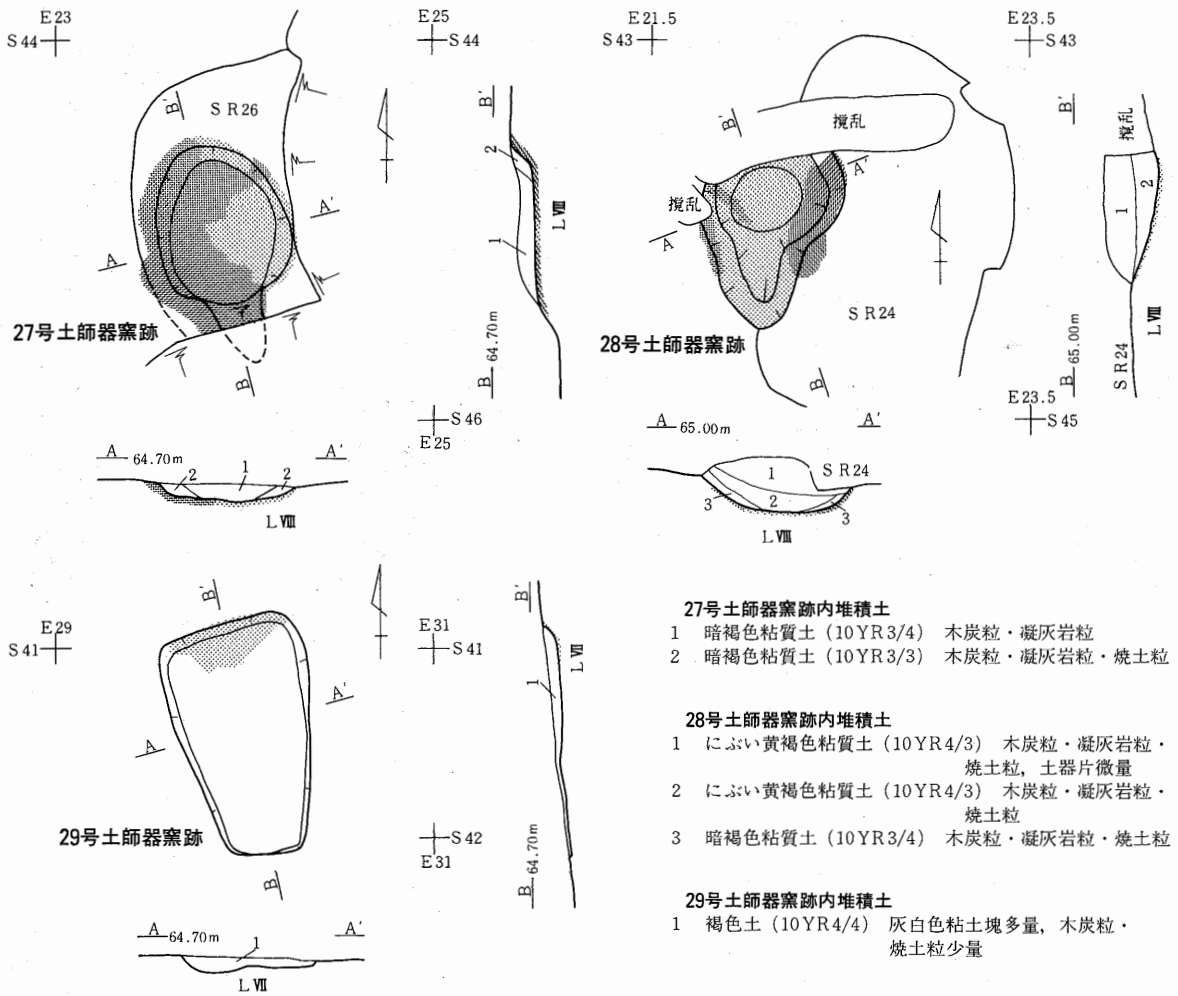
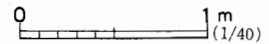


図42 27～29号土師器窯跡



以下、平面形態や被熱範囲などの違いによって抽出した3類型を機軸に解説を加えたい。ただし、遺構の多くは梨畑の耕作で損傷が著しく、本来の状態をとどめていない。さらに、発掘前にすでに消失してしまった遺構も複数あると予想される。したがって、十分な観察結果にもとづいた分類ではないことをあらかじめ断っておく。

第I類

1・2・6・7・12・14～18・23・29・30・34号窯跡の14基が該当する。類型区分の可能な28基のうち半数を占め、本遺跡でもっとも検出数が多い。

〔平面形〕 長軸が等高線に直交した方形基調をなす。斜面下位側の壁がなく解放状態になるAタイプ (2・17・20・30号) と、壁が全周するBタイプ (12・29号) の二つが抽出できる。後者の平面形は台形を呈する。本遺跡ではAタイプが主体を占められるが、遺存状態の制約から大部分は帰属関係が確定しない。

〔被熱範囲・状態〕 被熱は斜面上位側に偏って、遺構のすべてには及ばない。上からみた状態は横長の方形となる。この範囲が、薪が燃やされ土器の焼成された箇所と考えている。したがって、燃焼部＝焼成部である。もっとも強く焼けているのは奥壁で、それにくらべると側壁と床面の焼け

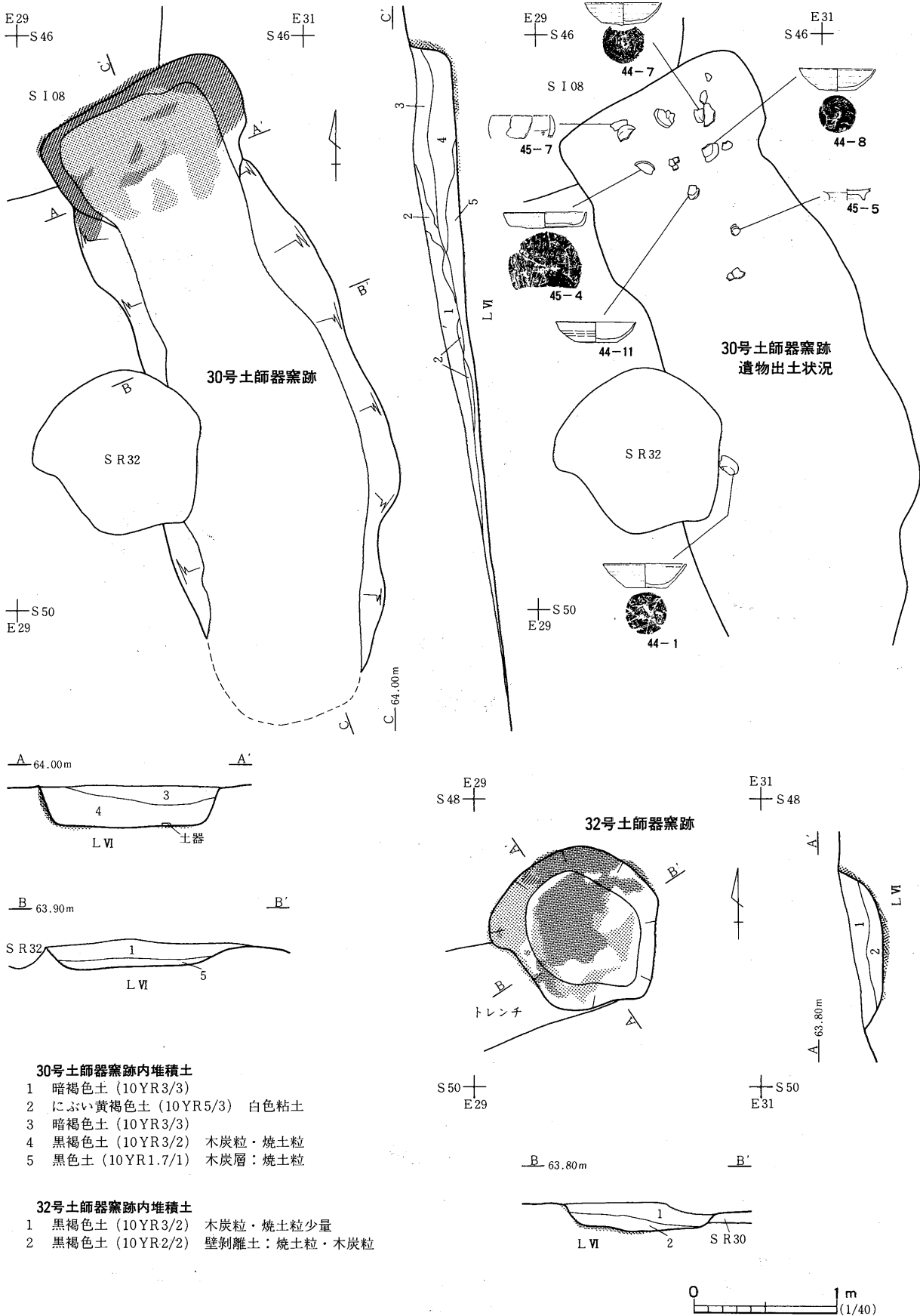


図43 30・32号土師器窯跡

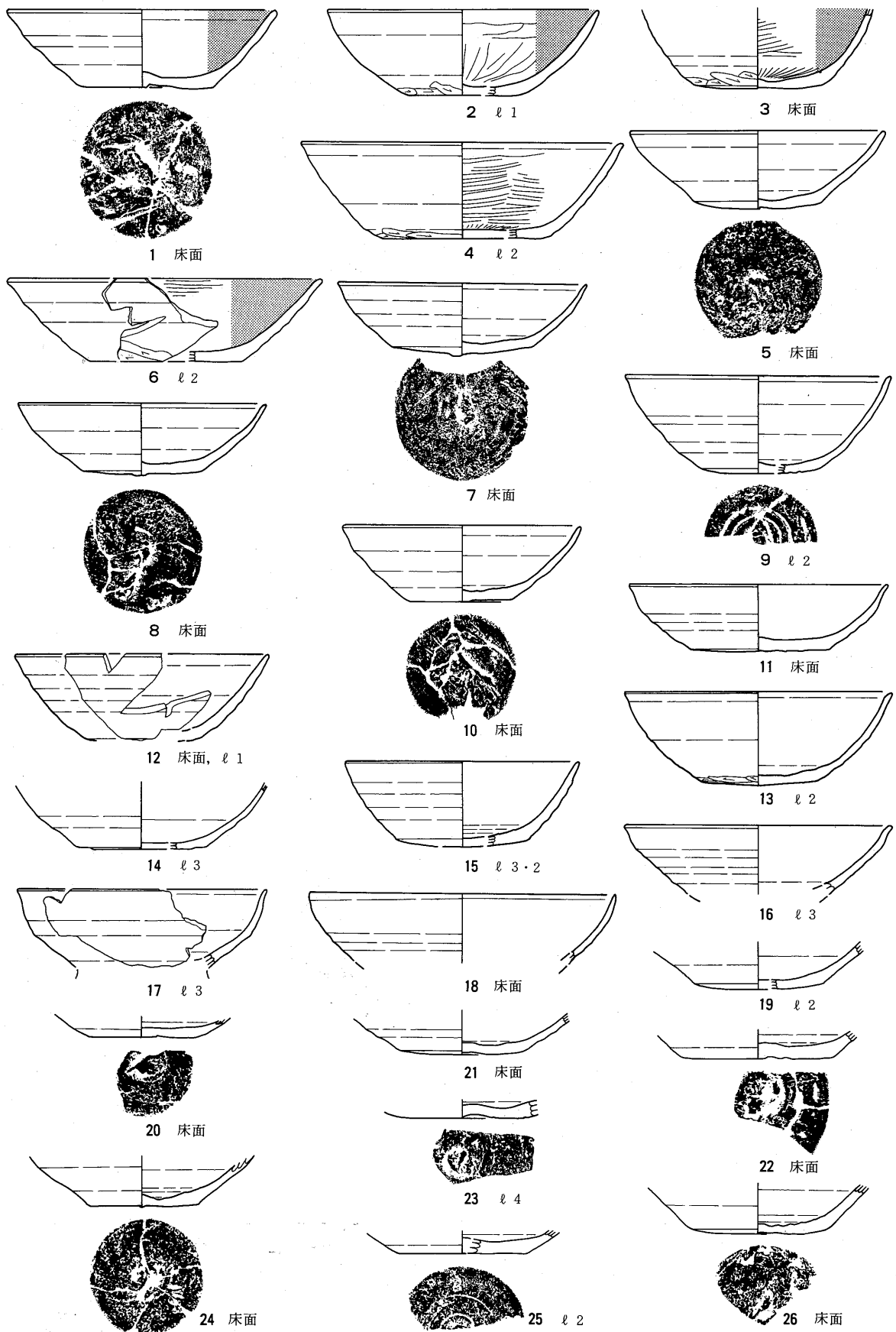


図44 30号土師器窯跡出土遺物(1)

0 10cm (1/3)

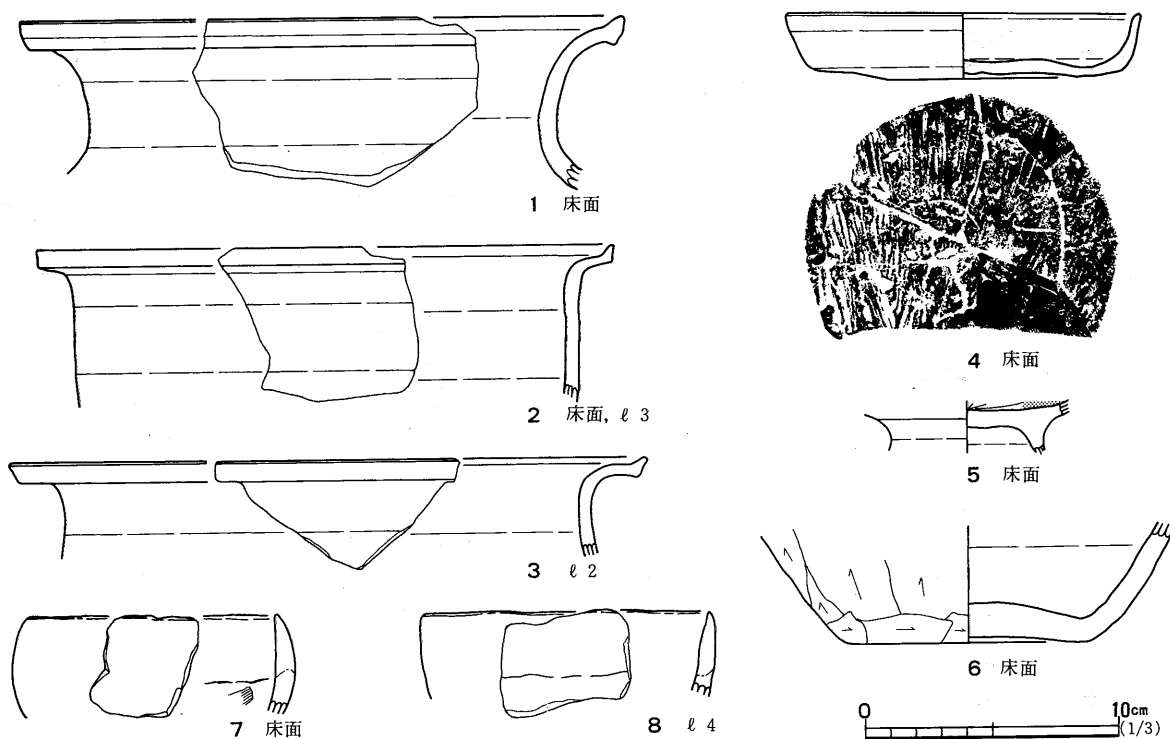


図45 30号土師器窯跡出土遺物(2)

は多少甘い。また、壁面と床面の変換点は焼けが途切れている。こうした特徴を典型的に示すのが、1・2・17・20・30号窯跡の5基である。

〔上部構造〕 30号窯跡で稲藁の付着した圧痕の残る粘土小片(写真61)が2点出土している。このことから、土器の表面を稲藁と灰で天井を架けるようにして覆った焼成方法(久保田正寿:1989)がとられたと推測される。

〔灰原〕 Aタイプのみで検出された。分布は被熱範囲の途切れる部分からはじまって斜面下位側に向かって広がっている。その末端は、遺構の範囲内に概ねおさまっている。灰層の性状は、碎片となった木炭や灰・焼土に混って、焼成不良の土師器片を含むのが特徴である。この灰原と被熱部分の接点からは、壁が低くなり、立ち上がりも直立状態から外傾気味へと変化している。さらに、底面も水平な状態が、わずかに傾斜を有するようになる。こうしたことから、焼成部と灰原が遺構内で明確に区別されていたことが窺える。

〔付属施設〕 17号窯跡では、周囲から24個のピットが検出された。配置に厳密な規則性は認められないが、半数以上に柱痕跡が確認された。したがって、この窯跡の覆屋跡と考えている。ただし、検出されたのは本窯跡1基のみであり、焼成に必ずしも必要な施設ではなかったらしい。

第Ⅱ類

3・13・20~22・27・28・32・36号窯跡の9基が該当する。

〔平面形〕 円形基調を呈する。壁は全周しており、直立せず外傾して立ち上がる。20・27・28・36号窯跡の4基は、斜面下位側に張出部を有する。

〔被熱範囲・状態〕 遺構全体が被熱しており、この点が第Ⅰ類と大きく異なる特徴である。しか

第3編 大久保F遺跡

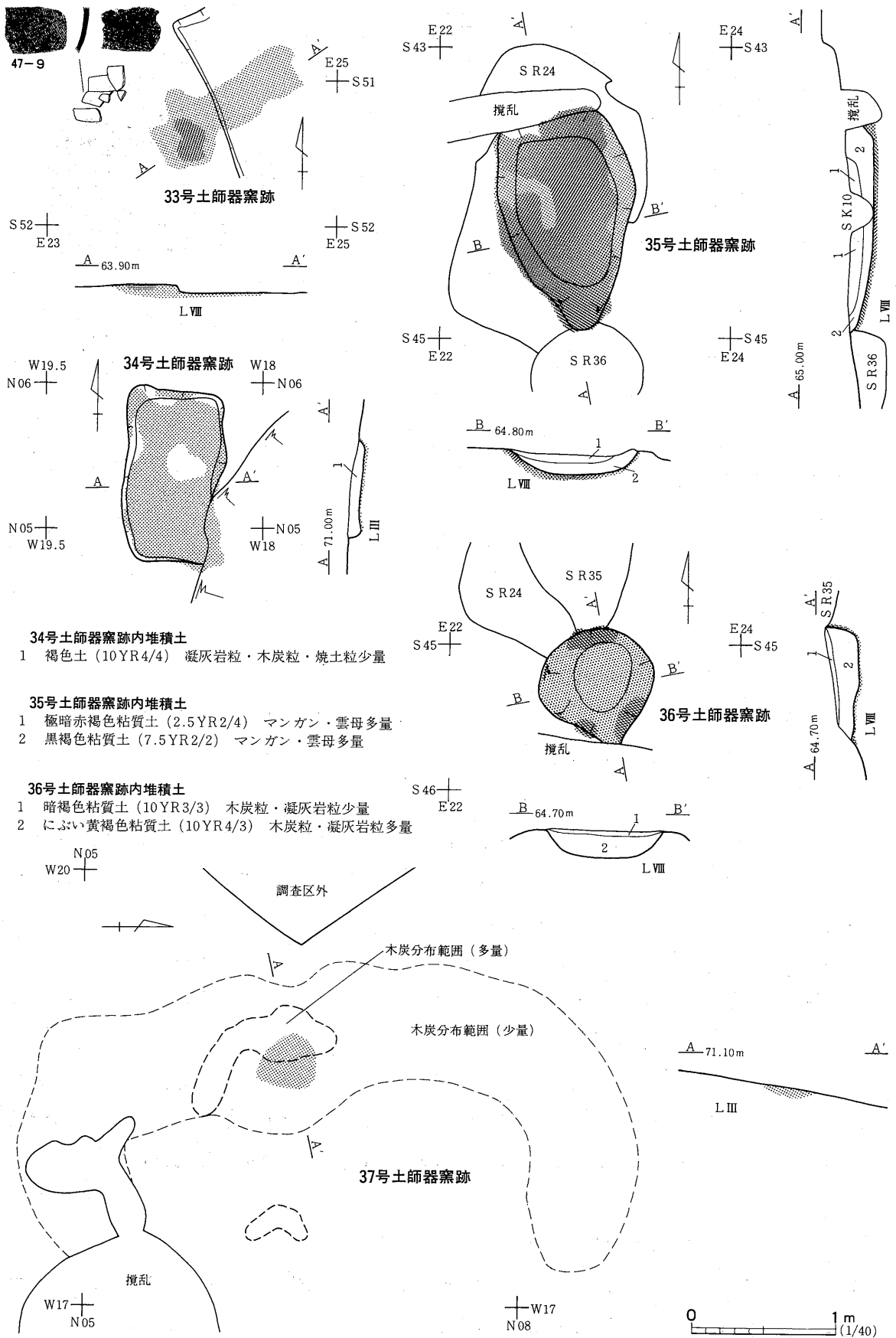


図46 33~37号土師器窯跡

- 34号土師器窯跡内堆積土**
- 1 褐色土 (10YR4/4) 凝灰岩粒・木炭粒・焼土粒少量
- 35号土師器窯跡内堆積土**
- 1 極暗赤褐色粘質土 (2.5YR2/4) マンガン・雲母多量
 - 2 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) マンガン・雲母多量
- 36号土師器窯跡内堆積土**
- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/3) 木炭粒・凝灰岩粒少量
 - 2 にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 木炭粒・凝灰岩粒多量

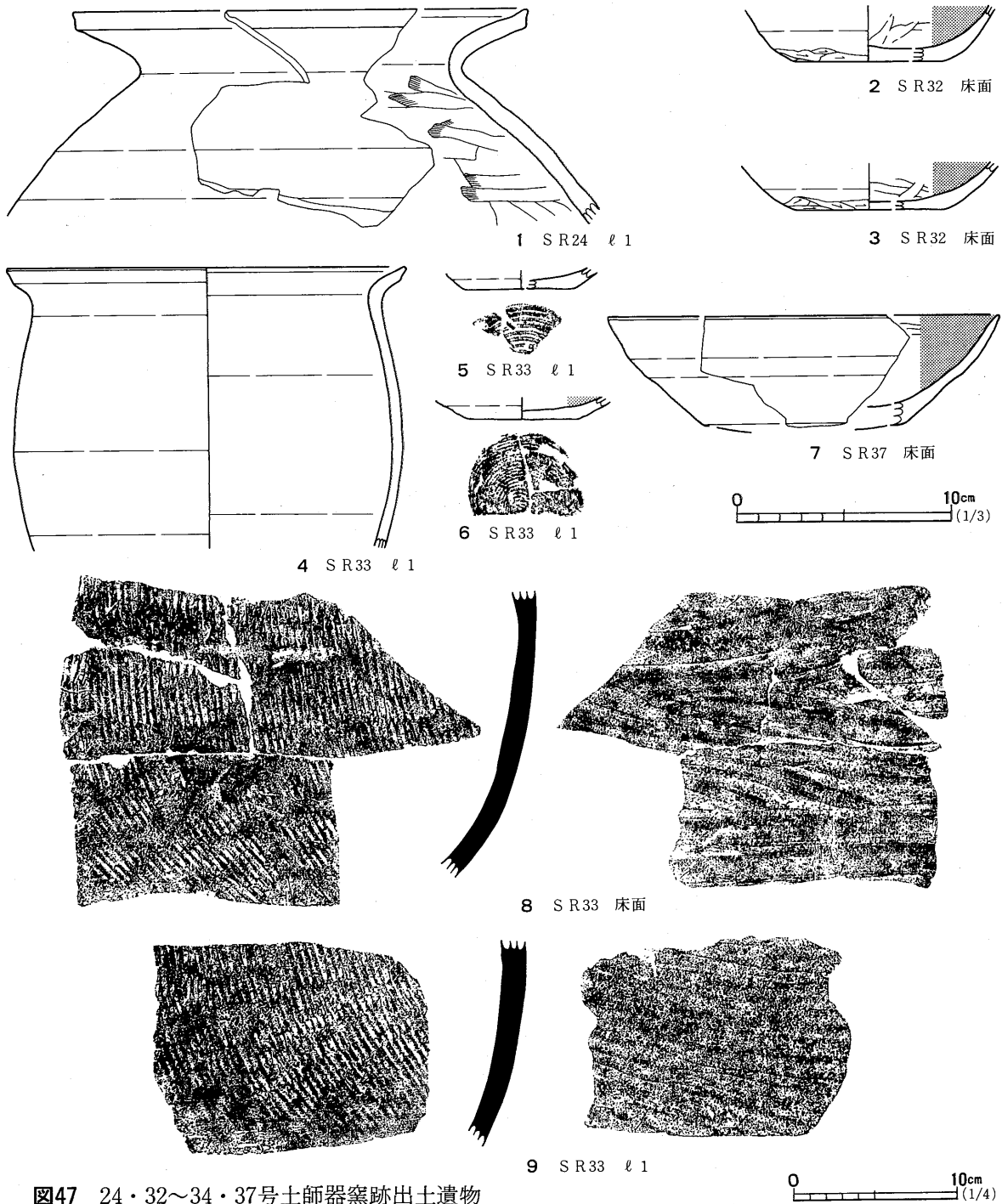


図47 24・32～34・37号土師器窯跡出土遺物

し被熱状態をみると、第I類と同じように斜面上位側の焼けが強く、反対側が弱いという傾向が読み取れる。したがって、この類型についても、奥壁とその反対側の区別が明確になされていたことが判明する。

[灰原] 第I類と違って遺構外に形成されたと考えられる。後世の削平で消失している。

第III類

24～26・35号の4基が該当する。

[分布] 本類は、8基の窯跡が複雑に切り合った箇所（図41左上）のうち4基を占める。

各遺構の上には梨畑の攪乱溝が縦横に走っており、全体の形状をとらえることができたものは一つもない。さらに、壁面・床面には、上層に構築された別の窯跡から2次的な被熱が加わっている。こうした条件下から、それらを一つの類型と認定して良いものか判断に迷ったが、ここでは以下の特徴から第Ⅲ類として抽出した。

[平面形] 楕円形基調を呈する。第Ⅰ類Aタイプに比べて丸みがあり、第Ⅱ類より縦に細長い。

[被熱範囲・状態] 遺構全体が良く焼けている。

[灰原] 認められない。第Ⅱ類同様遺構外に形成され、後世に削られたと推定している。

第5節 須恵器窯跡

須恵器窯跡は、比高差約2mの急斜面上に横並びの状態です3基検出された。それらは、調査前に行なわれた雑木搬出用の道路造成のため重機で削り取られている。とりわけ、31号窯跡にいたっては壁面の被熱痕跡のみで辛うじてその所在が知られた。もっとも破壊を免れた4号窯跡でさえ、焼成部下半以下は土取りされており、灰原は完全に失われている。こうした状態から、遺構から得られた知見はごく限定される。また、生産器種に関しても4号窯跡で焼き台に使用された甕の胴部片以外は、遺構に直接伴うものには恵まれなかった。以下では、4号窯跡にしぼって記述を行い、ほかの2基は遺構図面と写真(図51, 写真26・36)による事実報告だけにとどめる。なお、調査時に6号土坑と命名したものはこの窯跡の下部構造であり、ここで扱う。

4号須恵器窯跡 SR04

遺 構 (図48・49, 写真27・28・56)

本窯跡は、P22・23グリッドに位置しており、LⅧ上面から検出された。ほかの遺構との重複関係はない。主軸方位は、等高線に直交しておりN-49.5°-Eを測る。堆積土は全体で13層に分層することができた。①1~9が焼成部、①10~13が燃焼部に堆積している。焼成部の天井崩落土層中には、スサを含有した構築材片が充満している。このことから、本窯跡は半地下式窖窯の構造であったと考えている。それらの多くは青灰色に還元している。また、その構築材片のなかには、天井の内壁面が指ナデ調整して仕上げられていたことを示す資料(写真56右下)や、天井の骨組みとなった細い木材の痕跡を残す資料(写真56右上)が含まれている。

本窯跡の全体の遺存長は、4.65mを測る。焼成部は遺存長2.66m、最大幅1.60mを測るが、長さに関しては、燃焼部との境が欠損しており、正確な数値はわからない。真上からみた状態は、両側の側壁が直線的にのび、奥壁は逆Uの字形を呈する。床面は、奥壁側に2段のテラスがつくりだされ、その手前側は水平となっている。床面は2面認められる。被熱状態は一部で還元しているものの、ほとんど赤黒く酸化しており、とくに奥壁にかけてその傾向が著しい。

燃焼部は遺存長1.46m、最大幅1.00mを測る。中軸線上の断面状態からすると、焼成部とは明確

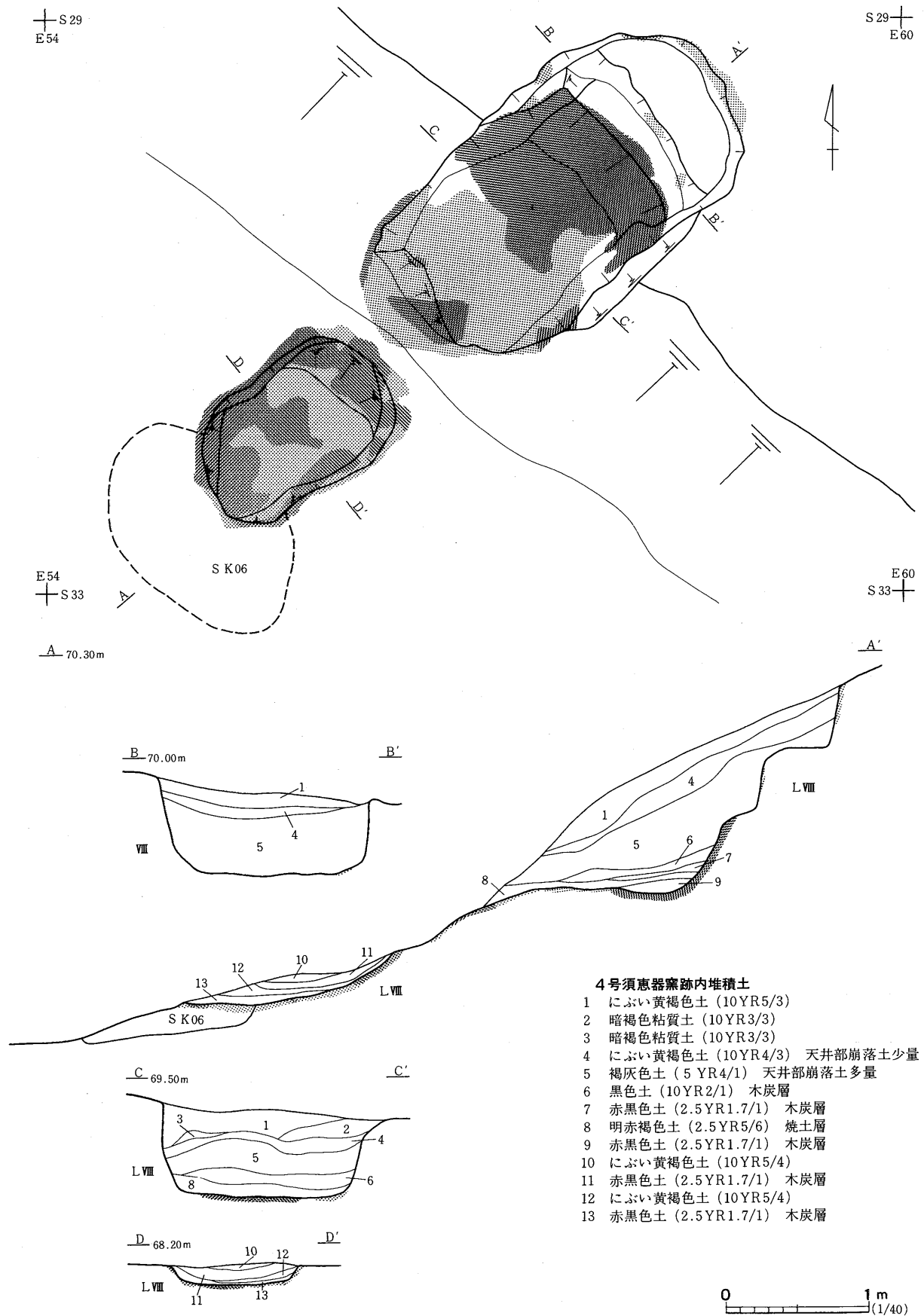


図48 4号須恵器窯跡

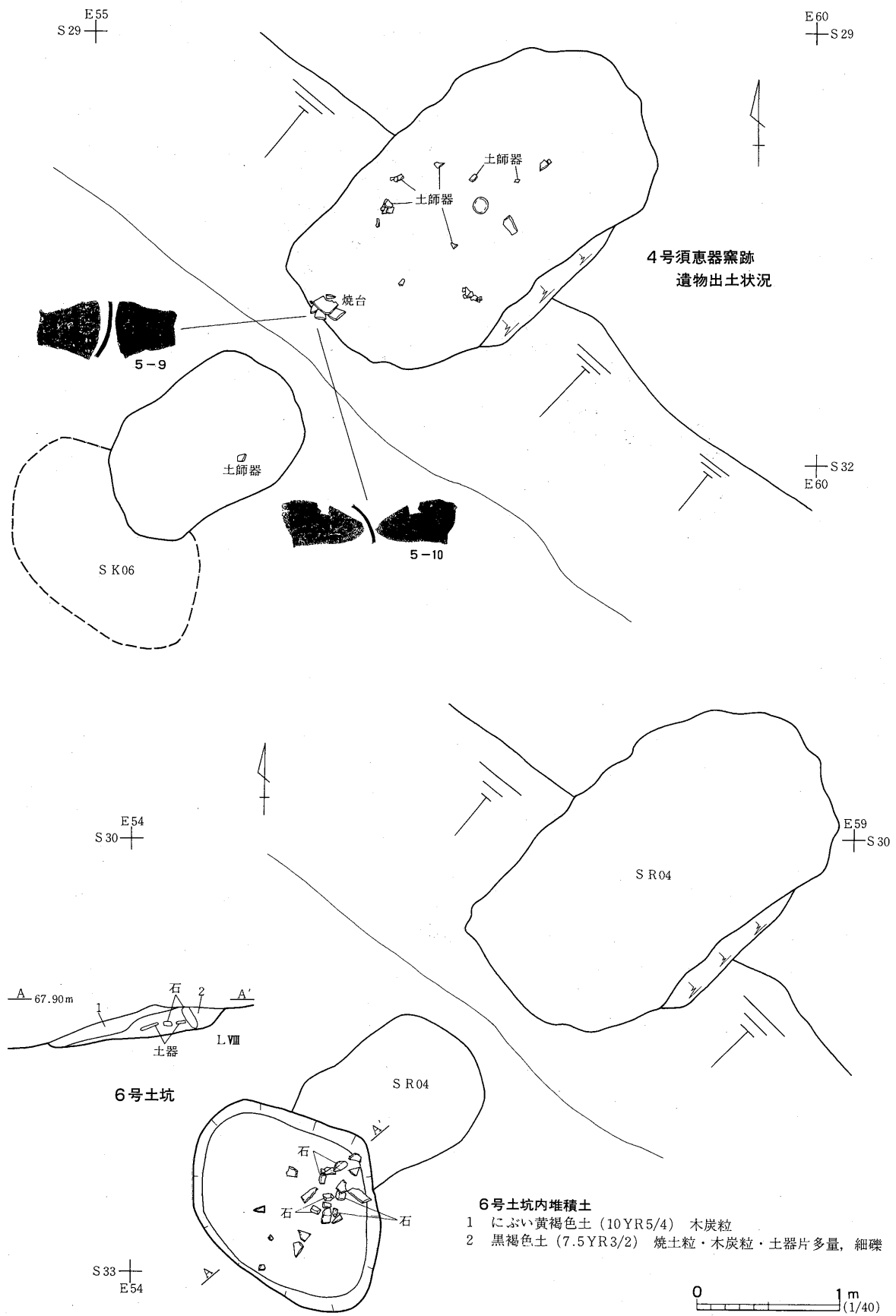


図49 4号須恵器窯跡遺物出土状況, 6号土坑

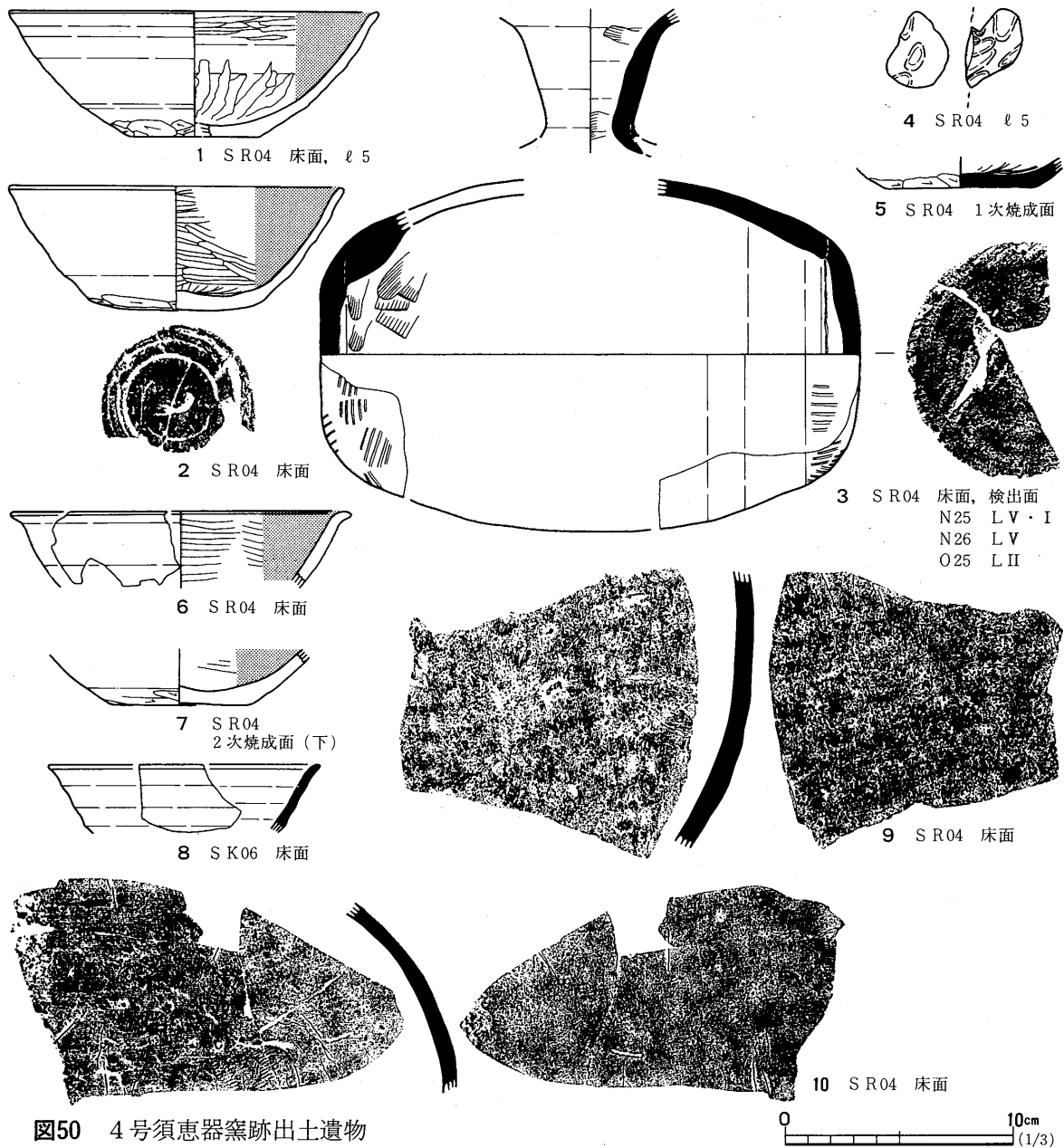


図50 4号須恵器窯跡出土遺物

な段で区切られていたと推定される。木炭層は2枚認められ、焼成部における床面検出数と一致した所見が得られた。この燃焼部の下層からは、6号土坑が検出されている。堆積土上面がこの須恵器窯の作業面と一致して被熱しており、作業開始前に内部は焼土・木炭粒の充満した土層で埋め戻されている。使用痕跡は認められず、こうした所見から、この土坑は、本窯跡の下部施設で除湿効果を狙った「船底状ピット」と考えている。

遺物 (図50, 写真56)

遺物は須恵器片36点, 土師器片208点が出土した。図示遺物で窯跡に確実に共伴する須恵器は、図50-5・9・10の3点である。ただ5の杯は、内面に土師器と同じコテ当て調整が施されており、焼成時に何らかの理由で投棄されたものと思われる。また、9・10の甕も、焼き台に転用されており、本窯跡の製品という確証はない。8は本窯跡の作業前にこの遺跡で既に別の窯が稼働していた

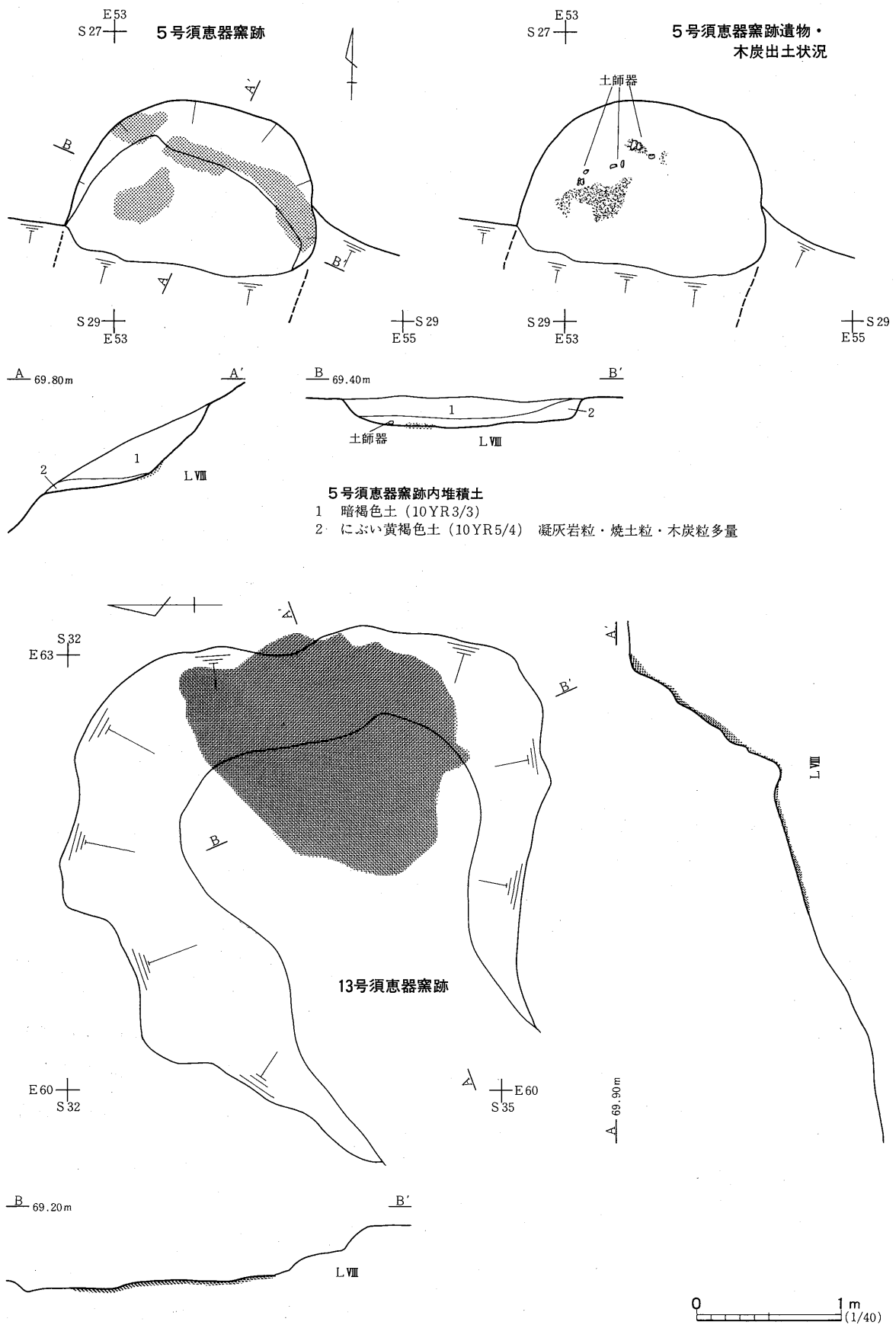


図51 5・31号須恵器窯跡

ことを示している。さらに、こうした須恵器とは別に、本窯跡では床面上から土師器杯が出土している。その特徴は、30号窯跡に代表される本遺跡の古いグループと同一の要素を示している。これによって須恵器と土師器の時間的な併行関係を知ることができる。

ま と め

本窯跡は半地下式の有段有階窖窯である。最終操業面には土師器片が残され、燃焼部が周辺の土師器窯とよく似た被熱状態を示す。このことから、本窯跡の最終使用形態は土師器窯跡であったと推測している。 (菅原)

第6節 木炭窯跡

木炭窯跡は4基検出された。どれもいわゆる簡易木炭窯跡とは異なるもので、うち3基は短軸側の周壁に張出を持ち、底面に溝を有する特徴がある。

8号木炭窯跡 SC08

遺 構 (図52, 写真39)

本窯跡は、遺構の集中地域からかなり離れた調査区南東部R30グリッドで9号木炭窯跡と共に検出された。この付近は南西に向かって傾斜する地形である。検出面はLVIIIである。長軸2.70m、短軸1.54mの小判形の平面形をなす。主軸方位はN-44°-Eで等高線には直交している。そのため、山側の壁は保存が良く、谷側の壁は後世の開墾のためか遺存しない。

窯跡内堆積土は5層に分けられた。①2~4が壁際に厚く断面三角形に堆積している。これは初期の壁崩落土や表土流入土と考え自然堆積と解釈した。①5は床面全体に広がる木炭層で使用時の堆積である。

もっとも良く遺存している壁の高さは52cmである。短軸側の周壁の外傾度は約24°である。しかし、長軸側の周壁の立ち上がりはほぼ垂直である。床面は谷側にわずかに傾斜している。木炭層が検出されたにもかかわらず、床面中央にわずかな焼土面がみいだされただけだった。短軸側周壁から主軸線に沿って幅14~20cm、深さ約4cmの溝が設けられている。

ま と め

本窯跡は土師器窯跡と平面形で類似するが、前述のように周壁などの強く焼けた様子がほとんどない状態である。しかし、床面には木炭粒が厚く層をなして堆積しており、まったく使わないわけではなかったようである。この付近は調査中も湧水があり、製炭に適しなかったため、あまり使用しないまま遺棄されたものと考えられる。

時期は出土遺物がまったくないので良くわからない。しかし、本遺跡では古代の遺物以外はほとんど出土しないことを勘案すると、平安時代の可能性は高い。したがって、この時代に行われた土器生産に関連する施設として営まれた遺構とみておきたい。 (石本)

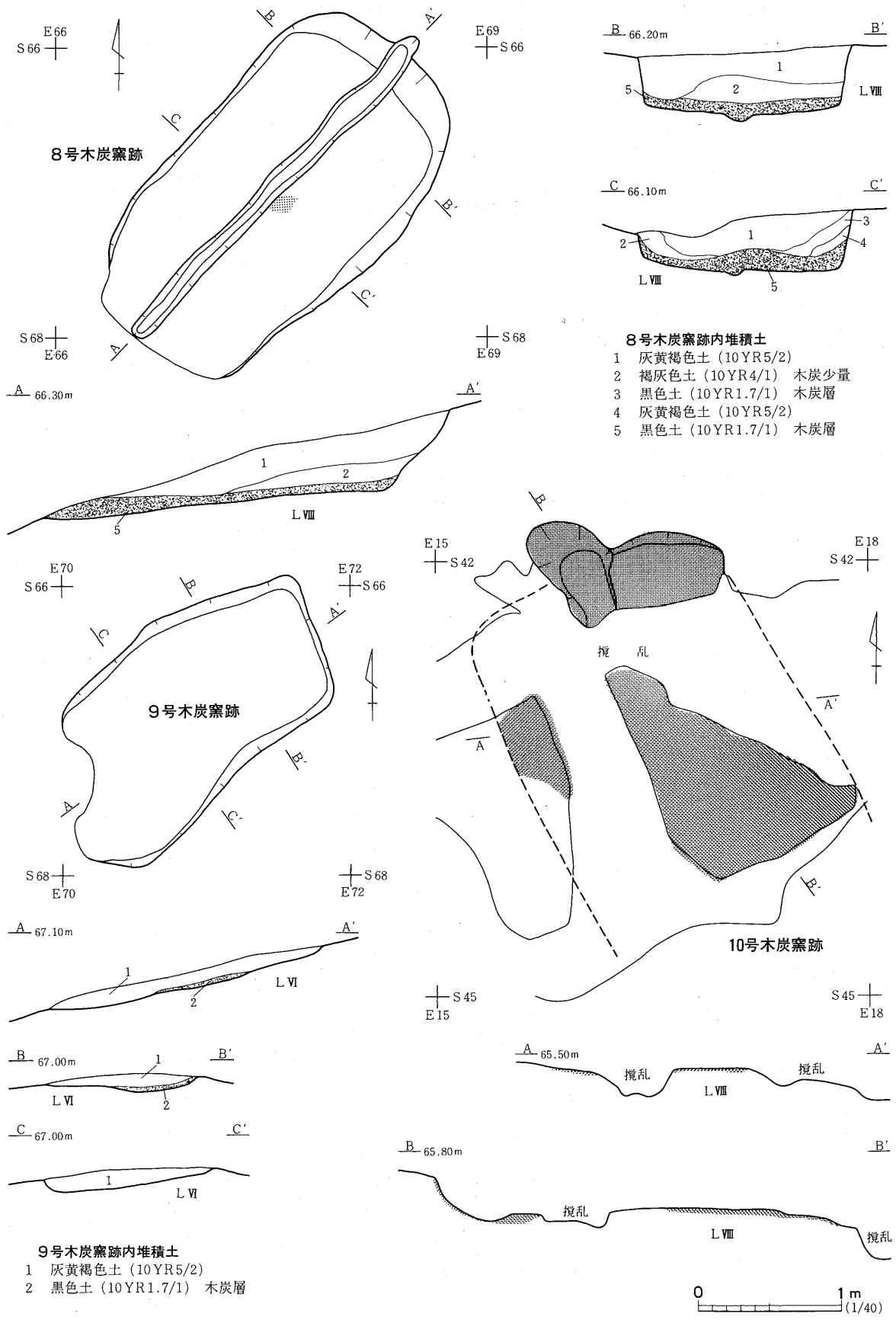


图52 8・9号木炭窯跡

9号木炭窯跡 SC09

遺 構 (図52, 写真40)

本窯跡は、8号木炭窯跡東約4mのS30グリッドで検出した小型の窯跡である。長軸2.30m、短軸1.35mの不整長方形を呈している。深さは10cm程度で、周壁は谷側の面を除いて全周するが、最高で9cmが遺存するだけだった。8号木炭窯跡と違って床面が斜面と同じくらい傾斜している。木炭層が床面の上位にわずかに認められるだけで、床や壁は焼けていない。遺物の出土はない。

ま と め

8号木炭窯跡の近くにあるので、同じような条件で廃棄されたのかもしれない。所属時期については年代決定資料がないので不明だが、8号窯跡と同じ理由で平安時代の可能性が高い。(石本)

10号木炭窯跡 SC10

遺 構 (図52, 写真40)

本窯跡は、遺構集中域の西部H25グリッドで検出した。検出層位はLⅧである。耕作によってたいへん保存が悪く、南北2.8m、東西2.0mの範囲に表面が炭化した焼土面が遺存するだけである。床面は平坦で北端にはわずかな壁の立ち上がりが認められ、また浅い穴を検出した。この穴は床面と同じように被熱しているので、遺構に伴う施設と考える。

ま と め

保存が悪いためどのような形態の木炭窯跡か判断できない。しかし、北端の穴が8号木炭窯跡のような溝の一部とすれば、古代の木炭窯とすることができる。(石本)

11号木炭窯跡 SC11

遺 構 (図53, 写真41・42)

本窯跡は、遺構集中域から北方に約60m離れたN8グリッドで検出した。検出層位はLⅧである。平面形は長軸4.38m、短軸でもっとも広い部分が1.75mのわらじのような格好をしている。

窯跡内堆積土は9層に分けることができたが、中央より東側に②や⑨のような焼土塊を主体に木炭層が堆積し、西側には⑥・⑧のような焼土塊を含まない木炭層が認められる。これらはそれぞれ2枚ずつあり、②は⑥の上層になり、⑨は⑥よりも下層になっている。そして⑥・⑧・⑨は床面を直接覆っている。

本窯跡の長軸の方位はN-60°-Wで、等高線とほぼ平行しており、床面は平坦になっているため山側の周壁が55cmだが、谷側の周壁は40cmほどの遺存である。短軸東側辺のコーナーは角張り方形になるが、周壁は約42°の外傾度で立ち上がっている。そして壁上部中央に小さな張出がある。これに対して、同西辺は平面的には丸くなっており、立ち上がりも約78°の外傾度でかなり緩やかになっている。またこちら側の張出は約60cmと長い。山側の良くのこっているほうの周壁はかまぼこ

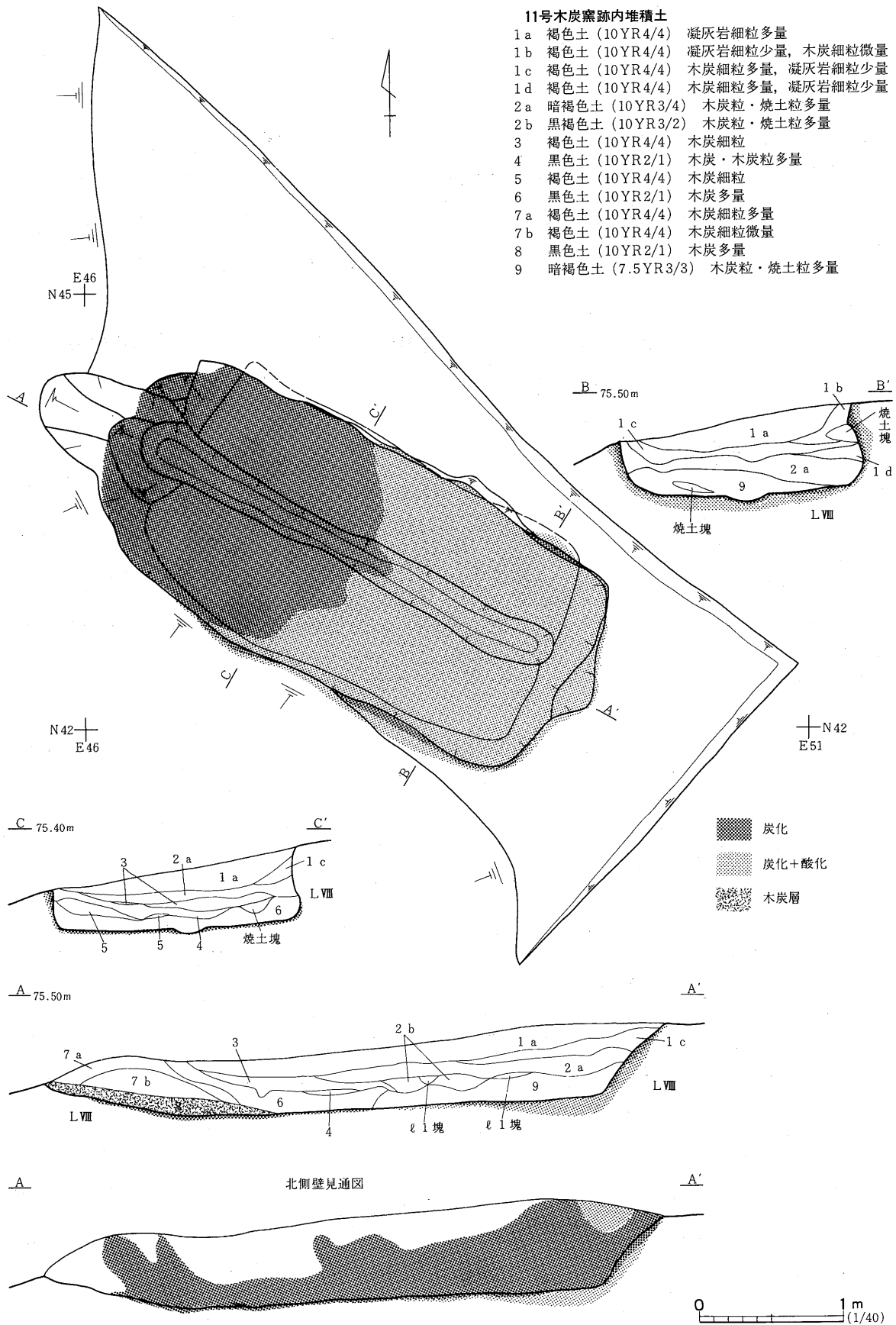


图53 11号木炭窯跡

形にオーバーハングしているが、谷側の周壁は垂直か、わずかに外傾しているだけである。短軸東辺中央の周壁下から、西辺の中位にかけて床面に幅20~40cm、深さ4cmの溝が施されていた。ちょうど堆積土が大きく変化している床面中央部で被熱の様子も異なっている。表面は炭化して黒くなっているが、2cmほどの炭化層を剥がすと赤く焼けた被熱層になる。これは壁面でも同じで、赤化層は東辺壁に近づくにしがって厚くなっている。床面中央部より西側では赤化層はなくなり炭化層だけとなる。山側の周壁の湾曲具合からみると天井の存在が考えられる。しかし谷側の周壁は同位置になっても湾曲していない。また、これは後世削土が行われていないと仮定してだが、検出土層と現表土を含めて天井を復元すると、天井の一部が検出土層のうえに突き出してしまうので掘り抜き式の構造は想定できない。天井を架構した粘土なども検出されないので、天井はなかったとみられる。木炭の堆積状態や周壁や床面の焼け方から、製炭の方法や操業数がある程度復元することができる。ℓ2やℓ9は焼土塊を含む点で同じ木炭層のℓ6やℓ8とは異なっている。前者は周壁などが赤化している部分と対応しているので、火熱の強さと関係があるのではないかと思う。ℓ6とℓ8に間層があるので、最低2回は操業したようである。(石本)

第7節 土 坑

調査区から検出された土坑の総数は14基で、遺跡内に散漫に分布している。各遺構を堆積土の様相、形状、出土遺物などをもとに分類すると、落とし穴が3基、粘土採掘坑が1基、墓坑が1基、その他の土坑が8基にわけられる。なお、6号土坑については前述したように、4号須恵器窯の下部構造であると判断したのでここでは割愛した。

以下、個別の報告は実測図と一覧表に譲り、抽出したまとまりに沿って記述を進めていくことにしたい。

[落とし穴] (図54・56, 写真43・47・48)

落とし穴は、2・13・14号土坑の3基である。2号土坑は1号住居跡と重複しており、2号土坑が1号住居跡よりも古い。これら3基はいずれも調査区を中心よりやや北側、段丘の上位面にならんで検出された。検出面はLⅧ上面である。3基とも、同じ高さの等高線上にあり、13・14号土坑は軸線方位が等高線とほぼ直交し、2号土坑は等高線とほぼ平行の軸線方位を示す。土坑内堆積土は3基ともレンズ状を呈しており、側壁の崩落と外からの流入による自然堆積と思われる。平面形は、いずれも長径が1.5mを越える楕円形である。中でも13号土坑は、長径が2.84m、短径が1.03m、深さが92cmと大型の土坑である。底面形も平面形に準じ、楕円形を呈し、いずれの土坑からもピットが検出された。2号土坑は底面のほぼ中央に1基、13号土坑は底面を3分する位置に1基ずつ、14号土坑は底面のほぼ中央に1基と、それをはさんでほぼ等間隔に1基ずつの計3基のピットを有している。これらのピットは、底面に棒を差し込んだ跡と考えられる。土坑の形状、3基の位置関係から、縄文時代の落とし穴であると判断した。3基とも遺物の出土はない。

表2 土坑観察一覧

(*…推定値, 単位: cm)

No.	グリッド	検出層位	規模			重複関係	備考
			長径	短径	深さ		
1	J-22	S I 04A 上面	61	43	21	S K 01 > S I 04A	楕円形
2	J・K-20	L VIII 上面	173	107	77	S I 01 > S K 02	落とし穴, 楕円形, 柱穴1
3	O-12・13	L VIII 上面	142	130	79	重複関係なし	墓坑, 円形
4	N・O-11	L VIII 上面	144	71	28	重複関係なし	お玉じゃくし状
5	O-5・6	L VIII 上面	145	* 116	* 65	重複関係なし	方形
6	O・P-23	L VIII 上面	165	123	37	重複関係なし	S R 04の下部構造
7	L-23	L VIII 上面	135	95	51	重複関係なし	楕円形
8	H・I-26	L VII・S I 09 上面	* 150	82	31	S R 15 > S K 08 > S I 09	不整楕円形
9	I・J-28	L VIII 上面	47	44	7	重複関係なし	円形
10	I-25	S R 35 上面	36	30	16	S K 10 > S R 35	円形
11	M-32	L VIII 上面	176	145	88	重複関係なし	粘土採掘坑, 不整楕円形
12	J・K-33・34	L VIII 上面	* 140	100	18	重複関係なし	隅丸方形
13	J・K-17	L VIII 上面	284	103	92	重複関係なし	落とし穴, 楕円形, 柱穴2
14	J・K-18	L VIII 上面	200	76	60	重複関係なし	落とし穴, 楕円形, 柱穴3

[粘土採掘坑] (図55, 写真47)

粘土採掘坑に該当するのは, 11号土坑である。M32グリッド付近, 南向きのごく緩やかな斜面の下部で検出された。検出面はL VIII 上面である。良質の粘質土層が厚く発達した地点をねらって掘り込まれており, 深さは88cmを測る。採掘による底面の凹凸が顕著である。堆積土の状況から, 人為堆積と考えられ, 採掘終了後, 人為的に埋め戻されたものと思われる。本土坑からの遺物の出土はない。所属年代については, 本遺跡の性格から, 土師器窯や須恵器窯が機能していた時期と同時期とするのが妥当であろう。

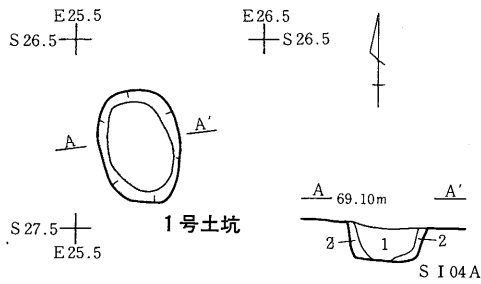
[墓坑] (図54・57, 写真44・62)

3号土坑1基が該当する。O12グリッド, 調査区の北半部の西向きの丘陵下部に位置する。検出面はL VIII 上面である。遺構内堆積土は2層に分けられ, 人為堆積である。平面形は, 直径1.3m程の円形を呈し, 底面からほぼ垂直に壁が立ち上がっている。底面とみられるところからは, 銭貨, キセル, 漆器が出土した。キセルと漆器は遺存状態が良くないため, 図示できなかった。銭貨は寛永通寶で, 6枚重なって出土している。鉄釘は, 棺をとめておいたものと思われる。堆積土の状況, 土坑の形状, 出土遺物から近世の墓坑であると判断した。

[その他の土坑] (図54・55・57, 写真43~45・46)

その他の土坑は, 出土遺物のある土坑と, 出土遺物のない土坑に分けられる。

出土遺物のある土坑は, 1・5・8~10号土坑である。5号土坑は西向きの傾斜の厳しい斜面上のO5・6グリッドで検出された。他の土坑は調査区のほぼ中央の, 南向きのごく緩やかな斜面上で検出された。1・8・10号土坑はほかの遺構と重複があり, 1号土坑は4号A住居跡より新しい。

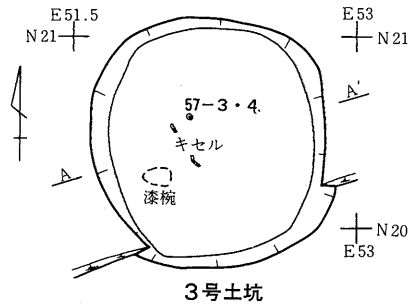
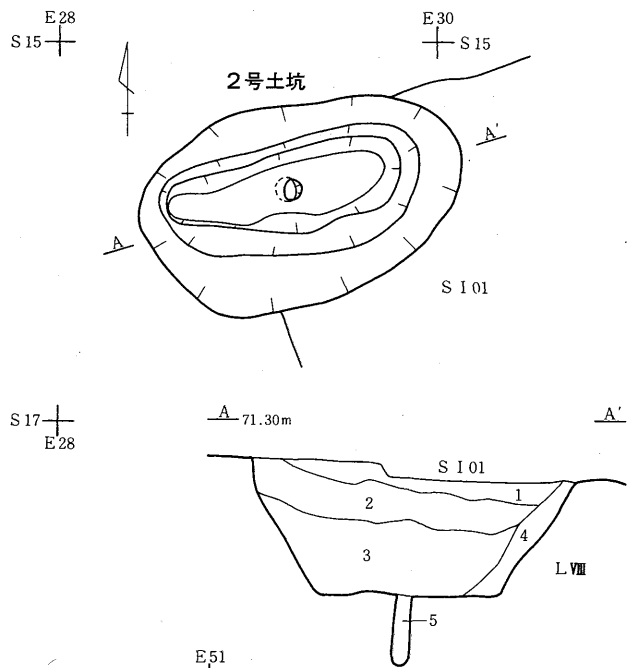


1号土坑内堆積土

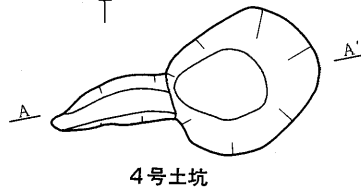
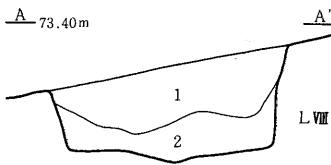
- 1 暗褐色粘質土 (10YR3/1) 細礫多量, 木炭粒少量
- 2 におい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 黒褐色土粒・木炭粒少量

2号土坑内堆積土

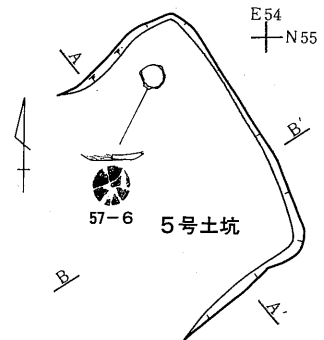
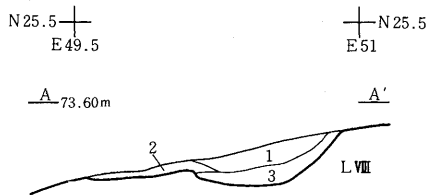
- 1 におい黄褐色粘質土 (10YR4/3)
- 2 黒褐色粘質土 (7.5YR3/2) におい黄褐色土粒少量
- 3 暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) におい黄褐色土粒多量
- 4 褐色粘質土 (10YR4/4) におい黄褐色土粒多量
- 5 暗褐色粘質土 (10YR3/3)



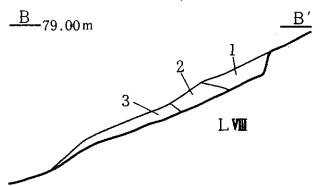
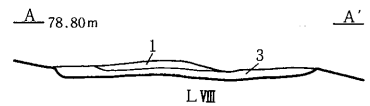
3号土坑



4号土坑



5号土坑



3号土坑内堆積土

- 1 褐色土 (10YR4/4) 暗褐色土粒多量
- 2 褐色土 (10YR4/4)

4号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 木炭粒・焼土粒多量
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 木炭粒・焼土粒少量
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2)

5号土坑内堆積土

- 1 におい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 木炭粒少量
- 2 褐色粘質土 (10YR4/4) 焼土塊・木炭粒多量
- 3 灰黄褐色粘土 (10YR4/2) 白色粘土塊多量

7号土坑内堆積土

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 木炭粒・焼土粒少量
- 2 褐色土 (10YR4/4) 礫少量

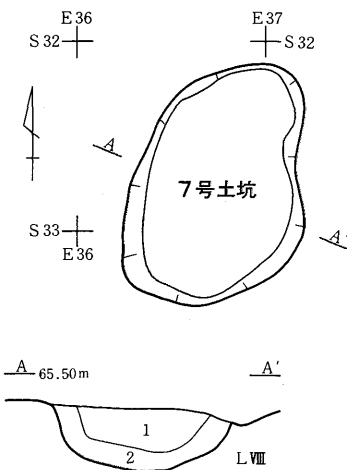
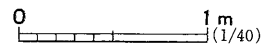
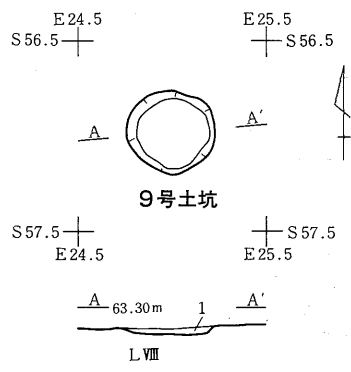
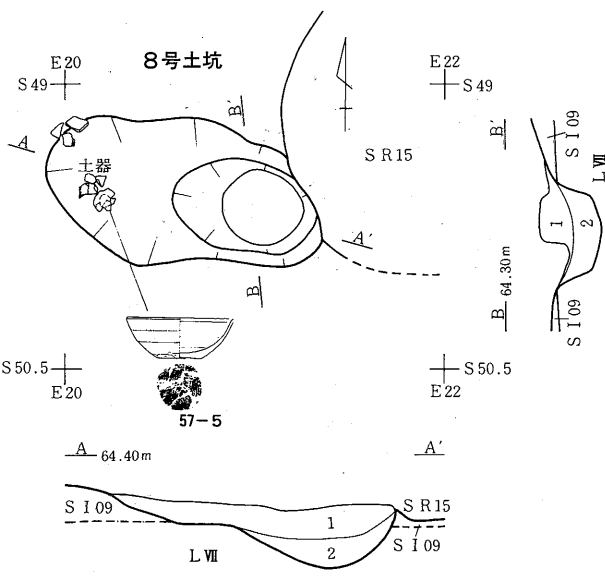


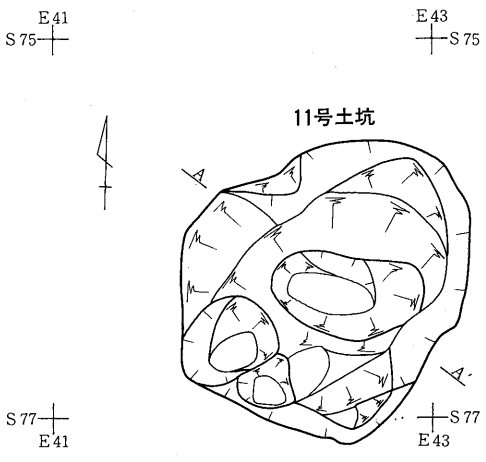
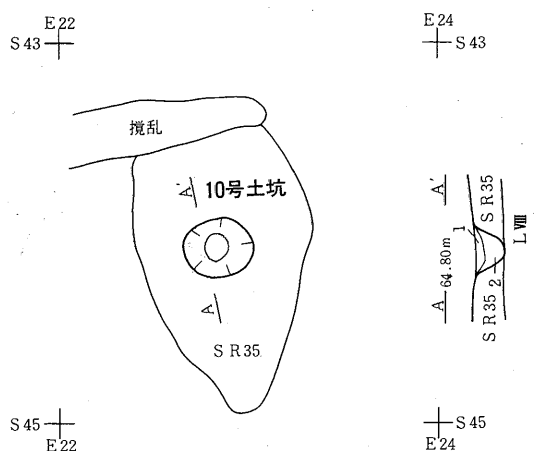
図54 1~5・7号土坑





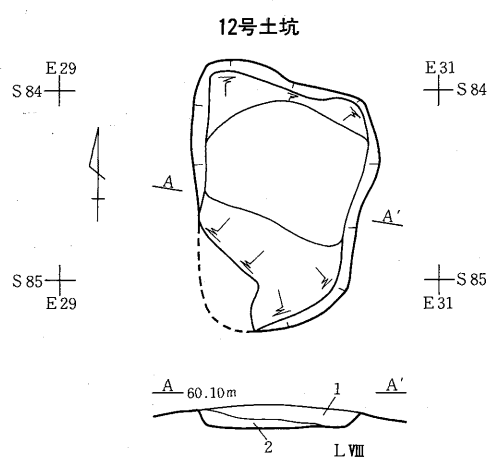
8号土坑内堆積土
 1 黒褐色土 (10YR3/1) 凝灰岩粒・木炭粒
 2 褐色土 (10YR4/4) 木炭片・粒多量, 凝灰岩粒少量

9号土坑内堆積土
 1 暗褐色土 (10YR3/4) 木炭粒・焼土粒



10号土坑内堆積土
 1 黒褐色粘質土 (10YR2/3) 木炭粒・焼土粒多量
 2 黒褐色粘質土 (10YR2/3) 焼土粒多量, 木炭粒少量

11号土坑内堆積土
 1 灰色土 (N4/)
 2 暗灰色土 (N3/)
 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
 4 灰黄色粘質土 (2.5Y6/2)



12号土坑内堆積土
 1 黒色土 (10YR2/1)
 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)

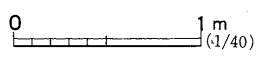


図55 8～12号土坑

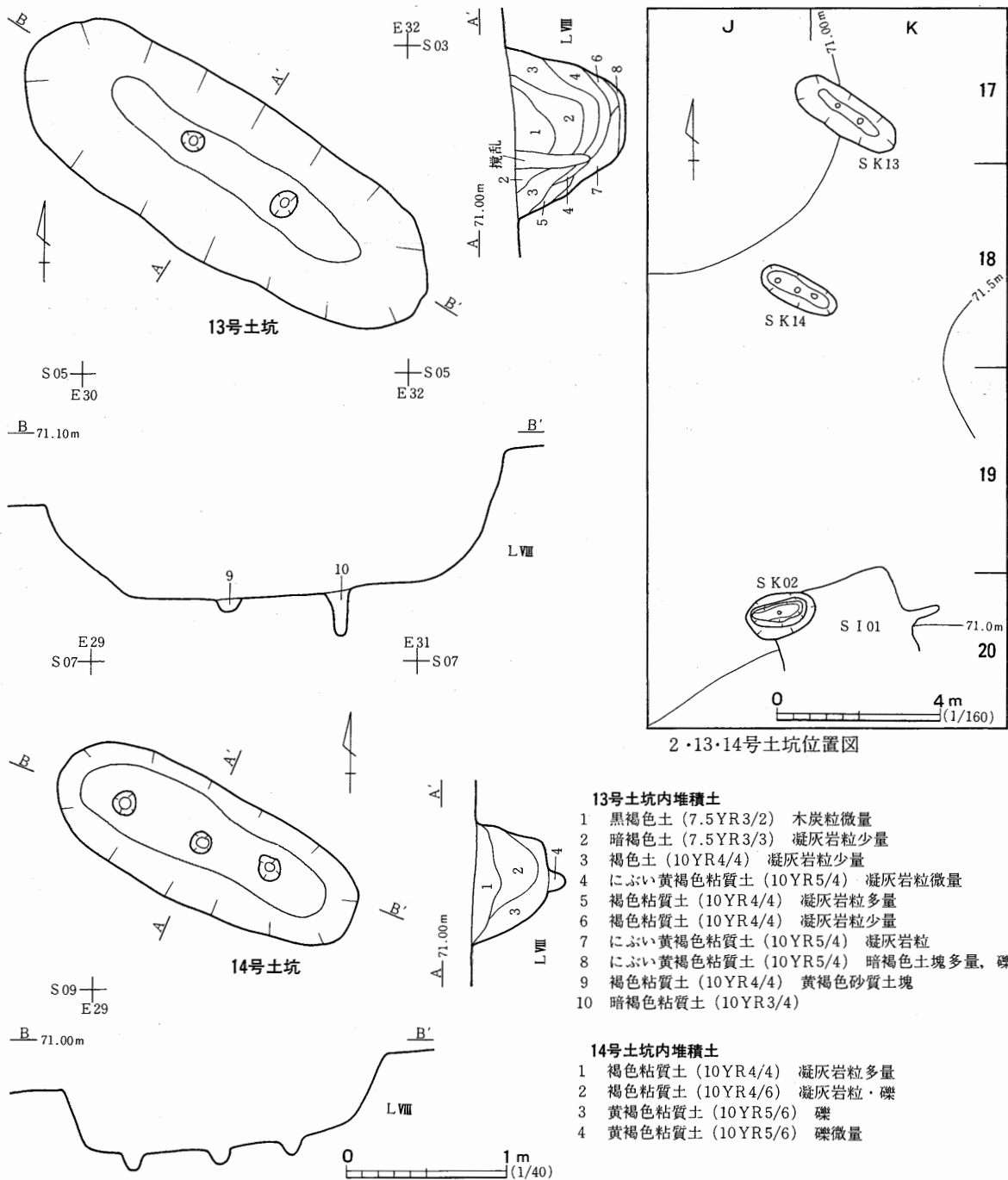


図56 13・14号土坑

8号土坑は、古いほうから9号住居跡、8号土坑、15号土師器窯の順である。10号土坑は35号土師器窯跡よりも新しい。また、5・9号土坑の検出面はL VIII上面である。5・8号土坑から、土師器杯片が出土した。図57-6は回転糸切り後、体部下端から底部外面に手持ちヘラケズリを施した土師器杯である。内面は黒色処理されている。図57-5は土師器杯で、前述の6と同じ外面調整がなされている。

1・9・10号土坑は長径が1mに満たない小型の土坑である。1号土坑からは土師器片13点、9号土坑からは土師器片2点、10号土坑からは土師器片3点が出土したが、いずれも小片のため図示

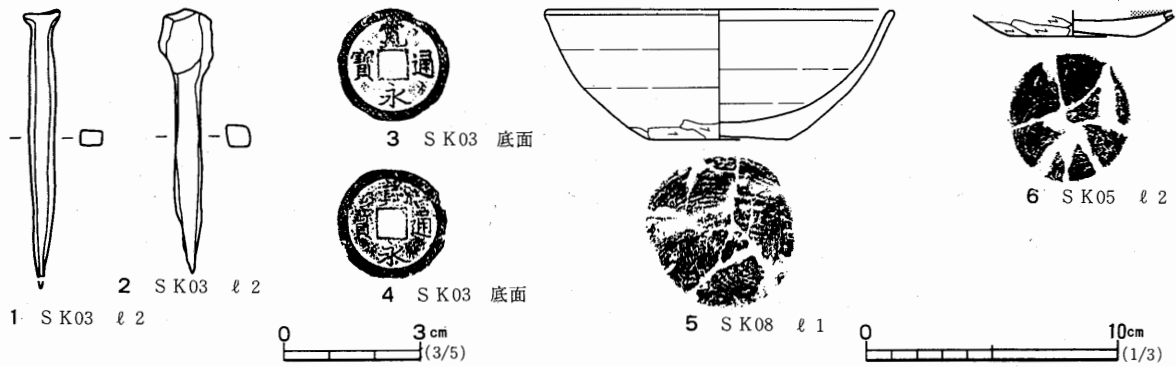


図57 3・5・8号土坑出土遺物

していない。また、10号土坑からは種子が出土している。なお、これらの遺物はその出土状況から、遺構に直接伴うものとは考え難く、土坑の所属年代を特定するには至らなかった。遺構の性格も不明である。

遺物の出土がない土坑は、4・7・12号土坑である。いずれの土坑もLⅧ上面で検出された。土坑の長径は1mを越える。4号土坑は、遺物の出土がなかったため所属時期を判断することはできないが、人為堆積の様相を呈し、堆積土に焼土が多量に入っていたことから、火に関わる廃棄土坑と推定される。7・12号土坑は、所属年代、遺構の性格ともに不明である。(笹山)

第8節 溝 跡

溝跡は2条検出された。

1号溝跡 SD01

遺 構 (図58, 写真49)

本遺構は、土器製作関連遺構が群集する南向きの緩斜面上に営まれた溝跡である。L24~26, M24, N24・25グリッドに位置している。遺構は、須恵器窯跡が主要供給源とみられる遺物包含層を掘り下げて行く過程でLⅥ上面から検出された。当初は法面の西側は遺構がカットされていると考え、いったんはこの段階で記録をとった。しかし調査が法面下におよぶにつれその続きのあることが判明し、最終的に東西12.3m, 南北9.1mの範囲を取り囲む大規模な溝跡となった。遺構内部には14号土師器窯跡が営まれているが、同時存在したものではないと考えている。

本遺構の平面形は隅丸台形を呈している。南辺は消失しているが、これは後世の地形改変の影響によるもので、本来は一続きの周溝状をなしていたと推測している。溝幅は40~50cm前後で、検出面からの深さは15~25cm前後を計測する。溝底面の比高差は、東辺と西辺で約1.2mを計測するが、遺構全体の規模からすればさほど大きな数値に感じられない。溝内部の堆積土は、遺構を覆っていた遺物包含層と同一である。西辺の一部では白色粘土塊の混入が認められた。

遺物は堆積土中から土師器片10点、須恵器片1点が出土した。図示可能なものには恵まれなかつ

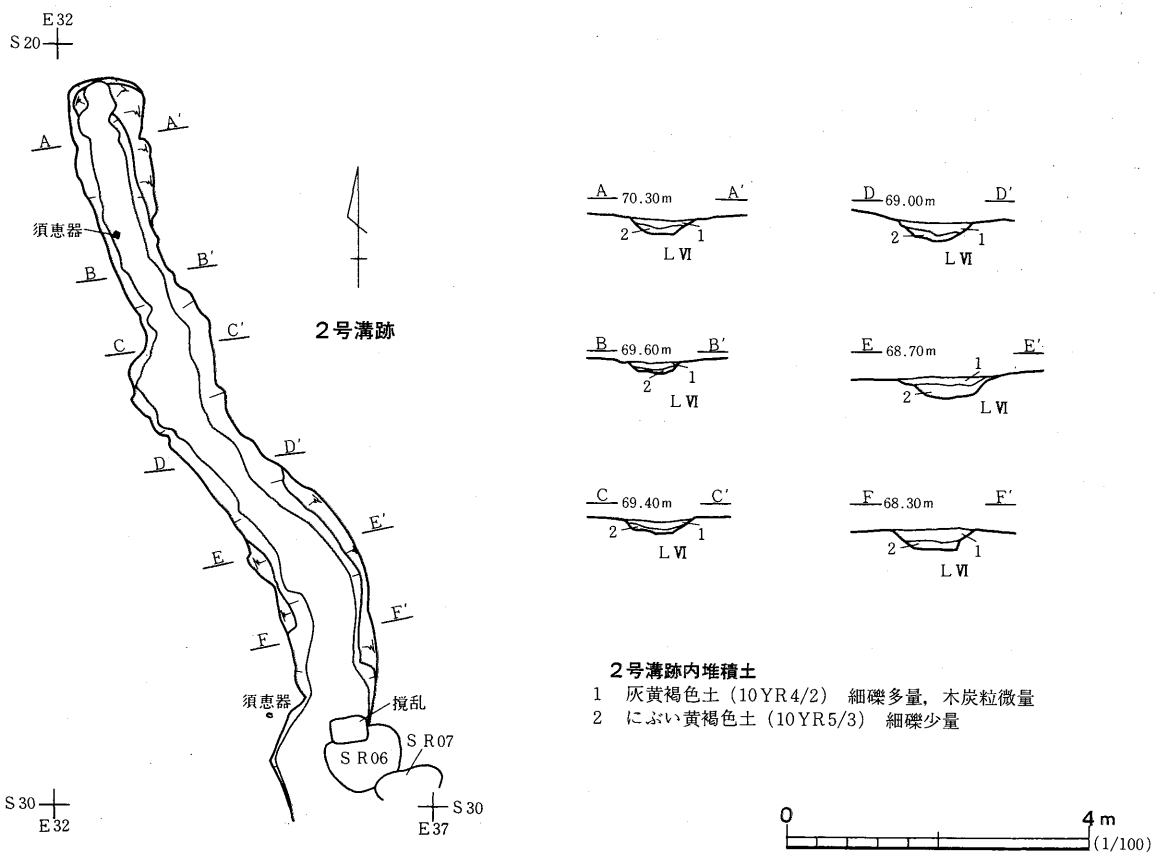
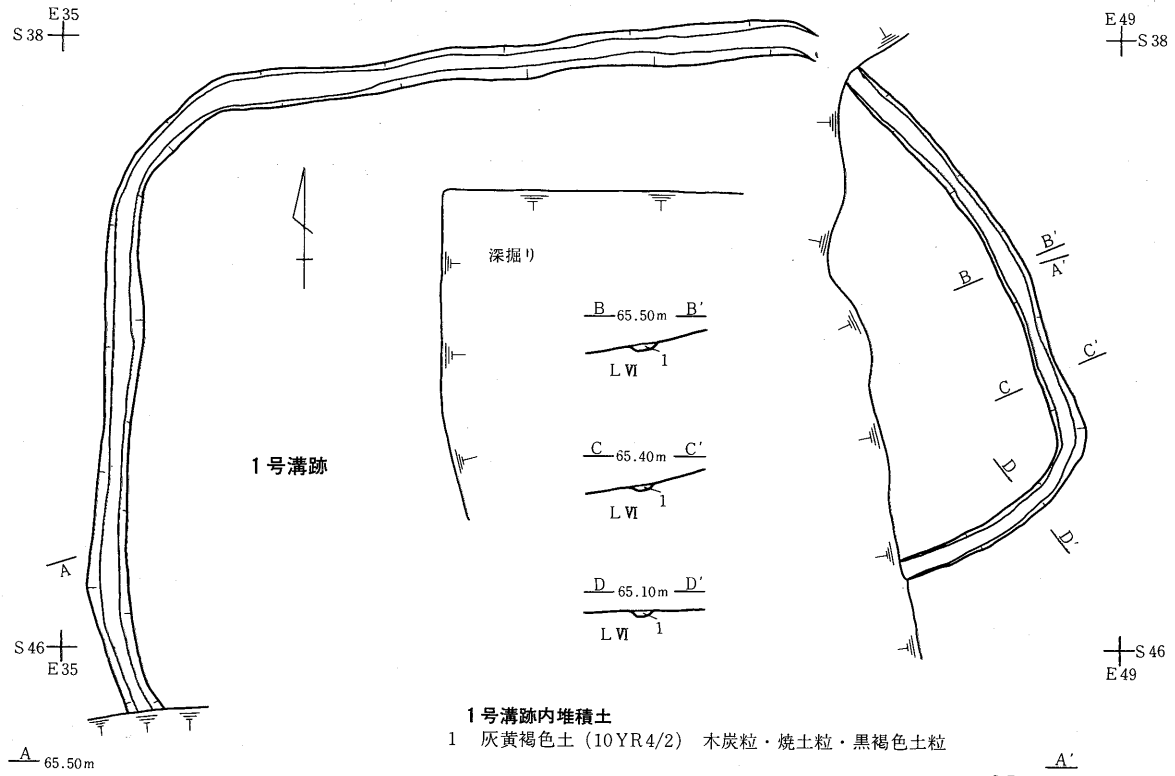


図58 1・2号溝跡

たが、ロクロ調整した土師器片を含みおおよその年代観が与えられる。

ま と め

本溝跡は、平安時代の土器製作関連遺構群のなかに営まれている。その規模と形態的特徴から判断して、内部にこの遺構に囲われた施設が存在したと考えられる。具体的には、1号掘立柱建物跡に先行する倉庫を想定しておきたい。(菅原)

2号溝跡 SD02

遺 構 (図58, 写真50)

本遺構は南向きの急斜面上に営まれた細長い溝跡である。等高線に対して直交して営まれており、K21・22, L22・23グリッドに位置している。検出面はLVIである。南端が6号土師器窯跡と重複しており、これよりも古い。全長10.1m, 幅40～50cm, 検出面からの深さ25～40cmを計測する。

遺物は土師器片82点, 須恵器片3点が出土した。土師器はロクロ調整したものがみられる。

ま と め

本遺構は立地条件とその形状からみて、簡易な通路のような性格が考えられる。(菅原)

第9節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物には、土師器片18,087点, 須恵器片1,571点, 施釉陶器片1点, 縄文土器片21点, 土製品2点, 石器・石製品17点, 鉄器・鉄製品2点, 銭貨3点がある。時代別に整理すると、大きく近・現代, 平安時代, 縄文時代の三つに分かれ、平安時代の遺物が大部分を占める。それらは出土状況の制約から供給遺構との関係を把握することが難しいが、調査区南部の丘陵斜面では一括性の高い遺物の出土が認められた。そこで、これについては、とくに「遺物集中区」の出土遺物とし、別に扱って報告を行う。個別の特徴は、観察一覧(表3～9)に示した。

遺物集中区

概 要 (図59, 写真50)

遺物集中区は、J26・27, K26・27グリッドに位置しており、土器製作に関わる遺構群が検出された南向き緩斜面の一面を占める。南北3.5m, 東西2.5mの浅い皿状の窪みから、8点の図示遺物が得られた。窪みは底面と壁面の状態が均一でないうえ、内部を覆っている土層が周辺に分布するLVと同一であったことから、人為的な掘り込みとは認定しなかった。ただし、30号土師器窯跡と長軸を揃えて並列しており、出土遺物の特徴が近似することから、この窯跡に付随する作業場か儀礼空間として機能した可能性を指摘することができる。この点は、窪みの西側に集石が認められたこと、図60—3と4, 7と8がそれぞれ重なった状態で出土したことから、後者の蓋然性がより高いと思われる。

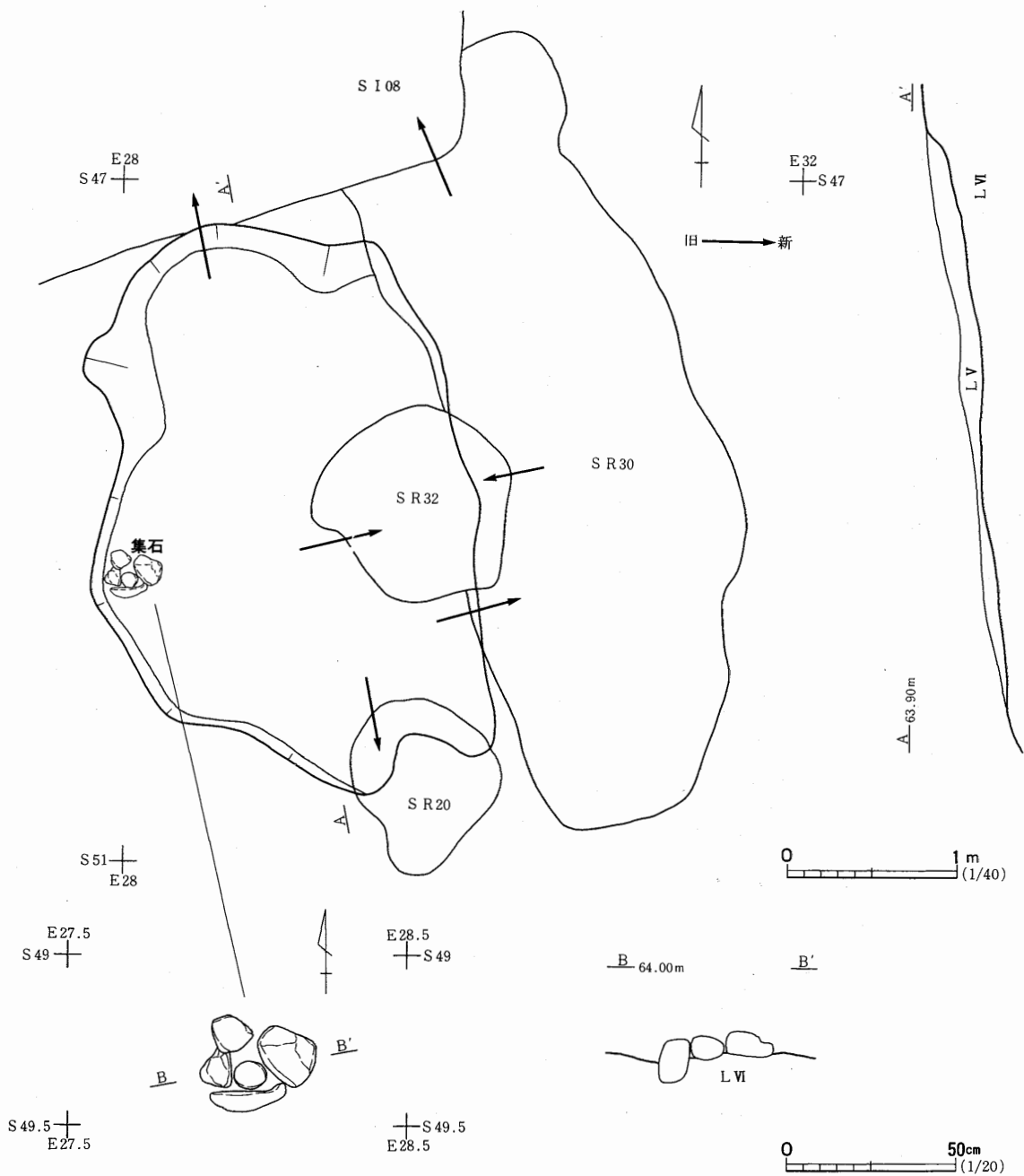


図59 遺物集中区

他の遺構との重複関係は、8号住居跡、20・32号土師器窯跡とのあいだに認められ、3遺構より古く、出土遺物の特徴も整合する。

遺物 (図60, 写真57)

すべて土師器であり、無台杯6点と小型甕2点がある。無台杯は内面をコテミガキ・黒色処理するタイプ(1・2・6)としないタイプ(3・4・5)の2種類が認められる。二つの器種の底部切り離し技法は、回転ヘラ切りで共通している。重ねられた状態で出土した同一器種の2組の土師器は、器形・法量・質感がきわめて良く似ている。同一工人の手によって製作されたと考えて間違いないであろう。

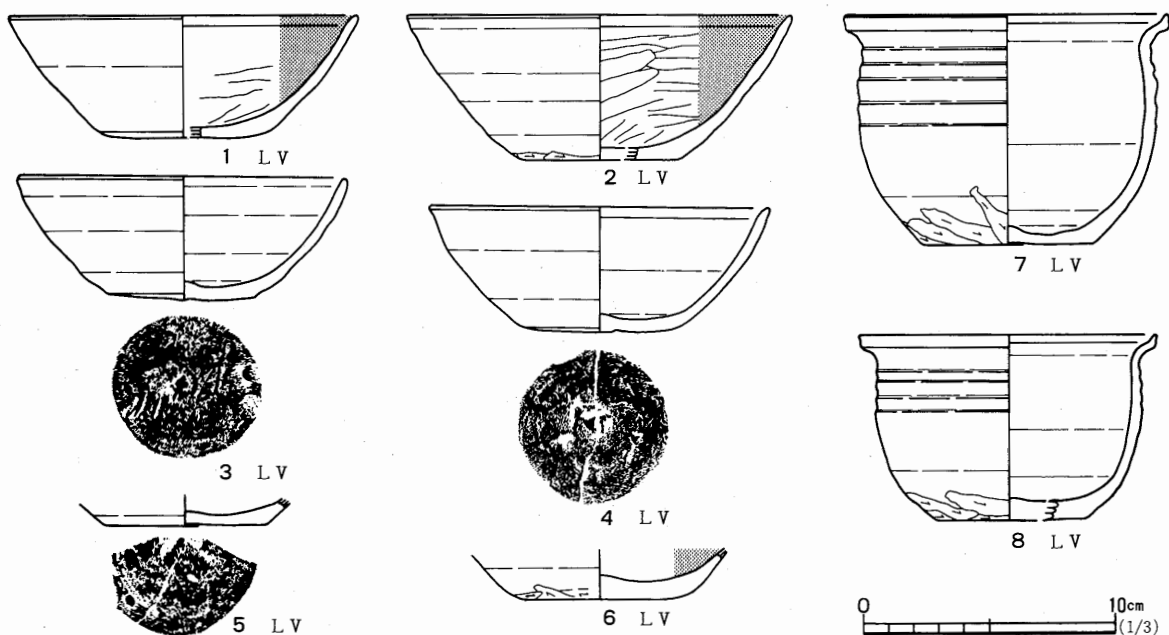


図60 遺物集中区出土遺物

その他

土師器 (図61・62, 写真57・61)

土師器は遺構外出土遺物のうちもっとも量が多い。単純に破片点数で数えると、全体の92%を占めて、他を圧倒する。層位的な出土状況は、LVに集中する傾向が認められ、それより下位からのものはまったくない。この点は、平面分布をみるとよりはっきりし、当該層の分布するG~O-24~29グリッドの範囲内から出土したものが、総数の90%以上の高い数値を示す。それらの特徴は、食膳具の黒斑出現率が高い割合を示すなど、不良品の目立つことがあげられる。遺構の平面分布と重ね合わせると、この一帯は集落の存続期間を通じて土師器焼成が行われた場所であり、その灰原の累積に多量の失敗品が包含されていたことを示している。

特徴的なものを拾い上げて解説する。図61-16の有台杯は、高台部と杯部の下半に縦方向の丁寧なヘラミガキが加えられている。図61-18・19の有台椀は、高台部の形態に施釉陶器の影響が感じられる。そのうち、19の内面には菊花状のオサエがある。図61-20は鉄鉢の模倣器種、28は鉄鍋の模倣器種でその把手と考えられる。図61-23・24・26は、小型長頸瓶である。24の高台部形態は、大戸窯跡群編年のKA107窯式期の特徴を備えている。甑は、底部外面側に鏝の付くもの(図62-4)と、付かないもの(図62-9)の2種類がある。胴部中位には、一対の把手が取り付けられている(図62-3・6・7・10)。図62-13・14は、3足の獣脚が付く器種の一部とみられる。13が盤、14が香炉と推定している。

須恵器 (図63・64, 写真58~60)

須恵器の出土量は土師器に次いで多い。破片点数で全体の10%を占める。層位的な出土傾向と平面分布は土師器に近いが、須恵器窯跡の営まれた地点の斜面下位にあたるN24~27, O24~27グ

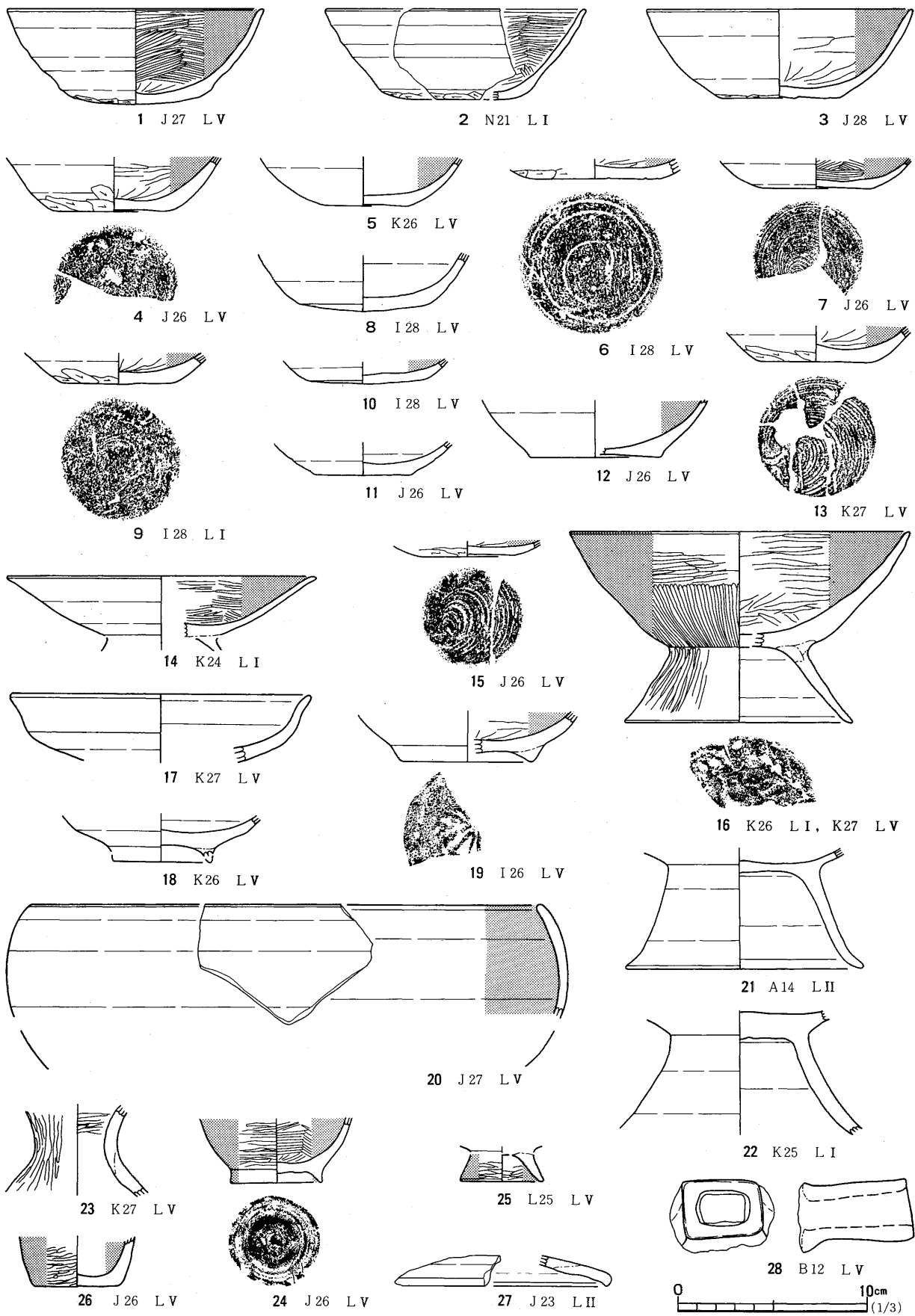


図61 遺構外出土遺物(1)

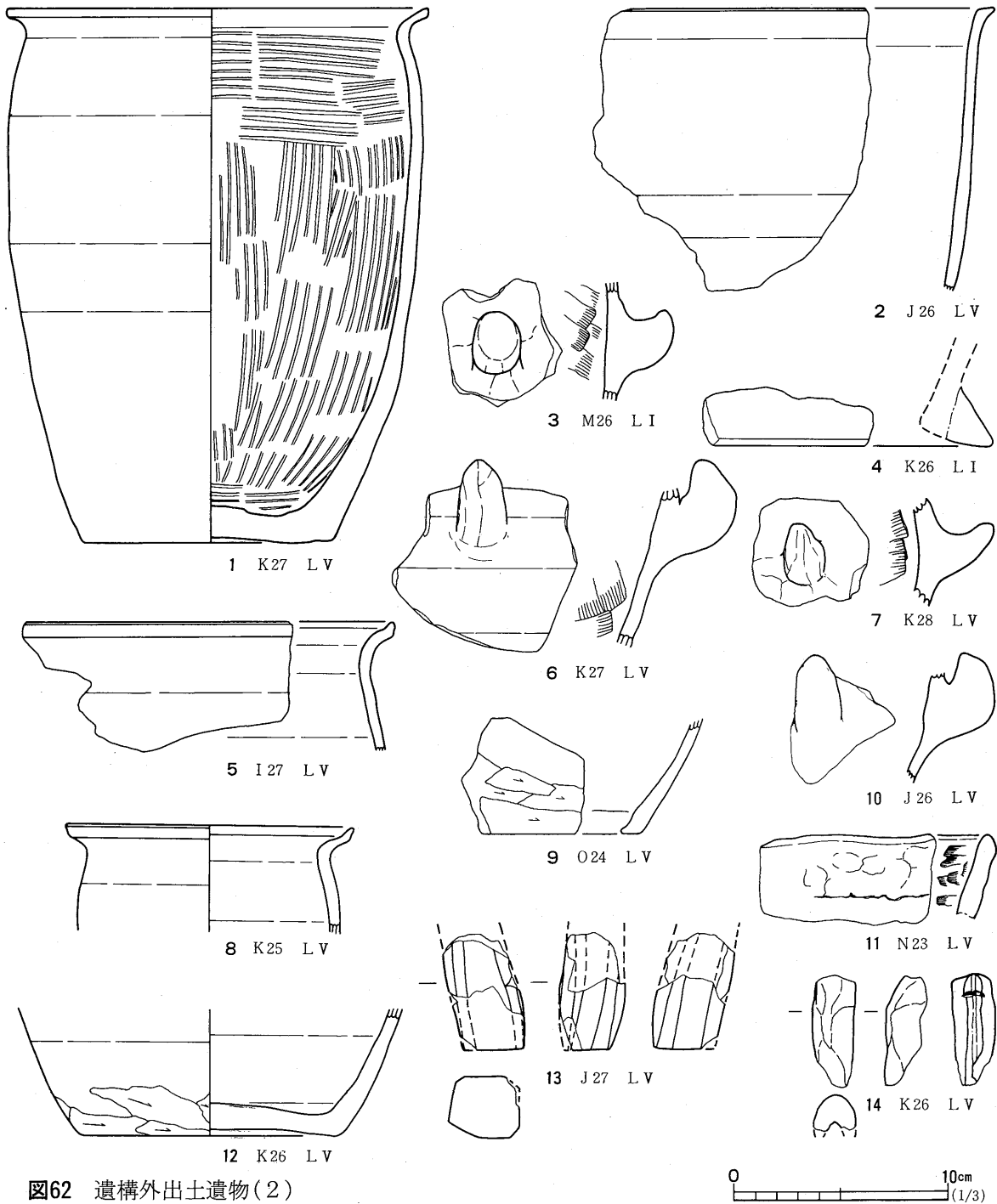


図62 遺構外出土遺物(2)

リッドにはとくに集中する傾向が認められた。遺構の事実報告の中で指摘したように、須恵器窯跡は土取りで窯体が削り取られており、生産器種の内容が遺構自体からはほとんど知ることができない。したがって、こうした出土状況は、個別窯跡との関係を特定できないまでも本遺跡における須恵器生産の実態を推し量るうえで重要である。

特徴的なものを解説する。杯は底部切り離しがすべて回転ヘラ切りで、土師器杯の古いグループと特徴が一致する。図63—8の鉢は、内面にヘラミガキが認められ、土師器との技術的関連が窺える。図63—11・12は水瓶である。胎土の特徴から同一個体ではないと判断している。このことから、

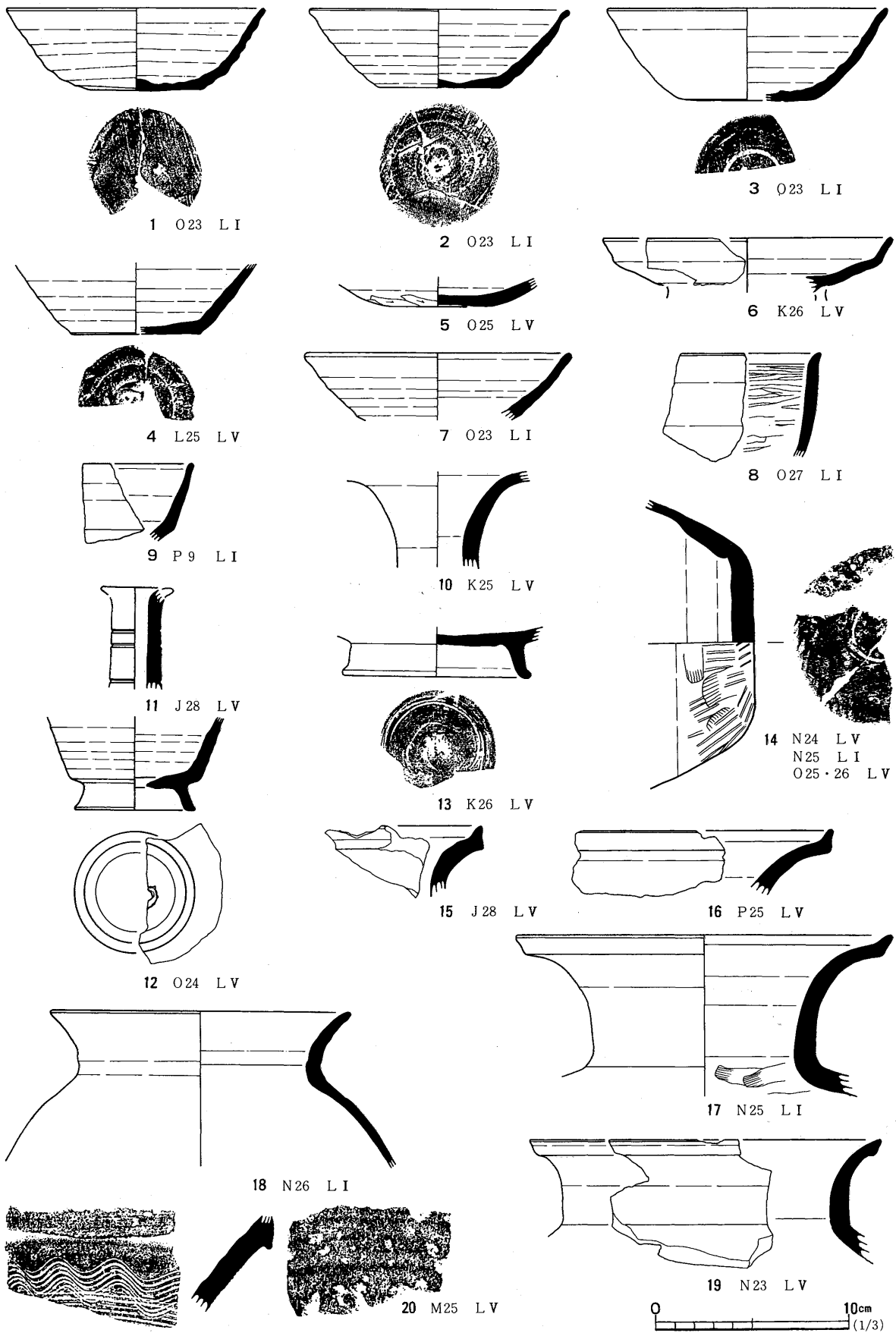


図63 遺構外出土遺物(3)

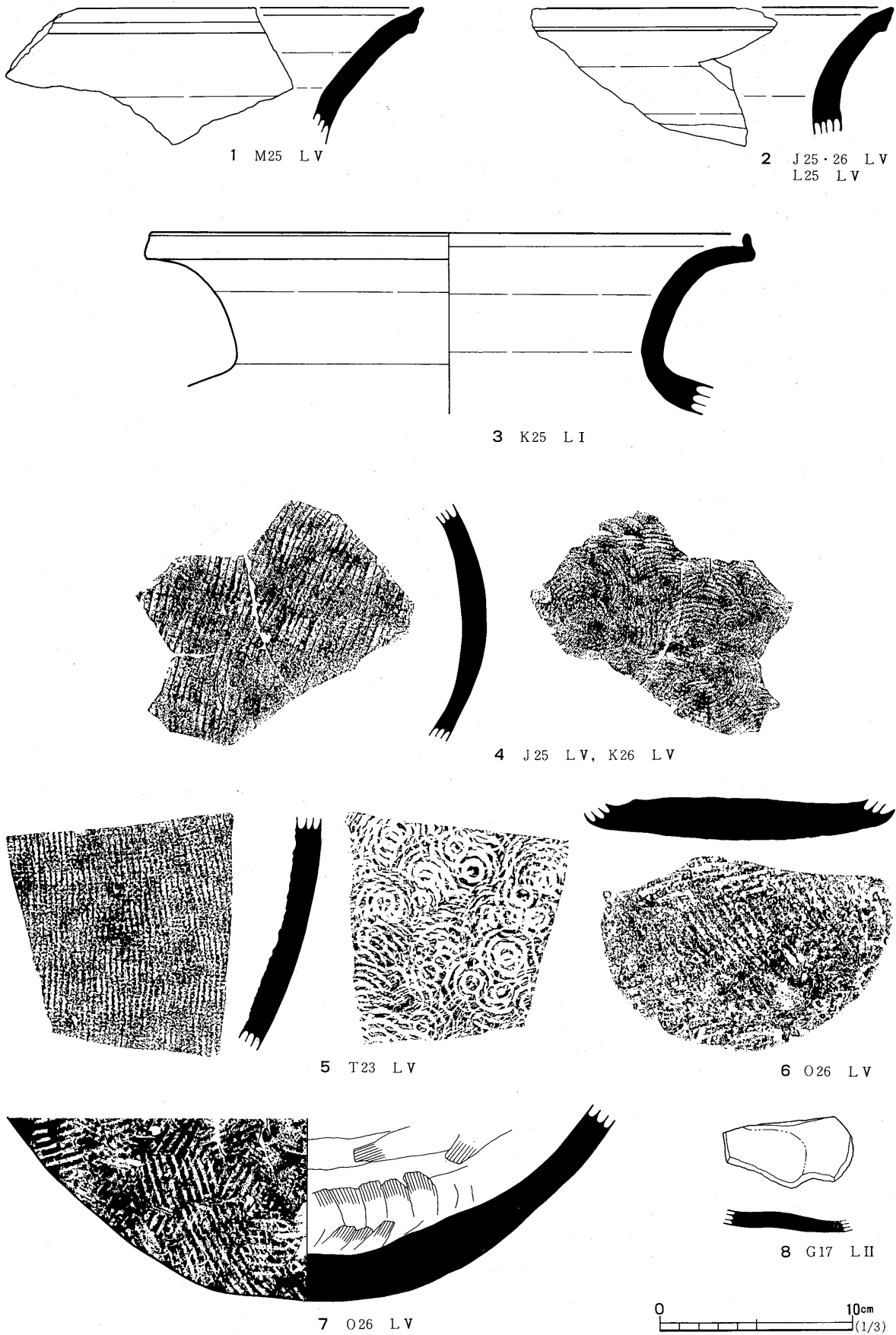


図64 遺構外出土遺物(4)

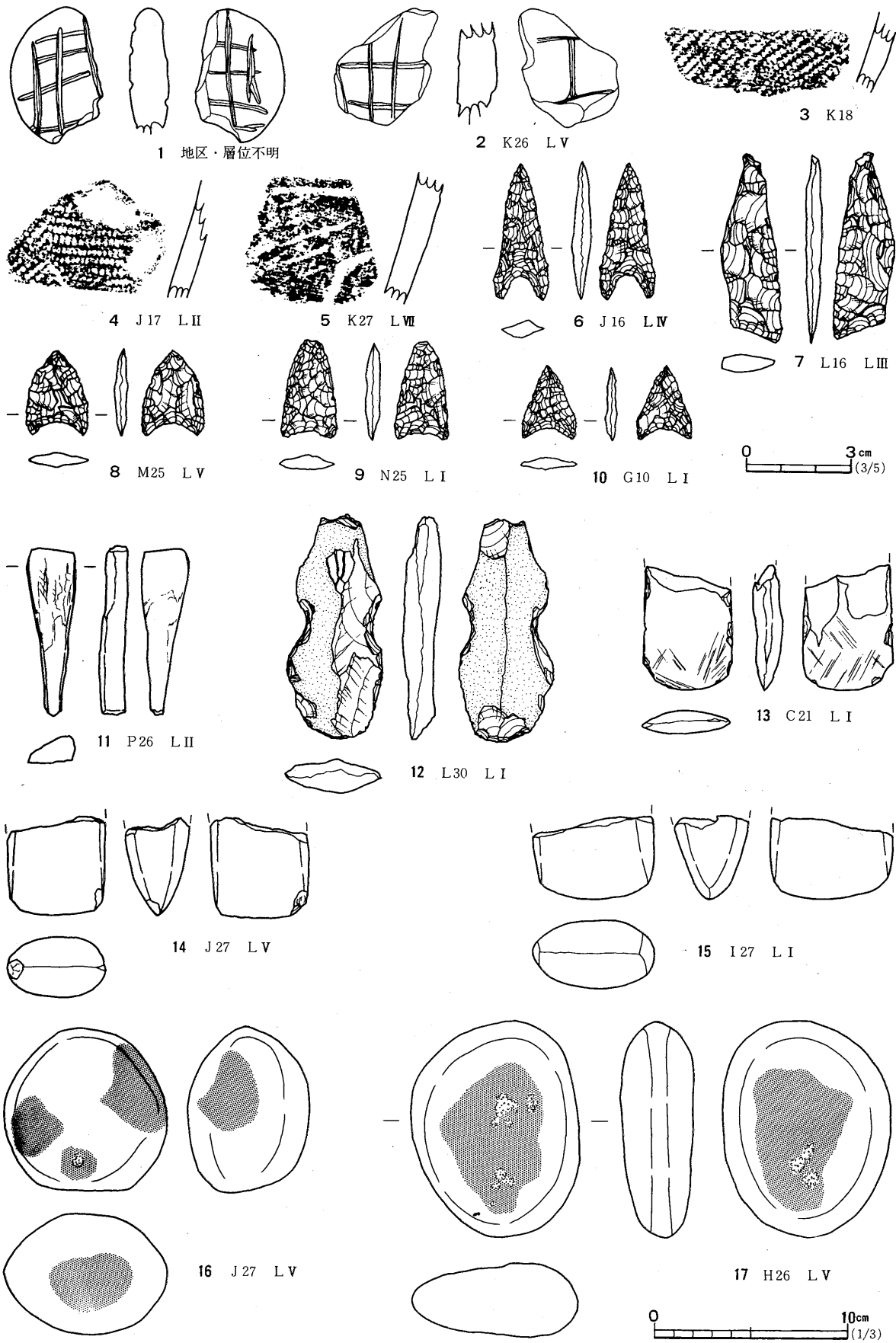


図65 遺構外出土遺物(5)

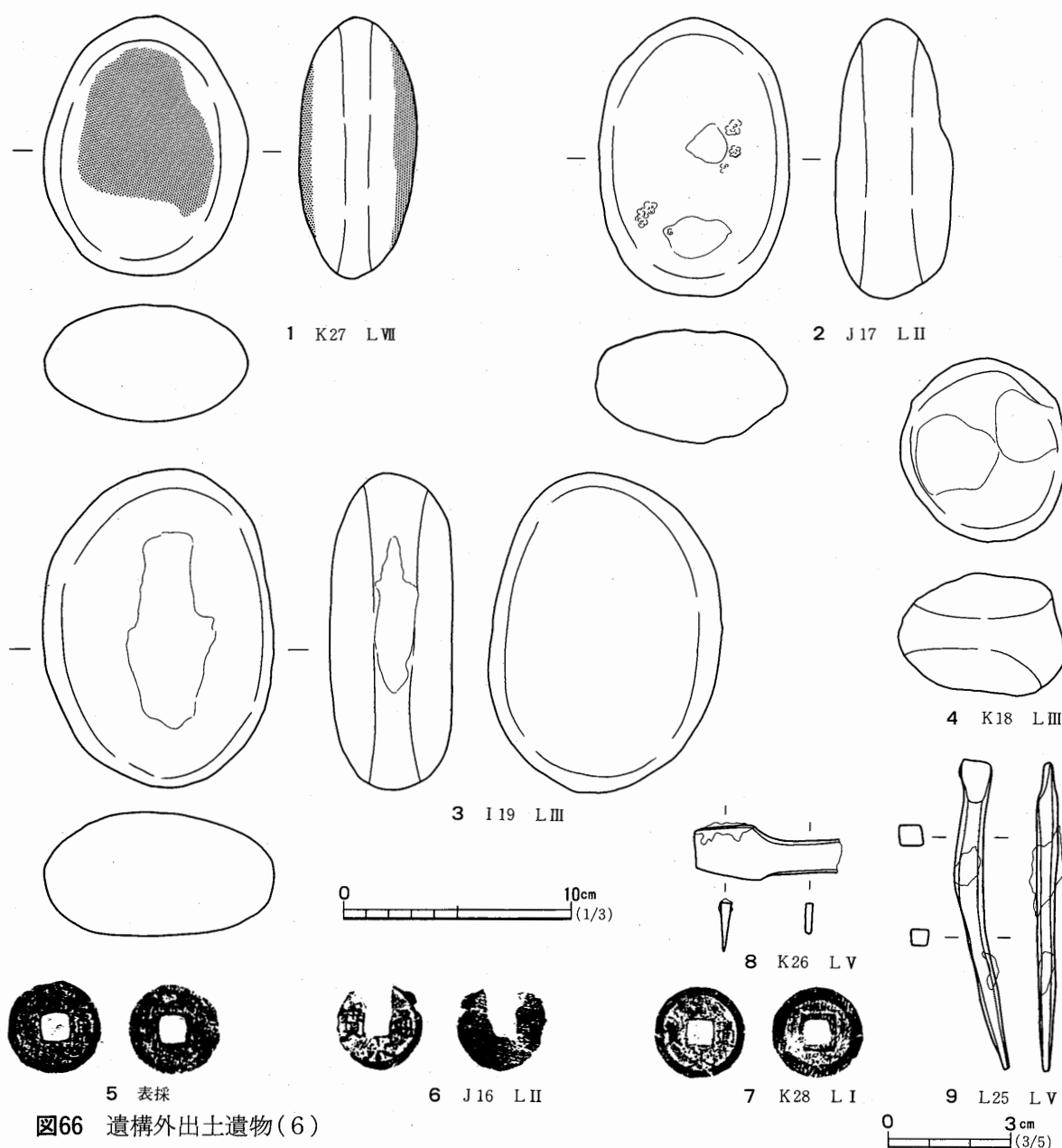


図66 遺構外出土遺物(6)

この器種が本遺跡では複数個体生産されていたことが確認できる。そのうち、12の底部には焼成後意図的に穿孔したとみられる痕跡がのこる。図63—14は、4号須恵器窯跡にもみられた横瓶の胴部で、10は頸部になる可能性がある。図64—8の甕胴部片は、表面に平滑な使用痕が観察される。

施釉陶器 (写真58)

K11グリッドのLIIから1点出土した。国立歴史民俗学博物館の高橋照彦助手鑑定の結果、多彩陶釉器であることが判明した。4.2 cm × 3.0 cm の胴部片で焼成は軟質である。外面のみに緑色と赤褐色の釉が掛っている。釉の掛り具合からみて、器種は口径の小さい袋物と推定される。

土製品 (図65—1・2, 写真61)

親指の爪先ほどの土製円盤に、格子状の線刻が施されている。2点出土した。どちらも土師質である。1は、17号土師器窯跡の堆積土中から出土したと記憶している。しかし、整理作業中に遺物

表3 土器・土製品観察一覧(1)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場所	層位	種別	器種	口径	底径	器高	分類	備考
6	1	S I 01	カマド底面	土師器	無台杯	14.2	6.8	4.3	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
6	2	S I 01	床面	土師器	無台杯	13.8	6.1	4.2	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
6	3	S I 01	カマド底面	土師器	無台杯	16.0	6.2	6.3	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
6	4	S I 01	カマド底面	土師器	甗	(18.1)	—	[19.0]	III	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
6	5	S I 01	カマド底面	土師器	甗	(20.2)	—	[8.4]	I	外面ヘラナデ・内面ロクロナデ
6	6	S I 01	カマド底面	土師器	甗	—	—	[24.4]	I	外面ヘラケズリ・内面ロクロナデ
6	7	S I 01	① 1	土師器	甗	—	—	[5.0]	I	外面不明・内面ロクロナデ
6	8	S I 01	カマド底面	土師器	甗	—	8.8	[5.4]		外面手持ちヘラケズリ・内面ロクロナデ
6	9	S I 01	① 1	須恵器	甗	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
6	10	S I 01	① 1	須恵器	甗	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
10	1	S I 03A	カマド左脇床	土師器	無台杯	(13.0)	(4.5)	(4.2)	A II b	回転糸切り・無調整・コテミガキ・内黒
10	2	S I 03A	カマド右脇床	土師器	無台杯	(13.6)	4.9	(4.8)	A a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・両黒
10	3	S I 03A	床面	土師器	無台杯	14.0	5.4	4.8	B II a	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテ当て
10	4	S I 03A	床面	土師器	無台杯	(12.0)	(5.0)	3.7	B II b	回転糸切り・無調整・内面調整不明
10	5	S I 03A	床面	土師器	無台杯	—	5.9	[3.0]	B II b	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテ当て
10	6	S I 03A	床面	土師器	有台杯	(18.6)	—	[8.0]	B	切り離し不明・コテ当て・歪み大
10	7	S I 03A	床面・①1	須恵器	長頸瓶	(10.4)	(6.2)	(18.9)		切り離し不明・外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ・ 両面ロクロナデ
10	8	S I 03A	床面	土師器	有台皿	—	—	[2.5]	B	高台部欠損・切り離し不明・コテ当て
10	9	S I 03A	① 1	須恵器	甗	—	—	[10.8]		外面平行タタキ目・内面アテメ・ヘラナデ・ 内外面ロクロナデ
10	10	S I 03A	床面	土師器	甗	—	—	[5.6]		外面ヘラケズリ・両ヘラナデ
10	12	S I 03A	床面	須恵器	甗	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ナデ
12	1	S I 03B	カマド煙孔底	土師器	無台杯	—	—	4.5	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
12	2	S I 03B	床面	土師器	無台杯	(13.4)	(5.8)	4.5	B I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテ当て
12	3	S I 03B	床面	土師器	無台杯	(13.7)	5.8	(5.1)	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
12	4	S I 03B	床面	土師器	無台杯	(13.0)	6.7	4.0	B I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテ当て
12	5	S I 03B	床面	土師器	有台皿	13.6	6.6	4.1	A	切り離し不明・ヘラミガキ・内黒
12	6	S I 03B	床面	土師器	香炉蓋	13.5	—	6.5	B	外面ヘラナデ・内面コテナデ・ヘラナデ
12	7	S I 03B	床面	土師器	香炉蓋?	—	—	[4.4]	A	外面ヘラミガキ・内面ヘラミガキ・両黒
12	8	S I 03B	P 1 壁面	土師器	有台皿	13.4	6.8	4.2	A	切り離し不明・ヘラミガキ・内黒
12	9	S I 03B	① 1	土師器	有台鉢	—	—	[9.6]		外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
12	10	S I 03B	床面	土師器	長頸瓶	—	5.9	[8.0]	A	切り離し不明・内外面ヘラミガキ・両黒
12	11	S I 03B	床面	土師器	有台鉢	—	—	[5.5]		内面ナデ・外面ナデ・穿孔
12	12	S I 03B	床面	土師器	甗	(18.7)	—	[12.0]	I	外面ロクロナデ・ヘラケズリ・内面調整不明
12	13	S I 03B	床面	土師器	甗	(25.0)	—	[10.0]	II	外面ロクロナデ・手持ちヘラケズリ・内面ヘラナデ
12	14	S I 03B	床面	土師器	甗	—	(10.8)	[9.2]	I	外面ヘラケズリ・12-12と同一個体
12	15	S I 03B	① 1	土師器	甗	—	—	[6.1]	I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
13	1	S I 03B	床面・①1	須恵器	甗	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
13	2	S I 03B	床・P2①1	須恵器	甗	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
13	3	S I 03B	床・P2①1	須恵器	甗	(34.4)	—	[11.3]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・ヘラナデ
15	1	S I 04B	カマド底面	土師器	無台杯	(13.0)	(5.6)	4.1	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
15	2	S I 04B	カマド底面	土師器	無台杯	(14.0)	—	[3.3]	B	底部欠損・外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
15	3	S I 04B	掘形底面	須恵器	無台杯	(14.7)	(7.4)	4.1		回転ヘラ切り・無調整
17	1	S I 05A	床面	土師器	有台椀	(12.0)	5.1	4.2	A	切り離し不明・ヘラミガキ・内黒
17	2	S I 05A	カマド底面	土師器	甗	(16.6)	—	[8.5]	II	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・ヘラナデ
18	1	S I 05B	カマド底面	土師器	甗	—	10.1	[5.1]		底部ヘラナデ・外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
18	2	S I 05B	床面	土師器	無台杯	(15.3)	5.9	4.7	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
19	1	S I 06	南西壁際①7	土師器	無台杯	—	4.4	[2.0]	A II a	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
19	2	S I 06	P 1 ① 1	土師器	無台杯	(14.8)	5.0	4.4	A	切り離し不明・再調整不明・ヘラミガキ・内黒
19	3	S I 06	東壁① 7	土師器	無台杯	(12.6)	—	[4.0]	A	底部欠損・ヘラミガキ・内黒
19	4	S I 06	床面	土師器	無台杯	(12.3)	5.4	4.7	B II b	回転糸切り・無調整・コテ当て
19	5	S I 06	東壁① 7	土師器	無台杯	(14.4)	6.4	5.7	A II a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
19	6	S I 06	床面	土師器	甗	—	7.2	[12.3]	BI	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・内面ロクロナデ
19	7	S I 06	① 4	土師器	無台杯	—	5.2	[1.3]	B II b	回転糸切り・無調整・コテ当て
19	8	S I 06	床面	土師器	無台杯	—	6.0	[1.2]	B II b	回転糸切り・無調整・コテ当て
19	9	S I 06	① 4	土師器	無台杯	—	4.4	[0.7]	B II b	回転糸切り・無調整・コテ当て
19	10	S I 06	東壁中央①7	土師器	有台杯	—	—	[2.2]	B	切り離し不明・再調整不明・コテ当て
19	11	S I 06	床面	土師器	香炉蓋?	—	—	[2.5]	A	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・内黒

表4 土器・土製品観察一覧(2)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場 所	層 位	種 別	器 種	口 径	底 径	器 高	分類	備 考
20	1	S I 06	カマド底面	土師器	甕	(25.0)	—	[13.3]	I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
20	2	S I 06	東壁 07	土師器	甕	(17.0)	—	[10.6]	I	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
20	3	S I 06	カマド・床面	土師器	甕	(24.0)	—	[11.0]	I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
20	4	S I 06	07	土師器	甕	—	—	[13.2]	I	外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ・19-6に類似
20	5	S I 06	東壁 07	土師器	甕	(23.0)	—	[19.3]	I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
20	6	S I 06	カマド底面	土師器	甕	—	9.8	[7.0]		外面ヘラナデ・内面ヘラナデ
20	7	S I 06	07	土師器	甕	—	—	[16.2]	III	外面ロクロナデ・内面ヘラナデ
24	1	S I 07	カマド 08	土師器	杯	(17.3)	(6.7)	7.3	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	2	S I 07	P 7 0 3	土師器	杯	—	—	[8.2]	Aa	手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	3	S I 07	カマド 08	土師器	杯	(15.6)	(4.6)	5.6	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	4	S I 07	床下 P13 01	土師器	杯	—	—	4.1	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	5	S I 07	P 5 0 1	土師器	杯	(14.3)	(5.8)	5.3	A	切り離し不明・再調整不明・コテミガキ・内黒
24	6	S I 07	カマド 08	土師器	杯	(15.3)	—	[3.5]	A	底部欠損・コテミガキ・内黒
24	7	S I 07	01	土師器	杯	—	—	[3.9]	A	底部欠損・外面ロクロナデ・内面ヘラミガキ・内黒
24	8	S I 07	01	土師器	杯	—	—	[3.9]	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	9	S I 07	P 7 0 1	土師器	杯	—	(5.1)	[1.7]	AI	切り離し不明・再調整不明・コテミガキ?・内黒
24	10	S I 07	01	土師器	杯	—	6.1	[1.9]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	11	S I 07	01	土師器	杯	—	(5.4)	[2.4]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
24	12	S I 07	カマド 08	土師器	甕	—	—	[6.0]	A	切り離し不明・再調整不明・内面コテミガキ・内黒
24	13	S I 07	P 5 0 1	土師器	有台杯	—	10.8	[3.2]	B	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
24	14	S I 07	01	土師器	甕	—	—	[4.7]	BII	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
24	15	S I 07	01	土師器	不明	—	(4.5)	[1.6]	A	切り離し不明・無調整・コテミガキ・内黒
24	16	S I 07	01	土製品	窯道具?	—	—	[1.3]		外面コピオサエ・内面ナデ・土師質
26	1	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	15.0	5.8	5.3	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	2	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	12.6	5.2	4.3	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て・歪み大
26	3	S I 08	床 面	土師器	無台杯	(12.3)	6.0	4.6	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	4	S I 08	P 5 0 3・2	土師器	無台杯	—	(5.8)	[1.0]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	5	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.6	[1.9]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	6	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	(13.0)	(5.6)	4.7	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	7	S I 08	P 5 0 2・1	土師器	無台杯	—	5.3	[4.2]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	8	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.8	[3.9]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	9	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.6	[1.3]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	10	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.2	[2.1]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	11	S I 08	P 1 底面	土師器	碗	—	—	[2.4]	A	底部欠損・ヘラミガキ・内黒・有台?
26	12	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.6	[2.8]	AIIb	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	13	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	6.2	[2.3]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	14	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.8	[1.9]	AIIb	回転系切り・無調整・コテミガキ・内黒
26	15	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.0	[1.7]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	16	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.9	[2.4]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	17	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.8	[2.5]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	18	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.0	[1.8]	AII	回転系切り・再調整不明・コテミガキ・内黒
26	19	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.0	[1.4]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	20	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.4	[1.9]	BIIb	回転系切り・コテ当て
26	21	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.0	[2.2]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	22	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.6	[2.0]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	23	S I 08	P 5 0 3	土師器	無台杯	—	5.8	[1.5]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	24	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	5.1	[1.9]	AII	回転系切り・再調整不明・コテ当て・内黒
26	25	S I 08	床 面	土師器	無台杯	—	5.8	[1.8]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	26	S I 08	カマド底面	土師器	無台杯	—	—	[2.4]	AIIa	回転系切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
26	27	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	6.2	[2.0]	BIIb	回転系切り・無調整・コテ当て
26	28	S I 08	床 面	土師器	有台杯	—	—	[3.5]	B	切り離し不明・コテ当て
26	29	S I 08	カマド底面	土師器	無台杯	—	4.8	[1.1]	Aa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ コテミガキ・内黒
26	30	S I 08	カマド底面	土師器	無台杯	—	5.0	[0.9]	Aa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ コテミガキ・内黒
26	31	S I 08	P 1 底面	土師器	無台杯	—	4.5	[1.1]	A	切り離し不明・再調整不明・ヘラミガキ・内黒
27	1	S I 08	P 1 底面	須恵器	甕	—	—	[20.5]		外面平行タキ目・ナデ・内面アテム・ナデ
27	2	S I 08	P 1 底面	土師器	筒形土器	—	—	[4.0]		外面コピオサエ・ナデ・内面コピオサエ・ナデ
27	3	S I 08	P 5 0 1	土師器	甕	—	—	[6.5]	III	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・ヘラナデ

表5 土器・土製品観察一覧(3)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場所	層位	種別	器種	口径	底径	器高	分類	備考
27	4	S I 08	P 5 0 2	土師器	香炉?	—	—	[3.1]		獸脚部
27	5	S I 08	P 5 0 3	土製品	土鈴	—	—	—		外面ユビオサエ・内面ユビオサエ・土師質
27	6	S I 08	P 1 底面	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ナデ
29	1	S I 09	P 3 0 1	土師器	甗	—	—	—		外面ユビオサエ・把手
29	2	S I 09	P 3 0 1	土師器	甕	—	10.4	[7.5]		外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
29	3	S I 09	カマド東脇床	土師器	筒形土器	—	—	[3.3]		内外面不明
30	1	S I 09	P 2 0 1	土師器	無台杯	(14.5)	6.0	5.1	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
30	2	S I 09	0 1	土師器	無台杯	—	5.8	[2.3]	A II a	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
30	3	S I 09	0 2・1	土師器	無台杯	(14.8)	6.4	4.6	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
30	4	S I 09	カマド煙道02	土師器	無台杯	—	—	[3.7]	A a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
30	5	S I 09	0 2	土師器	無台杯	—	6.2	[1.7]	I	回転ヘラ切り・無調整・内面不明
30	6	S I 09	0 1	土師器	無台杯	—	5.6	[1.2]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
30	7	S I 09	カマド周床面	土師器	有台杯	—	10.0	[2.3]	B	底部欠損・外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
30	8	S I 09	0 2 上面	土師器	無台杯	(22.0)	—	[8.9]	A	底部欠損・ヘラミガキ・内黒
30	9	S I 09	0 2	土師器	甕	(13.8)	—	[13.0]	A III	外面ロクロナデ・内面ヘラミガキ・内黒
30	10	S I 09	0 1	土師器	甕	(13.2)	—	[10.0]	B I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
30	11	S I 09	0 2・1	土師器	甕	(27.0)	—	[13.0]	A I	外面ロクロナデ・内面ヘラミガキ・内黒
30	12	S I 09	カマド周床面	土師器	甕	—	10.4	[7.2]		外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ
30	13	S I 09	カマド周床面	土師器	甕	—	(12.0)	[12.5]		外面ヘラケズリ・内面不明
30	14	S I 09	カマド周床面	土師器	甕	21.0	—	[16.3]	II	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
32	1	S B 01	P 14 検出面	土師器	無台碗	—	5.5	[3.0]	A	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
32	2	S B 01	P 16 0 1	土師器	無台碗	—	—	[3.2]	A II a	底部欠損・コテミガキ・内黒
34	1	S R 01	0 1	土師器	無台杯	—	—	[4.0]	A	底部欠損・コテミガキ・内黒
34	2	S R 02	床 面	土師器	無台杯	(16.6)	—	[3.8]	A	底部欠損・ヘラミガキ・内黒
34	3	S R 02	0 1	土師器	無台杯	—	—	4.4	B I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテ当て
34	4	S R 02	床 面	土師器	無台杯	(14.3)	6.8	4.5	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
34	5	S R 02	床 面	土師器	無台杯	—	—	[3.0]	B	底部欠損・コテ当て
34	6	S R 02	焼土面	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ナデ
34	7	S R 02	0 3	土師器	無台杯	—	(6.0)	[2.0]	I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・還元
34	8	S R 03	0 1	土師器	無台杯	—	—	—	B II	回転糸切り・再調整不明
40	1	S R 06	底 面	土師器	無台杯	—	—	[4.0]	A a	底部欠損・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	2	S R 12	床面・0 1	土師器	無台杯	—	(7.0)	[4.0]	I	回転ヘラ切り・内外面不明
40	3	S R 13	0 3	土師器	甕	—	—	[11.2]	III	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
40	4	S R 14	0 1	土師器	無台杯	—	(6.8)	[1.3]	B a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・内面不明
40	5	S R 14	床 面	土師器	無台杯	—	—	[1.6]	A II a	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	6	S R 15	0 1	土師器	甕	—	—	[2.7]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
40	7	S R 16	0 1	土師器	無台杯	—	(4.6)	[1.5]	A	切り離し不明・内外面不明・内黒
40	8	S R 16	0 1	土師器	無台杯	—	(4.8)	[1.7]	II a	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・内面不明
40	9	S R 17	0 8	土師器	無台杯	—	(6.0)	[2.4]	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
40	10	S R 17	0 7	土師器	無台杯	—	(6.2)	[1.4]	A I b	回転ヘラ切り・無調整・コテミガキ?・内黒
40	11	S R 17	0 1	土師器	小壺	3.3	3.5	5.4	B	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテナデ
40	12	S R 17	0 7	土師器	無台鉢	—	—	[17.1]		外面ヘラミガキ・内面ヘラミガキ
40	13	S R 17	0 1	土師器	無台杯	15.2	5.8	5.3	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	14	S R 20	床 面	土師器	甕	—	—	[6.3]	I	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
40	15	S R 20	床 面	土師器	有台鉢	—	—	[5.4]		外面ロクロナデ・内面不明・有台?
40	16	S R 21	床 面	土師器	有台碗	—	(8.4)	[2.7]	A	切り離し不明・ヘラミガキ・内黒
40	17	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	13.2	(5.2)	[4.8]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
40	18	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	—	(6.0)	[1.4]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	19	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	—	5.0	[1.2]	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	20	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	—	6.4	[3.6]	I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・内面不明
40	21	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	—	6.4	[3.0]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	22	S R 23	0 2 上面	土師器	無台杯	—	6.1	[1.3]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	23	S R 23	0 2	土師器	無台杯	—	(5.4)	[1.7]	A I a	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
40	24	S R 23	0 2	土師器	甕	—	—	[5.1]	A	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
44	1	S R 30	床 面	土師器	無台杯	14.2	7.1	4.1	A I b	回転ヘラ切り・無調整・内面不明・内黒
44	2	S R 30	0 1	土師器	無台杯	(14.3)	(6.0)	4.4	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
44	3	S R 30	床 面	土師器	無台杯	—	(6.6)	[4.2]	A I a	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒

表6 土器・土製品観察一覧(4)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場所	層位	種別	器種	口径	底径	器高	分類	備考	
44	4	SR30	0	2	土師器	無台杯	(16.8)	(8.4)	5.0	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒?
44	5	SR30	床	面	土師器	無台杯	13.4	6.6	4.0	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	6	SR30	0	2	土師器	無台杯	—	—	[4.3]	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
44	7	SR30	床	面	土師器	無台杯	(13.0)	7.4	3.7	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	8	SR30	床	面	土師器	無台杯	(13.1)	6.4	3.7	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	9	SR30	0	2	土師器	無台杯	(14.0)	(6.1)	5.1	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	10	SR30	床	面	土師器	無台杯	(12.5)	5.5	4.0	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	11	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	—	3.5	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	12	SR30	床面・0	1	土師器	無台杯	—	—	[4.5]	B	底部欠損
44	13	SR30	0	2	土師器	無台杯	(14.0)	(6.0)	4.8	BIb	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテ当て
44	14	SR30	0	3	土師器	無台杯	—	(6.8)	[3.5]		回転ヘラ切り・無調整・コテ当て・内黒?
44	15	SR30	0	3・2	土師器	無台杯	(12.2)	(7.0)	4.4	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	16	SR30	0	3	土師器	無台杯	(14.0)	—	[3.6]	B	底部欠損・コテ当て
44	17	SR30	0	3	土師器	有台盤	(13.1)	—	[3.8]	B	高台部欠損・コテ当て
44	18	SR30	床	面	土師器	無台杯	(16.0)	—	[3.6]	B	底部欠損・コテ当て
44	19	SR30	0	2	土師器	無台杯	—	(6.8)	[2.5]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	20	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	(5.6)	[1.1]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	21	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	(6.6)	[2.2]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	22	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	(7.8)	[1.5]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	23	SR30	0	4	土師器	無台杯	—	—	[0.9]	Ib	回転ヘラ切り・無調整・内面不明
44	24	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	6.0	[2.6]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	25	SR30	0	2	土師器	無台杯	—	(6.8)	[1.3]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
44	26	SR30	床	面	土師器	無台杯	—	(7.0)	[2.6]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
45	1	SR30	床	面	土師器	甕	—	—	[6.7]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
45	2	SR30	床面・0	3	土師器	甕	—	—	[6.7]	II	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
45	3	SR30	0	2	土師器	甕	—	—	[3.9]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
45	4	SR30	床	面	土師器	焼き台?	(14.0)	12.2	2.6	III	回転ヘラ切り・底部に稲藁付着痕・内面不明
45	5	SR30	床	面	土師器	有台杯	—	—	[2.0]	A	切り離し不明・コテミガキ・内黒
45	6	SR30	床	面	土師器	甕	—	9.5	[4.7]		外面ヘラケズリ・内面ロクロナデ
45	7	SR30	床	面	土師器	筒形土器	—	—	[3.7]		外面不明・内面ヘラナデ・胎土に海綿骨針含有
45	8	SR30	0	4	土師器	筒形土器	—	—	[2.3]		内外面不明
47	1	SR24	0	1	土師器	甕	—	—	[10.0]	III	内外面不明
47	2	SR32	床	面	土師器	甕?	—	—	[2.6]	A	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
47	3	SR32	床	面	土師器	無台杯	—	—	[2.2]	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
47	4	SR33	0	1	土師器	甕	—	—	[13.0]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
47	5	SR33	0	1	土師器	無台杯	—	—	[1.0]	IIb	回転糸切り・無調整・内面不明
47	6	SR33	0	1	土師器	無台杯	—	5.4	[1.0]	AIIb	回転糸切り・無調整・コテミガキ・内黒
47	8	SR33	床	面	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
47	9	SR33	0	1	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
47	7	SR37	床	面	土師器	無台杯	—	—	[5.1]	A	切り離し不明・コテミガキ・内黒
50	1	SR04	床面・0	5	土師器	無台杯	(16.4)	(5.6)	5.5	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
50	2	SR04	床	面	土師器	無台杯	(14.8)	(6.2)	5.4	AIa	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
50	3	SR04	床・検出面		須恵器	横瓶	—	—	—		外面平行タタキ目・ロクロナデ・内面ヘラナデ
50	4	SR04	0	5	土師器	甌	—	—	—		外面ユビオサエ・把手
50	5	SR04	1次焼成面		須恵器	杯	—	(6.6)	[1.3]		切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ
50	6	SR04	床	面	土師器	有台碗	—	—	[3.3]	A	底部欠損・ヘラミガキ・内黒
50	7	SR04	2次焼成面		土師器	無台杯	—	(6.2)	[2.4]	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
50	8	SK06	床	面	須恵器	杯	—	—	—		底部欠損
50	9	SR04	床	面	須恵器	甕	—	—	—		外面ナデ・ヘラケズリ・内面ヘラナデ
50	10	SR04	床	面	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・ロクロナデ・内面ヘラナデ
57	5	SK08	0	1	土師器	無台杯	(13.8)	5.6	5.1	BIIa	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテ当て
57	6	SK05	0	2	土師器	無台杯	—	5.0	[1.0]	AIIa	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・内黒
60	1	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	(14.0)	(6.8)	4.8	AIb	回転ヘラ切り・無調整・コテミガキ・内黒
60	2	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	(15.4)	(6.3)	5.7	AIa	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
60	3	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	13.2	5.9	4.9	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て・底部に乾燥台圧痕
60	4	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	(13.6)	6.1	[4.9]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て
60	5	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	—	(6.5)	[1.1]	BIb	回転ヘラ切り・無調整・コテ当て

表7 土器・土製品観察一覽(5)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場所	層位	種別	器種	口径	底径	器高	分類	備考	
60	6	遺物集中区	L	V	土師器	無台杯	—	6.0	[1.9]	Ala	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・内面不明・内黒
60	7	遺物集中区	L	V	土師器	甕	(13.0)	6.8	9.1	BII	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・内外面ロクロナデ
60	8	遺物集中区	L	V	土師器	甕	(12.0)	(5.9)	7.3	BII	切り離し不明・手持ちヘラケズリ・内外面ロクロナデ
61	1	遺構外	L	V	土師器	杯	13.7	7.0	5.0	Ala	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒
61	2	遺構外	L	I	土師器	杯	—	—	4.8	Ala	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・ヘラミガキ・内黒?
61	3	遺構外	L	V	土師器	杯	(14.2)	6.2	4.7	Ala	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	4	遺構外	L	V	土師器	杯	—	6.0	[2.9]	Ala	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	5	遺構外	L	V	土師器	杯	—	4.5	[2.6]	Ala	切り離し不明・内外面不明・内黒
61	6	遺構外	L	V	土師器	杯	—	7.3	[1.0]	Ala	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	7	遺構外	L	V	土師器	杯	—	5.6	[1.7]	AlIb	回転糸切り・無調整・ヘラミガキ・内黒
61	8	遺構外	L	V	土師器	杯	—	7.0	[3.0]	BIIb	回転ヘラ切り?・無調整・コテ当て
61	9	遺構外	L	I	土師器	杯	—	6.1	[1.7]	BIIa	回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	10	遺構外	L	V	土師器	杯	—	(6.5)	[1.2]	A	切り離し不明・内外面不明・内黒
61	11	遺構外	L	V	土師器	杯	—	5.2	[1.8]	BIIa	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテ当て
61	12	遺構外	L	V	土師器	杯	—	6.9	[3.0]	A	切り離し不明・内外面不明・内黒
61	13	遺構外	L	V	土師器	杯	—	6.3	[1.9]	AlIa	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	14	遺構外	L	I	土師器	有台皿	(16.5)	—	[3.2]	A	高台部欠損・切り離し不明・ヘラミガキ・内黒
61	15	遺構外	L	V	土師器	無台杯	—	4.9	[0.8]	AlIa	回転糸切り・手持ちヘラケズリ・コテミガキ・内黒
61	16	遺構外	L	V	土師器	有台杯	(18.0)	12.1	(10.3)	A	切り離し不明・菊花状調整痕・ヘラミガキ・両黒
61	17	遺構外	L	V	土師器	有台盤	—	—	[3.6]	B	底部欠損
61	18	遺構外	L	V	土師器	有台碗?	—	—	[2.5]	B	切り離し不明・コテ当て
61	19	遺構外	L	V	土師器	有台碗?	—	—	[2.6]	A	切り離し不明・菊花状調整痕・コテミガキ・内黒
61	20	遺構外	L	V	土師器	無台鉢	—	—	[6.3]	A	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・内黒
61	21	遺構外	L	II	土師器	有台碗	—	12.7	[6.2]	B	切り離し不明・外面ロクロナデ・内面コテ当て
61	22	遺構外	L	I	土師器	有台碗	—	—	[6.5]	B	回転ヘラ切り・外面ロクロナデ・内面不明
61	23	遺構外	L	V	土師器	長頸瓶	—	—	[4.8]	A	外面ヘラミガキ・内面ヘラミガキ
61	24	遺構外	L	V	土師器	長頸瓶	—	4.8	[3.3]	A	回転ヘラ切り・ヘラミガキ・両黒
61	25	遺構外	L	V	土師器	不明	—	(4.5)	[1.4]	A	切り離し不明・内外面ヘラミガキ・両黒
61	26	遺構外	L	V	土師器	長頸瓶?	—	4.6	[2.6]	A	切り離し不明・外面ヘラミガキ・内面不明・両黒
61	27	遺構外	L	II	土師器	蓋	—	—	[1.6]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
61	28	遺構外	L	V	土師器	把手付鍋	—	—	[3.4]		把手
62	1	遺構外	L	V	土師器	甕	(19.9)	11.7	25.0		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・ハケメ
62	2	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[13.1]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
62	3	遺構外	L	I	土師器	甕	—	—	[5.4]		外面ヘラナデ・内面ヘラナデ・把手
62	4	遺構外	L	I	土師器	甕	—	—	[2.8]		外面ロクロナデ
62	5	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[6.1]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
62	6	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[8.8]		外面ロクロナデ・内面ヘラナデ・把手
62	7	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[5.0]		外面ユビオサエ・内面ヘラナデ・把手
62	8	遺構外	L	V	土師器	甕	13.5	—	[5.0]	III	外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
62	9	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[5.4]		外面ヘラケズリ・内面不明・単孔式
62	10	遺構外	L	V	土師器	甕	—	—	[6.0]		内外面不明・把手
62	11	遺構外	L	V	土師器	筒形土器	—	—	[3.9]		外面ユビオサエ・内面ヘラナデ
62	12	遺構外	L	V	土師器	甕	—	12.0	[5.9]		外面ヘラケズリ・ロクロナデ・内面ロクロナデ
62	13	遺構外	L	V	土師器	三足盤	—	—	[5.4]		外面ヘラケズリ
62	14	遺構外	L	V	土師器	三足香炉	—	—	[5.2]		外面ユビオサエ
63	1	遺構外	L	I	須恵器	杯	13.6	5.8	4.3		回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ
63	2	遺構外	L	I	須恵器	杯	(13.6)	6.4	4.1		回転ヘラ切り・無調整
63	3	遺構外	L	I	須恵器	杯	(14.7)	(7.0)	4.8		回転ヘラ切り・無調整
63	4	遺構外	L	V	須恵器	杯	—	(6.7)	[3.7]		回転ヘラ切り・無調整
63	5	遺構外	L	V	須恵器	杯	—	(5.8)	[1.5]		切り離し不明・手持ちヘラケズリ・コテ当て
63	6	遺構外	L	V	須恵器	有台盤	—	—	[2.9]		底部欠損・外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	7	遺構外	L	I	須恵器	杯	(13.8)	—	[3.5]		底部欠損
63	8	遺構外	L	I	須恵器	鉢	—	—	[5.6]		外面ロクロナデ・内面ヘラミガキ
63	9	遺構外	L	I	須恵器	有台碗	—	—	[4.1]		底部欠損・ロクロナデ
63	10	遺構外	L	V	須恵器	瓶	—	—	[5.0]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	11	遺構外	L	V	須恵器	水瓶	—	—	[5.2]		外面ロクロナデ・沈線・内面ロクロナデ
63	12	遺構外	L	V	須恵器	水瓶	—	(6.3)	[4.8]		切り離し不明・内外面ロクロナデ・底部穿孔
63	13	遺構外	L	V	須恵器	有台杯	—	(9.6)	[2.6]		回転ヘラ切り・外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	14	遺構外	L I・II	V	須恵器	横瓶	—	—	[15.0]		平行タキ目・内面ロクロナデ・ユビオサエ

表8 土器・土製品観察一覧(6)

() …推定値, [] …残存値, 単位: cm

図	No.	場所	層位	種別	器種	口径	底径	器高	分類	備考
63	15	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[3.3]		外面ロクロナデ
63	16	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[3.4]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	17	遺構外	L I	須恵器	広口瓶	(19.6)	—	[8.4]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ・ヘラナデ
63	18	遺構外	L I	須恵器	甕	(15.7)	—	[8.0]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	19	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[6.5]		外面タタキ目・ロクロナデ・内面ロクロナデ
63	20	遺構外	L V	須恵器	甕?	—	—	—		外面波状沈線
64	1	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[7.1]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
64	2	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[6.5]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
64	3	遺構外	L I	須恵器	甕	(31.2)	—	[9.4]		外面ロクロナデ・内面ロクロナデ
64	4	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面アテ具痕
64	5	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	—		外面平行タタキ目・内面アテ具痕
64	6	遺構外	L V	須恵器	甕?	—	—	—		外面平行タタキ目
64	7	遺構外	L V	須恵器	甕	—	—	[10.3]		外面平行タタキ目・内面ヘラナデ
64	8	遺構外	L II	須恵器	甕	—	—	[6.8]		外面ケズリ・内面ナデ・使用痕
65	1	遺構外	不	明	土製品	不	不	[3.8]		外面線刻・内面線刻
65	2	遺構外	L V	明	土製品	不	不	[3.4]		外面線刻・内面線刻
65	3	遺構外	不	明	縄文土器	不	不	—		LR・横ナデ
65	4	遺構外	L II	明	縄文土器	不	不	—		LR・横ナデ
65	5	遺構外	L VII	明	縄文土器	不	不	—		斜行沈線文・横ナデ

表9 鉄器・石器観察一覧

図	No.	場所	層位	種別	器種	備考
6	11	S I 01	0 1	石器	砥石	長 7.8cm×幅 4.7cm×厚2.0cm, 質量 89.40g
8	1	S I 02	0 3	鉄器	刀子	長 2.9cm×幅 0.9cm
10	11	S I 03A	床 面	鉄器	刀子	長 2.7cm×幅 1.3cm
20	8	S I 06	床 面	石器	不明	長19.9cm×幅 8.3cm×厚2.4cm, 質量 620.00g
27	7	S I 08	床 面	鉄器	鍬	長 8.4cm×幅 0.5cm
27	8	S I 08	床 面	鉄器	鍬	長10.4cm×幅 0.3cm
27	9	S I 08	床 面	鉄器	刀子	長 6.4cm×幅 1.9cm
57	1	S K 03	0 2	鉄器	鉄釘	長 5.8cm×幅 0.5cm
57	2	S K 03	0 2	鉄器	鉄釘	長 5.7cm×幅 0.5cm
57	3	S K 03	底 面	銅製品	銭貨	寛永通寶
57	4	S K 03	底 面	銅製品	銭貨	寛永通寶
65	6	遺構外	L IV	石器	石鍬	長 3.9cm×幅 1.6cm×厚0.6cm, 重さ 1.95g
65	7	遺構外	L III	石器	石匙	長 5.4cm×幅 1.8cm×厚0.5cm, 重さ 3.85g
65	8	遺構外	L V	石器	石鍬	長 2.4cm×幅 1.8cm×厚0.4cm, 重さ 1.19g
65	9	遺構外	L I	石器	石鍬	長 2.8cm×幅 1.6cm×厚0.4cm, 重さ 1.52g
65	10	遺構外	L I	石器	石鍬	長 2.1cm×幅 1.6cm×厚0.3cm, 重さ 0.69g
65	11	遺構外	L II	石器	砥石	長 8.7cm×幅 2.5cm×厚1.4cm, 重さ 34.10g
65	12	遺構外	L I	石器	打製石斧	長11.6cm×幅 5.1cm×厚1.9cm, 重さ 101.90g
65	13	遺構外	L I	石器	磨製石斧	長 6.4cm×幅 4.7cm×厚1.5cm, 重さ 57.11g
65	14	遺構外	L V	石器	磨製石斧	長 4.7cm×幅 5.1cm×厚3.3cm, 重さ 116.61g
65	15	遺構外	L I	石器	磨製石斧	長 4.2cm×幅 6.3cm×厚3.9cm, 重さ 121.50g
65	16	遺構外	L V	石器	磨石	長 8.4cm×幅 8.5cm×厚6.4cm, 重さ 572.00g
65	17	遺構外	L V	石器	磨石	長11.2cm×幅 8.8cm×厚3.8cm, 重さ 523.90g
66	1	遺構外	L VII	石器	磨石	長11.3cm×幅 9.0cm×厚5.1cm, 重さ 698.00g
66	2	遺構外	L II	石器	磨石	長12.1cm×幅 8.4cm×厚5.0cm, 重さ 700.00g
66	3	遺構外	L III	石器	磨石	長14.0cm×幅10.2cm×厚5.5cm, 重さ1,160.00g
66	4	遺構外	L III	石器	磨石	長 7.3cm×幅 8.1cm×厚5.3cm, 重さ 437.80g
66	5	遺構外	表 採	銅製品	銭貨	寛永通寶
66	6	遺構外	L II	銅製品	銭貨	寛永通寶
66	7	遺構外	L I	銅製品	銭貨	寛永通寶
66	8	遺構外	L V	鉄器	刀子	長 3.5cm×幅 1.3cm
66	9	遺構外	L V	鉄器	鍬	長 7.4cm×幅 0.4cm

カードを紛失してしまい本節に掲載した。この窯跡の出土遺物であるとすれば、窯廃絶に伴う儀礼行為に使用された祭祀用具の可能性はある。

縄文土器 (図65-3~5)

出土状況に有意なまとまりはない。強いていえば、埋没沢周辺に多く分布する傾向があるが、層位的には上下しており、原位置を保ったものはほとんどみられない。また、土器そのものも小破片ばかりで、器形復元できるものに恵まれなかった。ここでは、その中から3点を図示した。縄文時代後期中葉頃の所産と考えている。

石器・石製品 (図65-6~17, 図66-1~4)

縄文土器と同じく調査区内から散発的に出土している。器種としては、石鏃、石斧、凹石・磨石が目立つ。帰属時期は大部分が縄文時代と考えて問題ないと思われる。ただし、図65-11の砥石だけは、平安時代に属するかも知れない。図65-12は、分銅型石斧の一種であろう。

銭貨 (図66-5~7)

3点出土した。すべて寛永通寶である。本遺跡では近世墓坑の3号土坑から同じ貨幣が出土している。このことから、後世に消失した墓坑がほかにあった可能性がある。

鉄製品 (図66-8・9, 写真62)

図示した2点は、出土層位からみて平安時代の遺物と考えている。8は刀子の破片、9は中央から歪んでしまっているが鉄鏃である。

(菅原)

第3章 考 察

本遺跡は、事実報告したように土師器生産を専門的に行った工人集落遺跡である。陸奥におけるこうした遺跡の発見は、岩手県江刺市瀬谷子遺跡（草間：1976）、宮城県色麻町上新田遺跡（小井川：1981）、福島県郡山市広網遺跡（高松：1985）に継ぐものである。そして、それに小規模な須恵器生産を取り込んだ例としては、広網遺跡以来の発見となる。本章では、こうした遺跡の重要性を踏まえて検討作業を進めていく。

第1節 遺 物

須 恵 器

本遺跡から出土した須恵器の破片点数は393点であり、本遺跡の土器の総破片量における割合は1.2%にすぎない。器種は、杯・盤・鉢・瓶・甕と少ない。このうち、瓶・甕の破片が、全器種の89.4%を占めているのが本遺跡の特質である。

はじめに、本遺跡における須恵器の出土分布についてみてみよう。本遺跡において須恵器の出土している遺構は、第一に4号須恵器窯跡である。竪穴住居跡では1号・3号A・3号B・4号A・4号B・8号住居跡で出土している。そのほか、各グリッドのとくにLVから多く出土している。遺構外出土の破片数量をみるかぎりでは、須恵器破片は9.8%であり、遺構出土を含めた割合よりやや高くなっている。土師器も含めて出土破片数の比較的多いグリッドは、やはり遺構が集中しているJ・K・L・M・N・Oの24～29の各グリッドである。これらのほとんどのグリッドでは、土師器の破片量が優勢である。しかし、O23～27グリッドでは須恵器破片が68%と土師器を上回る割合になっている。これは、これらのグリッドの斜面上位に3基の須恵器窯跡があるからで、この範囲から出土した須恵器の供給源はこれらの須恵器窯であり、これらのグリッドからN24～27グリッドにかけての範囲が須恵器窯の灰原とすることができる。

次に須恵器の分類作業を行う。杯は無台と有台の器形がある。前者を杯Aとし、後者を杯Bと呼ぶことにする。杯Aはロクロからの切り離しが回転ヘラ切りで、ヘラケズリなどをほとんど加えない類型と丁寧な手持ちケズリによって切り離し技法をわからなくしている類型がある。前者を杯A1（図63—1～4）とし、後者を杯A2（図50—5）と呼ぶことにする。杯A1の色調は灰白色を呈しやや軟質である。杯A2の色調は暗赤灰色を呈し、前者よりやや硬質である。また、杯A1の内面はロクロナデで仕上げられているが、杯A2はミガキヤコテナデなど土師器杯の仕上げ技法と同じである。杯Bは完存する資料はないが、体部下半に稜のつくことから判断して、稜碗と考えて

いる。盤は有台である。鉢は土師器と同様の器形・技法のものが認められる。瓶には長頸瓶・広口瓶・水瓶・横瓶がある。長頸瓶は復元器高が約16cmの小型品で、底部は無台であることが特徴である。広口瓶は口頸部の破片である。頸部がラッパ状に開き、口縁部に稜をつくって小さく外反している。甕や瓶の破片に有台の底部がないので、長頸瓶のように無台の可能性もある。横瓶は胴部の側面、つまり胴部製作時の底部にあたる部分と、頸部にあたる粘土板で蓋をした部分の破片が2個体出土している。口頸部を接合した部分は確認できなかったが、色調や焼成の様子は長頸瓶のそれに酷似している。小型と大型がある。水瓶は細い円柱状の頸部に3本の沈線が施されている。底部には高台がつけられている。甕はすべて球形胴の器形である。完全に復元できた資料はないので、部分から判断する以外ないが、復元口径から口径30cm前後の大型の器形(A)、口径20~25cmの中型の器形(B)、口径19cm未満の小型の器形(C)に分けることができる。甕Aは頸部はラッパ状に開いている。口縁部形態の違いから、2種類に細分できる。口縁部を肥厚させ断面が三角形になるもの(A1)、口縁部を内側に折り曲げるもの(A2)がある。これらの底部は破片資料からみて丸底になると思われる。甕Bは口頸部が直立する短頸の器形である。また、甕A1をスケールダウンした器形もあると思われる。甕Cは口頸部がラッパ状に開き、口縁断面を三角形にするもの(C1)と、丸く収めた単純口縁のもの(C2)がある。なお、甕Bと甕Cは底部破片の観察から平底と考えている。

次に、以上の各器種・各類型の遺構における共伴関係を確認する。4号須恵器窯跡では杯A2・杯B・横瓶・甕Aが出土している。先述のように、J・K・L・M・N・Oの24~29の各グリッドは須恵器窯の灰原が形成されている。したがって、ここで出土した須恵器は3基の須恵器窯から廃出されたものなので、窯跡出土資料として扱いたい。杯A1・杯A2・鉢・広口瓶・水瓶・横瓶・甕A1・甕C1・甕C2が出土している。住居跡出土資料では、3号A住居跡で長頸瓶と甕Aが、3号B住居跡では甕A1が伴っている。4号B住居跡には杯A1が伴出している。8号住居跡では甕Bが甕Aの胴部破片や多量の土師器杯と共にP1から出土している。こうした須恵器を出土した住居跡は、ロクロピットを持った工房である。したがって、これらの竪穴住居と須恵器窯は土器生産集落跡における製作遺構と焼成遺構というセット関係にある。ところで、本集落跡で3号住居跡や4号住居跡のように建て替えが行われた遺構では、古い遺構からは回転ヘラ切り技法による土師器杯が、新しい住居跡からは回転糸切り技法による土師器杯が出土する傾向がある。そして、4号須恵器窯跡の最終床面で出土した土師器杯は回転ヘラ切り技法のものである。とすれば、須恵器窯は古い段階の住居跡と併行することになる。しかし、須恵器は新しい8号住居跡のような新しい住居跡にも伴っているため、4号窯より新しい窯跡が残り2基のうちのどちらかだった可能性がある。加えて、4号窯の船底状ピットから須恵器杯Bが出土している。このことは4号窯に先行した須恵器窯の存在を示唆している。これらの出土土器や遺構の新旧関係の検討から、これら3基の須恵器窯跡は、4号窯跡を挟んで、操業時期が異なっていることがわかった。これらの須恵器窯の操業期間は、本遺跡が土器製作集落という性格上、集落の存続期間を越えることはない。

本遺跡の須恵器杯同様に底部に回転ヘラ切り痕を残す須恵器杯を主体的に出土している県内の窯跡の中で、調査・研究がもっとも進んでいる窯跡群は会津若松市大戸窯跡群である。8世紀後葉に開窯し、その後10世紀末に至るまで、連綿と須恵器生産を行っている東北地方最大の窯業遺跡である。大戸窯の須恵器杯の技法は一貫して回転ヘラ切り無調整で、初期の製品を除いて色調は灰白色を呈し、やや軟質の製品が多い。この点では本窯の須恵器杯は大戸窯に類似している。器形は体部に丸みを帯びており、口径・底径比は0.5を下回るので、南原19号窯式（MH19）期以降の杯と併行関係にある。9世紀に大戸窯の主力生産器種の長頸瓶は、10世紀前葉に位置づけられている上雨屋112号窯式（KA112）期には広口瓶へと転換していくが、直前の上雨屋107号窯式（KA107）期でラップ状に大きく開く口頸部になる。本窯跡の長頸瓶は小型で、無台である点で大戸窯長頸瓶と大きく異なっているが、口頸部のこのような形態に共通点を見いだすことはできる。さらに、広口瓶は本窯跡でも焼成されており、大戸窯と比較した場合本窯の操業時期はKA112期からKA107期に併行するものとみられる。大戸窯編年（石田：1994）の年代を参考にすると、本遺跡出土の須恵器窯の操業は、9世紀後葉から10世紀前葉の中におさまると考えている。（石本）

土 師 器

土師器は総量で31,816点出土しており、出土遺物の90%以上を占める。生産地という本遺跡の特性からいって、他遺跡からの搬入品は基本的に考えられず、それらはこの窯場の製品と見なされる。以下、小型器種の問題点と土師器の観察で得られた所見を整理し、編年作業を行っていく。

1. 小型器種の問題点の整理

① ヘラミガキ・黒色処理の有無について

古代東北地方の酸化焰焼成土器には、杯を中心とする小型器種において内面をミガキ・黒色処理するタイプAと、それを省略するタイプBの2種類が認められる。両者は主に消費地資料の観察と理化学分析結果から焼成方法が違う土器と見なされている。そして、客体的なBは土師器とは区別して考えるのが一般的である。具体的には、BにはAに通有な黒斑がみられないこと、X線粉末回析とモースの硬度実験で両者の鉱物組成と硬度に異なる結果が得られた（桑原：1976）ことから、Aが野焼き、Bが簡易な窯による焼成と考えられている。しかし、本遺跡のBを観察すると有黒斑資料が定量みられ、他の生産地資料でも同様なことがいえる。また、消費地資料にも有黒斑資料は全くないわけではない。そして、なにより重要なことは、本遺跡では両者が確実に同一窯内で焼成されている。それと同じ焼成方法はすでに上新田遺跡で確認されており、猪倉B遺跡（能登谷：1996）・勝口前畑遺跡（斎藤：1995）の土師器窯跡資料でも同様のことを今回確認した。このように、近年の生産地の調査成果は、Bを土師器としない従来の理解に対して否定的である。

そこでこの見通しから、30号土師器窯跡の一括資料でモースの硬度実験を行ったところ、各10点のAとBはすべて～3～の同一値を示した（註1）。桑原の実験は1消費地（多賀城跡）とはいえ、分

析に生産地・出土地点・埋没状況の相違する資料を用いたことが今回と異なる結果を生んだと考えられる。それと同じ理由でX線粉末回析結果も理解可能と思われ、本論では両者を同じ土師器と扱う。以下、内面黒色の土師器を**A類**、内外赤褐色の土師器を**B類**とする。

② コテ当て調整とコテミガキについて

供膳形態の事実報告で、コテ当て調整とコテミガキという技法名を使った。前者はB類のみに認められ、A類では確認できない。逆に、後者は黒色処理と一体でA類だけに認められる。ただし、A類の生産器種のすべてには及ばず、高級品を写した器種にはヘラミガキが用いられている。この二つの技法は、相互に密接な関係を持ち、本遺跡の土師器群の編年的位置づけを考える上で重要な要素である。以下、この点を説明する。

コテ当て調整（小川：1987）は、もともと灰釉陶器碗の内面調整（前川：1984）であり、瓷器系碗形杯（小川：1987）の出現・普及に伴って採用される。これまで、福島・宮城県内では9世紀後半～10世紀代の須恵器を含めた資料で確認されている。痕跡の特徴は、ロクロ目の凹凸がほとんどない平滑な器面を形成する点にある。また、工具のあたる角度によっては、稜の鋭い断面三角形の調整痕が渦巻き状に広がる場合（図44—26_地）も認められる。

もう一つのコテミガキは幅広の単位が特徴的で、ヘラミガキに比べて調整が粗く、器面に与える効果はナデに近い（図24—1）。それが上述のコテ当て調整と結び付くのは、どちらも瓷器系碗形杯の普及に連動して生まれた同一線上の技法と考えたからである。その根拠は、両者の調整単位幅が概ね一致しており、やはり碗形杯の出現期以降急速に広まり、主にこの類型を対象としていることによっている。この理解が正しいとすれば、コテミガキ痕のあるA類にも最初器面を整えるためのコテ当て調整が施されていたと考えることができる。つまり、消されてしまっただけでコテミガキされたA類には、灰釉陶器碗の製作技術が採用されている。

2. 土器の観察

① 窯跡出土の焼成失敗品の特徴

窯跡出土の土師器には、器壁の剥離した小破片が多い。その中には剥離部分の色調が調整を施した器面と同じものがある。このことは、それらが焼成途中で剥離したまま窯内部でしばらくのあいだ被熱し続けたことを示している。B類のそうした資料は、割ってみると表面の鮮やかな色調とは対照的に中が真っ黒になっている。こうしたハネモノ資料の存在は、窯道具とともに土師器窯跡を認定するための有効な判断材料の一つである。

② A類の黒色ムラとB類の黒斑について

窯資料に限らず本遺跡の土師器には、本来の目指した色調を呈さない個体が少なくない。A類ではミガキを加えた内面が赤褐色を呈し、B類では器面に黒斑が付く。しかも、それは完形品にまで及ぶ。当然、そうした現象は本遺跡が生産地であることに起因している。

ところで、秋山浩三は土師器生産地と都城内外の消費地で供膳形態の有黒斑率に違いのあることを明らかにし、流通過程で不良品が選別されたことを指摘している（秋山：1994）。そこでこの視

点から、本遺跡の a : 30号土師器窯跡, b : 竪穴住居跡と, c : 周辺消費地遺跡の資料を比較検討してみた。それぞれの性格は, a = 窯内に遺棄された焼成失敗品, b = 生産地内で使用された土師器, c = 外部流通した土師器である。その結果図67に示したとおり, a → b → c の順に不良品が減少することが判明した。このことから, 陸奥でも畿内と同じように色調に関する品質基準があり, それに合格しないものは基本的に供給されないことで, 消費地の供膳様式が維持されたと考えられる。したがって, 陸奥の消費地から出土するB類に有黒斑資料がほとんど認められないのは, それらが製品の流通過程から排除されたためと理解できる。

3. 分類 (第68図)

以下では, 編年作業を進めるため資料化した250点を中心に土師器の分類を行いたい。作業にさいしては, まず大きく供膳形態, 煮炊・貯蔵形態, 特種形態の三つに分け, さらに, 器形と製作技術の違いにより器種を分類・細分した。なお, 併せてここで窯道具も細分した。

① 供膳形態

有台杯・無台杯・有台碗・無台碗・有台皿・有台盤・有台鉢・無台鉢がある。図40—16の有台碗は, 深碗である。主体を占める無台杯には, ロクロ土師器本来の系譜を引く須恵器系の「杯形杯」と, 瓷器系の「碗形杯」の2種類が認められる。この器種と無台杯は, 黒色処理・ヘラミガキによるA類・B類, 底部切り離し技法によるI類回転ヘラ切り・II類回転糸切り, 再調整によるa類手持ちヘラケズリ・b類無調整の三つの属性で細分を行った。

② 煮炊・貯蔵形態

甕・甑・把手付鍋・長頸瓶・筒形土器がある。どの器種も器形全体の判明する資料には恵まれていない。甕は最大径の位置と胴部形態で細分した。もっとも資料数の多いI類は, いわき地方に特有な「陸奥型甕」と「常総型甕」の折衷型(中山:1996)である。また球胴形のIII類には, 非ロクロ調整のものが混じる。

③ 特種形態

香炉蓋・三足香炉・三足盤・小壺がある。多彩陶器の仏具を写した器種である。数は少ない。

④ 窯道具

3種類の焼き台がある。I類: 粘土塊, II類: トチン状, III類: 杯形である。

4. 土器群の設定

① 共伴関係の検討と土器群の設定

次に, 分類した土師器のまとまりを検討して土器群を設定したい。具体的方法は普遍的な器種であり, しかも, 年代変化のとらえやすい無台杯によって土師器窯跡と竪穴住居跡における共伴関係を検討する。検討資料の性格を整理しておく, 前者は生産遺構の最小単位のまとまりである。ただし, 須恵器窯のような床面の貼り替えや厚い灰原の堆積がほとんどないため操業開始から廃絶までの幅をもつ。それに対して, 後者は複数窯の製品を含んでおり, より幅広い供給源からの集積内容となっている。しかし, 一方で器形全体の判明する数には恵まれており, 窯跡資料に欠落した

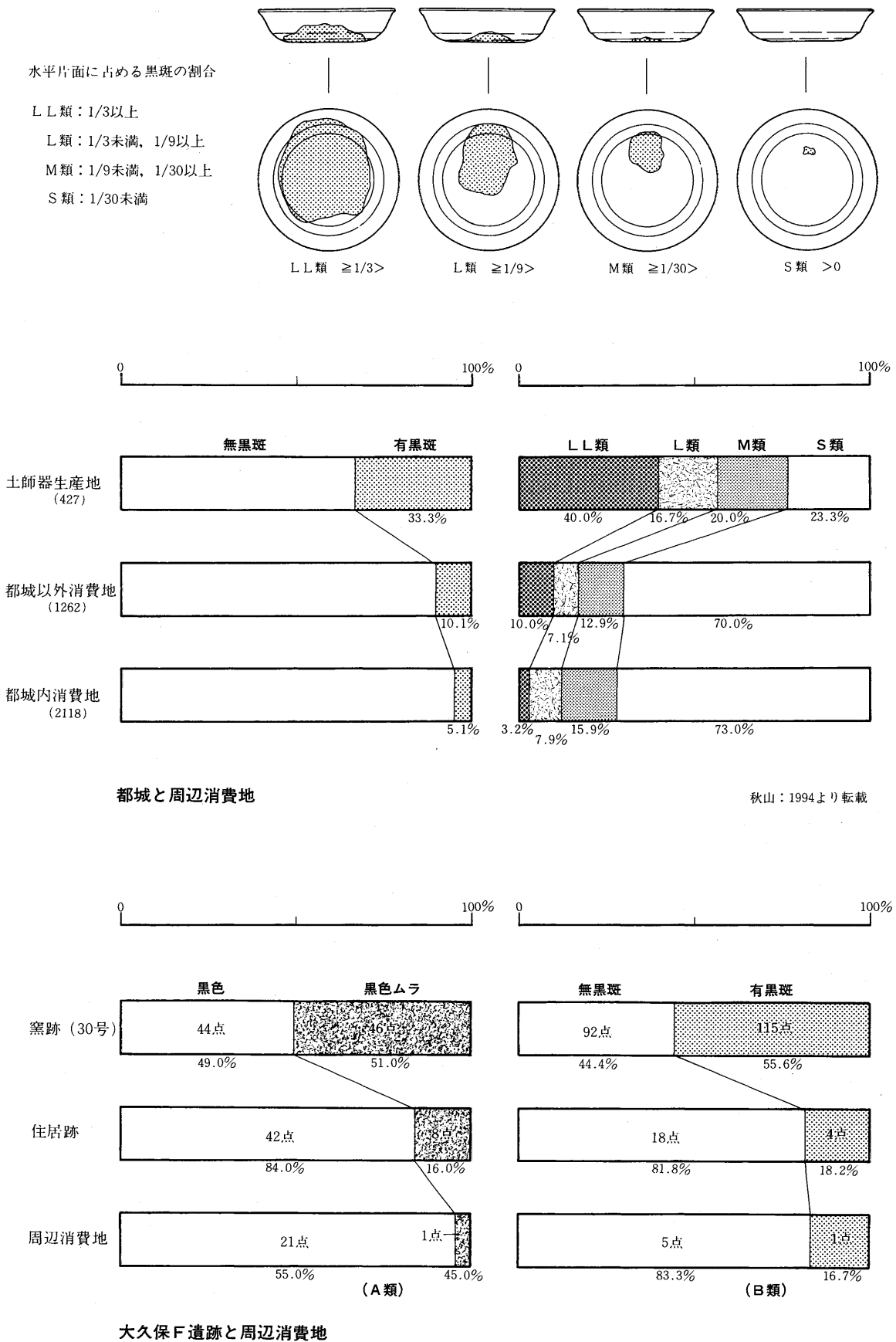


図67 都城と大久保F遺跡における不良品の実態

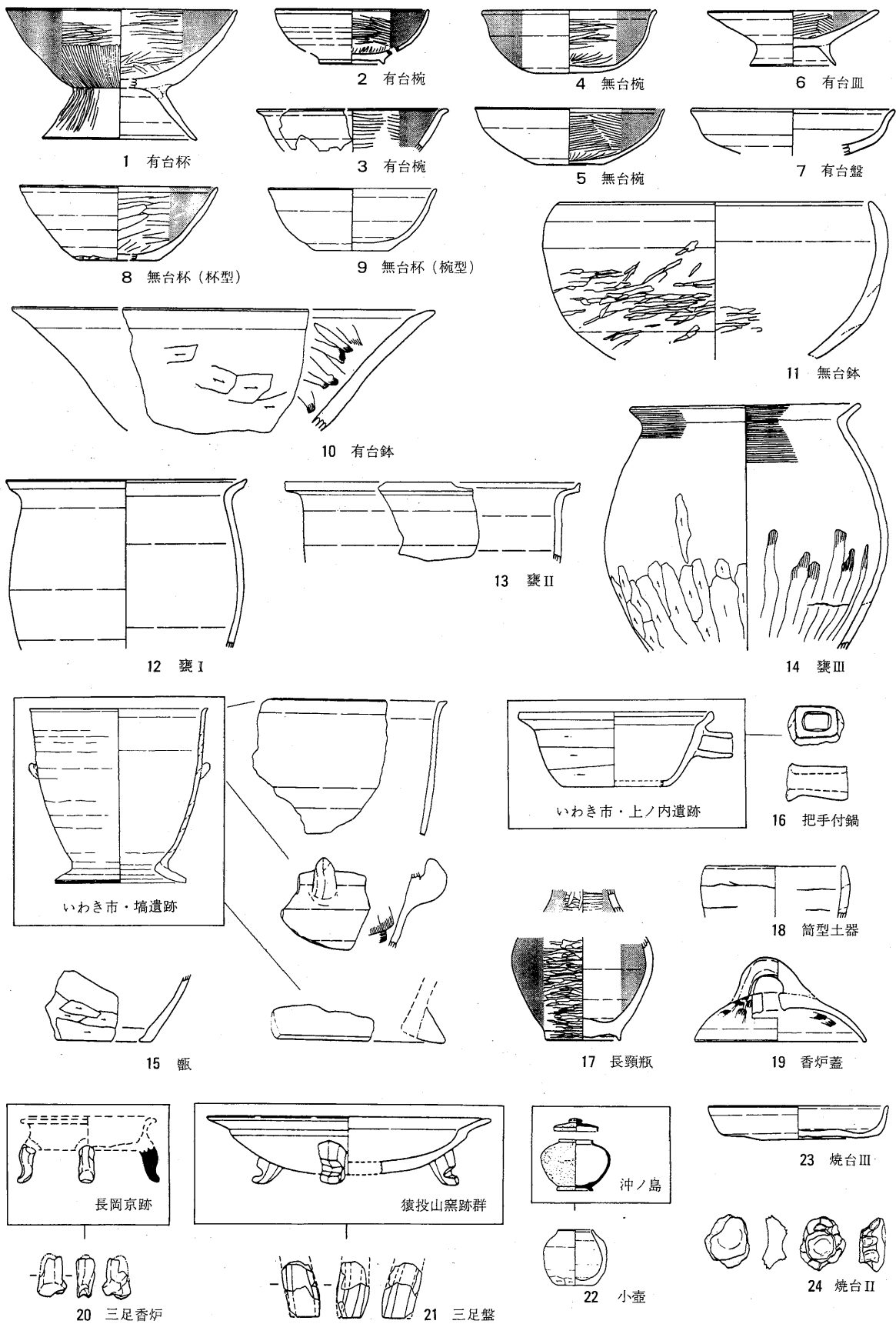


図68 器種の分類

器種を混じえている。ここでは以上の点を踏まえ、まず窯跡一括資料から設定基準の見通しをつけ、それを住居跡出土の土師器群で検証するという方法で土器群の設定を行いたい。

では、窯跡出土の土師器群からみていこう。表10をみると、無台杯は回転ヘラ切りと回転糸切りの二つの技法が、窯跡単位で強い独自性を保っている（註2）。つまり、Ⅰ類とⅡ類はまったく混在せず、1窯で1技法が貫徹している。それに対してほかの属性には、こうしたまとまりはみいだせない。したがって、本遺跡の土師器群は、この基準によって2分されるという見通しが得られる。それを竪穴住居跡出土の土師器群で検証してみると、分類可能な無台杯が2個体以上出土した住居跡は6軒あり、そのうち5軒の住居跡で、窯跡と同じ底部切り離し技法の斉一性が認められる。また、技法の混在する6号住居跡も、Ⅱ類6点に対してⅠ類1点の片方に偏った組成内容を示しており、先の見通しを大きく変更させるものではない。以上から、無台杯Ⅰ類を指標とする土師器のまとまりをⅠ群土器、無台杯Ⅱ類を指標とする土師器のまとまりをⅡ群土器としたい。前提として、各土器群の内容は本遺跡における一定期間の土師器組成状況を反映したものと捉えられる。ただし、胎土に白色針状物質を含む筒形土器のみは、搬入品と考えている。

Ⅰ群土器 基礎資料：1号・2号・4号・6号・12号・15号・17号・23号・30号・32号土師器窯跡，1号・2号・3B号・4B号・5B号・6号・7号・9号住居跡出土土師器群。

器種構成：無台杯Ⅰ類・有台碗Ⅰ類・有台皿Ⅰ類・有台鉢・無台鉢・香炉蓋・三足香炉・長頸瓶・小壺・甕Ⅰ類・甕Ⅱ類・甕Ⅲ類・甌・筒型土器。焼き台Ⅱ類・焼き台Ⅲ類。

Ⅱ群土器 基礎資料：3号・14号・20号・33号土師器窯跡，3A号・4A号・8号住居跡出土土師器群。

器種構成：無台杯Ⅱ類・有台碗Ⅰ類・有台碗Ⅱ類・有台皿・有台鉢・香炉蓋・三足香炉・甕Ⅰ類・甕Ⅲ類・甌・焼き台Ⅲ類。

② 土器群の前後関係と須恵器との併行関係

次に、抽出された土器群の前後関係を明らかにしたい。この点に関しては、遺構の切り合いで次の四つの事例が得られている。新旧関係を矢印の方向で示した。

- a. 30号土師器窯跡（Ⅰ群土器）→8号住居跡（Ⅱ群土器）
- b. 9号住居跡（Ⅰ群土器）→8号土坑（Ⅱ群土器）
- c. 3号B住居跡（Ⅰ群土器）→3号A住居跡（Ⅱ群土器）
- d. 5号B住居跡（Ⅰ群土器）→5号A住居跡（Ⅱ群土器）

以上から、Ⅰ群土器よりⅡ群土器の方が新しいことが判明する。だとすれば、先ほどの6号住居跡における底部切り離し技法の混在は、Ⅰ期生産の古い食器がⅡ期まで残り住居内で使用されたためと理解できよう。そうすると、ほかの器種にもⅡ期の基礎資料中にⅠ期の製品が含まれている可能性がある。しかし、その数はごく少量とみられ、全体を左右するものではないと考える。以下、Ⅰ群

表10 遺構と遺物の共伴関係

器種		No.	土 師 器 窯 跡																																	計	器種		No.	住 居 跡										計																					
			1	2	3	4	6	12	13	14	15	16	17	20	21	23	24	30	32	33	1	2	3A	3B	4A	4B	5A	5B	6	7	8	9	10																																						
無台杯	I	A	a	1	2	3	1	2								2											6			5	2		24	無台杯	I	A	a	3	1																													17			
		b		1							1	1																										4																																	
		B	a		2	1																									2						5																																		
		b					1										3														18						22																																		
	II	A	a							1																										1	II	A	a																																12
		b			1																												1					3																																	
		B	a																																			3																																	
		b			1																																	20																																	
有台碗	I	A				1					1	1				1	1	1																6	有台碗	I	A																																6		
		B																																			1																																		
	II	A																																		1	II	A																																	1
		B																																				1																																	
有台皿	A					1																												1	有台皿	A																																	2		
	B																																			1																																			
有台鉢						1																												2	有台鉢						1																								1						
無台鉢								1																											2	無台鉢								1																				1							
蓋					1																														1	蓋																																			
香炉蓋	A																																		1	香炉蓋	A																																		3
	B				1																														1		B																													1					
三足香炉																																				三足香炉																													1						
長頸瓶																																				長頸瓶																														1					
小壺																																				小壺																																1			
罍	I				1			1								1	2																		6	罍	I																																		18
	II																																		2		II																													4					
	III																																				2	III																																2	
瓶					1																															2	瓶																														1				
筒形土器																																				3	筒形土器																															4			
計			1	5	3	8	3	4	2	3	2	5	9	5	1	7	1	1	32	2	2														95	計			7	2	7	15	2	1	3	1	15	11	32	10																		106			
焼き台	I																																		焼き台	I																																			
	II																																				II																																		
	III																																					III																																	
計																																				計																																			
総計			1	5	3	8	3	5	2	3	7	6	9	5	2	7	1	45	2	2															116	総計			7	2	7	15	2	1	3	1	15	13	32	10																	108				

土器の生産段階を大久保F遺跡Ⅰ期、Ⅱ群土器の生産段階を大久保F遺跡Ⅱ期としたい。

ところで、cとdの同一住居の2枚の床面で確認された層位的所見は、生産の変化が連続的であったことを示すと同時に、その転換期にまたがって土師器製作に携わった工人集団が同一であったことを立証する。だとすれば、両者の土器様相の違いは、新技術を取り込んだ工人集団内部の自律的な変化ととらえられる。また須恵器との併行関係は、Ⅰ群土器が4号須恵器窯跡+1基の製品に、Ⅱ群土器が残る1基の製品に併行する。

5. 無台杯の変化

① 全体的傾向

では、以上の動向を踏まえた上で、主要器種である無台杯のⅠ期からⅡ期への変化をみていき

い。検討資料には、前述の a～d のうちからとくに内容の充実している a と c を選択した。ここでは、取り敢えず A 類と B 類の違いにはこだわらないで、その器種全体の傾向を描き出してみたい。それらを法量分析した結果、図69・70に示したデータが得られた。以下、そこから読み取れる事柄を加味して当該器種の変化をまとめる。

系譜：I 期では、杯形杯と椀形杯の系譜の異なる 2 種類が生産される。識別不可能な破片資料が多く表10に具体的な数字で示さなかったが、当該期は比率的に杯形杯が優勢である。それが、II 期になると椀形杯だけに集約され、画一的となる。また、それに合わせて B 類の割合が 4 割から 6 割に増え、両者の立場が逆転してしまう。

法量：法量は、口径の中心値が 13.0～14.3cm から 12.0～13.0cm に、底径値の中心値が 5.5～7.0cm から 4.4～6.2cm に大きく縮小している。しかし、土器製作の土台となる底径値の上限・下限は互いに 6.0cm 前後で重複しており、その変化が時間的に連続的であると見なした先の理解が追認される。なお、底径値の分布に着目すると、二つの土器群に共通してピークが二つ認められる（I 群土器：5.6cm・6.0cm，II 群土器：4.9cm・5.8cm）。このことから、底部を形づくる粘土円板に 2 種類の規格が存在したことが窺える。同時にこうした法量変化と併せて底径／口径比（平均）が 0.4 から 0.5 へ、器高／口径比（平均）が 0.35 から 0.3 へ変化する。

底部処理：底部切り離し技法は、I 期の回転ヘラ切りから II 期の回転糸切りに全面転換する。それと共に、手持ちヘラケズリの範囲は切り離し痕を完全に消してしまう底部全面に及ぶものから周縁部のみに狭められる。この変化は作業の省力化を図った動きととらえられる。

以上の三つのうち、系譜変化の意味に触れておきたい。小川淳一は、宮城県内における 9 世紀後半以降の須恵器・土師器に「磁器指向型」（西：1982）が現れ、その主要な現象として杯が瓷器系椀形杯に次第に集約され、同時に灰釉陶器椀の内面調整であるコテ当て調整が普及することを指摘している（小川：1987）。福島県内の該期土師器は宮城県内と同じ表杉ノ入式の範疇でとらえられることから、それと近似した過程を経たとみられる。この視点でみると、杯形杯と椀形杯の共存する本遺跡の I 群土器はその変化の過渡的状态であり、椀形杯のみとなった II 群土器は完成した姿と理解できる。さらに小川は、杯だけでなくこの頃施釉陶器を直接模倣した器種が出現することを指摘している。本遺跡の有台椀・有台皿・三足香炉・三足盤・小壺はそれに該当し、とくに、後三者の仏具は、本遺跡の特徴的な生産器種である。さらにその延長でみると、II 群土器に出現する深椀は、全国的に 10・11 世紀代の古代末期様式の土器組成の指標的存在であり（服部：1990）、遺構外出土の把手付鍋も東北地方のその時期に特徴的な器種とされている（飯村：1995）。その視点でみるならば、II 群土器は磁器指向型を備えた古代末期様式土器の開始段階に位置づけられよう。ただし、小皿が含まれ、B 類が卓越するとはいえ、再調整される無台杯がまだ定量あることは、その内容が不完全なことを示している。

② A 類と B 類の関係

では、ここで A 類と B 類の違いから無台杯の変化をとらえ直してみたい。そのためには、まず、

この二つで色調のほかには何が区別されていたのかを明らかにする必要がある。この点に関しては、B類の大きさがA類より小さめであるという指摘が消費地資料の分析で従来よりなされている。そこで、この見通しに立って両者の法量比較(図71・72)を行ったところ、時期の違いに関わらない大小に区別されたA類・B類の生産が確認できた。また底径/口径比はA類が、器高/口径比はB類が一貫して高く、さらに、手持ちヘラケズリの施される割合も、A類が75%以上、B類が25%以下で維持されている(表10)。したがって、先にまとめた無台杯の変化のうち法量と再調整に関する点は、A類・B類のこうした関係を保ちながらのものといえる。それに対して残る系譜変化は、専らA類によって引き起こされた現象であり、B類はI期当初からすべて椀形杯である。このことからすると、I期の組成で杯形杯が優性であるのは、この時期にA類がB類より多く生産されたためととらえられる。

③ 須恵器・土師器A類・土師器B類の関係

次に、I期の製品を対象に、須恵器を含めた3種類の無台杯の特徴の違いを明らかにし、それが生まれた背景を考える。はじめに事実関係を確認しておく。該期において、須恵器は土師器と同じ回転ヘラ切り離し技法を共有し、4号須恵器窯跡では本来土師器A類に施されるコテミガキ痕のある製品(図50-5)が出土している。またほかの器種では、土師器甕に須恵器の口づくりがみられ(図45-1)、平行タタキ目痕のある胴部破片がみられるなど、焼成方法の異なる二つの焼き物は技術的に相互補完関係を有している。このことから、土師器・須恵器工人は互いに重複していた可能性が高く、一人の工人が同一工房内で両者を作り分けていたことが考えられる。

さて、本遺跡の土師器はB類がA類に先行して椀形化していることを指摘した。その視点で須恵器無台杯を観察すると、すべて典型的な杯形を呈している。その中には、単体で取り出せば、9世紀前半まで溯りそうな古い様相を備えた製品も含まれており、この基準に沿うと、土師器B類—土師器A類—須恵器の序列が与えられる。さらにこうした違いは、内面調整にも指摘できる。須恵器無台杯には土師器と違って、伝統的なユビナデ調整(小川：1987)が施され、この三者の様相の違いは、技術的側面を含めた磁器指向型を示す要素全体に及んでいる(図73)。

では、それらの違いはどのような背景で生まれたのだろうか。この点を、新しい様相の順に福島・宮城県下の資料で探してみる。まず、製作にもっとも手間のかからない土師器B類は、9世紀前半の生産地資料で椀形杯の出現が確認でき(高松：1985)、A類との大小関係もできあがっている。ただし、それは工人の窯場内使用什器として焼成されたもので、供給を前提としていない。このため、工人たちは消費者側の要求にとらわれず当時流行の器形や製作技術を比較的自由に製品に反映させることができたと推測される。それが9世紀中頃になると、土師器A類でも、定量の椀形杯の存在が確認できるようになり(真山：1981, 山内：1993¹⁰)、連動してコテ当て調整が普及する。したがって、この頃が土師器の本格的な磁器指向型開始の上限に位置づけられる。その基盤には、施釉陶磁器(K-90窯式期)が一部の集落へ供給されるほど普遍的な存在となっていること(小川：1987)が考えられる。最後の須恵器は、もっとも遅れ、9世紀後葉になってようやく椀形杯が消費

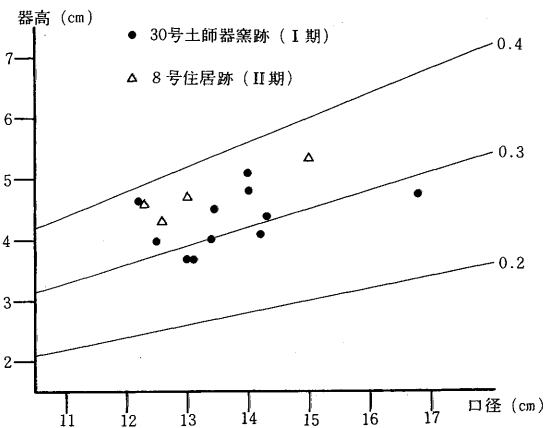
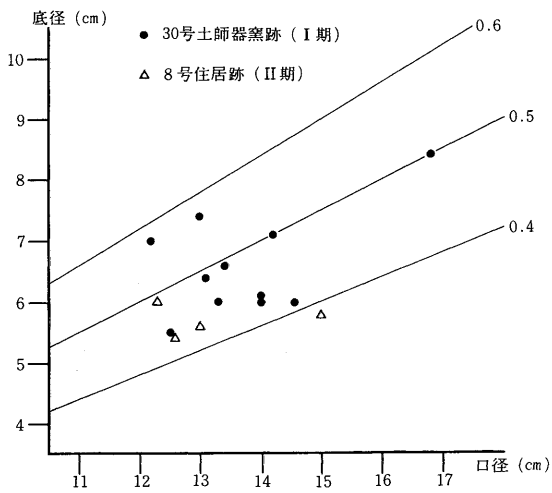
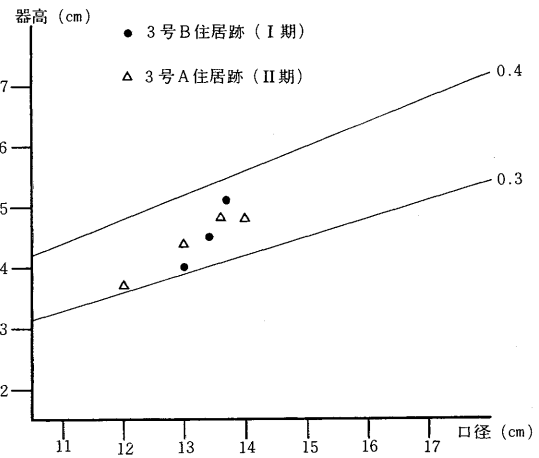
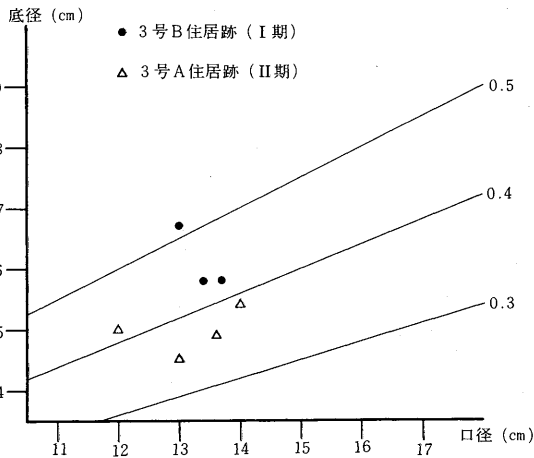
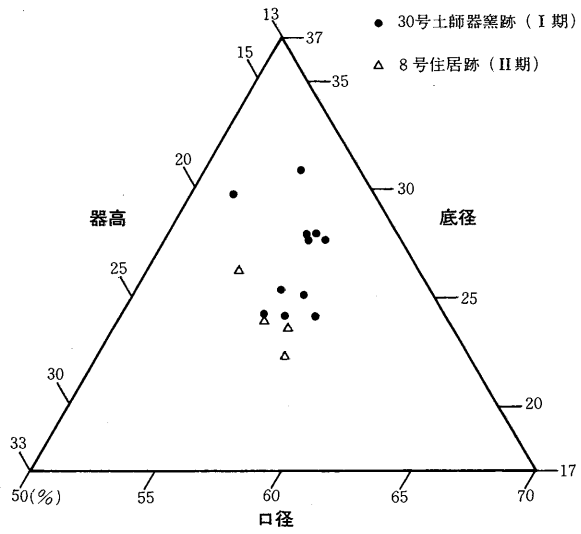
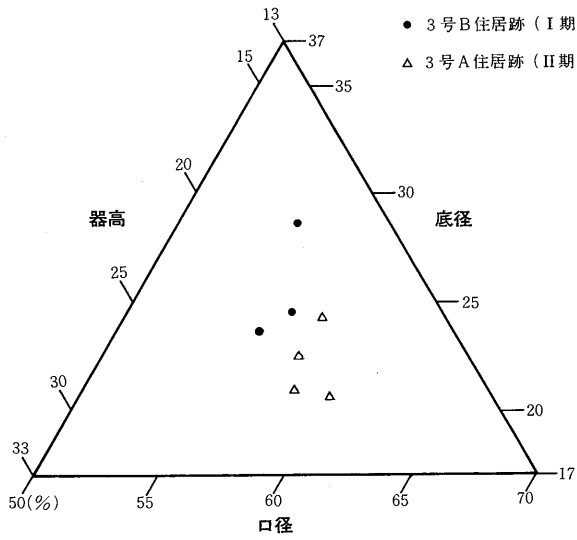


図69 I・II期における無台杯の法量比較(1)

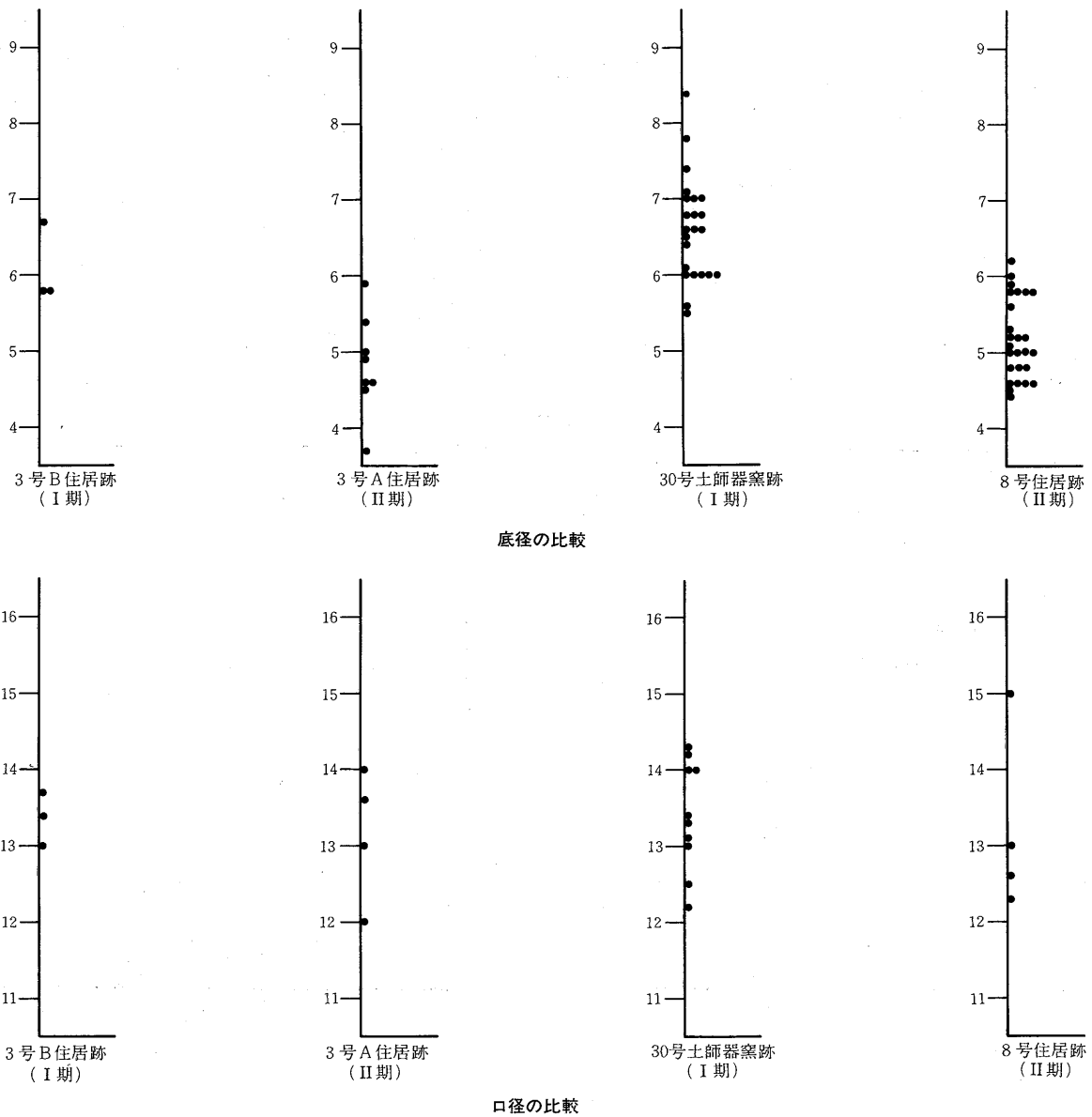


図70 I・II期における無台杯の法量の比較(2)

地で足並みを揃えてみられるようになる。しかし、まだコテ当て調整されない製品が含まれ（菅野：1996）、技術的要素の普及は必ずしも形態的要素の普及と一致しない。この現象は、製品になるまでの工程に膨大な労働投下を要するため、土師器B類とは正反対の保守的傾向をもたざるをえなかったためであろう。

以上から、大久保F遺跡I期の無台杯の様相は、磁器指向型に向かう三つの土器変化の速度差をそのまま反映しているといえる。つまり該期の内容は、こうした時間軸の流れを一つの定点で横に切った状態であるといえよう。

6. いわき地方における編年的位置付け

本遺跡の所在するいわき地方の古代土器編年に関しては、中山雅弘の論考（中山：1996）がある。

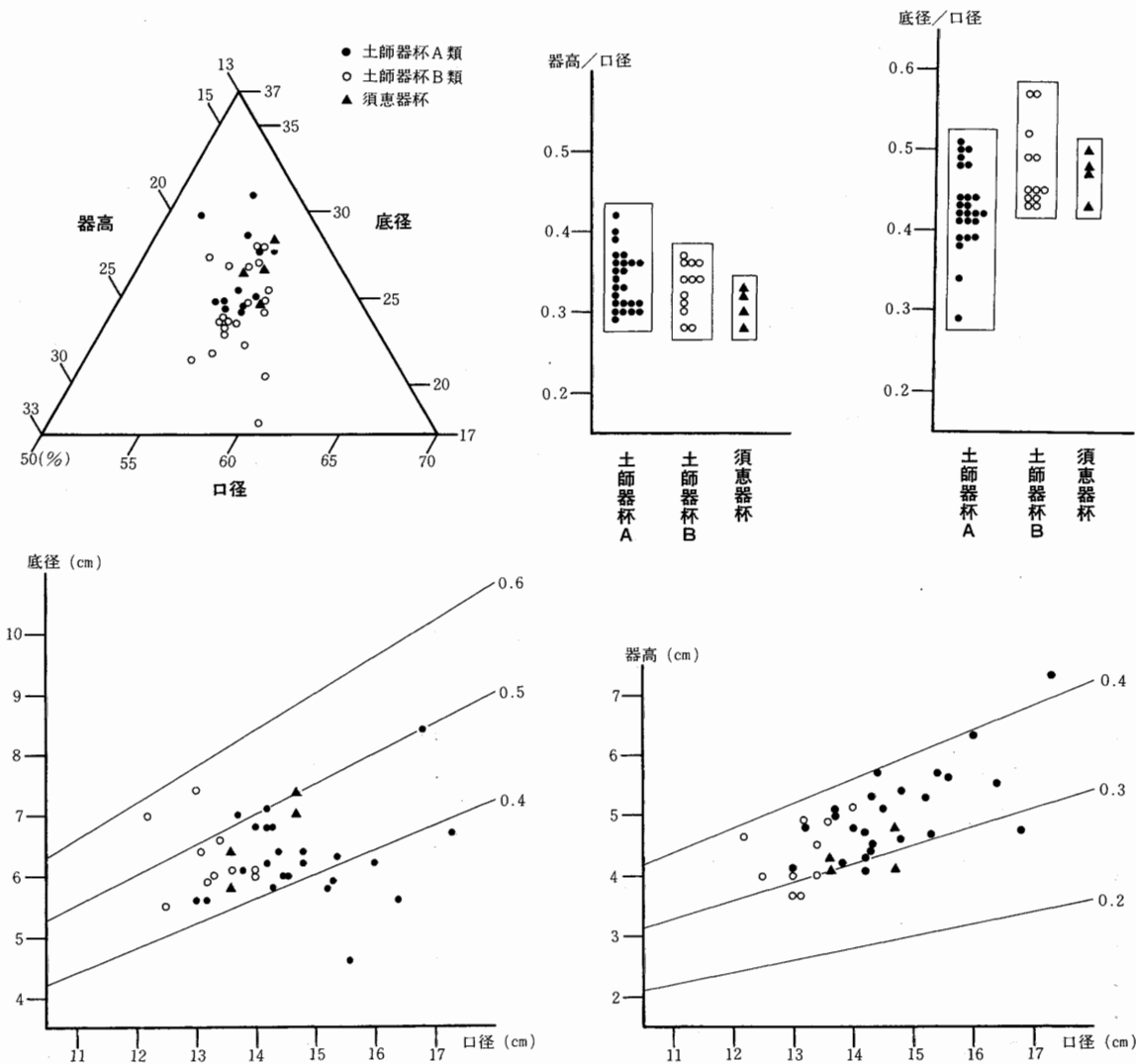
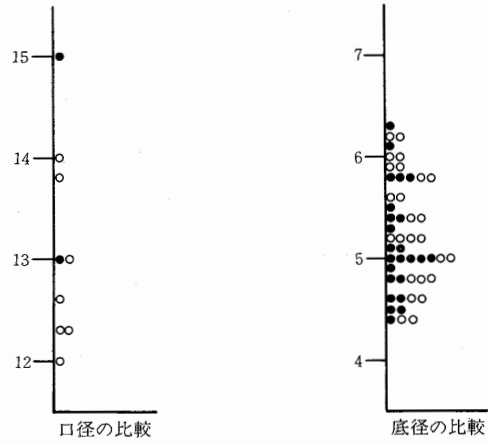
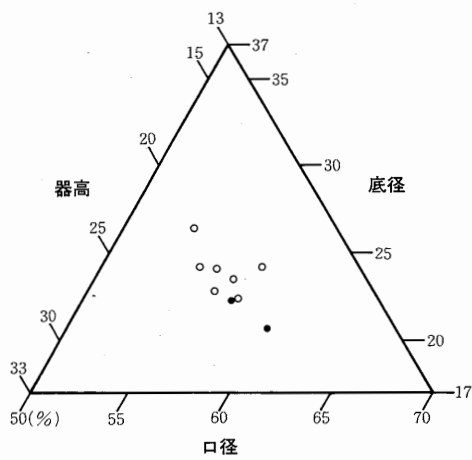


図71 I期における無台杯の法量比較

そこで、これまでの検討結果をこの私案と対比したい。

繰り返し述べたように、本遺跡の土師器群は生産の主体である無台杯の碗形化によって特徴づけられる。その視点により、まずこのタイプの無台杯が供膳の主体を占める中山編年4期・5期を、大久保F遺跡の土師器操業期間全体に対比させられる。さらに、この二つの時期は、後者から須恵器供膳形態が姿を消すことに違いがあると説明されている。このことによって、大久保F遺跡I群土器は中山編年4期、大久保F遺跡II群土器は中山編年5期の土師器群にそれぞれ併行すると見なすことが可能である。ただ、中山編年5期では、杯が基本的に再調整されず深碗が安定して組成に加わっている。したがって、本遺跡のII群土器はその範疇でも古い様相を示しているといえよう。

次いで地域性の問題に触れる。中山は、この論考のなかでいわき地方の土師器に固有な要素として二つをあげている。一つは、陸奥型甕と常総型甕の中間型式が煮炊形態の主体をなすことである。この点は、器種分類で述べたように本遺跡でも同様のことが確認できた。しかし、杯の底部切り離しが一貫して回転糸切り技法で推移するというもう一つの指摘は、当て嵌まらない。須恵器窯跡で



- 土師器A類
- 土師器B類

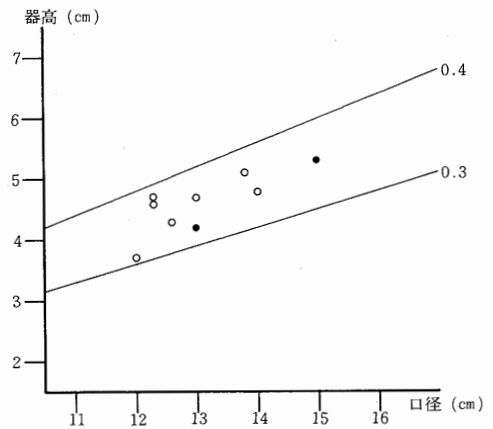
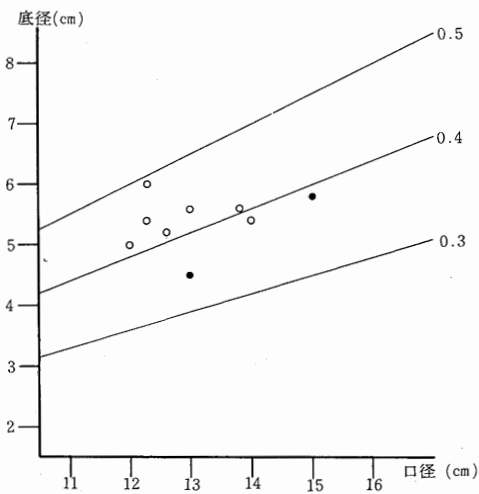


図72 II期における無台杯の法量比較

あるが、同一丘陵上の大猿田遺跡でも8世紀中頃に回転ヘラ切り技法が用いられ、いわき地方内部にいくつかの技術系譜が存在することが予測される。

7. 土師器群の実年代

遺物の考察の最後として、土師器群の実年代を検討したい。これまでの検討によって、本遺跡の土師器群には「磁器指向型」が認められ、II群土器は古代末期様式土器の当初に位置づけられることが判明した。両者は時間的に連続し、内容は単純である。したがって、本遺跡の土師器生産期間は全体としてさほど長期に及んだとは思われない。I群土器の上限は、陸奥における磁器指向型の上限という観点から最大で9世紀中頃まで溯る可能性を有しているが、こうした条件から引き下げ気味に考えるのが妥当であろう。この理解は、II期の無台杯の特徴が、実年代推定作業の進んでいる多賀城周辺の年代尺度（村田：1995・柳沢：1991_冊）をあてがうと、灰白色火山灰（山田：1990）に絡む10世紀前半の古い段階に位置づけることができることと整合する。






	土 師 器 A 類	土 師 器 B 類	須 恵 器
I 期	 <p>杯形 回転ヘラ切り コテ当て</p>	 <p>碗形 回転ヘラ切り コテ当て</p>	 <p>杯形 回転ヘラ切り ユビナデ</p>
II 期	 <p>碗形 回転糸切り コテ当て</p>	 <p>碗形 回転糸切り コテ当て</p>	消 滅

図73 無台杯変遷模式図

この見通しを別の器種から検証する。I期の3号B住居跡には、長頸瓶が伴出している。その資料（図12-10）は、断面三角形の特徴的な高台部を有しており、小型品とはいえつくりは丁寧で、同時期の須恵器を忠実に真似たとみて間違いない。そこで、この特徴から類例を探し求めると、大戸窯跡群・猪倉B遺跡・大鳥城跡・成田前窯跡・須江窯跡群など福島・宮城県内に安定した分布が認められる。そこで、もっとも整備された陸奥最大の大戸窯跡群編年に対比すると、9世紀後葉～末葉のKA-107段階に比定することができる。既述したように、本遺跡ではこの段階の須恵器長頸瓶がII期の3号B住居跡でも伴出（図10-7）している。また、直続するKA-112段階の広口瓶（図63-17）が遺構外から出土しており、本遺跡の瓶類生産は、長頸瓶の最終期から広口瓶の出現期にまたがる頃であることがわかる。このことは、無台杯から導き出された年代観を裏づける結果となり、9世紀末から10世紀初頭の比較的限定した期間内に本遺跡の操業期間が収まることを示している。

以上の検討から、本遺跡の土師器群には次の年代観が与えられよう。

I 群土器……………9世紀第4四半期

II 群土器……………10世紀第1四半期

そのようにみると、I期生産の無台杯の状況は、本遺跡の工人集団が相対的に保守的であったことを示している。(菅原)

第2節 遺 構

本節では視点を遺構に移し、遺跡の構造と変遷を復元するための前提条件を整えたい。対象とするのは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・須恵器窯跡・土師器窯跡・木炭窯跡である。作業手順は、まずはじめに各遺構を時期別に振り分け、次いでそれぞれの特徴をまとめ、時期による相違や窯場内

で果たした役割などを検討したい。

1. 遺構の帰属時期

遺構の時期推定方法は、出土遺物と切り合い関係、さらに周辺遺構との関係を勘案して行った。得られた結果は、以下のようにまとめられる。

[I期]

竪穴住居跡……1号・2号・3号B・4号B・5号B・7号・9号・10号

掘立柱建物跡…1号溝跡内部建物

須恵器窯跡……4号+1基（5号もしくは31号）

土師器窯跡……1号・2号・6号・12号・15号・17号・23号・30号・32号

木炭窯跡……8号

[II期]

竪穴住居跡……3号A・4号A・5号A・6号・8号

掘立柱建物跡…1号建物跡

須恵器窯跡……1基（5号もしくは31号）

土師器窯跡……3号・13号・14号・16号・20号・24～28号・33号・35号・36号

木炭窯跡……9号

[不明]

土師器窯跡……7号・18号・19号・21号・22号・29号・34号・37号

木炭窯跡……10号・11号

2. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は10軒検出された。そのうち3軒で建て替えが行われ、それを単独住居と見なすと総数は13軒である。時期別には、うえて示したようにI期の8軒に対して、II期は5軒となり数が減少する。平面形は長方形基調の多いのが特徴である。ただし、ほかに9号住居跡の正方形基調や7号住居跡の台形基調が含まれ、強い規則性はない。柱位置は不明確で、貯蔵穴は2軒だけに認められた。この簡易な構造は、併行期の一般集落の竪穴住居跡に近似する。このほか、生産地遺跡に特有なロクロピットが9軒の住居跡で検出されたのが注目される。また2軒に白色粘土の集積がみられた。さて、本遺跡のように窯場内に営まれた「竪穴住居跡」は、上述のロクロピットの有無で工房か住居かに性格を区別するのが通例である。しかし、両者に平面分布のすみ分けはなく、それをもたない住居跡にも土師器窯跡との有機的関連が認められる（4B住+6窯、6住+3窯）。また、それらには例外なくカマドが備わっており、作業内容の違いはあれ、どれも工房機能を備えた居住施設と理解するのが妥当と考える。ほかに比べて格段に掘り込みが深い6号住居跡でも、敲打痕のある握り槌状の石製道具が出土しており、内部で粘土素地製作が行われた可能性が指摘できる。ただ、II期の住居跡ではロクロピットの検出数が1個と少ないことから、可動式回転道具（仲田：1995）を多用するなど土器製作方法に変化が生じた可能性が考えられる。

3. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、1号建物跡と1号溝跡内部に想定される2棟がある。両者の関係は、同時存在ではなく、前者がⅠ期、後者がその機能を引き継いで営まれたⅡ期の施設とみられる。したがって、時期ごとに振り分けると、本遺跡の掘立柱建物跡は単独存在となる。

窯場に伴う当該遺構については、渡辺一が埼玉県鳩山窯跡群の豊富な資料を分析（渡辺：1992・1994）するなかで、「管理型」という概念規定を提示している。県内では仲田茂司がその業績を踏まえて広網遺跡を分析（仲田：1994）し、A群に伴う6棟のまとまりを土器製作の指導と製品の管理にあたった官掌者の居宅と推測している。本遺跡は後述するように均質な5世帯からなっており、いくつもの「住居群」（渡辺：1992）で編成される広網遺跡にくらべ小規模である。さらに、建物跡は1棟のみであり、官掌者の居宅としての機能を想定することは困難と思われる。ここでは、構造の判明する1号建物跡が3間×3間の総柱構造をとることを重視して、各世帯に共有された倉庫と考えたい。具体的には、南多摩窯跡群で復元された（服部：1981・1982）、土器の乾燥・収納の場と推定する。

（菅原）

4. 須恵器窯跡

前項の須恵器の検討により、本遺跡の須恵器窯跡3基は、9世紀後葉～10世紀前葉に操業されたことを述べた。この時期幅のなかで近隣地域の須恵器窯の類例を求め、窯構造からみた須恵器生産技術の系譜を推定する。いわき市域（古代石城・菊多郡域）では、須恵器窯跡の発掘調査例が少なく、窯体を比較する材料がほとんどない。したがって、県内外のほかの地域の須恵器の製作技法や焼成器種が類似する窯跡を比較の対象としたい。

4号須恵器窯跡を特徴づける大きな特徴は、窯尻に認められた段である。この段は本県では大戸窯跡群の窯体に特徴的な施設として「局部有段」の名称で呼ばれている。大戸窯ではこの施設の類例に茨城県水戸市木葉下窯跡群（根本^他：1983）や静岡県湖西市の湖西窯跡群（後藤：1989）を挙げている。このうち、木葉下窯では杯の切り離し技法が回転ヘラ切りであること、いわゆる稜椀が有台杯の主体であることなど、大戸窯との関連性は考えられるものの、本窯とは時期的な開きがある。しかし、本遺跡でも焼成している稜椀形の有台杯は、いわき市域では出土頻度が高い。このことから、木葉下窯などの常陸地域の築窯技術や焼成技術と無関係ではないと思われる。湖西窯は当該時期では須恵器の製作技法に直接的な影響を当地域で認められないが、湖西窯Ⅴ期以降、窯体の小型化が認められる。Ⅵ期に出現するG式は、規模といい、窯尻の段といい、本窯跡の特徴に類似している。湖西窯Ⅵ期の年代は9世紀前半とされている。同様な窯体規模の縮小は大戸窯にも認められ、9世紀中葉のMH19窯跡は全長6.5mあるのにKA102窯跡は5.2mと小さくなっている。猪ノ倉B遺跡の須恵器窯跡も全長4.0mで、9世紀末葉頃の窯構造は縮小の傾向にあることが興味深い。

（石本）

5. 土師器窯跡

須恵器窯跡と違って、構造が単純な土師器窯跡は、まだ十分に東北地方の調査者間で認知されて

いないのが実情と思われる。しかし、すでに陸奥国内だけで13遺跡80基以上の資料が蓄積されており、東国全体では1,000基を上回っていることが集成作業であきらかにされている（窯跡研究会：1995）。こうした状況から、もはや、古代の土師器生産に定型化した焼成施設＝窯を伴うことは動かし難い。確かに、古代全般の主体的位置を占める土器としては、まだその検出数が少なすぎるといふ基本的な問題は解決されていない。しかし、最近では、須恵器生産地遺跡を面的に調査すれば、それとともにほぼ例外なく土師器窯跡が検出されている（古川：1993、佐藤：1995、能登谷：1996）。また、前述の観点でこれまで報告された焼土坑を再吟味すれば、相当数の土師器窯跡が抽出できると思われる。この大前提に立って記述を進めたい。

本遺跡では30基の土師器窯跡が検出された。前章では、遺存状況の良好な26基を3類型に分類した。それらは、類型の違いで焼成器種やA類・B類の比率に違いはない。以下に、出土遺物と切り合い関係から時期別に整理する。

〔I期〕 I類：1号・2号・12号・15号・17号・23号・30号

II類：32号

III類：なし

〔II期〕 I類：14号・16号・

II類：3号・13号・20号・21号・27号・28号・36号

III類：24号～26号・33号・35号

〔不明〕 I類：6号・7号・18号・29号・34号

II類：22号

III類：なし

うえの結果を要約すると、I類とII類は2時期にまたがり、系譜の違う窯は同一時期に共存している。ただ、その比率には変化がみられ、I類が減り、逆にII類が増えている。また、I類のなかでも灰原を形成するAタイプはI期にしか存在しない。それに加えてII期には新しくIII類が出現し、全体の半数近くを占めるようになる。

窯道具は操業期間全体を通じてみられ、粘土塊焼き台のI類が普遍的に使用される。I期の30号土師器窯跡では、そのタイプの焼き台に杯A類の付着した資料が1点認められ、供膳形態に使用されたことが窺える。同じく30号土師器窯跡出土の杯形焼き台II類は、須恵器窯の所見から大型器種に用いられたと推定される。しかし、わずか1点の出土であり、使用するのは稀であったらしい。

（菅原）

6. 木炭窯跡

本遺跡では3基の木炭窯跡を検出した。このうちもっともよく遺存していた遺構が12号木炭窯跡である。隅丸長方形の土坑状の木炭窯跡は、県内でもわずかながら類例がある。もっとも近い例は、昨年度調査した馬場A遺跡・駒込遺跡で検出されている。両遺跡の報文では、駒込例で近代の磁器破片が出土していることもあり、近世以降の所産と位置づけている。しかし、他地域の類例で

は古代に遡るものも認められる。当該木炭窯跡については、各地で「焼成土壌」（神崎：1987）、「窯状遺構」（水谷：1987）、「焼土壌」（百瀬：1988）、「炭溜り土壌」（村尾：1991）、「坑内製炭遺構」（村田：1991）などの名称で呼ばれ、関西地方を中心に論考も多い。このうち水谷は篠窯跡群に伴う当該遺構を「土器焼成の燃料に使用するための木炭窯」としている。一方、神崎は神戸市の当該遺構を集成し、製炭窯であるとしながらも「土器の燃料」説は比定している。村尾は兵庫県内の当該遺構を分類し、本遺跡のような短辺の一方に張り出しがあり、底面に溝を持つ類型をA-6としている。そして、このようなタイプを「伏せ焼き窯」と考察している。以上の類例と論考から、本遺跡の木炭窯跡も「伏せ焼き」タイプと考える。所属時期については、本遺跡で中世以降の遺構・遺物がないので、本集落の存続期間の範疇に含めておきたい。（石本）

第3節 遺跡の構造と変遷

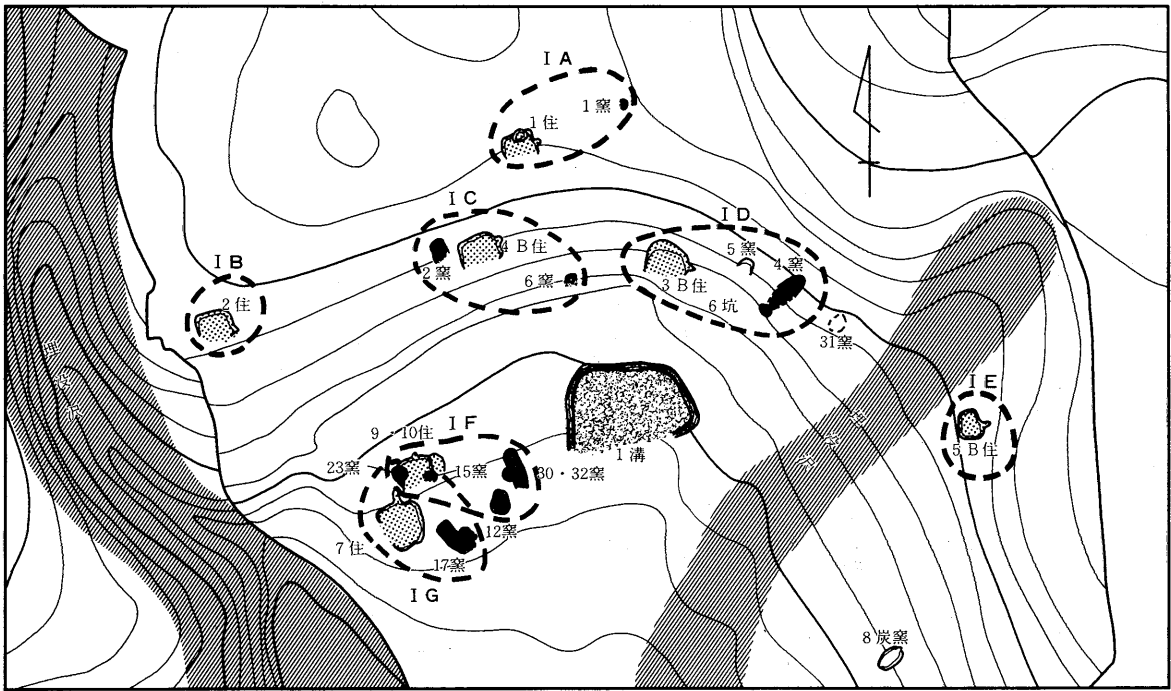
今回の調査では、派生的に分布する関連施設を含めて一つの窯場の広がりほぼ完全な状態でとらえられた。遺跡範囲のすぐ東側では昭和20年代まで陶土が採掘されており、こうした恵まれた立地条件が本遺跡の経営につながったと推測される。以下、構造と変遷を復元していく。

1. I 期（図74上段）

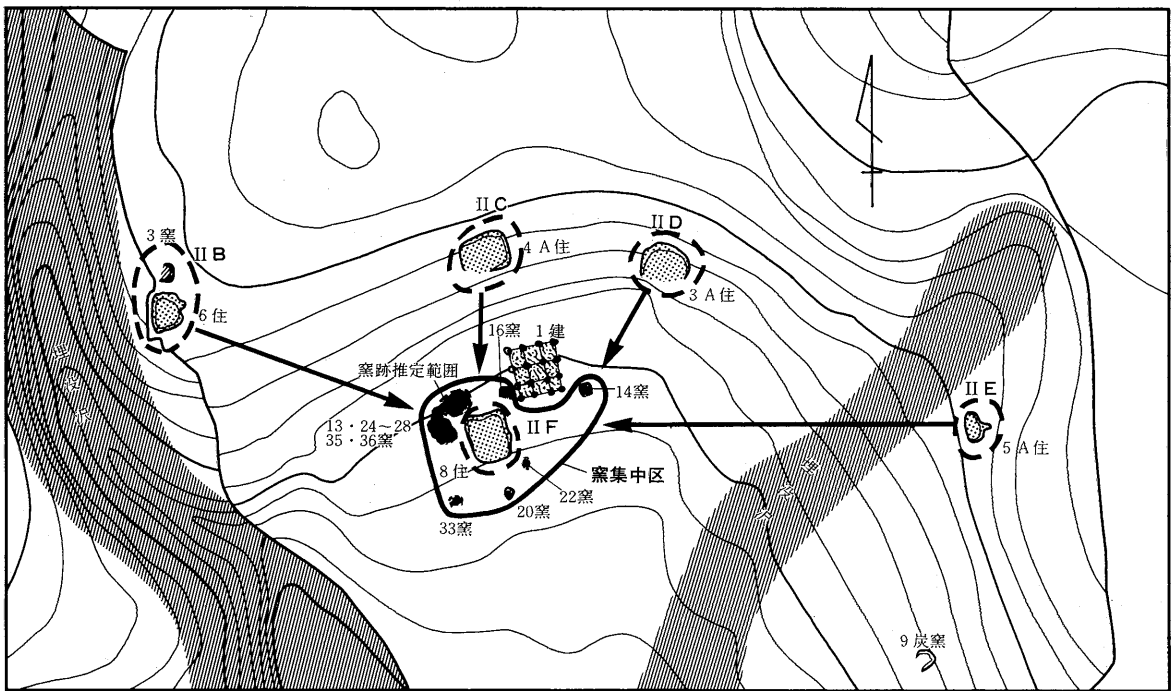
I 期は、小型器種に回転ヘラ切り技法を伴った段階である。年代は9世紀第4四半期に位置づけられ、供膳形態に旧来型の杯形杯を残す。当該期の窯場は、住居1軒に対して1～3基の土師器窯が伴う7つのまとまり（IA～IG）を核に、須恵器窯2基、木炭窯1基、倉庫1棟が加わって構成される。このことは、本遺跡が世帯単位で行われた土師器生産を基盤に据えて経営されていたことを示す。それと併行して行われる須恵器生産は、土師器生産との窯の設営場所をすみ分けしており、後続時期を含めて1か所に固まっている。ただ、4号須恵器窯跡は最終時に土師器窯に転用され、工房はIDないしIEで土師器製作と共有されていた可能性が指摘できる。

ところで、検出された住居数は該期に営まれた当該遺構の累積数であり、すべてが同時存在していたわけではない。そこで整理を行うと、エリアが重なり合うIFとIGは、切り合い関係からIF（10住→9住）→IG（8住）の変遷が与えられる。これは、I期内部で同一世帯が移動した結果ととらえることができる。それに対して、急斜面上の4軒は一定の間隔をあけており、それぞれ別世帯と理解するのが妥当である。たやすく新しい住居を構築できない立地条件が、IF・IGとの違いになったと考える。このことから、該期の土器生産には、6世帯の工人集団が携わっていたと推定する。その各世帯で所有した土師器窯は主にI類であり、IFではそれにII類が一緒になって営まれている。共有された倉庫は周囲に溝が巡らされており、平地式と推定される。

以上の構成内容を示す該期の窯場には、広網遺跡のような官掌者の居宅はなく複数の住居群（渡辺一：1992・1994）も構成しない。したがって、まだ比較材料に乏しいが、現時点では本遺跡を中規模クラスの土師器専門窯場と位置づけておきたい。



〔I期〕



〔II期〕

図74 I・II期における工房・倉庫・窯の関係

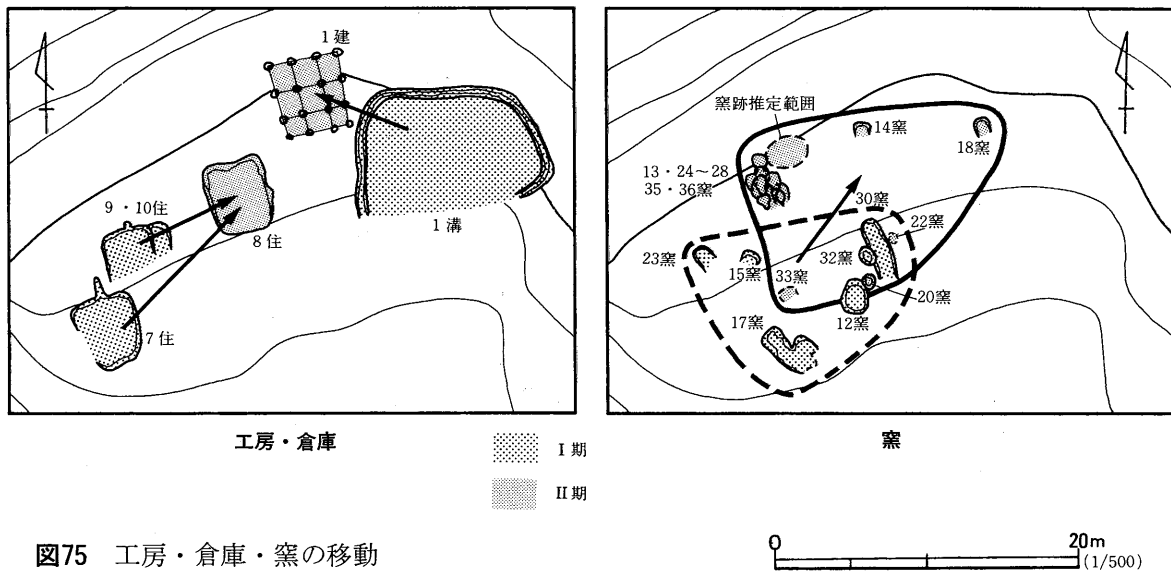


図75 工房・倉庫・窯の移動

2. II 期 (図74下段)

II期は、回転糸切り技法を導入することで大きく技術転換した段階である。年代は10世紀第1四半期に位置づけられ、供膳形態から杯形杯が姿を消し、瓷器系の椀形杯に集約される。

該期の窯場はI期の基本的な構成を引き継ぎながら、土器製作に関わる施設はすべて新しく構築される。ただし、生産の単位である世帯は1つ (I A) 姿を消す。急傾斜地に営まれた3軒の住居は、同一地点で建て替えられ (3 A 住～5 A 住)、比較的傾斜の緩い場所の住居は、斜面上に少し位置をずらしている (6 住・8 住)。こうした標高の高い位置に場を求める傾向は、図75に示すように他の施設にも認められる。土師器窯は、I類が減少してIII類が新しく加わる。また倉庫は、掘込みの深い柱穴となり、3間×3間の総柱構造となる。

該期をもっとも特徴づけるのは、住居 (工房) から土師器窯が離れてしまうことである。また、須恵器生産は供膳形態が焼成されなくなり、窯数も1基に減る。土師器窯は実線で囲んだ丘陵裾部に集められ、製品はここで一括焼成される。窯跡推定範囲とした箇所は、約3.0m×2.5mの広さで岩盤が焼けており、少なくとも10基以上がここで操業していたと推定される。それをたせば、II期とI期との窯数の格差は解消でき、I期とほぼ同数の窯がこの狭い範囲で集約的に営まれていたことになる。関連して注目されるのは、ロクロピットのある住居がそのエリア内の8号住居跡1軒だけになることで、工房間の機能が分化したと考えられる。先述した可動式回転道具の多用が行われ、非可動式回転道具との間で生産器種の区別が行われたことが想定される。

ただ、こうした変化は、本遺跡より後出的内容をもつ瀬谷子窯跡でI期型の生産体制をまだ維持しており、その原因は本遺跡固有の地形的制約のなかにあると考えたい。つまり、急斜面に窯を構築するより、緩傾斜の広い空間で集約的に焼成作業を行なったほうが効率よいと判断されたためと理解しておく。

(菅原)

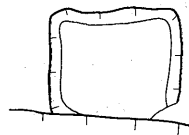
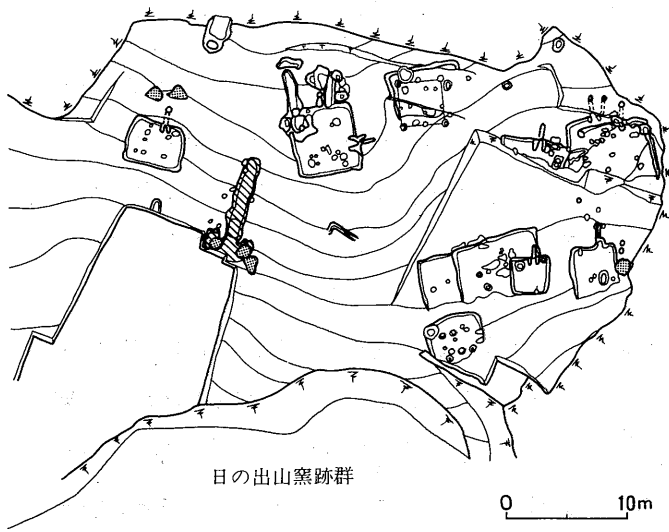
第4節 古代陸奥における土師器生産と大久保F遺跡

古代陸奥の土師器生産は、古墳時代までの開放状態で焼く焼成方法から、窯を用いた焼成方法に変化し、生産体制も組織だったものに再編されることが判明している。しかし、まだ資料の蓄積は乏しく、検討課題を多く積み残している。今回の大久保F遺跡の発見は、窯跡だけでなく、工房・倉庫・木炭窯など関連施設が一体となった生産集落跡のほぼ全容がとらえられ、この方面の研究に対する貴重な成果を上げることができた。以下では、まず既存資料をもとに古代陸奥の土師器生産をⅠ期とⅡ期に分けて整理を行い、その中に本遺跡の土師器生産活動を位置づける。ついで、その成果を踏まえた上で、本遺跡の経営主体を推定したい。

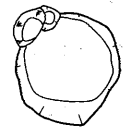
1. 陸奥Ⅰ期の土師器生産 (図76上段)

該期は古代陸奥の土師器生産における窯導入段階である。上限は多賀城造営期の8世紀前半までは確実に溯り、下限は国分寺造営期の8世紀中頃に求めることができる。東国各地では、7世紀末～8世紀初頭に足並みを揃えて土師器窯が導入されることから、陸奥の上限もさらに溯る可能性がある。それを具体的に示す資料として、8世紀初頭に比定される宮城県長根窯跡の須恵器窯跡周辺で検出された3基の焼土遺構があげられる(瀧口：1982)。その二等辺三角形を呈する特徴的な平面形態は、同時期に生産のピークを迎える伊勢湾沿岸の土師器窯(上村：1994)と類似しており、ここでは陸奥における土師器窯の需要が周辺地域と横並びであった蓋然性の高いことを指摘しておきたい。該期は、須恵器生産に従属した零細な生産が須恵器窯場内で行われるのが特徴で、宮城県日の出山窯跡群C地点西部(古川：1993)と同県柞江遺跡(瀧口：1981)がその好例である。また、福島市台畑遺跡(斉藤：1995)では集落内に営まれた土師器窯跡が1基検出されているが、やはり、これにも近接して同時期の須恵器窯跡が1基あり、両者の不可分の関係がここでも例外なく認められる。該期におけるこうした須恵器生産との密接な関係は、土器自体の特徴にも反映しており、この新出の土師器は、須恵器の技術で製作され、それと同一形態を有する「ロクロ土師器」である。それらは、同時期の消費地からまったく出土しないので、この段階は、須恵器工人が自給用の食器生産のみを行ったものと理解できる。後続期と違い、小型器種のほとんどすべてが製作の簡単なB類なのは、このためであろう。

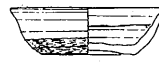
この導入期の土師器窯は、本遺跡分類のⅠ類とⅡ類からなっている。この2類型の共存状況は、併行期の関東地方にも認められ、円形基調のⅡ類を含まない日本海側との間に地域性の違いが指摘できる。また、長根窯跡の焼土遺構が土師器窯跡で良いとすれば、上述のように東海地方との関連が指摘でき、導入当初の段階には遠隔地との直接的な結び付きがあったことも考慮に入れなければならない。このような、新技術の伝播に官の力が背後に働いたことは明らかで、日の出山窯跡群と柞江遺跡が古代陸奥を代表する国府直営窯であることは、そのことを具体的に示している。



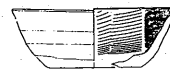
土師器窯跡I類



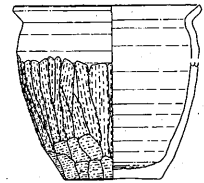
土師器窯跡II類



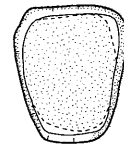
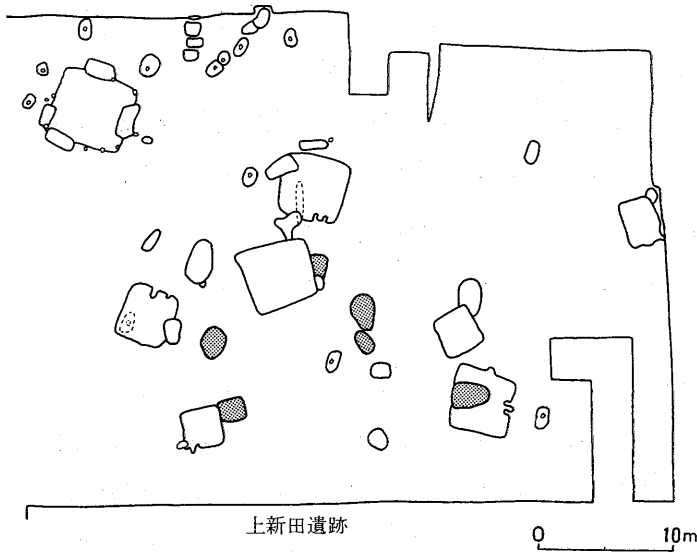
土師器B類



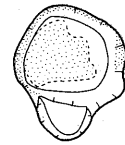
土師器A類



[I期]



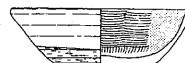
土師器窯跡I類



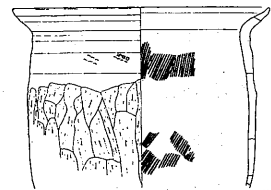
土師器窯跡II類



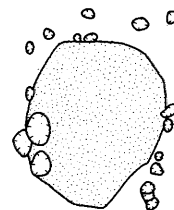
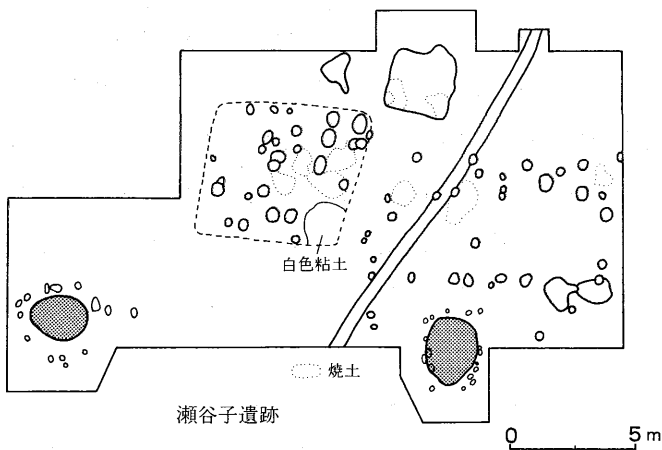
土師器B類



土師器A類



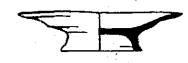
[II期前半]



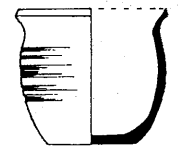
土師器窯跡III類



土師器B類



土師器B類



[II期後半]



図76 古代陸奥の土師器生産遺跡

2. 陸奥Ⅱ期の土師器生産

陸奥Ⅱ期はロクロ土師器が消費地需要の全体を担う時期である。その基盤には、須恵器生産から独立した土師器専門の生産遺跡の出現と展開がある。当初段階の状況を見ると、窯の類型構成は須恵器生産地で生まれたⅠ期の内容を受け継いでおり、製品の特徴も前と一致する。このことから、ロクロ土師器製作の経験をもつ須恵器工人が一部土師器生産へと流出し、それに彼等からロクロ技術伝習を受けた工人が新しく加わることで生産組織の再編・強化が行われたと考えられる。

本章の冒頭で述べたように、こうした生産遺跡の分布は陸奥全域に及んでおり、これまでに岩手県で瀬谷子遺跡、宮城県で上新田遺跡、福島県で広網遺跡が発見されている。それらの経営はⅠ期と同じ官直営方式が瀬谷子遺跡にみられる一方、重要なのは、広網遺跡に代表される私的経営がもう一方で行われている（仲田：1995）ことである。操業形態は共通して居住・工房施設である竪穴住居の回りに土師器窯が1～3基営まれることに特徴があり、製作から焼成までの一連の工程はすべて世帯単位で行われる。この点に、居住・工房域と窯がすみ分けし、工人集落全体で窯を共同所有する須恵器生産との違いが指摘できる。また、該期の在り方として、土師器生産が同一遺跡内で他部門の手工業生産と競合するタイプ（橋本：1985、能登谷：1996）や、集落内に土師器窯が単独で営まれるタイプ（斎藤：1996^㉓）が認められる。しかし、前者に関しては、北陸地方のように一般消費地への供給を目的とした集約的生産が行われた様子（望月：1994）は窺えない。またBも、その生産力は低いものであったと考えられる（仲田：1995）。したがって、それらはあくまで当時の土師器生産の中では客体的なものにとらえられる。

次に各遺跡の操業期間を整理する。広網遺跡が8世紀後半～9世紀中葉、上新田遺跡が9世紀初頭、瀬谷子遺跡が10世紀前半であり、とくに操業の継続性と窯場規模の大きさという点で広網遺跡は傑出している。そのなかに本遺跡を位置づけると、年代的に広網遺跡の終末段階と瀬谷子遺跡の間を埋め、従属的な須恵器生産をなかに取り込んでいるという点で広網遺跡と近似する。ところで、こうした生産体制は関東地方の状況を参考にすると11世紀中頃まで存続したと推定される。この間には10世紀初頭を画期として古代末期様式への生産器種の変化が認められるが、その画期以後に操業した瀬谷子遺跡の状況を見ると、窯の類型構成がⅢ類主体になり、焼成方法にも変化の起きたことが窺える。そこで、これを指標として陸奥Ⅱ期の土師器生産を前半と後半に分けたい。その視点で本遺跡の変遷をとらえ直すと、大久保F遺跡Ⅰ期は陸奥Ⅱ期前半の最終段階に、大久保FⅡ期は陸奥Ⅱ期後半の当初段階に比定できる。したがって、本遺跡は須恵器生産の衰退という点を含め、古代陸奥の土器生産の転換期の様相を一生産遺跡の中で体現しているといえよう。

3. 大久保F遺跡の経営主体とその意義

最後に、大久保F遺跡の経営主体を検討したい。本遺跡の生産器種でもっとも重要なのは、須恵器水瓶を含めた仏具類である。とくに香炉・香炉蓋は、これまで国府・郡衙・寺院などのごく限られた遺跡で東海・畿内産の多彩陶器製品10点程度が出土しているに過ぎない。それに対して本遺跡の製品は、土師器製の稚拙なつくりであり、そのような官や有力寺院からの要請に応じて焼成され

たものでないことは明らかである。こうしたことから、本遺跡に製品を発注したのは、より階層の低いレベルが想定される。そこで、この視点から陸奥国内の資料を検索してみると、郡山市正直C遺跡V地点で土師器製の香炉蓋が出土しているのが注目される。この遺跡は8世紀前半に開村する典型的な開拓集落であり、9世紀前半のそのなかにコの字型配置の官衙風の掘立柱建物跡群が出現する。筆者はこの一画を私出挙経営によって成長した富豪層の居宅跡と推定しているが、香炉蓋はその建物群の出土である。結論からいえば、本遺跡を経営していたのはこのような在地有力者ではなかったろうか。本遺跡の所在する仁井田川北岸の丘陵上には、9世紀中頃から比較的緩慢な規制の中で小規模な私的手工業生産が行われたことが指摘されており（安田：1996）、こうした背景が本遺跡の成立となったのであろう。おそらく、9世紀代の陸奥では、該種の土師器が消費地需要の大部分を担っていたと考えられる。少ない労働力で生産可能な土師器の特性は、須恵器にくらべて経営者の底辺を押し広げるのに有効に働いたに違いない。その点では上述したように、広網遺跡も同様の私的経営であるが、本遺跡の規模はそれよりはるかに小さく、両者の差は在地社会における経営者の政治力の違いを直接反映していると思われる。仲田茂司は、該期の主力を担う土師器生産に大規模経営と小規模経営の2タイプを想定しているが、本遺跡は後者に該当すると思われる。したがって、本遺跡の製品の供給範囲は経営者の居住地を含めた一般集落が主な対象であり、当時の行政単位でいえば郷より狭いものが想定されよう。今後は、消費地資料の分析を通じてこの仮説をより確実なものにして行くことが重要と考える。（菅原）

註1 福島大学真鍋健一教授の指導で実験を行った。

註2 集計に際して、出土状況の不安定なものは除外した。逆に、実測外遺物でも確実に遺構に伴うものは数に加えた。

引用・参考文献

- 草間俊一 1971 『岩手県江刺市瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告』 江刺市教育委員会
 栗原文蔵 1972 『水深』 埼玉県遺跡調査会
 桑原滋郎 1976 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
 小笠原好彦 1976 「東北地方における平安時代の二、三の問題」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
 小井川和夫 1981 「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』 宮城県教育委員会
 瀧口 卓 1981 「宮城県仙台市榊江遺跡発見の焼土遺構について」『陸奥官窯跡群』IV 古窯研究会
 真山 悟 1981 「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』V 宮城県教育委員会
 服部敬史 1981 『南多摩窯跡群』
 服部敬史 1982 「東京都八王子市大法寺遺跡の調査—平安時代の須恵器工房址に関する予察—」『神奈川考古』第13号
 根本康弘他 1983 「木葉下遺跡 I（窯跡）」『常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6』（財）茨城県教育財団

第3編 大久保F遺跡

- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相—瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として」『研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 小井川和夫 1984 「いわゆる赤焼土器について」『研究紀要』第10巻 東北歴史資料館
- 高松俊夫 1985 『広網遺跡発掘調査概報』 (財) 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 小川淳一 1987 『五本松窯跡群』 仙台市教育委員会
- 神崎 勝 1987 「焼成土壌について」『神出』 妙見山麓遺跡調査会
- 水谷寿克 1987 「窯跡付帯の焼土壌について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 百瀬久雄 1988 「焼土壌について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2 長野県教育委員会 (財) 長野県埋蔵文化財センター
- 久保田正寿 1989 『土器の焼成1』 クオリ
- 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 服部実喜 1990 「黒色土器—展開とその終焉」『東国土器研究』3 東国土器研究会
- 山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ “十和田—大湯浮石” の同定」『第四紀研究』第29巻第2号
- 村尾政人 1991 「炭溜り土壌について」『淡神文化財ニュース』第13号
- 村田文夫 1991 「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55 物質文化研究会
- 柳沢和明 1992 「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 宮城県多賀城跡調査研究所
- 田中広明 1992 「郡家造営事始め」『研究紀要』第9号 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古川一明 1993 『日の出山窯跡群—詳細分布調査とC地点西部発掘調査—』 色麻町教育委員会
- 山内幹夫 1994 「正直C遺跡V地点」『母畑地区遺跡発掘調査報告36』 (財) 福島県文化センター
- 石田明夫 1994 『会津大戸窯—大戸古窯跡群発掘調査報告書—遺構編』 会津若松市教育委員会
- 仲田茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の需要とその背景」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会
- 秋山浩三 1994 「キズモノの土器—古代土師器の黒斑への視点と流通—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』Ⅱ (財) 大阪府埋蔵文化財協会
- 佐藤敏幸 1994 『須江窯跡群関ノ入遺跡』 河南町教育委員会
- 石田明夫 1994 『会津大戸窯 大戸窯跡群発掘調査報告書—遺物編』 会津若松市教育委員会
- 渡辺 一 1994 「須恵器作りのムラー工人集落の歴史的な性格—」『古代東国の民衆と社会』 名著出版
- 飯村 均 1994 「平安時代の鉄製煮炊具」『しのぶ考古』10 しのぶ考古学会
- 斉藤義弘 1995 『勝口前畑遺跡3』 (財) 福島市振興公社
- 窯跡研究会 1995 『古代の土師器焼成遺構について』 窯跡研究会
- 福田健司 1995 「在地産土器の編年と問題点—山茶碗・瓦器・須恵系土師質土器—」『王朝の考古学』 雄山閣出版
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』36号 福島県考古学会
- 渡辺 一 1995 「工房・工人集落・古代村落と女性」『歴史評論』NO.538 歴史科学評議会
- 中山雅弘 1996 「古代常磐地方における土器様相」『物質文化』
- 安田 稔 1996 「タタラ山遺跡(第2次)」『常磐自動車道遺跡調査報告9』 (財) 福島県文化センター

第1編 馬場^ば場^ばB遺跡



1 遺跡全景（東から）



2 遺跡全景（西から）



3 1号木炭窯跡（北から）



4 1号溝跡（西から）

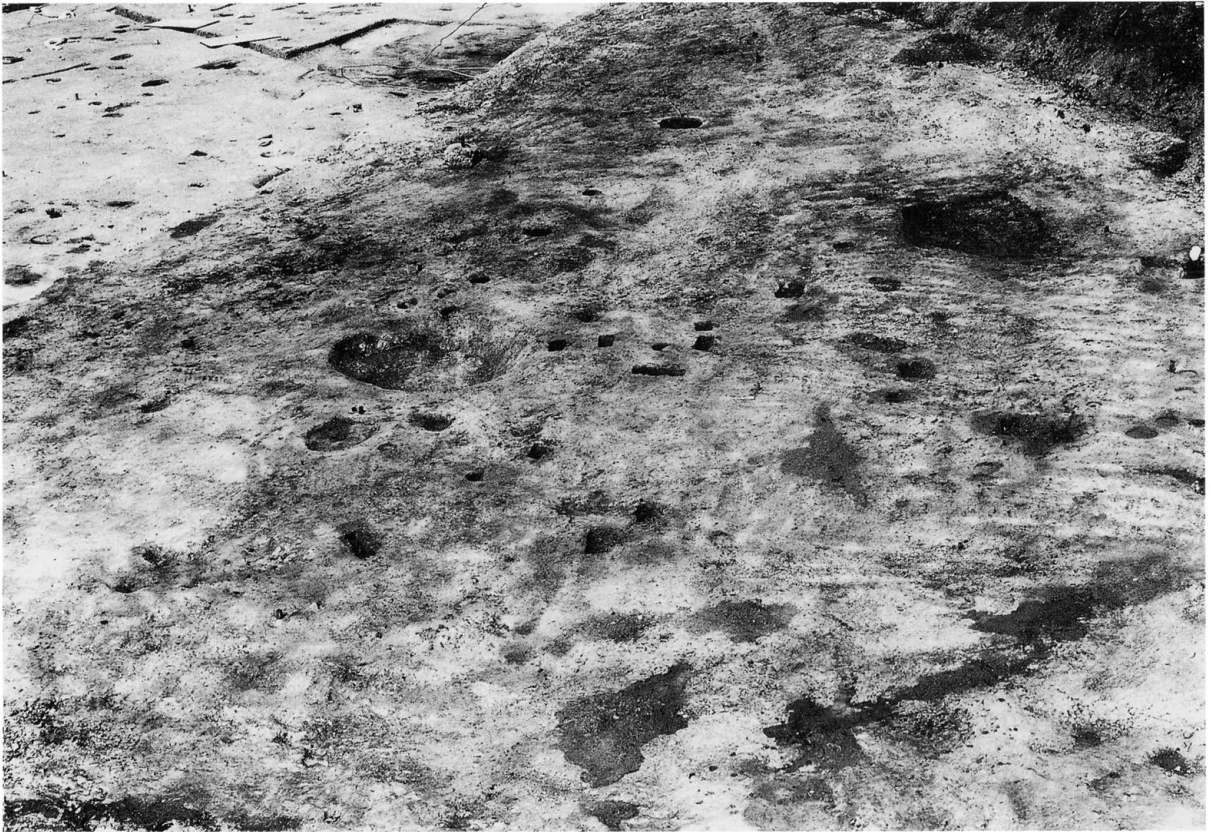
第2編 おおくほ 大久保A遺跡



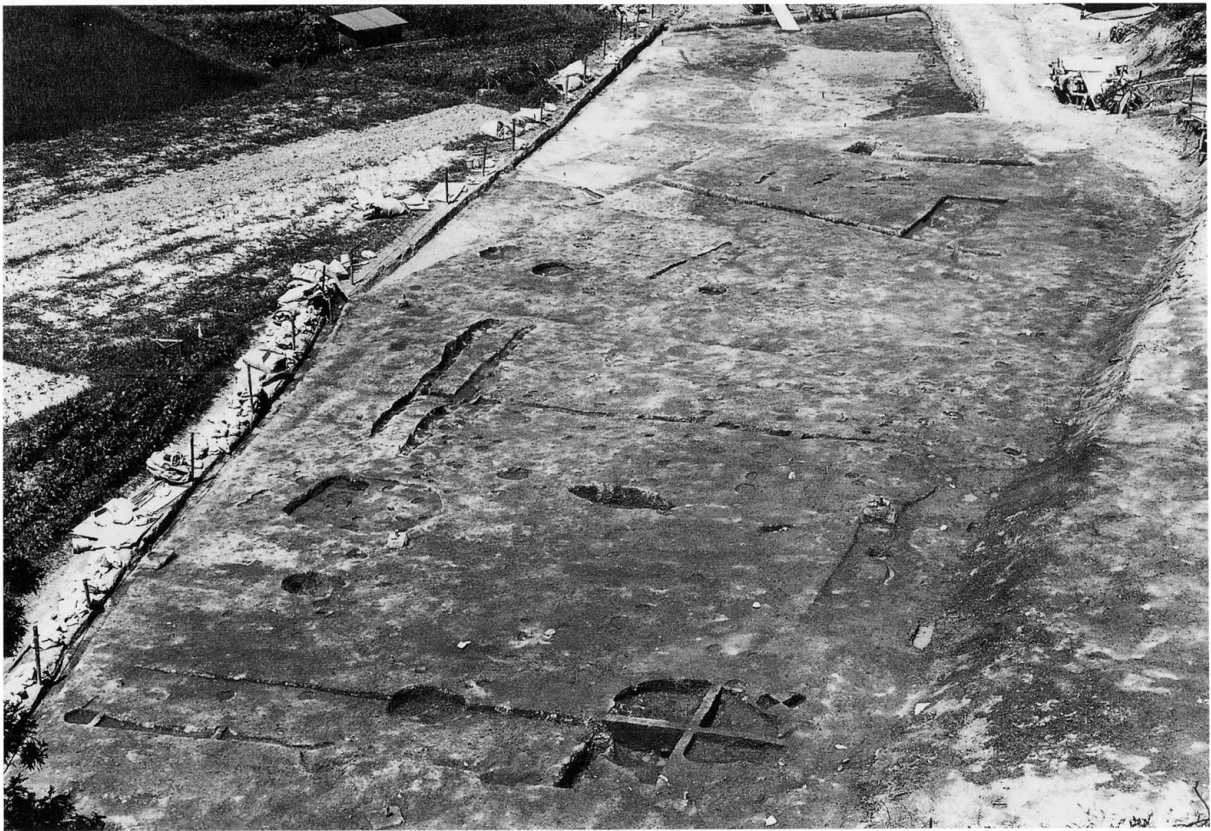
1 遺跡遠景（1）（空中）



2 遺跡遠景（2）（南から）



3 上段部全景（調査後）



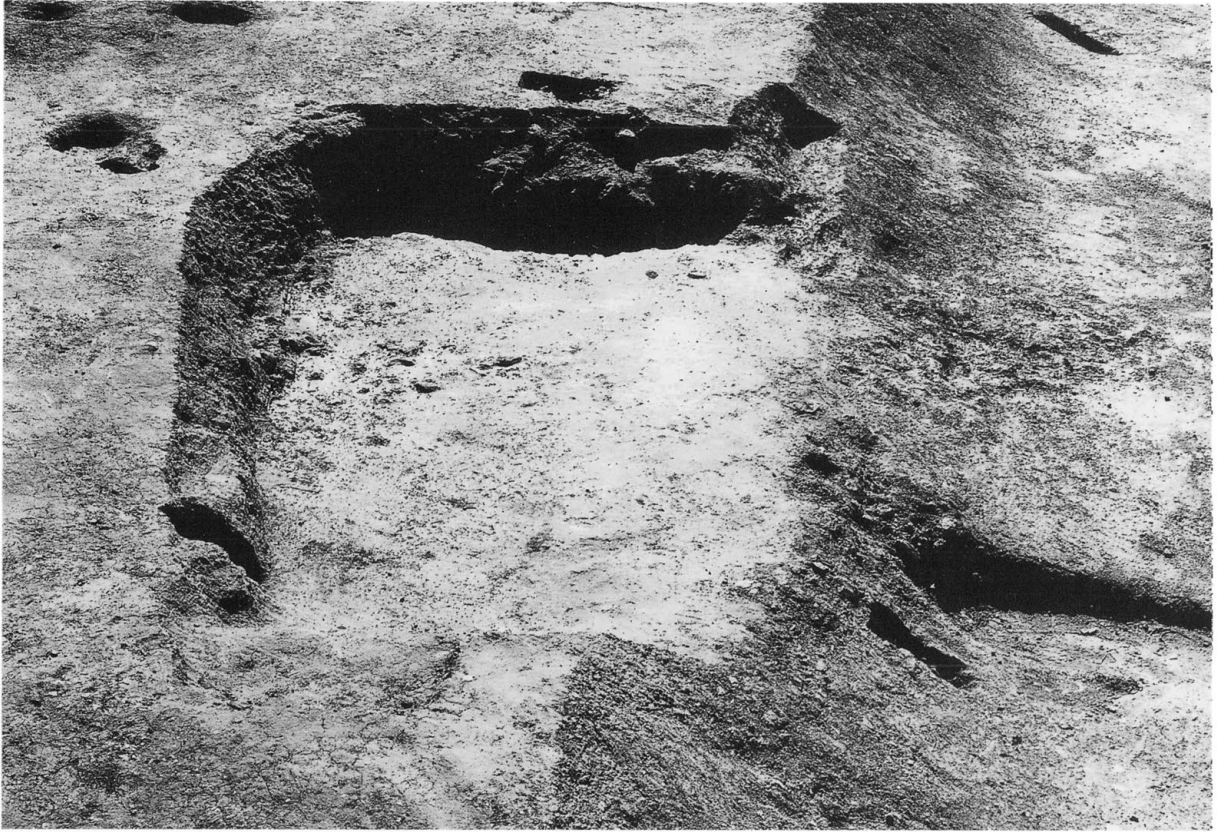
4 中段部全景（東より）



5 中段部全景（中央部）



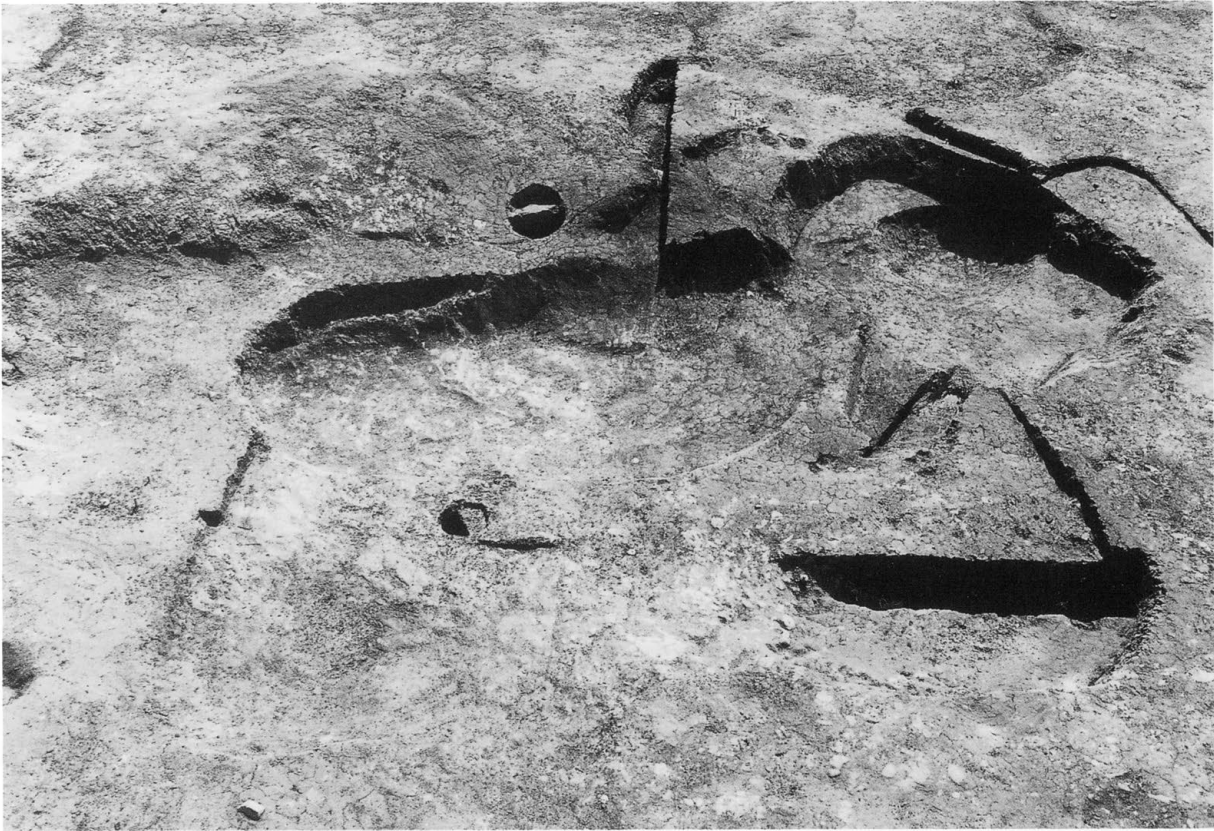
6 水田部全景（調査後）



7 1号住居跡完掘



8 2号住居跡完掘



9 3号住居跡



10 4号住居跡



11 5号住居跡

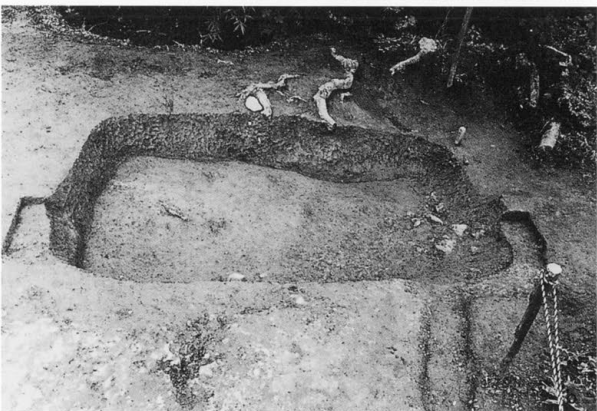
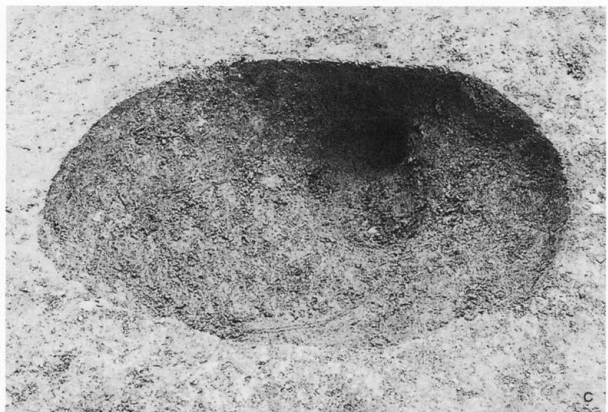


12 1号建物跡



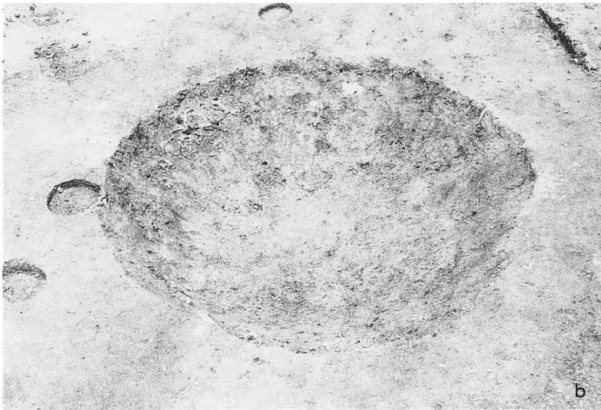
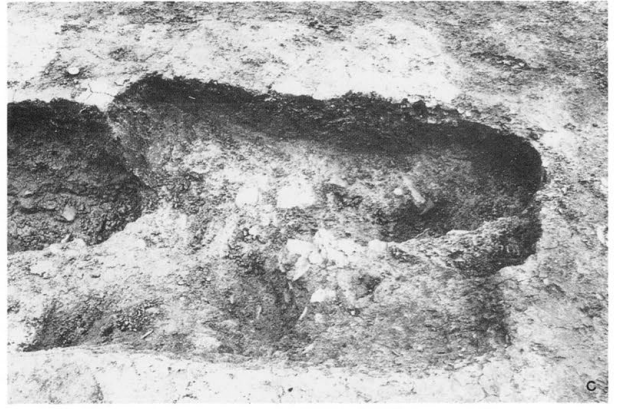
13 1～4号土坑全景

a 1号土坑 c 3号土坑
b 2号土坑 d 4号土坑



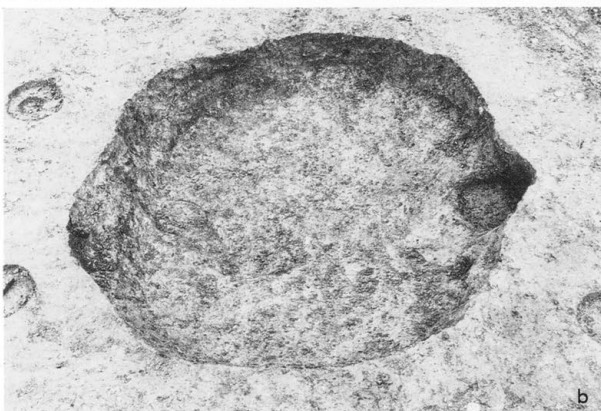
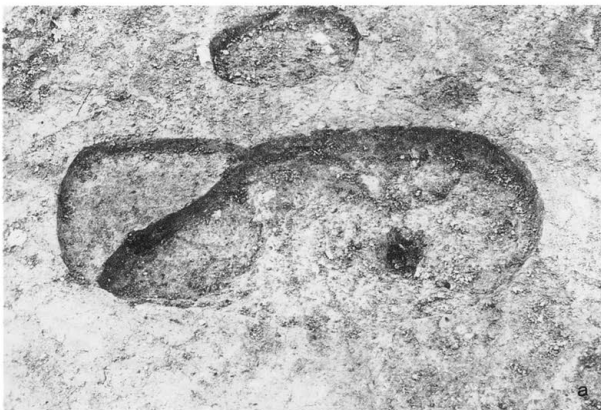
14 5・6・8・9号土坑全景

a 5号土坑 c 7号土坑
b 6号土坑 d 8号土坑



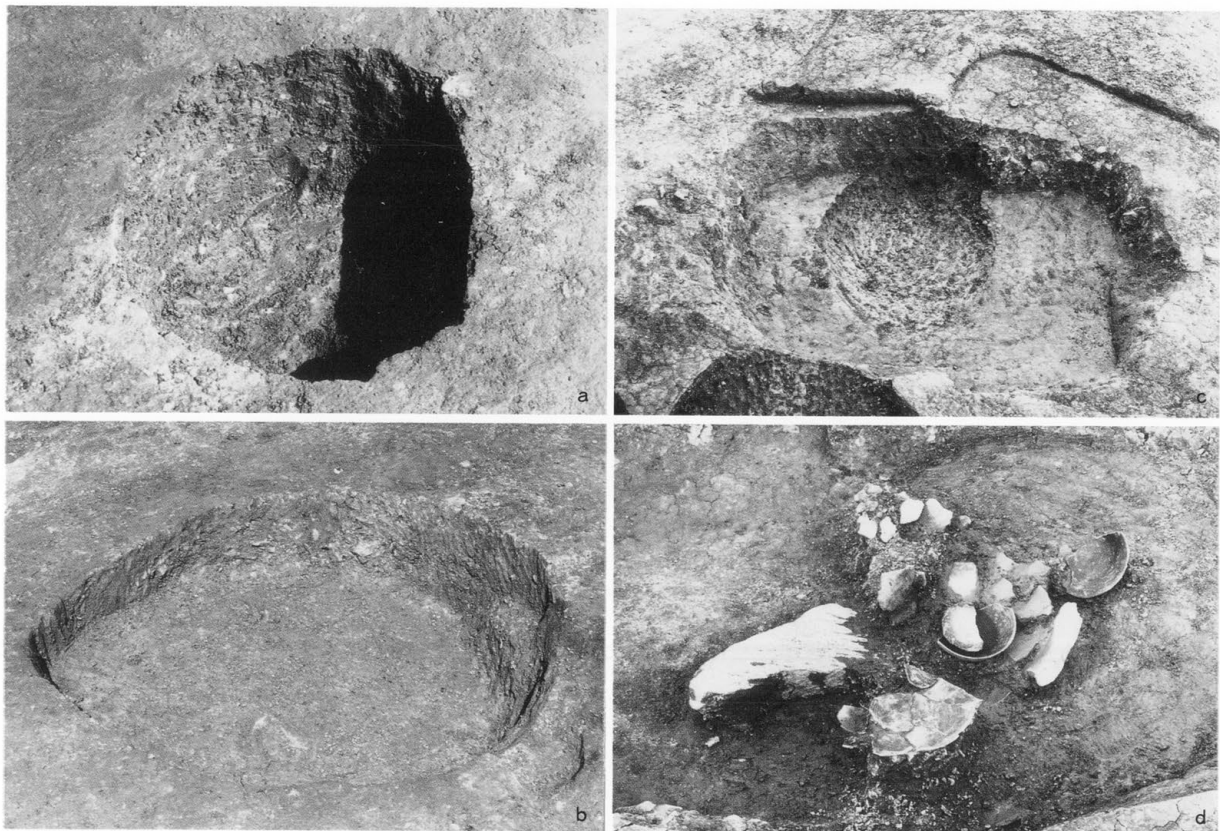
15 11·12·14·17号土坑全景

a 11号土坑 c 14号土坑
b 12号土坑 d 17号土坑



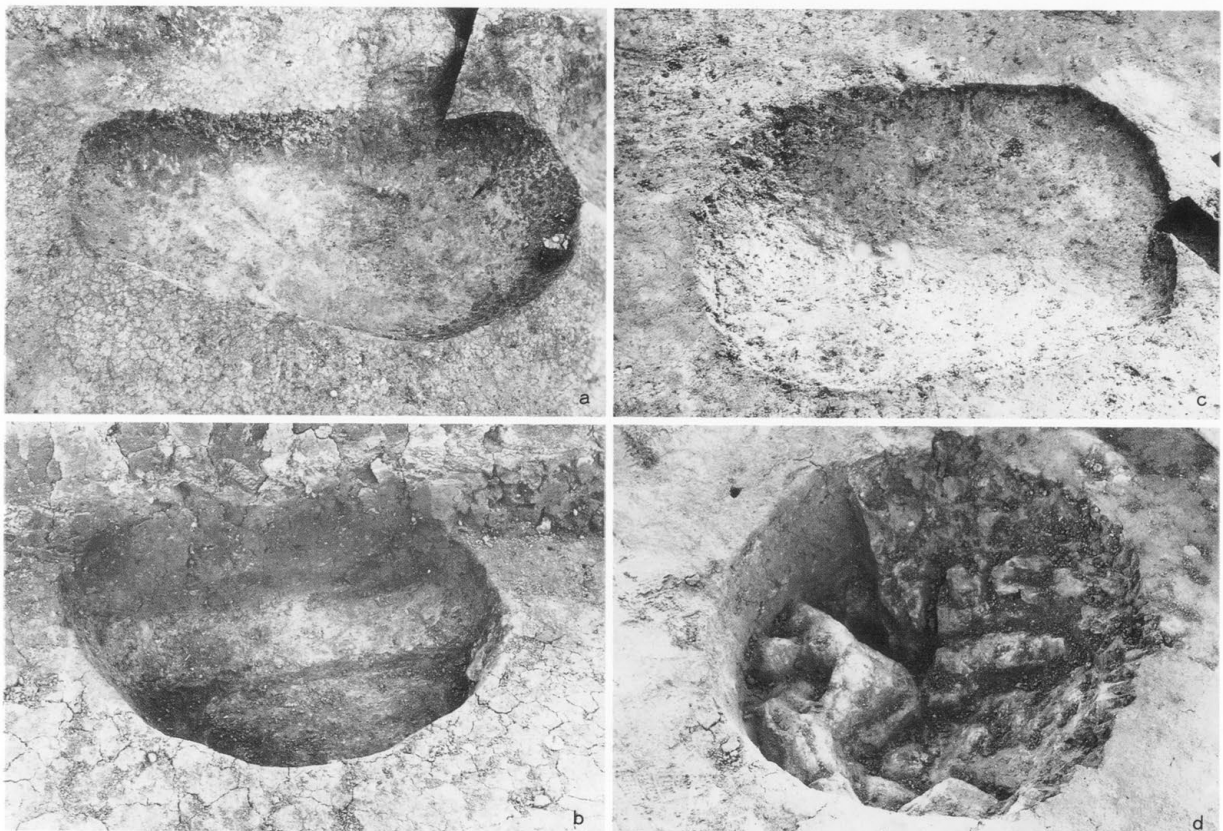
16 18~20·22号土坑全景

a 18号土坑 c 20号土坑
b 19号土坑 d 22号土坑



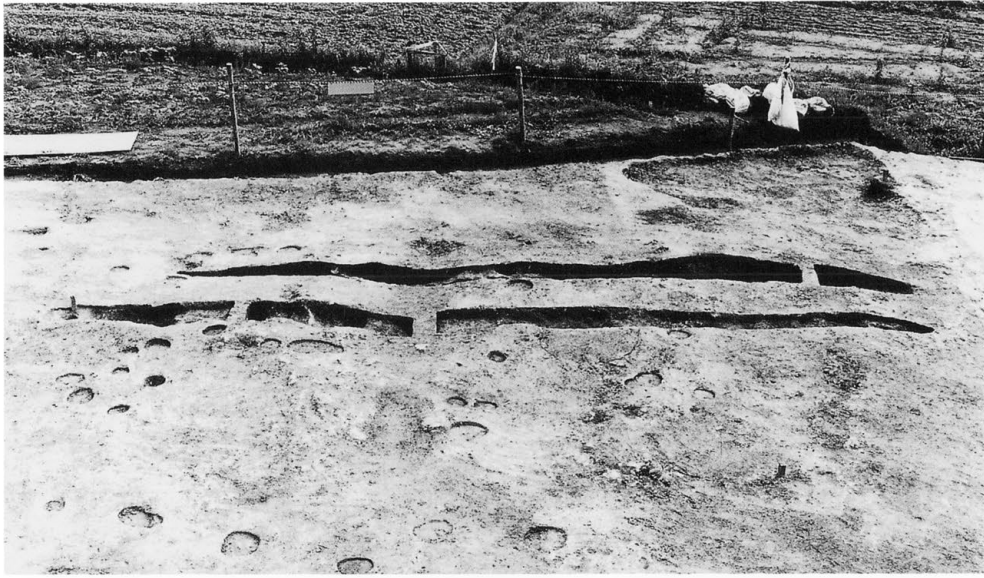
17 23~25号土坑全景

a 23号土坑 c 25号土坑
b 24号土坑 d 25号土坑遺物出土状況

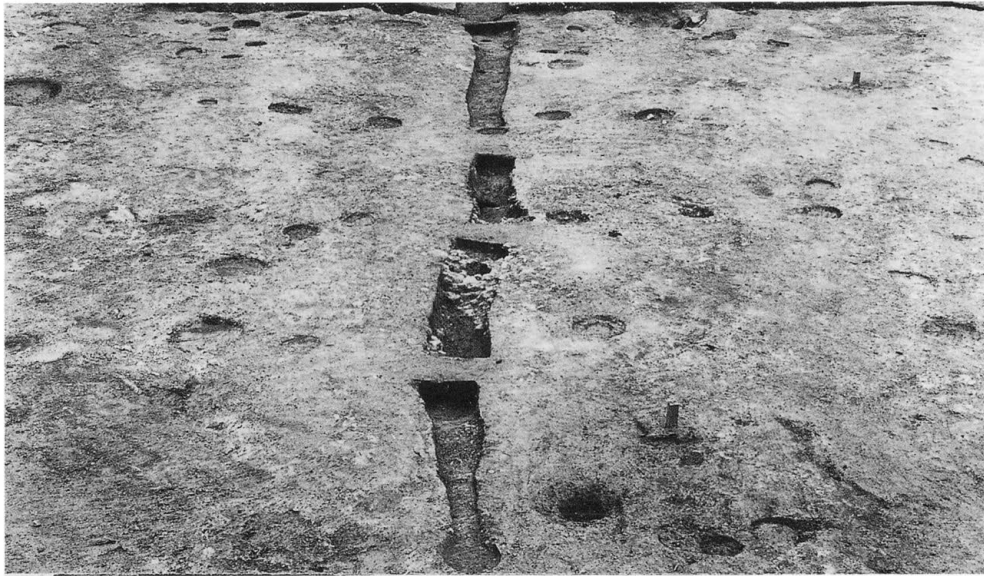


18 26・27・31・33号土坑全景

a 26号土坑 c 31号土坑
b 27号土坑 d 33号土坑



1 · 2 号 沟 迹

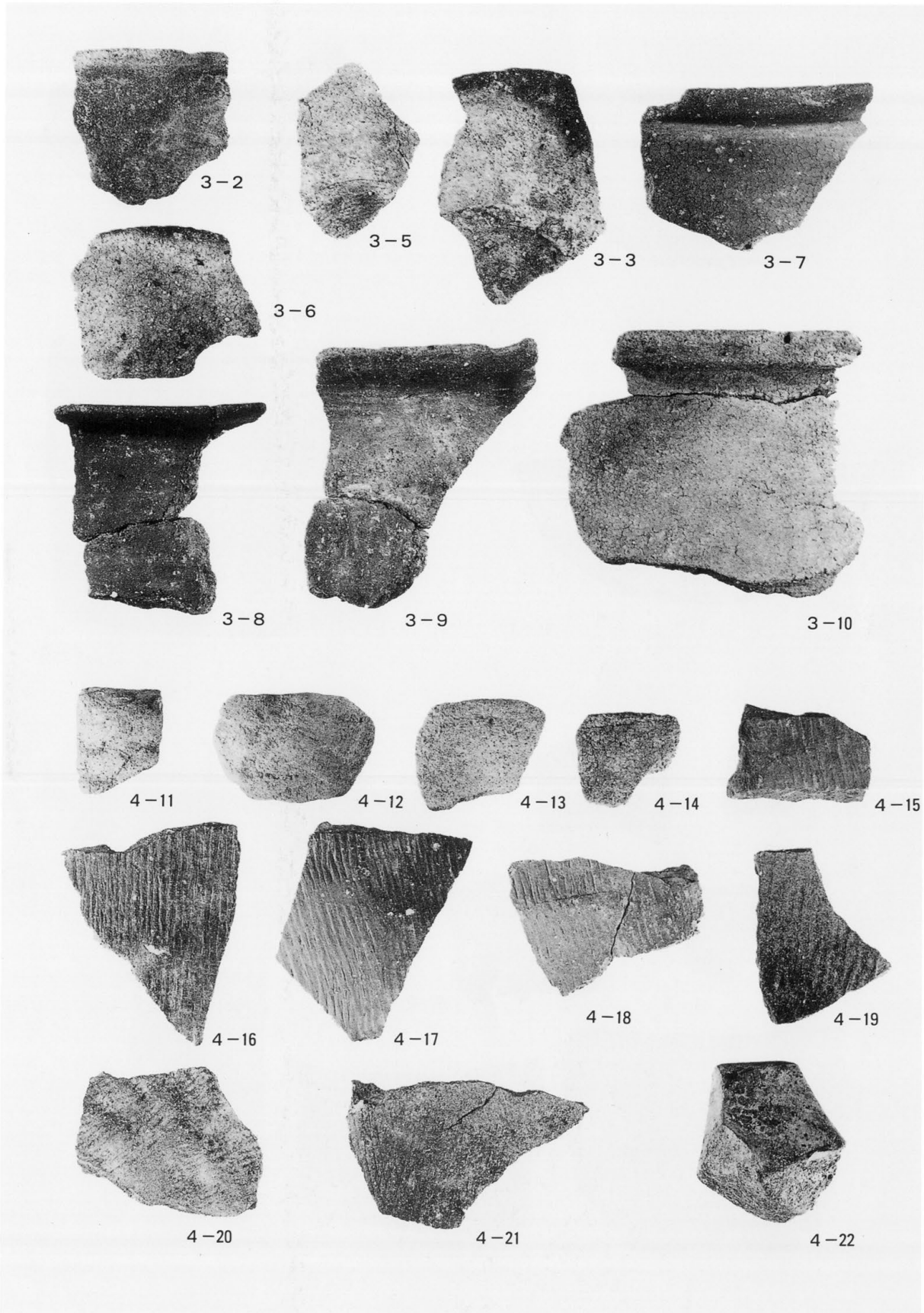


3 号 沟 迹

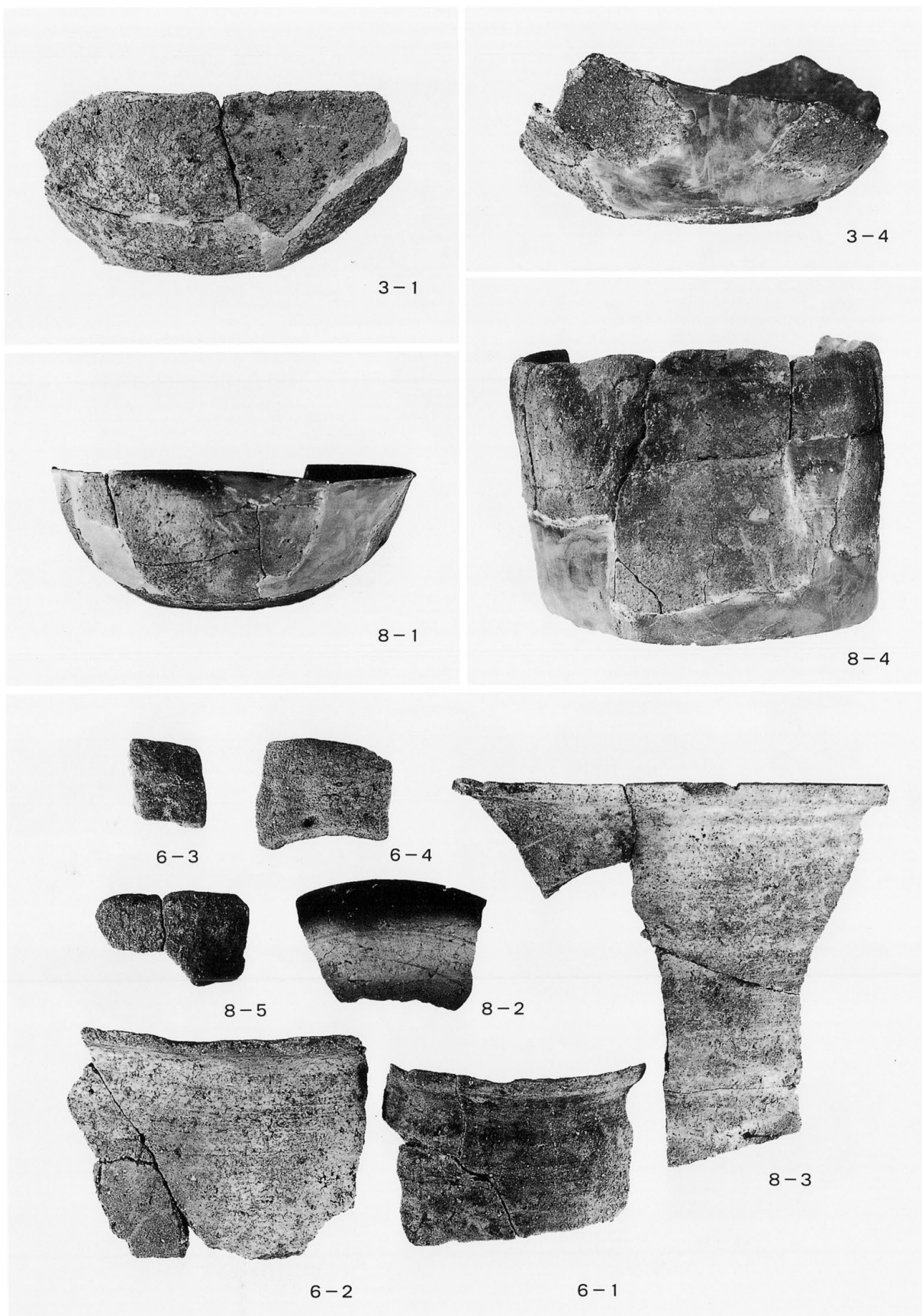


19 沟迹

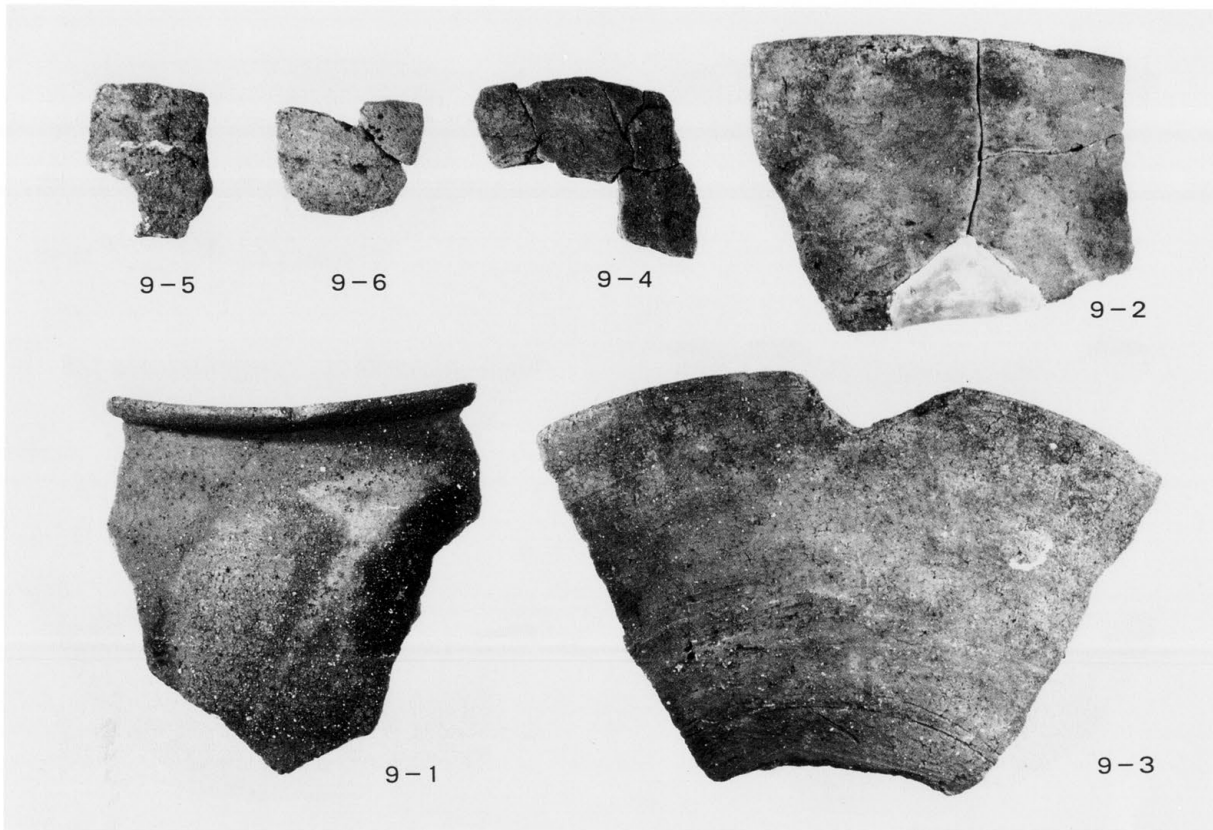
6 号 沟 迹



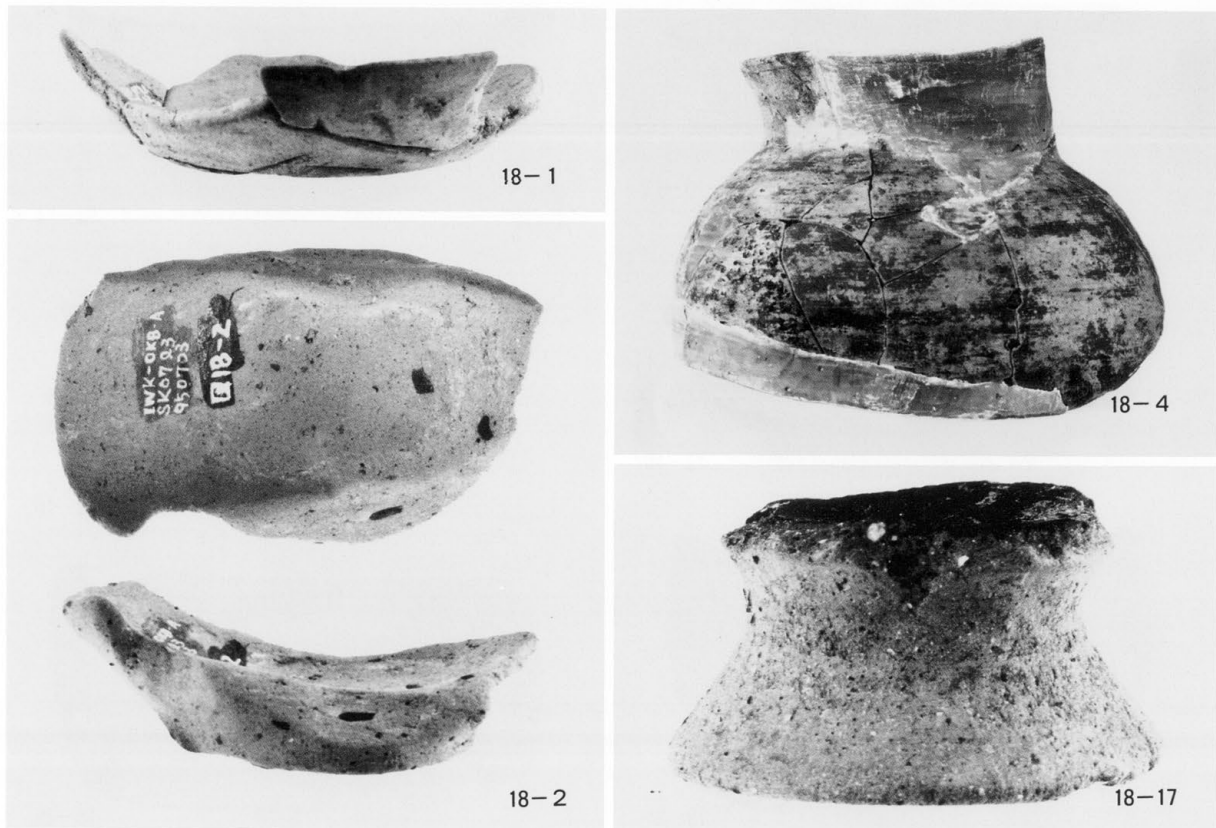
20 1号住居跡出土遺物



21 1・3・4号住居跡出土遺物



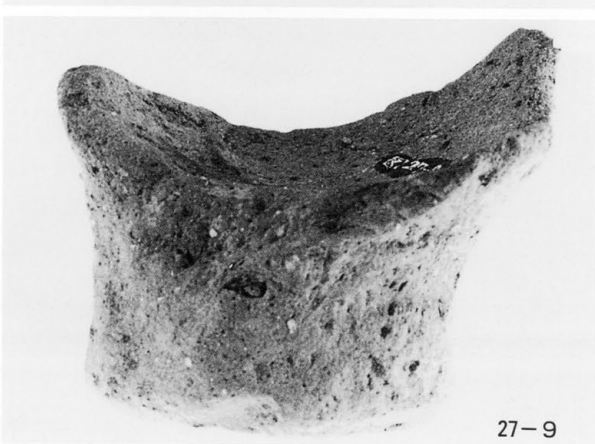
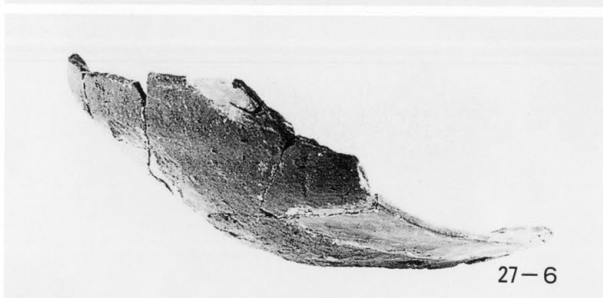
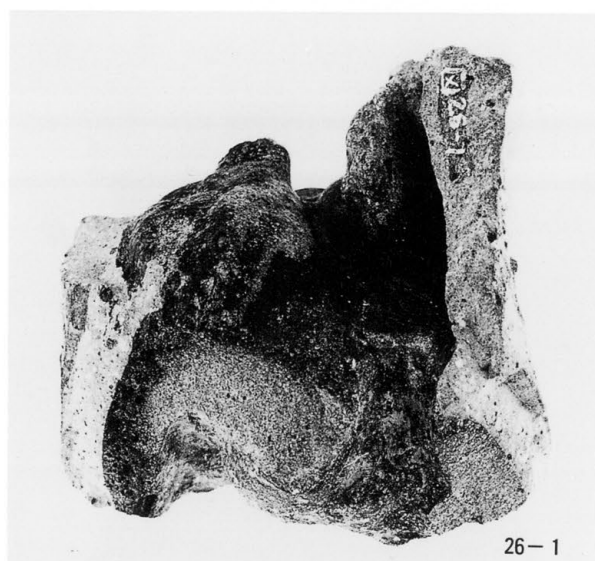
22 5号住居跡出土遺物



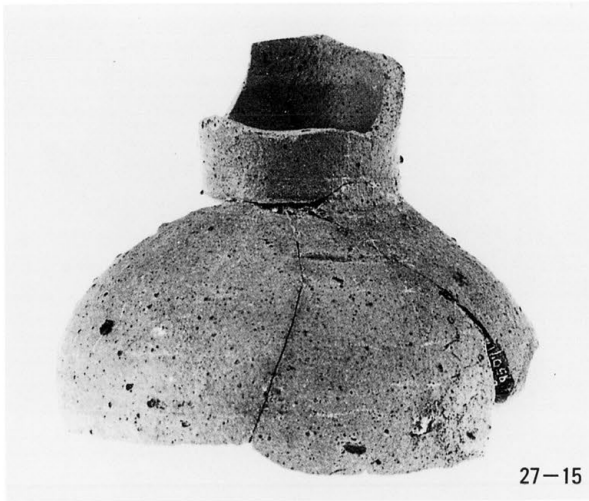
23 7・22・25号土坑出土遺物



24 25号土坑出土遺物



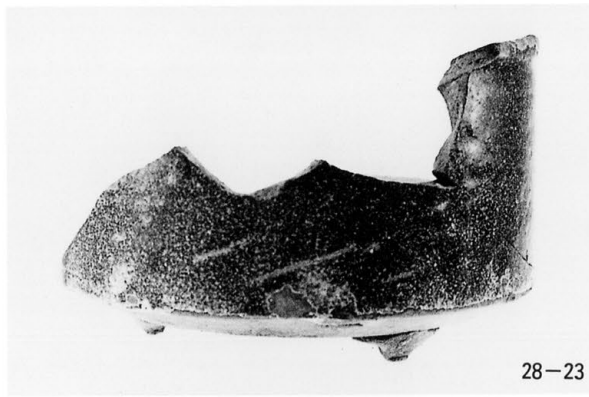
25 ピット・遺構外出土遺物(1)



27-15



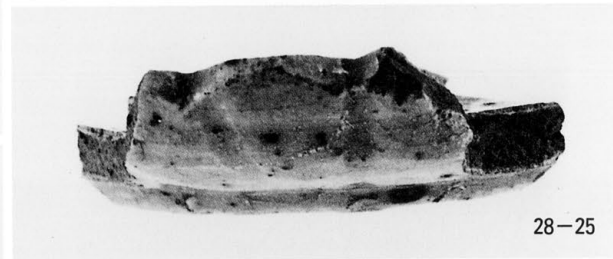
28-21



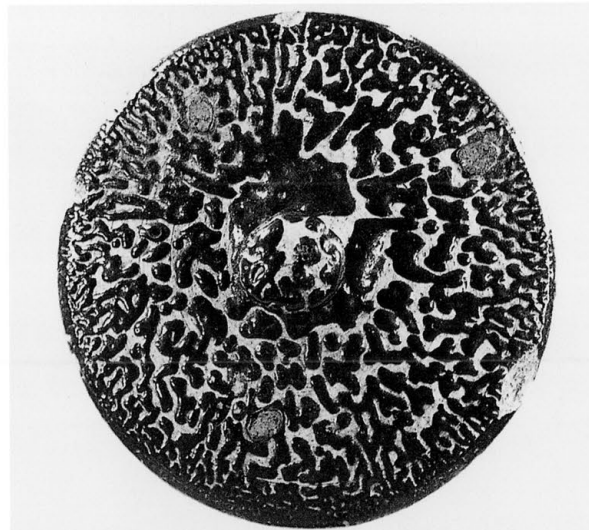
28-23



28-24



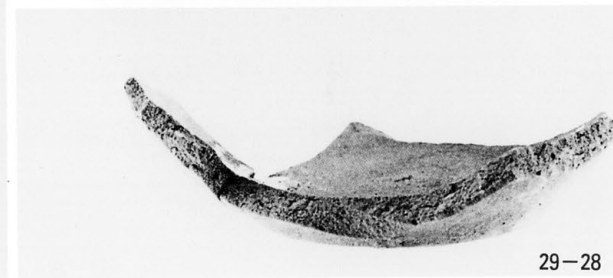
28-25



28-22



28-27

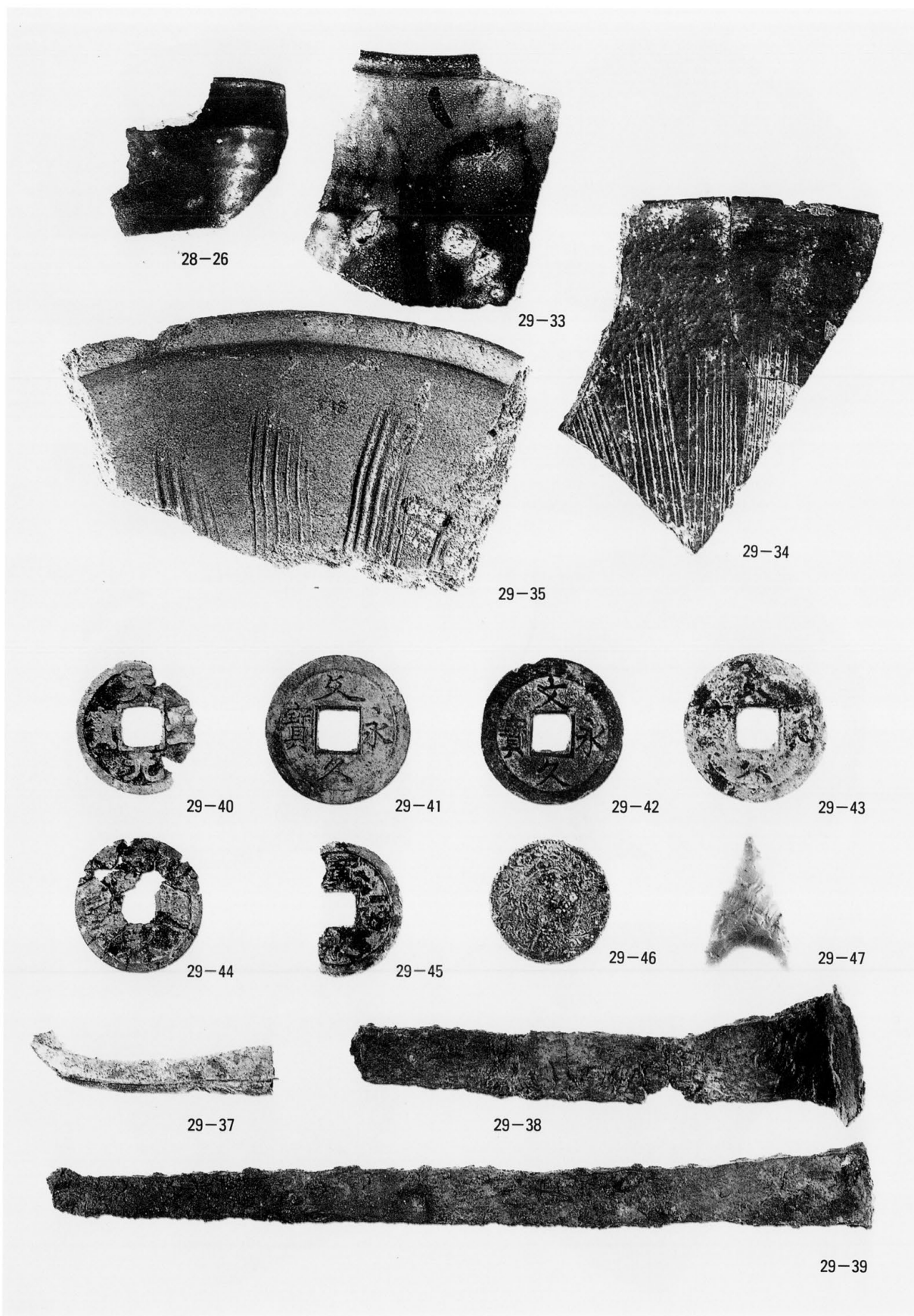


29-28

26 遺構外出土遺物(2)



27 遺構外出土遺物(3)



28 遺構外出土遺物(4)

第3編 おおくほ 大久保F遺跡



1 調査区全景（北から）



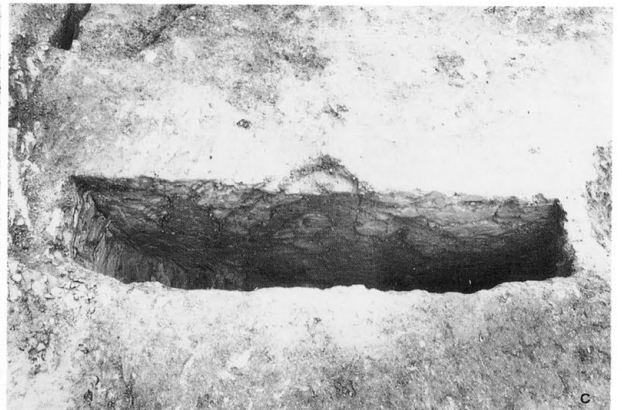
2 調査区全景（西から）



3 1号住居跡（西から）



a



c



b

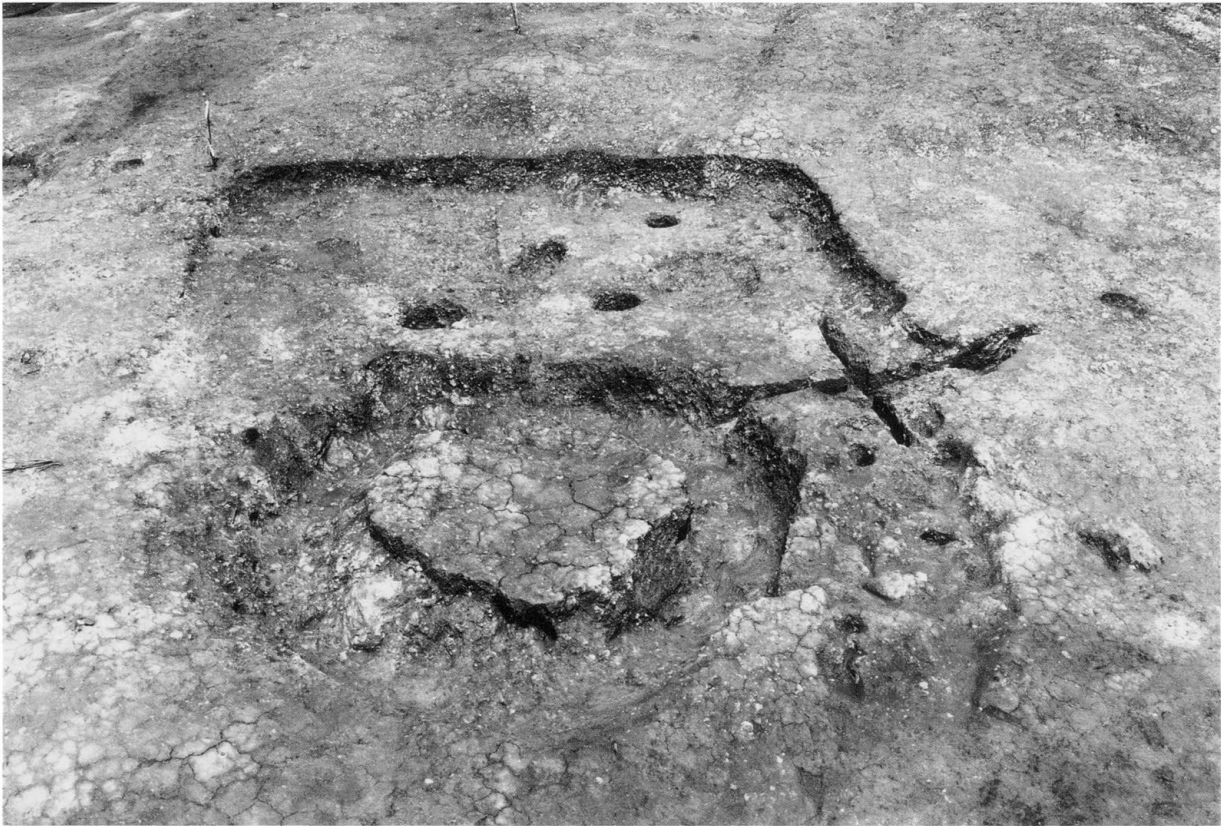


d

4 1号住居跡細部

a カマド遺物出土状況（北から）
b カマド（西から）

c P1断面（北から）
d P1（北から）



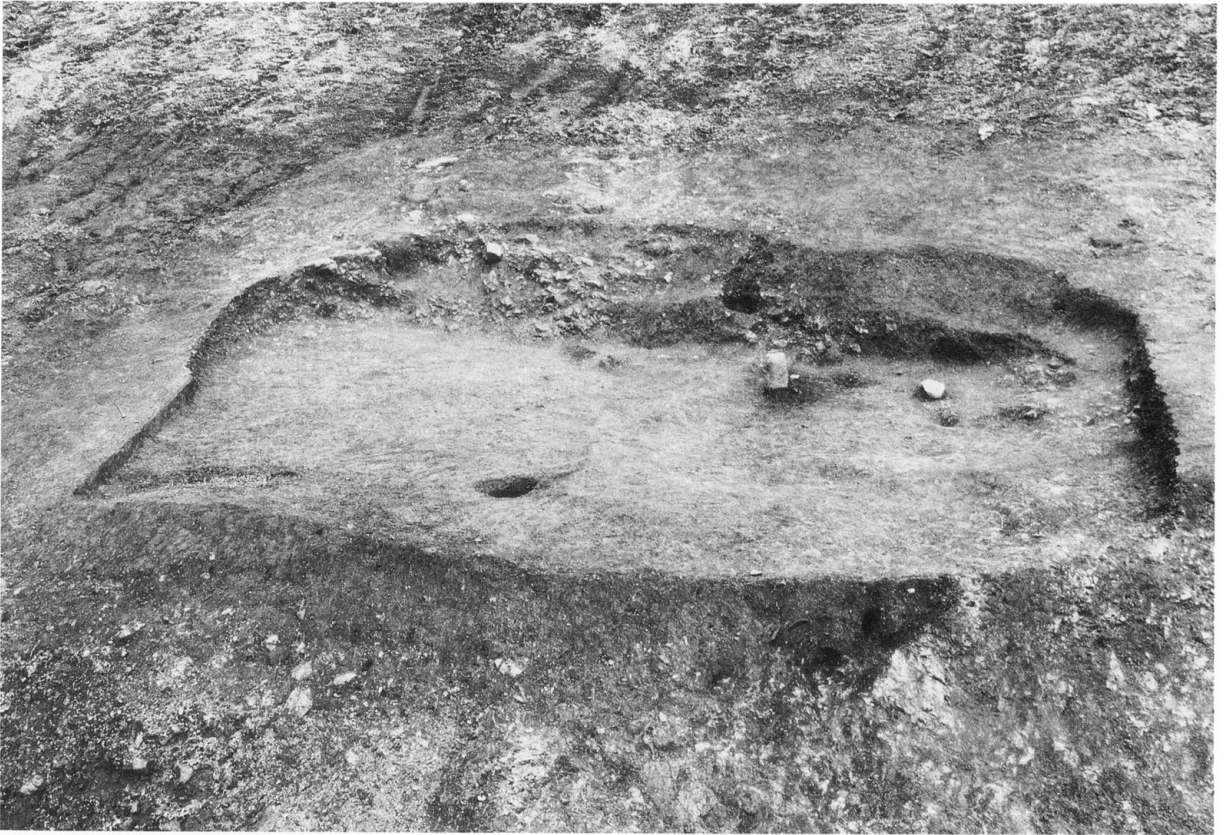
5 2号住居跡（南から）



6 2号住居跡細部

a 木炭検出状況（南から）
b P4断面（南から）

c 北東部木炭検出状況（西から）
d カマド（西から）



7 3号A住居跡（南から）



8 4号A住居跡（南東から）



9 3号B住居跡(西から)



10 3号B住居跡

a 北西コーナー床面遺物出土状況(南から)
b カマド(西から)

c P1断面(南から)
d P1遺物出土状況(東から)



11 4号B住居跡（北から）



12 4号B住居跡細部



a カマド遺物出土状況（西から）

b カマド（西から）

c P1（西から）



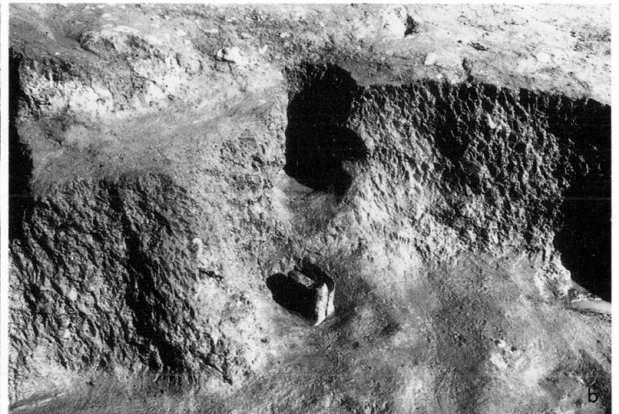
13 5号A住居跡（西から）



14 5号B住居跡（北西から）



15 6号住居跡（南から）



16 6号住居跡細部

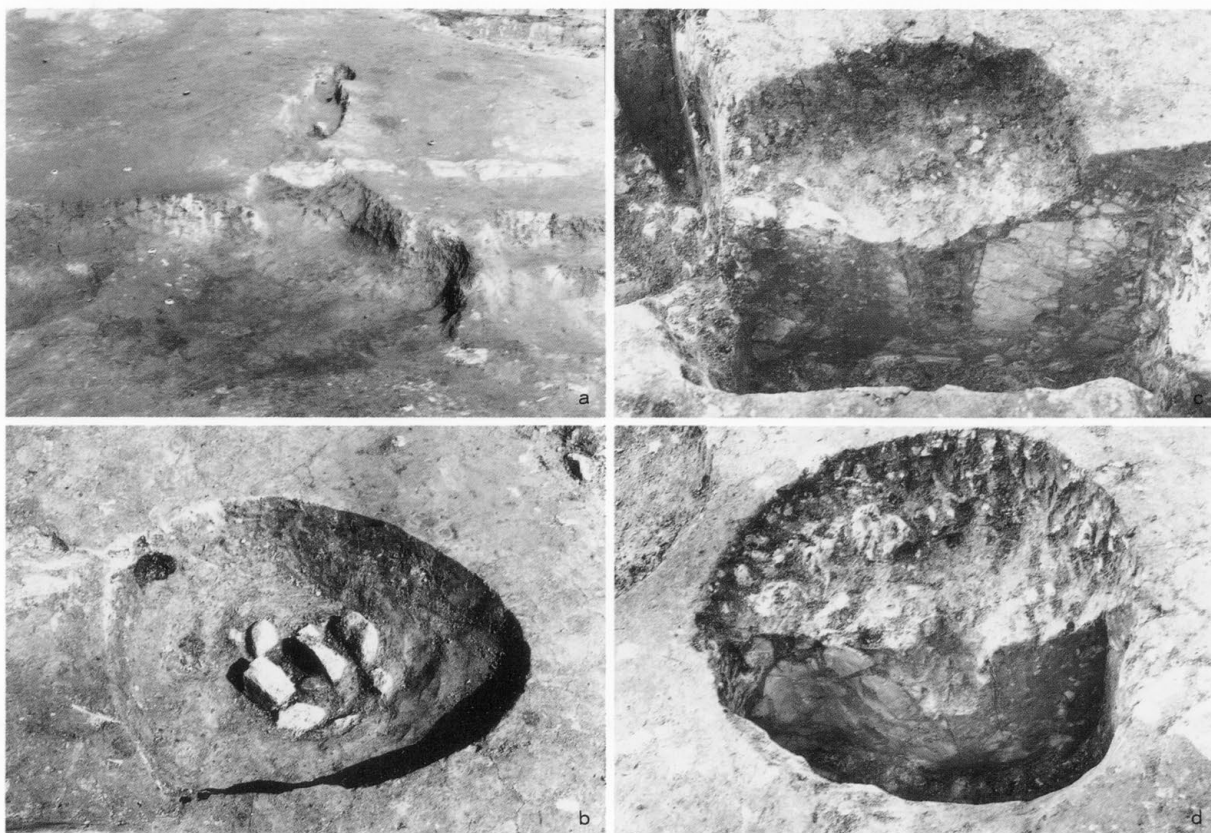
a 東壁中央部遺物出土状況（西から）

b カマド（西から）

c P2・棚状施設（北から）



17 7号住居跡（南から）



18 7号住居跡細部

a カマド（南から）
b P1（西から）

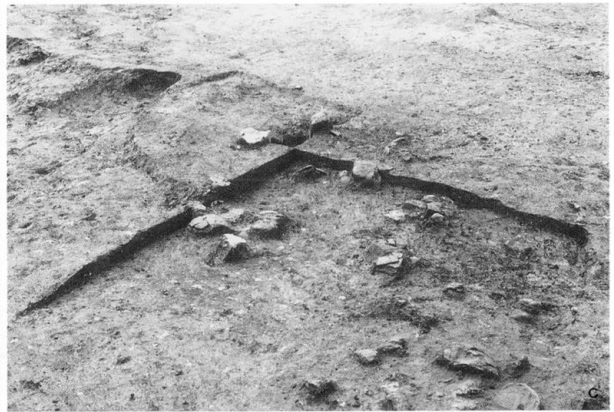
c P2断面（南から）
d P8断面（南から）



19 8号住居跡（西から）



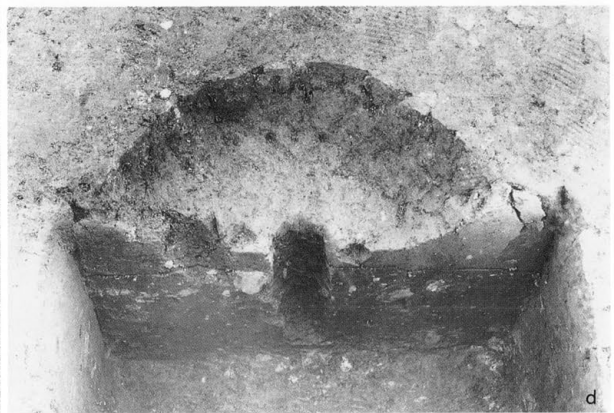
a



c



b



d

20 8号住居跡細部

a P 1 遺物出土状況（南から）

c カマド断面（南西から）

b 白色粘土ブロック検出状況（西から）

d P 2 完掘（南から）

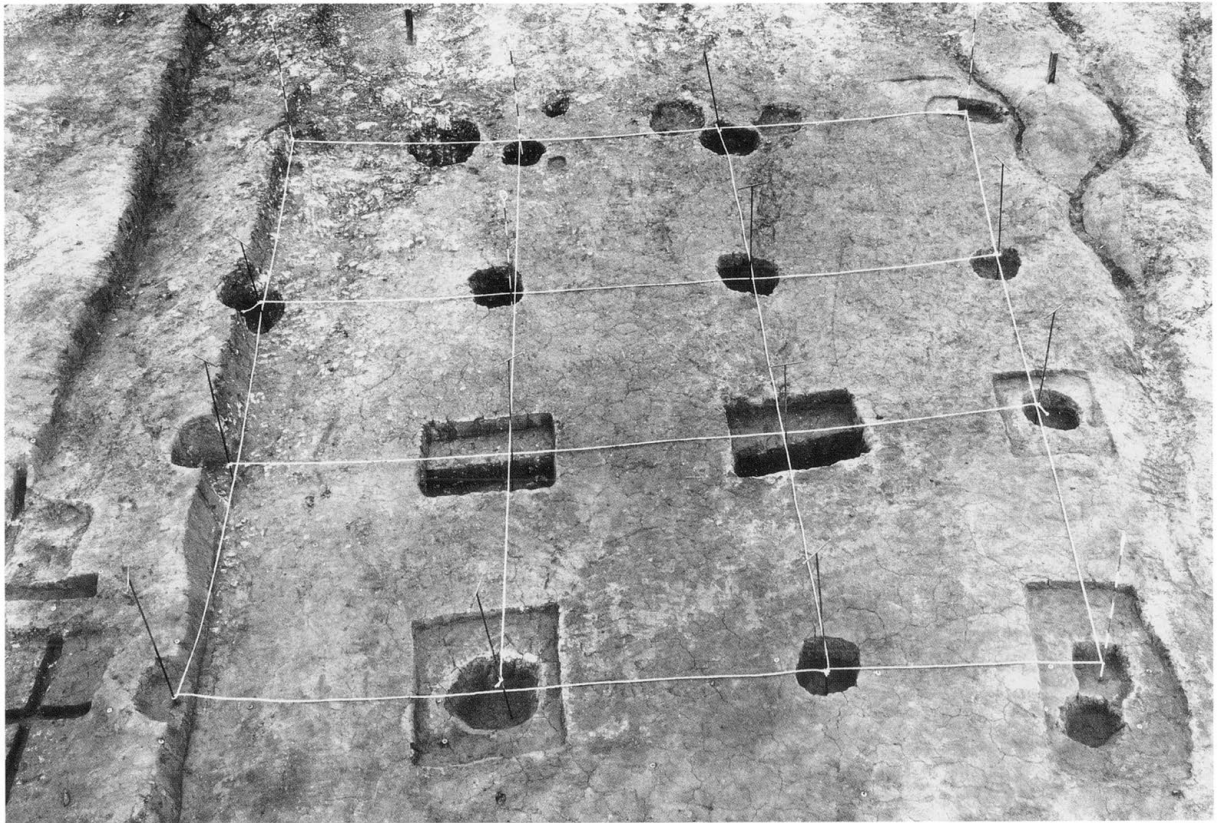


21 9・10号住居跡（南から）

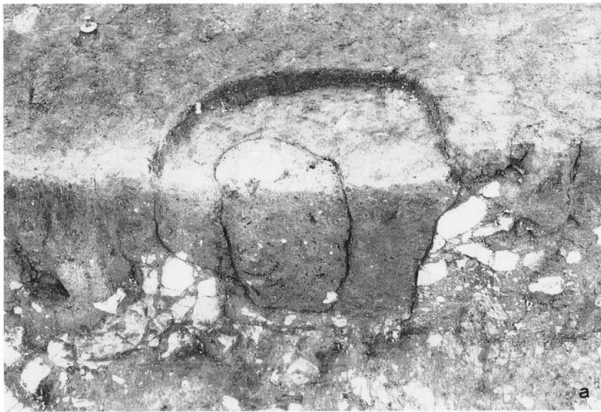


22 9号住居跡細部

a カマド遺物出土状況（南から） c P3断面（南から）
b P2断面（南から） d P5（南西から）



23 1号建物跡（南から）



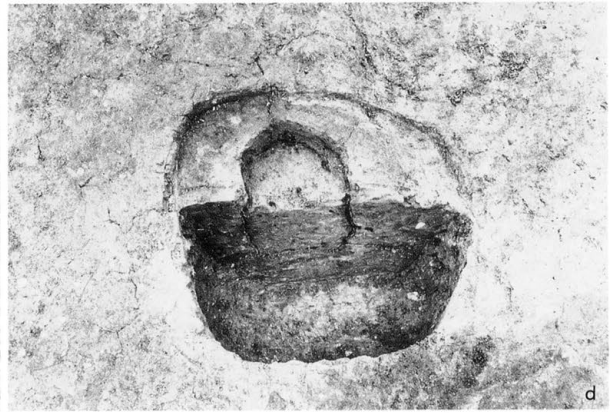
a



c



b



d

24 1号建物跡柱穴

a P 7断面（東から） c P 9断面（南から）
b P 8断面（東から） d P 10断面（南から）



a



b



c

25 1～3号窯跡

a 1号窯跡 (南から) c 2号窯跡 (南から)
b 3号窯跡 (東から)



a



b



c

26 5～7・12号窯跡

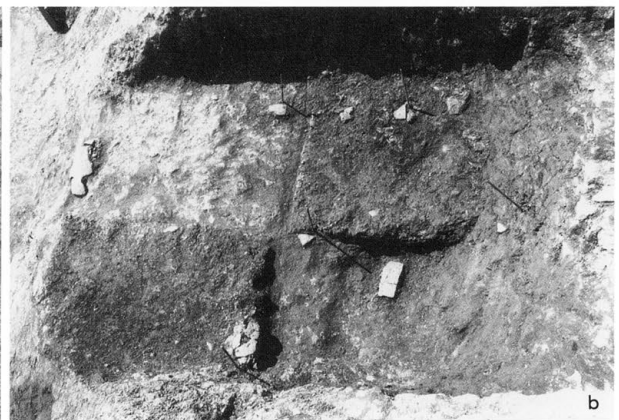
a 5号窯跡 (南から) c 12号窯跡 (南から)
b 6・7号窯跡 (南から)



27 4号窯跡（南西から）



28 4号窯跡細部

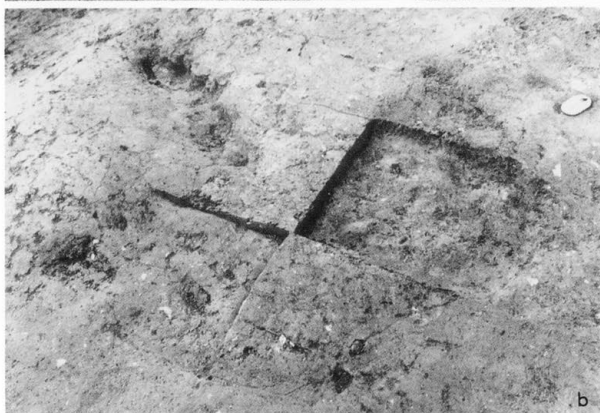


a 上段断面（西から） b 焼成部断面（東から）



29 13～16号窯跡

a 13号窯跡 (南から) c 15号窯跡 (南から)
b 14号窯跡 (南から) d 16号窯跡 (南から)



30 18～21号窯跡

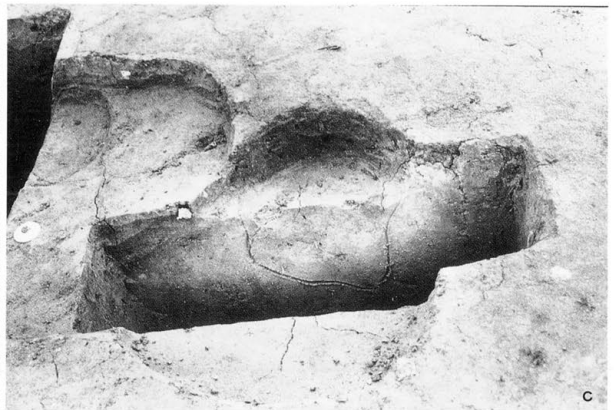
a 18号窯跡 (南から) c 20号窯跡 (南から)
b 19号窯跡断面 (北東から) d 21号窯跡 (南から)



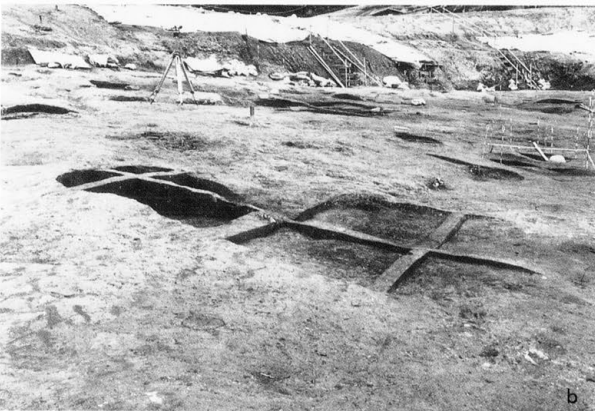
31 17号窯跡（南東から）



a



c



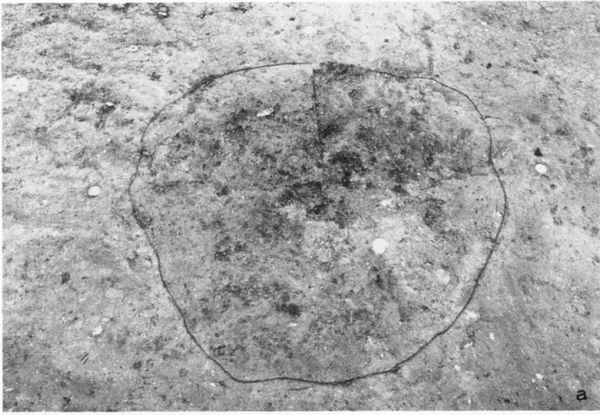
b



d

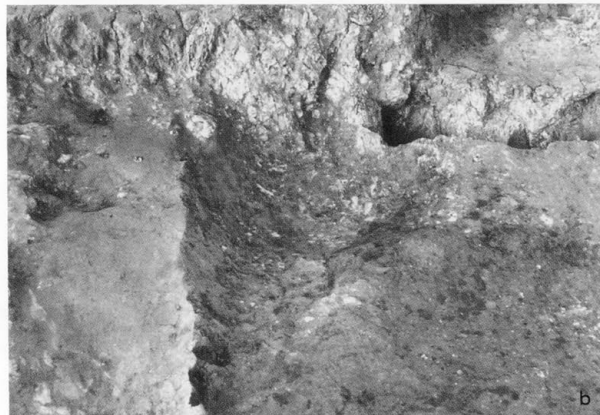
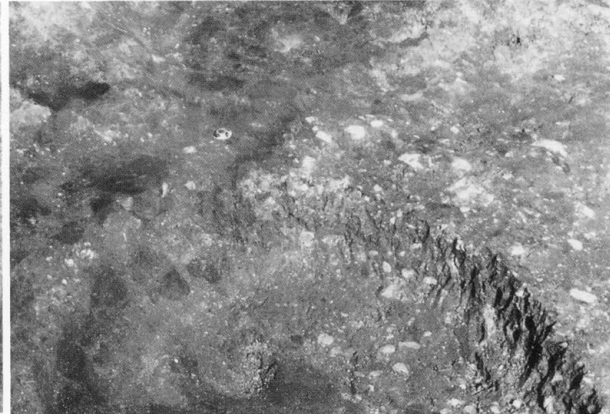
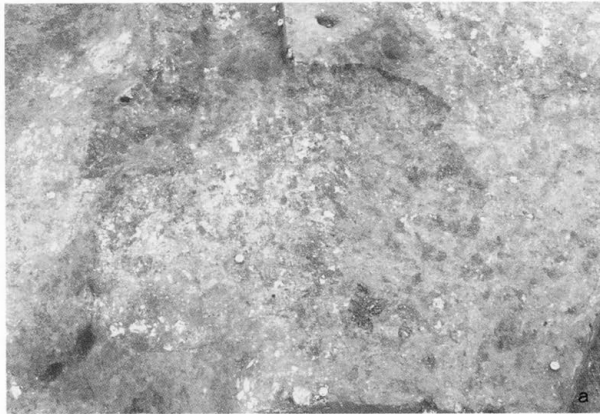
32 17号窯跡細部

a 断面（南東から） c P11断面（南から）
b 断面（南西から） d カマド本体全景（南東から）



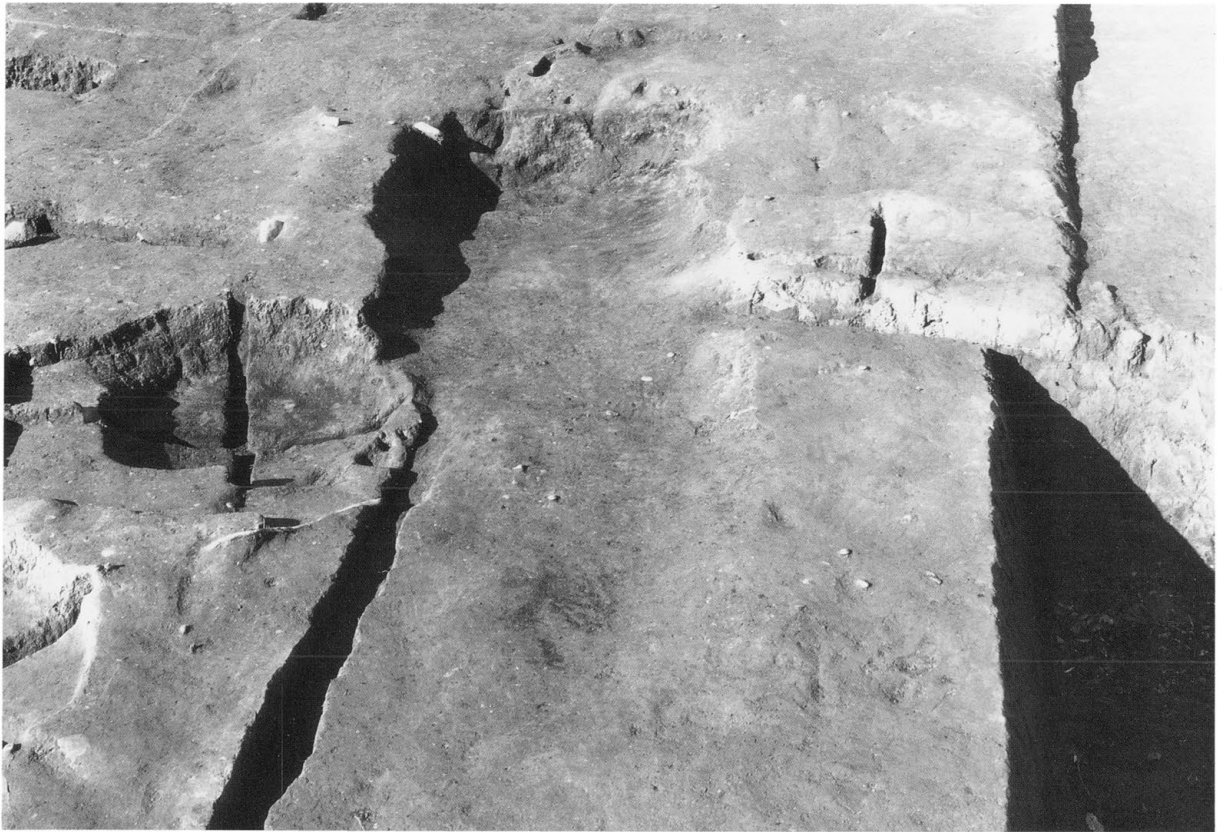
33 22~25号窯跡

a 22号窯跡 (南から) c 24号窯跡 (南から)
b 23号窯跡 (南東から) d 25号窯跡 (南から)

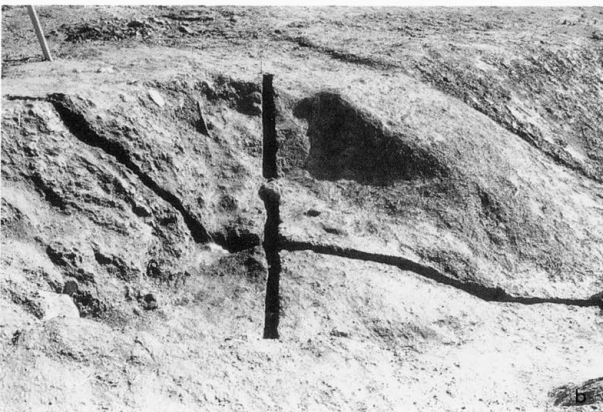


34 26~28号窯跡

a 26号窯跡 (南から) c 27号窯跡 (南から)
b 28号窯跡 (南から)

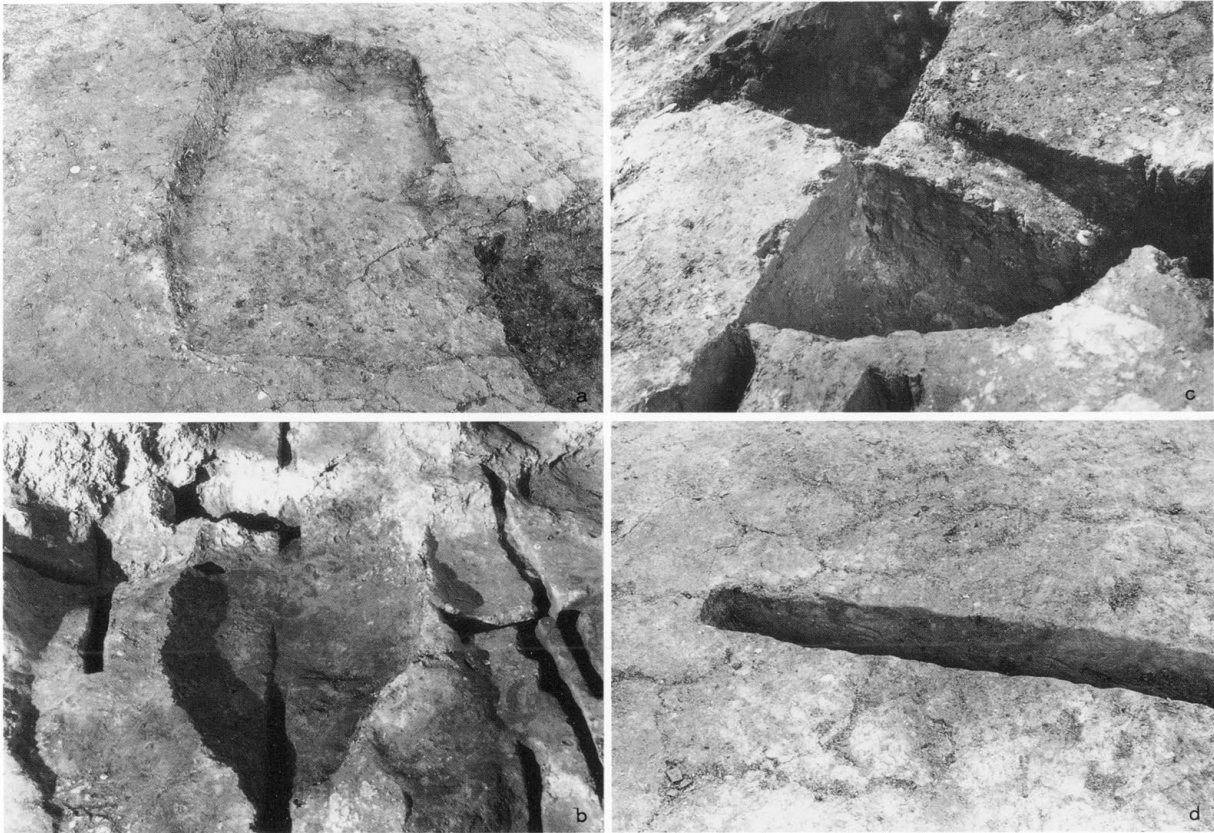


35 30号窯跡（南から）



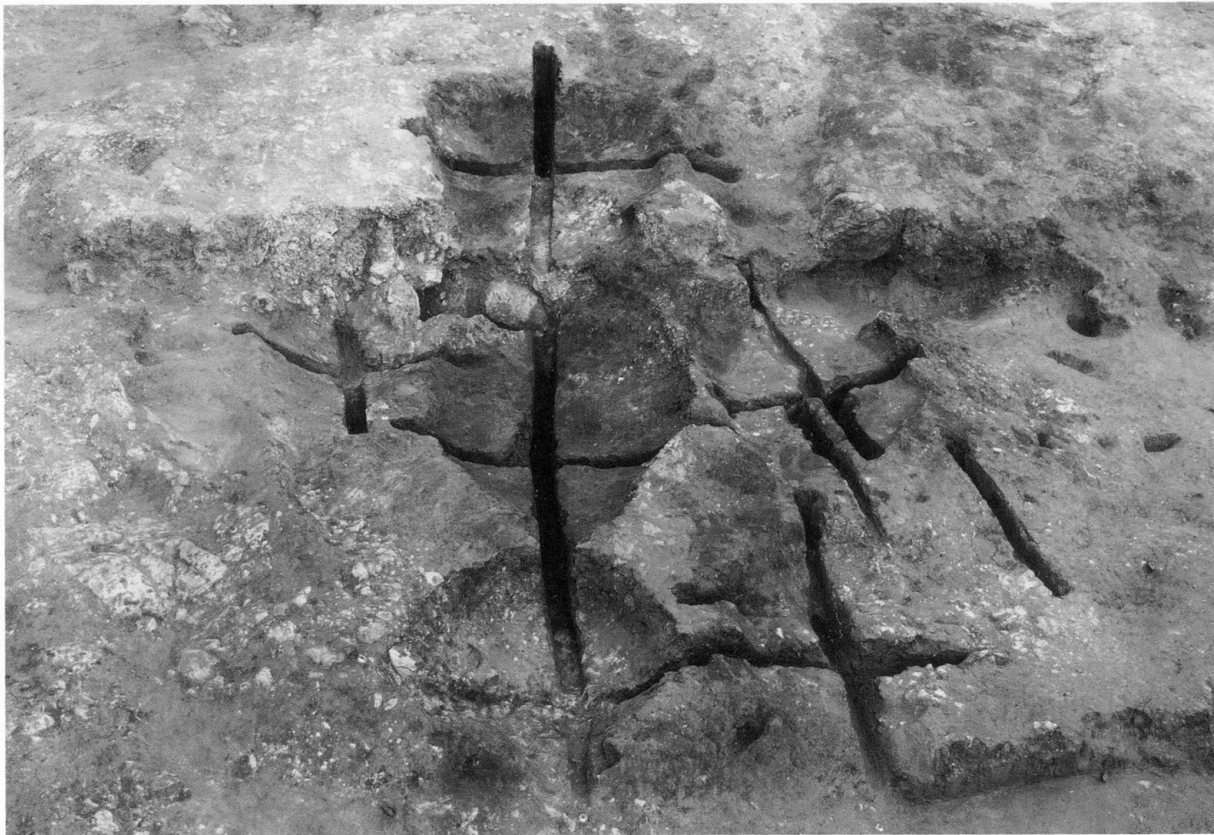
36 29・31～33号窯跡

a 29号窯跡（南から） c 32号窯跡（南西から）
b 31号窯跡（北から） d 33号窯跡（西から）



37 34～37号窯跡

a 34号窯跡（南から） c 36号窯跡断面（北東から）
b 35号窯跡（南から） d 37号窯跡断面（南から）

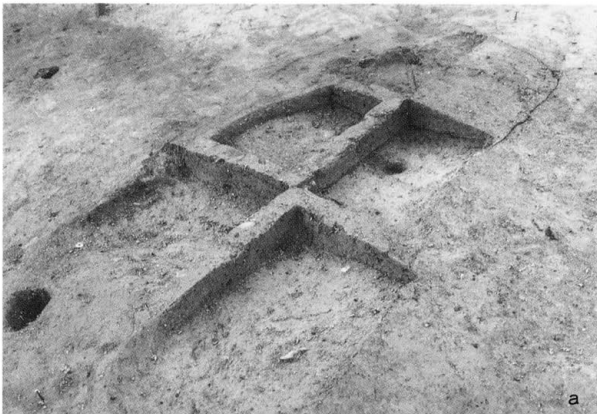


38 土師器窯跡集中部（南から）



39 8号木炭窯跡

a 木炭層検出状況 (南西から) c 8号窯跡 (南西から)
b 断面 (西から)

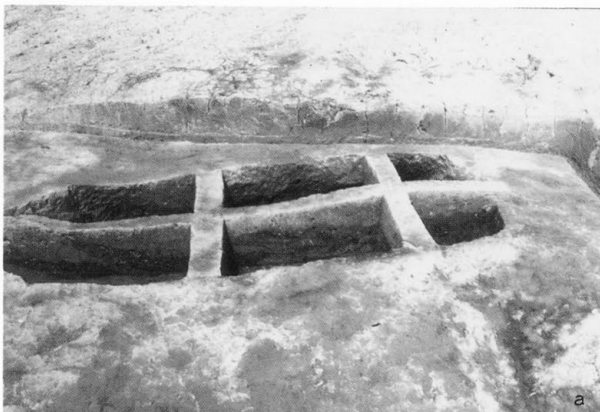


40 9・10号木炭窯跡

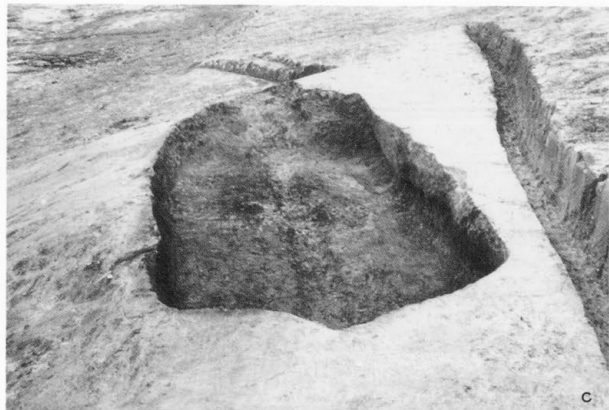
a 9号窯跡断面 (南から) c 10号窯跡断面 (南から)
b 9号窯跡 (南西から) d 10号窯跡 (南から)



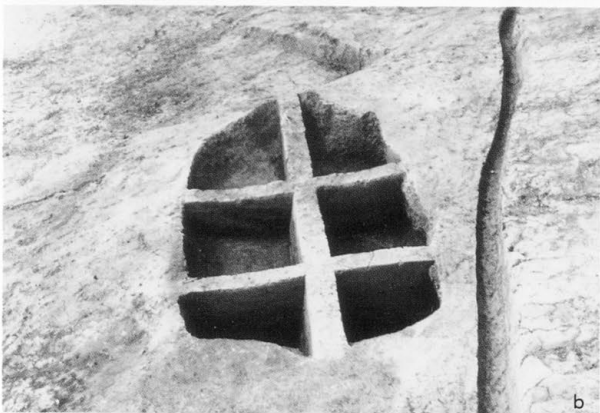
41 11号木炭窯跡（北西から）



a



c



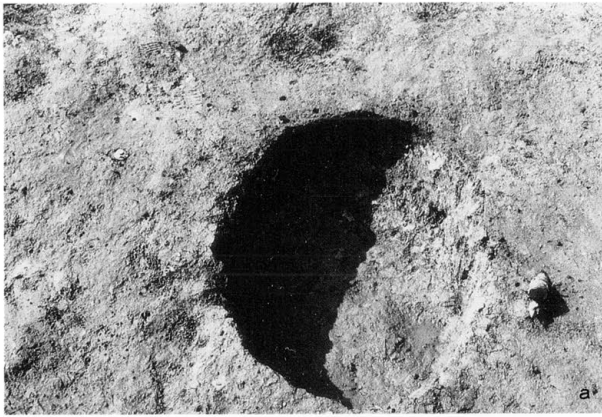
b



d

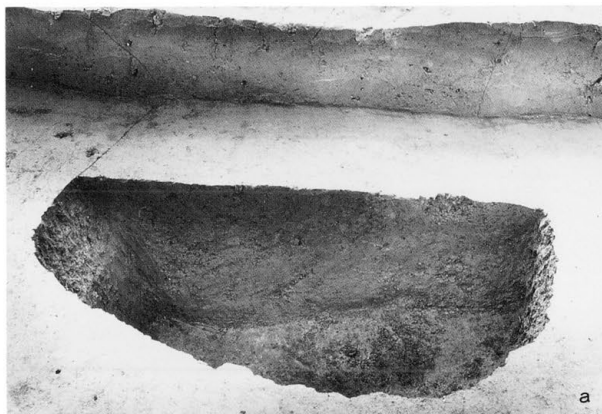
42 11号木炭窯跡細部

a 断面（西から） c 完掘（南東から）
b 断面（南東から） d 断ち割り（南東から）



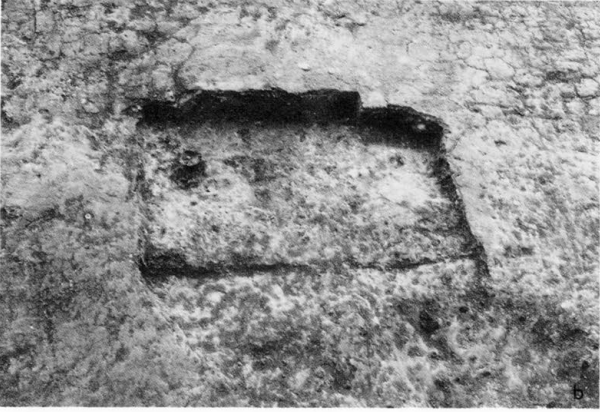
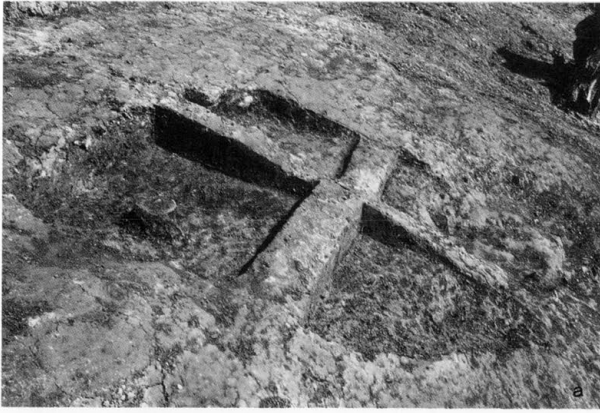
43 1・2号土坑

a 1号土坑（南から） c 2号土坑（西から）
b 2号土坑断面（北から）



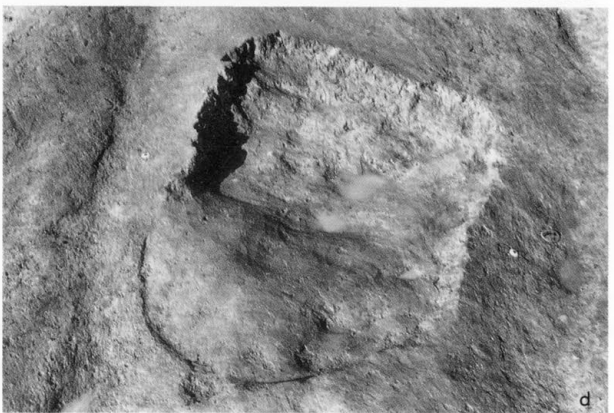
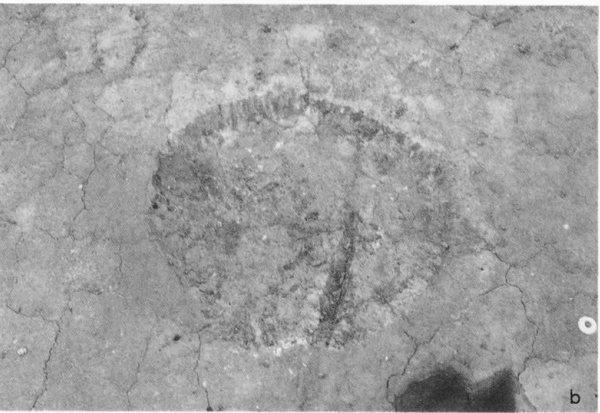
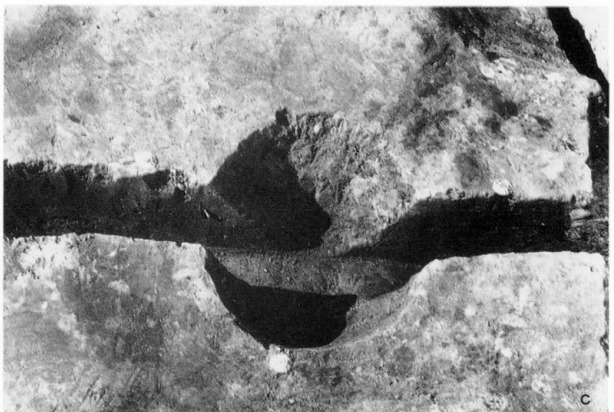
44 3・4号土坑

a 3号土坑断面（北から） c 4号土坑断面（南から）
b 3号土坑（北西から） d 4号土坑（南西から）



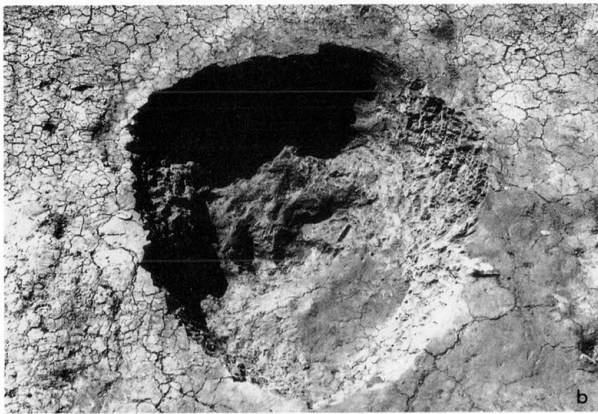
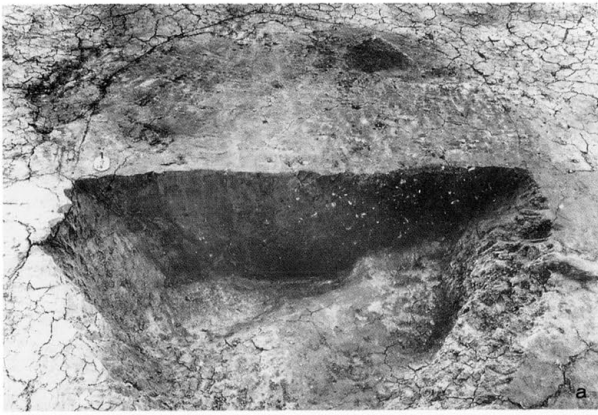
45 5～7号土坑

a 5号土坑断面(北西から) c 6号土坑(南西から)
b 5号土坑(南西から) d 7号土坑断面(南から)

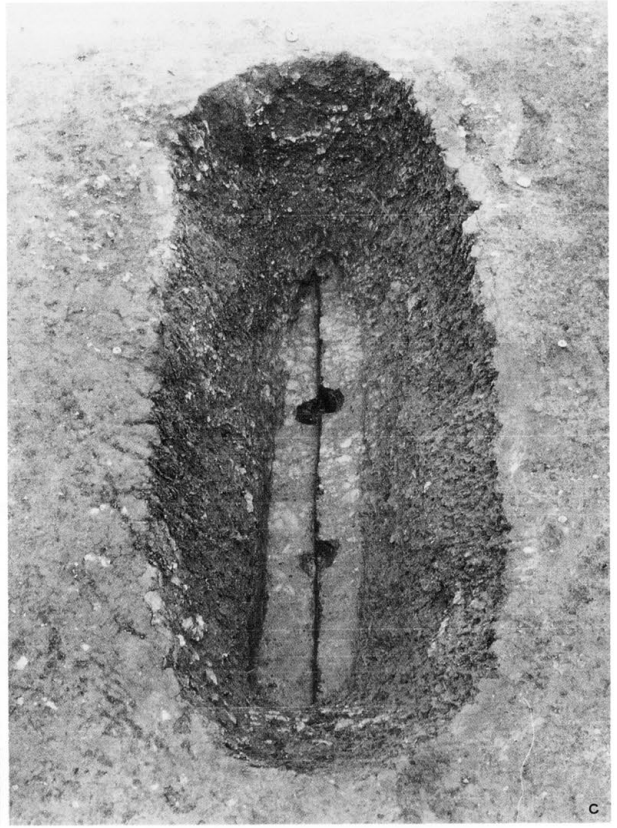


46 8～10・12号土坑

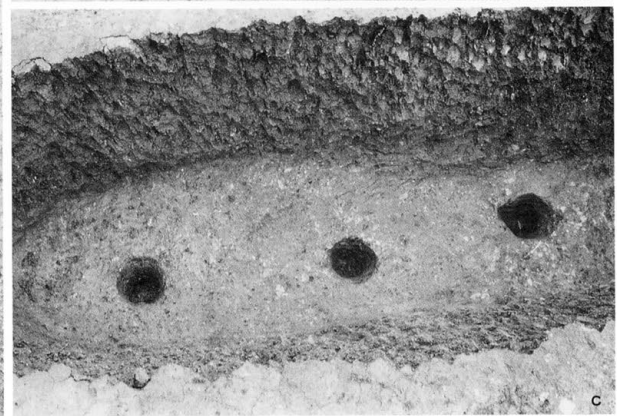
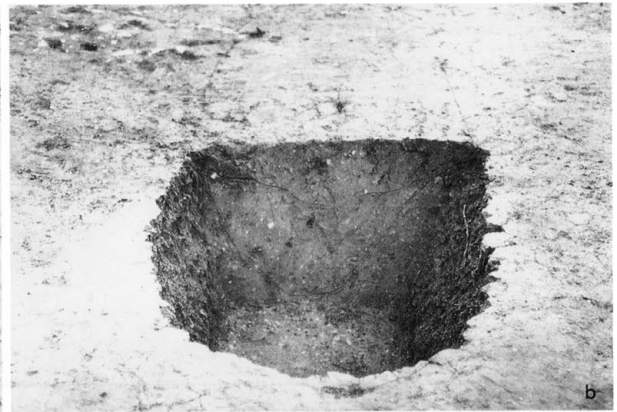
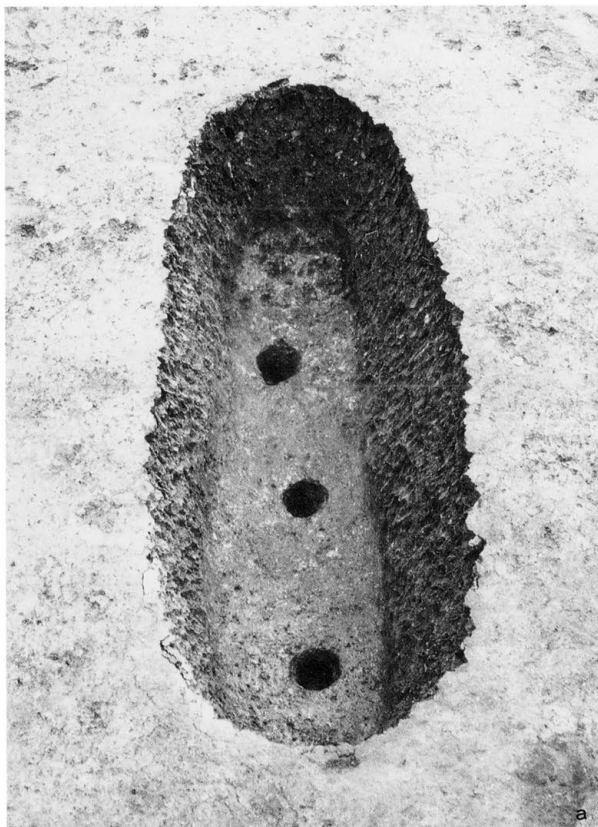
a 8号土坑(南から) c 10号土坑(東から)
b 9号土坑(南から) d 12号土坑(南から)



47 11・13号土坑

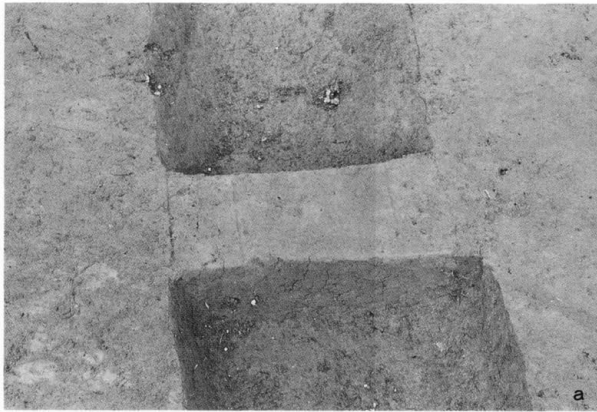


a 11号土坑断面（東から） c 13号土坑（西から）
b 11号土坑（南から）

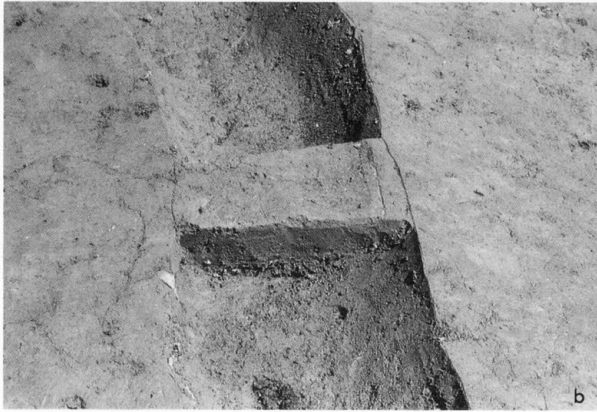


48 14号土坑

a 14号土坑（西から） b 14号土坑断面（西から）
c 14号土坑底面ピット（南から）



a



b

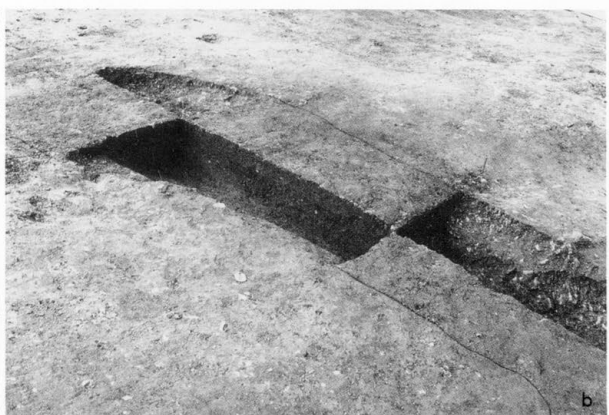


49 1号溝跡

a 南北断面（西から） c 1号溝跡（北から）
b 東西断面（南から）



a



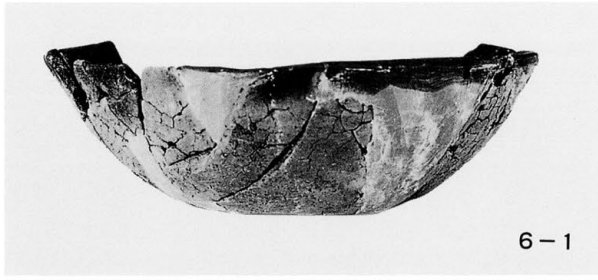
b



c

50 2号溝跡・遺物集中区集石

a 2号溝跡（南から） b 2号溝跡断面（南西から）
c 遺物集中区集石（南から）



6-1



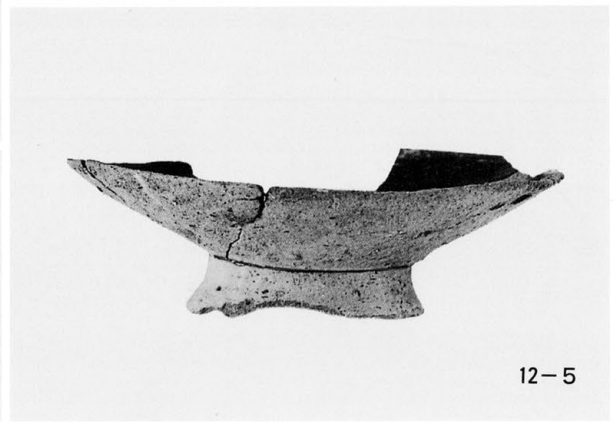
10-4



10-3

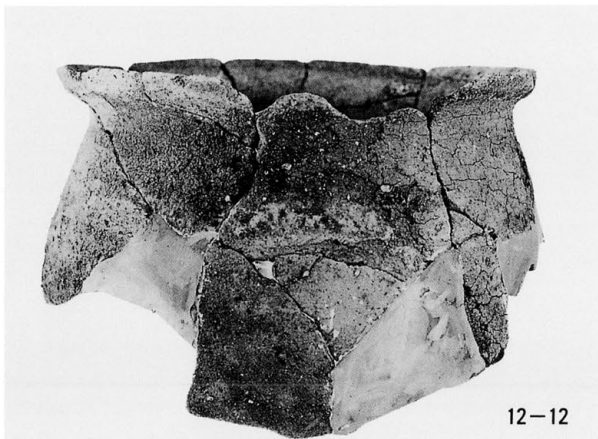


12-8



12-5

51 1号, 3号A・B住居跡出土土師器



12-12



12-4



12-2



12-14

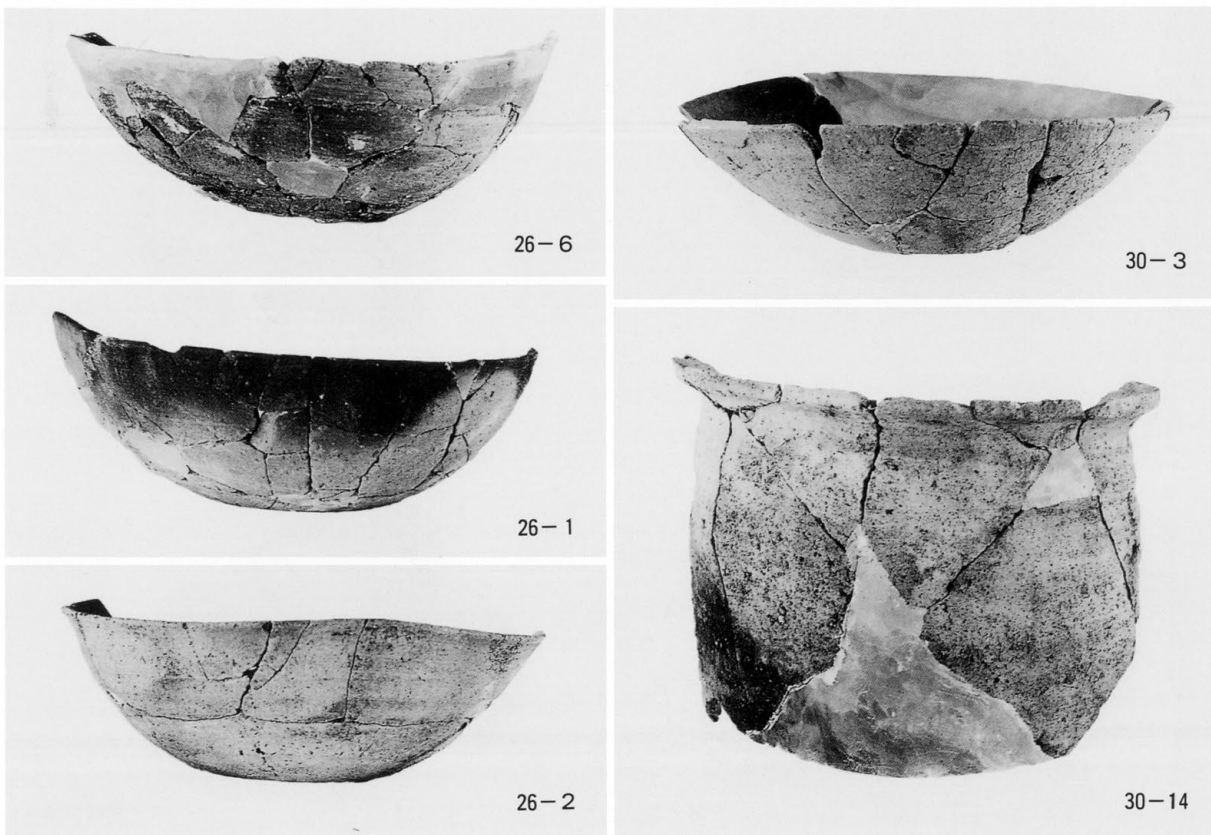


12-6

52 3号B住居跡出土土師器



53 3号A・4号B・6号住居跡出土土師器・須恵器



54 8・9号住居跡・遺構集中区出土土師器



40-13



40-17



40-11

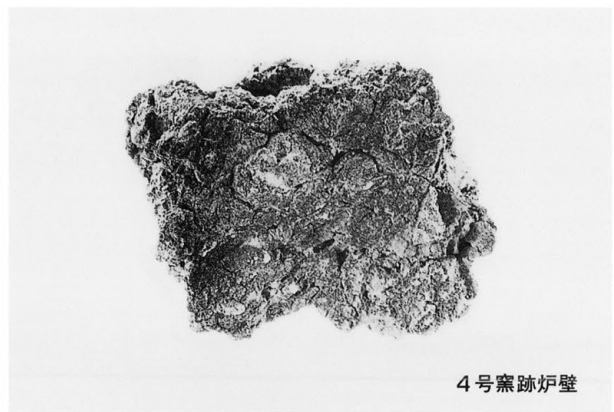


44-8

55 17・23・30号窯跡出土土師器



44-10



4号窯跡炉壁

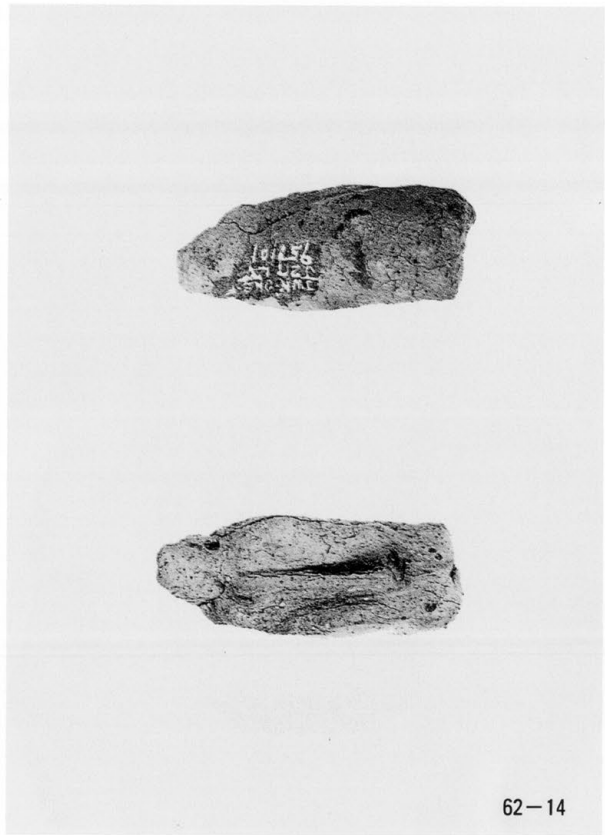


44-1

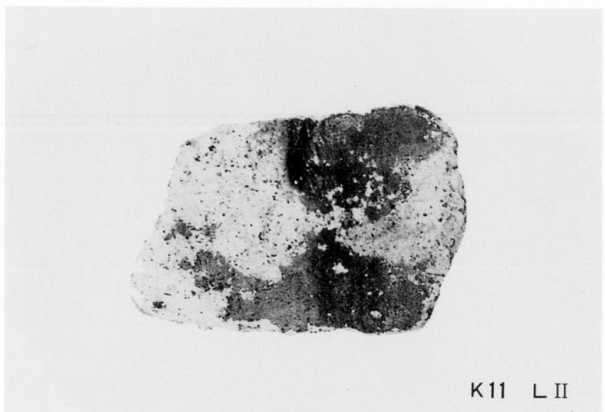


4号窯跡炉壁

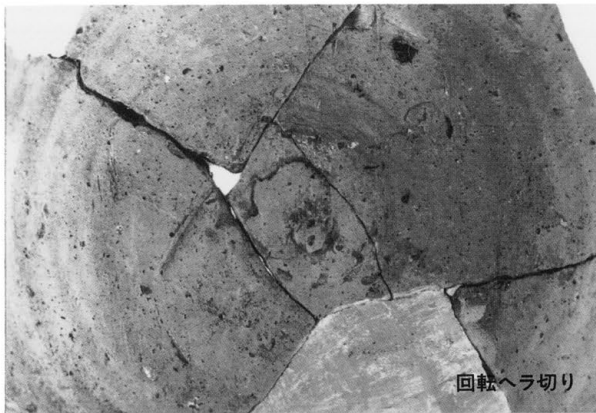
56 30号窯跡出土土師器・4号窯跡炉壁



57 遺物集中区・遺構外出土土師器



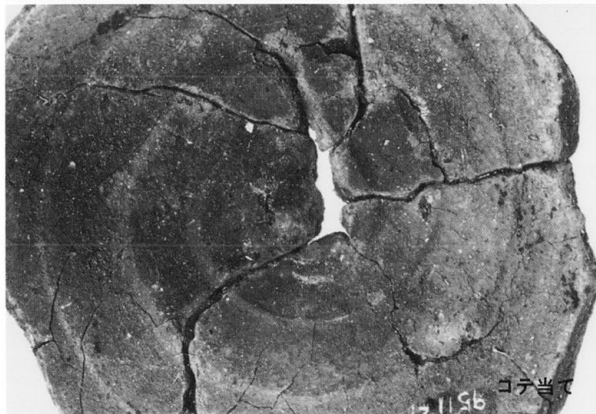
58 遺構外施釉陶器・須恵器・土師器



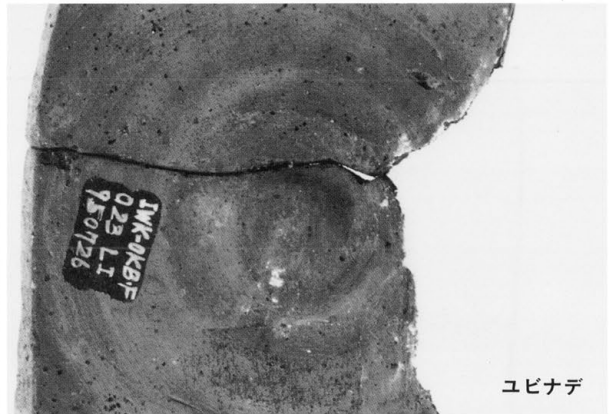
回転ヘラ切り



回転糸切り

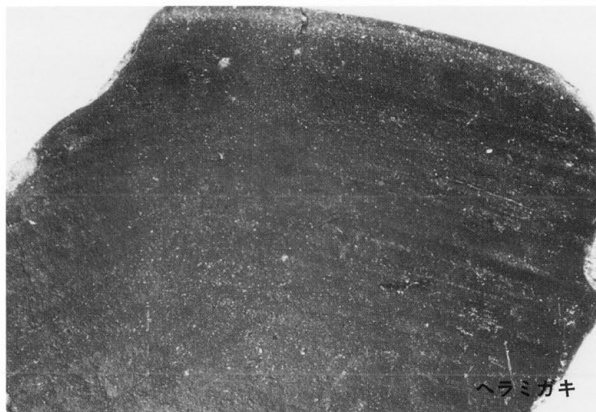


コテ当て

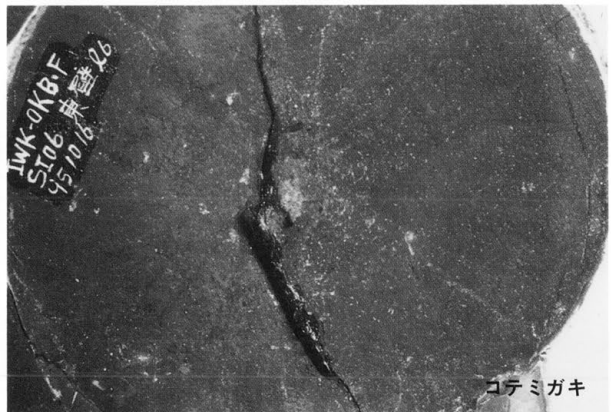


ユビナデ

59 出土遺物細部



ヘラミガキ



コテミガキ

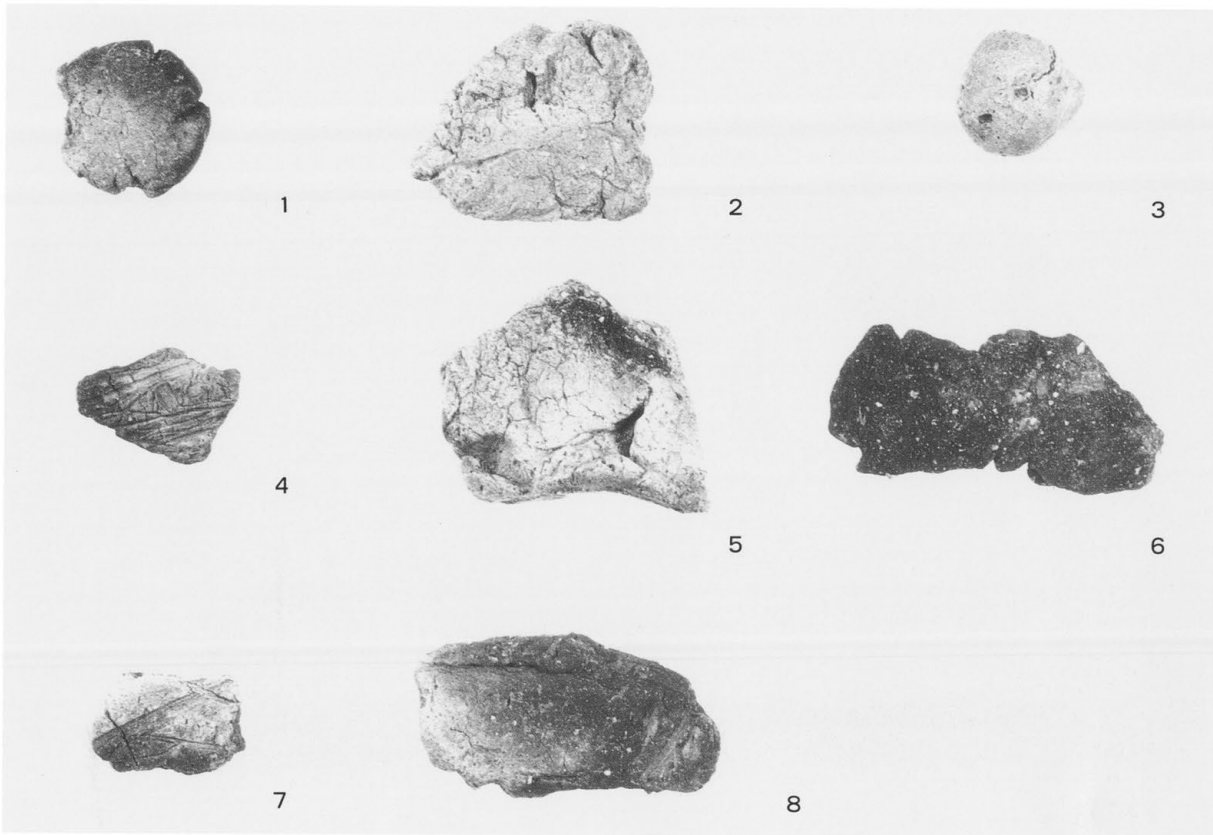


横瓶

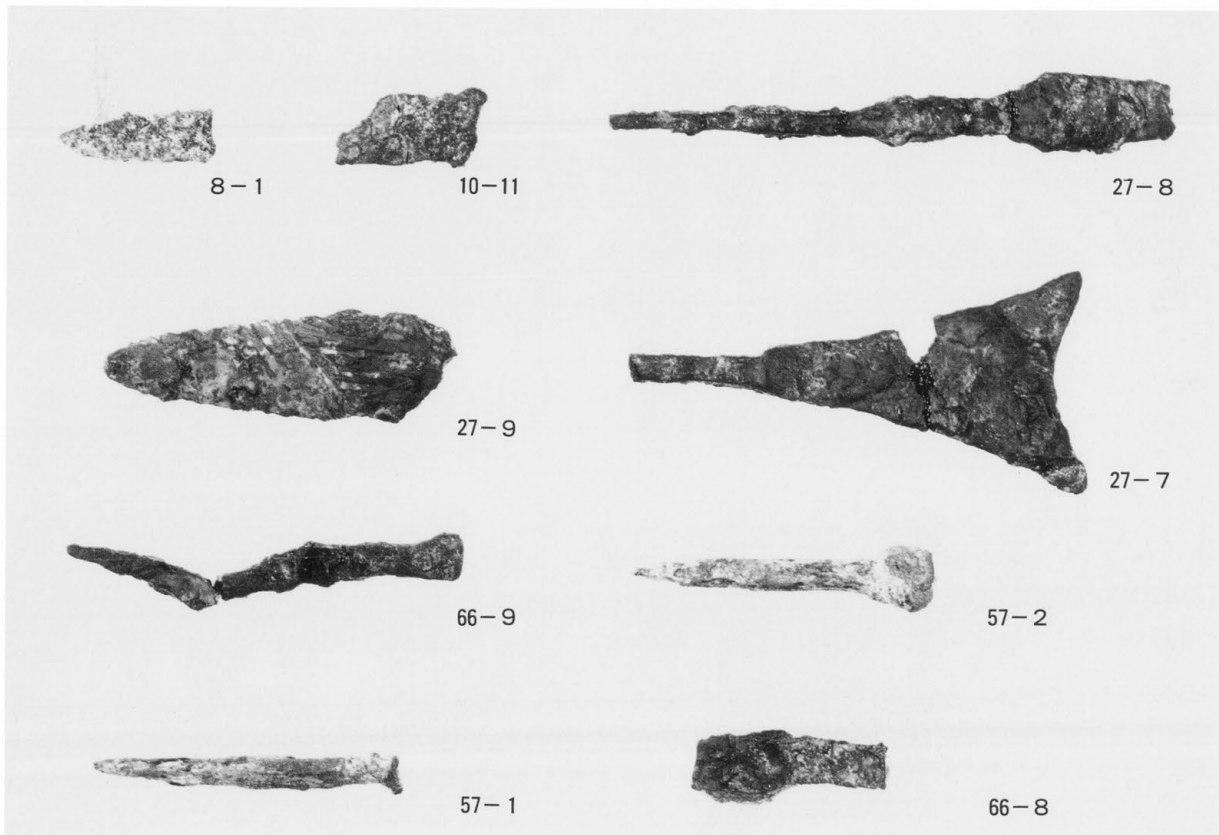


横瓶内面

60 出土遺物細部



61 土製品



62 鉄製品

付 編

付編1 大久保A・F遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1 はじめに

いわき市のタタラ山遺跡につづいて、大猿田遺跡（窯跡）からも、K, R b量の多い須恵器が出土したことは驚きであった。これまでのところ、東北地方の太平洋側の窯跡からはこのようにK, R b量の多い須恵器は出土しなかったからである。しかし、考えてみると、これは地質学上の興味深い問題に繋がってくるのかもしれない。新潟県五泉市の五頭山はK, R b量の多い花崗岩類となる。そして、この山麓にある笹神丘陵の須恵器、中世陶器の窯類からは、K, R b量の多い須恵器、中世陶器が出土する。五泉市から磐越西線に沿って南東の方向へ下ると会津若松市がある。ここにある大戸窯群からも、K, R b量の多い須恵器、中世陶器が出土する。K, R b量の多い粘土の出土はここで止まってしまったのだ。ところが、この五泉—会津若松をつなぐ線をさらに南東方向へ延長すると、いわき市に至る。つまり、五泉—会津若松—いわきは一直線上に並ぶことになる。もしかしたら、地質上の何らかの原因があって、いわき市にもK, R b量の多い粘土が産出するのかもしれない。いずれにしても、いわき市のタタラ山窯跡と大猿田窯跡にK, R b量の多い須恵器が出土することになったため、いわき市周辺の遺跡から出土する須恵器はK, R b量が多いからといって簡単に大戸窯群産とはいえなくなった。改めて、大戸群とタタラ山群で2群間判別分析をしなくてはならなくなった。

これらのことを考慮に入れて、大久保A・F遺跡から出土した須恵器、土師器の蛍光X線分析の結果を報告する。

2 分析結果

表1には分析データをまとめてある。全分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。これらの分析値にそれぞれ、3.95, 2.18, 2.02, 3.39を乗ずれば、K₂O, CaO, Fe₃O₄, Na₂Oとしての%濃度が、また、181, 184を乗ずれば、R b, S rとしてのppm濃度が得られる。しかし、ここでのデータ解析には、表1に示すJG-1による標準化値を使用した。図1, 2には須恵器のR b—S r分布図とK—C a分布図を示す。R b, Kの多いグループと少ないグループに大きく二分されることがわかる。R b, K量の多いのはNo.57, 61, 65, 66, 72の5点である。このうち、No.57, 65, 66の3点は全因子で類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。そうすると、これら3点は、大戸窯群の領域よりも、むしろ、地元、タタラ山群の領域によく対応するように思われる。ここではタタラ山群産としておく。No.61, 72は大戸領域に対応するよう

にみえるが、表1のNa因子をみると、Na量が少ないことがわかる。大戸窯群の製品にはNa量が少ないものはない。したがって、この2点はRb—Sr分布図、K—Ca分布図からは大戸窯群の製品のようにみえるが、大戸窯群の製品ではない。このような特性をもつのは美濃、尾張、知多などの東海産の須恵器である。しかし、湖西群は含まない。ここでは、東海地域からの搬入品の可能性がある須恵器としておく。他方、K、Rb量の少ないNo.67、68、69のうち、少なくとも、No.68、69は全因子で類似しており、同一産地の製品とみられる。大久保F遺跡で採取された粘土がこれら2点の須恵器の化学特性に類似するところから、大久保F遺跡で作られた須恵器である可能性が高い。

次に、土師器のRb—Sr分布図と、K—Ca分布図を図3、4に示す。全体は比較的まとまって分布して折り、類似した化学特性をもつことを示している。これらのうち、No.56、60、62は製塩土器であるから、一応、他の土師器からはずし、全体を手書きの領域を作って囲ってある。現時点では、これらを一まとめにして一群を形成するとしておく。つまり、これらは大久保F遺跡で採取した粘土も包含するところから、大久保F遺跡で作られた土師器と考えている訳である。そうすると、この領域を図1、2にも描いてみると、No.68、69のみならず、No.67もこの領域に包含されることになる。このことから、すべての土師器と、No.67、68、69の須恵器は大久保F遺跡で作られた土器と推定することができる。このように考えてくると、No.62の製塩土器も大久保F領域に分布することになり、大久保F遺跡で作った土器を使って製塩したと考えることもできる。これに対して、同じ製塩土器であるNo.56、60の2点は図4では大久保F領域を少しずれており、No.62とは胎土が少し異なることがわかる。つまり、大久保F遺跡以外で作られた土器を使って製塩し、そのまま、大久保F遺跡へ持ち込んだものと推定される。

表1 分析データ

No.	遺跡名	遺構名	出土層位	種別	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
55	大久保A遺跡	S I 01	床上	土師器	杯	0.416	0.398	2.08	0.294	0.737	0.322
56	大久保A遺跡	S I 01	0 3	土師器	筒形	0.543	0.445	3.71	0.328	0.755	0.762
57	大久保A遺跡	S I 01	床上	須恵器	長頸瓶	0.717	0.175	1.86	0.721	0.405	0.242
58	大久保A遺跡	S K 22	0 2	土師器	甕	0.421	0.308	2.84	0.283	0.464	0.346
59	大久保A遺跡	S K 25	0 2	土師器	杯	0.363	0.430	3.01	0.331	0.597	0.325
60	大久保A遺跡	S K 25	0 4	土師器	筒形	0.354	0.706	3.40	0.278	0.790	0.325
61	大久保A遺跡	S K 22	0 2	須恵器	甕	0.610	0.126	2.37	0.614	0.253	0.068
62	大久保F遺跡	S I 07	P 7 0 3	土師器	筒形	0.285	0.356	3.32	0.218	0.560	0.203
63	大久保F遺跡	S R 30	0 2	土師器	甕	0.320	0.291	2.90	0.207	0.482	0.205
64	大久保F遺跡	S R 30	0 2	土師器	杯	0.275	0.370	3.23	0.181	0.488	0.230
65	大久保F遺跡	J 28	L V	須恵器	長頸瓶	0.707	0.210	1.39	0.821	0.366	0.256
66	大久保F遺跡	N 23	L V	須恵器	甕	0.711	0.218	1.49	0.747	0.484	0.342
67	大久保F遺跡	O 23	L I	須恵器	杯	0.276	0.239	2.32	0.222	0.450	0.218
68	大久保F遺跡	O 25	L V	須恵器	杯	0.318	0.386	2.67	0.332	0.644	0.300
69	大久保F遺跡	O 27	L I	須恵器	甕	0.429	0.424	2.25	0.366	0.638	0.389
70	大久保F遺跡	S R 23	床面	土師器	杯	0.306	0.354	3.10	0.216	0.612	0.237
71	大久保F遺跡	S R 23	床面	土師器	甕	0.483	0.390	1.99	0.343	0.684	0.322
72	大久保F遺跡	K 26	L V	須恵器	甕	0.476	0.075	2.04	0.542	0.253	0.093
73	大久保F遺跡	S I 07	P 10 0 1	粘土		0.317	0.553	2.59	0.317	0.743	0.237

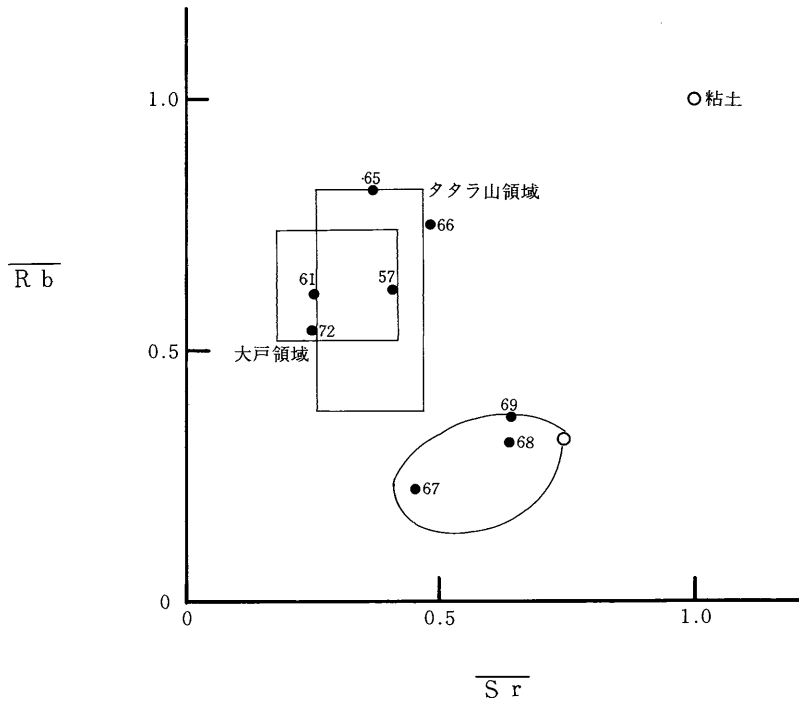


図1 須恵器のRb-Sr分布図

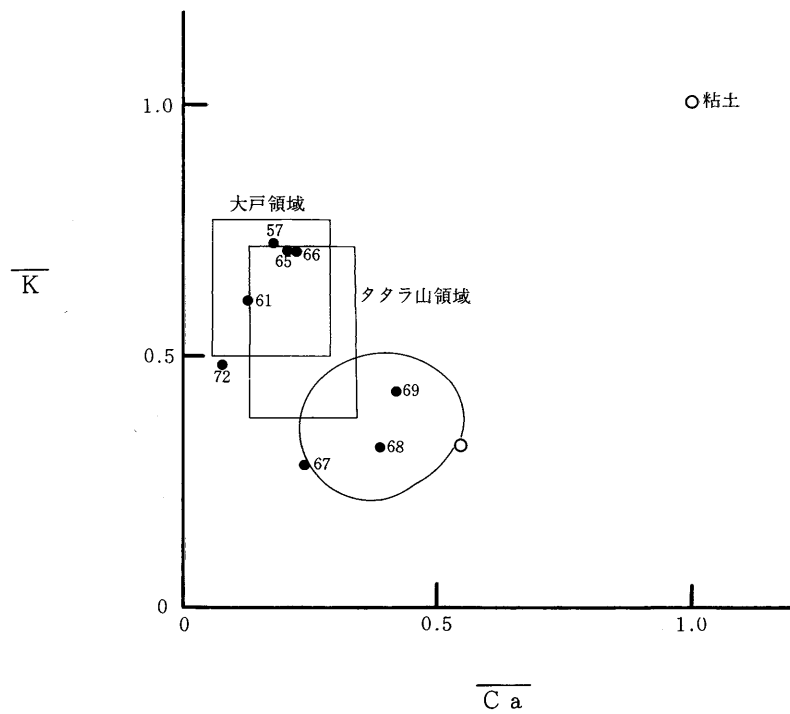


図2 須恵器のK-Ca分布図

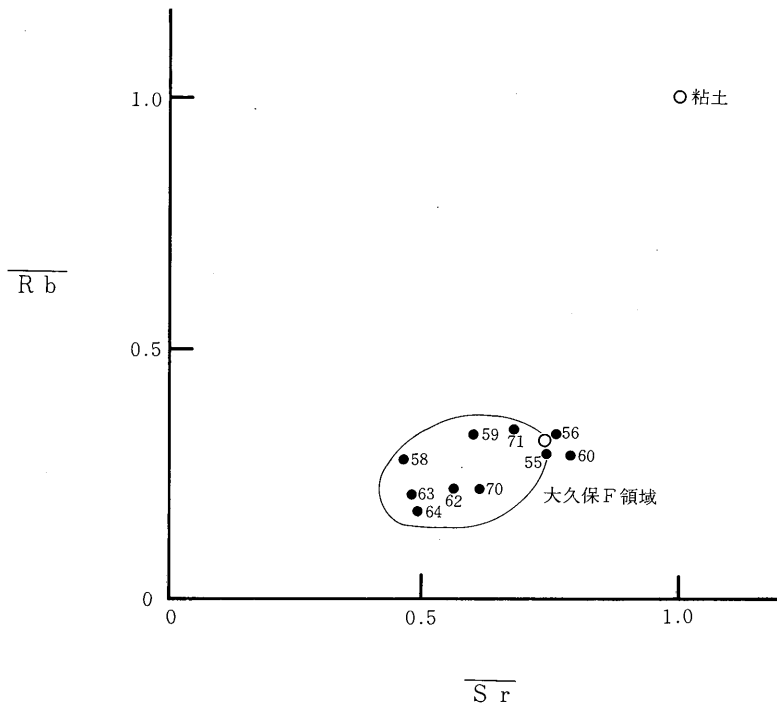


図3 土師器のRb—Sr分布図

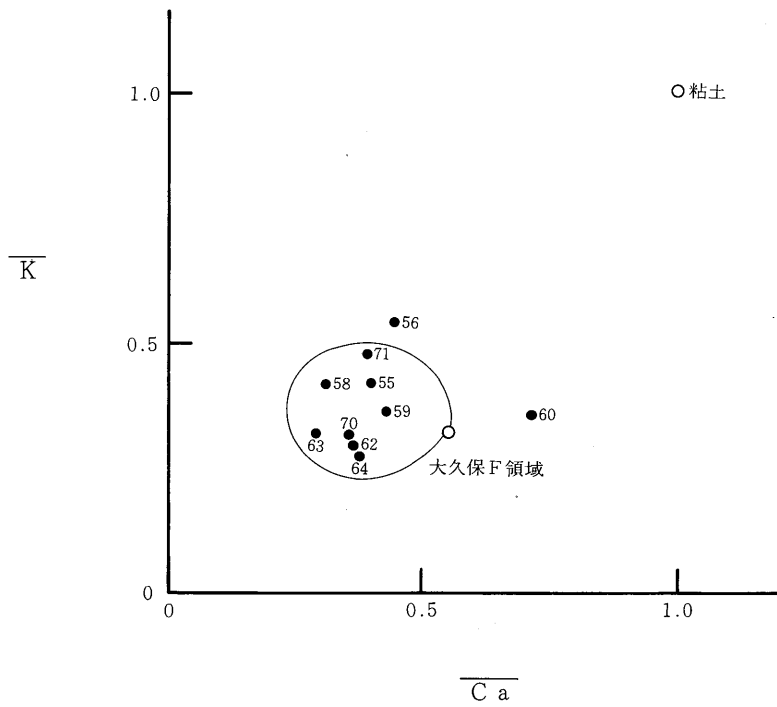


図4 土師器のK—Ca分布図

付編2 大久保F遺跡における自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

常磐自動車道建設による事前調査として、大久保F遺跡（いわき市四ッ倉町駒込字大久保所在）の発掘調査が実施された。本報告では自然科学分析調査結果について示す。

本地域における過去の燃料材については、タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡や向山遺跡等で樹種を明らかにした例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986，1995）。このうちタタラ山遺跡では、9種類（モミ属・クマシデ属・コナラ節・クリ・サクラ属・ナシ亜科・ウツギ属・モチノキ属・カエデ属）の木材が確認された。各種類の出土状況から、焼成のための燃料材と焼成された木炭とで樹種が異なっていた可能性や、焼成前の湿気除去を目的とした燃料材にナシ亜科が使用された可能性等が指摘されている。

本報告では、平安時代の土器生産窯から出土した焼成の際の燃料材と考えられる炭化材の樹種を明らかにする。

2 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、平安時代の土器生産窯（SR02，30）から出土した炭化材2点（FBC950036，950037）である。各試料の詳細については、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。試料番号FBC950036は、道管要素を持つことから広葉樹であることは確認できたが、木材組織の保存状態が悪く種類の同定には至らなかった。また、試料番号FBC950037は樹皮であった。

表1 炭化材の樹種同定結果

資料番号	遺構名	出土位置	用途など	樹種
FBC950036	SR02	底面	燃料材	広葉樹
FBC950037	SR30	床	燃料材	樹皮

(4) 考 察

燃料材と考えられる炭化材は、いずれも種類の同定には至らなかった。タタラ山遺跡の調査例では、コナラ節を中心に8種類の広葉樹が確認された(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1995)。本遺跡はタタラ山遺跡と近い位置にあることから、同様の種類が利用された可能性がある。また、樹皮が出土したことは、大猿田遺跡などでも確認したように(未公表資料)、樹皮が付いたままで燃料としたことがうかがえる。

引用文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社(1986) 向山遺跡出土炭化材の樹種同定. いわき市埋蔵文化財調査報告第14冊「向山遺跡 弥生時代から平安時代の遺物包含層の調査一」
P. 145—146, 建設省磐城国道工事事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1995) いわき市タタラ山遺跡・駒込遺跡・馬場A遺跡出土炭化材の樹種. 福島県文化財調査報告書第316集「常磐自動車道遺跡調査報告4」, P. 196—206,

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちようさほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告8							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第330集							
編著者名	岡田光生・石本 弘・橋本幸夫・水谷勝雄・佐々木慎一・笹山恵子・菅原祥夫・福田秀生							
編集機関	財団法人福島県文化センター 遺跡調査課							
所在地	〒960 福島県福島市春日町5-54			TEL 0245-34-2733 FAX 1245-36-3781				
発行年月日	西暦1996年12月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬場 B	福島県いわき市 よつらまちこまごめ 四倉町駒込 あざ馬場	07204	992	37 06 53	140 54 14	4月18日～ 7月7日	3,100	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
大久保 A	福島県いわき市 よつらまちこまごめ 四倉町駒込 あざひのめ 字日ノ目ほか	07204	995	37 06 48	140 54 52	4月18日～ 11月22日	4,000	同上
大久保 F	福島県いわき市 よつらまちこまごめ 四倉町駒込 あざおおくほ 字大久保	07204	1000	37 06 50	140 54 38	4月18日～ 11月30日	12,100	同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬場 B	木炭生産跡	近代	木炭窯跡(1) 土坑(1) 溝跡(1)		銭貨		明治期の集落間の土地利用がわかる	
大久保 A	集落跡	弥生・古代 中世・近世	竪穴住居跡(5) 掘立柱建物跡(1) 土坑(2) 溝跡(8) ピット(224)		弥生土器・土師器・ 須恵器・陶器・磁器 鉄製品・鉄滓・石製品 ・銭貨		平安期集落跡と安土桃山・江戸期の屋敷跡が複合した遺跡	
大久保 F	土器生産跡	縄文・古代	竪穴住居跡(5) 掘立柱建物跡(1) 須恵器窯跡(3) 土師器窯跡(2) 木炭窯跡(4) 土坑(8) 溝跡(2)		土師器・須恵器・ 彩釉陶器・石製品・ 鉄製品		土師器窯跡・須恵器窯跡などの焼成遺構とロクロピットや素材粘土を伴う工房跡などが検出され、平安期土器生産の一面がうかがえる	

福島県文化財調査報告書第330集

常磐自動車道遺跡調査報告 8

馬場 B 遺跡

大久保 A 遺跡

大久保 F 遺跡

平成 8 年 12 月 15 日

編集 財団法人福島県文化センター (遺跡調査課)
発行 福島県教育委員会 (〒960) 福島市杉妻町 2-16
財団法人福島県文化センター (〒960) 福島市春日町 5-54
日本道路公団東北支社いわき工事事務所
(〒960) いわき市内郷高坂町八反田 28-1
印刷 (株)川島印刷 (〒992) 米沢市大字花沢 221-2

本報告書は中性紙を使用しております。

本文 年紙 80kg

写真 ニュービイマット 90kg